

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第109集

沼久保遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

沼久保遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県は縄文時代の遺跡を中心として、県内各地に数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和60年度末の岩手県教育委員会のまとめでは7000箇所を越えております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にもその基幹となる道路などの交通網整備もまた県民の切実な願いであります。このように、保護・保存と開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたつて、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

東北縦貫自動車道八戸線建設に関連する遺跡は、安代町から青森県境まで53遺跡があり、浄法寺町所在の14遺跡については昭和59年から昭和60年にかけてすべての野外調査が終了しました。発掘調査によって出土した資料の整理及び報告書の作成は、これまで9遺跡について6分冊の発掘調査報告書として刊行してまいりました。

本報告の沼久保遺跡は、浄法寺町市街地の南側丘陵面に立地し、昭和59・60年の発掘調査によって縄文・弥生時代及び平安時代の竪穴住居跡等が発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめてまいりましたが、ここに調査報告書として発刊するはこびになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、浄法寺町、浄法寺町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より感謝申し上げます。

昭和61年 8 月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

例 言

1. 本報告書は岩手県^{にのへ}二戸郡^{じようほうじ}浄法寺町大字^{おやま}御山字^{ぬまくぼ}沼久保15-1ほかに所在する沼久保遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、東北縦貫道八戸線建設に伴う緊急調査である。調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センター・財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和59年10月12日～10月31日、昭和60年4月15日～10月31日の2カ年にわたって実施した。室内整理は、昭和60年11月1日～昭和61年3月31日まで行った。
4. 発掘調査面積は昭和59年度1,000㎡、昭和60年度4,930㎡、計5,930㎡である。
5. 発掘調査は昭和59年度が国生 尚・平井 進、昭和60年度は平井 進・酒井宗孝が担当した。
6. 本遺跡で検出された遺構の種類および遺構数は次のとおりである。

竪穴住居址…17群24棟、住居址状遺構…1棟、ピット…15基、陥し穴状遺構…26基
焼土遺構…3基、埋設土器…1基、配石遺構…1基、貯水槽跡及び暗渠…1基及び2条
柱穴群…1
7. 出土品の鑑定は次の方々に依頼した。(敬称略)

石器・石製品の材質	佐藤二郎 (佐藤地質工学研究所)
放射性炭素 (¹⁴ C) による年代測定	木越邦彦 (学習院大学教授)
炭化植物遺体の種子同定及び計測	佐藤敏也 (国分寺市文化財専門委員)
鉄製品の保存処理	赤沼英男 (岩手県文化振興事業団博物館)
8. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

I 1 調査に至る経過……近藤宗光、I 3 遺跡の立地と環境……石川長喜、
III (11) 遺物包含層……平井進、他を酒井宗孝が分担した。
9. 発掘調査において次の機関の協力を得た。

日本道路公団一戸工事事務所・浄法寺町・浄法寺町教育委員会
10. 本報告書作成にあたり、次の方々から御指導、御助言をいただいた。(敬称略)

高橋信雄・小田野哲憲・名久井文明・熊谷常正 (岩手県文化振興事業団博物館)、高田和徳 (一戸町教育委員会)、関 豊 (二戸市教育委員会)、成田滋彦・畠山 昇・坂本洋一・岡田康博 (青森県立埋蔵文化財センター)。
11. 発掘作業にあたっては勝又善四郎氏・田口季司氏をはじめとする地元作業員の方々の協力をいただいた。室内整理では当センター臨時職員多数の協力を得た。

本文目次

序		(1) 土器	110
例言		(2) 土製品	164
I. 序論		(3) 石器・石製品	165
1. 調査に至る経過	2	(4) 古銭	205
2. 調査方法と整理方法	3	III. まとめ	
(1) 調査方法	3	1. 遺構	206
(2) 整理方法	4	(1) 縄文時代の竪穴住居址	206
3. 遺跡の立地と環境	5	(2) 弥生時代の竪穴住居址	208
(1) 地形と地質	5	(3) 古代の竪穴住居址	209
(2) 周辺の遺跡	12	(4) 中世の竪穴住居址	212
II. 検出された遺構と遺物	16	(5) 柱穴群	213
1. 縄文時代の遺構と遺物	16	(6) ピット	213
(1) 竪穴住居址	16	(7) 陥し穴状遺構	213
(2) ピット	37	(8) 焼土遺構	214
(3) 陥し穴状遺構	41	(9) 配石遺構・埋設土器	214
(4) その他の遺構—埋設土器・ 配石遺構・焼土遺構—	54	(10) 貯水槽跡及び暗渠	214
2. 弥生時代の遺構と遺物	56	(1) 遺物包含層	215
(1) 竪穴住居址	56	2. 遺物	219
3. 古代の遺構と遺物	59	(1) 土器	219
(1) 竪穴住居址	59	(2) 石器・石製品	222
(2) ピット	78	IV. 分析・鑑定	
4. 中・近世の遺構と遺物	81	学習院大学放射性炭素年代測定結果報告	224
(1) 竪穴住居址	81	浄法寺町沼久保遺跡の穀類遺残	225
(2) その他の遺構—柱穴群・ 貯水槽跡及び暗渠・ピット—	83	表	
5. 遺構外出土遺物	110	周辺の遺跡一覧表	15
		石器計測表(1~6)	199

図 版 目 次

<p>第1図 遺跡位置図…………… 1</p> <p>第2図 グリット配置図…………… 3</p> <p>第3図 土器実測図凡例…………… 5</p> <p>第4図 地形分類図…………… 6</p> <p>第5図 遺跡周辺地形図…………… 8</p> <p>第6図 土層断面柱状図……………10</p> <p>第7図 周辺の遺跡分布図……………14</p> <p>第8図 IE-1 住居址 ……………16</p> <p>第9図 IE-2 住居址 ……………18</p> <p>第10図 IE-3 住居址 ……………19</p> <p>第11図 IIF-1 住居址(1) ……………21</p> <p>第12図 IIF-1 住居址(2) ……………22</p> <p>第13図 IIF-2 住居址 ……………24</p> <p>第14図 IIF-3 住居址(1) ……………27</p> <p>第15図 IIF-3 住居址(2) ……………28</p> <p>第16図 IIF-4 住居址 ……………31</p> <p>第17図 IIF-5 住居址(1) ……………34</p> <p>第18図 IIF-5 住居址(2) ……………35</p> <p>第19図 IIF-2・3・4・IIIE-1ピット ……………38</p> <p>第20図 IIIE-2・IVE-1・2 ・VIF-1ピット ……………40</p> <p>第21図 IIF-1・2・3・4 陥し穴状遺構……………42</p> <p>第22図 IIF-5・6・7・8 陥し穴状遺構……………44</p> <p>第23図 IIID-1・IIIE-1・2・3・4 陥し穴状遺構……………46</p> <p>第24図 IIIE-5・6・IIIF-1・2・3 陥し穴状遺構……………49</p>	<p>第25図 IIIF-4・5・6・IVD-1 陥し穴状遺構……………51</p> <p>第26図 IVD-2・IVE-1・ VF-1・2 陥し穴状遺構 ……53</p> <p>第27図 IIIE-1 配石遺構・IIIE-1 埋設土器 ・IIF-1・IIID-1 焼土遺構 ……55</p> <p>第28図 IE-4 住居址 ……………57</p> <p>第29図 IE-5 住居址 (1) ……………60</p> <p>第30図 IE-5 住居址 (2) ……………61</p> <p>第31図 IIF-6 住居址 ……………64</p> <p>第32図 IIF-7 住居址 ……………66</p> <p>第33図 IIF-8 住居址 ……………69</p> <p>第34図 IIF-9 住居址 ……………70</p> <p>第35図 IIIE-1 住居址 (1) ……………72</p> <p>第36図 IIIE-1 住居址 (2) ……………73</p> <p>第37図 VF-1 住居址 (1) ……………75</p> <p>第38図 VF-1 住居址 (2) ……………76</p> <p>第39図 IIF-10住居址状遺構 ……77</p> <p>第40図 IE-1・IIF-1 IIIE-3・4ピット ……………79</p> <p>第41図 IIIE-2 住居址 ……………82</p> <p>第42図 IIIE-1 柱穴群 ……………83</p> <p>第43図 貯水槽跡・暗渠・ IE-3・4・5ピット ……………85</p> <p>第44図 遺構配置図……………87</p> <p>第45図 出土遺物 (IE-1・2 住居址) ……………89</p> <p>第46図 出土遺物 (IE-3 住居址) ……90</p> <p>第47図 出土遺物 (IIF-1・2 住居址) ……………91</p>
--	--

第48図	出土遺物 (IIF-2 住居址) ……	92
第49図	出土遺物 (IIF-2・3 住居址) ……………	93
第50図	出土遺物 (IIF-3・4 住居址) ……………	94
第51図	出土遺物 (IIF-4 住居址) ……	95
第52図	出土遺物 (IIF-4 住居址) ……	96
第53図	出土遺物 (IIF-4・5 住居址) ……………	97
第54図	出土遺物 (IIF-5 住居址) ……	98
第55図	出土遺物 (III E-2 ピット・ IIF-2・3・8・III E-3・4・ III F-1・3 陥し穴状遺構) ……	99
第56図	出土遺物 (III E-1 配石遺構 ・III E-1 埋設土器) ……	100
第57図	出土遺物 (I E-4 住居址) ……	101
第58図	出土遺物 (I E-4・5 住居址) ……………	102
第59図	出土遺物 (I E-5 住居址) ……	103
第60図	出土遺物 (I E-5 住居址) ……	104
第61図	出土遺物 (I E-5・IIF-8 住居址) ……	105
第62図	出土遺物 (IIF-8 住居址) ……	106
第63図	出土遺物 (IIF-8・III E-1 住居址) ……	107
第64図	出土遺物 (III E-1・VF-1 住居址) ……	108
第65図	出土遺物 (VF-1 住居址・IIF-10 住居址状遺構・IIF-1・III E-3 ピット) ……	109
第66図	遺構外出土遺物 ……	126
第67図	遺構外出土遺物 ……	127

第68図	遺構外出土遺物 ……	128
第69図	遺構外出土遺物 ……	129
第70図	遺構外出土遺物 ……	130
第71図	遺構外出土遺物 ……	131
第72図	遺構外出土遺物 ……	132
第73図	遺構外出土遺物 ……	133
第74図	遺構外出土遺物 ……	134
第75図	遺構外出土遺物 ……	135
第76図	遺構外出土遺物 ……	136
第77図	遺構外出土遺物 ……	137
第78図	遺構外出土遺物 ……	138
第79図	遺構外出土遺物 ……	139
第80図	遺構外出土遺物 ……	140
第81図	遺構外出土遺物 ……	141
第82図	遺構外出土遺物 ……	142
第83図	遺構外出土遺物 ……	143
第84図	遺構外出土遺物 ……	144
第85図	遺構外出土遺物 ……	145
第86図	遺構外出土遺物 ……	146
第87図	遺構外出土遺物 ……	147
第88図	遺構外出土遺物 ……	148
第89図	遺構外出土遺物 ……	149
第90図	遺構外出土遺物 ……	150
第91図	遺構外出土遺物 ……	151
第92図	遺構外出土遺物 ……	152
第93図	遺構外出土遺物 ……	153
第94図	遺構外出土遺物 ……	154
第95図	遺構外出土遺物 ……	155
第96図	遺構外出土遺物 ……	156
第97図	遺構外出土遺物 ……	157
第98図	遺構外出土遺物 ……	158
第99図	遺構外出土遺物 ……	159

第100図	遺構外出土遺物	160	第120図	遺構外出土遺物	185
第101図	遺構外出土遺物	161	第121図	遺構外出土遺物	186
第102図	遺構外出土遺物	162	第122図	遺構外出土遺物	187
第103図	遺構外出土遺物	163	第123図	遺構外出土遺物	188
第104図	遺構外出土遺物	164	第124図	遺構外出土遺物	189
第105図	遺構外出土遺物	170	第125図	遺構外出土遺物	190
第106図	遺構外出土遺物	171	第126図	遺構外出土遺物	191
第107図	遺構外出土遺物	172	第127図	遺構外出土遺物	192
第108図	遺構外出土遺物	173	第128図	遺構外出土遺物	193
第109図	遺構外出土遺物	174	第129図	遺構外出土遺物	194
第110図	遺構外出土遺物	175	第130図	遺構外出土遺物	195
第111図	遺構外出土遺物	176	第131図	遺構外出土遺物	196
第112図	遺構外出土遺物	177	第132図	遺構外出土遺物	197
第113図	遺構外出土遺物	178	第133図	遺構外出土遺物	198
第114図	遺構外出土遺物	179	第134図	遺構外出土遺物	205
第115図	遺構外出土遺物	180	第135図	I E区遺物包含層遺物出土状況 (1)	216
第116図	遺構外出土遺物	181			
第117図	遺構外出土遺物	182	第136図	I E区遺物包含層遺物出土状況 (2)	217
第118図	遺構外出土遺物	183			
第119図	遺構外出土遺物	184			

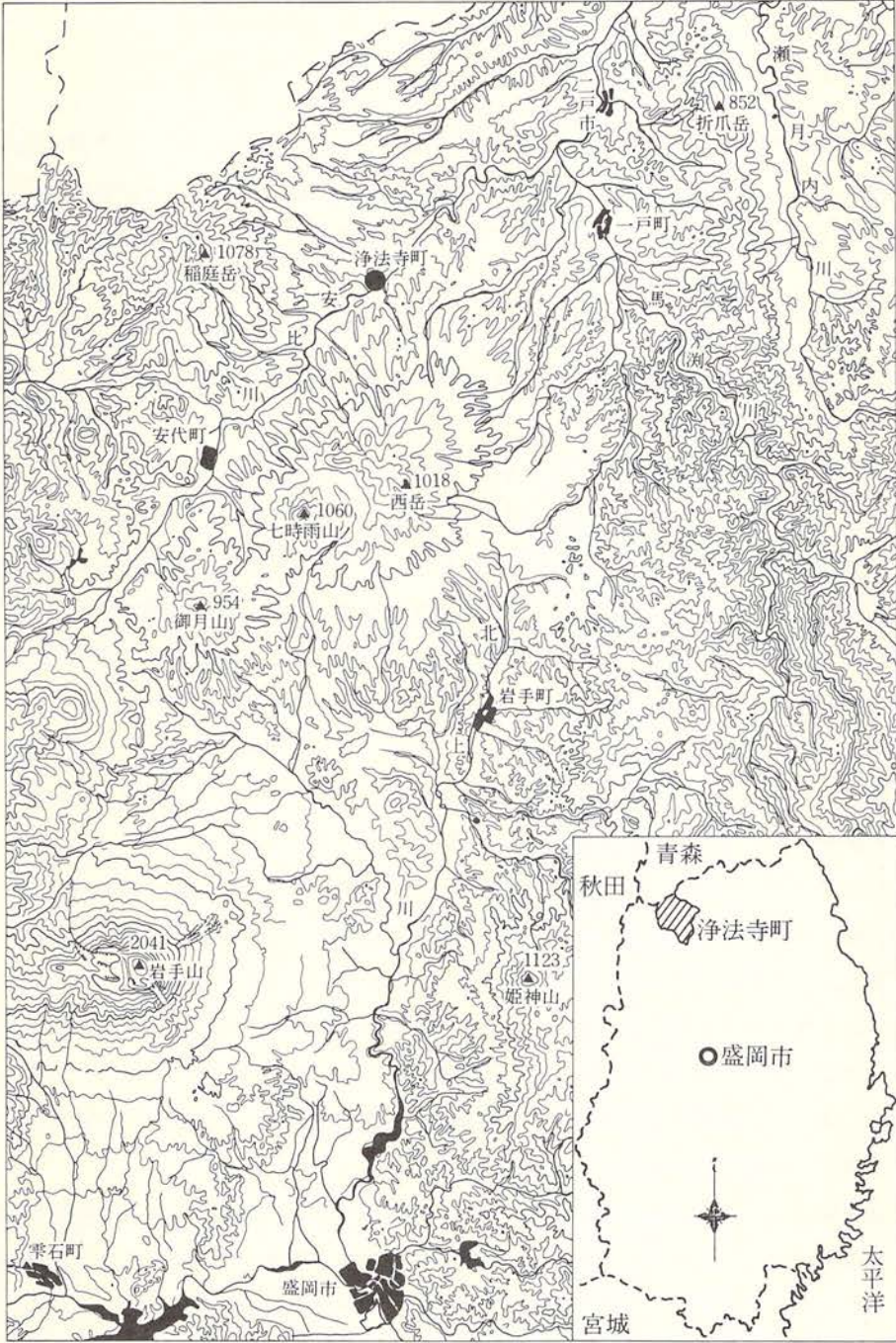
写真図版目次

写真図版 1	空中写真	231	写真図版11	IIF-3 住居址	241
写真図版 2	空中写真	232	写真図版12	IIF-4 住居址	242
写真図版 3	深掘土層断面	233	写真図版13	IIF-5 住居址	243
写真図版 4	I E-1 住居址	234	写真図版14	IIF-5 住居址	244
写真図版 5	I E-2 住居址	235	写真図版15	IIF-2・3・4・ III E-1 ピット	245
写真図版 6	I E-3・IIF-1 住居址	236	写真図版16	III E-2・IVE-1・2 ピット	246
写真図版 7	IIF-1 住居址	237			
写真図版 8	IIF-2 住居址	238	写真図版17	VIF-1 ピット・IIF-1・2 陥し穴状遺構	247
写真図版 9	IIF-2 住居址	239			
写真図版10	IIF-3 住居址	240			

写真図版18	IIF-3・4・5・6 陥し穴状遺構 ……………248	写真図版40	IIF-1・IIIE-3・4ピット ……………270
写真図版19	IIF-7・8・IIID-1・ IIIE-1 陥し穴状遺構 ……249	写真図版41	IE-2 住居址 ……………271
写真図版20	IIIE-2・3・4・5 陥し穴状遺構 ……………250	写真図版42	IIIE-1 柱穴群・貯水槽跡・暗渠 ……………272
写真図版21	IIIE-6・IIIF-1・2・3 陥し穴状遺構 ……………251	写真図版43	貯水槽跡・暗渠 ……………273
写真図版22	IIIF-4・5・6・IVD-1・2 陥し穴状遺構 ……………252	写真図版44	貯水槽跡・暗渠 ……………274
写真図版23	IVD-2・IVE-1・IVE- 1・2 陥し穴状遺構 ……253	写真図版45	IE-2・3・4ピット ……276
写真図版24	IIIE-1 埋設土器・配石遺構 ……………254	写真図版46	IE区遺物包含層土層断面 ……………277
写真図版25	IIF-1・IIID-1 焼土遺構 ……………255	写真図版47	出土遺物 (IE-1・2 住居址) ……………278
写真図版26	IE-5 住居址 ……………256	写真図版48	出土遺物 (IE-3 住居址) ……………279
写真図版27	IE-5 住居址 ……………257	写真図版49	出土遺物 (IIF-1・2 住居址) ……………280
写真図版28	IE-5 住居址 ……………258	写真図版50	出土遺物 (IIF-2 住居址) ……………281
写真図版29	IIF-6 住居址 ……………259	写真図版51	出土遺物 (IIF-2・3 住居址) ……………282
写真図版30	IIF-6・7 住居址 ……260	写真図版52	出土遺物 (IIF-3・4 住居址) ……………283
写真図版31	IIF-7 住居址 ……………261	写真図版53	出土遺物 (IIF-4 住居址) ……………284
写真図版32	IIF-8 住居址 ……………262	写真図版54	出土遺物 (IIF-4 住居址) ……………285
写真図版33	IIF-8 住居址 ……………263	写真図版55	出土遺物 (IIF-4・5 住居址) ……………286
写真図版34	IIF-9 住居址 ……………264	写真図版56	出土遺物 (IIF-5 住居址) ……………287
写真図版35	IE-1 住居址 ……………265	写真図版57	出土遺物 (IIF-5 住居址) ……………288
写真図版36	IE-1 住居址 ……………266		
写真図版37	VF-1 住居址 ……………267		
写真図版38	VF-1 住居址・IIF-10 住居址状遺構 ……………268		
写真図版39	IE-1・IIF-1ピット ……………269		

写真図版58	出土遺物 (IIF-5 住居址)289	写真図版74	遺構外出土遺物.....305
写真図版59	出土遺物 (IIIE-2 ピット・ IIF-2・3・8・IIIE-4・ IIIF-1・2・3 陥し穴状遺構)290	写真図版75	遺構外出土遺物.....306
写真図版60	出土遺物 (IIIE-1 配石遺構・ IIIE-1 埋設土器) 291	写真図版76	遺構外出土遺物.....307
写真図版61	出土遺物 (IE-4 住居址)292	写真図版77	遺構外出土遺物.....308
写真図版62	出土遺物 (IE-4・5 住居址)293	写真図版78	遺構外出土遺物.....309
写真図版63	出土遺物 (IE-5 住居址)294	写真図版79	遺構外出土遺物.....310
写真図版64	出土遺物 (IE-5 住居址)295	写真図版80	遺構外出土遺物.....311
写真図版65	出土遺物 (IE-5・IIF-6 住居址)296	写真図版81	遺構外出土遺物.....312
写真図版66	出土遺物 (IIF-6 住居址)297	写真図版82	遺構外出土遺物.....313
写真図版67	出土遺物 (IIF-7・8 住居址)298	写真図版83	遺構外出土遺物.....314
写真図版68	出土遺物 (IIF-8・IIIE-1 住居址)299	写真図版84	遺構外出土遺物.....315
写真図版69	出土遺物 (IIIE-8・IIIE-1 住居址)300	写真図版85	遺構外出土遺物.....316
写真図版70	出土遺物 (VF-1 住居址・ IIF-10住居址状遺構) ...301	写真図版86	遺構外出土遺物.....317
写真図版71	出土遺物 (IIF-1・IIIE-3 ピット)302	写真図版87	遺構外出土遺物.....318
写真図版72	遺構外出土遺物303	写真図版88	遺構外出土遺物.....319
写真図版73	遺構外出土遺物304	写真図版89	遺構外出土遺物.....320
		写真図版90	遺構外出土遺物.....321
		写真図版91	遺構外出土遺物.....322
		写真図版92	遺構外出土遺物.....323
		写真図版93	遺構外出土遺物.....324
		写真図版94	遺構外出土遺物.....325
		写真図版95	遺構外出土遺物.....326
		写真図版96	遺構外出土遺物.....327
		写真図版97	遺構外出土遺物.....328
		写真図版98	遺構外出土遺物.....329
		写真図版99	遺構外出土遺物.....330
		写真図版100	遺構外出土遺物.....331
		写真図版101	遺構外出土遺物.....332
		写真図版102	遺構外出土遺物.....333
		写真図版103	遺構外出土遺物.....334
		写真図版104	遺構外出土遺物.....335
		写真図版105	遺構外出土遺物.....336

写真図版106	遺構外出土遺物	337	写真図版119	遺構外出土遺物	349
写真図版107	遺構外出土遺物	338	写真図版120	遺構外出土遺物	350
写真図版108	遺構外出土遺物	339	写真図版121	遺構外出土遺物	351
写真図版109	遺構外出土遺物	340	写真図版122	遺構外出土遺物	352
写真図版110	遺構外出土遺物	341	写真図版123	遺構外出土遺物	353
写真図版111	遺構外出土遺物	342	写真図版124	遺構外出土遺物	354
写真図版112	遺構外出土遺物	343	写真図版125	遺構外出土遺物	355
写真図版113	遺構外出土遺物	344	写真図版126	遺構外出土遺物	356
写真図版114	遺構外出土遺物	345	写真図版127	遺構外出土遺物	357
写真図版115	遺構外出土遺物	346	写真図版128	遺構外出土遺物	358
写真図版116	遺構外出土遺物	347	写真図版129	遺構外出土遺物	359
写真図版117	遺構外出土遺物	347	写真図版130	遺構外出土遺物	360
写真図版118	遺構外出土遺物	348	写真図版131	遺構外出土遺物	361



第1図 遺跡位置図

I 序 論

1. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、二戸郡安代町で青森線と分岐し、青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車道であり、本県にかかるのは第7次施行命令区間約27.6kmと第8次施行命令区間約26.7kmである。このうち第7次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年で終了している。

昭和53年11月第8次施行命令が出された。二戸郡安代町、浄法寺町、二戸市、一戸町を通る路線である。岩手県教育委員会はその区間の埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。そのなかで、浄法寺町には天台宗の古刹である天台寺が所在し、天台寺緑地保全区域となっていることから、路線はこの地を避けて設定されることとなった。

県教育委員会事務局文化課は、昭和54年10月12日に日本道路公団の協力を得て、実施計画路線沿い500m幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、その結果をもとに更に両方で協議を重ねた。昭和56年5月には路線発表があり、文化課は路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、約30遺跡を確認した。昭和57年には安代町の5遺跡について発掘調査範囲の確認調査を行っている。

昭和58年度事業として、安代町内4遺跡の発掘調査が当センターに委託され、湯の沢Ⅲ遺跡、繫沢Ⅱ遺跡、石神Ⅱ遺跡の発掘調査と関沢口遺跡の粗掘遺構確認調査を行った。文化課は同年度には浄法寺町内12遺跡の発掘調査範囲の確認調査を行っている。

昭和59年度には、安代町2遺跡（関沢口遺跡、水神遺跡）及び浄法寺町9遺跡（柿ノ木平Ⅲ遺跡、五庵Ⅰ遺跡、五庵Ⅱ遺跡、海上Ⅰ遺跡、海上Ⅱ遺跡、大久保Ⅰ遺跡、沼久保遺跡、桂平遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡）の発掘調査が委託された。このうち、関沢口遺跡は58年度の継続調査であり、沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰ遺跡は工所用道路分の調査である。文化課はこの年度に二戸市、一戸町所在のそれぞれ6遺跡について発掘調査範囲の確認調査を行っている。またその際、新たに発見された浄法寺町に所在する2遺跡（五庵Ⅲ遺跡、広沖遺跡）の確認を行っている。その結果縦貫道関連の浄法寺町の遺跡は14箇所となった。

昭和60年度は、前年度からの継続調査となった沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰの3遺跡のほか、浄法寺町田余内Ⅰ、田余内Ⅱ、五庵Ⅲ、安比内Ⅰ、広沖の5遺跡と二戸市西久保、大久保の2遺跡、一戸町堀切、竹林の2遺跡、あわせて12遺跡の発掘調査が委託された。このうち、大久保遺跡は次年度への継続調査であり、二戸市、一戸町所在遺跡のうち、終了した西久保遺跡を除いた10遺跡はともに61年度の調査となった。

2. 調査方法と整理方法

(1) 調査方法

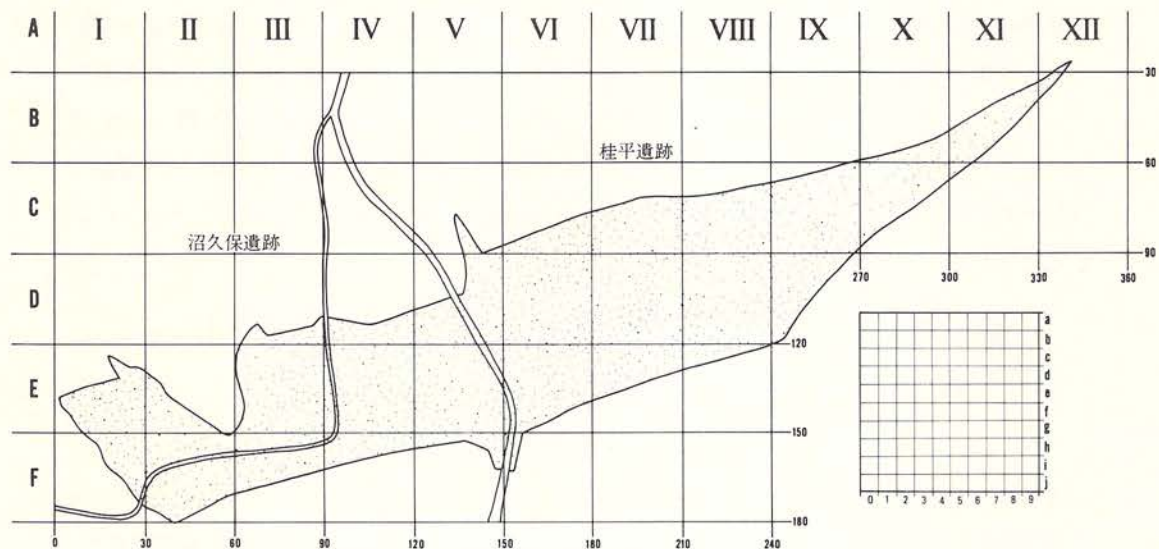
グリッドの設定と遺構名

隣接する桂平遺跡との同時調査であるため、両遺跡を包含するグリッド設定を行った。まず、地形図上で調査区をほぼ2分する地点に任意の点を設け、これを基点として真北方向を指す基軸線を設定した。この基点及び基軸線を延長し、30×30mのメッシュで全調査区を区割した。このメッシュの北西端を基準として、東西方向には西からⅠ・Ⅱ・Ⅲ……の番号を付し、南北方向には北からA・B・C……のアルファベットを与え、ⅠA区・ⅡB区と表示した。さらに、この大区画を10等分して、3×3mに小区画し、西から0～9、北からa～jを付し、ⅠA1a・ⅡB3bと表示した。

遺構名は大グリッド毎に1・2・3の番号を付してⅠA-1住居址・ⅡB-3ピットのように命名した。遺構が2つのグリッドにかかる場合はより若い区画名によった。

粗掘と遺構検出・遺構の精査と遺物の取り上げ

検出面までの深さ及び層序の確認のため、ⅡF～ⅢF区にトレンチを入れた。この結果埋積谷部分では、検出面までの深さが最大で2mを越すことがわかった。このため、基本層序第三層上面まではユンボとブルドーザーを使用した。この後、人力によって遺構の有無を確認しながら第六層まで掘り下げた。遺構が検出された場合には、平面形の把握に努めたが、多数の遺構が重複していたⅡF区では、この作業に大変手間取った。



第2図 グリッド配置図

検出された遺構は、住居址は4分法、ピット・陥し穴遺構は2分法を原則として精査を行ったが、必要に応じてその他の方法も併用した。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。

遺構内出土の遺物は、埋土では上位・下位に分けて取り上げ、床面出土の遺物は、写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、大グリッド別に出土した層位を記して取り上げた。

実測方法・写真撮影

検出面の高低差が著しく、総遣り方を組むことができなかったため、簡易的な遣り方実測を行った。また、雨裂跡については平板測量で実測した。実測図は20分の1の縮尺で平面図と断面図を作成した。また、カマドや炉などの細部は10分の1の実測図を作成した。遺構の埋土が単層である場合には、その状態をField Cardに記し、土層断面図の作成は省略した。

写真撮影は6×7cm判カメラ（モノクロ）を主とし、これに35mm判カメラ2台（モノクロ・カラーリバーサル）を補助カメラとして使用した。撮影にあたっては、整理時の混乱をさけるため撮影カードを利用した。

(2) 整理方法

室内での作業は、遺構図面の点検と補正及びトレース、遺物の復元と仕分けを優先させて行った。次に写真撮影・実測・拓本を並行して進めた。この後、実測図の点検とトレースを行い、図版・写真図版の作成を順に行った。個々の整理方法及び図版の凡例は下記のとおりである。

遺構

遺構配置図は発掘調査時に作成した図面を基本に1/200の縮尺図を作成し、縮尺不定で掲載し、各遺構図面は以下の縮尺を原則としたが、一部には縮尺の変更もあり、図版にはそれぞれスケールを付した。住居址の平・断面図…1/40、カマドや炉などの諸施設の平・断面図…1/20、ピット及び陥し穴状遺構の平・断面図…1/40、貯水槽跡・暗渠の平・断面図…1/60、焼土遺構・埋設土器・配石遺構の平・断面図…1/40。これらの図中に使用した記号やスクリントーンは次のとおりである。



焼土



攪乱



炭化材



十和田a降下火山灰



地山



礫

P…土器

S…礫

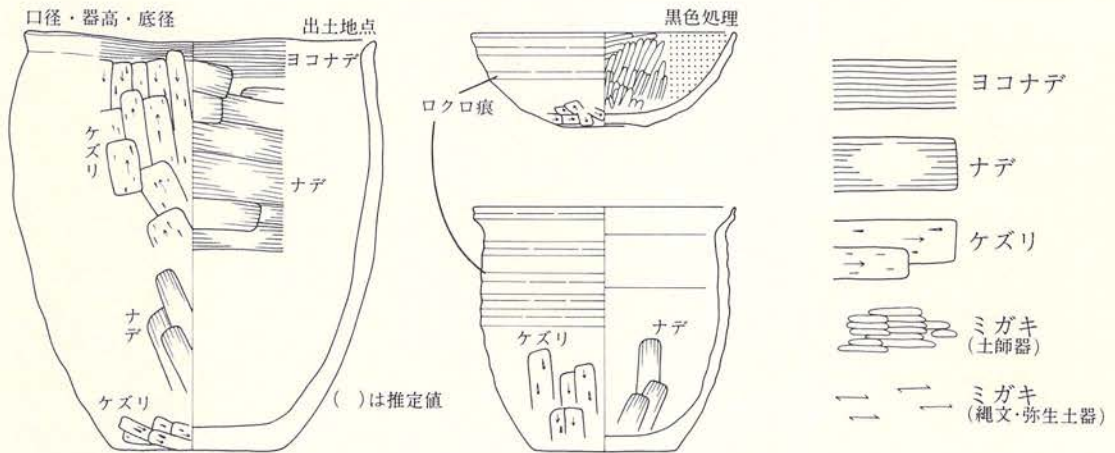
P₁・P₂・P₃…柱穴又は柱穴状ピット

遺物

土器は原則として反転実測が可能なもの（口縁部・底部が1/6以上残存するもの）に限ったが、

遺構内出土のうち、より小破片の場合は平面実測して掲載した。土師器の調整技法は、明瞭な個所のみ中軸線の両側3～4cmだけを図化した。須恵器は断面を黒く塗りつぶして表現した。縄文・弥生土器のうち、地文のみが施されているものは、中軸線の左側約1/3のみを図化した。掲載遺物の縮尺率、個々の凡例は下記のとおりである。

土器の実測図・拓本…1/3(ミニチュア土器は1/2)、剥片石器・磨製石斧…1/2、礫石器…1/3
 大形の礫石器…1/6、石製品・土製品…1/2、鉄器…1/2



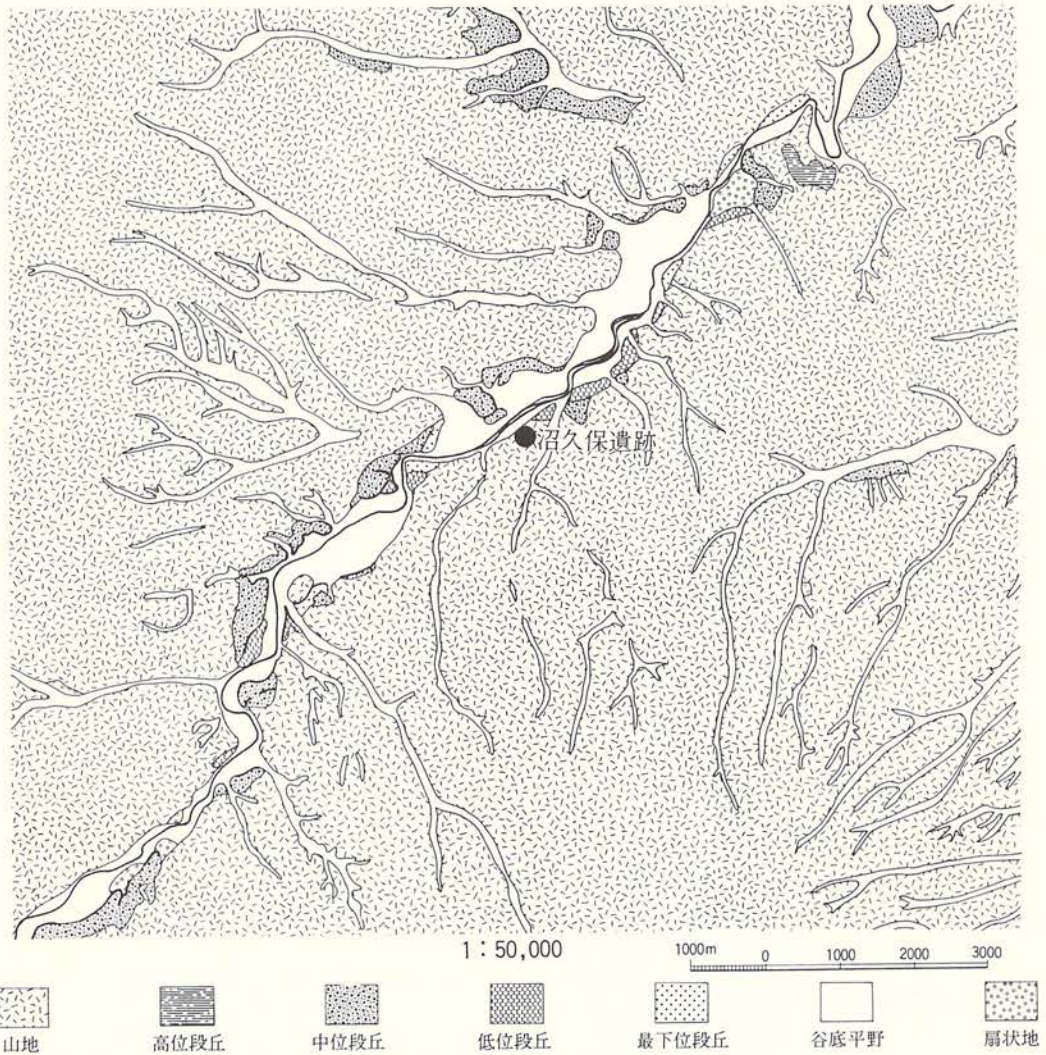
第3図 土器実測図凡例

3. 遺跡の立地と環境

(1) 地形と地質

沼久保遺跡は、岩手県二戸郡浄法寺町大字御山字沼久保に所在し、同町役場の南西約0.6kmに位置する。浄法寺町は奥羽山脈北部東側の山間部にあり、北が青森県田子町、北東は二戸市、南東は一戸町、南及び西は安代町に接している。西には稲庭岳(1078m)が望まれ、東には七時雨山(1060m)を主峯とする七時雨山系に連なる山塊が迫り、これら山々の狭間を縫うように安比川が北東に流れている。

奥羽山脈は新第三紀中新世に起った活発な火山活動(グリーンタフ活動)によって形成され、浄法寺町内の山地及び丘陵地もほぼこの新第三紀層(安山岩質岩石)によって原形がつくられている。第四紀の火山活動も活発で、稲庭岳周辺に安山岩質岩石(両輝石安山岩)が分布し、火山砕屑物が第三紀層や火成岩を覆って緩やかな地形面を形成している。



第4図 地形分類図

安比川は馬淵川水系の最大の支流であり、八幡平黒谷地湿原の北方にその源を発し、一戸町鳥越付近で本流と合流する全長52.8kmの河川である。安比高原を開析し、細野・豊畑付近で大規模な扇状地を形成した安比川は、赤坂田以北の兩岸に小規模な段丘を刻みながら荒屋新町に流れ込む。この後、曲田川との合流点に最も広い段丘面を形成し、蛇行しながら浄法寺町へ至る。浄法寺町は安比川中流域地区に位置し、流域内では比較的広い谷底平野が開け、兩岸には数段の段丘が観察される。

安比川及びその支流によって作られた段丘は、現河床面との比高などから4段に分けられる。高位段丘は岩手県発行による土地分類基本調査の地形分類図の砂礫段丘Ⅰで、安比川との比高が80mである。浄法寺町内では越戸付近にのみ存在している。馬淵川中流域の仁佐平段丘⁽¹⁾(比

高80m)に対比されるものであろう。

中位段丘は安比川との比高が25～45mである。浄法寺町では上流から下藤⁽²⁾(比高30m)、柿ノ木平(比高25m)、大清水・下谷地(比高30m)、五庵⁽⁹⁾(比高25m)、小泉(比高30m)、大森(比高30m)、飯塚(比高25m)、八幡館・田屋・小池(比高25m)、清水尻(比高40m)、松岡・宮沢⁽⁴⁾(比高40m)、漆沢(比高40m)、長流部・長渡路(比高45m)などである。安比川との比高が上流ほど小さくなっている。上記の地形分類図では柿ノ木平、大清水・下谷地、小泉、長流部・長渡路付近が火山灰砂段丘、飯塚、八幡館・田屋・小池、清水尻付近が砂礫段丘IIとなっている。

本段丘は安比川上流域のA面⁽⁶⁾(比高25～35m)、馬淵川中流域の福岡段丘(比高50m)に対比され、洪積世の低位段丘に相当するものとみられる⁽⁷⁾。福岡段丘は八戸浮石流凝灰岩に相当する火山灰流凝灰岩の堆積層、シラス台地としての性格をもっている。火山灰流凝灰岩の上位には、基本的に八戸火山灰やそれ以降の火山灰が覆っている。

低位段丘には、安比川との比高が15～20mである。浄法寺町内では上流から下谷地下位面(比高15m)、田余内(比高15m)、大森下位面⁽⁸⁾(比高20m)、滝見橋(比高20m)、吉田(比高20m)、小池・岩淵(比高20m)、清水尻下位面⁽⁹⁾(比高15m)、飛鳥(比高15m)、名越(比高20m)である。先に挙げた地形分類図では下谷地下位面、田余内、滝見橋付近が火山灰砂段丘で、大森下位面、清水尻下位面が砂礫段丘II、吉田、小池・岩淵、飛鳥、名越付近が砂礫段丘IIIとなっている。

本段丘は馬淵川中流域の米沢段丘(比高25m)に対比され、沖積段丘古期面に相当するとみられる。米沢段丘は中礫によって構成され、その上位には南部浮石以降の火山灰が覆っている。なお、当段丘に立地する飛鳥台地I遺跡では下位に火山灰流凝灰岩を伴っており、洪積低位段丘と捉えられている⁽¹¹⁾。また、馬淵川中流域の米沢段丘に立地している長瀬B遺跡でも「八戸火山灰ないし八戸浮石層」が「表土下1.5mから8.5mまで7m近く堆積」しており、これに対応するものと推定されるが、今後の検討を待ちたい。

最下位段丘は安比川との比高が5～10mである。上流から駒ヶ嶺(比高5m)、滝見橋下位面(比高10m)、飯塚下位面(比高5m)、御山口西(比高10m)、中前田(比高10m)などである。安比川との比高は同程度で、中位段丘、下位段丘に比して規模が小さい。これらの段丘は地形分類図では駒ヶ嶺、滝見橋下位面が火山灰砂段丘、飯塚下位面、御山口西、中前田が砂礫段丘IIIにそれぞれ分類されている。

本段丘は安比川上流地域のB面(比高7～11m)、馬淵川中流域の堀野段丘(比高15m)に対比され、沖積新期段丘に相当するものであろう。

また、安比川や岡本川、多々良沢、大又沢などの支流の谷底平野には沖積層(河床堆積物)

が細長く分布している。

沼久保遺跡は、隣接する桂平遺跡とともに安比川右岸の丘陵部に立地する。西側には谷地屋敷沢、東側では赤平沢がそれぞれ北流し、これらの沢に挟まれ、丘陵全体は北東に張出す。両遺跡の調査区はこの丘陵の末端部にあたる。丘陵の縁辺には、前述の低位段丘がへばり付くように発達している。標高は230～245mで、現在ではその大部分が畑地及び果樹園として利用されている。

本遺跡の調査区は、南西側の尾根と南東から大きく湾曲して東に張り出す尾根（桂平遺跡）に挟まれた緩い谷部で、中央部西寄りでは急峻な沢が深く丘陵を刻んでいる。この沢頭は2つに分かれ、西側の沢頭部分では最近まで利用されていた豊富な湧水がある。ここでは、調査グリッド毎に各地形の特徴と遺構の検出状況を述べることにする。（第44図遺構配置図参照）

I E区 沢の西岸の平坦地である。昭和30年代まで人家のあった所で、前述の湧水を利用するための設備も多く検出された。また、平安時代の住居址及びピット各1基、縄文時代の住居址3棟、弥生時代の住居址1棟が検出された。現地地形は平坦であるが、旧地表面は大きく北東に傾斜し、この部分は遺物包含層となっている。

II F区 南西側にひかえる尾根から埋積谷に続く北東斜面となる。傾斜がいくぶん緩くなる部分では、平安時代及び縄文時代の住居址、ピット、陥し穴状遺構が集中して検出された。こ



第5図 遺跡周辺地形図

のうち、西側では平安時代の住居址・住居址状遺構 6 棟、縄文時代の住居址 3 棟、ピット・陥し穴状遺構 6 基が重複する。なお、縄文時代の住居址はおのおの 1～3 回の建て替えが行われている。陥し穴状遺構の分布は、III F 区とともに規則的な配置がなされている。

III D・E 区 沢の東岸部にあたり、緩く西及び北に傾斜するが概ね平坦である。中世と考えられる住居址及び柱穴群、平安時代の住居址、ピット、縄文時代の埋設土器遺構及び配石遺構、陥し穴状遺構などが検出されたが、遺構の密度は少ない。

III F 区 II F 区から続く埋積谷の谷底及び西斜面である。黒色土が厚く堆積し、遺構検出面までの深さは最高で 2 m を越える。陥し穴状遺構 5 基が検出されたが、II F 区と一連のものである。

IV D・E 区 南から延びる尾根の北西斜面である。調査区中央から幅 7～5.5m、深さ 90～50 cm の雨裂跡が北西方向に横断している。陥し穴状遺構 2 基、ピット 2 基が検出された。

V・VI E・F 区 南から延びる尾根の頂部及び北西斜面の上位である。尾根の頂部には町道が通り、これを境に東側の桂平遺跡と接する。頂部から平安時代の住居址 1 棟、縄文時代のピット 1 基、斜面部分から陥し穴状遺構 3 基が検出された。

II F 区及び III F 区に深掘を行い、これを基本層序とした。また、I E 区における遺物包含層調査の際のトレンチ断面と調査区域末端部の壁面を参考資料とした。(第 6 図参照)

第 I 層 黒褐色土(層厚 10～75cm) 耕作土を主体とする。

第 II 層 黒色土(層厚 20～115cm) 埋積谷の底部及び I E 区に厚く堆積し、斜面上位にあたる調査区の南西部・南東部では観察されない。層中には砂や黒褐色土の薄層がみられるほか、I E 区では多量の遺物を包含する。

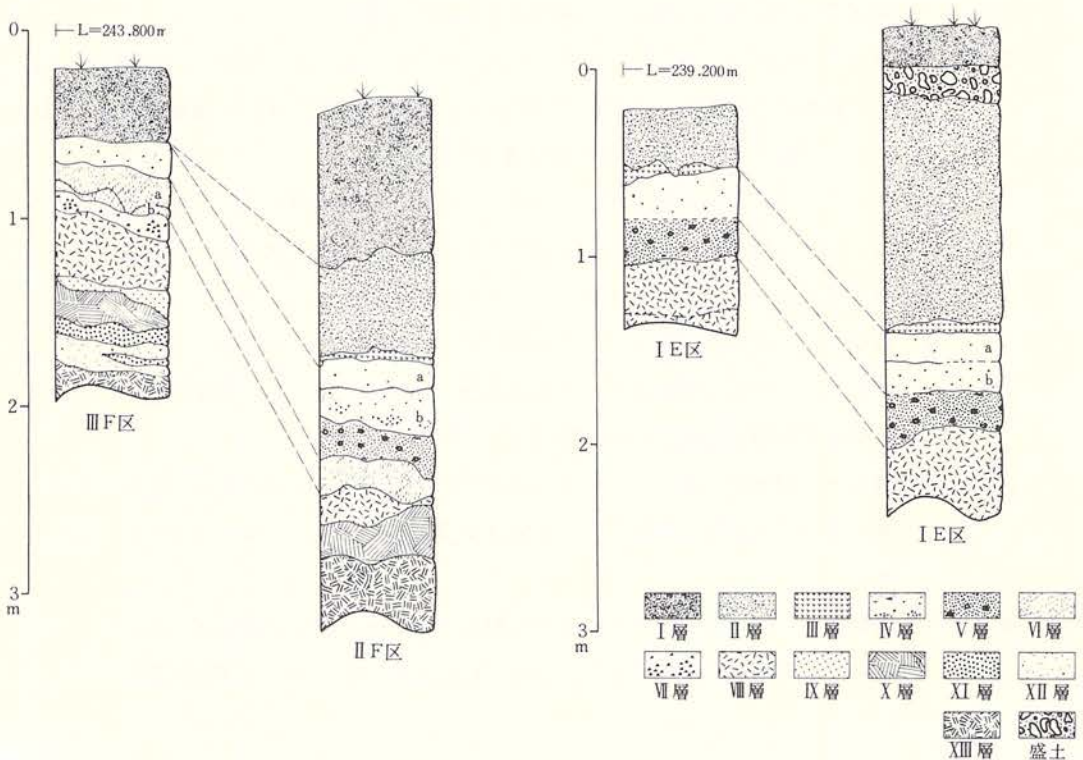
第 III 層 十和田 a 降下火山灰(層厚 2～5 cm) 埋積谷付近や斜面下位では広く観察される。また、縄文時代後期・弥生時代の住居址の埋土最上部にはレンズ状に、平安時代の住居址の埋土中にはブロック状に堆積する。

第 IV a 層 黒褐色土(層厚 15～18cm) 層中に粒径 1～3 mm の発泡のよいパミスを含む。調査区のほぼ全域に堆積する。埋積谷部分ではサンクラックの発達を観察された。下位の IV b 層を起源にもつ土層と考えられる。

第 IV b 層 褐色土(層厚 15～20cm) 中振浮石層である。所々で欠如するが、純層が観察できる部分では上位が粉状、下位は砂状を呈する粒径 1～3 mm の発泡のよいパミス層である。

第 V 層 黒褐色土(層厚 22～14cm) 層中に粒径 2～5 mm の発泡のよい黄褐色パミスを含む。南部浮石層に相当するものと考えられるが、斜面上位では第 IV 層との区別がつきにくい。

- 第VI層 褐色土（層厚10～25cm） 層中に粒径2～5mmの黄褐色パミス及び5～10mmの発泡の悪い赤褐色パミスを含む。斜面上位では上部のやや黒味の強いa層と下部の赤味の強いb層に細分される。馬淵川中流域・軽米地区の層序では、八戸火山灰に相当するが、層相が異なり詳細は不明である。なお、本層上面が最終の遺構検出面である。
- 第VII層 赤褐色浮石層（層厚5～10cm） 粒径3～10mmの発泡の悪いパミス層で、所々で欠如する。
- 第VIII層 明褐色土（層厚3～50cm） 新鮮な火山灰層で、層相は上記の八戸火山灰に類似する。
- 第IX層 におい黄橙色土（層厚3～15cm） 砂質土である。III F区でのみ観察される。このほか、第X層～XIII層の間には同様な砂質土（第XI・XII層）による葉理が発達する。
- 第X層 明褐色土（層厚5～26cm）
- 第XI層 明黄橙色土（層厚8～12cm） やや粘性がある。
- 第XII層 明黄橙色土（層厚5～15cm） 砂質土である。
- 第XIII層 橙色土（層厚10～30cm） 粘土質土で、下位に10～30cmの角礫を含む。



第6図 土層断面柱状図

なお、基本層序では確認されなかったが、平安時代の遺構の埋土には白頭山火山灰の堆積が観察された。

注(1) 各段丘と馬淵川との比高は、当センター高橋与右エ門の『上里遺跡発掘調査報告書Ⅲ、地形と周囲の環境』によった。

注(2) 下藤付近は『土地分類基本調査・荒屋』の「地形分類図」では扇状地となっている。しかし、標高265～270mの部分が幅80mにわたって平坦となっており、しかも前面が20mの急崖をなし段丘とみられる。

注(3) 五庵付近は『土地分類基本調査・荒屋』の「地形分類図」では山麓地及び他の緩斜面となっている。しかし、段丘崖に駒ヶ嶺館が構築されたこともあってはっきりしないが、標高240～255mの部分が幅200mの平坦地で、前面が5mの崖となっていて下位面に続いており段丘とみられる。また、当段丘は中位にシラス層を伴っており、洪積世の低位段丘に相当すると考えられる。

注(4) 松岡から宮沢の付近は『土地分類調査・浄法寺』の「地形分類図」では丘陵地Ⅰとなっている。しかし、標高225m付近が幅100mにわたって平坦地で、しかも前面が25mの急崖となっており段丘とみられる。

注(5) 宮沢から漆沢の付近は『土地分類調査・浄法寺』の「地形分類図」では前者同様丘陵地Ⅰとなっている。しかし、標高210～240mの間にわたって平坦となって連続し、しかも前面が30mの急崖となっており段丘とみられる。

注(6) 種市 進「遺跡の立地と環境」『上の山Ⅵ遺跡発掘調査報告書』 1983

注(7) 大池昭二他「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究 vol. 5 No. 1』 1966
高橋与右エ門「地形と周囲の環境」『上里遺跡発掘調査報告書』 1983

注(8) 大森、清水尻付近は元来同一の砂礫段丘と考えられていたものであるが、沢などを境にして一段低い平坦面が捉えられることから2分した。なお、飛鳥では上位面が存在するようである。

注(9) 注(7)高橋与右エ門に同じ。

注(10) 日本道路公団仙台建設局の「土性縦断図」によると厚さが11mである。

注(11) 飛鳥台地Ⅰ遺跡の調査担当者三浦謙一の助言による。

注(12) 遠藤勝博「遺跡群の環境」『上里遺跡発掘調査報告書』 1983

<参考文献・引用文献>

国土調査、土地分類基本調査「荒屋」 岩手県 (1974)

国土調査、土地分類基本調査「浄法寺」 岩手県 (1979)

佐々木勝 『伝天台寺跡』 浄法寺町教育委員会 (1981)

柄沢満郎 『海上Ⅰ・海上Ⅱ・大久保Ⅰ遺跡発掘調査報告書』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1985)

(2) 周辺の遺跡

遺跡台帳に登載されている浄法寺町の遺跡は72遺跡⁽¹⁾である。このうち安比川流域に62が存在し、全体の85%を占めている。この安比川流域では左岸に所在する遺跡が11遺跡（17.7%）、右岸に所在する遺跡が51遺跡（82.3%）で、右岸の遺跡数が圧倒的に多い。これは東北縦貫自動車道が安比川右岸を南西から北東に通過しているため、その関連遺跡の詳細分布調査が実施されたためである。

元来、安比川右岸は七時雨山山麓北縁の北西斜面となっており、遺跡の立地条件はあまり良好ではなく、ある程度地域が限定されている。逆に左岸は陽当りのよい南東斜面となっており遺跡の立地には恵まれている。右岸より多くの遺跡が予想され、今後の分布調査によっては塗り替えられるものと推察される。また、安比川流域以外では低丘陵地が広大な面積を占め、上杉沢遺跡や鏡田遺跡のように大規模遺跡が存在しており、分布の調査の実施によっては倍加するものであろう。

ここでは岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡台帳をもとに主に安比川流域についてまとめることにする。資料は遺跡台帳を基本とし、それに発掘調査の成果を加味しながら行うことにする。

町内の遺跡の種類は散布地44、集落跡14、古墳1、寺跡1、館跡12で圧倒的に散布地が多くなっている（60.3%）。ただし散布地は調査によって集落となる可能性をもっているものであり⁽²⁾、集落と同一の性格のものとみられる。散布地、集落跡のほとんどは縄文時代に属し、古代に属するのは16遺跡である。古代の遺跡のあり方は縄文時代後・晩期の遺跡に重複するもので、縄文時代との複合遺跡である。古墳は川又古墳で石郭などはなかったようであるが、円墳3基が存在している⁽³⁾。また、寺跡1は天台寺跡で、国の重要文化財に指定されている鉦彫手法で著名な聖観音、十一面観音像を擁する天台宗の名刹である。寺伝では神亀5年（728年）行基の創建となっている。古代天台寺の解明のため発掘調査が続けられている。館跡は12であるが、その後の調査によって23と増加している。

対象とする安比川流域の遺跡は遺跡台帳に登録された63遺跡と新たに発掘調査された五庵III遺跡、広沖遺跡の65遺跡である。このうち館跡が11遺跡で、縄文時代に属するものが51遺跡、弥生時代が6遺跡、古代が15遺跡である⁽⁴⁾。縄文時代に属する遺跡を時期別に細分すると早期8、前期14、中期9、後期32、晩期22、不明10となり、延べ87遺跡となる。後期が33.7%、晩期が23.2%で、この両者が過半数を占めている。

次に、占地別にみると、丘陵緩斜面が5、中位段丘が43、低位段丘が22、谷底平野が6遺跡となり、中位段丘、低位段丘に立地するものが多い。館はいずれも中位段丘に立地している。

また、館跡を除いて、時期別に占地状況をみると、谷底平野の調査例がなく断言できないが、次のような傾向が伺われる。

縄文時代では早期から中期にかけてが丘陵緩斜面から低位段丘にかけて占地し、後期、晩期になると、中位、低位段丘を主体として谷底平野に拡大する傾向があるようである。弥生時代の遺跡は6例と少なく、今のところ丘陵緩斜面、中位、低位段丘が各2遺跡となっている。古代においては丘陵緩斜面2、中位段丘5、低位段丘7で、低位段丘が主体となっている。現在までのところ谷底平野からの発見例はないが、より安比川に向かって拡大する傾向にあると言えるであろう。

浄法寺町における発掘調査は大正5年(1961)の赤塚治持氏による天台寺「土踏まず丘」の経塚調査に始まる⁽⁶⁾。その後大正12年(1968)に浄法寺町出身の岩手考古学の先駆者小田島禄郎氏によって鏡田遺跡が調査され、銭瓶平の炭化粃とともに報告されている⁽⁶⁾。また、大正13年(1969)には同氏によって川又古墳が踏査され、紹介されている⁽⁷⁾。

一方、天台寺跡は昭和45年(1970)、47年(1972)に板橋源氏によって予備調査が行われて以来、昭和53年(1978)以降は継続調査され、昭和60年(1985)で第10次調査となっている。

最近では東北縦貫自動車道の関連遺跡調査として、当遺跡など14遺跡が調査され、昭和60年(1985)には浄法寺町教育委員会によって上杉沢遺跡が発掘調査されている⁽⁸⁾。

注(1) 『全国遺跡地図、岩手県』文化庁

注(2) 発掘調査の結果、散布地となっていた上杉沢・海上I・II・五庵II・沼久保の5遺跡から竪穴住居跡が検出されている。

注(3) 小田島禄郎「県下に於ける古墳の二・三」『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書6』岩手県教育委員会

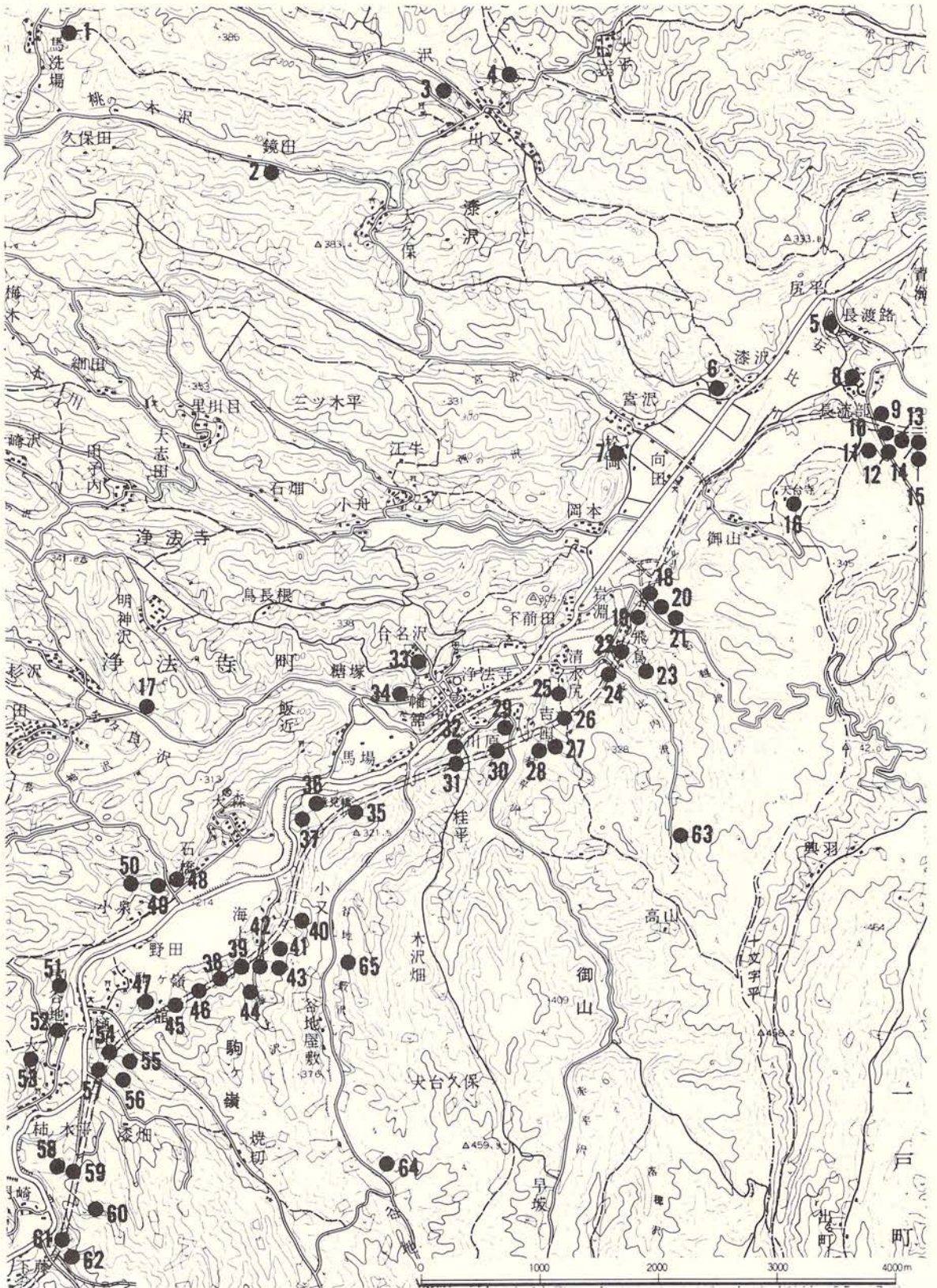
注(4) 遺跡の中には複合するものがあって数が合わない。

注(5) 赤塚治持、板橋源「天台寺土踏まず丘発掘記」『岩手史学研究31』1959 岩手史会

注(6) 小田島禄郎「県下に於ける竪穴及び「チャシ」に関するもの一」『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書4』1924 岩手県教育委員会

注(7) 小田島禄郎「県下に於ける古墳の二・三」『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書6』1926 岩手県教育委員会

注(8) 『わらびて26』1975 岩手県立埋蔵文化財センター



第7図 遺跡分布図

周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	遺物等	No.	遺跡名	種別	遺物等
1	馬洗場	散布地		39	海上 II	散布地	縄文後期・晩期
2	鏡田	集落跡	土師器	40	〃 III	〃	〃
3	川又館	館跡		41	〃 IV	〃	〃
4	川又古墳	古墳		42	〃 V	〃	〃
5	漆沢館	館跡		43	山根	〃	〃
6	長渡路館	〃		44	前谷地	〃	縄文中～晩期・土師器
7	松岡館	〃		45	五庵 I	集落跡	〃 後～晩期・土師器
8	上野 I	散布地	縄文前期末	46	〃 II	〃	〃 弥生・古代・中近世
9	〃 II	〃	縄文	47	駒ヶ嶺館	館跡	
10	〃 III	集落跡	〃 前期～後期	48	大森館	〃	
11	〃 IV	〃	〃 後期	49	小泉館	〃	
12	〃 V	〃	〃 〃 ・晩期	50	小泉	散布地	縄文
13	〃 VI	〃	〃 晩期	51	大清水館	館跡	
14	〃 VII	散布地	〃	52	下谷地	散布地	縄文後期
15	〃 VIII	〃	〃 後期	53	大清水	〃	〃 後期・石鏃・石剣・土偶
16	天台寺跡	寺院跡		54	田余内 I	集落跡	〃 後期・晩期・土師・須恵
17	明神沢	散布地	縄文晩期・石鏃	55	〃 II	散布地	〃 後期・晩期
18	名越 I	〃	〃 前～後期・土師器	56	〃 III	〃	〃
19	飛鳥台地 I	集落跡	〃 後期・土師器	57	漆畑	〃	〃 前期末
20	〃 II	散布地	〃 ・土師器	58	柿ノ木平館	館跡	空堀・土塁
21	名越 II	〃	〃 後期	59	柿ノ木平 I	散布地	縄文後期・晩期
22	安比内 I	集落跡	〃 後期・晩期・土師	60	〃 II	〃	縄文
23	〃 II	散布地	〃	61	〃 III	〃	〃 中～晩期
24	館	集落跡	〃 後期・晩期	62	〃 IV	〃	縄文
25	吉田館	館跡・集落跡	〃 中～晩期・堀・土塁	63	飛鳥	〃	〃 後～晩期・石偶
26	大久保 I	集落跡	〃 後期・晩期・土師器	64	沼久保 II	〃	〃 中・晩期・石鏃
27	〃 II	散布地	〃 前期	65	小又	〃	〃
28	〃 III	〃	〃 後期・晩期				
29	大手	集落跡	土師器				
30	桂平 I	〃	縄文後期・晩期				
31	沼久保	散布地	〃				
32	大坊	〃	〃				
33	上外野	集落跡	土師器・須恵器				
34	浄法寺城	館跡					
35	馬場向 I	散布地	縄文後期				
36	〃 II	〃	〃 後期・晩期				
37	〃 III	〃	〃 前～中期				
38	海上 I	〃	〃 後期・晩期・土師				

II 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

I E-1 住居址

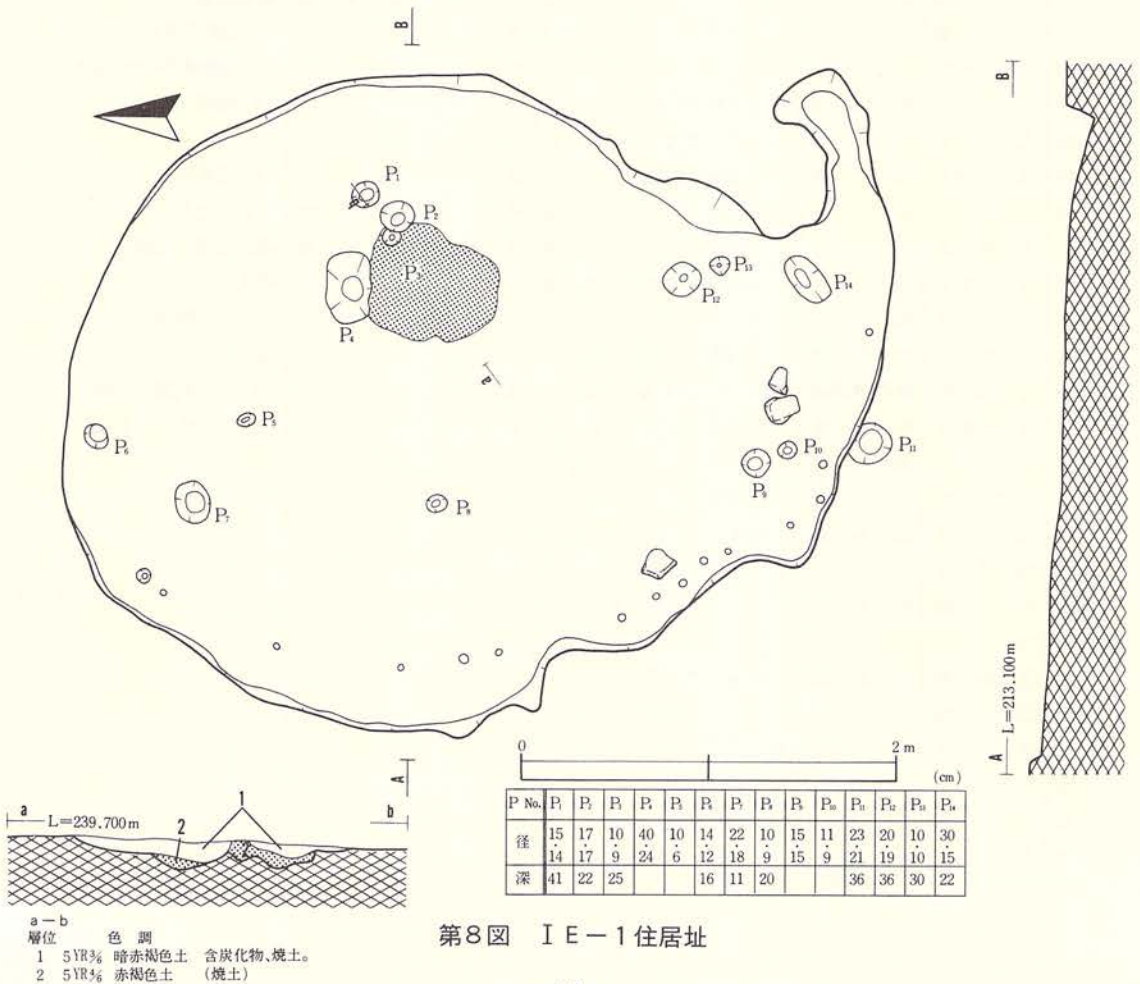
遺構 (第8図・写真図版4)

〈検出状況〉 表土を除去した段階で、パミスを含む黒褐色土の広がりとして検出された。

〈平面形〉 南側に不整な張り出しをもつ、柄鏡形を呈する。〈規模〉 4.3×3.5mである。

〈埋土〉 パミスを含む黒褐色土の単層のため、土層断面図の作成を省略した。

〈壁〉 後世の削平によって残存状態は悪い。いずれも僅かに外傾して立ち上がる。高さは、東壁13.1cm、西壁5.6cm、北壁6cmである。



第8図 I E-1 住居址

〈床面〉平坦であるが東方向に緩く傾斜している。硬くしまるものではない。

〈柱穴〉図中に規模を掲載した14個(P₁~P₁₄)の他に、西側沿いに15個の小ピットが巡る。主柱穴の配置は不明であるが、張り出し部分に検出された。P₉~P₁₀・P₁₂~P₁₄は、出入口の施設に関連する柱穴ではないかと考えられる。

〈炉〉床面中央の東壁寄りに地床炉を1基もつ。55×70cmの範囲に焼土や炭化物の分布がみられたが、焼土層の発達は良くなく、最大で6cmである。

遺物 (第45図・写真図版47)

縄文土器片と石器が出土した。いずれも埋土からの出土である。

〈土器〉第45図1~5は、前期の土器片である。いずれも胎土には、植物性繊維を含む。1は底部片で、体部は僅かに外傾して立ち上がる。内面及び底面は粗く磨かれている。2~4は、地文に結束された羽状縄文をもつ体部片である。裏面は全て丹念なミガキが施されている。6は口縁部片で、低い隆帯で区画され無文帯となっている。地文はRL縦回転の単節斜縄文である。8~10は後期の土器片と考えられる。8は壺形土器の肩部で、沈線区画された縄文帯が巡り、他は磨消されている。9は口縁部片で、上端部を僅かに残し、他は磨消されている。10は地文にLRの単節斜縄文をもつ体部片である。

〈石器〉11は剝片の尖頭部に片側づつ、細部調整が施されている。石錐の類かもしれない。

時期 時期を判断する資料を欠き、詳細は不明であるが、出入口状の張り出しをもつ住居址(柄鏡状住居址)は縄文時代後期の集落で多く検出されており、当住居址も同一時期と考えられる。

I E-2 住居址

遺構 (第9図・写真図版5)

〈検出状況〉表土を除去した段階で、炉の焼土及び、土器片が検出され住居址と認定した。

〈規模・平面形〉全体にかなりの割合で削平を受け、南西壁の一部を残存するだけで詳細は不明である。残存部分や検出された柱穴状ピットから推定して、径3.6m前後の円形を呈していたものと考えられる。

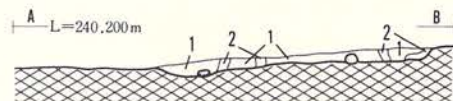
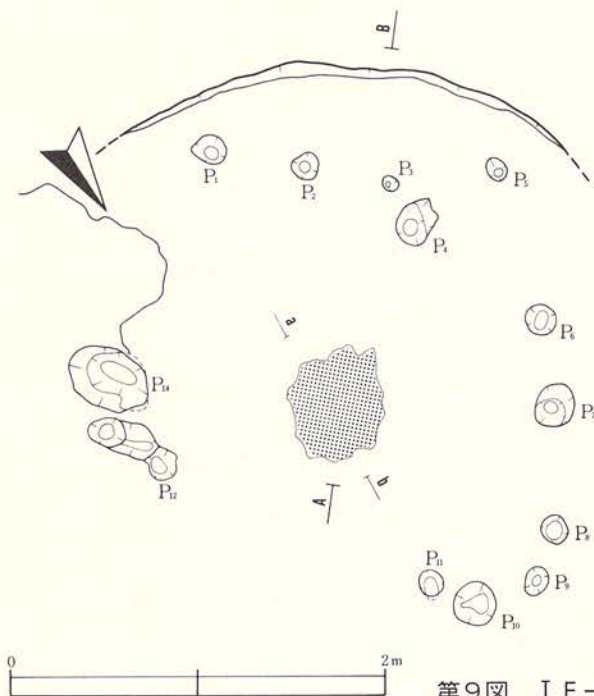
〈埋土〉壁際に汚れた火山灰が僅かにみられるほかは、パミスを含む黒褐色土で構成される。

〈壁〉南西壁が僅かに残存する。高さは最高部で6.6cmである。

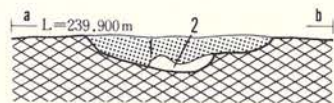
〈床面〉中央部がやや窪むが、その他の部分は平坦で、全体に硬くしまっている。

〈柱穴〉P₁~P₁₄の14個が検出された。主柱穴の配置には、P₄・P₁₁・P₁₂の三角形、P₂・P₆・P₁₁・P₁₂の四角形、P₄・P₇・P₁₁・P₁₂の台形などが考えられる。

〈炉〉床面のほぼ中央と考えられる位置に地床炉を1基もつ。60×50cmの範囲に焼土の形成



A-B
 層位 色調
 1 7.5YR₅ 暗褐色土 含バミス(5%)。
 2 10YR₅ 褐色土 (汚れ火山灰)。



a-b
 層位 色調
 1 2.5YR₅ 赤褐色土(焼土)。
 2 2.5YR₃ 暗赤褐色土(汚れた焼土)。

P No.	(cm)													
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径	19	15	9	23	14	17	25	15	16	23	14	17	21	47
深	16	14	8	24	10	16	20	15	12	23	13	16	16	32
	11	9	5	21	14	15	24	11	14	11	16	25	13	42

第9図 IE-2住居址

がみられ、厚さは最大で8cmである。

遺物 (第45図・写真図版47)

床面及び埋土から土器と石器が出土した。

〈土器〉第45図には床面から出土した大型の粗製土器である。体部下半から底部を欠く。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は緩く内湾する。地文は0段多条のLR単節斜縄文で、内面は粗く磨かれている。13~16は埋土から出土した土器片である。13・14は縄文時代前期の土器で、同一個体である。胎土には植物繊維を含む。緩く外反する口縁部片で、小さな波状を呈するものと考えられる。文様は、R1段の撚糸圧痕文によって施され、口唇部にも施文される。また、頸部には頂部に連続する爪形を有する隆帯が巡る。15は縄文時代後期の土器で、大きな山形口縁を呈するものと考えられる。全体は外傾するが、内面は緩く内湾する。文様は縄文地に沈線によって描かれ、さらにコプがつく。16は弥生時代の甕形土器の口縁部である。体部は僅かに膨らみをもち、口縁部は外傾する。口縁部上端を除いて、LRの単節縄文が横走する。また口唇部にも縄文が施文されている。

〈石器〉床面から2点出土した。17は鋭利な一側辺に、使用に伴って生じたと思われる微細な剝離痕が観察される。18は剝片である。

時期 床面出土の土器から、縄文時代後期後半の住居址と考えられる。

I E-3 住居址

遺構 (第10図・写真図版6)

〈検出状況・重複関係〉平安時代に位置づけられる IE-5 住居址の精査時に検出された。同住居址に大半を切られ、また北側は流失している。

〈規模・平面形〉残存部から推定して、径 6 m 前後の円形を呈していたものと考えられる。

〈埋土〉精査時の不手際により、土層断面図の作成及び写真撮影は行っていない。検出時の観察では、壁際では汚れの少ない火山灰、中央部では IV a 層を起源とする黒褐色～暗褐色土の堆積がみられた。

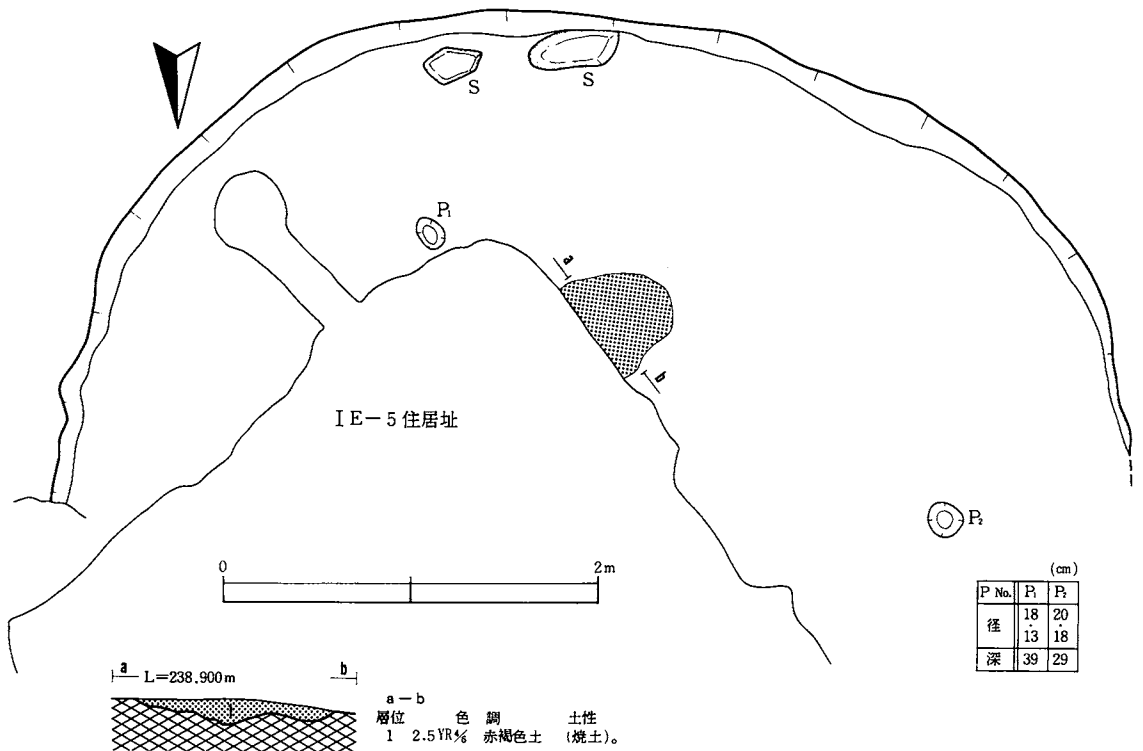
〈床面〉全体に平坦であるが、壁際ではやや凹凸がみられる。中央付近は硬くしまっている。

〈柱穴〉残存する床面から P₁・P₂ の 2 個が検出された。深さや位置から、いずれも支柱穴を構成していたものと考えられる。しかし、これらに対応する他の柱穴は見い出せなかった。

〈炉〉床面中央の南壁寄りに地床炉を 1 基もつ。北東側を IE-5 住居址によって切られている。焼土の発達は良くなく、60×45cm の範囲に最大 7 cm の厚さに淡い焼土が形成されている。

遺物 (第46図・写真図版48)

床面及び埋土から縄文土器と石器が出土した。精査時の不手際により、埋土上位から出土した遺物を包含層からの出土として取り上げたため、掲載した遺物は少量となった。



第10図 I E-3 住居址

〈土器〉第46図1は床面から出土した大型の粗製土器で、体部下半を欠く。体部は、外傾して立ち上がり、上端から内湾する。口唇部は内削ぎとなり、いくぶん肥厚する。地文は0段多条LRの単節斜縄文である。内面は粗く磨かれている。2は床面から出土した体部片である。横長の長方形区画文に、LRの単節斜縄文が充填され、他は磨消されている。3～5は埋土から出土した後期の土器片である。3は大波状を呈する口縁部である。波頭部には突起を有するものと考えられるが、欠損している。また、口唇部内側は肥厚し、頂部に刻みをもつ小突起が貼付されている。体部文様は、沈線と磨消手法による入組文風の文様が想定される。地文は羽状縄文であるが、磨耗が著しく原体は不明である。4・5は粗製土器の口縁部である。6～8は中期の土器片である。6・7は同一個体で、低い隆帯に区画された磨消縄文が文様を構成している。8は沈線区画による磨消縄文である。9は前期の土器片で、胎土に繊維を含む。地文は結束された羽状縄文である。

〈石器〉埋土から3点が出土した。10は横形の石匙である。三角形を呈し、底辺にあたる部分に両面からの加工によって刃部を作り出している。11は剝片の一辺に両側から粗い調整が施され、対応する鋭利な一辺には微細な調整痕がみられる。12は剝片である。

時期 床面出土の土器から、当住居址は縄文時代後期後半の遺構と考えられる。

II F-1 住居址

遺構（第11・12図・写真図版6・7）

〈検出状況〉IV層上面で、十和田a降下火山灰に囲まれた黒色土の円形な広がりとして検出された。斜面下位に当たる北側は流失している。

〈規模・平面形〉残存部から推定して、径5m前後の不整な円形、または東西方向に長軸をもつ楕円形を呈していたものと考えられる。

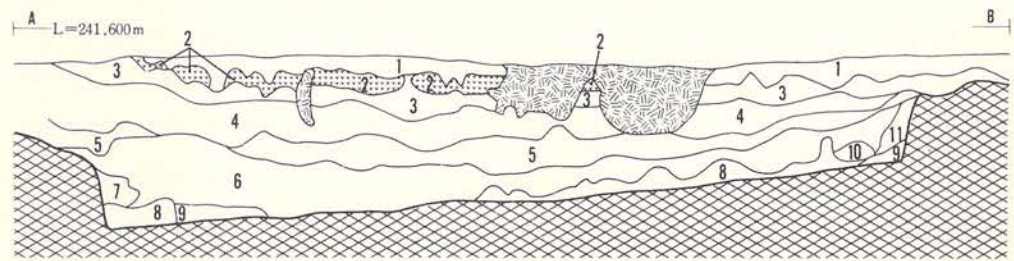
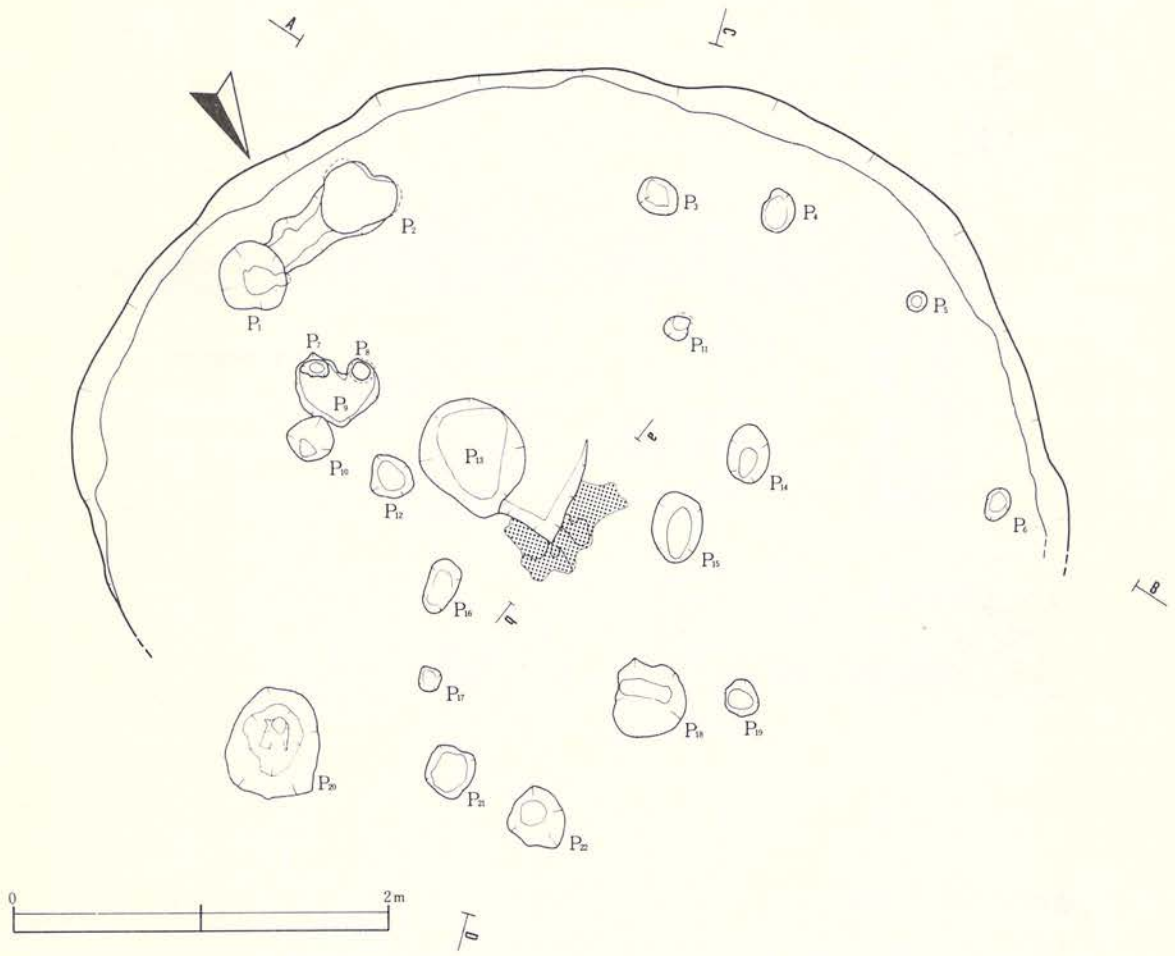
〈埋土〉南西寄りの部分では、自然堆積の様相を示し、上位が十和田a降下火山灰・黒色土、中位はパミスを含む黒褐色～暗褐色土、下位は褐色土で構成される。住居址中央部は、床面まで攪乱層がみられ、この部分に多量の炭化物が分布していた。

〈壁〉北側を欠く。いずれもほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの高さは、東壁で36cm、西壁で64cm、南壁で86cmである。

〈床面〉南半部分は平坦で硬くしまっているが、攪乱を受けている中央部は凹凸が著しい。また、斜面下位にあたる北半部は同方向に緩く傾斜する。

〈柱穴〉P₁～P₂₂の22個が検出されたが、主柱穴の配置は不明である。

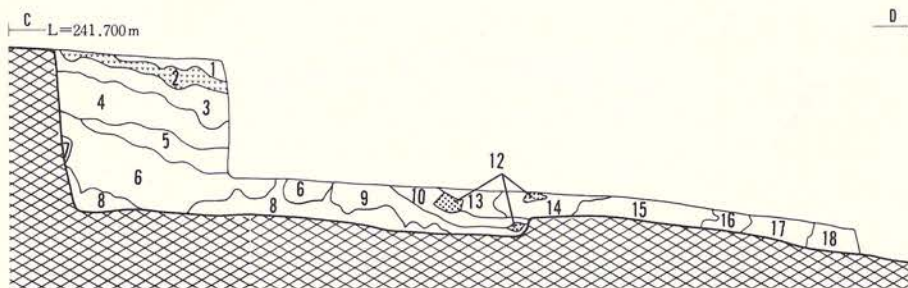
〈炉〉床面中央部に地床炉を1基もつ。埋土から攪乱を受けており、残存状態は悪い。焼土は60×43cmの範囲で不整形に分布する。厚さは最大6cmである。



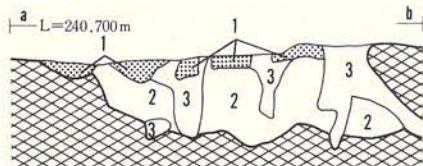
- A-B
- | 解位 | 色 | 調 | 土性 |
|----|----------------------|-------|--------------------|
| 1 | 10YR _{3/2} | 黒色土 | 含To-a(少量)。 |
| 2 | 10YR _{3/2} | 浅黄橙色土 | (To-a)。 |
| 3 | 10YR _{3/2} | 黒褐色土 | 含炭化物(1%)。 |
| 4 | 10YR _{3/2} | 黒色土 | 含バミス・炭化物(1%)。 |
| 5 | 10YR _{3/2} | 黒色土 | 含バミス・炭化物(1%)。 |
| 6 | 10YR _{3/2} | 黒褐色土 | 含バミス(10%)・炭化物(2%)。 |
| 7 | 7.5YR _{3/2} | 明褐色土 | |
| 8 | 7.5YR _{3/2} | 褐色土 | 含バミス・炭化物(少量)。 |
| 9 | 7.5YR _{3/2} | 暗褐色土 | 含バミス(少量)。 |
| 10 | 10YR _{3/2} | 黒色土 | |
| 11 | 10YR _{3/2} | 黒色土 | 含To-a・バミス(少量)。 |

P No.		P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径		39	43	23	23	12	18	15	14	45	23	14
		36	39	21	17	10	14	9	14	30	23	13
深		21	14	8	6	5	14	22	22	10	16	35
		25	63	30	37	30	20	40	19	58	27	20
P No.		24	56	23	27	17	18	38	18	57	26	21
	深	13	17	17	20	17	11	30	15	61	10	42

第11図 II F-1 住居址(1)



C-D		土性				土性	
層位	色調			層位	色調		
1	10YR _{5/2}	黒色土	含To-a (少量)。	10	10YR _{5/2}	黒色土	含バミス (少量)・炭化物(15%)。
2	10YR _{5/2}	浅黄橙色土	(To-a)。	11	5YR _{5/2}	明赤褐色土	(焼土ブロック)。
3	10YR _{5/2}	黒褐色土	含バミス(1%)。	12	2.5YR _{5/2}	明赤褐色土	(焼土)。
4	10YR _{5/2}	黒色土	含バミス(少量)・炭化物(1%)。	13	10YR _{5/2}	黒褐色土	含バミス(1%)。
5	10YR _{5/2}	黒色土	含バミス(3%)・炭化物(1%)。	14	10YR _{5/2}	黒褐色土	含バミス(1%)。
6	10YR _{5/2}	黒褐色土	含バミス(10%)・炭化物(2%)。	15	10YR _{5/2}	褐色土	含バミス(3%)。
7	7.5YR _{5/2}	明褐色土		16	10YR _{5/2}	黒褐色土	含バミス(3%)。
8	7.5YR _{5/2}	褐色土	含バミス・炭化物(少量)。	17	10YR _{5/2}	暗褐色土	含バミス(1%)。
9	10YR _{5/2}	黒褐色土	含バミス(3%)・炭化物(7%)。	18	10YR _{5/2}	黒褐色土	含バミス(2%)。



a-b		土性	
層位	色調		
1	2.5YR _{5/2}	明赤褐色土	(焼土)。
2	7.5YR _{5/2}	明褐色土	(焼土粒を含む)。
3	10YR _{5/2}	黒色土	(焼土粒・炭化物を含む)。

第12図 II F-1 住居址(2)

遺物 (第47図・写真図版49)

床面と小ピットから土器が、埋土から石器が出土した。

〈土器〉 第47図1は南西壁際の床面から出土した。壺形土器であるが、頸部から上位は欠損している。胎土には砂を多く含むが、焼成は良い。底部は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、中央やや上位に最大径をもった後強く内湾して頸部に続く。最大径を有する部分には4個の突起が配され、文様もこの部分より上位に施されている。対をなす2個の突起は頂部に凹みを有するが、隣り合う突起は凹みをもたず、やや小ぶりである。文様はこの4個の突起を基点として、沈線区画された細い縄文帯によって構成され、他の部分は磨消されている。縄文はLRの単節斜縄文である。2はP₁の底面から出土した土器片である。体部下半部と考えられ、中央部に沈線に区画された縄文帯が巡り、他は丹念に磨かれている。縄文はRL単節斜縄文である。

〈石器〉 埋土から2点出土した。いずれも剝片で、使用痕は認められない。

時期 出土した土器から、縄文時代後期後葉期の住居址と考えられる。なお、炉周辺から検出された炭化物の¹⁴C年代は、3890±120y. B. P. と土器編年から推定される年代より古い値を示している。

II F-2 住居址

遺構 (第13図・写真図版8・9)

〈検出状況・重複関係〉ほぼ同位置で重複するII F-6 住居址(平安時代)の精査時にその存在が確認された。このため、中央部は埋土を床面上約20cmまで同住居址によって切られている。この他に、西壁際をII F-2・3・4ピットに切られ、中央部でII F-3、西壁際でII F-4 陥し穴状遺構、北西側でII F-5 住居址を切っている。

また、住居址中央部に3×2 mの範囲で貼り床が施され、この下位から地床炉1基が検出された。埋土の状況から拡張した住居址と考えられ、先行するものをa住居址、後のものをb住居址として記述する。しかし、先行するa住居址についての規模、平面形、柱穴などは不明である。

II F-2a 住居址

〈埋土〉II F-2b 住居址中央部に施された貼り床である。パミスを含む黒褐色土で構成され、最大9cmの厚さである。

〈床面〉炉の周辺は緩く窪み、全体に硬くしまっている。

〈炉(No.2)〉径50cmの円形に焼土が分布する。厚さは最大で4cmであるが、よく焼けている。なお、この位置はII F-3 陥し穴状遺構上で、炉は同遺構の埋土最上部を切っている。

II F-2b 住居址

〈規模・平面形〉残存部から推定して、長軸7.3m、短軸6 mの東西にやや長い楕円形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉2層に大別され、上位がパミスを含む黒色土、下位がパミスを含む黒褐色土で構成される。

〈壁〉北壁を欠く。残存状態は悪いものの、東壁では中層浮石層を切っている。全体に外傾して立ち上がり、壁高は東壁13cm、西壁30cm、南西壁60cmである。

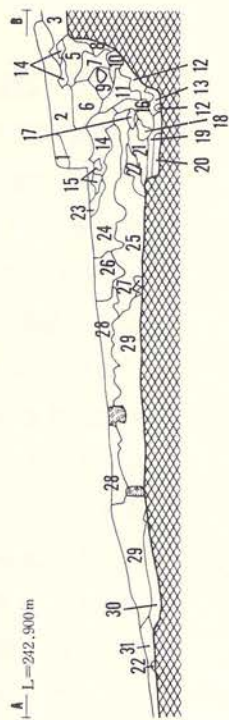
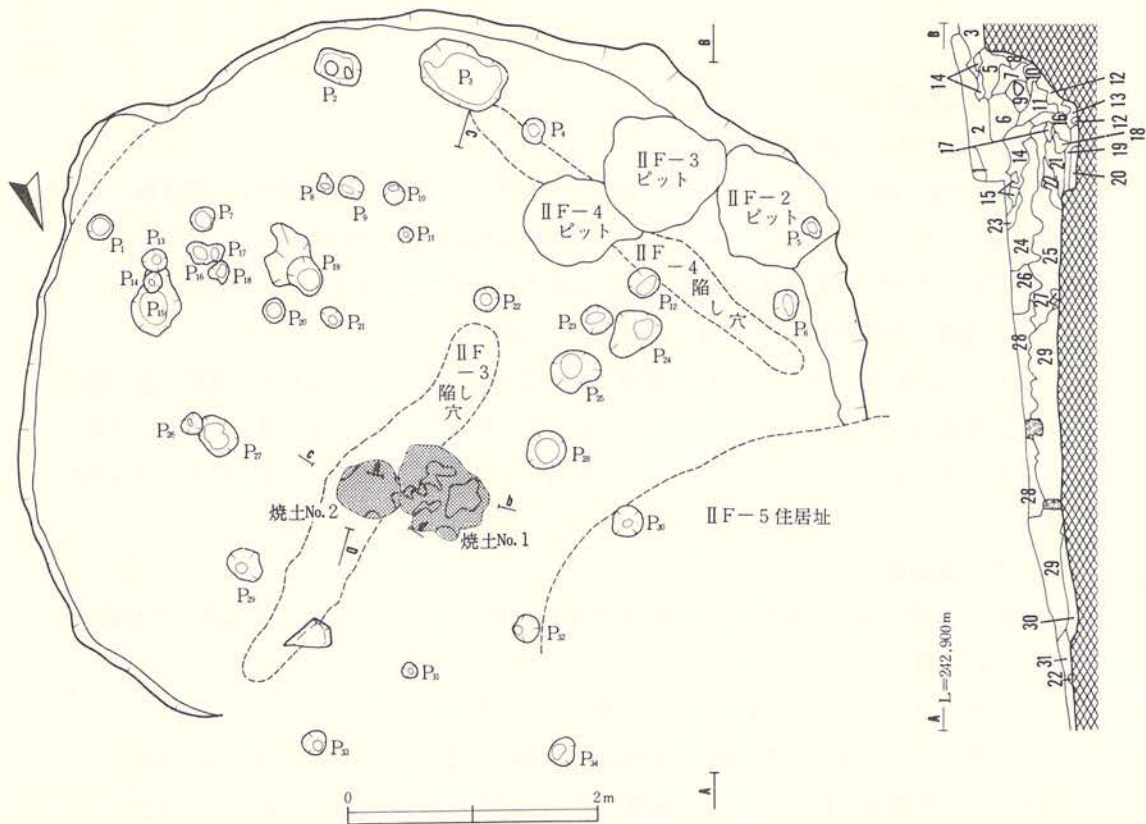
〈床面〉全体に平坦で硬くしまっているが、貼り床部分では周辺に比べてやや軟かい。

〈柱穴〉P₁~P₃₄の34個が検出されている。深さと位置から推定して支柱穴の配置には、P₁₉・P₂₅・P₂₉・P₃₂、P₁₉・P₂₅・P₂₉・P₃₂の四角形、また、これらにP₂₇・P₃₀を加えた六角形などが考えられる。

〈炉(No.1)〉床面中央部やや北寄りに位置する。焼土は80×60cmの範囲に分布するが発達は悪く、厚さは最大3cmである。

遺物 (第47~49図・写真図版49~50)

床面と埋土から土器と石器が出土した。土器には縄文土器と弥生土器がある。出土状況からいずれもb住居址に伴うものと考えられる。



(cm)

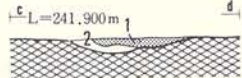
P No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇
径	21	37	70	21	19	24	20	18	20	19	13	25	20	16	50	23	15
深	20	24	47	19	15	20	20	14	17	18	12	25	17	14	40	17	13
P No.	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄
径	17	30	20	18	20	26	46	40	18	36	32	30	25	13	23	20	23
深	15	22	16	15	19	22	34	35	18	27	30	26	25	12	21	19	21
深	11	66	14	17	20	22	41	60	28	30	16	31	18	32	27	30	60



層位	色調	土性
1	7.5YR _{3/4} 褐色土	含バミス(少量)。
2	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(3%)。
3	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(3%)・炭化物(1%)。
4	10YR _{3/2} 褐色土	含バミス(少量)。
5	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(1%)。



層位	色調	土性
1	7.5YR _{3/4} 暗褐色土	含バミス・焼土粒(1%)。
2	7.5YR _{3/2} 褐色土	
3	7.5YR _{3/2} 黒褐色土	
4	5YR _{3/4} 明赤褐色土	(焼土)。
5	7.5YR _{3/2} 暗褐色土	含焼土粒。
6	5YR _{3/4} 赤褐色土	(汚れた焼土)。
7	7.5YR _{3/2} 明褐色土	含焼土粒。
8	7.5YR _{3/2} 黒褐色土	



層位	色調	土性
1	5YR _{3/4} 明赤褐色土	(焼土)。
2	5YR _{3/4} 赤褐色土	(汚れた焼土)。

層位	色調	土性
1	10YR _{3/2} 黒色土	
2	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス・炭化物(少量)。
3	10YR _{3/2} 黒褐色土	含炭化物(5%)。
4	7.5YR _{3/2} 褐色土	(焼土ブロック)。
5	7.5YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(5%)。
6	7.5YR _{3/2} 黒色土	含バミス(7%)。
7	7.5YR _{3/2} 極暗褐色土	含バミス(3%)。
8	7.5YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)含バミス(3%)。
9	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(7%)。
10	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(1%)。
11	7.5YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(3%)。
12	10YR _{3/2} 褐色土	
13	10YR _{3/2} 暗褐色土	(汚れた火山灰)。
14	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(3%)。
15	10YR _{3/2} 黄褐色土	(汚れた火山灰)。
16	10YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
17	7.5YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(7%)。
18	10YR _{3/2} 暗褐色土	含焼土粒。
19	10YR _{3/2} 明黄褐色土	(地山)。
20	10YR _{3/2} 暗褐色土	(II F-2p埋土)。
21	7.5YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(3%)。
22	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(1%)。
23	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(1%)。
24	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(5%)・炭化物(少量)。
25	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(7%)。
26	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(7%)。
27	10YR _{3/2} 褐色土	
28	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(5%)・炭化物(少量)。
29	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(7%)・炭化物(少量)。
30	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(3%)。
31	10YR _{3/2} 黒色土	
32	10YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
33	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(3%)。

第13図 II F-2住居址

〈土器〉第47図5は南壁際の床面から出土した壺形の土器で、体部上半部を欠損する。底部は小さく上げ底で、体部は内湾して立ち上がった後、中央やや上位に最大径をもつ。体部の中央部分には、磨消手法による入組文が展開され、頂部に凹みをもつ小突起が付く。体部下位は沈線によって区画され、縄文が施されている。縄文は2本の原体を用いた羽状縄文であるが、整然としたものではない。なお、体部中央の破損部には、ひび割れに沿ってアスファルト状の物質が付着している。6は埋土の最下部から出土した大型の粗製土器で、体部下位を欠損する。体部は僅かに外傾して立ち上がり、上半部から口縁部は緩く内湾する。口唇部内側はいくぶん肥厚し、内面は粗く磨かれている。地文は0段多条LRの単節斜縄文である。

7～9・第48図1は埋土から出土した。7は小型の椀形土器で、連続する小山形口縁を呈する。内外面とも粗いミガキが施されている。8は小型の土器の底部で、地文は0段多条RLの単節斜縄文である。9・第48図1は縄文時代前期の土器で、胎土には植物繊維を含む。第48図1は底部を欠損する深鉢である。体部は円筒状であり、口縁部は緩く外反する。頸部には3本の原体圧痕文が巡り、口縁部と体部を区画している。地文は口縁部・体部とも結束された羽状縄文である。内面は丹念に磨かれている。

第48図2～10は縄文時代後期の土器片である。2・3は同一個体で、口縁部には頂部に刻みをもつ小突起が配され、文様は細い沈線によって描かれている。4は粗製土器の口縁部で、口唇部は内削ぎになる。地文はLR単節斜縄文である。5は大型の粗製土器の体部で、全体に細い沈線が巡らされている。これらは埋土の下位からの出土である。6～8は同一個体で、磨消手法による入組文が描かれている。9も同様な文様をもつ。11～13は同一個体で、縄文時代晩期の土器片である。体部は外傾して立ち上がり、上端で「く」字状に屈曲し、口縁部は緩く外傾する。口縁部には刻みが連続して施され、短かい頸部は無文帯となっている。体部にはLRの単節縄文が施文されている。14・15は弥生土器で、同一個体である。壺形土器の体部上半部で、5本の沈線が巡らされ、中央部にはLR単節縄文が横走する。

〈石器〉埋土と床面から剝片石器と礫石器が出土した。第48図16は縦長の石匙で、下半部を欠損する。17は剝片の湾曲する一辺に、細かい調整を施した凹刃の削器である。19は凸刃の削器である。18は使用痕をもつ剝片、20は側辺に細部調整をもつ剝片である。

21は扁平な自然礫を利用した粗製の石皿である。第49図1は磨石で、6面に使用痕をもつ。2は床面から出土した粗製石皿で、両端を欠損する。表裏両面に使用痕をもつ。

時期 床面や埋土下位から出土した土器から、縄文時代後期後葉の住居址と考えられる。

II F-3 住居址

遺構（第14・15図・写真図版10・11）

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で、十和田 a 降下火山灰のブロックを含む黒色土の広がりとして検出された。斜面下位に当る北側はII F-8 住居址(平安時代)によって切られている。また、北西側は流失している。

住居址中央部に径4.5m の半円状の貼り床が施され、この下位から先行する住居址の壁と柱穴状の小ピットが多数検出された。これらの小ピットの配置からさらに2棟の住居址が重複する可能性がある。埋土の状況から、拡張と考えられるが、内側の2棟については縮少・拡張を断定できる材料はない。ここでは、規模の小さいものから a~c 住居址として記述する。

II F-3a 住居址

〈規模・平面形〉柱穴状の小ピットの配置から推定して、径3 m 前後の円形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉II F-3c 住居址中央部に施された貼り床である。パミスを僅かに含む暗褐色土で構成され、厚さは最大15cmである。II F-3b 住居址の埋土とは区別できない。

〈床面〉礫まじりの明褐色土層で、凹凸が著しい。

〈柱穴〉P₅₁~P₇₀の小ピット群が壁柱穴を構成するものと考えられる。主柱穴については不明である。

〈炉〉検出されていない。プランからII F-3c 住居址に伴って検出された地床炉とほぼ同位置にあったと考えられる。

II F-3b 住居址

〈規模・平面形〉残存する壁と柱穴群から推定して、径4.6m 前後の円形を呈していたものと考えられる。

〈壁〉南西側のみ残存する。やや外傾して立ち上がり、高さは南壁3 cm、南西壁9 cm、西壁3 cmである。

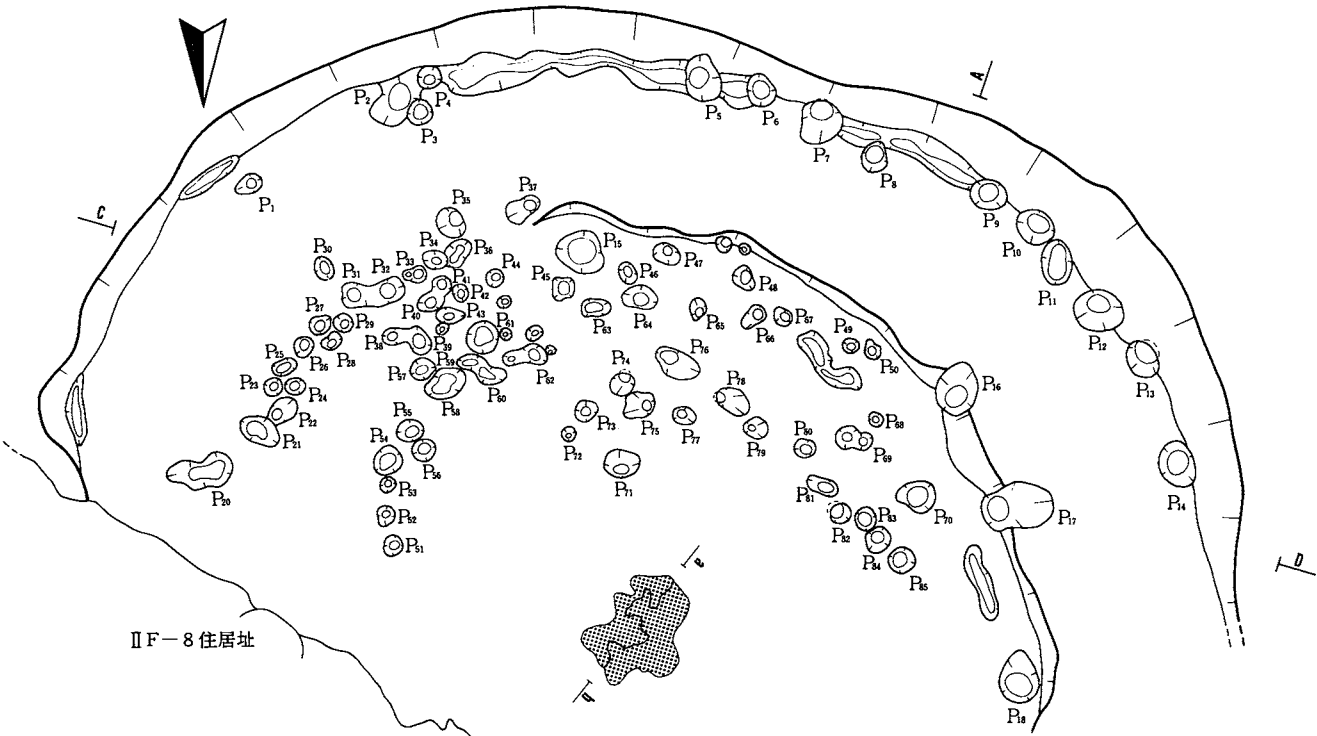
〈床面〉II F-3a 住居址と同じ礫まじりの明褐色土であり、凹凸が著しい。

〈柱穴〉P₂₀~P₅₀の小ピット群が壁柱穴を構成するものと考えられるが、主柱穴については不明である。

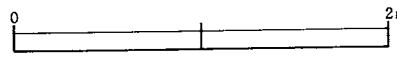
〈炉〉検出されていない。プランから指定して、II F-3c 住居址に伴って検出された地床炉とほぼ同位置にあったと考えられる。

II F-3c 住居址

〈規模・平面形〉残存部から推定すると径7 m 前後の円形、または東西方向にやや長い楕円形を呈するものと考えられる。



II F-8 住居址

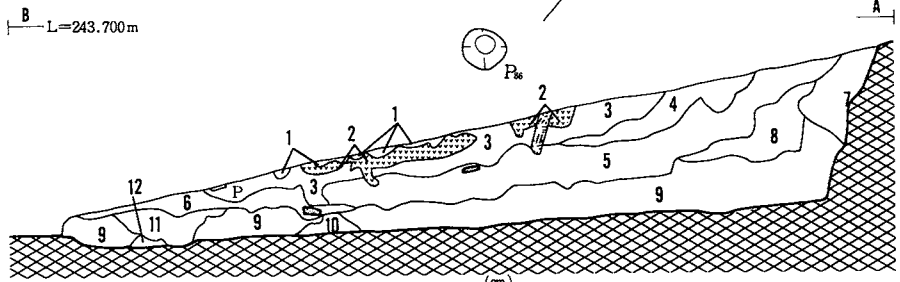


P.No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径	16	30	15	13	25	18	25	18
深	11	5	4	20	14	16	22	13

P.No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径	20	21	25	27	21	25	27	29
深	17	19	17	23	16	20	23	22

P.No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径	38	27	32	35	24	16	10	11
深	26	22	24	20	16	13	10	10

P.No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径	14	12	12	13	10	13	15	18
深	9	10	7	12	10	10	14	13



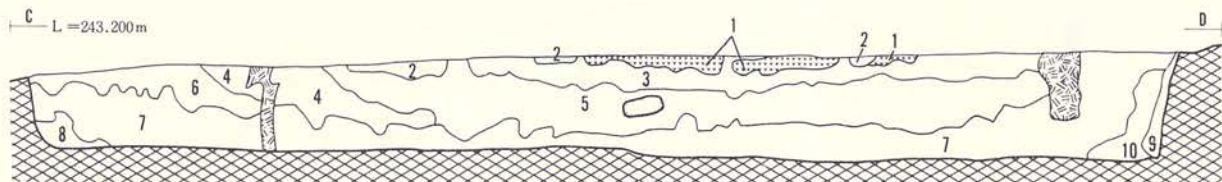
P.No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	
径	13	14	16	17	20	13	17	15	10	10	16	11	14	13	15	15	9	12	12														
深	3	5	9	11	7	7	7	5	6	5	5	10	12	8	9	11	3	3	3														

P.No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	
径	10	8	17	15	13	14	22	15	15	18	13	16	19	13	15	11	8	14	21														
深	6	6	9	13	6	8	9	10	6	6	5	6	10	8	7	6	5	6	4														

P.No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径	20	8	14	14	18	26	13	20	13	12	18	11	12	16	14	23
深	15	7	11	12	16	15	11	14	13	11	10	13	13	14	14	21

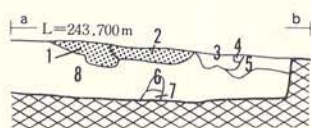
- | 層位 | 色 | 調 | 土性 |
|----|-------|-----|-----------------------|
| 1 | 7.5YR | 8/2 | 黒色土 |
| 2 | 7.5YR | 8/1 | 灰白色土 (To-a)。 |
| 3 | 10YR | 8/2 | 黒色土 含To-a。 |
| 4 | 10YR | 8/2 | 黒褐色土 含バミス(少量)。 |
| 5 | 10YR | 8/2 | 黒色土 含バミス(1%)・炭化物(少量)。 |
| 6 | 10YR | 8/2 | 黒色土 含バミス・炭化物(少量)。 |
| 7 | 10YR | 8/2 | 褐色土 (汚れた火山灰)。 |
| 8 | 10YR | 8/2 | 黒褐色土 含バミス(1%)。 |
| 9 | 10YR | 8/2 | 暗褐色土 含バミス(1%)。 |
| 10 | 7.5YR | 8/2 | 明褐色土 含バミス(3%)。 |
| 11 | 10YR | 8/2 | 暗褐色土 含バミス(1%)。 |
| 12 | 10YR | 8/2 | 黒色土 含バミス(1%)。 |

第14図 II F-3 住居址(1)



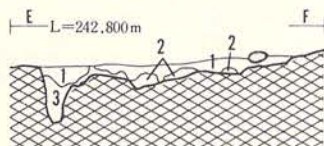
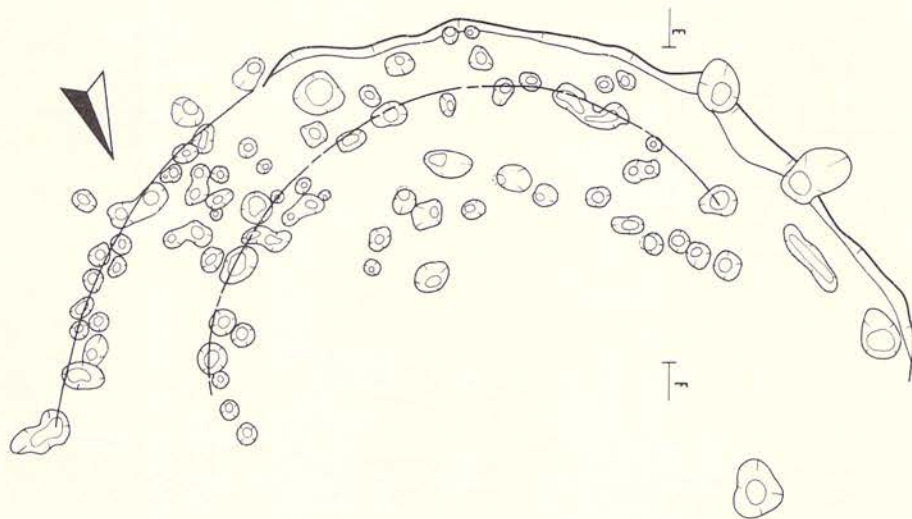
C-D

層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{5}{1}$	灰白色土 (To-a) ₀
2	10YR $\frac{3}{1}$	黒色土 含To-a ₀
3	10YR $\frac{3}{1}$	暗褐色土 含To-a・炭化物(少量)
4	10YR $\frac{3}{1}$	黒色土 含バミス(3%)・炭化物(1%)
5	10YR $\frac{3}{1}$	黒色土 含バミス(1%)・炭化物(少量)
6	10YR $\frac{3}{1}$	黒褐色土 含バミス(1%)・炭化物(少量)
7	10YR $\frac{3}{1}$	暗褐色土 含バミス(1%)
8	10YR $\frac{3}{1}$	褐色土 (汚れた火山灰)
9	10YR $\frac{3}{1}$	褐色土 (汚れた火山灰)
10	10YR $\frac{5}{1}$	黄褐色土 (汚れた粘土質火山灰)



a-b

層位	色調	土性
1	2.5YR $\frac{5}{1}$	橙色土 (淡い焼土)
2	2.5YR $\frac{5}{1}$	橙色土 (焼土)
3	5YR $\frac{3}{1}$	暗赤褐色土 含焼土
4	10YR $\frac{5}{1}$	明黄褐色土
5	7.5YR $\frac{3}{1}$	褐色土 (汚れた火山灰)
6	5YR $\frac{3}{1}$	黒褐色土 含焼土
7	5YR $\frac{3}{1}$	赤褐色土 (汚れた焼土)
8	10YR $\frac{3}{1}$	黄褐色土



E-F

層位	色調	土性
1	10YR $\frac{3}{1}$	暗褐色土 含バミス(少量)・小礫
2	10YR $\frac{5}{1}$	黄褐色土
3	10YR $\frac{5}{1}$	明黄褐色土 含小礫



第15図 II F-3住居址(2)

〈埋土〉自然堆積の様相を示す。3層に大別され、上位は十和田 a 降下火山灰・黒色土、中位はパミス・炭化物を僅かに含む黒色土、下位はパミスを含む暗褐色土で構成される。

〈壁〉南半部が残存する。いずれもやや外傾して立ち上がり、壁高は東壁24cm、南西壁60cm、南壁87cmである。壁高が最も高い南壁沿いには幅20～10cm、深さ5～10cmの壁溝が巡る。

〈床面〉壁際は礫まじりの層で、凹凸があるが、他は平坦で、全体に硬くしまっている。

〈柱穴〉P₁～P₁₄は壁に沿って巡り、これらが壁柱穴を構成する。P₁₅～P₁₇とII F-8住居址内に検出されたP₃₆(II F-8住居址P₁₅)は、位置や深さから支柱穴を構成するものと考えられる。北東側でこれらに対応する柱穴は検出されなかったが、検出された4個の位置から、基本的には四角形の柱穴配置がなされていたと考えられる。

〈炉〉住居址中央部に地床炉を1基もつ。焼土の発達は良くなく、60×45cmの範囲に最大4cmの厚さで淡い焼土が分布するにすぎない。

遺物 (第49・50図・写真図版51・52)

縄文土器・弥生土器・石器が出土した。いずれも埋土からの出土で、c住居に伴う遺物である。

〈土器〉第49図3・4は、南西壁際の同地点から出土した。3は香炉形土器である。台付であるが、台部は欠損する。体部は緩く内湾して立ち上がり、不整な隅丸三角形の大きな透しが対峙する。ブリッジ部分には細い縦長と三角形の透しが設けられ、頂部には3つの小突起を有するツマミをもつ。このツマミには、小孔が穿たれている。文様は器面に小突起を配し、これらを2本の沈線で繋いで構成されている。小突起は大きな透しの周縁にも配されている。3は小型の椀形土器である。丸底を呈し、体部は内湾する。口唇部は内削ぎとなり、器面は表裏とも丹念なミガキが施され光沢がある。5～7は深鉢形土器の体部～底部である。5は体部が緩く内湾し、下位に沈線をもつ。地文は0段多条LRの単節斜縄文である。6も同様の地文をもつ。7は無文で内外面とも粗く磨かれている。

8・9は弥生土器である。8は壺形土器で、底部に小さな張り出しをもつ。体部は外傾して立ち上がった後内湾して、上半部に最大径をもつ。地文は0段多条RLの単節斜縄文で、内面は粗くミガキが施されている。底面の破損部にアスファルト状の物質が付着する。9も壺形を呈すと考えられる。底部は張り出しをもち、体部は内湾して立ち上がる。地文はL1段の燃糸文で、底部の張り出し部には斜方向、体部下端には横方向、体部には縦方向に施文されている。

第50図1～5は縄文土器片である。1は壺形土器の口縁部と考えられるが、緩く外反する。口唇部には小さな突起が配され、この直下にも小突起が付けられる。口縁部と肩部に沈線が巡り、これに区画された頸部は、磨かれ無文帯となっている。口縁部及び肩部には0段多条LRの単節斜縄文が施文されている。2～5は同一個体の小型壺形土器である。体部は内湾し中央部に最大径をもつ。頸部は「く」字状に屈曲し、無文の口縁部は外傾する。地文はRL単節斜縄文

である。

6～9は弥生土器片である。6は甕形土器の口縁部で、緩く内湾する。口縁部に3本の沈線が巡り、体部にはLRの単節縄文が縦走する。7・8は同一個体で、地文はR1段の撚糸文である。9は粗製の壺形土器の体部片と考えられる。体部下半に膨らみをもち、内傾して上部に続くものと考えられる。地文はLRの単節縄文が横走する。

〈石器〉1点だけの出土である。10は横型の石匙であるが、調整は極めて雑である。

時期 床面からの遺物を欠くため詳細は不明であるが、第49図3・4の土器は破損も少なく、縄文時代後期後半に位置づけられる遺構と考えられる。なお、埋土下位から検出された炭化物の¹⁴C年代は、4060±130y. B. P.と土器編年から推定される年代よりかなり古い数値を示している。

II F-4 住居址

遺構 (第16図・写真図版12)

〈検出状況・重複関係〉基本層序第V層面で、パミスを含む黒色土の広がりとして検出された。床面から多数の柱穴と壁溝が検出され、少なくとも3回の規模の変更があったものと推定される。埋土の堆積状態や壁溝の検出状況から、ほぼ同一の形状で拡張された住居址と考えられる。ここでは、プランの推定できる3棟について、先行するものからa～c住居址として記述する。しかし、各プランについて壁溝及び柱穴配置については、必ずしも明確に把握できたものではない。

II F-4a 住居址

〈規模〉南東側及び南西側に巡る最も内側の壁溝から推定して、3.1×(3.6)mである。

〈柱穴〉P₂・P₁₁・P₄₀を結ぶ三角形が想定される。

II F-4b 住居址

〈規模〉西側及び東側に巡る壁溝からの推定で、3.6×(4.1)mである。

〈柱穴〉P₁・P₂—P₆—P₇・P₈—P₉・P₁₁から構成される四角形が想定される。

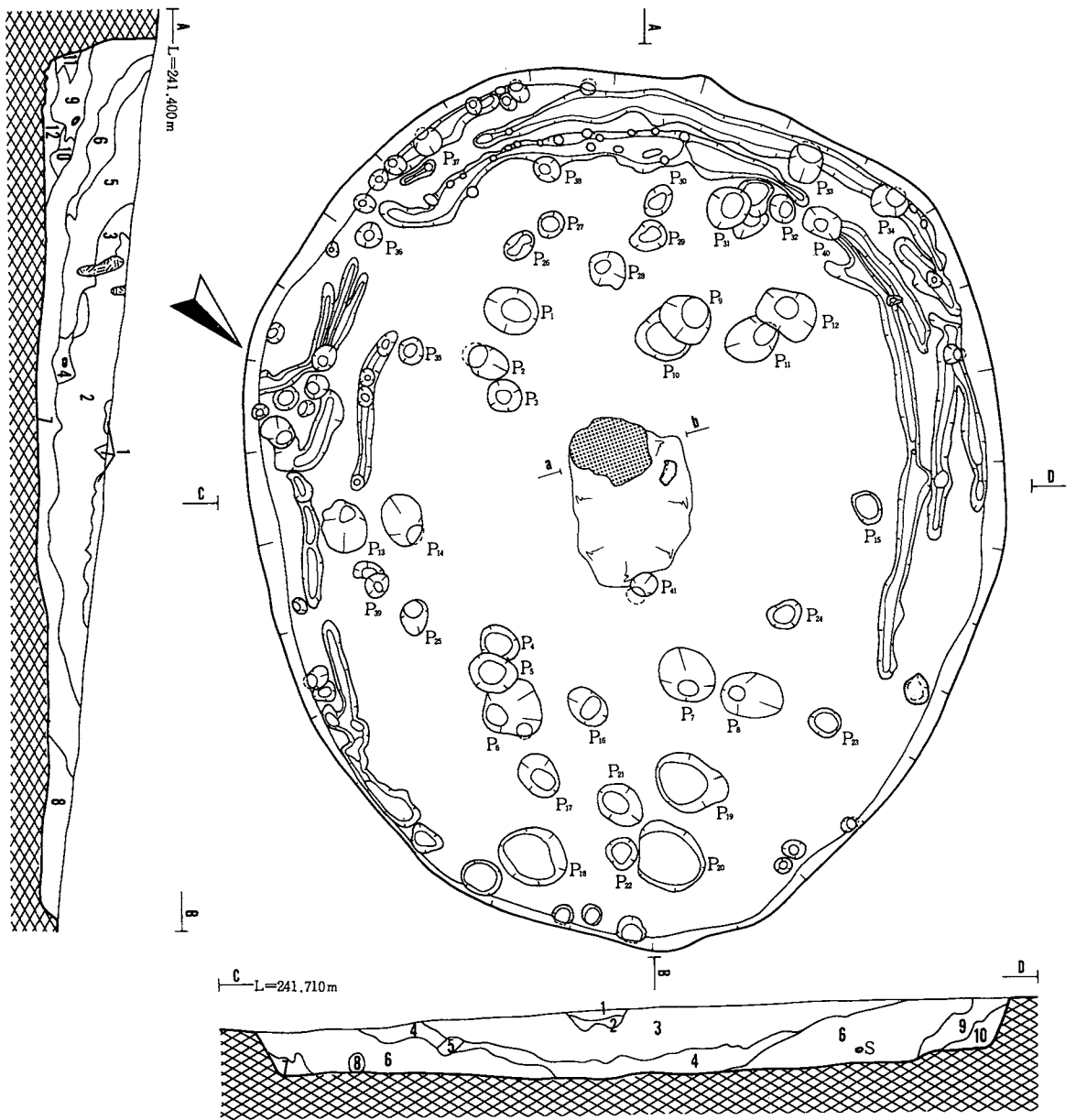
II F-4c 住居址

〈規模・平面形〉長軸5m、短軸4.4mの北東方向に長い卵形を呈する。

〈埋土〉自然埋没の様相を示し、3層に大別される。上位はパミスを含む黒色土、中下はパミス・炭化物を僅かに含む黒褐色土、下位はパミスを含む暗褐色土で構成される。

〈壁〉いくぶん外傾するが、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南西壁で65cm、南東壁26cm、北東壁12cm、北西壁30cmである。

〈床面〉中央部分が緩く窪むが、全体としては平坦で硬くしまっている。先行する住居址の

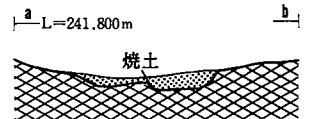
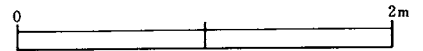


A-B

層位	色調	土性
1	10YR $\frac{5}{4}$ 黒褐色土	含バミス(1%)。
2	10YR $\frac{5}{4}$ 黒色土	含バミス(3%)。
3	10YR $\frac{5}{4}$ 黒色土	含バミス(3%)。
4	10YR $\frac{5}{4}$ 黒色土	含バミス(3%)・炭化物(少量)。
5	7.5YR $\frac{5}{4}$ 極暗褐色土	含バミス(4%)・炭化物(少量)。
6	10YR $\frac{5}{4}$ 暗褐色土	含バミス(3%)。
7	10YR $\frac{5}{4}$ 黒褐色土	含バミス(少量)。
8	10YR $\frac{5}{4}$ 褐色土	含バミス(1%)。
9	10YR $\frac{5}{4}$ 暗褐色土	含バミス(3%)。
10	10YR $\frac{5}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)。
11	7.5YR $\frac{5}{4}$ 明褐色土	
12	10YR $\frac{5}{4}$ 褐色土	

C-D

層位	色調	土性
1	10YR $\frac{5}{4}$ 褐色土	
2	10YR $\frac{5}{4}$ 黒色土	
3	10YR $\frac{5}{4}$ 黒色土	含バミス(3%)。
4	10YR $\frac{5}{4}$ 黒褐色土	含バミス(4%)・炭化物(少量)。
5	7.5YR $\frac{5}{4}$ 褐色土	含バミス(1%)。
6	7.5YR $\frac{5}{4}$ 極暗褐色土	含バミス(4%)。
7	7.5YR $\frac{5}{4}$ 褐色土	含バミス(1%)。
8	7.5YR $\frac{5}{4}$ 明褐色土	含バミス(3%)。
9	10YR $\frac{5}{4}$ 暗褐色土	含バミス(4%)。
10	10YR $\frac{5}{4}$ 褐色土	含バミス(少量)。



第16図 II F-4住居址

P ₃₀	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	
径 (cm)	31 26	25 23	21 19	24 18	29 22	35 35	35 30	36 26	32 25	30 27	30 28	34 26	31 26	30 23	20 15	26 18	27 21	41 34	45 32	40 36	
深 (cm)	54	67	12	10	59	40	52	53	41	9	48	45	9	7	4	20	45	16	34	19	
P ₃₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀	P ₄₁
径 (cm)	30 23	19 18	19 16	20 16	21 16	20 14	17 15	23 22	22 18	20 15	26 23	17 15	23 20	21 20	16 15	15 14	16 14	16 15	15 13	23 21	16 15
深 (cm)	26	12	17	12	18	24	33	27	5	6	14	21	18	15	8	23	19	11	16	25	30

壁溝や柱穴状ピットの上に褐色土によって薄く貼り床が施されている部分もある。

〈柱穴〉

主柱穴の配置は、P₁・P₅・P₈・P₁₁の4本で長方形を呈するものと考えられる。また壁に沿って小ピットが巡り、壁柱穴を構成している。

〈炉〉住居址のほぼ中央に地床炉を1基もつ。焼土の発達が悪く、45×40cmの範囲に最大8cmの厚さに淡い焼土が形成されている。この周辺部は、110×80cmの範囲に不整形に緩く窪み、一面に細かい焼土や炭化物が分布している。先行するa・b住居址の炉跡も当所に施設されていたものと考えられる。

遺物 (第50～53図・写真図版52～55)

床面・柱穴・埋土から土器と石器及び石製品が出土した。

〈土器〉土器は全て縄文時代前期のもので、いずれも胎土には植物繊維を含む。第50図11・12は埋土から出土した円筒深鉢形土器である。11は体部が外傾して立ち上がり、口縁部は緩く外反する。地文は多軸絡条体の縦方向への回転で、口唇部にも施されている。内面は磨かれているが、丁寧なものではない。12は体部のみが残存する。地文は結束された羽状縄文で、内面には化粧粘土が貼られ丹念に磨かれている。

13は柱穴P₆の埋土から出土した口縁部片で、緩やかに外反する。頸部に3本の原体圧痕文が巡り、体部と口縁部を区画している。地文はいずれも結束された羽状縄文である。14・15は同一個体である。体部は直立し、口縁部は僅かに外反する。頸部には2本の絡条体圧痕文が巡り、体部と口縁部を区画する。地文は結束羽状縄文である。15は地文に0段多条RL単節斜縄文をもつ縁部片である。17も同様の地文をもつ。18は緩く外傾する口縁部片である。口縁部にはLRの原体圧痕文、体部には多軸絡条体の回転文が施文されている。また口唇部には口縁部に施された原体の回転文が施文されている。19～21は体部片である。19は頸部に3本の原体圧痕文が巡る。いずれも地文は結束された羽状縄文である。第57図1～3は同一個体である。3は底部片で、体部は外傾して立ち上がる。地文は多軸絡条体回転文で、第50図18と同一個体であるとも考えられる。4・5は同一個体で、地文には横走する不整綾絡文が施文される。これらの土器は、前述した土器に比較して胎土に含まれる植物繊維の割合は少ない。

〈石器〉第51図6は縦型の石匙である。ツマミに連続する一側辺に急角度の刃部加工が施されている。7は縦長剥片の片側に刃部をもつ直刃の削器である。8は側縁及び尖頭部に両面からの調整が施されている。削器類と考えられる。9は緩く内湾する側縁に刃部をもち、凹刃の削器と考えられる。10は3辺に連続した細部調整が加えられ剥片で、これも削器類であろう。11は屈曲部と内湾部に刃部をもつ抉入石器である。細部調整は刃部の周辺にまで連続して施されている。12は先端部に極めて急角度な刃部が形成されている搔器である。基部は両側から大きな剝離によって加工されるが、裏面は第一次剝離面を多く残す。13~15は鋭利な縁辺部に、使用に伴って生じたと考えられる微細な剝離がみられる剥片である。

第52図4~9は半円状扁平打製石器である。5を除いて、いずれも欠損している。4は節理による扁平な素材を利用している。5は表面に擦痕がみられ、粗製の石皿か砥石類を再利用したものと考えられる。6は半円形に近い素材を利用し、周辺部を粗く打ち欠いて作成されている。7~9は、両面からの割合丁寧な剝離調整で整形されている。これらの石器は、いずれも直線的な側縁部には磨滅痕を有する。

第53図1は柱穴P₇から出土したもので、断面が三角形を呈し、このうちの一面に顕著な磨滅痕がみられる。砥石の類ではないかと考えられる。2は床面から出土した粗製の石皿で、表面に使用痕をもつ。

〈石製品〉埋土から3個出土した。いずれも軽石製である。第52図1・2は先の丸い円筒形を呈し、下端部は水平に研磨されている。1は頂部に1本の刻線を有する。3は2面に研磨痕をもつ。

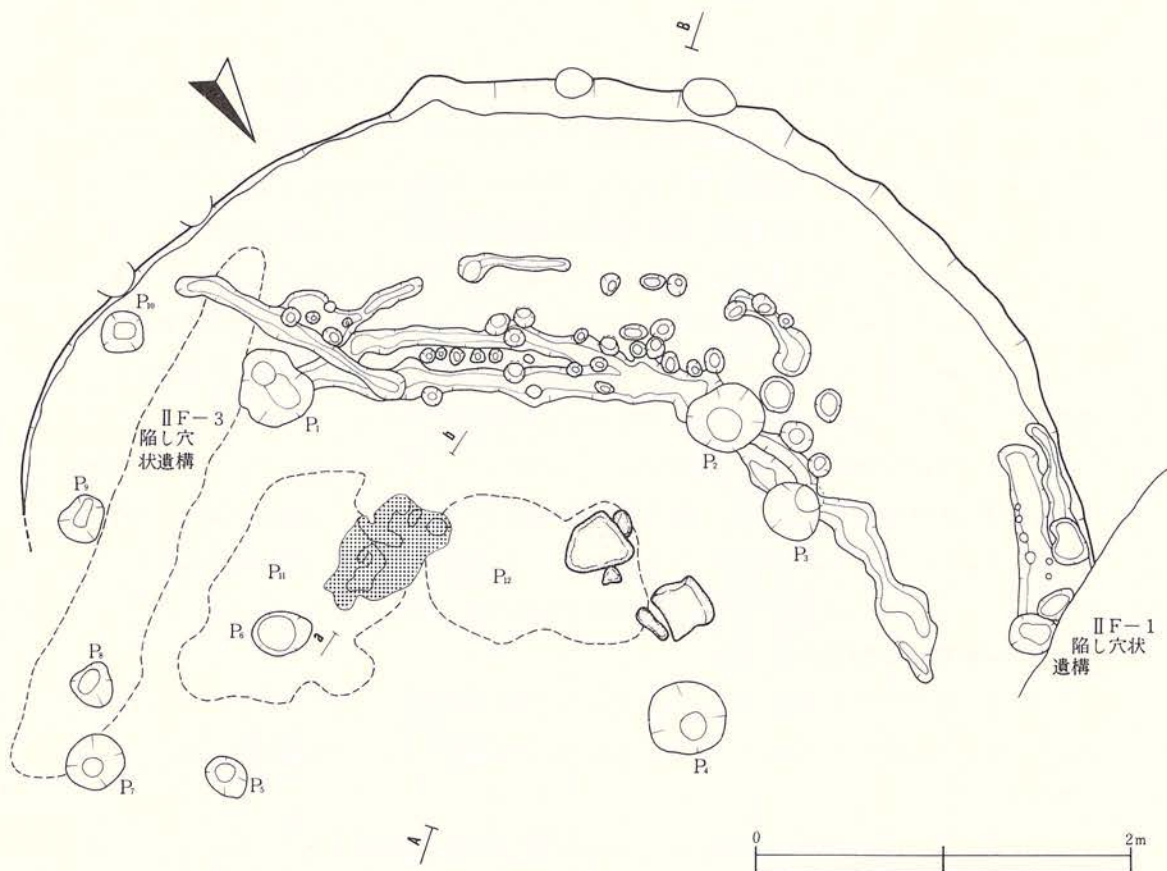
時期 出土した土器から推定して、縄文時代前期中葉期~後葉期の住居址と考えられる。

II F-5 住居址

遺構 (第17・18図・写真図版13・14)

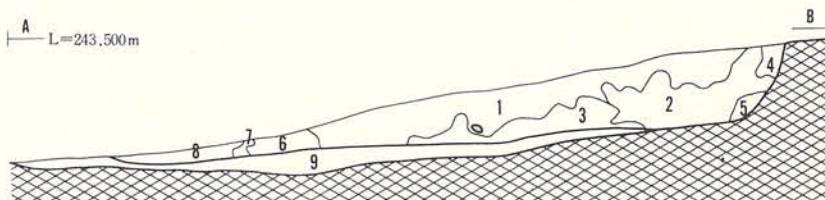
〈検出状況・重複関係〉基本層序第V層面で、パミスを含む黒色土の広がりとして検出された。南側をII F-2住居址に切られ、南東壁際でII F-2陥し穴状遺構、北東壁部分でII F-1陥し穴状遺構を切っている。また、斜面下位にあたる北東半分は流失している。

住居址中央部に径3.3mの半円形に広がる貼り床が施され、この下位から複数の壁溝とこれに沿った小ピット群、扁平な礫と2個の小礫から成る配石及び不整形ピット2基が検出された。壁溝の在り方から3~4回の建て替えが窺われる。埋土の堆積状況から、最終形は拡張された住居址であると認められるが、内側の遺構については、縮少・拡張を判断できる材料はない。ここでは、内側のものからa~d住居址として記述する。しかし、a~c住居址については、柱穴の配置や炉の位置などは不明であり、残存する壁溝や小ピット群の配置から推定される規模・

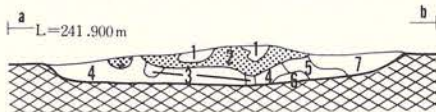


(cm)

PNo.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径	43	41	32	42	25	32	30	23	25	23	
深	35	37	30	41	20	24	29	22	23	23	
深	48	77	82	50	19	30	30	56	39	20	

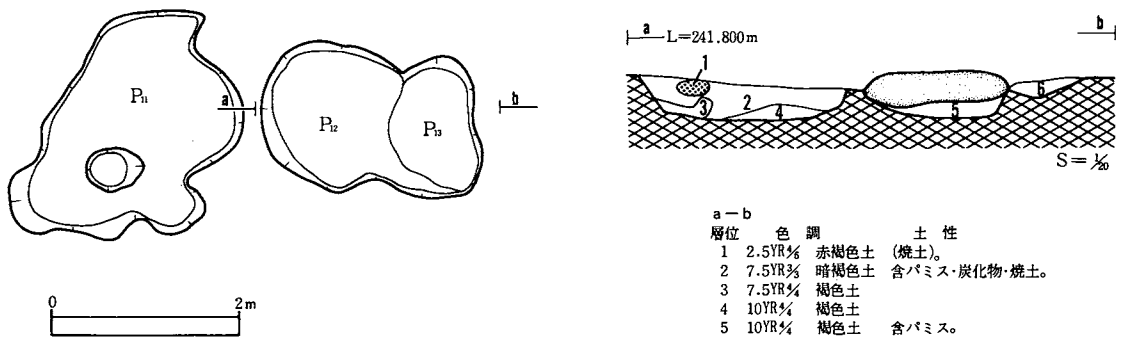


層位	色調	土性	層位	色調	土性
1	10YR ^{7.5} 黒色土	含バミス(5%)。	6	7.5YR ^{7.5} 黒褐色土	含バミス(3%)。
2	10YR ^{7.5} 暗褐色土	含バミス(5%)。	7	7.5YR ^{7.5} 褐色土	含バミス(3%)。
3	10YR ^{7.5} 褐色土	含バミス(3%)。	8	10YR ^{7.5} 黒褐色土	含バミス(2%)。
4	10YR ^{7.5} 黒色土		9	10YR ^{7.5} 暗褐色土	含バミス・炭化物(少量)。
5	7.5YR ^{7.5} 褐色土	含バミス(5%)。			



層位	色調	土性
1	7.5YR ^{7.5} 暗褐色土	含焼土粒。
2	5YR ^{7.5} 明赤褐色土(焼土)。	
3	5YR ^{7.5} 暗赤褐色土(汚れた焼土)。	
4	7.5YR ^{7.5} 暗褐色土	含バミス(2%)。
5	7.5YR ^{7.5} 黒色土	含バミス(1%)。
6	7.5YR ^{7.5} 明褐色土	含バミス(3%)。
7	7.5YR ^{7.5} 褐色土	含バミス(3%)。

第17図 II F-5住居址(1)



第18図 II F-5住居址(2)

形状について記すこととする。また、配石と不整形ピット (P₁₁・P₁₂) についてはどの住居址に伴う施設であるかは不明であり、別に記述する。

II F-5a 住居址

〈規模〉径4.6m 前後の円形、または南東-北西にやや長い楕円形を呈するものと考えられる。

II F-5b 住居址

〈規模〉径5 m 前後の円形、または南東-北西にやや長い楕円形を呈し、II F-5a 住居址よりいくぶん北寄りに位置していたものと考えられる。

II F-5c 住居址

〈規模〉径4.4m の円形を呈し、II F-5a・b 住居址よりやや北西寄りに位置していたものと考えられる。

不整形ピット (P₁₁・P₁₂)

P₁₁は住居址中央部の南東寄りに検出された。135×90cm、深さ15cmの不整形を呈する。埋土はバミス・炭化物を僅かに含む黒色土で構成されている。底面は平坦であるが、硬くしまるものではない。II F-5c 住居址の主柱穴を構成していると思われる P₅に切られる。性格は不明である。

P₁₂は住居址のほぼ中央部に検出された。80×75cm、深さ10cmの不整な楕円形を呈する。埋土は焼土ブロック、炭化物を含む暗褐色～褐色土で構成されている。北西側で配石と接するが、配石に判うピット (P₁₃) との新旧関係は不明である。性格についての詳細は不明であるが、住居址の中央部に位置することや埋土に焼土・炭化物の分布がみられることから、a～c 住居址の炉跡の可能性はある。

配石

39×36cmの扁平な礫1個と2個の小礫から成る。扁平な礫の片面に使用面をもつ粗製の石皿で、下位に検出された75×50cm、深さ8cmの不整楕円形ピットに厚さ半分ほど(4～5cm)埋め込まれている。

II F-5d 住居址

〈規模・平面〉 残存する壁の輪郭線から推定して、径6.8m 前後の円形、または南東―北西にやや長い楕円形を呈していたと考えられる。

〈埋土〉 2層に大別される。上位はパミスを含む黒色土、下位はパミスを含む暗褐色～褐色上で構成されている。貼り床はパミス・炭化物を僅かに含む暗褐色土である。

〈壁〉 いずれもやや外傾して立ち上がる。壁高は南西壁48cm、西壁34cm、上部をII F-3住居址に切られる北壁で8cmである。

〈床面〉 中央部がやや窪んでいるが、全体に平坦である。壁際は硬くしまっているが、貼り床部分ではあまりしまりは無い。

〈柱穴〉 P_1 ～ P_{10} の10個が検出されている。このうち P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 ・ P_5 ・ P_6 が支柱穴を構成するものと考えられる。配置については P_1 ― P_2 ・ P_3 ― P_4 ― P_5 ・ P_6 の南東―北西方向の長方形が考えられる。

〈炉〉 床面中央部やや南東寄りの貼り床上から地床炉が1基検出された。焼土は65×45cmの不整形に広がり、厚さは最大8cmである。

遺物 (第53・54図・写真図版55・56)

土器と石器が出土している。第53図3～5はc住居址の床面、第53図7・8、第54図6はd住居址の床面及び埋土下位からの出土である。これらの他の遺物はd住居址の貼り床内からの出土である。

〈土器〉 第53図3の1点だけである。小型の深鉢形土器で口縁部は欠損する。底部は台状の張り出しをもち、体部は緩く外傾して立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。内部は尖底となっているため、底部の器厚は非常に厚い。頸部には5本の捺糸圧痕文が巡り、体部にはR1段による木目状捺糸文が施されている。

〈石器〉 第53図4～8は剥片石器である。4は緩く湾曲する1側縁に刃部加工が施された凸刃の削器である。表裏には第1次剥離面を大きく残す。5・6は搔器である。5は基部から刃部に向けて大きく開く。刃部は半円形を呈し、槌状剥離が連続して施されている。石篋と呼ばれる類かも知れない。6は刃部加工が側辺にも及び、削器との複合石器と考えられる。7・8は使用痕を有する剥片である。

第54図1・2は半円状扁平打製石器である。どちらも両面からの剥離調整を受け、直線的な側表裏両面に使用痕をもつ。5・6は扁平な自然礫を利用した粗製の石皿である。5は片面、6は表裏両面に使用痕をもつ。

時期 出土した土器から縄文時代前期末葉の住居址と考えられる。

(2) ピット

II F-2 ピット (第19図・写真図版15)

〈検出状況・重複関係〉II F-2 住居址の精査時に検出されたもので、住居址の西壁及び床面を切っている。精査の際、住居址と埋土との区別がつきにくく、壁及び上部のプランは把握できなかつた。東側で隣接するII F-3 ピットに切られる。

〈規模・形態〉底部径55×60cm、深さ67cmの不整な円形を呈する。壁は底面から外傾して立ち上がり、断面形はフラスコ形を呈する。底面は平坦であるが、硬くしまるものではない。

〈埋土〉暗褐色～黒褐色の汚れた火山灰で構成されている。

II F-3 ピット (第19図・写真図版15)

〈検出状況・重複関係〉II F-2 住居址の精査時に検出されたもので、住居址の西壁及び床面を切っている。住居址の埋土との区別がつかず、床面から下位の部分しか検出できなかつた。東側でII F-2 ピット、西側でII F-4 ピットを切っている。

〈規模・形態〉底部径95×100cm、深さ22cmの円形を呈する。壁は底面から外傾して立ち上がり、断面形はフラスコ形を呈する。底面は平坦であるが、硬くしまるものではない。

〈埋土〉黒褐色～褐色の汚れた火山灰を主体として構成されている。

II F-4 ピット (第19図・写真図版15)

〈検出状況・重複関係〉II F-2 住居址の精査時に検出され、住居址の床面を切っている。住居址の埋土と区別がつかず、床面から下位の部分しか検出できなかつた。なお、西側で重複するII F-3 ピットには切られている。

〈規模・形態〉底部径80×82cm、深さ22cmの円形を呈する。壁は底面から外傾して立ち上がり、断面形はフラスコ形を呈する。底面はII F-3 ピットと同一の高さとなり、平坦であるが、硬くしまるものではない。

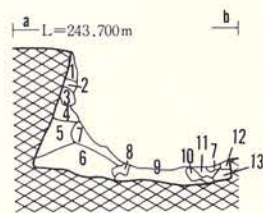
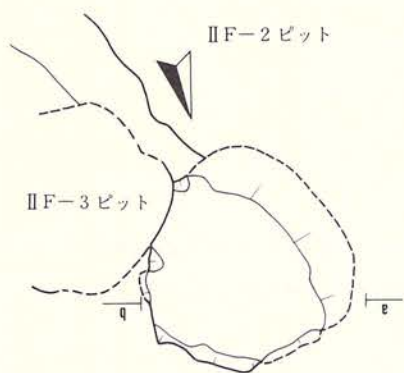
〈埋土〉パミスを含む黒褐色～暗褐色土で構成されている。

III E-1 ピット (第19図・写真図版15)

〈検出状況〉第VI層面で褐色土に囲まれた黒色土の広がりとして検出された。

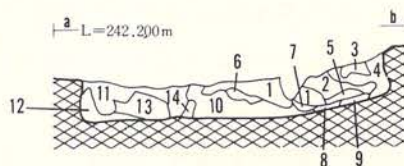
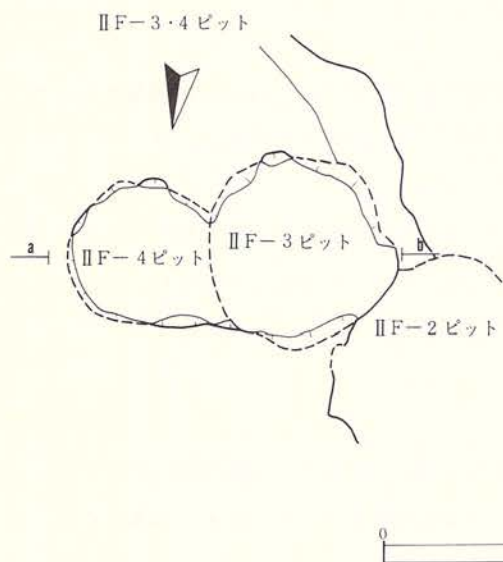
〈規模・形態〉開口部径2.1×2 m、底部径1.7×1.7m、深さ45cmの円形を呈する。壁はいずれも緩く内湾して立ち上がるが、オーバーハングはしない。底面は平坦で、やや硬い。

〈埋土〉3層に大別される。上位はパミスを含む黒色土、中位は人為的に投棄されたものと



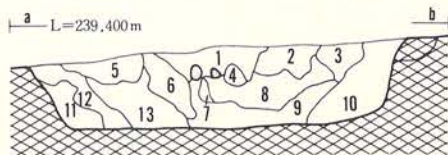
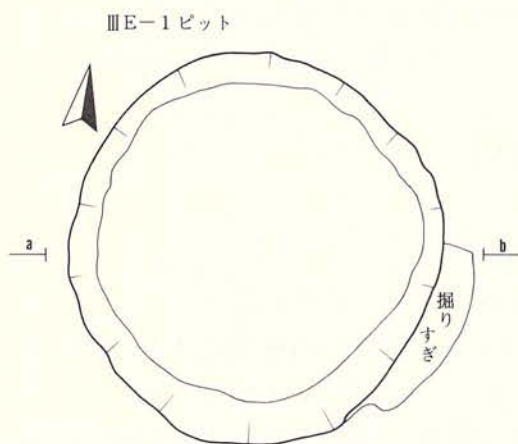
a-b

層位	色調	土性
1	10YR _{3/2} 暗褐色土	含バミス(少量)。
2	7.5YR _{3/2} 明褐色土	
3	7.5YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
4	7.5YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)含バミス(1%)。
5	10YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)含バミス(1%)。
6	7.5YR _{3/2} 明褐色土	
7	7.5YR _{3/2} 黒色土	含バミス(3%)。
8	7.5YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)含バミス(1%)。
9	10YR _{3/2} 黒褐色土	
10	10YR _{3/2} 鈍・黄褐色土	
11	7.5YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(3%)。
12	7.5YR _{3/2} 明褐色土	
13	10YR _{3/2} 暗褐色土	含バミス(1%)。



a-b

層位	色調	土性
1	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(少量)。
2	7.5YR _{3/2} 暗褐色土	(汚れた火山灰)。
3	7.5YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
4	7.5YR _{3/2} 極暗褐色土	(汚れた火山灰)。
5	10YR _{3/2} 黒褐色土	
6	10YR _{3/2} 灰黄褐色土	
7	10YR _{3/2} 褐色土	
8	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(少量)。
9	7.5YR _{3/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
10	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(少量)。
11	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(少量)。
12	10YR _{3/2} 暗褐色土	(汚れた火山灰)。
13	10YR _{3/2} 暗褐色土	含バミス(少量)。
14	10YR _{3/2} 明黄褐色土	



a-b

層位	色調	土性
1	10YR _{3/2} 黒色土	含バミス(7%)。
2	10YR _{3/2} 褐色土	含バミス(5%)。
3	10YR _{3/2} 暗褐色土	含バミス(7%)。
4	10YR _{3/2} 褐色土	含バミス(3%)。
5	10YR _{3/2} 黄褐色土	
6	10YR _{3/2} 褐色土	含バミス(少量)。
7	10YR _{3/2} 暗褐色土	含バミス(1%)。
8	10YR _{3/2} 褐色土	含バミス(少量)。
9	10YR _{3/2} 暗褐色土	含バミス(5%)。
10	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(5%)。
11	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(3%)。
12	10YR _{3/2} 暗褐色土	含バミス(少量)。
13	10YR _{3/2} 黒褐色土	含バミス(5%)。

第19図 II F-2・3・4、III E-1ピット

考えられる汚れの少ない火山灰、下位はパミスを含む黒褐色～暗褐色土で構成されている。

III E-2 ピット (第20図・写真図版16)

〈検出状況・重複関係〉 VI層面で黒色土の広がりとして検出された。III E-1 柱穴群の下位にあたり、柱穴状ピットに東壁を切られている。

〈規模・形態〉 開口部径87×98cm、底部径75×83cm、深さ13cmの不整な円形を呈す。壁は僅かに外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦であるが、硬くはない。

〈埋土〉 上位は炭化物を含む黒色土、下位はパミスを含む黒褐色土で構成されている。

遺物 底面から土器が出土した。(第55図1・写真図版57) 粗製の深鉢形土器で、体部上半を欠く。底部は上げ底ぎみで、体部は外傾して立ち上がる。地文はL1段の無節縄文で、体部下端は粗く磨かれ無文帯となっている。底面には網代痕をもつ。縄文時代後期の土器と考えられるが、詳細は不明である。

IV E-1 ピット (第20図・写真図版16)

〈検出状況〉 第VI層面で周囲に黄褐色土を伴う黒色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径102×96cm、底部径105×96cm、深さ68cmの不整円形を呈する。壁は底面から内傾して立ち上がった後、中央部から外反して開き、断面形はフラスコ形を呈する。底面は平坦であるが、硬くしまるものではない。

〈埋土〉 3層に大別される。上位はパミスを含む黒色土、中位は人為的堆積と考えられる汚れの少ない火山灰及び異地性焼土、下位は壁の崩壊土を含む褐色～暗褐色土で構成される。

IV E-2 ピット (第20図・写真図版16)

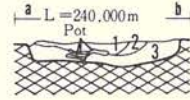
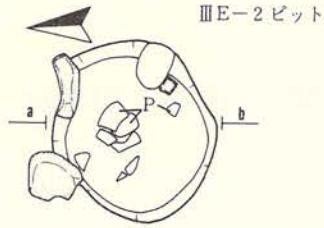
〈検出状況〉 V層面で黒色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径1.45×1.25m、底部径1.62×1.6mの不整円形を呈する。深さは最深部で76cmである。壁は底面から緩く内傾して立ち上がり、断面形はフラスコ形を呈する。底面は平坦であるが、硬くしまるものではない。

〈埋土〉 自然堆積の様相を示し、3層に大別される。上位は黒色土、中位は炭化物を僅かに含む黒色～黒褐色土、下位は壁の崩落土を含む黒色～黒褐色土で構成されている。

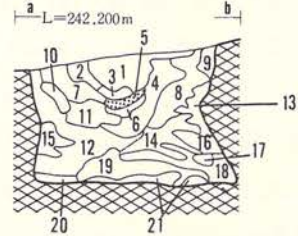
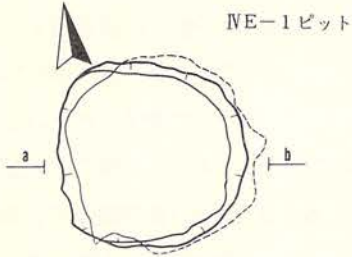
IV F-1 ピット (第20図・写真図版17)

〈検出状況・重複関係〉 第VI層面でパミスを含む黒褐色土の広がりとして検出された。なお、南壁部で、平安時代のV F-1住居址に切られている。



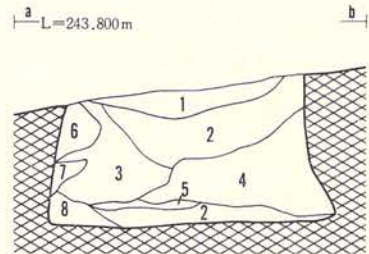
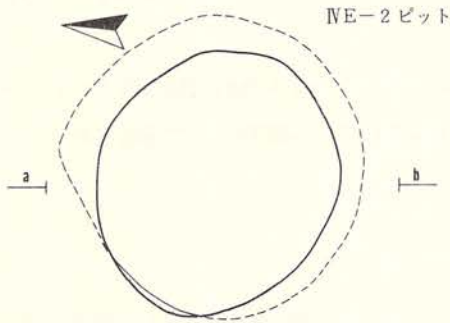
a-b

層位	色調	土性
1	10YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	含炭化物(3%)・バミス(少量)。
2	10YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(3%)。



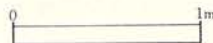
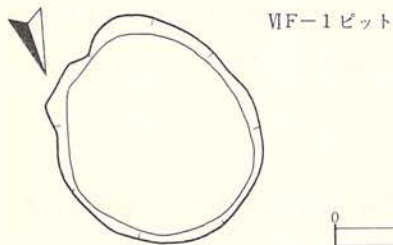
a-b

層位	色調	土性	層位	色調	土性
1	10YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	含バミス(3%)。	12	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	含バミス(少量)。
2	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	含バミス(少量)。	13	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)・含バミス(3%)
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	含焼土粒。	14	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	
4	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	含バミス・炭化物(少量)。	15	7.5YR $\frac{3}{4}$ 明褐色土	含バミス(7%)。
5	5YR $\frac{3}{4}$ 明赤褐色土	(焼土)。	16	7.5YR $\frac{3}{4}$ 明褐色土	
6	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含焼土粒。	17	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	
7	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	含バミス(少量)。	18	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)。
8	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(5%)。	19	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(5%)。
9	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	含バミス(5%)。	20	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)。
10	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	含バミス(少量)。	21	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)。
11	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)・含バミス(3%)。			



a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	
2	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含炭化物(少量)。
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	含炭化物(少量)。
4	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	含炭化物(5%)。
5	7.5YR $\frac{3}{4}$ 極暗褐色土	含炭化物・焼土粒。
6	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	(汚れた火山灰)。
7	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
8	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)。



第20図 III E-2、IV E-1・2、VI F-1 ピット

〈規模・形態〉 開口部径1.3×1.1m、底部径110×96cmの不整円形を呈する。深さは最深部で7.5cmである。壁は底面から緩く外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦であるが、硬くしまるものではない。

〈埋土〉 パミスを含む黒褐色土の単層であったため、土層断面の実測は省略した。

(3) 陥し穴状遺構

II F-1 陥し穴状遺構 (第21図・写真図版17)

〈検出状況・重複関係〉 第VI層面で検出された。南東側の一部をII F-5住居址が切る。

〈規模〉 開口部301×82cm、底部305×15cm、深さ118cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる北東端部はオーバーハングする。

〈埋土〉 上位はパミスを含む黒褐色土、中位は汚れた火山灰主体の褐色土、下位は黒色～黒褐色土で構成されている。

〈長軸方向〉 N-65°-Eを示し、斜面に対して平行となる。

II F-2 陥し穴状遺構 (第21図・写真図版17)

〈検出状況・重複関係〉 先行するII F-5住居址の床面から検出された。

〈規模〉 開口部305×41cm、底部331×17cm、深さ102cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、長軸側の両端はオーバーハングする。

〈埋土〉 上位はパミスを含む黒色～黒褐色土、下位は暗褐色～褐色土の葉理層である

〈長軸方向〉 N-53°-Eを示し、斜面に対して平行となる。

遺物 埋土の中位から、扁平な自然石を利用した粗製の石皿が出土した。(第55図・写真図版57) 片面に顕著な使用痕がみられる。

II F-3 陥し穴状遺構 (第21図・写真図版18)

〈検出状況・重複関係〉 先行するII F-2 b住居址の床面から検出された。遺構の中央部は、住居址の地床炉となっている。

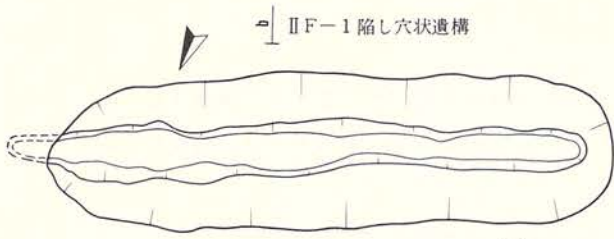
〈規模〉 開口部308×38cm、底部332×24cm、深さ105cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、長軸側の両端はオーバーハングする。

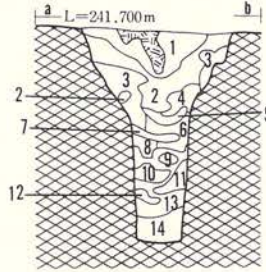
〈埋土〉 上位はパミスを含む黒褐色～暗褐色土、中位～下位は汚れた火山灰主体の褐色土。

〈長軸方向〉 N-56°-Eを示し、斜面に対して平行となる。

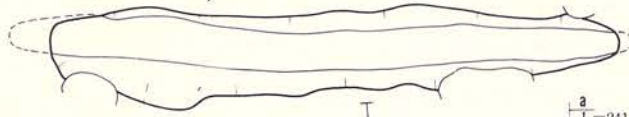
遺物 埋土から縄文土器片と石器が出土した。(第55図3～5・写真図版57) 3は埋土の下位



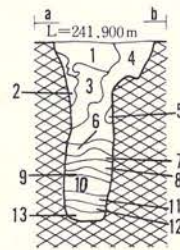
II F-1 陥し穴状遺構



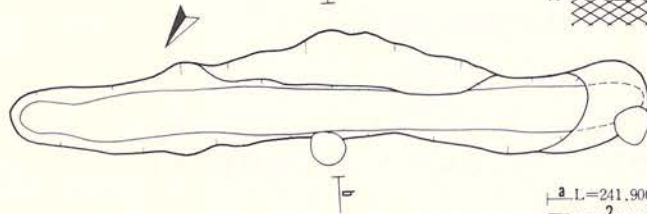
層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(30%)
2	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(20%)
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	
4	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
5	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
6	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	
7	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
8	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)
9	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
10	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
11	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)
12	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)
13	10YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	
14	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	



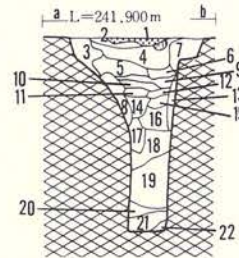
II F-2 陥し穴状遺構



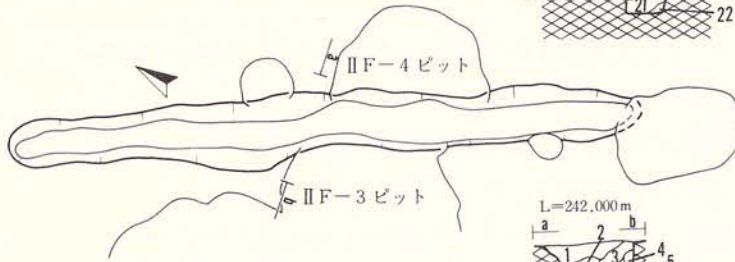
層位	色調	土性
1	10YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	含バミス(4%)
2	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)
3	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(4%)・炭化物(少量)
4	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	含バミス(6%)
5	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	
6	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	
7	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れの少ない火山灰)
8	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(4%)
9	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色土	含バミス(4%)
10	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	含バミス(2%)
11	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れの少ない火山灰)
12	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)
13	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	



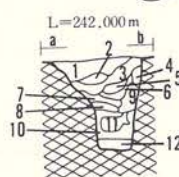
II F-3 陥し穴状遺構



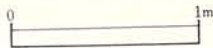
層位	色調	土性
1	2.5YR $\frac{3}{4}$ 赤褐色土	(II F-4住居焼土)
2	5YR $\frac{3}{4}$ 暗赤褐色土	(くすんだ焼土)
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(少量)
4	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
5	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	含バミス(少量)(ひどく汚れた火山灰)
6	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(ひどく汚れた火山灰)
7	7.5YR $\frac{3}{4}$ 明褐色土	(汚れの少ない火山灰)
8	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)
9	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
10	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
11	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	
12	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	
13	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)
14	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(ひどく汚れた火山灰)・含バミス(2%)
15	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れの少ない火山灰)
16	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	含バミス(4%)(ひどく汚れた火山灰)
17	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	含バミス(4%)(汚れた火山灰)
18	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(4%)
19	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	
20	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)
21	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)
22	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	



II F-4 陥し穴状遺構



層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(9%)
2	7.5YR $\frac{3}{4}$ 極暗褐色土	含バミス(9%)
3	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	含バミス(汚れた火山灰)
4	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色土	含バミス(6%)
5	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)
6	7.5YR $\frac{3}{4}$ 明褐色土	(汚れの少ない火山灰)
7	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)・含バミス(少量)
8	10YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)
9	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(ひどく汚れた火山灰)
10	10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土	(汚れの少ない火山灰)・含バミス(1%)
11	10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	含バミス(1%)
12	10YR $\frac{3}{4}$ ぶい黄褐色土	(汚れた火山灰)



第21図 II F-1・2・3・4 陥し穴状遺構

から出土した体部片で、胎土には植物繊維を含む。地文は R1段の撚糸文が縦走する。4は沈線で区画された細い縄文帯が巡り、他は磨消されている。5は磨石で、器表の3面に使用痕がみられる。

II F-4 陥し穴状遺構 (第21図・写真図版18)

〈検出状況・重複関係〉 先行する II F-2 住居址の床面から検出された。また、II F-3・4 ピットに切られる。

〈規模〉 開口部338×37cm、底部330×15cm、深さ51cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈する。

〈埋土〉 上位はパミスを含む黒褐色～暗褐色土、下位は汚れた火山灰主体の明褐色～褐色土。

〈長軸方向〉 N-31°-W を示し、斜面に対して直交する。

II F-5 陥し穴状遺構 (第22図・写真図版18)

〈検出状況〉 VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉 開口部278×56cm、底部287×20cm、深さ91cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉 上位はパミスを含む黒色～黒褐色土、中位は汚れた火山灰を主体とする褐色土、下位は暗褐色～黒褐色土で構成される。

〈長軸方向〉 N-27°-W を示し、斜面に対して直交する。

II F-6 陥し穴状遺構 (第22図・写真図版18)

〈検出状況〉 VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉 開口部253×51cm、底部281×23cm、深さ91cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉 上位はパミスを含む黒色～黒褐色土、中位は汚れた火山灰を主体とする黒褐色土、下位は暗褐色～黒褐色土で構成される。

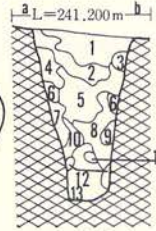
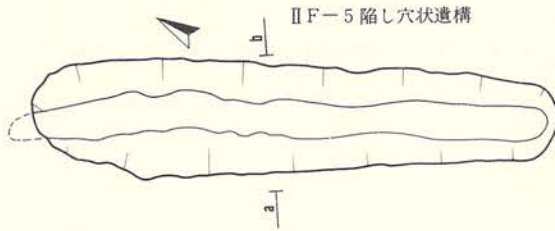
〈長軸方向〉 N-18°-W を示し、斜面に対して直交する。

II F-7 陥し穴状遺構 (第22図・写真図版19)

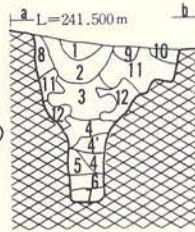
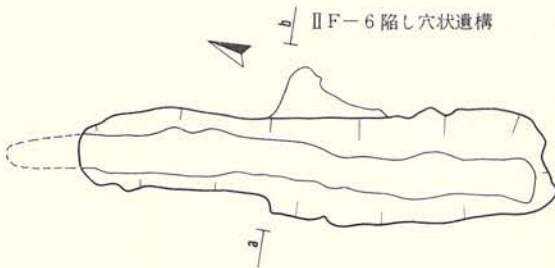
〈検出状況〉 VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉 開口部261×66cm、底部257×27cm、深さ103cmである。

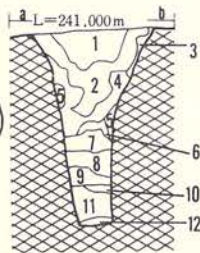
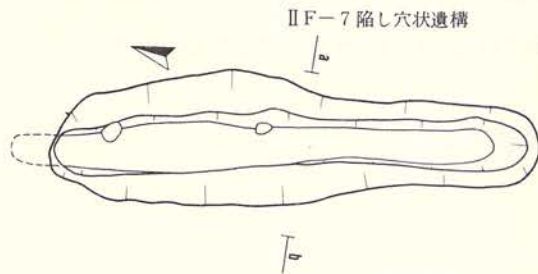
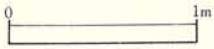
〈形態〉 細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。



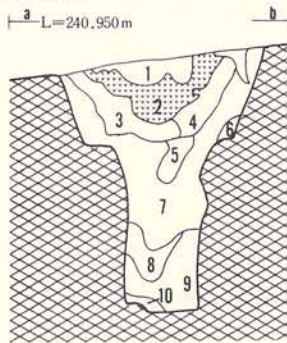
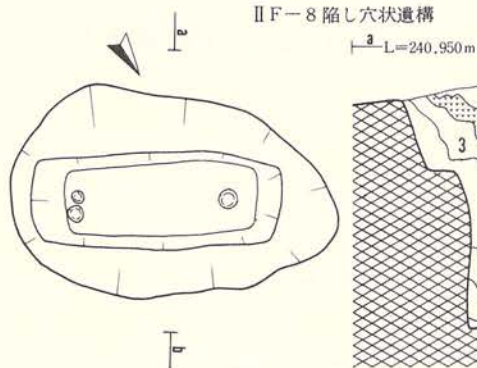
層位	色調	土性
1	10YR ^{2/2} 黒色土	含、黄褐色バミス(4%)。
2	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含、黄褐色バミス(4%)。
3	10YR ^{2/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
4	10YR ^{2/2} 褐色土	(汚れた火山灰)・含赤褐色バミス(2%)。
5	10YR ^{2/2} 暗褐色土	(ひどく汚れた火山灰)・含赤褐色バミス(1%)。
6	5YR ^{2/2} 赤褐色土	
7	10YR ^{2/2} 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)。
8	7.5YR ^{2/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
9	7.5YR ^{2/2} 明褐色土	(汚れの少ない火山灰)。
10	10YR ^{2/2} 褐色土	(汚れ火山灰)・含、赤褐色バミス(1%)。
11	10YR ^{2/2} 黄褐色土	
12	10YR ^{2/2} 黄褐色土	(汚れの少ない火山灰)。
13	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含、赤褐色バミス(3%)。



層位	色調	土性
1	10YR ^{2/2} 黒色土	含バミス(少量)。
2	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(10%)。
3	10YR ^{2/2} 黒褐色土	
4	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(少量)。
4'	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(少量)。
5	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(10%)。
6	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(10%)。
7	10YR ^{2/2} 黒褐色土	
8	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(10%)。
9	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(10%)。
10	10YR ^{2/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
11	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(少量)。
12	10YR ^{2/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。



層位	色調	土性
1	10YR ^{2/2} 黒色土	含バミス(3%)。
2	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(2%)。
3	10YR ^{2/2} 褐色土	含バミス(少量)。
4	7.5YR ^{2/2} 暗褐色土	含バミス(少量)。
5	10YR ^{2/2} 褐色土	
6	7.5YR ^{2/2} 暗褐色土	
7	7.5YR ^{2/2} 黒褐色土	
8	7.5YR ^{2/2} 褐色土	(汚れ火山灰)。
9	7.5YR ^{2/2} 褐色土	
10	7.5YR ^{2/2} 黒褐色土	
11	10YR ^{2/2} 鈍い黄橙色土	(汚れの少ない火山灰)。
12	10YR ^{2/2} 黒褐色土	



層位	色調	土性
1	10YR ^{2/2} 黒色土	
2	10YR ^{2/2} にぶい黄橙色土	(To-a)。
3	10YR ^{2/2} 黒褐色土	
4	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(1%)。
5	10YR ^{2/2} 黒褐色土	含バミス(少量)。
6	10YR ^{2/2} 黒褐色土	
7	10YR ^{2/2} 黒色土	含バミス(少量)。
8	10YR ^{2/2} 黒色土	
9	10YR ^{2/2} 黒褐色土	
10	10YR ^{2/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。

第22図 ⅡF-5・6・7・8 陥し穴状遺構

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色～黒褐色土、中位～下位は汚れた火山灰や汚れの少ない火山灰主体の褐色～明褐色土、最下位は黒褐色土で構成されている。

〈長軸方向〉N-18°-Wを示し、斜面に対して直交する。

II F- 8 陥し穴状遺構（第22図・写真図版19）

〈検出状況〉IV層面で、十和田 a 降下火山灰に囲まれた黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部176×106cm、底部102×40cm、深さ145cmである。

〈形態〉開口部では不整な楕円形、底部は隅丸の長方形を呈する。底部の南東隅に2個、北西側に1個の非常に浅い小ピットが検出された。

〈埋土〉上位は黒色土及び十和田 a 降下火山灰層、中位はパミスを含む黒色～黒褐色土、下位は黒色土・褐色土の葉理層が発達する。

〈長軸方向〉N-58°-Wを示し、斜面に対して斜交する。

遺物 埋土から縄文土器片が出土した。（第55図6・写真図版57）小破片のため詳細は不明である。地文はLR単節縄文である。

III D- 1 陥し穴状遺構（第23図・写真図版19）

〈検出状況〉VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部204×23cm、底部232×12cm、深さ57cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、長軸側の両端はオーバーハングする。

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色土、下位は暗褐色～褐色土で構成される。

〈長軸方向〉N-89°-Wを示し、斜面に対して斜交する。

III E- 1 陥し穴状遺構（第23図・写真図版19）

〈検出状況〉VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部163×33cm、底部176×20cm、深さ51cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

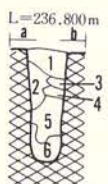
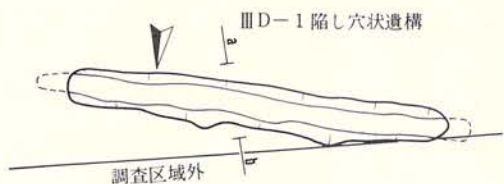
〈埋土〉上位はパミスを含む黒色～黒褐色土、下位は汚れた火山灰主体の褐色～暗褐色土。

〈長軸方向〉N-45°-Eを示し、斜面に対して直交する。

III E- 2 陥し穴状遺構（第23図・写真図版20）

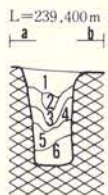
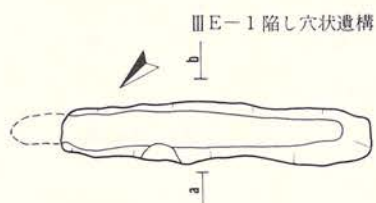
〈検出状況〉V層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部327×40cm、底部298×18cm、深さ70cmである。



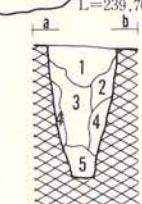
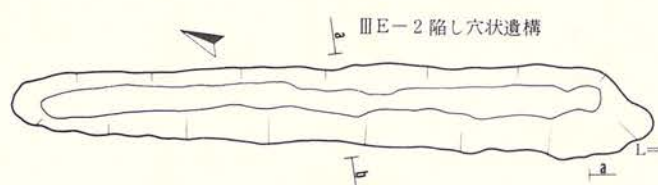
a-b

層位	色調	土性
1	10YR _{2/1} 黒色土	含バミス(4%)。
2	10YR _{2/2} 暗褐色土	含黄褐色バミス(2%)。
3	10YR _{2/3} 褐色土	汚れた火山灰。
4	10YR _{2/4} 黒褐色土	
5	7.5YR _{2/4} 暗褐色土	含、赤褐色バミス(少量)
6	7.5YR _{2/5} 褐色土	



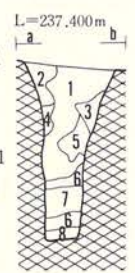
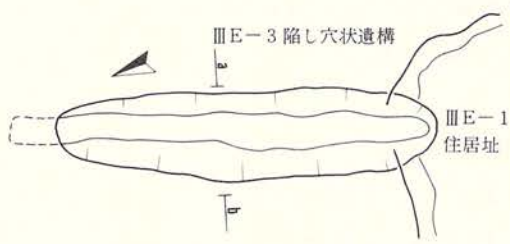
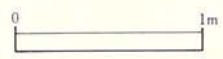
a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR _{2/1} 黒色土	含バミス(6%)。
2	7.5YR _{2/2} 黒褐色土	含バミス(3%)。
3	7.5YR _{2/3} 褐色土	含バミス(2%)・(汚れた火山灰)。
4	7.5YR _{2/4} 明褐色土	含バミス(少量)・(汚れた火山灰)。
5	7.5YR _{2/5} 黒褐色土	含バミス(1%)。
6	7.5YR _{2/6} 暗褐色土	(ひどく汚れた火山灰)。



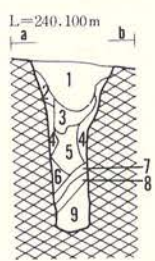
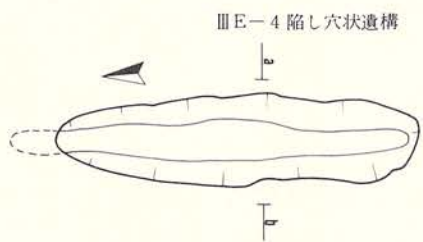
a-b

層位	色調	土性
1	10YR _{2/1} 黒色土	含バミス(4%)。
2	10YR _{2/2} 黒褐色土	含バミス(1%)。
3	10YR _{2/3} 黒褐色土	含バミス(少量)。
4	10YR _{2/4} 褐色土	
5	10YR _{2/5} 黒褐色土	含バミス(少量)。



a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR _{2/1} 黒色土	含バミス(10%)。
2	7.5YR _{2/2} 黒色土	
3	7.5YR _{2/3} 黒褐色土	含バミス(20%)。
4	7.5YR _{2/4} 褐色土	(汚れた火山灰)。
5	7.5YR _{2/5} 暗褐色土	(汚れた火山灰)。
6	7.5YR _{2/6} 褐色土	
7	7.5YR _{2/7} 黒褐色土	
8	7.5YR _{2/8} 黒褐色土	



a-b

層位	色調	土性
1	10YR _{2/1} 黒色土	含、黄褐色バミス(4%)。
2	10YR _{2/2} 黒褐色土	〃(4%)。
3	10YR _{2/3} 黒色土	〃(6%)。
4	10YR _{2/4} 暗褐色土	含、赤褐色バミス(4%)。
5	10YR _{2/5} 黒色土	含、赤褐色バミス(3%)・黄褐色バミス(3%)。
6	10YR _{2/6} 黒褐色土	〃
7	10YR _{2/7} 褐色土	含、赤褐色バミス(6%)。
8	10YR _{2/8} 黒褐色土	〃
9	10YR _{2/9} 暗褐色土	(ひどく汚れた火山灰 laima)。

第23図 III D-1、III E-1・2・3・4 陥し穴状遺構

〈形態〉細長い溝状を呈する。

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色～黒褐色土、中位～下位は黒褐色～褐色土で構成される。

〈長軸方向〉N-22°-Wを示し、斜面に対して平行となる。

III E-3 陥し穴状遺構（第23図・写真図版20）

〈検出状況・重複関係〉IV層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。南端を平安時代のIII E-1 住居址に切られている。

〈規模〉開口部203×47cm、底部227×20cm、深さ99cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉上位～中位はパミスを含む黒色土、下位は黒褐色～褐色土で構成されている。

〈長軸方向〉N-22°-Eを示し、斜面に対して斜交する。

遺物 埋土から磨石が出土した。（第55図7・写真図版57）表裏両面に使用痕をもつ。

III E-4 陥し穴状遺構（第23図・写真図版20）

〈検出状況〉IV層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部193×42cm、底部213×23cm、深さ96cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色土、中位～下位は黒褐色～褐色土で構成される。

〈長軸方向〉N-8°-Eを示し、斜面に対して斜交する。

III E-5 陥し穴状遺構（第24図・写真図版20）

〈検出状況〉VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部213×38cm、底部187×21cm、深さ58cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸方向の両端はオーバーハングする。

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色土、中位～下位は黒褐色～暗褐色土で構成される。

〈長軸方向〉N-87°-Wを示し、斜面に対して斜交する。

III E-6 陥し穴状遺構（第24図・写真図版21）

〈検出状況〉IV層面で黒色土に囲まれた暗褐色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部170×81cm、底部122×32cm、深さ93cmである。

〈形態〉開口部では不整な楕円形、底部は隅丸の不整長方形を呈する。

〈埋土〉上位が礫を含む褐色土、中位は黒色土、下位は黒褐色～褐色土で構成される。

〈長軸方向〉N-88°-Wを示し、斜面に対して斜交する。

III F-1 陥し穴状遺構 (第24図・写真図版21)

〈検出状況〉VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部237×44cm、底部217×22cm、深さ102cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色土、中位は汚れた火山灰を主体とする暗褐色土、下位は汚れの少ない火山灰を主体とする黄褐色～明褐色土で構成されている。

〈長軸方向〉N-5°-Wを示し、斜面に対して直交する。

遺物 埋土から縄文土器片が出土した。(第55図8・写真図版57) 胎土には植物繊維を含む。器表が剝落していることや小破片であるため、地文を含め詳細は不明である。

III F-2 陥し穴状遺構 (第24図・写真図版21)

〈検出状況〉VI層面でパミスを僅かに含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部290×48cm、底部272×20cm、深さ69cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉上位～中位はパミスを含む黒色土、下位は暗褐色土で構成されている。

〈長軸方向〉N-12°-Wを示し、斜面に対して直交する。

遺物 底面から剝片が出土した。(第55図9・写真図版57) 使用痕などは認められない。

III F-3 陥し穴状遺構 (第24図・写真図版21)

〈検出状況〉VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部219×49cm、底部225×22cm、深さ65cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

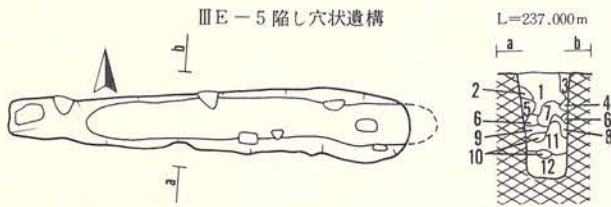
〈埋土〉上位～中位はパミスを含む黒色土、下位は汚れた火山灰主体の黒褐色土で構成される。

〈長軸方向〉N-4°-Wを示し、斜面に対して直交する。

遺物 埋土から縄文土器片が出土した。(第55図10・写真図版57) 緩い山形を呈する口縁部片で、僅かに外反する。LRの原体圧痕により文様が構成されている。胎土には植物繊維を含む。

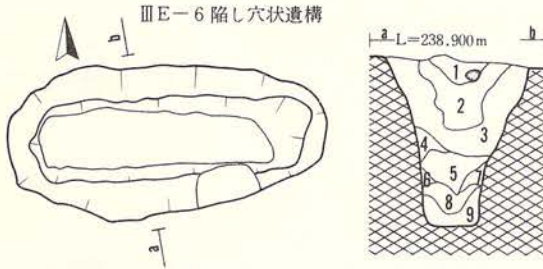
III F-4 陥し穴状遺構 (第25図・写真図版22)

〈検出状況〉VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。



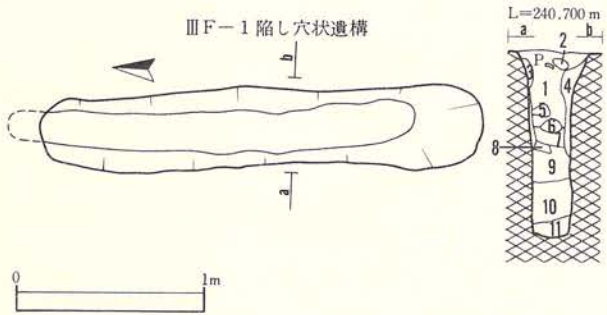
a-b

層位	色調	土性
1	10YR ^{5/2}	黒色土 含、黄褐色バミス(2%)。
2	7.5YR ^{3/4}	暗褐色土 (1%)。
3	7.5YR ^{3/4}	暗褐色土 (4%)。
4	7.5YR ^{3/4}	褐色土 (4%)。
5	7.5YR ^{3/4}	明褐色土 (汚れの少ない火山灰)。
6	7.5YR ^{3/4}	褐色土
7	10YR ^{3/4}	黒褐色土 含、黄褐色バミス(4%)。
8	10YR ^{3/4}	黒色土 (2%)。
9	7.5YR ^{3/4}	黒褐色土 (2%)。
10	10YR ^{3/4}	黄褐色土
11	7.5YR ^{3/4}	暗褐色土 含、黄褐色バミス(4%)。
12	10YR ^{3/4}	黒褐色土



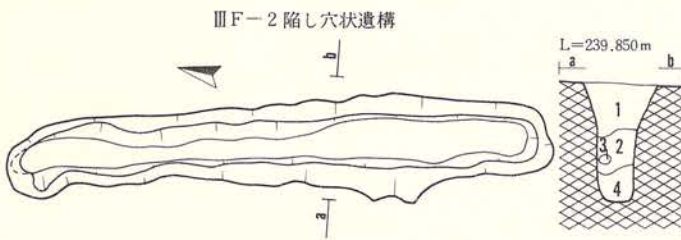
a-b

層位	色調	土性
1	10YR ^{3/4}	黒褐色土 含、径3-20cmの礫。
2	10YR ^{3/4}	暗褐色土 含、バミス(少量)。
3	7.5YR ^{3/4}	黒色土
4	7.5YR ^{3/4}	暗褐色土 (汚れ火山灰)。
5	7.5YR ^{3/4}	黒褐色土 含、バミス(少量)。
6	7.5YR ^{3/4}	褐色土 (汚れ粘土質火山灰)。
7	10YR ^{3/4}	褐色土 (汚れた火山灰)。
8	10YR ^{3/4}	黒色土
9	10YR ^{3/4}	黄褐色土 (汚れの少ない粘土質火山灰)。



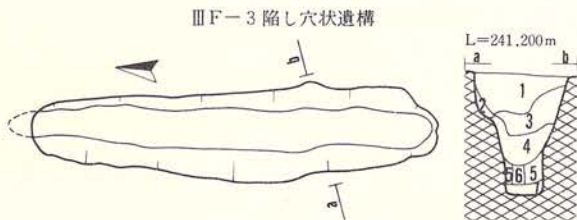
a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR ^{3/4}	黒色土 含、バミス(3%)。
2	7.5YR ^{3/4}	暗褐色土 (2%)。
3	7.5YR ^{3/4}	褐色土 (1%)。
4	7.5YR ^{3/4}	褐色土 (3%)。
5	7.5YR ^{3/4}	暗褐色土 (5%)。
6	7.5YR ^{3/4}	黒褐色土 (3%)。
7	7.5YR ^{3/4}	黒色土 (極少)。
8	7.5YR ^{3/4}	褐色土 (3%)、ひどく汚れた火山灰。
9	7.5YR ^{3/4}	黒褐色土 ひどく汚れた火山灰。
10	7.5YR ^{3/4}	明褐色土 汚れの少ない粘土質火山灰。
11	10YR ^{3/4}	黄・黄褐色土 汚れの少ない粘土質火山灰。



a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR ^{3/4}	黒色土 含、バミス(少量)。
2	7.5YR ^{3/4}	黒色土 含、バミス(3%)。
3	7.5YR ^{3/4}	褐色土 (粘土質火山灰)。
4	7.5YR ^{3/4}	暗褐色土 (汚れた火山灰)。



a-b

層位	色調	土性
1	10YR ^{3/4}	黒色土 含、バミス(5%)・炭化物(少量)。
2	10YR ^{3/4}	暗褐色土
3	10YR ^{3/4}	黒色土 含、バミス(1%)。
4	10YR ^{3/4}	黒色土 (2%)。
5	10YR ^{3/4}	褐色土 汚れた粘土質火山灰。
6	10YR ^{3/4}	黒褐色土
7	10YR ^{3/4}	黒褐色土 ひどく汚れた粘土質火山灰。

第24図 ⅢE-5・6、ⅢF-1・2・3陥し穴状遺構

〈規模〉 開口部295×42cm、底部322×15cm、深さ90cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、長軸側両端部はオーバーハングする。

〈埋土〉 上位～中位はパミスを含む黒色～黒褐色土、下位は黒褐色～褐色土で構成される。

〈長軸方向〉 N-10°-E を示し、斜面に対して直交する。

III F-5 陥し穴状遺構 (第25図・写真図版22)

〈検出状況〉 IV層面で検出された風倒木痕の精査時に確認されたものであるが、同面ではプランは把握できなかった。

〈規模〉 開口部278×66cm、底部339×17cm、深さ115cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、長軸側の両端はオーバーハングする。

〈埋土〉 上位はパミスを含む黒色～黒褐色土、中位は汚れた火山灰主体の暗褐色～褐色土、下位は黒褐色土で構成されている。

〈長軸方向〉 N-4°-W を示し、斜面に対して直交する。

III F-6 陥し穴状遺構 (第25図・写真図版22)

〈検出状況〉 IV層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉 開口部180×45cm、底部200×15cm、深さ87cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉 上位はパミスを含む黒色土、中位～下位は汚れた火山灰主体の暗褐色～黒褐色土。

〈長軸方向〉 N-49°-E を示し、斜面に対して斜交する。

IV D-1 陥し穴状遺構 (第25図・写真図版22)

〈検出状況〉 VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉 開口部350×40cm、底部419×23cm、深さ106cmである。

〈形態〉 細長い溝状を呈し、長軸側の両端はオーバーハングする。

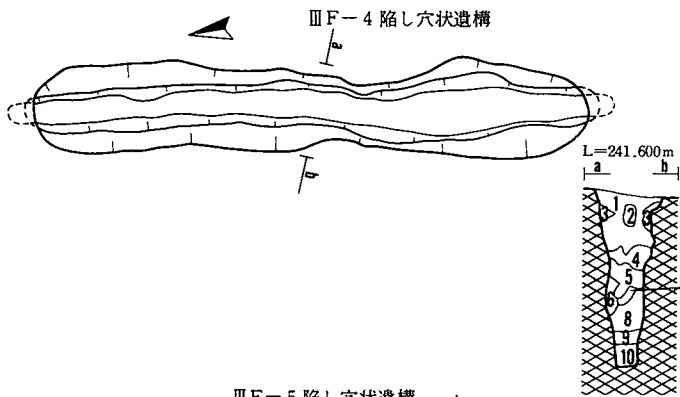
〈埋土〉 上位はパミスを含む黒色～黒褐色土、下位は汚れた火山灰主体の暗褐色～褐色土。

〈長軸方向〉 N-28°-W を示し、斜面に対して斜交する。

IV D-2 陥し穴状遺構 (第26図・写真図版23)

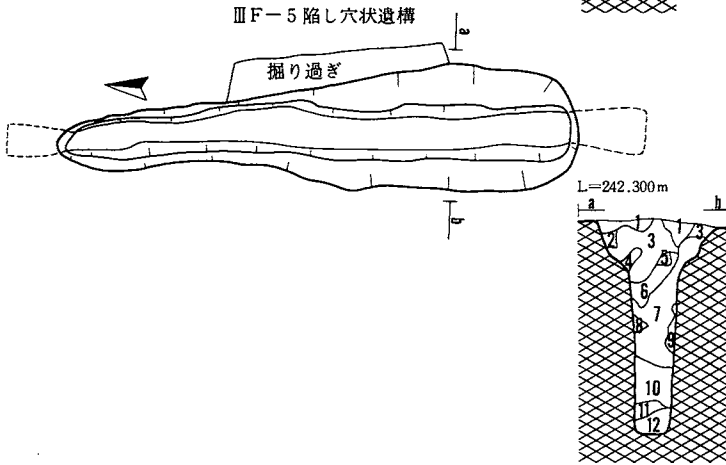
〈検出状況〉 VI層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。長軸側の北端は、調査区域外にかかる。

〈規模〉 検出された部分で、開口部288×41cm、底部313×20cm、深さ100cmである。



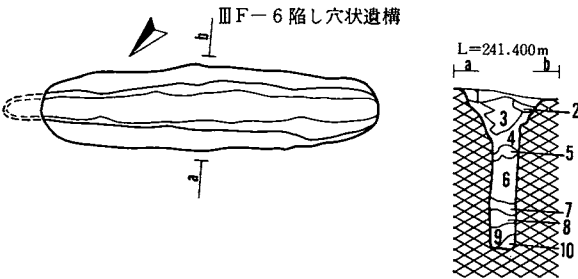
a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR% 黒色土	含、バミス(5%)。
2	7.5YR% 黒褐色土	◇ (少量)。
3	7.5YR% 褐色土	
4	10YR% 黒褐色土	含、バミス(2%)。
5	10YR% 黒褐色土	◇ (1%)。
6	10YR% 黒褐色土	
7	10YR% 褐色土	含、バミス(3%)。
8	7.5YR% 黒褐色土	◇ (3%)。
9	7.5YR% 褐色土	
10	10YR% 黄褐色土	粘土質火山灰。



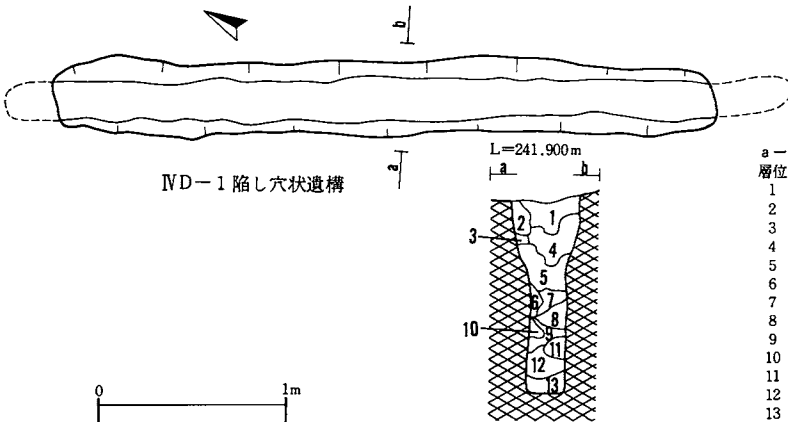
a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR% 黒色土	含、バミス(5%)。
2	10YR% 暗褐色土	◇ (3%)。
3	10YR% 黒色土	◇ (3%)。
4	10YR% 黒褐色土	◇ (3%)。
5	10YR% 暗褐色土	◇ (3%)。
6	10YR% 黒色土	◇ (3%)。
7	10YR% 黒褐色土	◇ (2%)。
8	10YR% 暗褐色土	
9	7.5YR% 褐色土	(汚れた火山灰)。
10	10YR% 褐色土	(汚れた火山灰)。
11	10YR% 鈍い黄褐色土	
12	10YR% 黒褐色土	



a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR% 黒色土	含、バミス(3%)。
2	10YR% 暗褐色土	◇ (3%)。
3	10YR% 黒色土	◇ (3%)。
4	10YR% 暗褐色土	◇ (3%)。
5	10YR% 褐色土	(汚れの少ない火山灰)。
6	10YR% 黒褐色土	含、バミス(1%)。
7	10YR% 褐色土	(汚れ火山灰)。
8	10YR% 黒褐色土	
9	10YR% 暗褐色土	
10	10YR% 鈍い黄褐色土	汚れた粘土質火山灰。



a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR% 黒色土	含、黄褐色バミス(6%)。
2	7.5YR% 黒褐色土	◇ (4%)。
3	10YR% 暗褐色土	◇ (2%)。
4	10YR% 黒褐色土	含、黄褐色バミス(4%) 赤褐色バミス(1%)。
5	7.5YR% 極暗褐色土	含、赤褐色バミス(6%)。
6	7.5YR% 暗褐色土	◇ (4%)。
7	10YR% 黒褐色土	◇ (少量)。
8	7.5YR% 極暗褐色土	◇ (4%)。
9	7.5YR% 暗褐色土	◇ (6%)。
10	7.5YR% 褐色土	含、赤褐色バミス(6%) (汚れのひどい火山灰)。
11	7.5YR% 暗褐色土	◇ (2%)。
12	10YR% 黒褐色土	
13	10YR% 褐色土	(汚れた火山灰)。

第25図 ⅢF-4・5・6、ⅣD-1 陥し穴状遺構

〈形態〉細長い溝状を呈し、長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色土、中位～下位は汚れた火山灰主体の暗褐色～褐色土。

〈長軸方向〉N-27°-Wを示し、斜面に対して斜交する。

IV E-1 陥し穴状遺構（第26図・写真図版23）

〈検出状況〉IV層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部318×72cm、底部337×25cm、深さ138cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、長軸側の両端はオーバーハングする。

〈埋土〉上位～中位はパミスを含む黒色土、下位は汚れた火山灰主体の暗褐色～褐色土。

〈長軸方向〉N-32°-Eを示し、斜面に対して直交する。

V F-1 陥し穴状遺構（第26図・写真図版23）

〈検出状況〉IV層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。

〈規模〉開口部210×54cm、底部224×17cm、深さ110cmである。

〈形態〉細長い溝状を呈し、斜面下位にあたる長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色土、中位は汚れた火山灰を主体とする褐色土、下位は黒色～黒褐色土で構成される。

〈長軸方向〉N-34°-Wを示し、斜面に対して直交する。

V F-2 陥し穴状遺構（第26図・写真図版23）

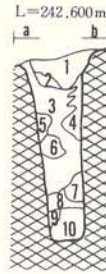
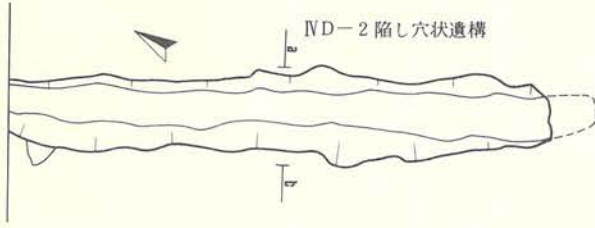
〈検出状況〉IV層面でパミスを含む黒色土の広がりとして検出された。長軸側の南西部は調査区域外にかかる。

〈規模〉検出された部分で、開口部157×58cm、底部173×18cm、深さ118cmである。

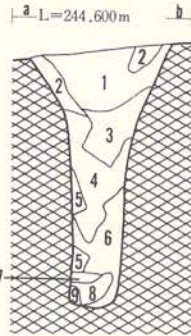
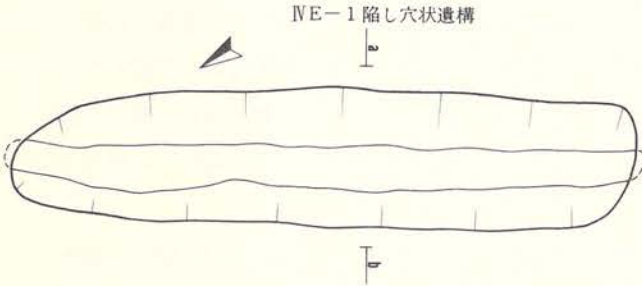
〈形態〉細長い溝状を呈し、長軸側はオーバーハングする。

〈埋土〉上位はパミスを含む黒色土、中位は汚れた火山灰主体の褐色土、下位は黒色～黒褐色土で構成される。

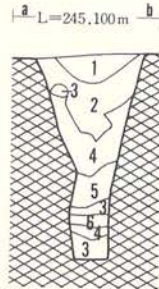
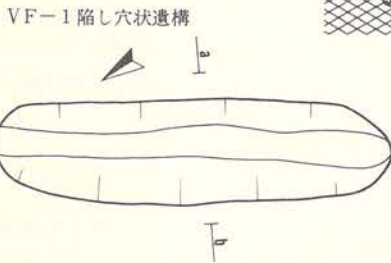
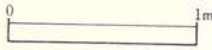
〈長軸方向〉N-39°-Eを示し、斜面に対して直交する。



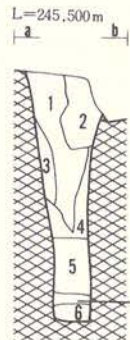
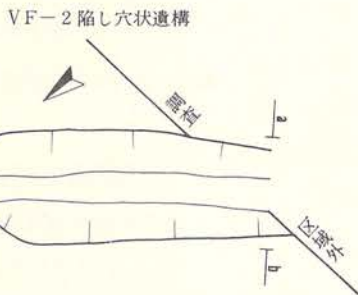
層位	色調	土性
1	10YR _{2/2} 黒褐色土	含、黄褐色パミス(6%)。
2	10YR _{4/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
3	10YR _{2/2} 暗褐色土	含、赤褐色パミス(4%)・ひどく汚れた火山灰。
4	10YR _{2/2} 黄褐色土	* (少量)・汚れの少ない火山灰。
5	10YR _{4/2} 褐色土	(汚れた火山灰)。
6	7.5YR _{2/2} 褐色土	〃
7	10YR _{4/2} 褐色土	〃
8	7.5YR _{2/2} 明褐色土	(汚れの少ない火山灰)。
9	7.5YR _{2/2} 暗褐色土	含、パミス(少量)・(ひどく汚れた火山灰)。
10	10YR _{2/2} 暗褐色土	含、パミス(少量)・(ひどく汚れた火山灰)。



層位	色調	土性
1	10YR _{2/2} 黒色土	含、パミス(少量)。
2	10YR _{2/2} 〃	〃
3	10YR _{2/2} 〃	含、パミス(少量)。
4	10YR _{2/2} 〃	〃
5	10YR _{2/2} 褐色土	〃
6	10YR _{2/2} 暗褐色土	(汚れた火山灰)。
7	10YR _{2/2} 〃	(汚れた火山灰)。
8	10YR _{2/2} 濃い黄褐色	(汚れの少ない火山灰)。
9	10YR _{2/2} 黒褐色土	〃



層位	色調	土性
1	7.5YR _{2/2} 黒褐色土	含、パミス(少量)。
2	7.5YR _{2/2} 極暗褐色土	含、パミス。
3	7.5YR _{2/2} 褐色土	(汚れの少ない火山灰)。
4	7.5YR _{2/2} 〃	〃
5	7.5YR _{2/2} 黒色土	〃
6	7.5YR _{2/2} 黒褐色土	〃



層位	色調	土性
1	7.5YR _{2/2} 黒褐色土	含、パミス(少量)。
2	〃	〃
3	7.5YR _{2/2} 黒褐色土	〃
4	7.5YR _{2/2} 褐色土	(汚れの少ない火山灰)。
5	7.5YR _{2/2} 黒褐色土	〃
6	7.5YR _{2/2} 黒色土	〃

第26図 IVD-2、IVE-1、VF-1・2 陥し穴状遺構

(4) その他の遺構

III E-1 埋設土器 (第27図・写真図版24)

IV層上面で検出された。当遺構の南西約1 mにIII E-1 配石遺構がある。検出面及び出土した土器から、これら2つの遺構は同時存在した可能性が強い。周囲の土層断面の観察では壁の立ち上がりは認められず、床面や柱穴も検出されなかった。このため単独の遺構と判断した。

土器は、開口部32×30cm、底部20×18cm、深さ43cmの円筒状ピットに直立させた状態で、底部から約11cmまで埋め込まれていた。ピットの埋土は、パミスを僅かに含む暗褐色土の単層である。

遺物は、埋設されていた土器1点である。(第56図1・写真図版58) 円筒深鉢形土器で、胎土に繊維を含む量が多くはない。底部は僅かに上げ底となり、体部は外傾して立ち上がった後、口縁部で僅かに外反する。頸部に4本の捺糸圧痕文が巡り、口縁部と体部を区画している。地文は口縁部及び体部上半が結束羽状縄文、体部下半はR1段の捺糸文が縦走する。また、口唇部にも縄文が施文されている。内面には化粧粘土を施し、丹念に磨かれている。

土器から縄文時代前期末葉の遺構と考えられる。

III E-1 配石遺構 (第27図・写真図版24)

北東約1 mにあるIII E-1 埋設土器と共に、IV層上面で検出された。34×38cm、38×23cmの扁平な角礫2個とその下位の焼土から構成されている。2個の礫はいずれも掘り方を伴わず、埋設されたものではない。

焼土は、65×53cmの範囲で不整形に広がっている。発達は良く、厚さは最大9cmである。

遺物 石と焼土の間から縄文土器及び石器が出土した。(第56図2～4・写真図版58) 土器はいずれも円筒深鉢形の土器で、胎土には植物繊維を含む量が多くはない。2は体部上半部片である。体部はほぼ直立し、そのまま口縁部に続いている。頸部には、頂部に棒状工具による連続した刺突をもつ細い隆帯が巡り、体部と口縁部を区画している。口縁部上端にはLR単節斜縄文が施され、この下位には原体圧痕によって文様が構成されている。体部には結束羽状縄文が施文されている。内面には化粧粘土が貼られ、よく磨かれている。

12は体部下端を欠く。体部はほぼ直立し、口縁部で緩く外反する。口縁部は、低い山形を呈するものと考えられる。頸部には、頂部に捺糸圧痕文を伴う低い隆帯が巡り、口縁部と体部を区画している。口縁部には山形を基点として、捺糸圧痕文と小さな刺突によって文様が施され、体部には結束羽状縄文が施文されている。

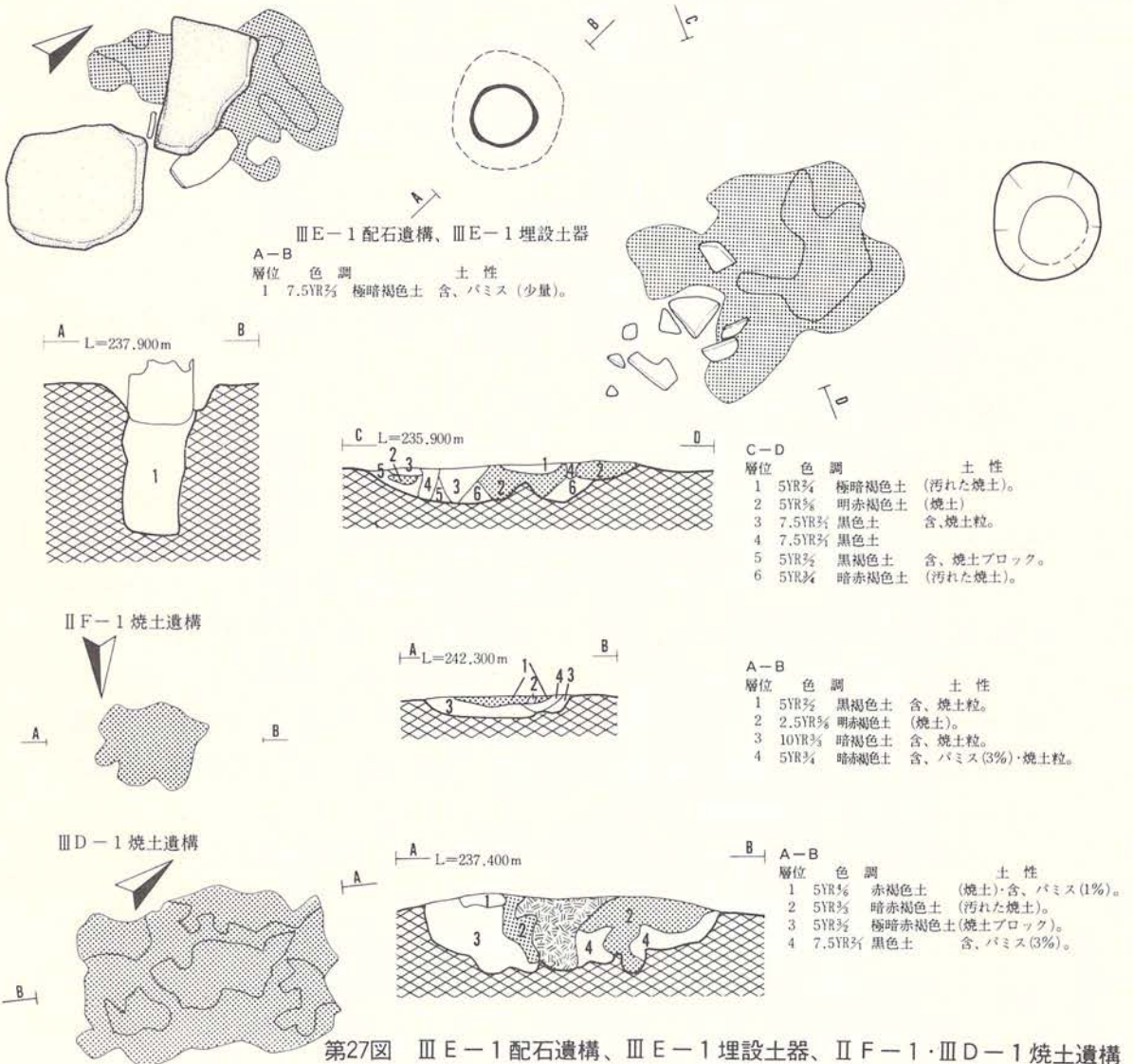
4は使用痕をもつ剝片で、鋭利な側縁部に微細な剝離が連続して観察される。

II F-1 焼土遺構 (第27図・写真図版25)

V層上面で検出された。25×23cmの範囲に分布する現地性焼土である。厚さは最大3cmであるが、よく焼けている。焼土の形成面から縄文時代前期～後期の遺構と考えられるが詳細は不明である。当遺構に伴う遺物はない。

III D-1 焼土遺構 (第27図・写真図版25)

V層上面で検出された。木根による攪乱を受け、残存状況は悪いものの、70×45cmの範囲に現地性焼土や炭化物が分布している。焼土の発達は良く、厚さは最大22cmに及ぶ。焼土の形成面から縄文時代前期～後期の遺構と考えられるが詳細は不明である。出土遺物はない。



第27図 III E-1 配石遺構、III E-1 埋設土器、II F-1・III D-1 焼土遺構

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

I E-4 住居址

遺構 (第28図・写真図版26)

〈検出状況〉基本層序II層面で、十和田 a 降下火山灰のブロックを含む黒色土の広がりとして検出された。しかしプランが確認できたのはVI層面である。北側の大部分は調査区域外で、推定されるプランの南壁沿約5分の1が検出されたにすぎない。

埋土の中～下位及び床面から多量の炭化物や焼土が検出され、焼失した住居址と考えられる。

〈規模・平面形〉検出された部分から推定して、径6 m 前後の円形を呈すると考えられる。

〈埋土〉自然堆積の様相を示す。最上位は黒色土、その下位に十和田 a 降下火山灰層の堆積がみられる。中位はパミス・炭化物を含む黒色土、下位はパミス・炭化物や焼土を含む褐色～黒褐色土で構成されている。

〈壁〉ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南壁で58cm、南西壁54cm、東壁22cmである。

〈床面〉壁際がやや高いが、総じて平坦で硬くしまっている。

〈柱穴〉壁に沿ってP₁～P₇の7個が検出された。いずれも壁柱穴であろう。主柱穴については不明である。

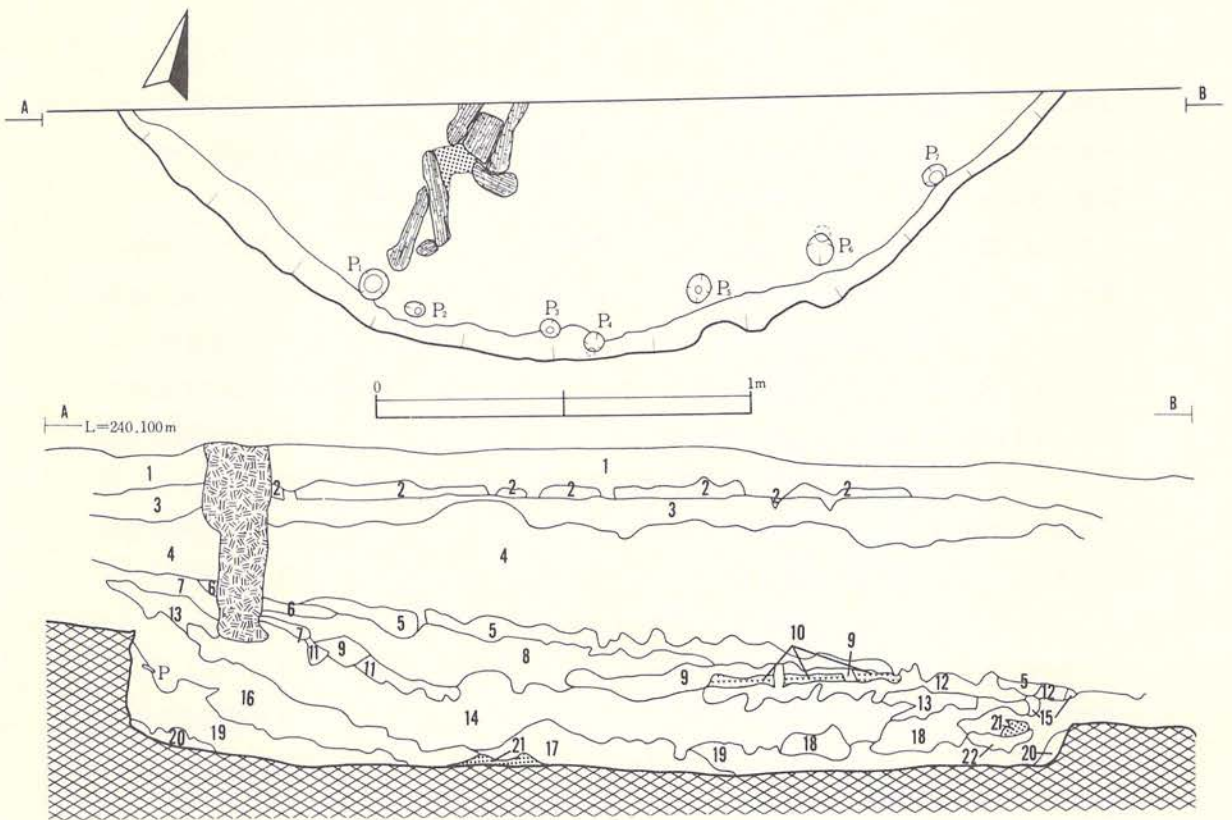
遺物 (第57・58図・写真図版59・60)

土器と石器だけである。全て埋土から出土した。

〈土器〉土器には弥生土器と縄文土器がある。第57図1～3は弥生土器である。1は小型の甕形土器で、体部上半を欠損する。胎土には細い白色の針状物質を含む。底部は平底で、体部はいくぶん膨らみをもって立ち上がる。地文は0段多条の単節縄文で、縦走する。2は浅鉢形土器である。体部は内湾ぎみに開き、頂部に2本の刻みを有する小さな山形口縁は緩く外反する。口縁部上端に3本、肩部に4本の細い沈線が巡り、頸部は丹念に磨かれている。体部にはRL単節斜縄文が施文されている。内面にもミガキが施されるが、頸部よりも雑である。3は蓋形土器と考えられる。把手はなく倒鉢形のものである。色調は全体に鈍い赤褐色を呈し、無文である。炭化物等の付着は認められない。

4は縄文土器の底部である。胎土には植物繊維を含む。地文は結束羽状縄文で、内面には化粧粘土が貼られ、ミガキが施されている。

5～16は弥生土器片である。5は甕形土器の口縁部で、体部は膨らみをもち、無文の口縁部は強く外反する。体部には0段多条LR単節斜縄文が施文されている。口縁部及び体部には炭化



A-B

層位	色調	土性
1	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土 (表土)。
2	7.5YR $\frac{3}{4}$	明褐色土 (盛土)。
3	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土
4	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土
5	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土
6	10YR $\frac{3}{4}$	褐色土 含、バミス (少量)。
7	10YR $\frac{3}{4}$	暗褐色土 含、バミス (少量)。
8	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土 含、バミス・To-a炭化物。
9	10YR $\frac{3}{4}$	暗褐色土 含、To-a。
10	10YR $\frac{3}{4}$	浅黄褐色土 (To-a)。
11	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土 含、バミス炭化物(3%)。

層位	色調	土性
12	10YR $\frac{3}{4}$	褐色土 含、バミス (少量)。
13	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土 含、炭化物 (少量)。
14	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土 含、バミス炭化物(5%)。
15	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土 含、炭化材。
16	10YR $\frac{3}{4}$	褐色土 含、バミス(5%)。
17	10YR $\frac{3}{4}$	褐色土 含、バミス炭化物(3%)。
18	10YR $\frac{3}{4}$	暗褐色土 含、バミス炭化物(3%)。
19	10YR $\frac{3}{4}$	黒褐色土 含、バミス(3%)。
20	7.5YR $\frac{3}{4}$	褐色土 含、バミス炭化物(3%)。
21	5YR $\frac{3}{4}$	赤褐色土 (焼土)。
22	7.5YR $\frac{3}{4}$	暗褐色土 含、焼土粒。

(cm)

P No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
径	18	11	11	12	16	18	13
深	16	7	10	10	12	15	10
	20	12	7	12	12	30	17

第28図 I E-4 住居址

物の付着がみられる。6・7は壺形土器の口縁部である。いずれも小さな山形口縁を呈する。6は強く外反し、口縁部上端に2本の沈線が巡る。また、肩部にも沈線が回り、これに区画される頸部は無文となっている。体部には、縄文が施文されているようであるが詳細は不明である。7は頸部が長く外反し、口縁部上端に2本の沈線が巡る。8・9は鉢形土器の口縁部と考えられる。どちらも平行沈線文をもつ。9は口縁部内側にも沈線が巡る。10~12は同一個体の壺形土器である。器表には朱が塗られている。10・11は体部上端部で、変形工字文風の沈線文が施されている。12は底部で、やや外方に張り出しをもち、底面は研磨されている。地文は RL

縦回転の単節斜縄文である。13も壺形土器の体部上端と考えられる。14は鉢形土器の体部片で、朱塗りである。文様は磨消文で、縄文帯にはLRの単節縄文が横走する。15・16は同一個体で、粗製の壺形土器と考えられる。頸部は無文で、地文はLRの単節斜縄文である。

17～30は縄文土器である。17～21は後期の土器片である。17は直立する口縁部で、口唇部は僅かに肥厚する。2本の細い縄文帯が巡り、これに三角形の小突起が連続して付く。他の部分は丹念に磨かれている。縄文はL1段の無節斜縄文である。18・19は磨消文をもつ口縁部である。19は壺形土器の体部片で、頂部に刻みのある突起をもつ。21・22は粗製深鉢形土器の口縁部である。21は口唇部が肥厚し、器面には条痕文が施文されている。22の地文はLR単節斜縄文である。23～30は前期の土器片で、胎土に植物繊維を含む。23・24は口縁部で、緩く外反する。地文は結束羽状縄文である。25は頸部に3本の絡条体圧痕文が巡る。27は3本の原体圧痕文が巡り、またこの間に爪形文が施されている。28・29は同一個体で、地文には2本の原体を用いた木目状捺糸文をもつ。30は多軸絡条体の回転文が施文されている。

〈石器〉いずれも剥片石器である。第58図1・2は尖頭石器の破損品と考えられる。1は尖頭部分で両面からの調整によって整形されている。2は基部と考えられる。3は調整痕を有する剥片である。4は鋭利な側縁部に使用痕をもつ。5は剥片で、両面に第1次剥離面を大きく残す。

時期 遺物は全て埋土からの出土で、明確に時期決定することはできないが、残存状態がよい弥生土器が埋土の下位から出土することから、弥生時代中期の住居址と考えられる。

3. 古代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

I E-5 住居址

遺構（第29・30図・写真図版27・28）

〈検出状況・重複関係〉基本層序第IV層上面で、十和田 a 降下火山灰のブロック群に囲まれた黒色土の広がりとして検出された。南西壁中央部を、近世の貯水槽跡によって切られている。また、縄文時代の I E-3 住居址の南東部分と重複し、これを大きく切っている。

〈規模・平面形〉3.6×3.7m の方形を示す。

〈埋土〉4層に大別される。上位は炭化物を僅かに含む褐色土・中位は十和田 a 降下火山灰をブロックとして含む暗褐色土と、白頭山火山灰を僅かに含む黒褐色土、下位はパミス・炭化物を含む褐色土で構成される。中位と下位の土層の間には、カヤと思われる炭化物の薄層が挟まれるが、これによって当住居址が焼失住居址であることは断定できない。

〈壁〉上部が崩落している部分も多いが、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南東壁59cm、南西壁49cm、北西壁63cm、北東壁41cmである。なお南西壁と北東壁の一部には幅20～10cm、深さ10～5cmの壁溝が巡る。

〈床面〉小さな凹凸がみられるが、おおむね平坦で、硬くしまっている。

〈カマド〉南東壁の南寄りに1基築かれる。保存状態は悪く、芯材として使われたと思われる扁平な凝灰岩と灰白色のシルトが散在するだけである。燃焼部には60×45cmの範囲で、最大13cmの厚さに焼土が形成されている。煙道部はトンネル式で、保存状態は良好である。底面は平坦で、燃焼部からの長さは1.3mである。煙出し部は径42×40cm、深さ54cmの円筒状のピットで、緩く傾いて煙道部に続く。埋土は焼土や炭化物を含む黒褐色～暗褐色土が主体となるが、煙出し部の上位には褐色シルトが載る。また、煙出し部分の埋土から礫が2個出土しているが、これらがカマドの構造に関わるものであるかは明確でない。

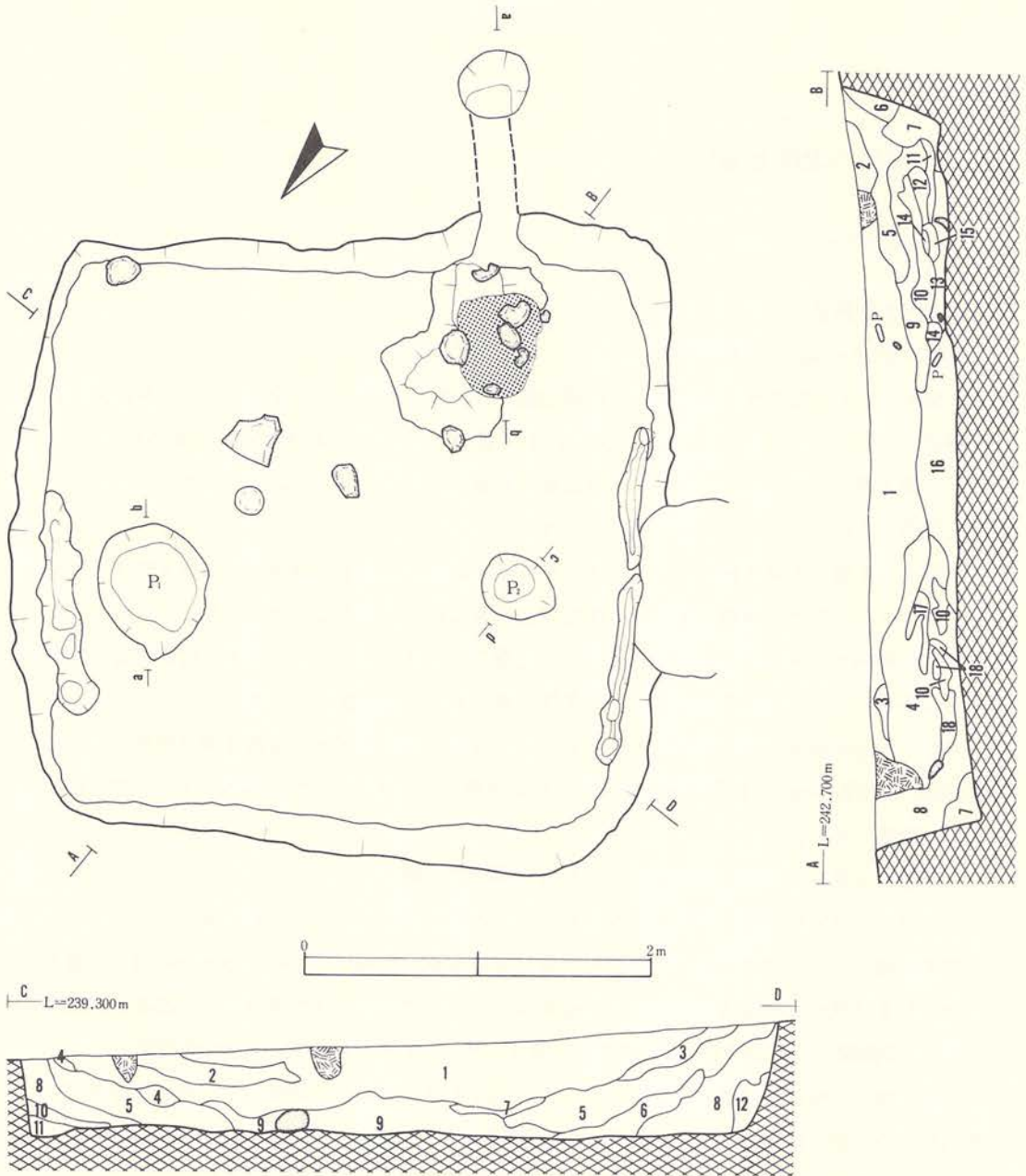
〈その他〉床面から2個の不整形ピットが検出された。P₁は径74×62cm、深さ49cm・P₂は径44×38cm、深さ35cmである。位置や埋土から柱穴とは考えられない。性格は不明である。

〈主軸方向〉S-37°-Eで南東を指す。

遺物（第58～61図・写真図版60～63）

床面及び埋土から土器・石器・石製品及び鉄製品が出土した。

〈土器〉土師器・縄文土器・弥生土器がある。埋土から多量の縄文土器と弥生土器が出土したが、これらは当地区に形成された包含層からの流れ込みである。

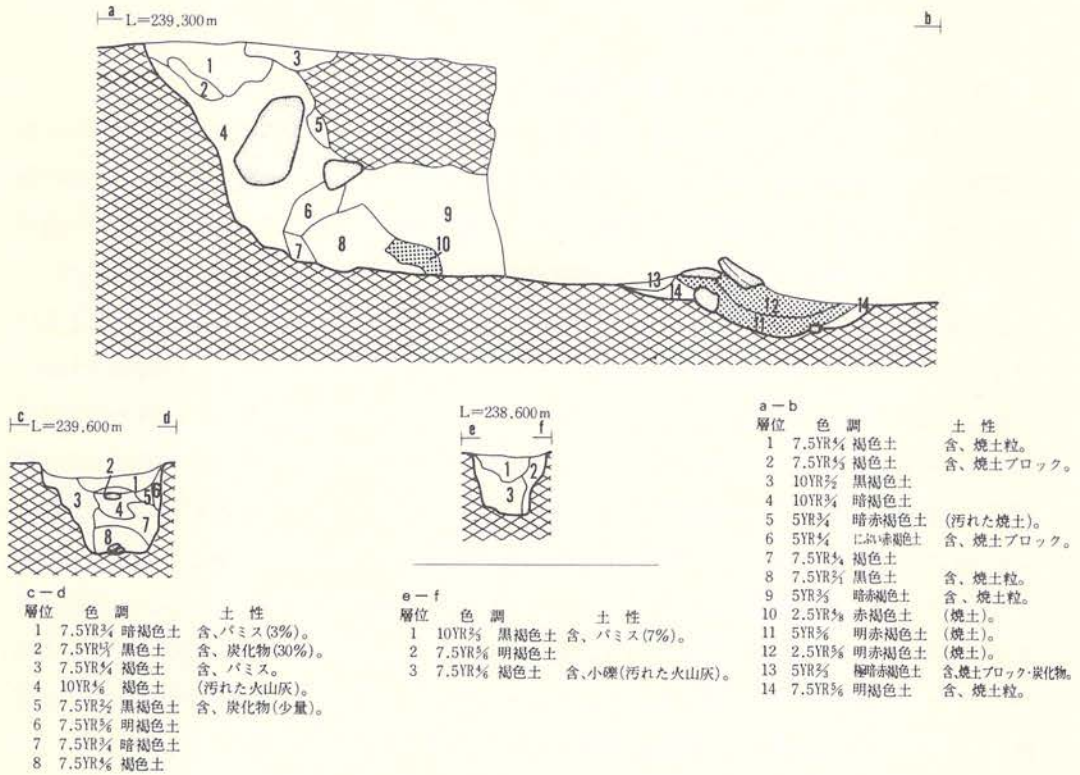


- C-D**
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------------------|----------------------|
| 1 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 黒褐色土 含、To-a・炭化物(少量)。 |
| 2 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 黒褐色土 含、To-a。 |
| 3 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 暗褐色土 含、To-a・炭化物(少量)。 |
| 4 | 7.5YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 含、To-a・炭化物。 |
| 5 | 7.5YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 含、To-a。 |
| 6 | 7.5YR $\frac{3}{2}$ | 黒褐色土 含、To-a・炭化物。 |
| 7 | | 炭化物。 |
| 8 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 暗褐色土 含、To-a・炭化物(少量)。 |
| 9 | 10YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 含、炭化物。 |
| 10 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 黒褐色土 含、炭化物。 |
| 11 | 10YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 含、炭化物(少量)。 |
| 12 | 7.5YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 含、炭化物(少量)。 |

- A-B**
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------------------|----------------------|
| 1 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 黒褐色土 含、To-a・炭化物(少量)。 |
| 2 | 7.5YR $\frac{3}{2}$ | 暗褐色土 含、炭化物。 |
| 3 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 暗褐色土 含、炭化物。 |
| 4 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 暗褐色土 含、To-a・炭化物。 |
| 5 | 7.5YR $\frac{3}{2}$ | 暗褐色土 含、To-a。 |
| 6 | 7.5YR $\frac{3}{2}$ | 極暗褐色土 含、炭化物。 |
| 7 | 7.5YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 (汚れた火山灰)。 |
| 8 | 7.5YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 含、炭化物。 |
| 9 | 7.5YR $\frac{3}{2}$ | 黒褐色土 含、白頭山火山灰。 |
| 10 | 7.5YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 含、To-a・炭化物。 |
| 11 | | 炭化物。 |
| 12 | 7.5YR $\frac{3}{2}$ | 黒褐色土 含、炭化物。 |

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------------------|-------------------|
| 13 | 5YR $\frac{3}{2}$ | 暗赤褐色土 含、焼土・炭化物。 |
| 14 | 5YR $\frac{3}{2}$ | 極暗赤褐色土 含、焼土・To-a。 |
| 15 | 7.5YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 |
| 16 | 10YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 To-a・炭化物。 |
| 17 | 10YR $\frac{3}{2}$ | 黒褐色土 含、炭化物。 |
| 18 | 10YR $\frac{4}{2}$ | 褐色土 (汚れた火山灰)。 |

第29図 I E-5住居址(1)



第30図 I E-5住居址(2)

第58図6~13・第59図1~8は土師器で、全てロクロ不使用のものである。6は小型の手捏ね土器で、全体に歪みがある。底部は突起状をなし、体部は外傾する。内外面とも粗雑なナデ調整が施されている。第58図7~13、第59図1~8は甕形土器である。第58図7は球胴の甕で、体部は内湾し中央部に最大径をもつ。口縁部は強く外反する。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はケズリ後割合に丁寧なヘラミガキ、内面はナデ調整が施されている。8は体部にいくぶん膨らみをもった後、口縁部は緩く外反している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。9は体部が緩く内湾し、口縁部は短く立ち上がる。外面は口縁部上端が僅かにヨコナデされるが、他は粗いヘラケズリ、内面はナデが施されている。10~13は口縁部片である。10は口縁部が緩く外反し、11は短く外方にひねり出されている。12は体部からほぼ直立する。13は長く外反する口縁部をもち、頸部には不明瞭な段がみられる。第59図1は体部片である。2~8は底部片である。2~7は底部に張り出しはもたないが、8は台状の張り出しをもつ。器面調整は外面が粗いヘラケズリ、内面はナデのものが大部分である。

9~11は縄文土器の底部である。9は僅かに上げ底となり、体部は内湾ぎみに立ち上がる。地文は結束されない羽状縄文であるが、整然としたものではない。10は内外面とも粗く磨かれ

た無文の土器である。11は底面に粗雑な沈線をもつ。

第59図12・22・第60図1～10は縄文土器片である。第59図12～17は前期の土器片で胎土に植物繊維を含む。12は波状を呈する口縁部で、絡条体圧痕文による文様が施されている。13の頸部には頂部に刺突を伴う隆帯が2本巡る。14～16は体部片で、14は地文に結束羽状縄文が施文されている。15・16は同一個体で、地文は縦走する撚糸文である。17は体部下端の破片で、いくぶん膨みをもつ。地文には0段の紐4本を用いた組紐回転文が施文されている。この土器は他のものに比べて、胎土に含まれる繊維の量は少ない。18～22・第60図1～7は後期の土器片である。18は中央に刺突をもつボタン状の貼り付けを有する。19～21は数本の沈線を伴う縄文帯が文様を構成している。22は縄文地に6本の細い沈線を縦走させている壺形土器である。第60図1は低い山形を呈する口縁部で、磨消縄文による文様をもつ。2は口縁部に連続する刻みが2段に回る。3は頂部に3本の縦沈線をもつ山形突起を有する口縁部である。4も小山形をもつ口縁部で、突起の頂部には渦巻状の沈線文、口唇部には縄文が施されている。5～6は壺形土器の体部片で磨消手法による入組文が施文されている。8～10は晩期の土器である。8は口唇部に斜めの刻みを有し、外方に張り出す。9・10は同一個体で、口縁部は小さい山形が連続し、玉抱き三叉文が描かれ、体部は沈線によって区画され縄文帯となっている。

11～18は弥生土器である。11・12は壺形土器の口縁部で、いずれも外傾する。11は縄文地に2段の連続刺突文を施す。また、頸部には沈線が巡らされている。12は小波状を呈し、2段の連続刺突文をもつ。12は内外面に2本の平行沈線が巡る口縁部片である。14・15は深い沈線によって変形工字文が描かれている。16は磨消手法による文様をもつ。大部分は欠損するが、器面には朱が塗れている。17は高坏形土器の台部で、磨消手法による文様が施されている。18は粗製土器の体部で、縦走する撚糸文が施文されている。

〈鉄器〉床面から1点出土した。(第60図18)は刀剣類の足金具と考えられる。全体に錆化しているが残存状態は良い。双脚のもので、断面が円形の矢倉が付く。矢倉部分は幅3mm、長さ1.6cmの透しとなっている。器表には木質と、藁状の物質が多量に付着するが、当遺物に伴うものではないと思われる。

〈石器〉第60図19～26は埋土から出土した剥片石器である。20・21は有茎の石鏃である。20は基部がやや突出する。21の基部は平坦である。22・23は横形の石匙で、22は直線的な刃部をもち、23は凸刃の形態を呈する。24は剥片の尖頭部に、両面から細かい調整によって刃部を作り出した石錐である。25は緩く湾曲する側縁部に細かな調整を施した抉入石器である。26・27は剥片の一部に調整痕をもつ。

第61図1は床面から出土した粗製の石皿である。扁平な自然石をそのまま利用しており、表裏両面に顕著な使用痕をもつ。

〈石製品〉埋土からの出土である。(第60図27) 未成品と考えられ、小さな扁平な素材に両面から孔が穿たれているが貫通していない。

時期 出土した土師器から、平安時代の住居址と考えられる。

II F-6 住居址

遺構 (第31図・写真図版29・30)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で現地性焼土 (No.1) が検出され、この精査の結果住居址であることが確認された。当住居址は、ほぼ同位置で重複する縄文時代II F-2住居址の埋土を切って構築されている。このため、埋土と壁との識別が困難で、大きく掘りすぎている。また、斜面下位に当る北東側は流失している。

柱穴状ピットが多数検出されていることや、現地性焼土が2カ所に存在することから、2棟もしくはそれ以上の重複住居址である可能性が強い。が、個々の把握はできなかった。

〈規模・平面形〉掘りすぎたため詳細は不明であるが、残存する壁や床面の状態から推定して、一辺5m前後の方形または長方形を呈していたと考えられる。

〈埋土〉自然堆積の様相を示し、3層に大別される。上位は黒色土、中位はパミスを含む黒褐色土、下位は十和田a降下火山灰のブロックを含む黒褐色土で構成される。

〈壁〉II F-2住居址の埋土と区別が明確でないが、僅かに外傾して立ち上がる。壁高は南西壁で45cm、南東壁で53cm、北西壁で16cmである。

〈床面〉大部分が、十和田a降下火山灰を含む黒褐色土で貼り床(最大13cm)されている。全体に緩い凹凸があり、壁際ではやや軟らかいものの中央部は硬くしまっている。

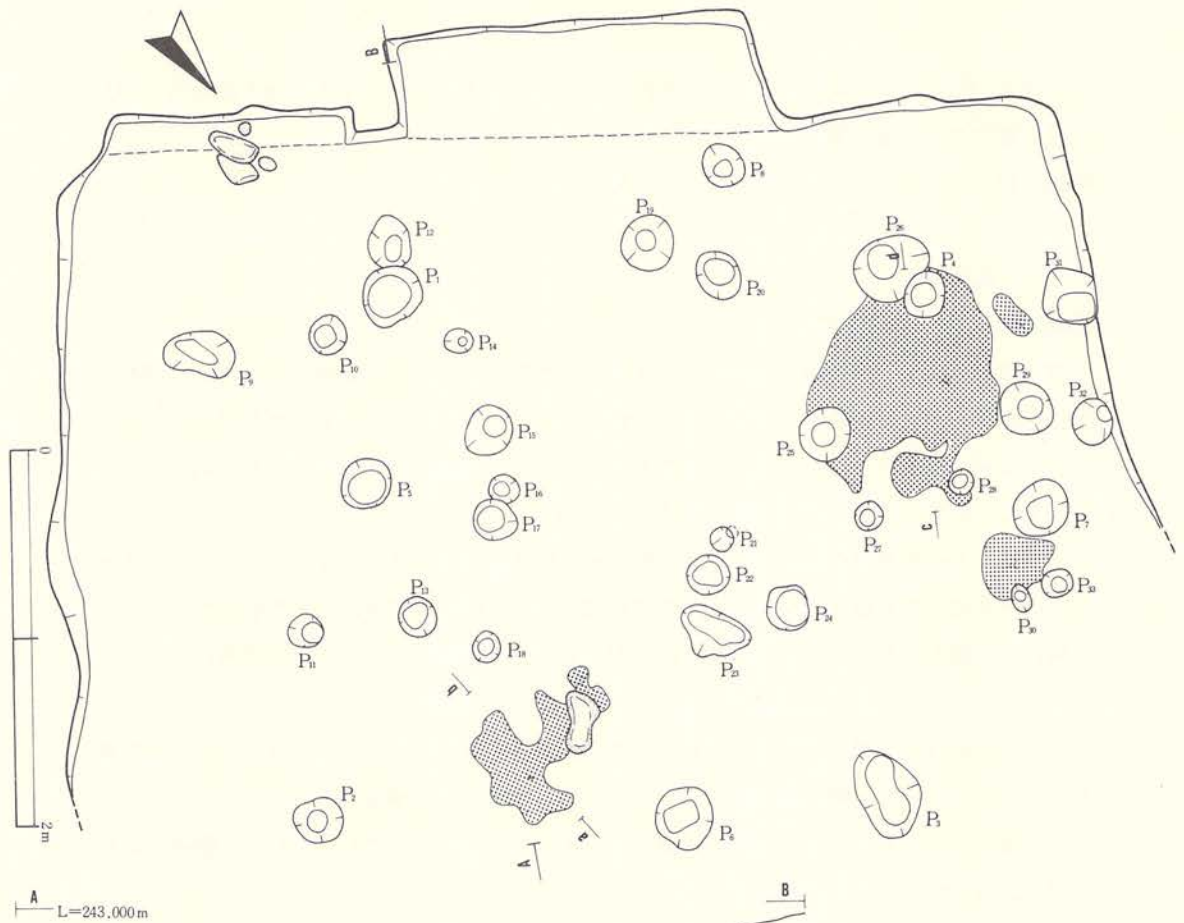
〈柱穴〉P₁~P₃₃の33個が検出されている。これらのうち、P₁₀・P₂₆は掘り方を持ち、推定されるプランから考えて支柱穴であろう。その他の配置については明確に断定できる材料はない。

〈焼土〉床面から2基の現地性焼土が検出された。焼土No.1は住居址中央からやや東側に検出された。かなり攪乱を受けているが、80×65cmの範囲に最大6cmの厚さで焼土が発達している。焼土の西側に焼けた礫が1個検出されたが性格は不明である。焼土No.2は住居址中央からやや西側に検出された。115×95cmの範囲に最大11cmの厚さで焼土が発達している。焼土の北側に、凝灰岩が埋め込まれていた。これら2基の焼土は焼けた礫や埋設された凝灰岩を伴い、カマドであった可能性がある。しかし、袖や煙道部などは確認されなかった。

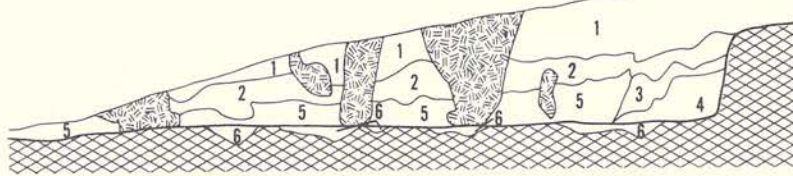
〈主軸方向〉残存する南西壁と直交する線は、S-38°-Eである。焼土No.1をカマドと想定した場合はN-38°-E、また焼土No.2をカマドと想定した場合は、W-38°-Nとなる。

遺物 (第61図・写真図版63・64)

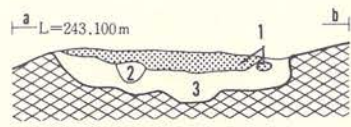
床面及び埋土から土師器・縄文土器・石器が出土した。



A L=243,000m

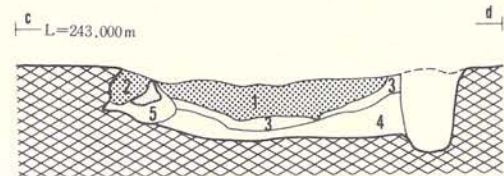


層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色土	
2	7.5YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色土	含、バミス(3%)。
3	7.5YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色土	含、バミス(10%)。
4	7.5YR $\frac{3}{6}$ 黒色土	含、バミス(15%)。
5	7.5YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色土	含To-a。
6	7.5YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色土	含、To-a・バミス。



a L=243,100m

層位	色調	土性
1	2.5YR $\frac{3}{6}$ 赤褐色土	(焼土)。
2	5YR $\frac{3}{6}$ 極暗赤褐色土	(汚れた焼土)。
3	10YR $\frac{3}{6}$ 黒色土	含、バミス(少量)。



c L=243,000m

層位	色調	土性
1	2.5YR $\frac{3}{6}$ 明赤褐色土	(焼土)。
2	5YR $\frac{3}{6}$ 赤褐色土	(汚れた焼土)。
3	10YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色土	含、炭化物・焼土(少量)。
4	10YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色土	含、バミス・炭化物(1%)。
5	10YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色土	含、To-a・焼土。

第31図 II F-6住居址

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇
径(cm)	35 32	27 25	50 32	25 21	26 26	32 30	33 28	25 21	39 24	22 20	19 18	28 22	22 20	15 14	28 24	16 15	24
深(cm)	39	33	31	24	43	57	38	26	49	80	44	40	46	28	59	43	44
P _{No.}	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	
径(cm)	17 15	31 28	28 23	13 12	23 21	39 26	24 22	30 26	41 35	16 15	14 13	28 27	15 10	29 28	25 21	17 15	
深(cm)	56	42	48	32	39	41	37	30	58	22	28	40	35	40	35	48	

〈土器〉第61図2・3は床面から出土した土師器の甕形土器の底部である。2は体部がいくぶん内湾して立ち上がる。外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。3は底部が僅かに外方に張り出している。外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整され、底面に笹葉痕をもつ。そのほかに床面から体部片が出土している。(写真図版64、3～13)いずれも外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。

第61図4～7は埋土及び貼り床から出土した縄文土器である。4・5個は同一個体で、磨消手法によって入組文が描かれている。地文は0段多条LRの単節である。6は磨消手法による細い縄文帯に小突起が配されている。口唇部は肥厚する。7は縦横の沈線文をもつ。

〈石器〉床面から磨石が2個出土している。8は表裏両面に、9は3面に使用痕をもつ。

時期 床面出土の土師器から、平安時代の住居址と考えられる。

II F-7 住居址

遺構 (第32図・写真図版30・31)

〈検出状況・重複関係〉第IV層面で、これを切る黒色土の広がりとして検出された。西側でII F-10住居址状遺構及びII F-1ピットに切られている。また、斜面下位にあたる北側は流失している。このため、南西壁と南東壁の一部が残存するにすぎない。床面の各所で炭化物や現地性焼土が検出され、焼失住居址の可能性はある。

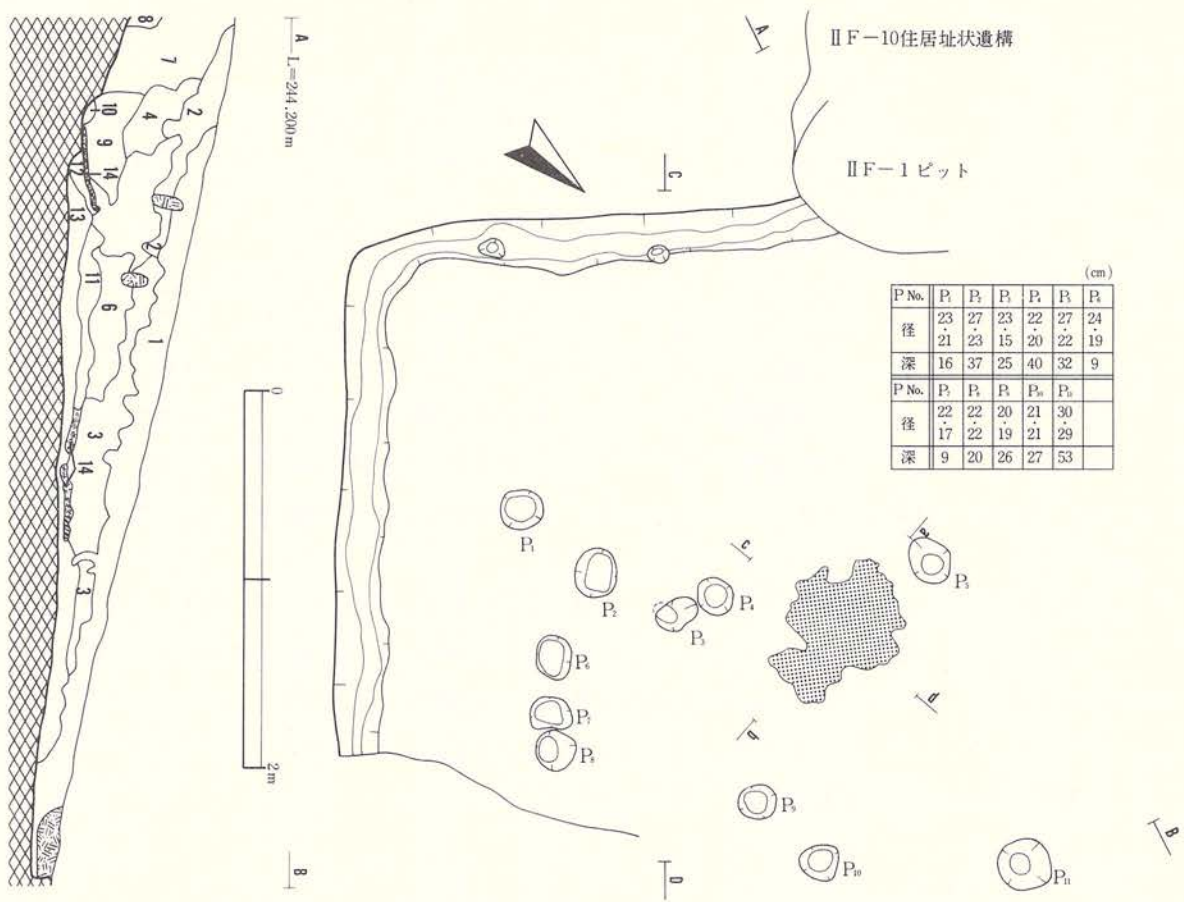
〈規模・平面形〉残存する部分や床面の状態から推定して、一辺4m前後の方形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉3層に大別される。上位は黒色土、中位は投棄されたと考えられる黒褐色土や褐色土による混合土、下位は黒色土で構成されている。中位の混合土は、住居址の西側ほど多く分布している。

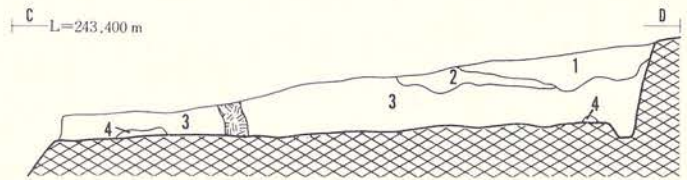
〈壁〉わずかに外傾して立ち上がる。壁高は南西壁で45cm、南東壁で25cmである。また、検出された部分全体に、幅5～12cm、深さ12～4cmの壁溝が巡ぐらされている。

〈床面〉緩い凹凸はあるものの、全体としては平坦で硬くしまっている。

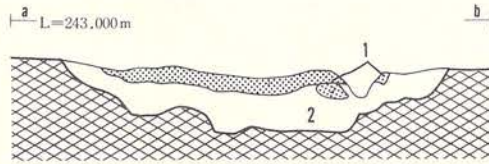
〈柱穴〉P₁～P₁₁の11個が検出されているが、支柱穴の配置や構成関係は想定できない。



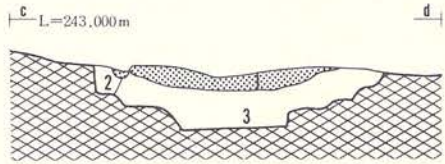
- A-B**
層位 色調 土性
- 1 7.5YR₅ 黒色土
 - 2 7.5YR₅ 黒色土
 - 3 7.5YR₅ 黒褐色土
 - 4 7.5YR₅ 黒褐色土
 - 5 7.5YR₅ 暗褐色土 (焼土・褐色土、黒褐色土による混土)。
 - 6 7.5YR₅ 褐色土 含、バミス(少量)。
 - 7 7.5YR₅ 黒褐色土 含、バミス(少量)。
 - 8 7.5YR₅ 暗褐色土
 - 9 7.5YR₅ 黒色土
 - 10 7.5YR₅ 暗褐色土
 - 11 7.5YR₅ 黒褐色土
 - 12 7.5YR₅ 褐色土 (褐色土・黒褐色土の混土)。
 - 13 7.5YR₅ 黒色土
 - 14 炭化物。



- C-D**
層位 色調 土性
- 1 10YR₅ 黒色土
 - 2 10YR₅ 黒褐色土 (褐色土・黄褐色土の混土)。
 - 3 10YR₅ 黒色土 含、バミス(少量)。
 - 4 10YR₅ 黒褐色土 含、バミス(少量)。



- a-b**
層位 色調 土性
- 1 5YR₅ 明赤褐色土 (焼土)。
 - 2 10YR₅ 黒色土 含、バミス(3%)。



- c-d**
層位 色調 土性
- 1 5YR₅ 明赤褐色土 (焼土)。
 - 2 7.5YR₅ 極暗褐色土
 - 3 10YR₅ 黒色土 含、バミス(3%)。

第32図 II F-7住居址

〈焼土〉 推定されるプランの中央部やや北側に現地性焼土が1基検出された。焼土は65×80 cmの範囲に不整形に分布する。厚さは最大6 cmであるが良く焼けている。周囲には他の施設の痕跡は認められず、この焼土がカマドに伴うものであるか炉跡であるのかは不明である。

〈主軸方向〉 残存する南東壁はS-38°-E、南西壁はS-44°-Eを示す。

遺物 (第61図・写真図版65)

床面から土師器の甕形土器片と韃の羽口が出土した。第61図10は韃の羽口片である。大部分を欠損し、詳細は不明であるが残存部から、径7 cmの円筒形をなし、径3 cmの通風孔をもつものと推定される。器面は粗くナデ調整され、炭化物やガラス質などの付着はみられない。

写真図版65、2～12は甕形土器の体部片である。いずれも外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。

時期 床面出土の土師器から、平安時代の住居址と考えられる。

II F-8 住居址

遺構 (第33図・写真図版32・33)

〈検出状況・重複関係〉 東側で重複するII F-6住居址の精査時に確認された。耕作による攪乱を受けていることや、II F-6住居址との重複部分が縄文時代のII F-2住居址の埋土内であることから、新旧関係は把握できなかった。南東隈で重複するI F-9住居址との新旧関係も不明である。この他に、南西部分でII F-3住居址を切っている。また、斜面下位にあたる北東側は流失している。床面や埋土下位からは炭化材や焼土が検出され、焼失した住居址と考えられる。

〈規模・平面形〉 残存する壁や床面の状態から推定して、長軸7.5m前後、短軸2.7m前後の長方形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉 攪乱を受けている部分も多いが、自然堆積による埋没と考えられる。3層に大別され、上位は黒褐色土、中位は炭化物を含む黒色土、下位は焼土・炭化物を含む黒色土で構成されている。埋土の下位から床面にかけては、十和田a降下火山灰のブロックの分布がみられた。

〈壁〉 崩落している部分もあるが、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南西壁の東側で31cm、西側で14cmである。これに沿って幅20～10cm、深さ8～14cmの壁溝が巡らされている。

〈床面〉 斜面下位にあたる北東方向にいくぶん傾斜するが、ほぼ平坦で全体に硬くしまっている。

〈柱穴〉 P₁～P₁₅の15個が検出された。支柱穴の配置については明らかでないが、P₃・P₄・P₆・P₇・P₈・P₉・P₁₁・P₁₃などによって構成されていたものと考えられる。P₁₅については、南西部で重複するII F-3住居址に伴う可能性がある。

〈焼土〉推定されるプランのほぼ中軸線上に2基の現地性焼土が検出された。周辺に何らかの施設があった痕跡は認められず、位置的にみても地床炉と考えられる。東側のものをNo.1、西側のものをNo.2として記述する。いずれも焼土の発達はよい。No.1は70×65cmの不整形な範囲に最大10cmの厚さで分布している。No.2は55×48cmの不整形円形に最大12cmの厚さで分布している。

〈その他〉南西壁際に3個のピット(P₁₆・P₁₇・P₁₈)が検出された。性格は不明である。

〈主軸方向〉検出された南西壁に直交する線はS-37°-Wを指す。

遺物(第62・63図・写真図版65~68)

床面・小ピット・埋土から土器・鉄器・鉄滓・石器が出土した。

〈土器〉土器には土師器・縄文土器・弥生土器がある。第62図1~9は土師器の甕形土器で、床面から出土した。いずれもロクロ不使用のものである。1~7は口縁部片である。7は体部が直立し、口縁部は短く外反する。内外面とも粗雑なナデ調整が施されている。2~4・7も口縁部は短く外傾、または緩く外反する。5は口縁部が直立する。いずれも口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。6は僅かに外傾する体部からそのまま口縁部に続いている。外面は全てヘラケズリ調整である。8・9は底部片で、体部は外傾して立ち上がる。この他に体部片が出土している。(写真図版66、1~10)いずれも外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。

10は埋土から出土した弥生土器の体部下端から底部片である。粗製の甕形土器と思われる。底部には小さな台状の張り出しをもち、体部は外傾して開く。地文にはL1段の捺糸文が縦方向に施文されている。

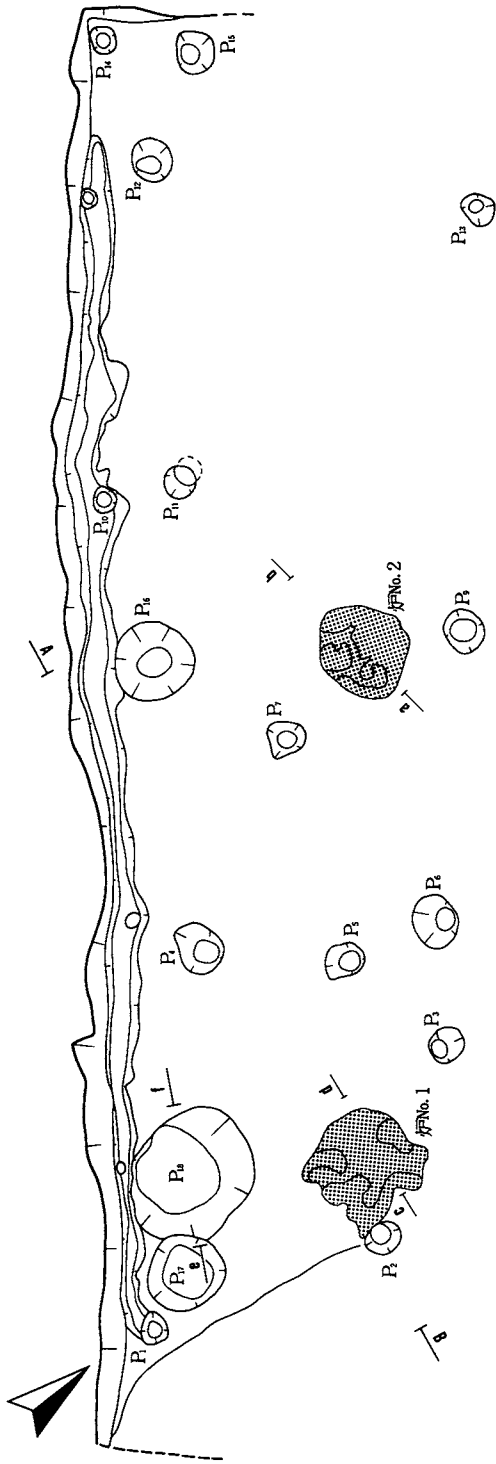
第63図1~4は縄文土器片である。1は壺形土器の肩部と考えられ、磨消手法によって、入組文が構成されている。2~3は同一個体で、粗雑な沈線によって曲線文が描かれている。

〈鉄器〉壁際の床面から刀子が1本出土した。(第62図11)全体に銹化しているが、完形品で残存状態は良好である。平造りで所々に鑄が付くが、鋭利な刃先をとどめる。茎は背と刃部の双方を一段おとし、先細りとなる。断面形は長方形を呈し、一部に木質を残す。全長18.8cm、身の長さ11.6cm、同最大幅1.5cm、背の厚さ0.3cm、茎の幅・厚さは柄元で0.3×0.8cmである。

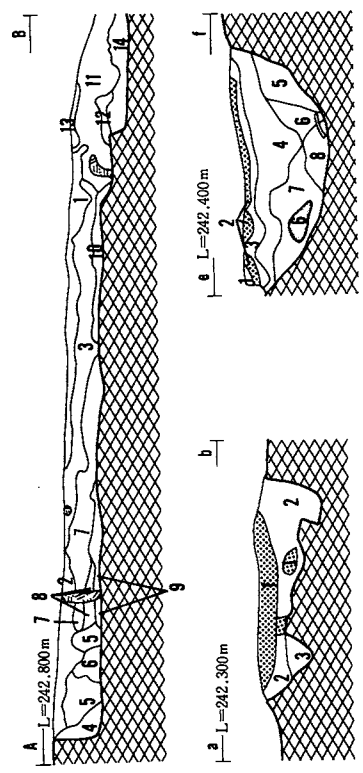
その他小ピットP₁₈から鉄滓250gが出土した。(写真図版66、11~18)

〈罎の羽口〉小ピットP₁₈から鉄滓と共に、破片2点が出土した。(第62図12・13)同一個体と考えられる。いずれも小破片のため詳細は不明であるが、残存部から径6.5cmの円筒形と、径2.3cmの通風孔が想定される。器面は粗いナデ調整が施され、12の表面には、僅かにガラス質の物質の付着がみられる。

〈石器〉埋土から剝片石器2点が出土した。第63図5は側縁部から尖頭部にかけて刃部加工



- A-B 土性**
- 1 10VR% 黒褐色土 含、バミス、炭化物(少量)。
 - 2 10VR% 黒褐色土 含、バミス、炭化物(少量)。
 - 3 10VR% 黒褐色土 含、バミス、炭化物(少量)。
 - 4 10VR% 黒褐色土 含、バミス、炭化物(少量)。
 - 5 10VR% 黒褐色土 含、バミス、炭化物(少量)。
 - 6 10VR% 黒褐色土 含、バミス、炭化物(少量)。
 - 7 10VR% 黒褐色土 含、バミス、炭化物(少量)。
- 土性**
- 8 10VR% 黒褐色土 含、炭化物、焼土(40%)。
 - 9 10VR% 暗褐色土 含、炭化物、焼土(5%)。
 - 10 10VR% 黒褐色土 含、炭化物、焼土(5%)。
 - 11 10VR% 黒褐色土 含、炭化物、焼土(1%)。
 - 12 10VR% 黒褐色土 含、バミス(1%)。
 - 13 10VR% 黒褐色土 含、炭化物、焼土(1%)。
 - 14 10VR% 黒褐色土 含、バミス(1%)。



- a-b 土性**
- 1 2.5VR% 赤褐色土 (焼土)。
 - 2 7.5VR% 暗褐色土 含、焼土。
 - 3 7.5VR% 暗褐色土

- c-d 土性**
- 1 2.5VR% 赤褐色土 (焼土)。
 - 2 5VR% 暗褐色土 含、焼土。
 - 3 7.5VR% 暗褐色土

- 土性**
- 1 7.5VR% 暗褐色土 (焼土)。
 - 2 2.5VR% 赤褐色土 含、焼土。
 - 3 5VR% 暗褐色土 含、炭化物(少量)。
 - 4 7.5VR% 暗褐色土 含、炭化物(少量)。
 - 5 7.5VR% 暗褐色土 含、炭化物(少量)。
 - 6 7.5VR% 暗褐色土 含、炭化物(3%)。
 - 7 7.5VR% 暗褐色土 含、炭化物(1%)。
 - 8 7.5VR% 暗褐色土

P.No.		P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	(cm)			
径	深	17	14	17	18	18	25	17	25	17	16	21	22	17	24
径	深	4	14	27	47	28	30	10	31	30			22	43	74
P.No.	径	14	18	22	15	14	20	42	40	60			24	47	20
深	径	13	18	22	15	14	20	42	40	60			24	47	20
深	径	13	18	22	15	14	20	42	40	60			24	47	20
深	径	13	18	22	15	14	20	42	40	60			24	47	20

第33図 II F-8住居址

された、凸刃の削器である。他の部分には第1次剝離面を大きく残している。6は剥片で、使用痕などは認められない。

〈その他〉壁際の床面直上から多量の炭化した栃の実が出土した。(写真図版67)

時期 出土した土師器から、平安時代の住居址と考えられる。

II F-9 住居址

遺構 (第34図・写真図版34)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で黒色土の広がりとして検出された。精査の結果径60cmの良く焼けた現地性焼土が検出され住居址と認定したが、II F-2・6・7住居址と重複しており、僅かに南壁及び西壁の一部が検出されただけで、明確なプランは把握できなかった。またII F-6・7住居址との新旧関係も不明である。

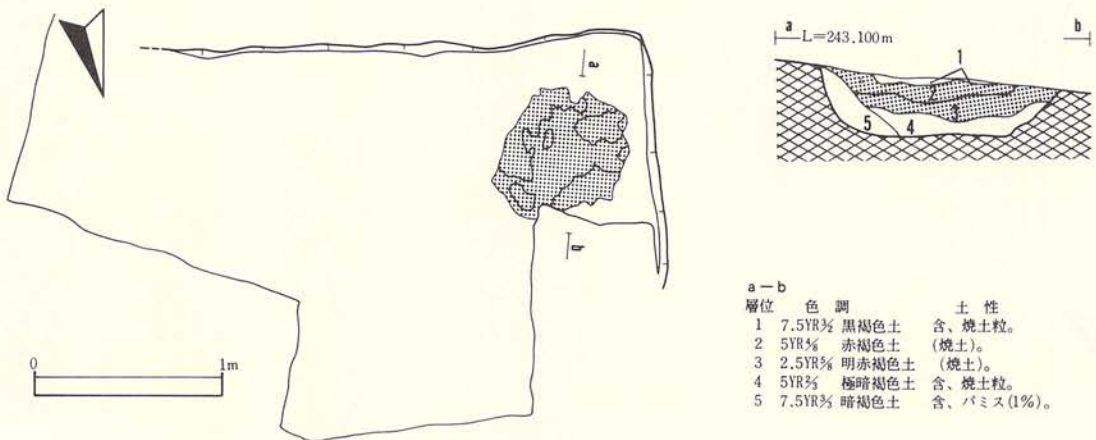
〈埋土〉パミスを僅かに含む黒色土の単層である。

〈壁〉南壁と西壁の一部が検出されたにすぎない。ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は南壁で11cm、西壁で10cmである。

〈床面〉平坦であるが、壁際以外の部分は硬くしまるものではない。

〈焼土〉南西隅に径60cmの円形に分布する。良く焼けており、厚さは最大で23cmに達する。周辺部にはカマドを想定させる痕跡はなく、当焼土がカマドの燃焼部であるかどうかは不明である。

〈主軸方向〉焼土をカマド跡と想定すると、西カマドの場合W-14°-N、南カマドの場合S-14°-Wとなる。



第34図 II F-9 住居址

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。検出面や検出状況から平安時代の遺構ではないかと考えられる。

III E-1 住居址

遺構 (第35・36図・写真図版35・36)

〈検出状況・重複関係〉第IV層面で黒色土の広がりとして検出された。北東隅でIII E-3 陥し穴状遺構と重複しこれを切っている。また、後世の攪乱を多く受けている。

床面や埋土下位から現地性焼土や炭化物が検出され、焼失した住居址と考えられる。しかし、炭化材の残存状態は良好ではない。

〈規模・平面形〉東西5 m、南北5.3mの長方形を呈する。

〈埋土〉攪乱を受けている部分が多いが、自然堆積の様相を示し、焼土粒や炭化物を含む黒色土～暗褐色土で構成されている。壁際の埋土中や床面には、十和田 a 降下火山灰のブロックの分布がみられた。

〈壁〉ほとんどの部分でほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南壁18cm、東壁35cm、北壁12cm、西壁15cmである。

〈床面〉攪乱を多く受けているが、全体に暗褐色土・黒褐色土による混合土の貼り床が施され、硬くしまっている。貼り床は南壁沿いと東壁沿い南半部では厚く、この部分は特に硬い。

〈柱穴〉 P_1 ～ P_4 の4本が検出された。 P_1 ・ P_2 は南壁際に位置し、配置は長方形となる。いずれも明瞭な掘り方及び柱あたりが観察され、特に P_2 では柱根の部分が空洞となっていた。

〈カマド〉南壁東寄りに1基が築かれる。残存状態は悪く、天井部を構成していたと考えられる扁平な凝灰岩と袖部の芯材に用いたと考えられる砂岩及び、これらを覆う粘土質シルトの広がりを残すだけである。燃烧部は63×47cmの範囲で、最大6cmの厚さに焼土が発達している。煙道部は燃烧部から緩く傾斜して煙出し部に続く。煙出し部は、壁を斜めに削り外傾して立ちあがる。壁際には62×53cmの範囲で焼土粒や炭化物を僅かに含む黒色土の広がり、礫2個が検出されたが、上部の構造は想定できない。

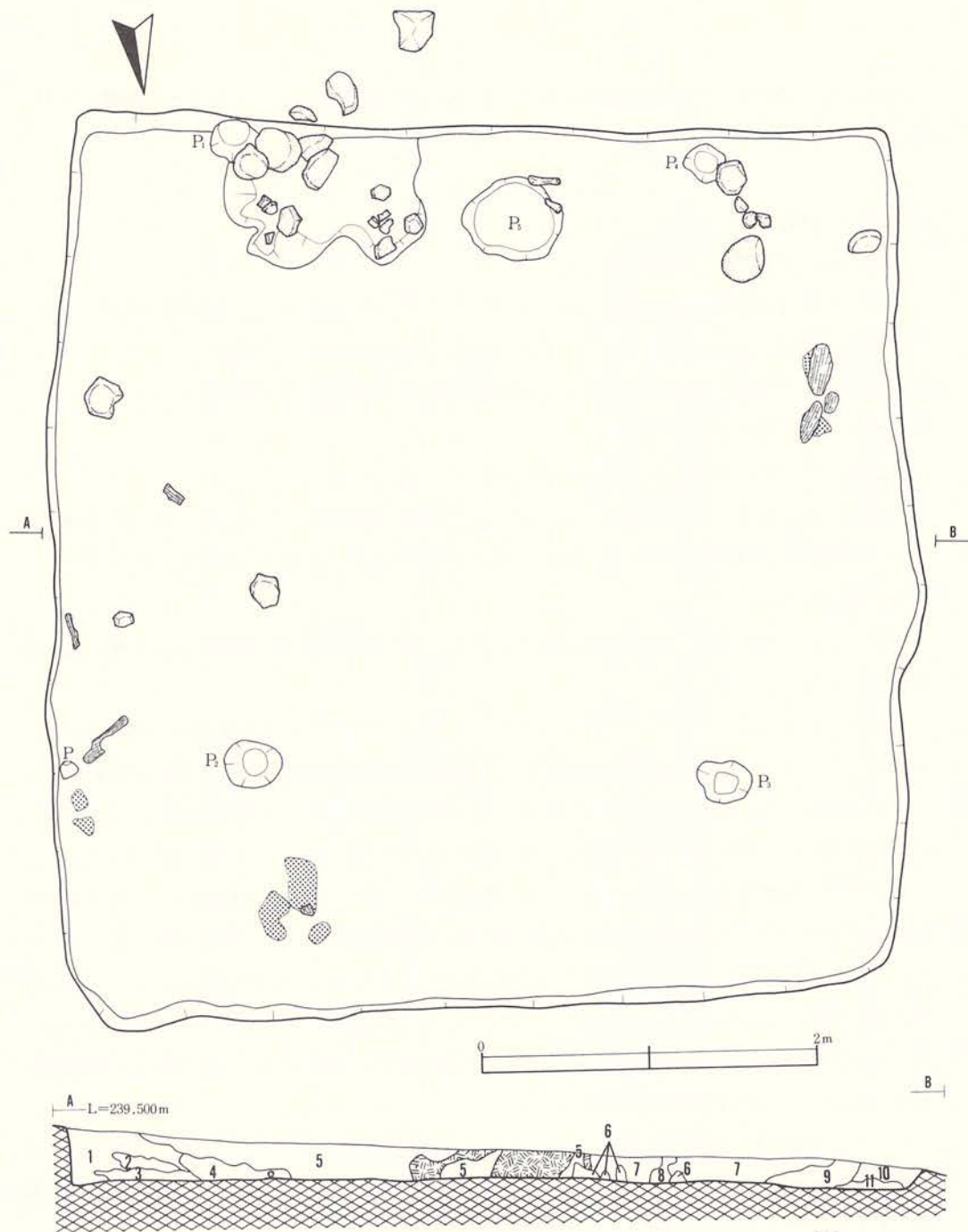
〈その他〉南壁際の中央部に60×50cm、深さ20cmの不整な楕円形を呈するピット P_5 が検出された。埋土は黒褐色土や黄褐色土による混合土で構成されている。詳細は不明であるが、位置的にみて貯蔵穴の可能性はある。

〈主軸方向〉S-9°-Wでほぼ南を指す。

遺物 (第63・64図・写真図版68・69)

床面及び埋土から土器と土製品が出土した。

〈土器〉土器には土師器・縄文土器・弥生土器がある。第63図7～8・第64図1～8は土師

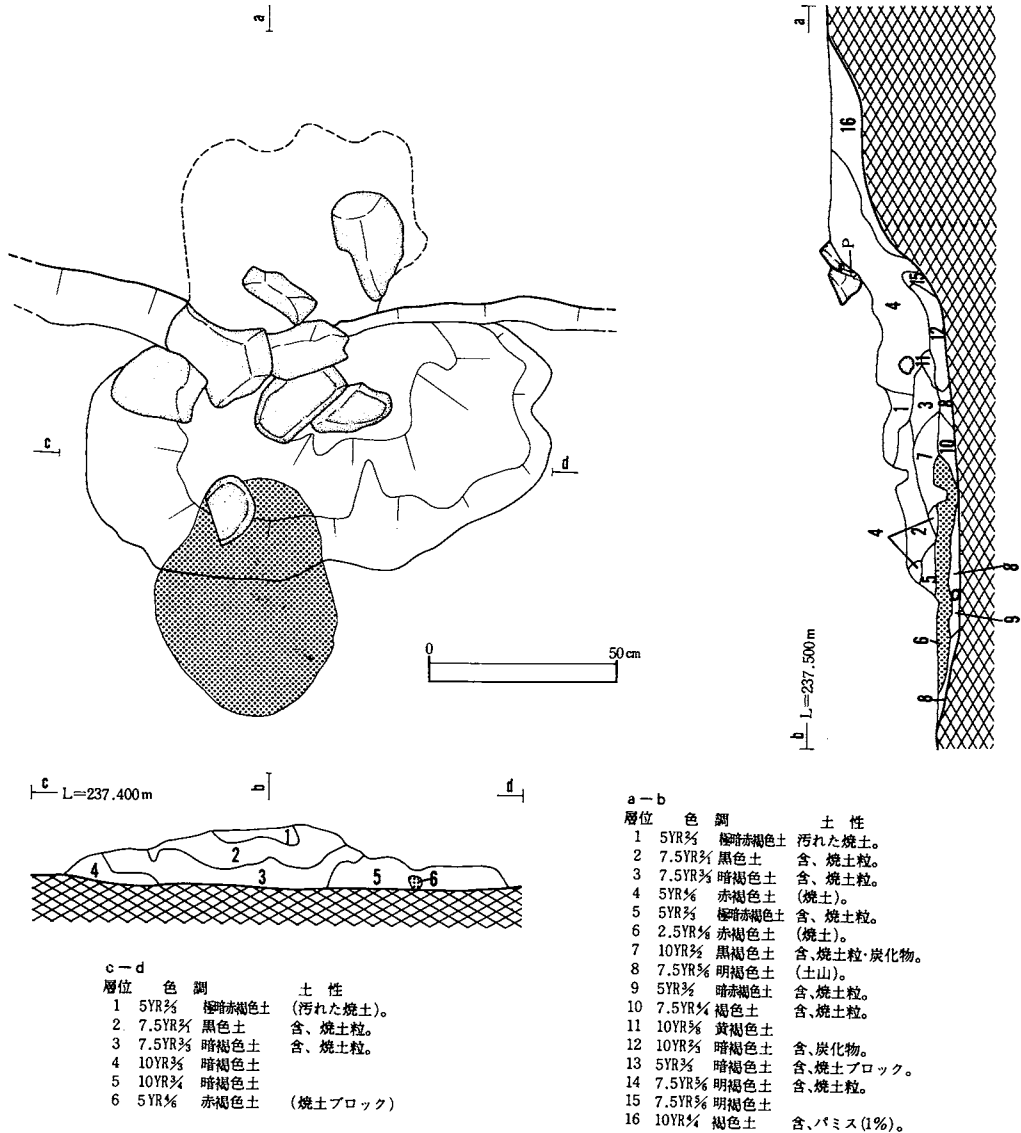


- A-B
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|-------------------------|----------------|
| 1 | 10YR $\frac{3}{2}$ 暗褐色土 | 含、炭化材・焼土。 |
| 2 | 10YR $\frac{3}{2}$ 黒褐色土 | 含、To-a。 |
| 3 | 10YR $\frac{3}{2}$ 黒色土 | 含、炭化物。 |
| 4 | 10YR $\frac{3}{2}$ 黒褐色土 | 含、バミス(少量)。 |
| 5 | 10YR $\frac{3}{2}$ 黒色土 | 含、焼土粒・バミス(少量)。 |
| 6 | 7.5YR $\frac{5}{6}$ 褐色土 | (汚れた火山灰)。 |
| 7 | 10YR $\frac{3}{2}$ 黒色土 | |

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|-------------------------|------------|
| 8 | 10YR $\frac{3}{2}$ 黒色土 | |
| 9 | 10YR $\frac{3}{2}$ 暗褐色土 | 含、バミス(少量)。 |
| 10 | 10YR $\frac{3}{2}$ 黒褐色土 | 含、バミス(少量)。 |
| 11 | 10YR $\frac{3}{2}$ 褐色土 | 含、バミス(少量)。 |

P No.	(cm)			
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径	30	35	33	24
深	25	28	27	23
	48	57	44	40

第35図 Ⅲ E-1 住居址(1)



第36図 III E-1 住居址(2)

器の甕形土器である。大部分はカマドの周辺に集中して検出された。第63図7は東壁際の床面から出土した小型の甕である。底部は平底で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、そのまま口縁部に続く。底部内面は盛り上がり、底面には木葉痕がみられる。口縁部内外面はヨコナデ、体部は粗いナデ調整が施されている。8は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は短く、僅かに外傾する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。9は長胴の甕である。体部は緩く内湾し、中央部に最大径をもつ。口縁部は短く、直立する。体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。第64図1～6は口縁部片である。1・3・

5は口縁部が短く外反、または外傾する。2は内湾し、4は直立する。調整はいずれ口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。7・8は底部である。どちらも平底で張り出しはもたず、体部は外傾して立ち上がる。

第64図9・10は、埋土から出土した縄文土器である。9は注口土器の注口部で、上半部と先端を欠損する。無文で、全体は雑に磨かれている。10も注口土器であるが、注口部を欠損する。器面は丹念に研磨され、浮彫り的な文様が描かれている。11は弥生土器片である。小さな山形口縁を呈するものと考えられ、沈線によって変形工字文が描かれている。また、口縁部内面にも沈線が巡る。

〈土製品〉埋土から鐸形土製品が1個出土した。(第64図12) 上端部を欠損し、ツマミの有無は不明である。口縁部には沈線区画された連続刺突文が巡り、体部には沈線によって曲線文が描かれている。

時期 出土した土師器から、平安時代の住居址と考えられる。

V F-1 住居址

遺構 (第37・38図・写真図版37・38)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で、白頭山火山灰・十和田 a 降下火山灰を含む黒色土の広がりとして検出された。住居址中央部は、柱平遺跡と接する町道にかかり、詳細な調査はできなかった。

床面及び埋土下位から現地性焼土や炭化材が検出され、焼失した住居址と考えられる。

〈規模・平面形〉南北5～5.3m、東西5mで東壁がやや短い台形を呈する。

〈埋土〉2層に大別される。上位は暗褐色土・下位は焼土や炭化物を含む黒色土で構成される。これらの層の間には白頭山火山灰、下位の黒色土中には十和田 a 降下火山灰のブロックが含まれる。

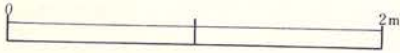
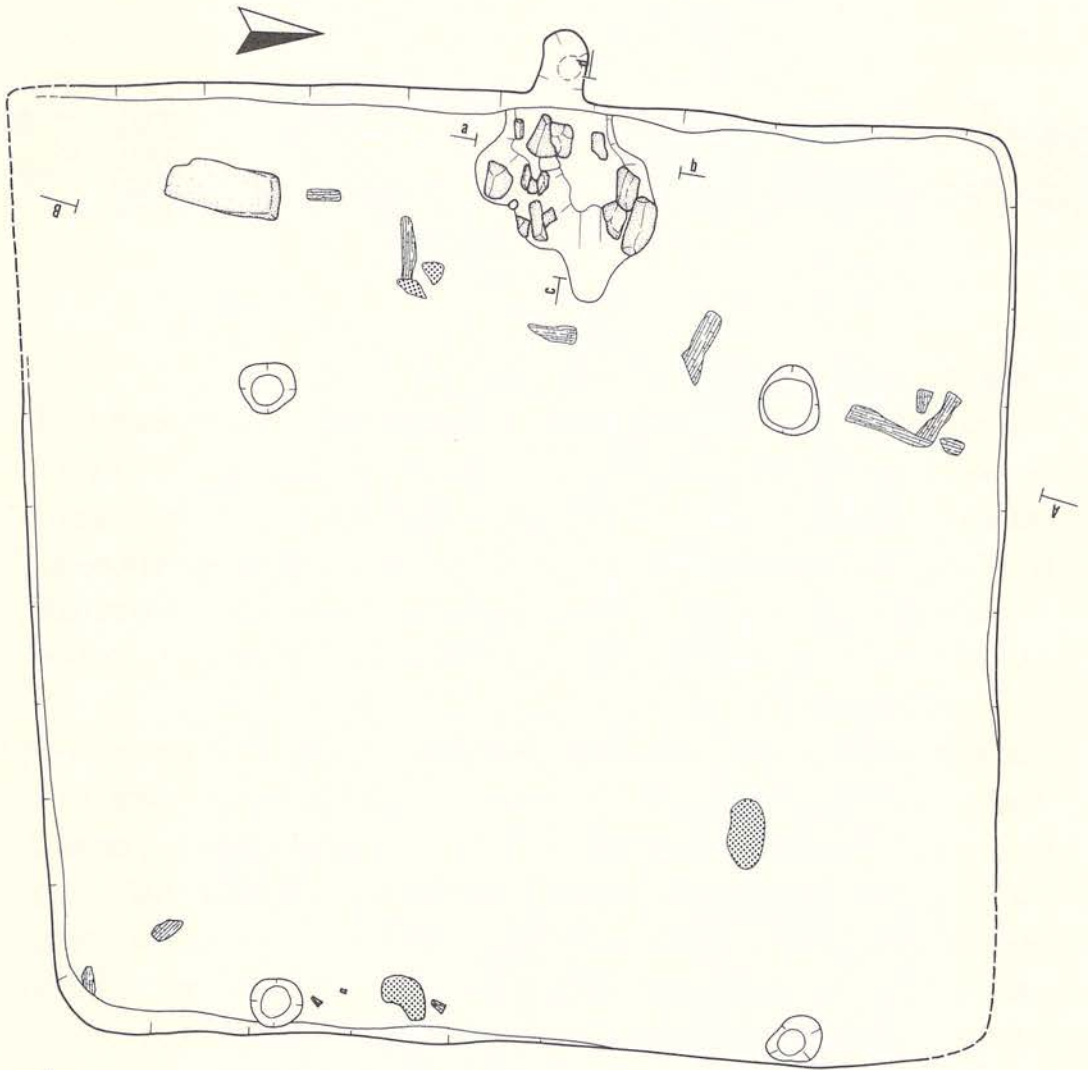
〈壁〉調査時に削平を受けた部分も多いが、残存する所ではいずれもほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁で9cm、北壁で19cm、西壁19cmである。

〈床面〉全体に褐色土で貼り床が施され、平担で硬くしまっている。

〈柱穴〉 P_1 ～ P_4 の4本が検出され、この4本で正方形の配置を示す。 P_3 ・ P_4 は東壁際に位置している。

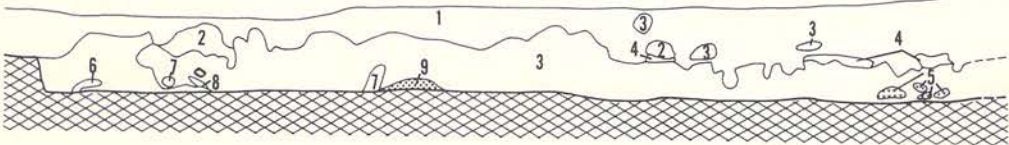
〈カマド〉西壁中央部に1基もつ。天井部は崩落しているが、両袖部の芯材は残存している。燃焼部には50×40cmの範囲で最大5cmの厚さで焼土が発達している。煙道部は短く、壁際で立ち上がる。煙出し部は僅かな凹みを残すだけで、明確に把握できなかった。

〈主軸方向〉 $W-2^{\circ}-N$ でほぼ真西を指す。



P No.	(cm)		
	P ₁	P ₂	P ₃
径	31	37	28
深	28	33	26
	52	42	68

A — L=247.500m

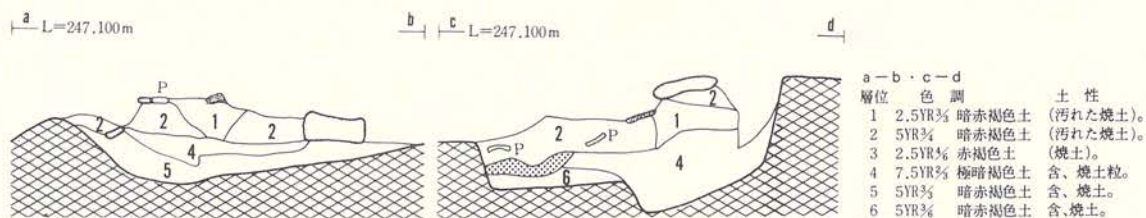


A-B

層位 色調 土性
 1 10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土 含、粘土・礫(道路)。
 2 10YR $\frac{3}{4}$ におい黄橙色 (白頭山火山灰)。
 3 10YR $\frac{3}{4}$ 黒色土 含、炭化物・焼土。
 4 10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土
 5 10YR $\frac{3}{4}$ におい黄橙色(To-a)。

層位 色調 土性
 6 5YR $\frac{3}{4}$ 極暗赤褐色 (汚れた焼土)。
 7 10YR $\frac{3}{4}$ 褐色土
 8 10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土
 9 5YR $\frac{3}{4}$ 赤褐色土 (焼土)。

第37図 VF-1住居址(1)



第38図 VF-1住居址(2)

遺物 (第64・65図、写真図版69・70)

遺物は土器だけである。土師器と須恵器があり、土師器には坏形土器と甕形土器がある。第64図13は土師器の坏形土器で、底部を欠く。ロクロ成形され、体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部付近で緩く外反する。外面にはロクロ痕を残し、内面は放射線状のヘラミガキが施され、黒色処理されている。14は器面調整をもたない坏形土器で、所謂「赤焼き土器」「須恵系土器」といわれるものに分類される。ロクロ成形され、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は緩く外反する。底部の切り離し技法は回転糸切りで、この後体部下端から底面にかけて、手持ちヘラケズリの再調整が施されている。

第64図15・第65図1・2はロクロ成形された甕形土器である。体部は中央部がやや膨らむがほぼ直立し、口縁部は強く外傾して開く。口唇部は上方に挽き出されている。上半部はロクロ痕だけであるが、中央部から下位には外面に浅いヘラケズリ、内面には縦方向のナデ調整が施されている。第65図1は大型の甕で、体部は上方で緩く内湾する。口縁部は強く外傾し、口唇部は上方に挽き出されている。体部中央から下位には、外面にヘラケズリ、内面にはナデ調整が施されている。2は大型甕で、体部中央部に最大径をもつ。口縁部は強く外反し、口縁部は上方に挽き出されている。口縁部内面はヨコナデ、体部内面はナデ調整が施されている。3はロクロ不使用の小型甕である。底部は外方に張り出しをもち、体部は内湾ぎみに立ち上がり、体部上半部から緩く窄み、口縁部は外反する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。

4は須恵器の小型壺である。ロクロ成形され、体部は外傾して立ち上がった後、中央部から内傾し、口縁部は短く強く外反する。口唇部は上方に短く挽き出されている。底面内側は小突起状のコブをもつ。胎土には小石を含み、焼成もあまり良くない。

時期 出土遺物から、平安時代の住居址と考えられる。

II F-10住居址状遺構

遺構 (第39図・写真図版38)

〈検出状況・重複関係〉 第VI層に相当する面で、十和田 a 降下火山灰を含む黒色土の広がり

として検出された。東側でII F-7住居址を切っている。また、中央部でII F-1ピットと重複し、この埋土を床面としている。斜面下位にあたる北東部は流失しており、南西部分のみが検出された。

当遺構は規模も小さく、カマドや炉も検出されていないことから、住居址状遺構として扱った。

〈規模・平面形〉 残存する壁から推定して、径2.8m 前後の不整円形か、東西方向に長い不整楕円形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉 2層に大別される。上位は十和田 a 降下火山灰のブロックを僅かに含む黒色土、下位は黄褐色土・褐色土による混合土で構成されている。この混合土はII F-7住居址の埋土中にも堆積する。

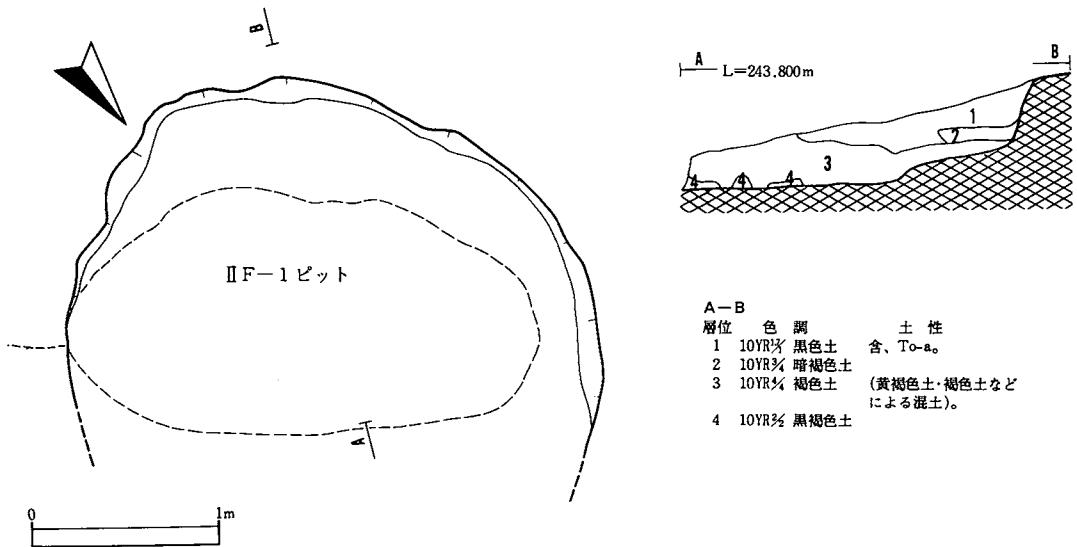
〈壁〉 いずれもほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南壁37cm、南西壁34cm、東壁16cmである。

〈床面〉 全体に斜面下位にあたる北東方向に傾斜しているが、凹凸はない。II F-1ピットと重複する部分では、この埋土をそのまま床面としており軟らかいが、壁際は硬くしまっている。

遺物 (第65図・写真図版70)

床面と埋土から土師器の甕形土器片が出土した。(第65図5)口縁部片で、僅かに内湾する体部からそのまま口縁部に続く。粗雑な作りで、内面には輪積み痕を残す。外面は口縁部まで粗いヘラケズリ、内面は粗いナデ調整が施されている。この他に体部片が埋土より出土している。(写真図版70・6~11) いずれも外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。

時期 出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。



第39図 II F-10住居址状遺構

(2) ピット

I E-1ピット (第40図・写真図版39)

〈検出状況〉第II層面で、白頭山火山灰のブロック及び炭化物を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉開口部径1.25×1.13m、底部径1.06×1.03mの不整な円形を呈する。深さは最深部で10cmである。壁は底面から僅かに外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦であるが、斜面下位にあたる北方向に緩く傾斜する。

〈埋土〉上位は白頭山火山灰のブロック・炭化物を含む黒褐色土、下位は十和田 a 降下火山灰のブロック・炭化材を含む褐色土で構成されている。

〈焼土〉底面及び埋土最下位から現地性焼土が検出された。焼土は65×60cmの範囲に最大7cmの厚さで形成されている。ピット及び焼土の性格については不明である。

II F-1ピット (第40図・写真図版39・40)

〈検出状況・重複関係〉重複するII F-10住居址状遺構の床面から検出された。東側では同住居址状遺構と共に、平安時代のII F-7住居址を切っている。なお、周辺部には人為的堆積と考えられる明褐色土や黒褐色土から成る汚れた混合土が広く分布し、北東側でこの土層を掘り込んでつくられている。このため、埋土との識別がつきにくく、北東側分は一部を残して大きく掘り過ぎている。

〈規模・平面形〉残存する壁から推定して長軸2.25m、短軸1.83mの不整な楕円形を呈するものと考えられる。

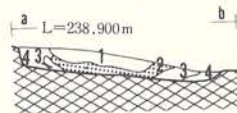
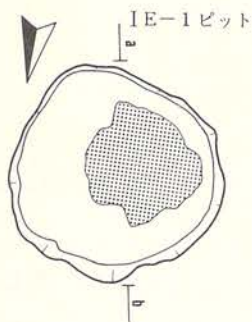
〈埋土〉主体は汚れた混合土で、下位に黒色～黒褐色土が堆積する。また、底面及び埋土最下部一面に炭化植物遺体が分布していた。植物遺体中には多量の炭化種子や炭化糲が含まれていた。

〈壁〉短軸側の南西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、長軸側の北西壁は外傾して立ち上がる。壁高は南西壁で40cm、北西壁で42cmである。

〈底面〉凹凸が著しいが、全体に硬くしまっている。

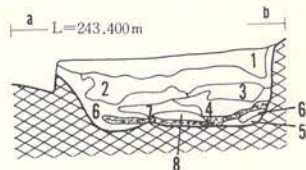
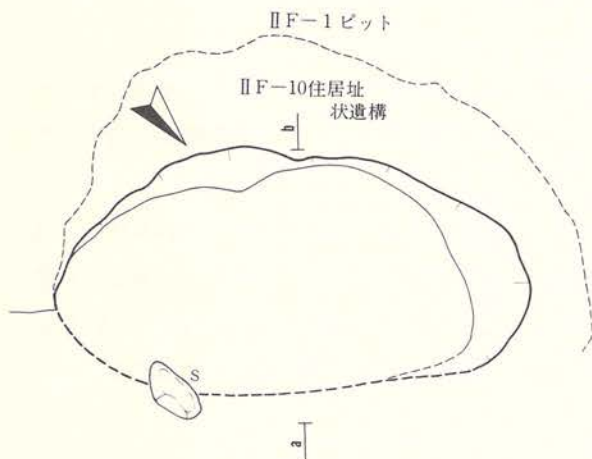
遺物 底面から土師器の甕形土器の口縁部片が出土している。(第65図6・写真図版71) ロクロ不使用のもので、口縁部は短く外方に開く。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。

時期 重複関係や遺物から平安時代の遺構と考えられる。なお、底面から検出された炭化植物遺体の¹⁴C年代は、1780±120y.B.P.であり推定される時代よりかなり古い数値を示している。



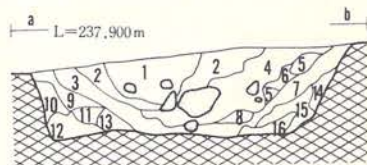
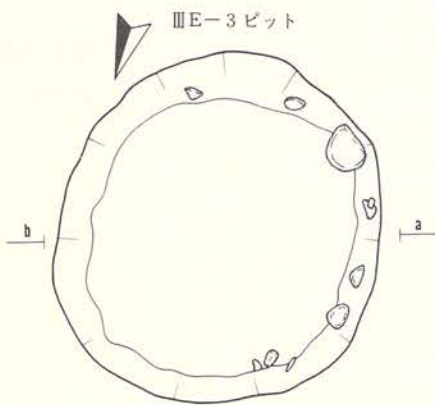
a-b

層位	色調	土性
1	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	含、白頭山火山灰・炭化物(3%)。
2	5YR $\frac{5}{4}$ 赤褐色土	(焼土)。
3	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	含、炭化物(20%)。
4	10YR $\frac{4}{4}$ 褐色土	含、To-a・炭化物(3%)。



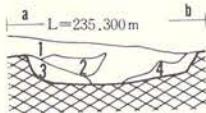
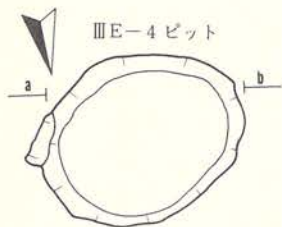
a-b

層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	(褐色土・黄褐色土の混土)。
2	7.5YR $\frac{4}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)。
3	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	
4	10YR $\frac{2}{4}$ 暗褐色土	(汚れた火山灰)。
5	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	
6	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	
7	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	含、パミス(少量)。
8	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	含、パミス(1%)。



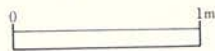
a-b

層位	色調	土性
1	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	含、礫。
2	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	含、パミス(少量)。
3	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	含、To-a。
4	10YR $\frac{2}{4}$ 暗褐色土	含、To-a・パミス(少量)。
5	10YR $\frac{2}{4}$ 暗褐色土	(黄褐色土・黒褐色土の混土)。
6	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	
7	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	
8	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	
9	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	
10	10YR $\frac{2}{4}$ 褐色土	
11	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	
12	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	
13	10YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	
14	10YR $\frac{2}{4}$ 褐色土	
15	10YR $\frac{2}{4}$ 暗褐色土	
16	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	



a-b

層位	色調	土性
1	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	
2	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	(砂質土)。
3	10YR $\frac{2}{4}$ 黒色土	
4	10YR $\frac{2}{4}$ 褐色土	(汚れた火山灰)。



第40図 I E-1、II F-1、III E-3・4ピット

III E-3 ピット (第40図・写真図版40)

〈検出状況〉第IV層面で周囲に十和田 a 降下火山灰を伴う黒色～黒褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉開口部は1.9×1.7mの不整円形であるが、底部は1.5×1.4mの隅丸方形で、本来は隅丸方形を呈していたものと考えられる。壁はいずれも底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦であるが、硬くしまるものではない。

〈埋土〉自然堆積の様相を示し、3層に大別される。上位は黒色～黒褐色土、中位は十和田 a 降下火山灰のブロックを含む黒褐色土、下位は汚れた火山灰を主体とする黒褐色～褐色土で構成されている。

遺物 埋土から縄文土器片が出土している。(第65図7～11・写真図版71) 7～10は前期の土器片で、胎土に植物繊維を含む。7・8・10は地文に結束羽状縄文をもつ。9は尖底あるいは丸底を呈す深鉢の底部付近の破片と考えられ、地文にはLRの単節斜縄文が施されている。11は弥生土器と考えられる。色調は全体に赤褐色を呈し、地文はLRの単節縄文が横走する。

III E-4 ピット (第40図・写真図版40)

〈検出状況〉IV層面で黒色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉開口部径110×90cm、底部径95×75cmの不整な楕円形を呈する。深さは最深部で15cmである。壁はいずれも、床面から外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。

〈埋土〉上位は砂を含む黒色土、下位は黒褐色土で構成されている。

4 中・近世の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

Ⅲ E-2 住居址

遺構 (第41図・写真図版41)

〈検出状況〉 第Ⅳ層面で黒色土の広がりとして検出された。

〈規模・平面形〉 南北3.3m、東要2.6mの長方形を呈し、北西隅に55×70cmの出入口と考えられる張り出しをもつ。

〈埋土〉 壁際に黒褐色土が堆積するほかは、パミスを僅かに含む黒色土で構成されている。

〈壁〉 いずれもほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁16cm、西壁6cm、南壁9cm、北壁13cmである。

〈床面〉 全体に平坦で硬くしまっている。出入口は床面から緩く傾斜して検出面に続き、非常に硬くしまっている。

〈柱穴〉 $P_1 \sim P_7$ の7個が検出された。このうち、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_5$ は各壁の隅際に、 $P_3 \cdot P_6$ は東壁及び西壁際の中央やや南寄りに位置し、これらが支柱穴を構成している。なお、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_5$ ではピットの重複がみられ、建て替えが行なわれた可能性がある。

時期 供伴する遺物はなく、時期を決定する資料を欠くが、形態の特徴から中世の住居址と考えられる。

(2) その他の遺構

Ⅲ E-1 柱穴群

遺構 (第42図・写真図版42)

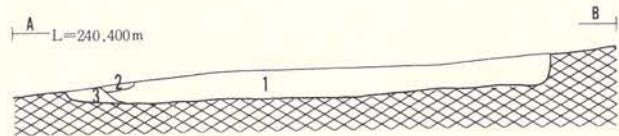
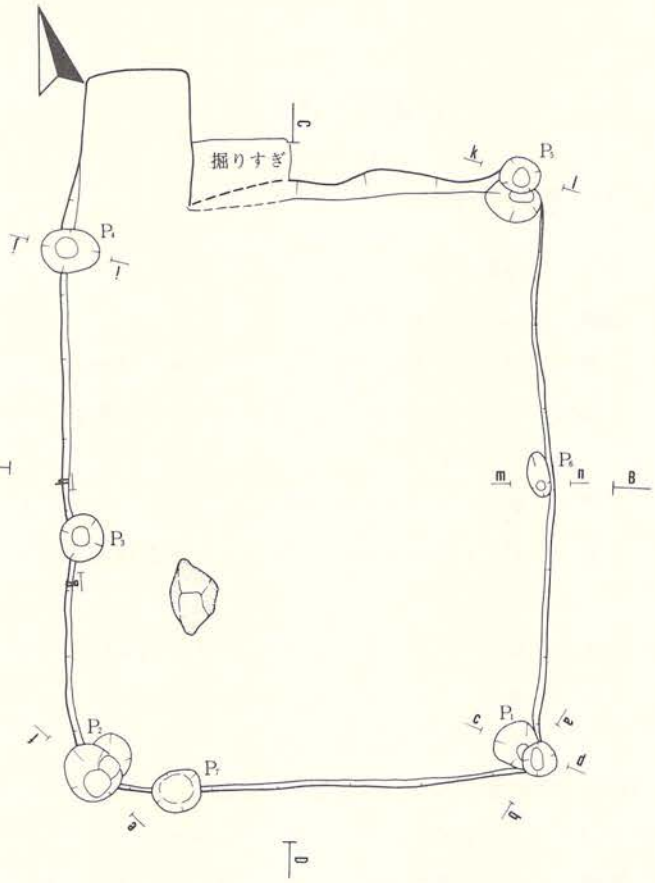
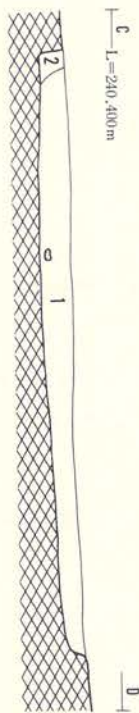
〈検出状況〉 Ⅳ層面で検出された。

〈配置〉 柱穴状ピットは32個が検出された。これらのうち、 $P_1 \sim P_{13}$ を結ぶ桁行3間(3.3m)梁行3間(2.8m)、桁行の柱筋が北北東を示す建物跡も想定されるが、各柱間の距離は80cm～130cmとバラツキがある。このほか、 $P_{13} - P_{15} \sim P_{18} \cdot P_{14} - P_{20} \sim P_{27} \cdot P_{27} \sim P_{32} \cdot P_{32} - P_{26} - P_{23}$ は同一線上に並ぶ。

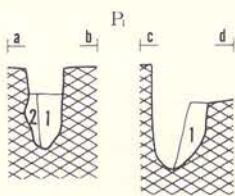
〈埋土〉 ほとんどが黒色土の単層であるが、掘り方をもつ柱穴では、明褐色土や黒色土の混合土が柱あたりの周囲に堆積する。

時期 時期決定資料を欠き詳細は不明であるが、検出面や柱穴の埋土が類似することから、北東5mに位置するⅢ E-2 住居址と関連するものかも知れない。

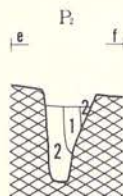
C-D
 層位 色調 土性
 1 7.5YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土 含、バミヌ(少量)。
 2 7.5YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土 含、褐色土(少量)。



A-B
 層位 色調 土性
 1 7.5YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土 含、バミヌ(少量)。
 2 7.5YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土
 3 7.5YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土 含、褐色土(少量)。



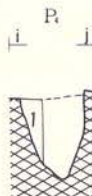
a-b-c-d
 層位 色調
 1 10YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土
 2 10YR $\frac{7}{2}$ 褐色土



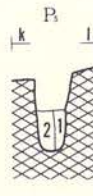
e-f
 層位 色調
 1 10YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土
 2 10YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土



g-h
 層位 色調
 1 10YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土
 2 10YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土



i-j
 層位 色調
 1 7.5YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土



k-l
 層位 色調
 1 10YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土
 2 10YR $\frac{7}{2}$ 褐色土

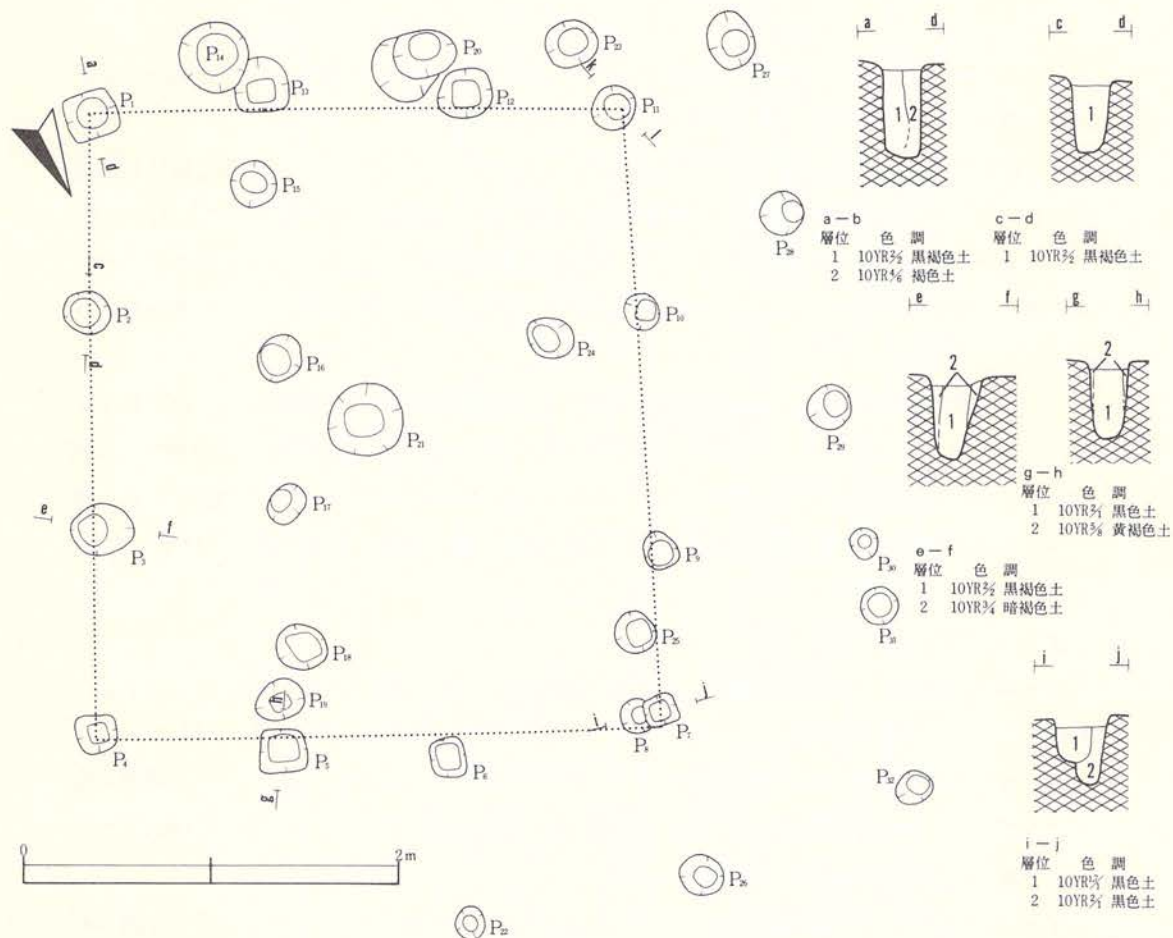


m-n
 層位 色調
 1 10YR $\frac{7}{2}$ 黒褐色土

(cm)

P.No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径	20	32	25	31	21	25	26
深	19	28	23	24	19	11	23
	43	49	33	48	38	21	37

第41図 III E-2住居址



P No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	
径	29	25	34	22	26	22	17	20	21	25	31	29	29	38	25	26
深	50	37	43	71	41	40	24	40	30	39	45	49	54	63	31	31

P No.	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄
径	23	28	28	34	41	18	27	25	22	25	31	24	24	17	20	20			
深	32	37	22	37	54	25	38	50	27	32	41	34	37	20	34	33			

第42図 III E-1 柱穴群

貯水槽跡・暗渠

遺構 (第43図・写真図版42~44)

〈検出状況・重複関係〉 表土を除去した段階で、不整形のピット及び2条の粘土帯が検出された。精査の結果、貯水槽とこれに伴う給水・排水用の暗渠からなる水道施設の跡であることが確認された。給水用の暗渠は、時期不明の I E-2・3 ピットに切られている。また、貯水槽は、平安時代の I E-5 住居址の南西壁を切っている。沢に接する部分では、湧水を利用するための後世の諸施設によって大きく攪乱され、暗渠の取水口及び排水口は検出できなかった。

〈規模・形状・埋土〉貯水槽跡は1.35×1.05m、深さ1.1mの円形の掘り方に、径80cm、深さ76cmの樽状の容器を粘土で埋設して構築されている。木製部分はほとんど残存していないが、周囲の粘土には上下2段に籬の痕跡が認められた。埋土は4層に大別される。最上位は黒褐色土、上位は、人為的に投げ込まれたと考えられる汚れた灰、中位も人為的な堆積による黒色土、下位は砂を含む黒褐色土で構成されている。貯水槽と給水溝は貫通孔によって接続されるが、排水溝との接続部には孔はなく、貯水槽の開口部に2個の細長い礫が設置されているだけである。

2本の暗渠は幅35cm、深さ25cmの掘り方に細長い自然礫を並べて水路を作り、これに扁平な礫によって蓋をし、さらにこれを粘土で覆って構築されている。給水溝は残存長9.4mで、湧水から貯水槽に向かって直線状に延びている。残存部での水路両端の比高差は18.4cmである。排水溝は残存長8.1mで、貯水槽から南東方向に延びた後、緩く屈曲して給水溝とほぼ平行する。水路の比高差は12cmである。

遺物（第65図・写真図版71）

貯水槽の埋土として底面から播鉢と古銭が6点出土した。第65図12・13は埋土から出土した播鉢片である。12は口縁部片で、13は体部片であるが、胎土その他から同一個体と考えられる。ロクロ成形され、外面にはロクロ痕を残す。平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに内湾する。口縁部内外面に段を有し、口唇部は外方に挽き出されている。内面には幅1.5～2mmの条痕が口唇部下4cmまで搔き上げられている。

写真図版71、9～14は底面から出土した古銭である。いずれも鉄銭で、錆化が著しく銘は判読できない。孔が方形を呈すものであり、寛永通寶である可能性が高い。

時期 詳細は不明であるが、底面から出土した古銭から、江戸時代の遺構ではないかと考えられる。

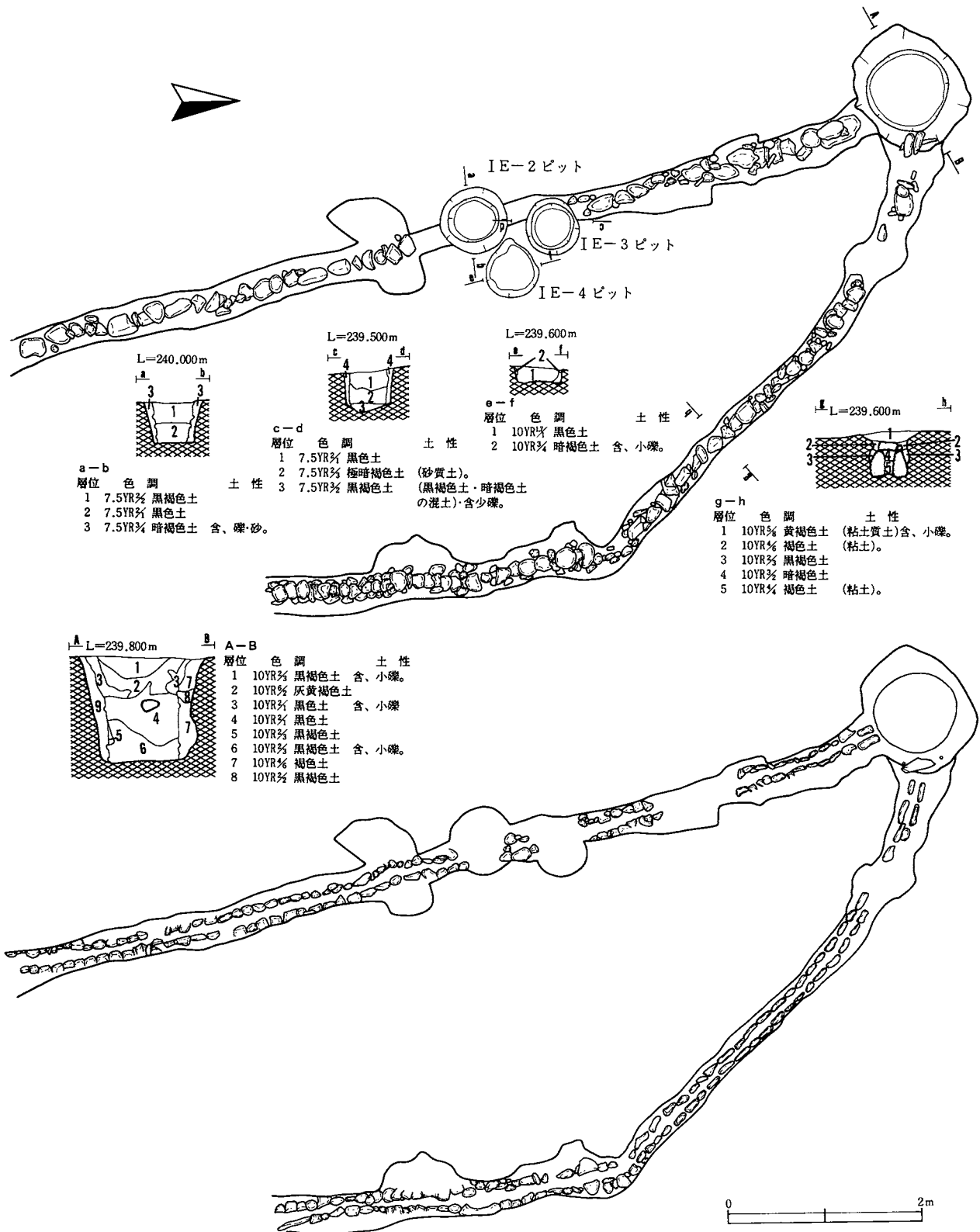
I E-2ピット（第43図・写真図版45）

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で暗褐色土に囲まれた黒褐色土の広がりとして検出された。江戸時代の遺構と考えられる暗渠を切っている。性格は不明である。

〈規模・平面形〉径70cm、深さ45cmの掘り方に、径45cm、深さ42cmの樽状の容器を埋設した遺構である。木質部は、底面に僅かに残存するだけである。また、周囲の暗褐色土には3本の籬の痕跡が認められる。

〈埋土〉上位は黒褐色土、下位は黒色土で構成されている。

〈時期〉江戸時代の遺構と考えられる暗渠を切ることから、近世以降のものと思われるが詳細は不明である。



第43図 貯水槽跡・暗渠、IE-3・4・5ピット

I E-3 ピット (第43図・写真図版45)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で暗褐色土に囲まれた黒色土の広がりとして検出された。江戸時代の遺構と考えられる暗渠を切っている。性格は不明である。

〈規模・平面形〉径60cm、深さ43cmの掘り方に、径40cm、深さ35cmの木製容器を埋設した遺構である。木質部は底面及び壁面に僅かに残存するだけである。

〈埋土〉上位が黒色土・下位が暗褐色土で構成されている。

〈時期〉江戸時代の遺構と考えられる暗渠を切ることから、近世以降のものと考えられるが詳細は不明である。

I E-4 ピット (第43図・写真図版45)

〈検出状況・重複関係〉表土を除去した段階で、黒色土の広がりとして検出されたが、精査時の不手際により上半部を削平している。

〈規模・平面形〉径55cm、深さ28cmの円筒状を呈するが、底部に木質部が残存することから木製容器を埋設した遺構であったと推定される。

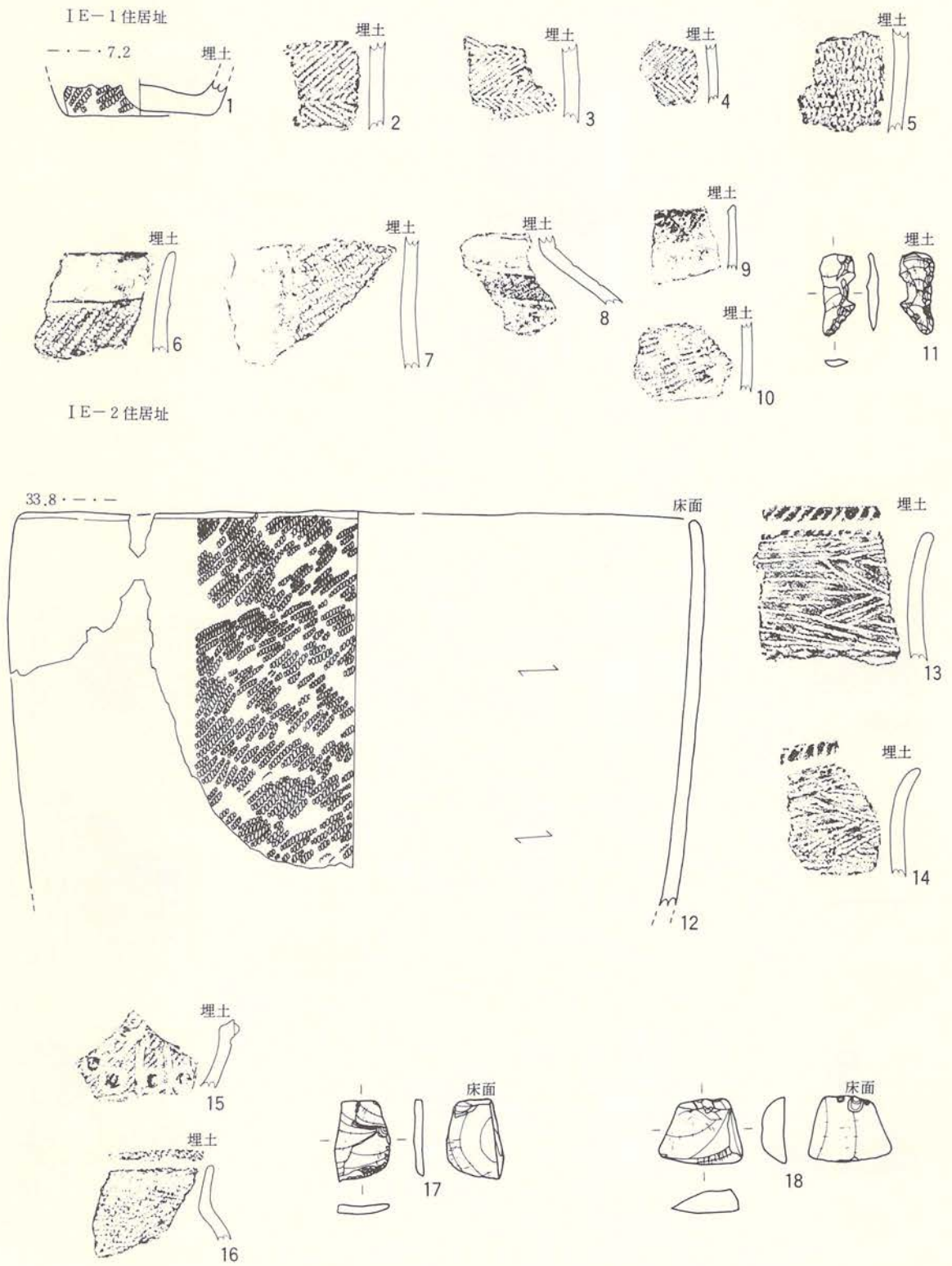
〈埋土〉黒色土が主体をなすが、周囲には掘り方の埋土と考えられる暗褐色土が堆積する。

〈時期〉時期決定の資料に欠くが、隣接して検出されている I E-2・3 ピットと形態が類似することから、これらと同時期の遺構であろう。



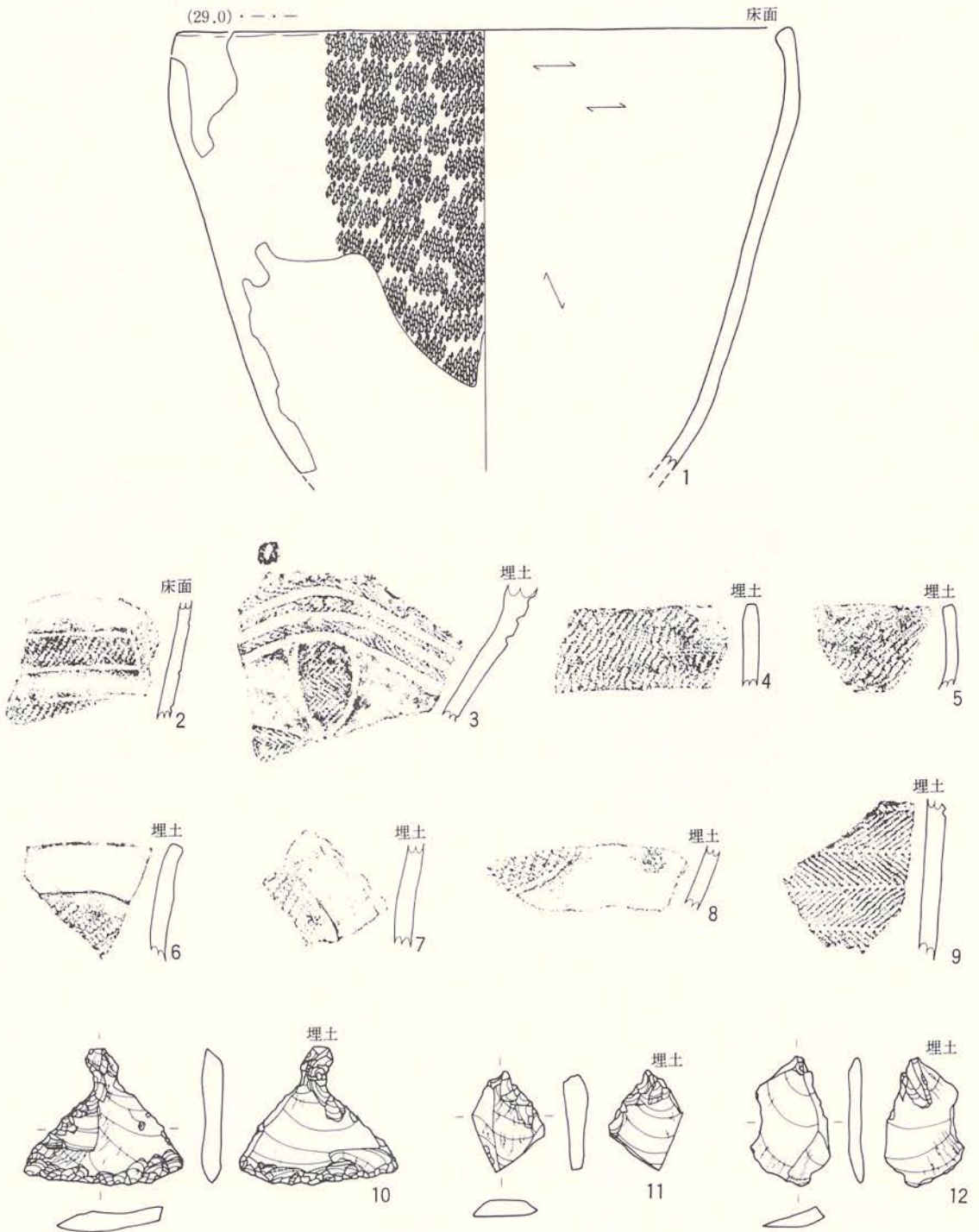
1	I E-1 住居址	12	II F-5 住居址	24	II F-3 陥し穴状遺構	37	III E-2 ビット	51	III F-4 陥し穴状遺構
2	I E-2 住居址	13	II F-6 住居址	25	II F-4 陥し穴状遺構	38	III E-3 ビット	52	III F-5 陥し穴状遺構
3	I E-3 住居址	14	II F-7 住居址	26	II F-5 陥し穴状遺構	39	III E-4 ビット	53	III F-6 陥し穴状遺構
4	I E-4 住居址	15	II F-8 住居址	27	II F-6 陥し穴状遺構	40	III E-1 陥し穴状遺構	54	IV D-1 陥し穴状遺構
5	I E-5 住居址	16	II F-9 住居址	28	II F-7 陥し穴状遺構	41	III E-2 陥し穴状遺構	56	IV E-1 ビット
6	I E-1 ビット	17	II F-10 住居址状遺構	29	II F-8 陥し穴状遺構	42	III E-3 陥し穴状遺構	57	IV E-2 ビット
7	貯水槽跡・暗渠	18	II F-1 ビット	30	II F-1 焼土遺構	43	III E-4 陥し穴状遺構	58	VE-1 陥し穴状遺構
8	II F-1 住居址	19	II F-2 ビット	31	III D-1 陥し穴状遺構	44	III E-5 陥し穴状遺構	59	VF-1 陥し穴状遺構
9	II F-2 住居址	20	II F-3 ビット	32	III D-1 焼土遺構	45	III E-6 陥し穴状遺構	60	VF-2 陥し穴状遺構
10	II F-3 住居址	21	II F-4 ビット	33	III E-1 住居址	46	III E-1 埋設土器	61	VF-1 住居址
11	II F-4 住居址	22	II F-1 陥し穴状遺構	34	III E-2 住居址	47	III E-1 配石遺構	62	VI F-1 ビット
		23	II F-2 陥し穴状遺構	35	III E-1 柱穴群	48	III F-1 陥し穴状遺構		
				36	III E-1 ビット	49	III F-2 陥し穴状遺構		
						50	III F-3 陥し穴状遺構		

第44図 遺構配置図

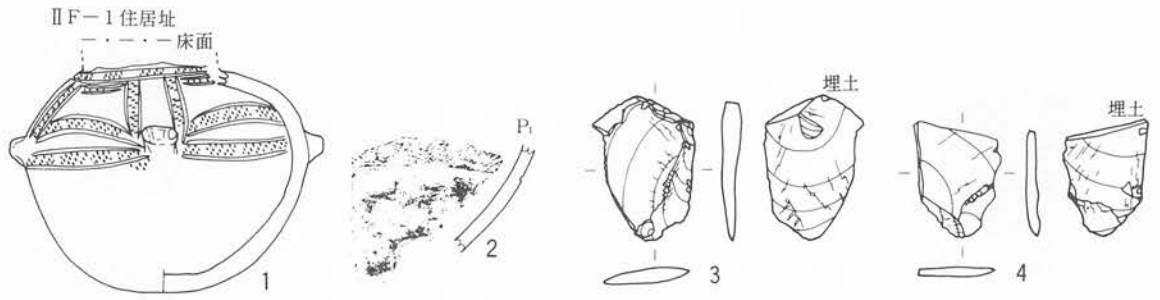


第45图 出土遺物 (IE-1·2住居址)

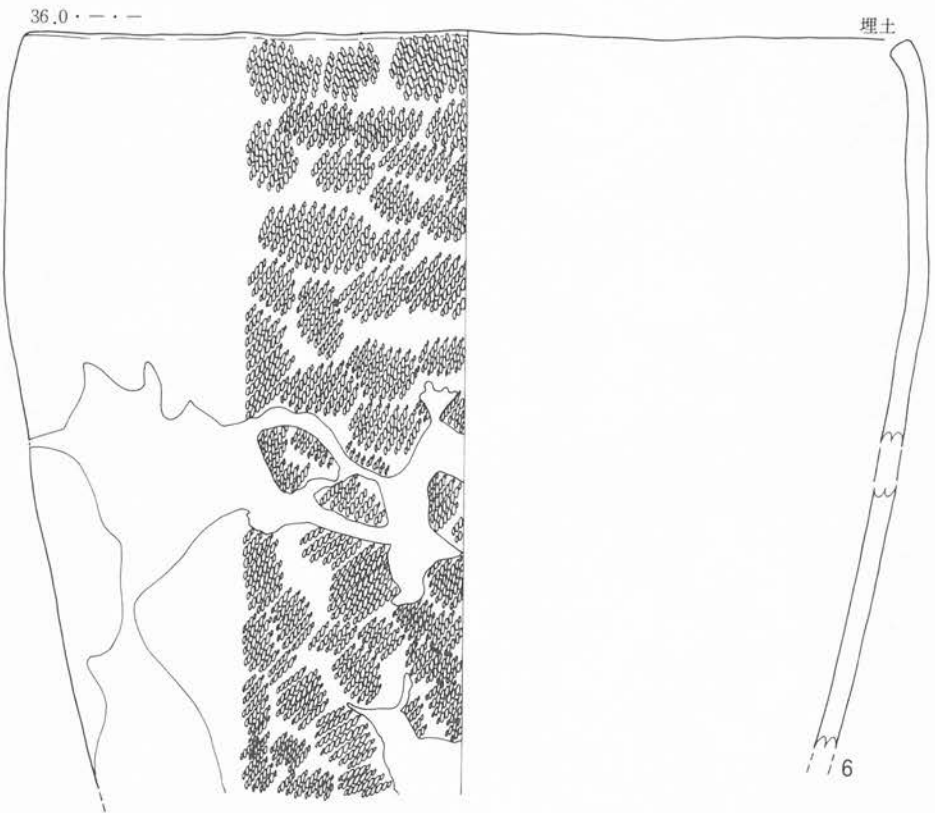
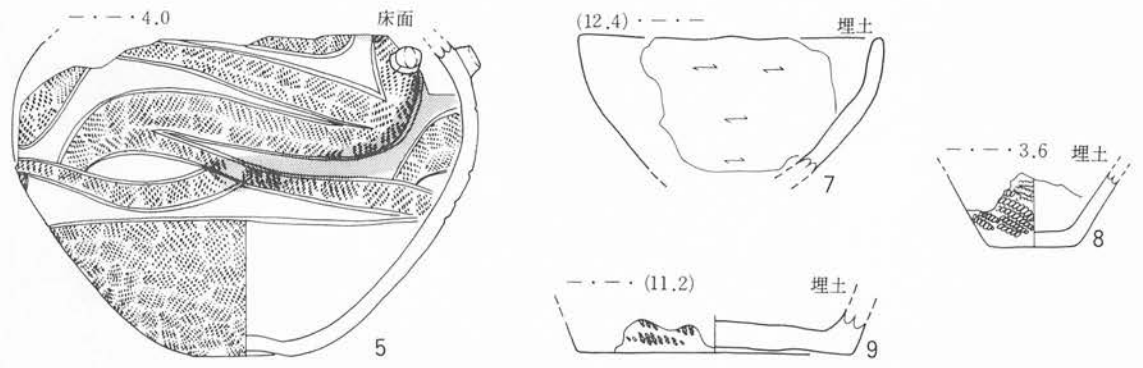
I E-3 住居址



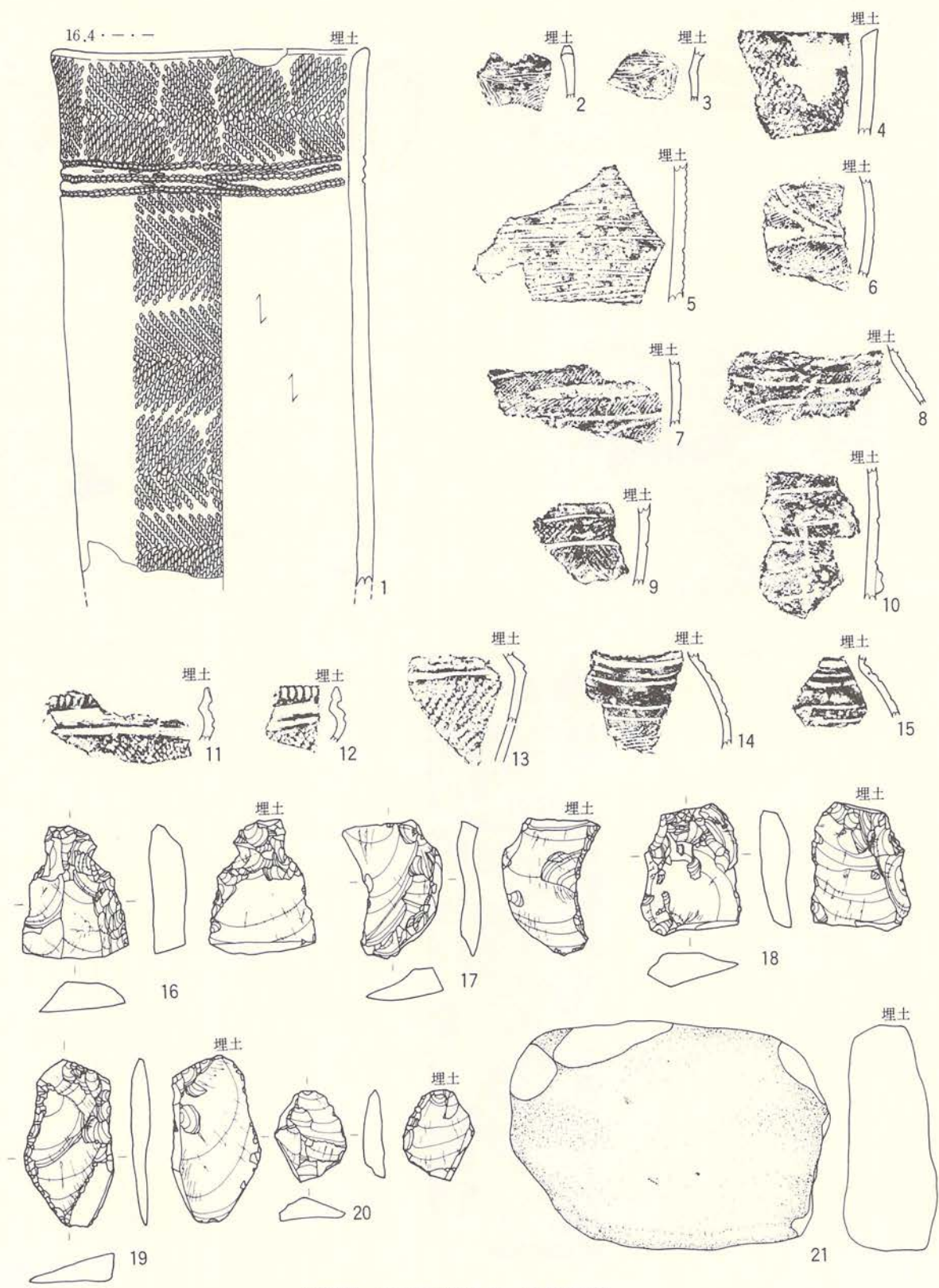
第46図 出土遺物 (I E-3住居址)



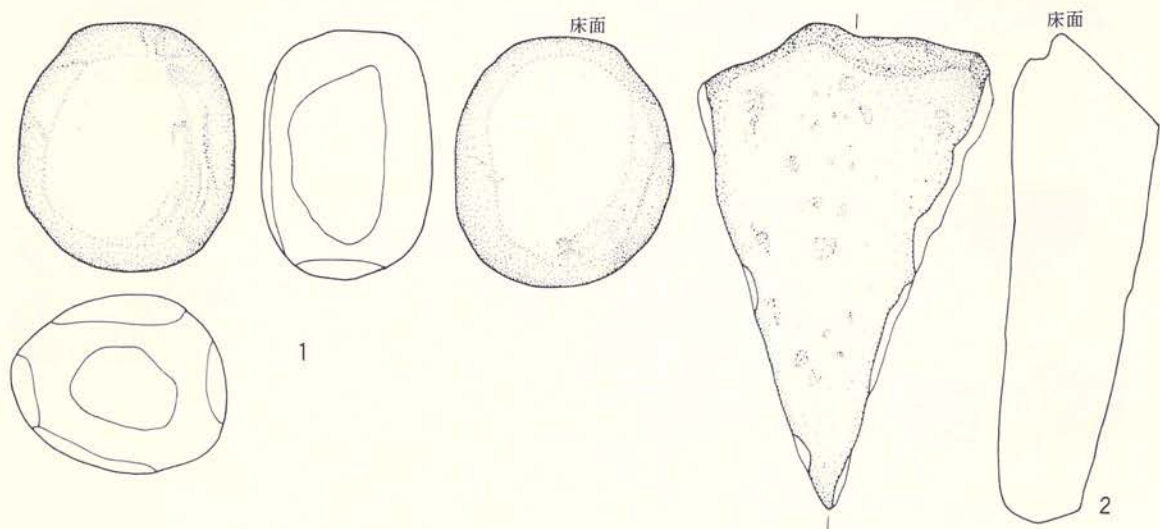
Ⅱ F-2 住居址



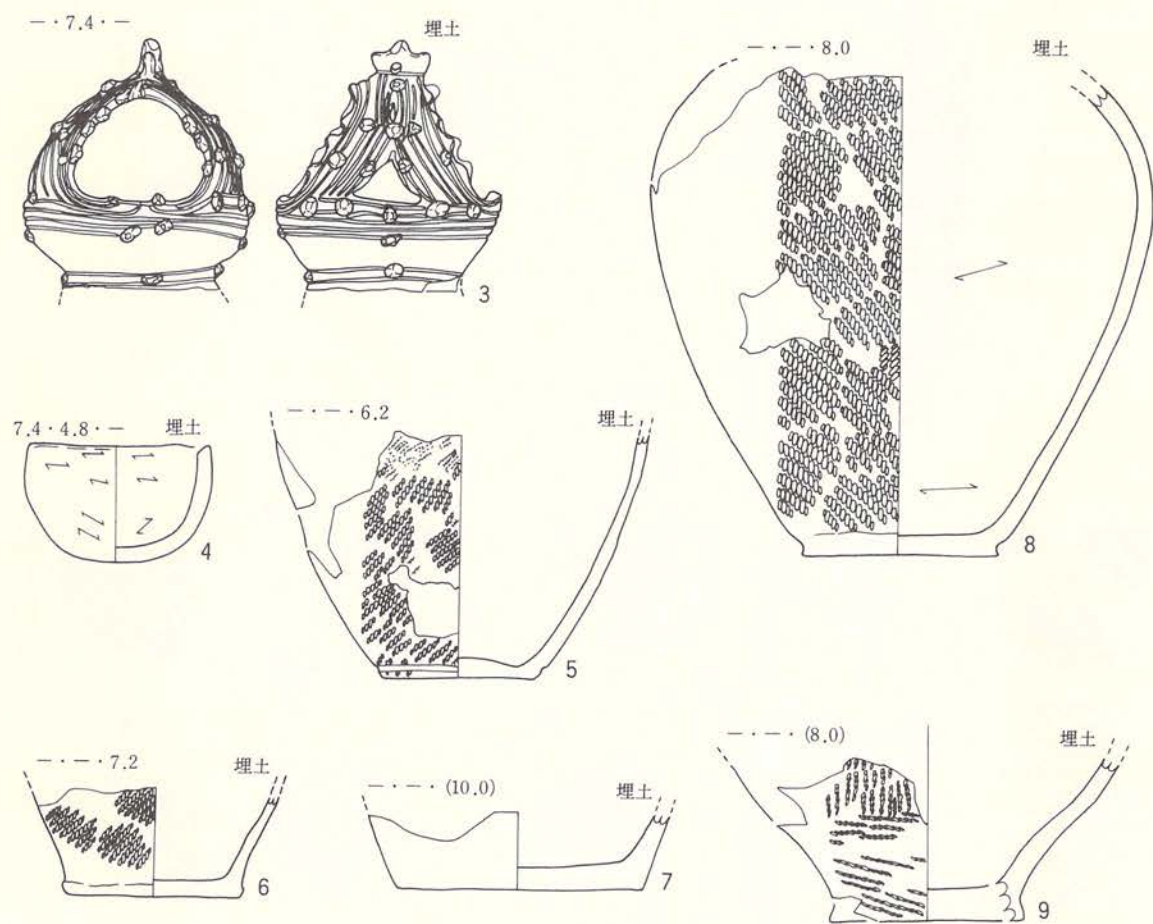
第47图 出土遺物(Ⅱ F-1·2住居址)



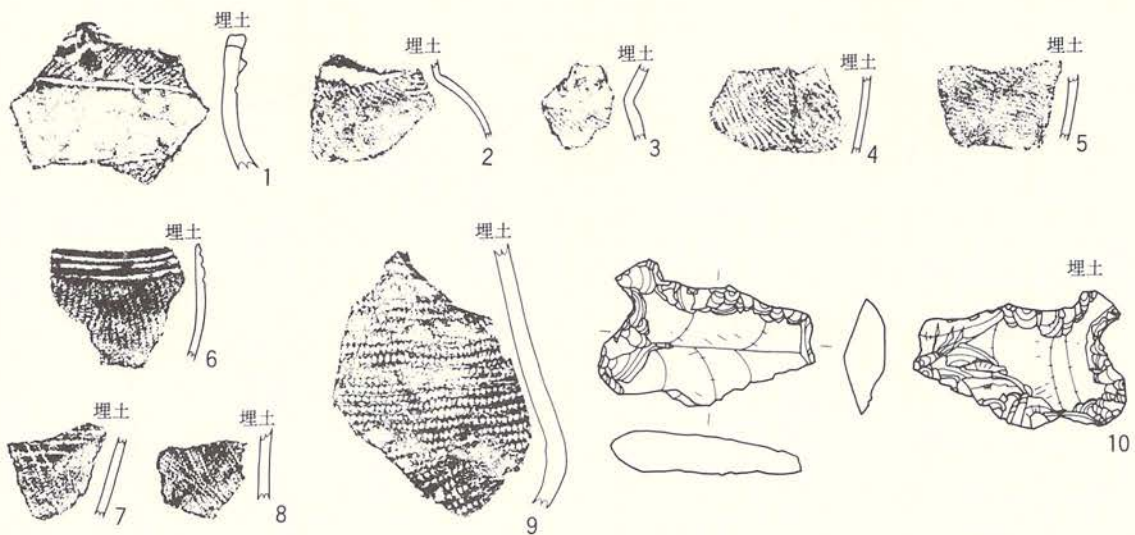
第48図 出土遺物(ⅡF-2住居址)



Ⅱ F-3 住居址

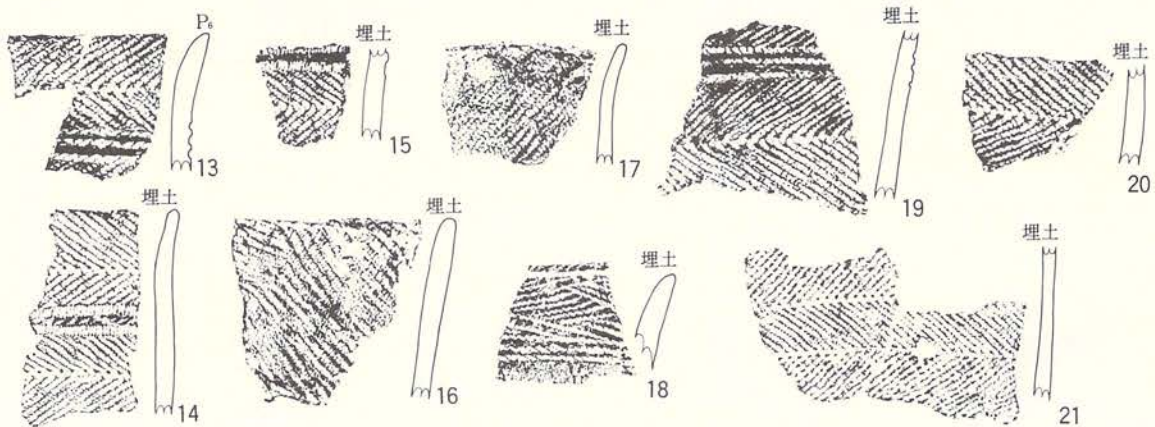
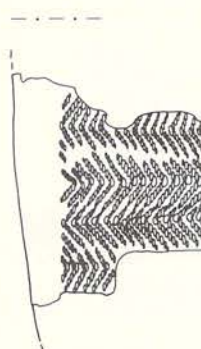


第49图 出土遺物(Ⅱ F-2·3住居址)

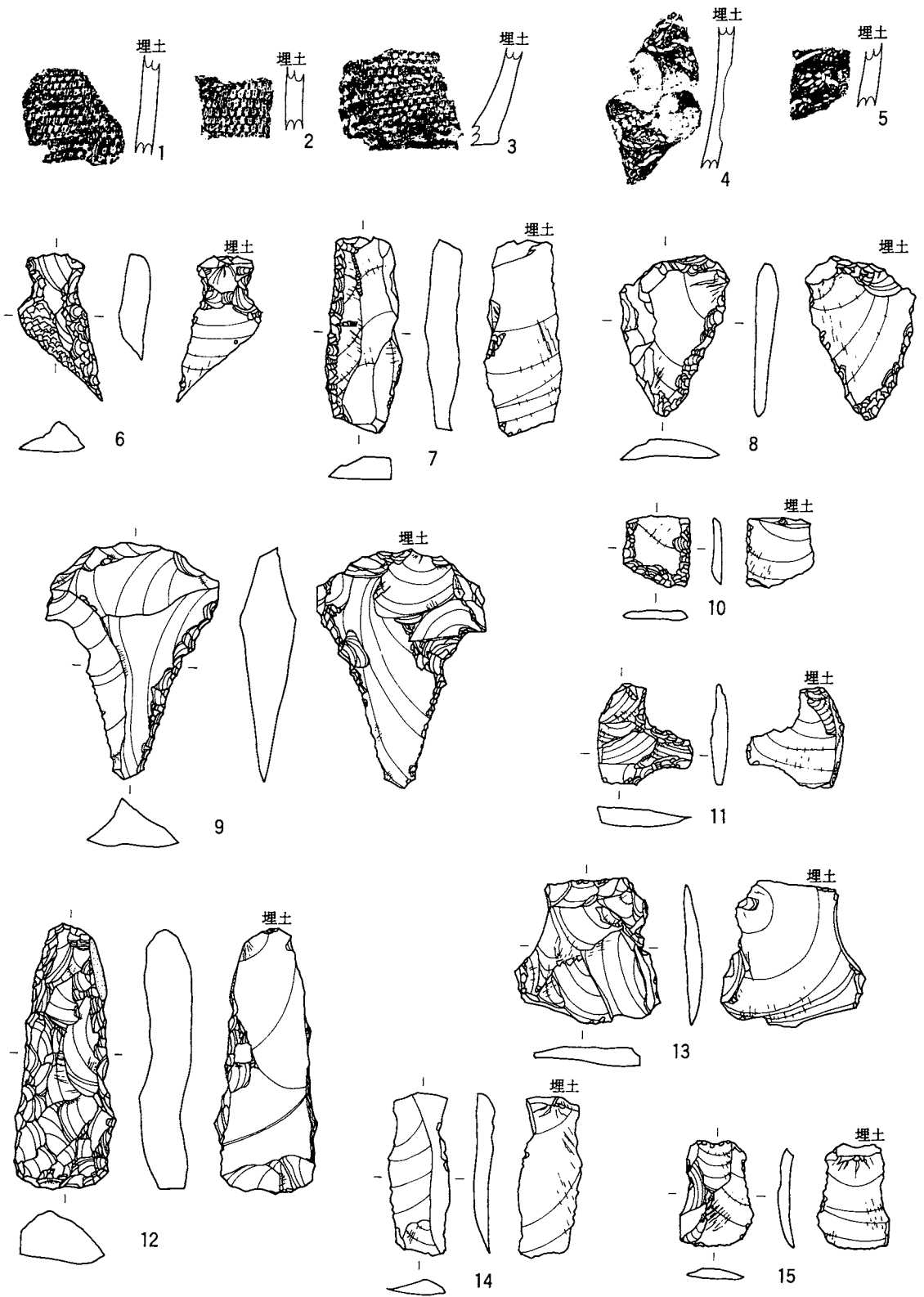


II F-4 住居址

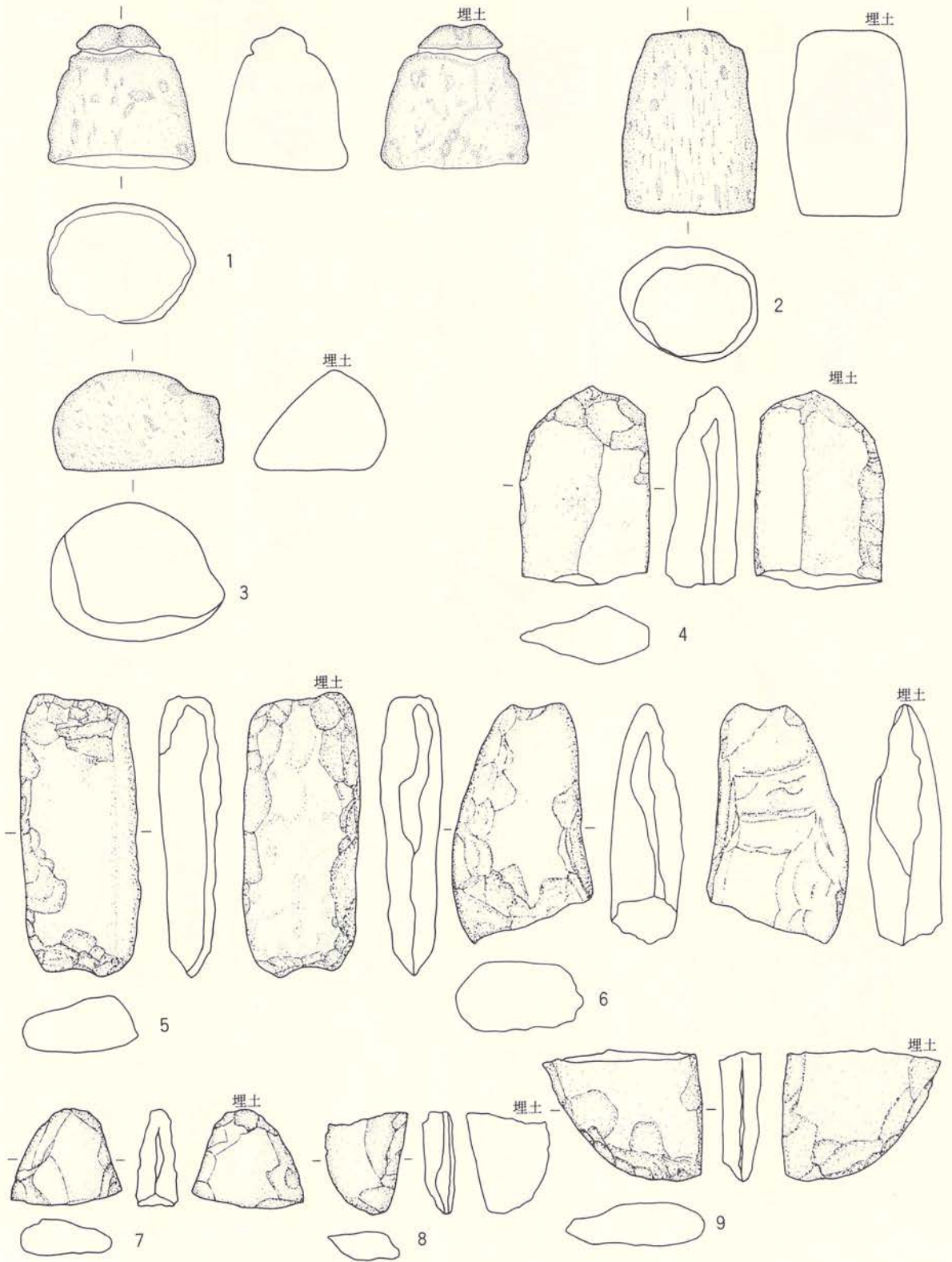
(15.6) · 17.9 · (10.0)



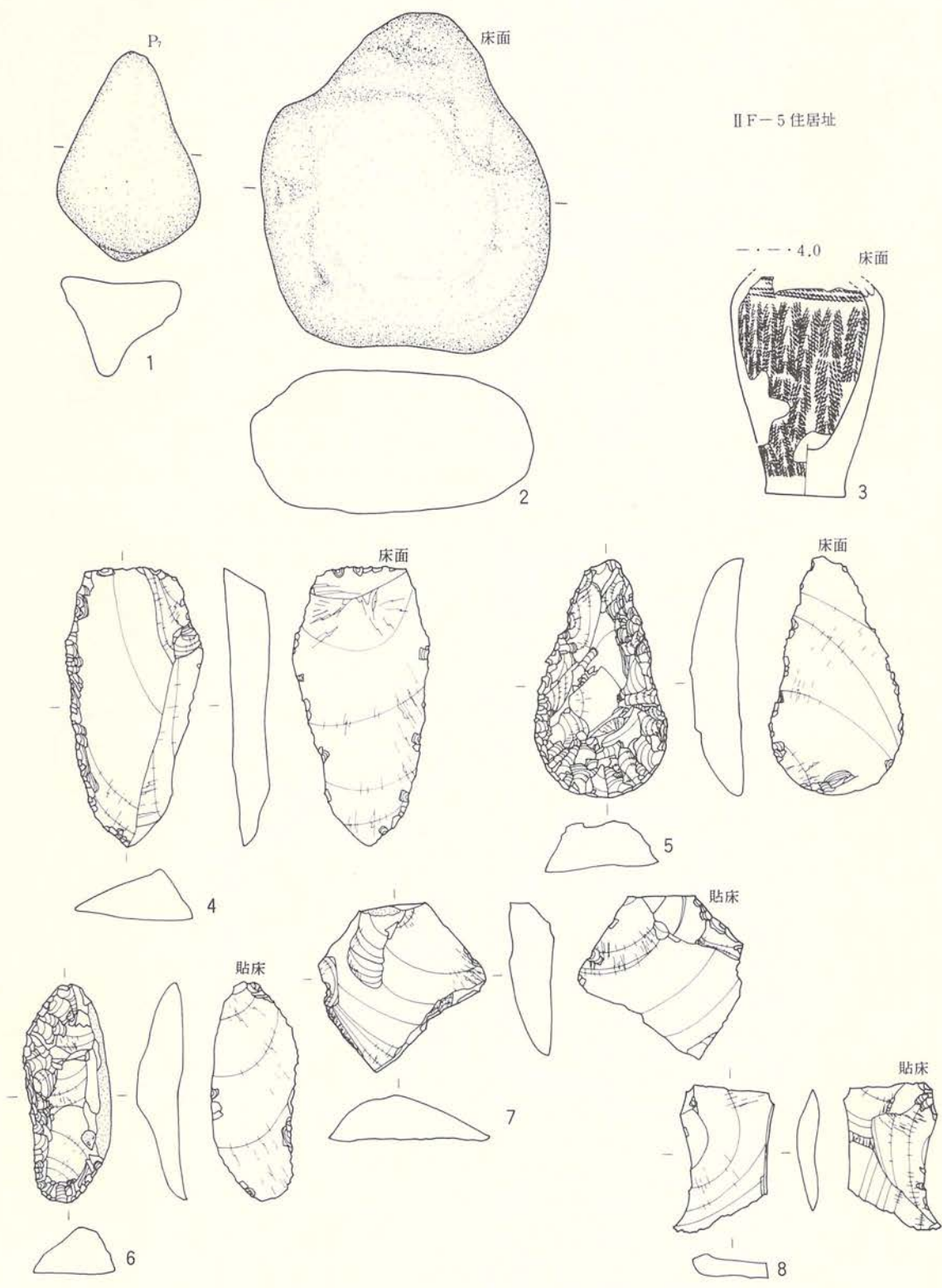
第50图 出土遺物 (II F-3·4 住居址)



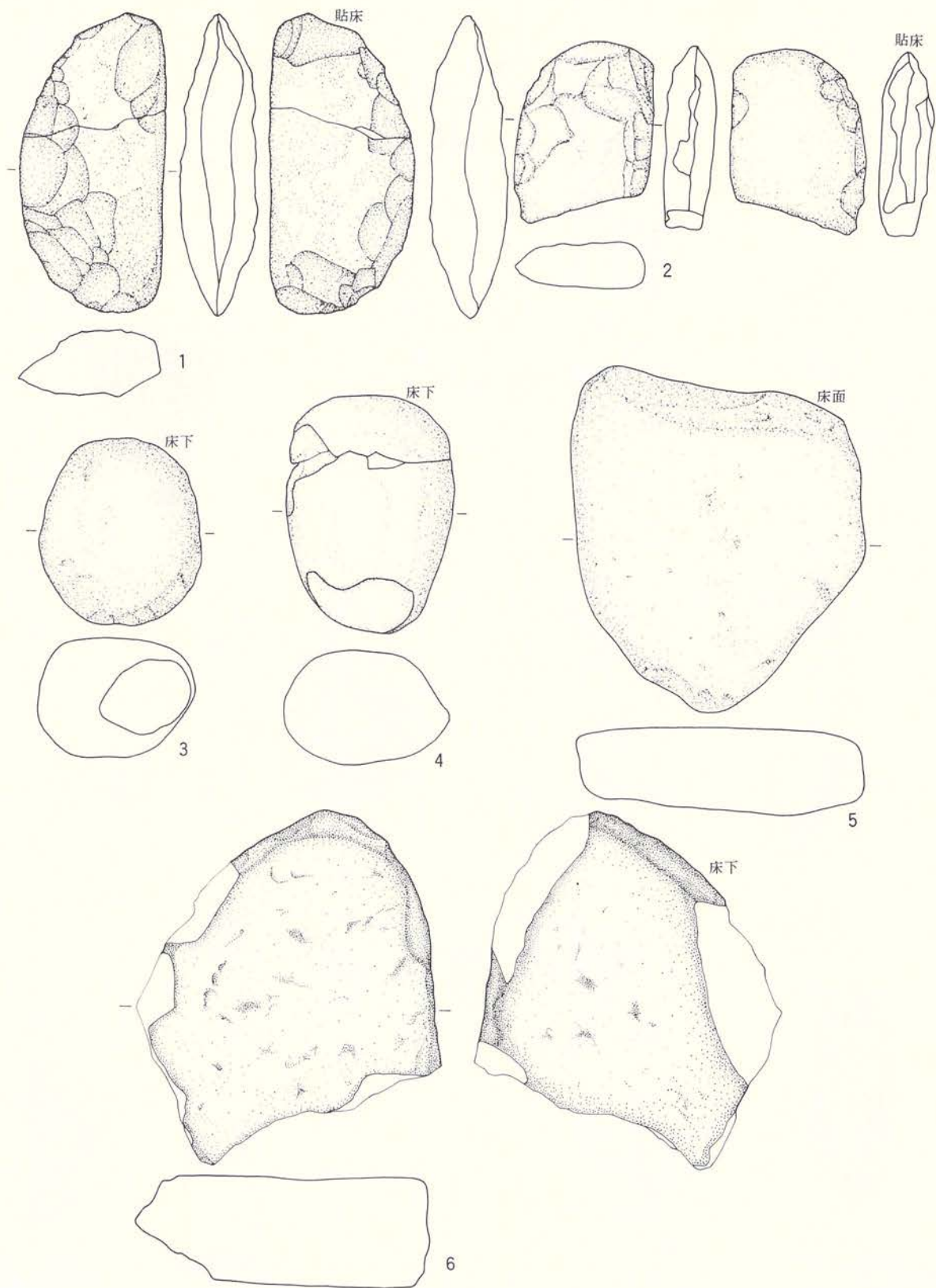
第51図 出土遺物(ⅡF-4住居址)



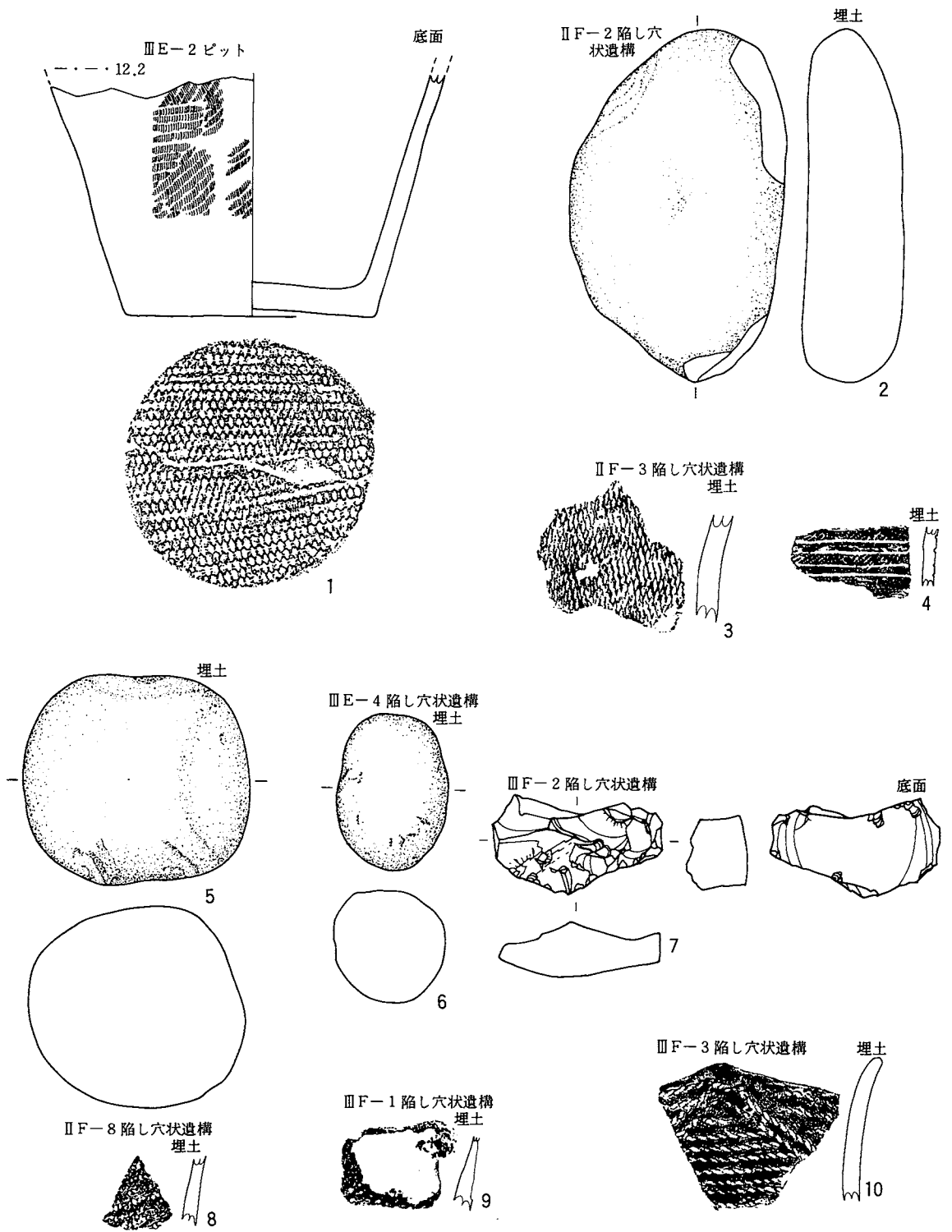
第52図 出土遺物 (II F-4 住居址)



第53圖 出土遺物(ⅡF-4·5住居址)



第54图 出土遺物(ⅡF-5住居址)

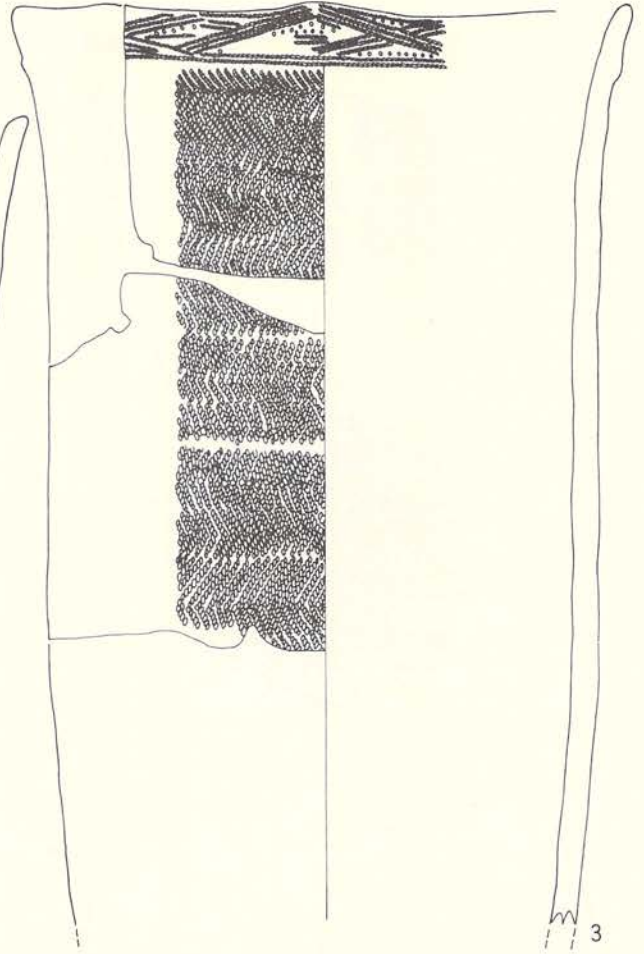
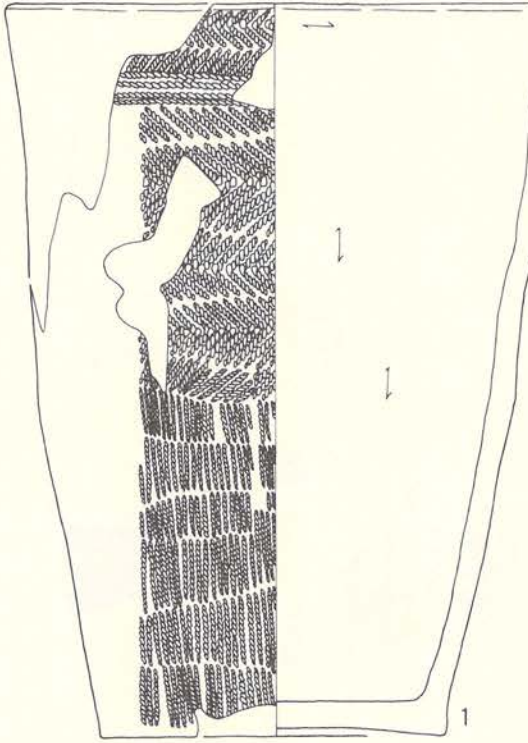


第55図 出土遺物(III E-2ピット、II F-2・3・8・III E-3・4・III F-1・3陥し穴)

(25.5) · - - -

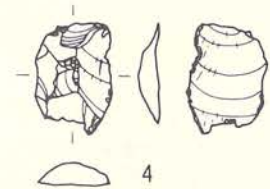
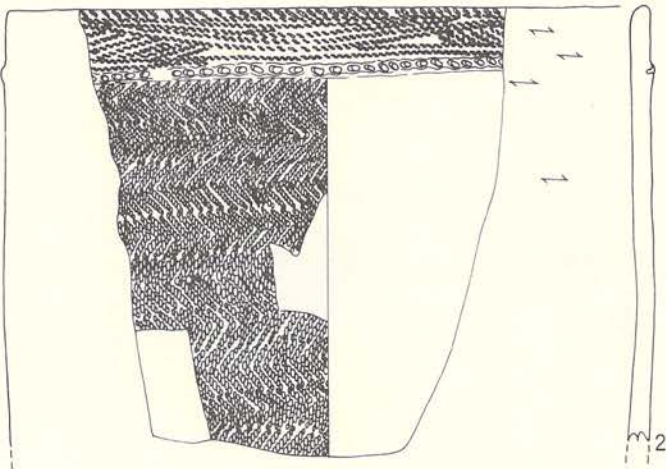
Ⅲ E-1 埋設土器

(23.3) · 29.8 · 14.1



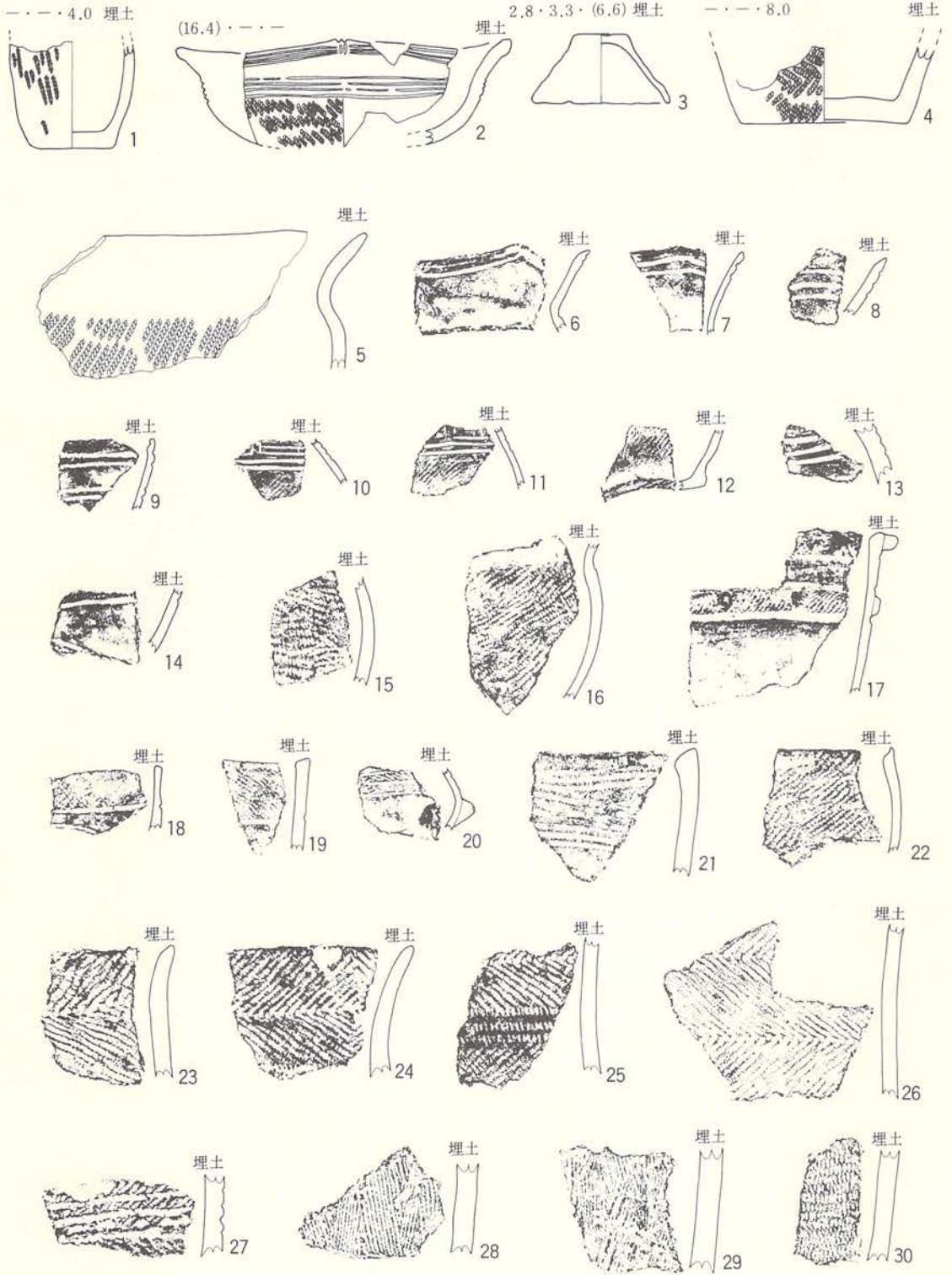
Ⅲ E-1 配石

(26.2) · - - -

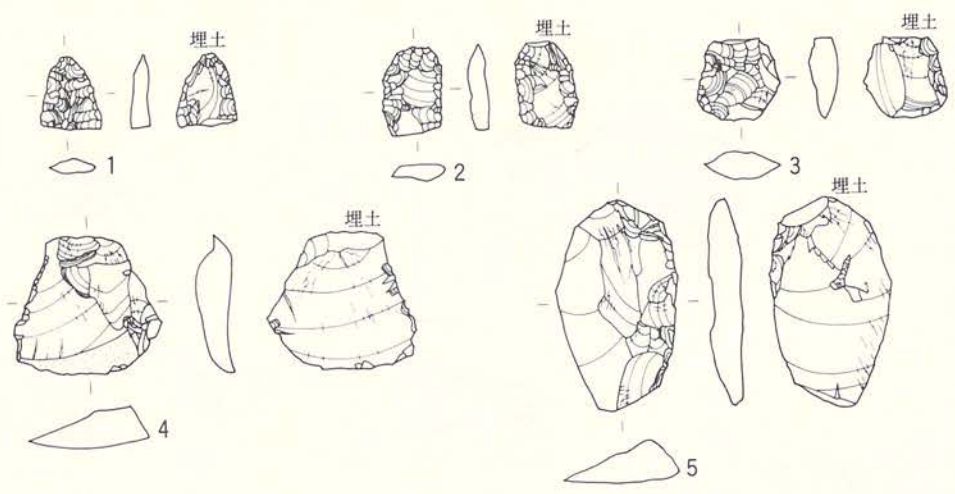


第56図 出土遺物(Ⅲ E-1 埋設土器、Ⅲ E-1 配石)

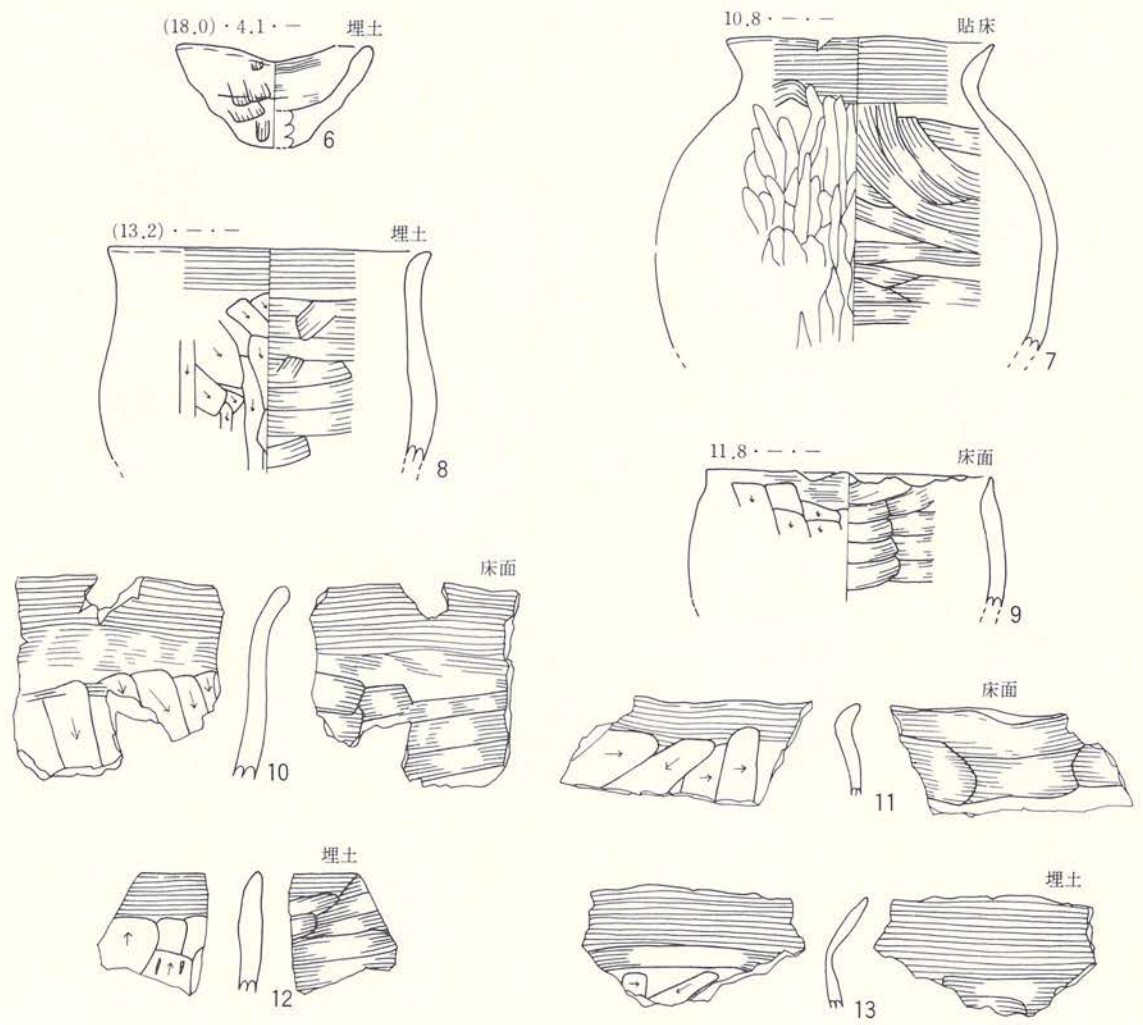
IE-4 住居址



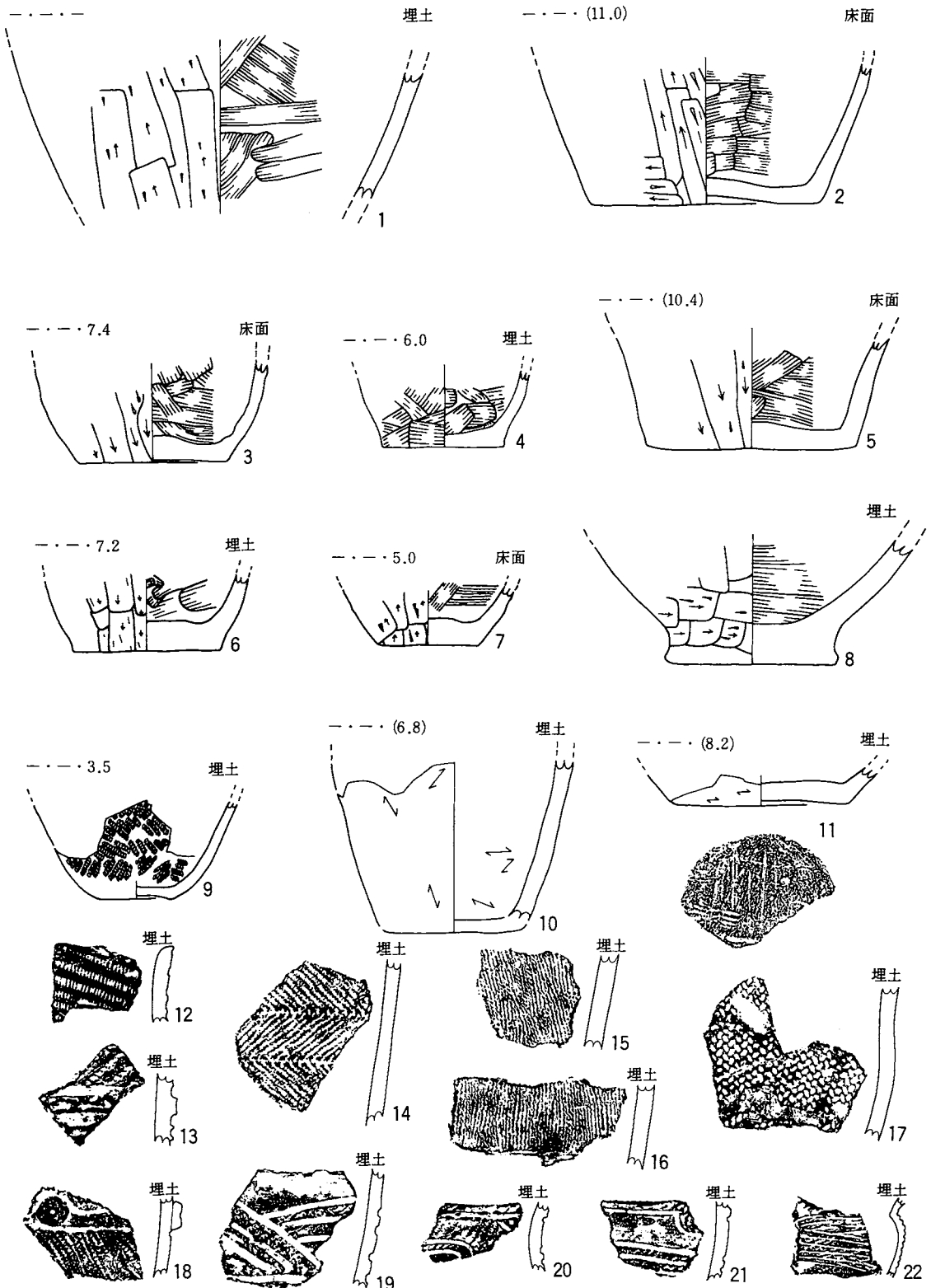
第57图 出土遺物 (IE-4 住居址)



I E - 5 住居址



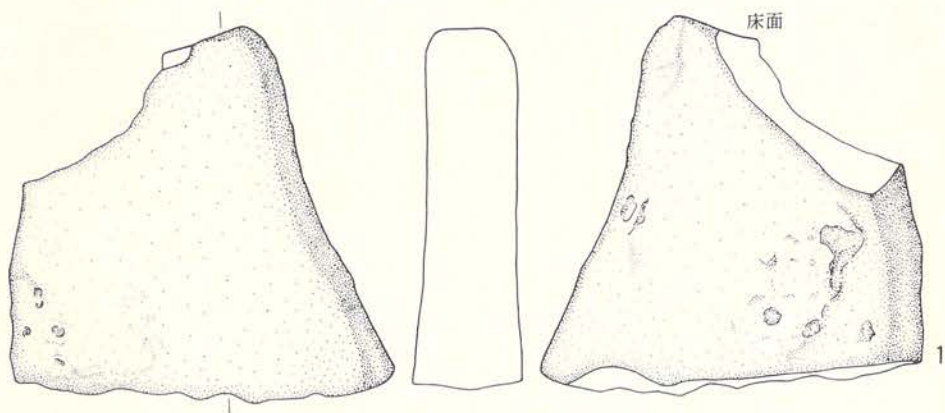
第58图 出土遺物 (I E - 4 - 5 住居址)



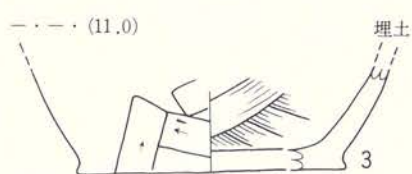
第59图 出土遺物 (I E - 5 住居址)



第60图 出土遺物(I E-5住居址)



II F-6 住居址

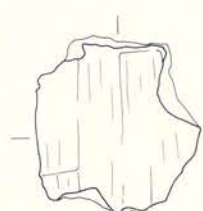
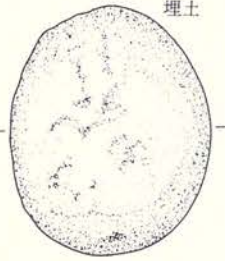
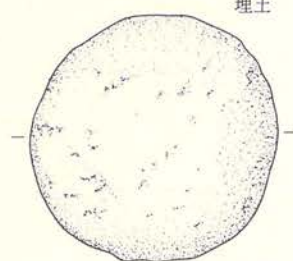


埋土

埋土

II F-7 住居址

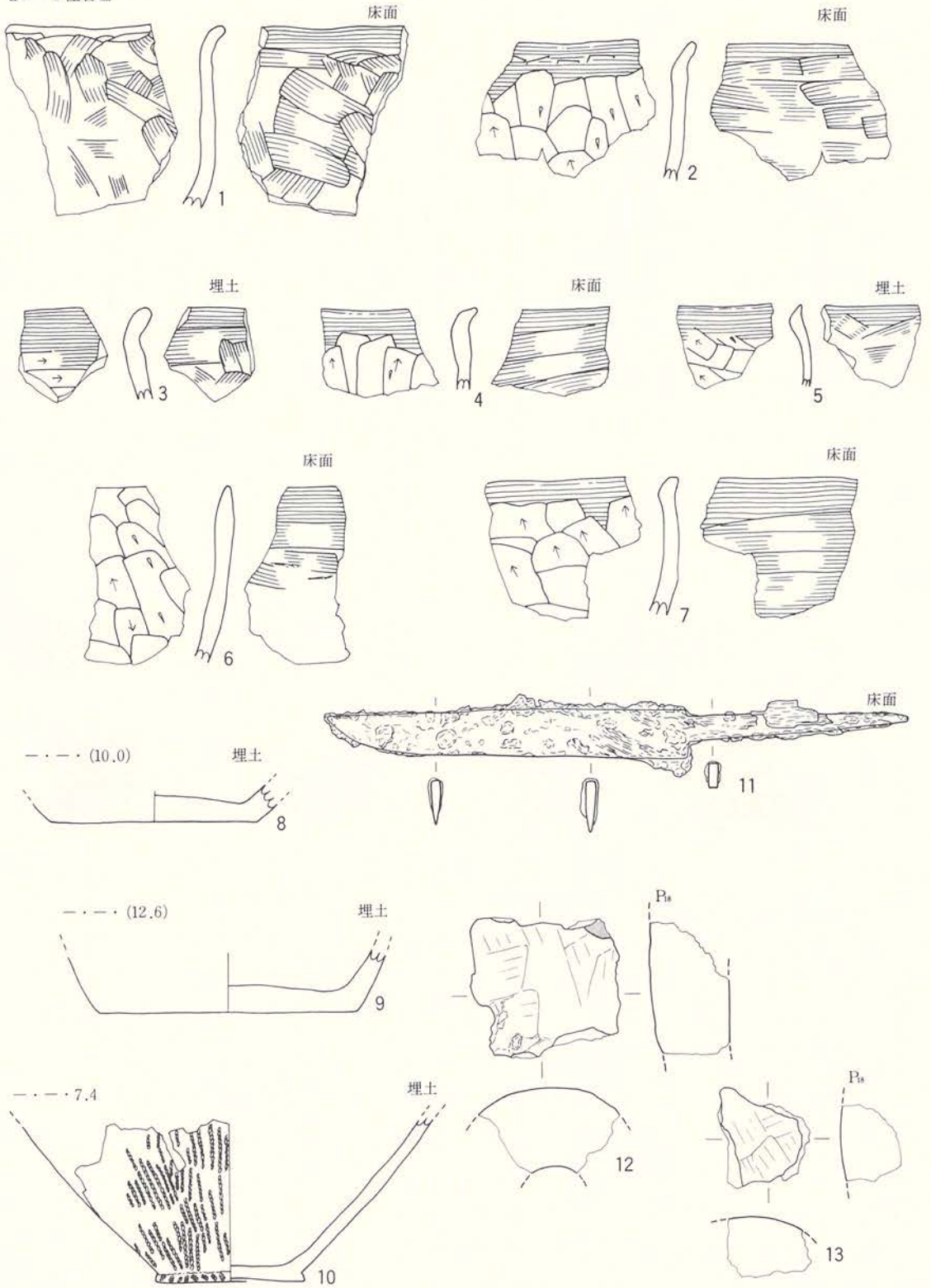
床面



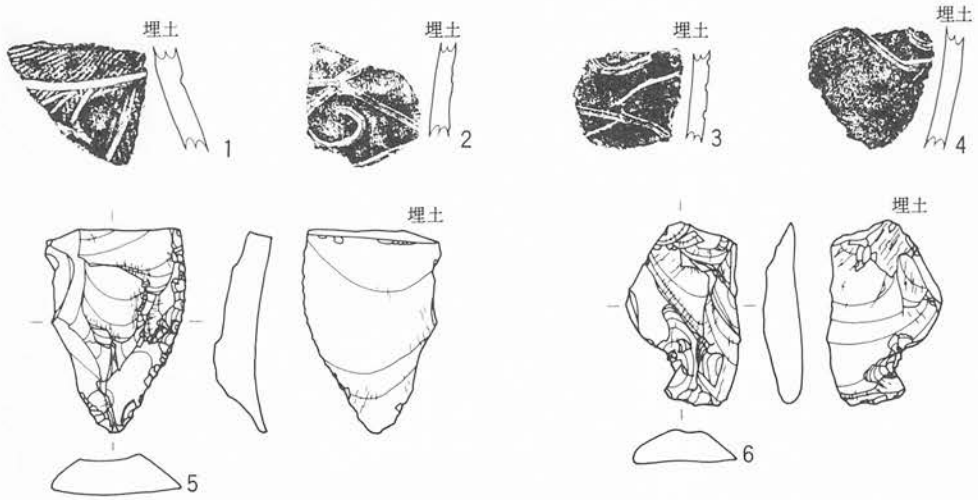
10

第61图 出土遺物 (I E-5·II F-6·7住居址)

Ⅱ F-8 住居址



第62图 出土遺物(Ⅱ F-8住居址)

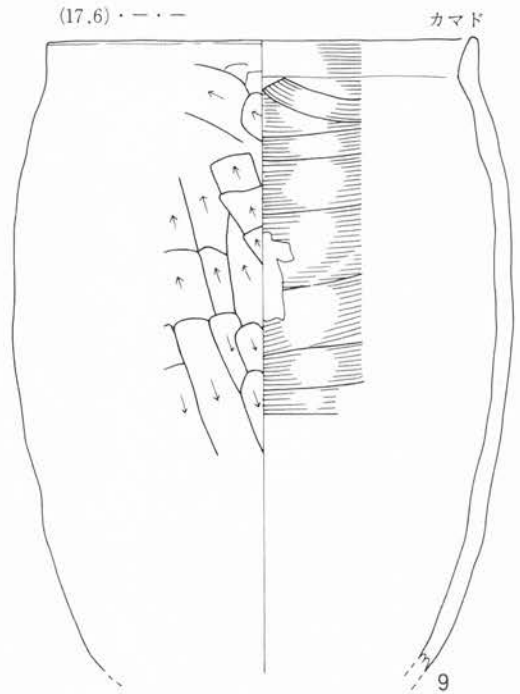


ⅢE-1 住居址

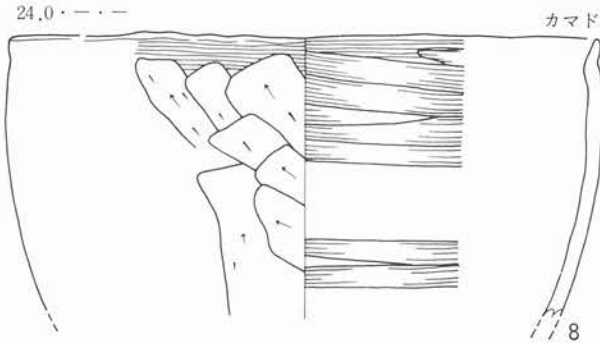
9.6・8.4・7.0



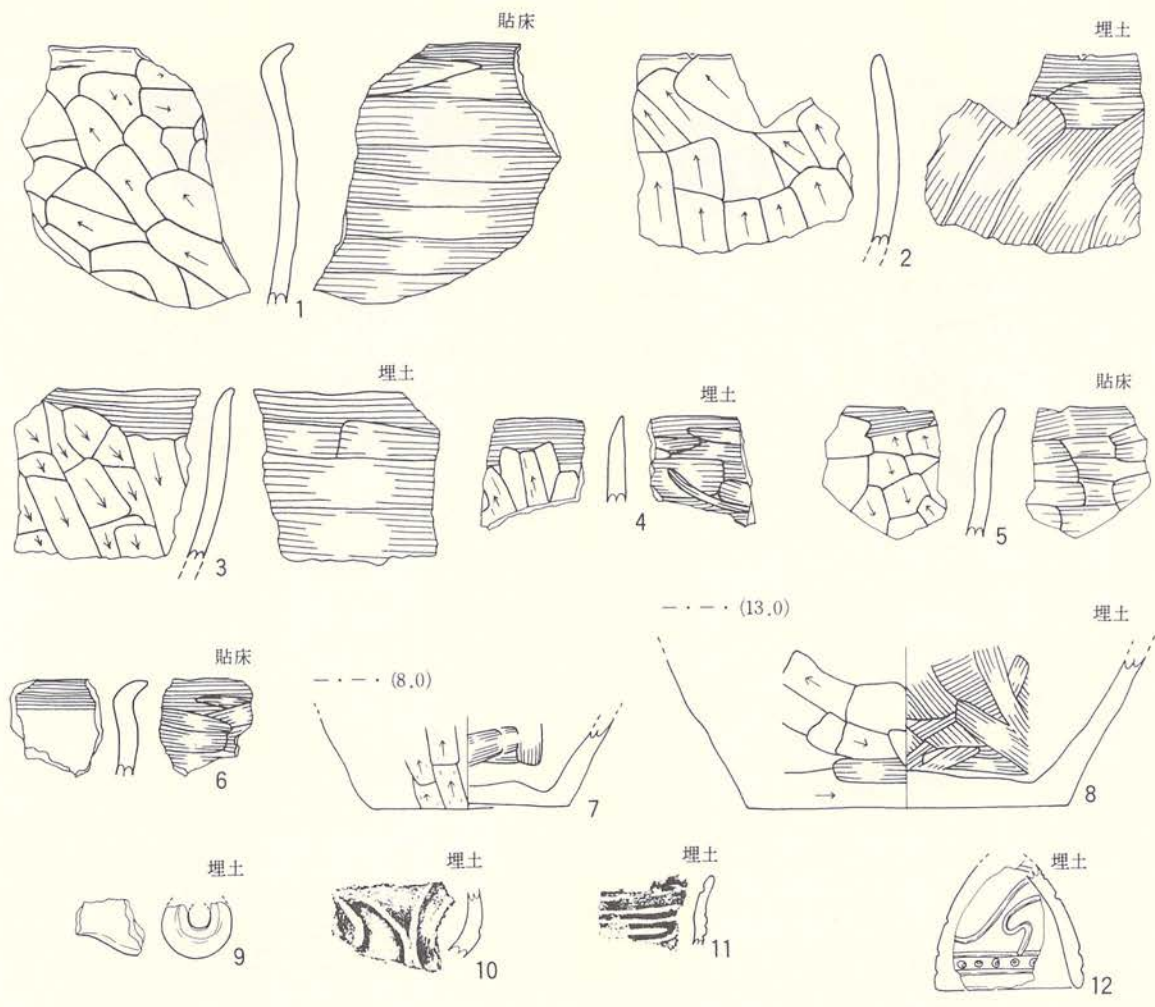
(17.6) ····



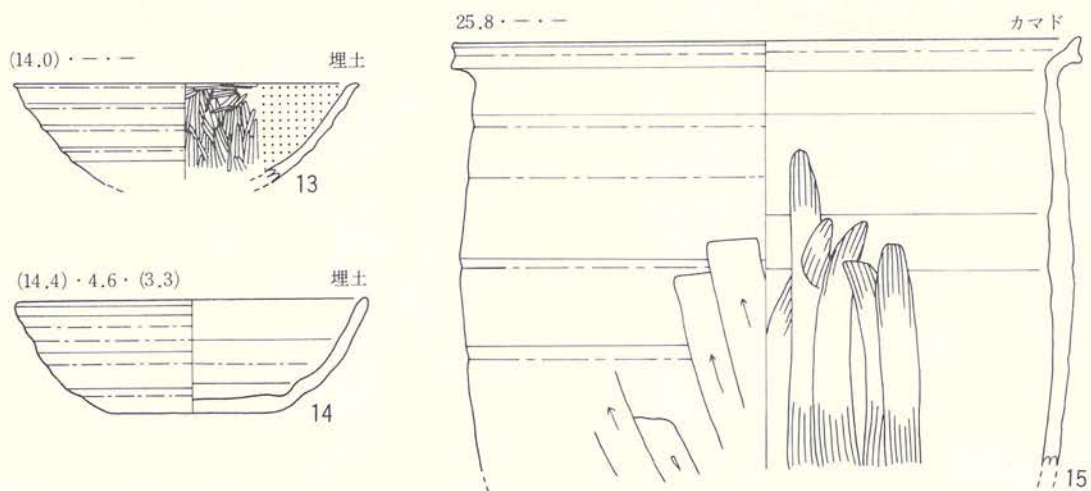
24.0 ····



第63図 出土遺物(ⅡF-8・ⅢE-1住居址)

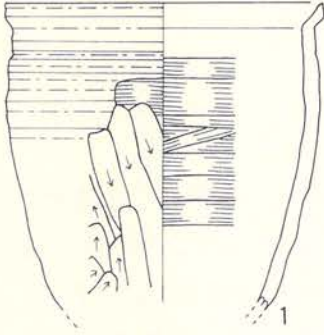


VF-1 住居址



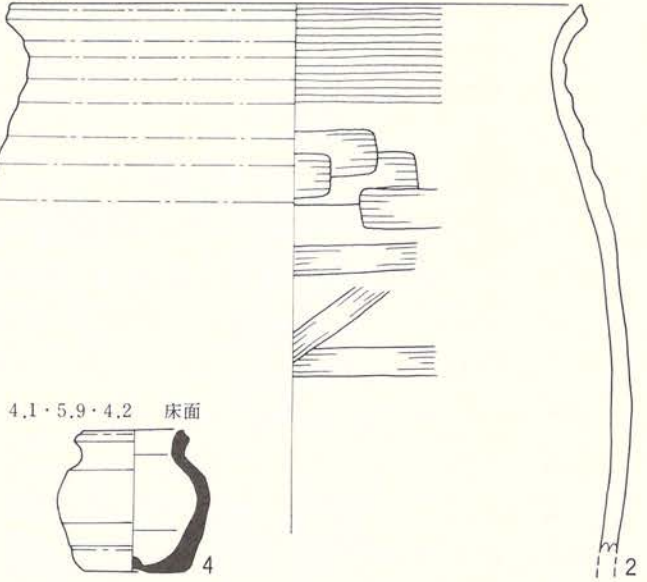
第64図 出土遺物(ⅢE-1・VF-1住居址)

(13.0) ····· 埋土



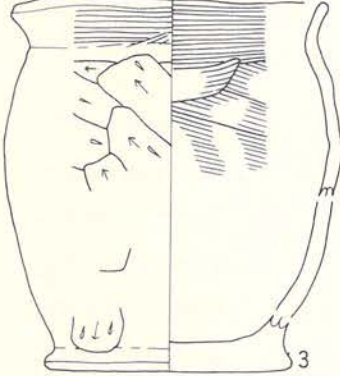
(23.4) ·····

カマド



12.7 · 15.1 · 9.7

埋土



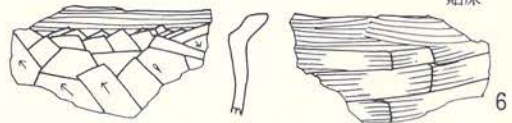
4.1 · 5.9 · 4.2 床面



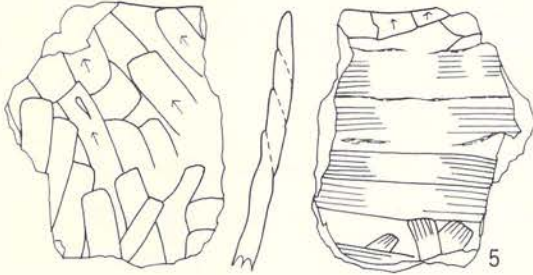
ⅡF-10住居址状

ⅡF-1ピット

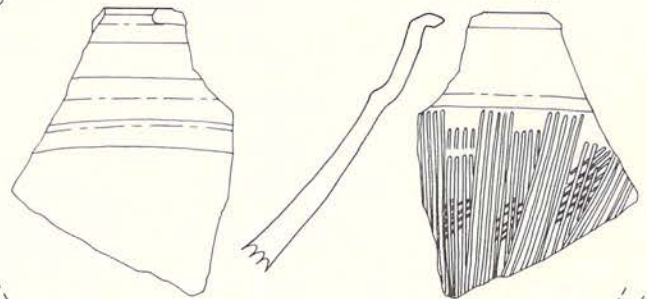
貼床



埋土



埋土



ⅢE-3ピット

埋土

埋土



埋土

埋土

埋土



····· 12.0

12 13

第65図 出土遺物(VF-1住居址、ⅡF-10住居址状、ⅡF-1・ⅢE-3ピット)

5. 遺構外出遺物

今回の調査で遺構外から得られた遺物は、コンテナ（41×31×19cm）で60箱に及ぶ。遺物には土器・土製品・石器・石製品・鉄器・陶磁器がある。大半は土器で、石器がこれに次ぎ、他は少量である。区域別の出土量では、遺物包含層の形成されている I E 区が最も多く、II F 区・III F の順となっている。層位別では、第IV層及び第V層からの出土が多いが、埋積谷となっている II F・III F 区ではII層からの出土もみられる。記載にあたっては、出土量の少なかった陶磁器・古銭以外の鉄製品は割愛した。

(1) 土器

縄文時代前期・中期・後期・晩期の土器、弥生土器・土師器が出土している。これらのうち、縄文時代前期の土器と後期の土器が卓越する。分類及び記述にあたり、縄文時代前期の土器を第 I 群とし、以下中期―第II群、後期―第III群、晩期―第IV群、弥生土器―第VI群、土師器―第VII群と時期区分を行った。また縄文時代後・晩期の粗製土器は一括して第V群とした。これらの中で小分類は a 類・b 類…、1 類・2 類…として記載した。この小分類群は、従来の型式名や土器分類群にできるだけ対応させるよう努めたが、型式名が不明確な縄文時代前期の土器群の一部については胎土・文様などの特徴から任意に分類を行った。

第 I 群土器（第66図～74図・第94図～97図）

縄文時代前期の土器群で、時期的には初頭～末期までのものがある。型式名の定かでない土器群を一括して a 類とし、以下は型式に対応させて b～f の 6 類に分類した。a 類については、さらに 1～7 類までの細分を行った。

I 群 a₁類（第64図 1～5）

縦走る撚糸文を地文とし、裏面に条痕文を有する土器群である。いずれも同地点からの出土で、同一個体と考えられる。胎土には植物繊維を多量に含むほか、砂粒を含む。色調は内外面・断面とし黒色を呈する。焼成は良く、硬質である。地文は L1 段の撚糸文で、条間は約 1～2 mm と狭く、斜行する部分もあるが基本的には縦走する。また、施文は深い。裏面の条痕は口縁部では横方向、体部では縦方向に施されている。また、これらの境界となる部分では斜行する。口縁部は外反して開き、口縁部は先細りとなるが口唇部は丸い。体部はいくぶん丸味をもつ。底部形態は不明であるが、a₂類との関連から尖底となるものと考えられる。

I 群 a₂類（第66図・第9図 6～12）

胎土や焼成・色調などは a₁類と酷似するが、裏面に条痕文をもたない土器群である。第66図 1・2 は I E 区の遺物包含層から出土したもので、同一個体と考えられる。底部は尖底を呈し、僅かに内湾して立ち上がる。体部は外傾し、そのまま口縁部に続く。口唇部は不整に外方にひ

ねり出される。地文は L1段の捺糸文で、やや右下りに施文されている。また、口唇部直下には同一原体が押圧される。内面は口縁部の一部にミガキが施される他は雑にナデられ、器面には凹凸をもつ。3は体部上半部が残存する。胎土には砂はあまり含まない。体部はほぼ直立し、口縁部は強く外反して開く。地文は L1段の捺糸文で、口縁部はやや斜め方向、体部は縦方向に施文されている。内面は粗雑にナデられ、外面とともに凹凸が著しい。4は体部のみが残存する。地文は上部が縦方向、下部が左下りの斜め方向に施されている。5は底部で、体部はいくぶん内湾して立ち上がる。地文はいずれも右下りに斜行するが、全体に不整な施文である。内面は粗くナデられている。第94図6～12は体部破片である。6～9は地文が不整方向に施されている。10は右下りに斜行し、11・12は縦走する。いずれも器面の凹凸が著しい。これらの土器に施される捺糸文は、 a_1 と同様に条間は狭いものである。

I群 a_3 類 (第94図13～16・第95図1～4)

地文は捺糸文で a_1 ・ a_2 類と同じであるが、胎土に混入される繊維の量や焼成が異なるものを一括した。いずれも破片で、器形の詳細は不明である。繊維の量は a_1 ・ a_2 類と比べて少なく、砂の混入はやや多い。焼成はあまり良くなく、全体に脆いものが多い。第94図13は、R1段の捺糸文をもつ。条間は狭いが施文は浅く粗く、無文となる部分もある。同様な特徴をもつ第95図4とともに、本類の中では比較的硬質である。14～16は同一個体と考えられる。捺糸文は L1段で、条間はやや広く縦方向に施文されている。14は口縁部片で、僅かに外反する。15・16は体部片で丸味はもたず外傾するものと考えられる。第95図1・2は同一個体と考えられる。原体は L1段で、1の上位では右下りに斜行し、下位では縦走する。3はいくぶん丸味をもち、捺糸の条間はやや広い。

I群 a_4 類 (第67図1)

当類としたものは1点だけである。横走する捺糸文を地文にもち、裏面に条痕文を有する土器である。底部を欠き、形態は不明である。体部は緩く内湾して立ち上がり、中央部に膨らみをもった後、緩くすぼむ。口縁部は僅かに外反する。口唇部は先細りとなるが、先端部は丸い。胎土には植物繊維及び砂を含む。繊維の量は a_1 ・ a_2 類よりは少ない。焼成は良いが、全体に軟質の感じを受ける。色調は黄褐色を呈する。地文は L1段の捺糸文で、体部上位及び口縁部では左下りぎみ、中央部では横方向、下位では左下りぎみに施文されている。捺りは緩く、条間は2～4mmと広い。施文は深くはない。裏面には幅2～3mmの浅い条痕文が、口縁部では左下に、体部では横方向に施されている。

I群 a_5 類 (第67図2～5・第95図5～8)

口縁部が外反して開き、綾絡文を有するものを一括した。いずれも胎土には植物繊維と砂を含む。焼成は良い。全て底部を欠損しており詳細は不明である。第95図4の体部の状態から尖

底を呈する可能性が強い。第97図2は体部が外傾して開き、強く外反する口縁部に続く。口縁部直下に綾絡文が巡るほか、部分的ではあるが細い沈線による斜めの格子目文が施されている。地文は0段多条のRL単節斜縄文で、体部にも等間隔で綾絡文が巡らされている。3は口縁部の外反が緩い。口縁部に3～4条の不整な綾絡文が巡らされている。体部には0段多条の2本の原体による非結束の羽状縄文が施文されている。4は強く外傾して立ち上がる体部をもち、口縁部は体部に引き続くように外反する。地文は0段多条の2本の原体によって施され、体部上半部では縄文帯の境目に2本1組の綾絡文が2段に巡らされている。5は口縁部が短く外反する。口縁部に2～3本の不整な綾絡文が巡るほか、体部上位にも2本1組の綾絡文が施されている。地文は0段多条RL単節斜縄文である。第95図5は口縁部片で、外反する口縁部に不整な綾絡文が施されている。6～8は体部片で、いずれも2本1組の綾絡文が巡らされている。これらの土器の裏面は全て粗くナデられるだけで、ミガキや化粧粘土などは施されていない。

I群 a₆類 (第68図1)

本類としたものは1点だけである。平底を呈し、口縁部に太くて不整な綾絡文を施す土器である胎土には植物繊維と砂を含むが、繊維の量は多くはない。焼成は良好であるが、やや軟質の感がある。色調は浅黄橙色を呈す。底部は幅広の平底で、体部は緩く外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に続く。口唇部は隅丸な方形である。口縁部には撚りの緩い不整な綾絡文が4～5本巡らされている。体部には複節による非結束の羽状縄文が施され、縄文の境目には細い綾絡文が施されている。

I群 a₇類 (第68図2～3・第95図9～23)

上記以外の土器を一括した。第68図2は細い深鉢形土器で、体部は外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に続いている。胎土には植物繊維と砂を含む。地文はR1段の粗い撚糸文で、縦方向に施文されている。3は体部が外傾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。胎土には繊維を含む。地文は0段多条RLとR1段撚りの付加条縄文である。4は円筒状の深鉢である。体部は直立し、口縁部は僅かに外反する。地文は結束羽状縄文である。5は尖底土器の底部である。第95図9～11は底部片である。9は平底で、地文はR1段の縦方向への撚糸文で、下端に数本の不整な綾絡文を伴う。10・11は尖底を呈する。12・13は同一個体の口縁部片である。胎土には繊維を僅かに含む。地文はRL単節縄文で3口縁部では横走する。また、12では口唇部にも施されている。14・15は地文に組紐回転文をもつが、原体は不明である。いずれも胎土には僅かに繊維が混入される。15は緩く外反する口縁部片で、上端は無文帯となっている。16の地文は0段多条LR+L1段撚りの付加条縄文である胎土に含まれる繊維の量は少ない。外方に短く張り出す口唇部は、面取りが施されている。17・18は同一個体である。僅かに外傾する体部からそのまま口縁部に続いている。地文は0段多条LR単節斜縄文である。19・20も同様な形態をもつ

口縁部片で、地文は19が0段多条RL、20がLRの単節斜縄文が施されている。

I群b類(第69図1～5、第70図1・2、第95図22・23)

前期中葉期に位置づけられる大木2式にみられる特徴をもつものを一括した。いずれも胎土に植物繊維を含むが、その量は極僅かである。第69図1は底部を欠損する。体部は内湾して立ち上がり、下半部に最大径を有した後、緩くすぼんで短く外反する口縁部に続く。口縁部上端は外方にやや肥厚する。口唇部が残存する部分には指頭圧痕状の浅い凹みがみられるが、これが連続して施されるものかどうかは不明である。頸部には、頂部に右斜めからの大きな袈りが連続する太い隆帯が巡る。体部にはS字状連鎖沈文が施されている。内面は全体に黒色を呈し、粗くナデられている。2はいくぶん上げ底で、外方に張り出す底部をもつ。体部は外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に続く。口縁部は「へ」字形の段状突起を形成する。体部にはR1段撚りによる不整な網目状撚糸文が、横回転で施されている。3は口縁部のみが残存する。強く外反して開く。口縁部直下には粘土紐による貼り付け文が施されている。また、頸部には斜めの刻みが連続する隆帯が巡る。4は口縁部を欠損する。上げ底となる底部をもち、体部は僅かに内湾して立ち上がり、中央部が膨らむ。頸部には2本の沈線が巡らされている。地文は体部上端が結束された羽状縄文で、以下LRの単節斜縄文である。また体部下端には2本の綾絡文が施されている。第70図1は大型の深鉢で、口縁部を欠損する。やや小さめな底部をもち、体部は外傾して立ち上がった後、中央部から緩く内湾する。地文は結束されない羽状縄文で、境目には不整な綾絡文が施されている。また、底面には過巻とこの周囲を放射状に刻む撚紐圧痕文が施文されている。2は体部下端のみが残存する。器壁は非常に厚く、外傾して立ち上がる。地文は結束されない複節の羽状縄文である。第95図23の口縁部片で、2本の綾絡文がみられる。24は小型の深鉢で、器壁は非常に薄い。地文はS字状連鎖沈文である。

I群c類(第69図3)

大木3式と考えられるもので、1点だけの出土である。胎土には砂を含むが、繊維は含まない。大型の深鉢で、体部は外傾して立ち上がった後、いくぶん内湾して中央部に最大径を有し、上位は緩くすぼむ。口縁部は短く僅かに外反する。口縁部には、頂部に右斜めからの刻みが連続する細い隆帯が巡らされている。地文は複節の羽状縄文で、境目には不整な綾絡文がみられる。この綾絡文は各原体の末端処理と考えられるが、これによって両原体が結束されている可能性がある。内面は口縁部が横方向、体部～底部は縦方向に丁寧なミガキが施されている。

I群d類(第70図、第71図1・2、第96図1～11)

円筒下層b式に位置づけられる土器群である。頸部に各種の圧痕文を巡らせ、口縁部と体部を区画している。いずれも胎土には植物繊維を含む。第71図1はほぼ全体が残存する。体部は直立し、口縁部は平縁で緩く外反する。頸部には3本の原体圧痕文が巡り、口縁部と体部を区

画している。地文は口縁部及び体部上端が結束羽状縄文、以下は R1段の撚糸文が縦方向に施されている。内面は全体に化粧粘土が貼られ、口縁部は横方向、体部は縦方向のミガキが施されている。2も平縁を呈する。体部はいくぶん膨らみを有する。頸部には5本の原体圧痕文が巡り、3本目と4本目の間は細い隆帯となっている。地文は口縁部・体部とも結束羽状縄文である。内面は口縁部が横方向、体部が縦方向のミガキが施されている。3は4単位の緩い山形口縁を呈する。頸部には3本の撚糸圧痕文が巡り、地文は結束羽状縄文である。内面はミガキが施されている。4は体部が外傾して立ち上がり、口縁部は4単位の小山形口縁を呈する。頸部には原体圧痕文が1本、その下に2本の絡条体圧痕文が巡る。地文は結束羽状縄文で、内面は全体に化粧粘土が貼られ口縁部は横方向、体部は縦方向のミガキが施されている。第72図1・2、第96図1～6は、頸部の区画帯が原体圧痕によるものである。このうち、第72図2、第96図5は、原体圧痕文に狭まれて、頂部に爪形の刺突が連続する細い隆帯が伴走する。地文はいずれも結束羽状縄文で、内面はミガキが施されている。第96図7・8は頸部に絡条体圧痕文をもつ。どちらも2条に巡らされているが、8はこれに狭まれて、頂部に爪形をもつ隆帯が伴走する。9は隆帯によって口縁部が区画され、10は4本の細い沈線が巡る。11は2本の絡条体圧痕文に狭まれた隆帯をもつが、隆帯の両側縁には爪形文が連続し、頂部には原体圧痕文が施されている。地文は9が単節斜縄文で、他は結束羽状縄文である。

I群e類（第72図3～6、第96図12～16）

円筒下層c式に比定される土器群である。いずれも胎土に植物繊維を含み、口縁部は山形を呈する。第72図3は4単位の山形口縁となる。体部は直立し、口縁部は僅かに外反する。頸部には4本の絡条体圧痕文が巡り、口縁部と体部を区画している。口縁部には絡条体圧痕と撚糸圧痕文によって、山形口縁を基点に三角形文が構成されている。体部には結束羽状縄文をもち、内面は化粧粘土が貼られ全体にミガキが施されている。4の口縁部は4～5単位となる。頸部には2本の原体圧痕文が巡り、口唇部にも原体圧痕が刻まれる。口縁部には山形を基点として、撚糸圧痕による三角形文が構成され、体部には結束羽状縄文が施されている。5は4単位の山形口縁をもつ。頸部には3本の絡条体圧痕文と1本の原体圧痕文が巡る。また、絡条体圧痕に狭まれて、頂部に爪形文が連続する低い隆帯が2本伴走している。口縁部には絡条体圧痕文によって菱形状の文様が構成されている。内面は全体に化粧粘土が貼られ、ミガキが施されている。6は4単位の低い山形口縁となる。口縁部文様は絡条体圧痕文による三角形文で、頸部の区画線もこれによって施されている。口唇部には撚糸圧痕による刻みが連続している。体部は結束羽状縄文が施され、内面は化粧粘土とミガキが施されている。第96図12～16は口縁部片である。12・13は同一個体と考えられる。口唇部に撚糸圧痕による刻みをもつ。口縁部文様も撚糸圧痕文で構成されている。14は撚糸圧痕による文様が山形の頂部を中心に展開されている。

15は口縁部文様が原体圧痕によって施され、16は絡条体圧痕によって施されている。

I群f類（第73図1～4、第96図17～23、第97図1～5）

円筒下層d式に比定される土器群である。胎土には植物繊維と砂を含むが、b類・c類と比べて繊維の含有は少なく、これにかわって砂がやや多く含まれる。第73図1は体部下端を欠損する。体部は直立し、そのまま口縁部に続く。頸部には頂部に刺突を伴う細い隆帯が巡り、口縁部と体部を区画している。口縁部は狭く、捺糸の圧痕文による文様が施されている。また、口唇部には縄文が施されている。体部には幅の狭い結束羽状縄文をもち、内面は化粧粘土が貼られ、全体にミガキが施されている。2の口縁部は緩く外反する。頸部には刺突を伴う低い隆帯が巡るが、あまり明瞭なものではない。口縁部には捺りの異なる2本1組の捺糸圧痕と刺突によって文様を施している。口唇部には小さな刺突が連続する。体部には結束羽状縄文が施文され、内面は化粧粘土とミガキが施されている。3は口縁部に「へ」字形に折り曲げた捺糸圧痕と原体圧痕による文様が構成されている。頸部に巡る低い隆帯にも同様な文様が施されている。また、口縁部には縄文が施文されている。体部には多軸絡条体回転文が縦方向に施文されている。内面は化粧粘土とミガキが施されている。4は体部中央部を欠く。体部は直立し、口縁部は外傾して開く、口縁部には大きな長方形の貼り付けをもつ。地文は結束された無節の羽状縄文で、縦方向に施文されている。内面は全体にミガキが施されている。第96図17は緩い山形口縁を呈する口縁部片で、頸部には横長の刺突が巡る。口縁部には絡条体圧痕と刺突による文様が施されている。体部は羽状縄文が施文され、内面は化粧粘土とミガキが施されている。18は口縁部に多軸絡条体（山内、A₆類）が横回転で施文されている。頸部には同原体の圧痕文が2本巡る。体部文様は木目状捺糸文が縦方向に施されている。これも内面に化粧粘土とミガキをもつ。19は口縁部に多軸条体の横回転、体部には同原体の縦回転による文様をもつ。20・21は同一個体と考えられる。20は口縁部片・21は底部片で、地文はR1段の縦方向の捺糸文に綾絡文が横走している。22・23も同一個体である。器厚は他に比べて薄い。僅かに外反する口縁部には6本の原体圧痕文が巡る。地文はLRの単節斜縄文で、これに3本の綾絡文が横走する。これらと第73図4は一型式新しい円筒上層a式に当たるものかもしれない。

第73図5、第74図1～6は、d～f類の体部及び底部片である。第73図5は地文に多軸絡条体の回転文をもつ。第75図1は、体部上端が結束羽状縄文、下位が多軸絡条体回転文である。2・3は結束羽状縄文、4は非結束の羽状縄文が施されている。5は条間の広い捺糸文、6は単節斜縄文を地文にもつ。

第II群土器（第74図～第77図、第97図）

縄文時代中期の土器群である。a～cの3類に分類した。

II群 a類（第97図6～9）

大木9式に比定された土器で、いずれも口縁部やこれに近い部分の破片で、同一個体である。連続する山形口縁を呈するものと考えられる。隆帯と沈線による縦長の楕円形の区画内に刺突文を有する。器面は全体にミガキが施されている。

II群 b類（第77図4、第97図10～18）

大木10式に比定される土器群である。第77図4は図上での復元図である。体部は外傾して立ち上がった後中央部に膨らみを形成する。文様は沈線区画された磨消文であるが、欠損部が多く詳細は不明である。文様の施文は、体部上半部に限られるようである。また、磨消文様の屈曲部には「鱗状突起」をもつ。地文はRL縦回転による単節斜縄文である。第97図10は口縁部片で、緩い波状を呈するものと考えられる。文様は2本の隆帯による区画文で、地文は0段多条RL縦回転による単節斜縄文である。11・12は同一個体である。11は口縁部片、12は体部片で、低い隆帯による区画内にRL単節縄文が縦回転で施され、これ以外の部分は丁寧なミガキが施されている。このミガキは内面にも施される。13～18は文様の区画が沈線によってなされている。

II群 c類（第74図7、第75図～第77図、第97図19）

型式名のはっきりしない粗製土器を一括した。胎土には砂を含むが焼成は良い。一点を除き地文は縦回転による単節斜縄文である。第74図7は大形の深鉢で、体部は直立し口縁部は緩く内湾する。地文はLRで、内面は丹念なミガキが施されている。第75図1は体部から口縁部まで直線的に続く。地文はRLである。2は緩く内傾する体部をもち、口縁部は僅かに外傾して開く。胎土にはやや砂を多く含む。地文は0段多条RLである。3は小型の深鉢で、口縁部は緩く内湾する。4は体部から口縁部まで直線的に外傾する。内面は丁寧なミガキが施されている。地文はLRである。5の地文はLR、6はRLである。第76図1は体部上位にいくぶん膨らみを有する。地文はLRで、内面は粗いミガキが施されている。2の底部はやや上げ底となる。3は底面に笹葉痕をもつ。4は体部から口縁部まで外傾して開く。地文はLRで、これに不整な綾絡文が縦方向に施されている。内面は丁寧なミガキが施されている。5はほぼ全体が残存する。底部は外方に僅かに張り出しをもち、体部は内湾ぎみに立ち上がり口縁部に続く。地文はR1段の無節斜縄文である。内面は全体にミガキが施されている。第77図1は底面に網代痕をもつ。2・3は底面に木葉痕を有する。第97図19は直立する体部をもち、頸部はくびれて内湾しながら開く口縁部に続く。地文はRLで、内面はミガキが施されている。

第Ⅲ群土器（第78図～第84図、第98図～第100図）

縄文時代後期の土器群である。時期的には前葉から末葉までのものが出土している。a～d類に細分した。

Ⅲ群 a 類（第78図—第80図 1、第98図 1～18）

後期前葉期に位置づけられる十腰内 I 式に相当する土器群である。このうち第78図 1～3、第98図 1～7、14～18は前半期に位置づけられる土器群である。第78図 1 はほぼ全体が残存する。底部はいくぶん上げ底となり、体部は僅かに外傾して立ち上がる。この後中央部に緩い膨らみを有し、外反する口縁部に続く。口縁部は 4 単位の山形を呈し、上端は内湾する。文様は口縁部及び体部上半部に沈線によって渦巻状の入組文を交えた曲線文を展開させ、これに L1 段の無節斜縄文を充填しており、体部下半部にも施文されている。内面はミガキが施されている。2 は体部下半部が残存する。文様は体部の上位に施されており、隆帯によって区画している。文様は沈線区画により、これに RL の単節斜縄文が充填されている。また一部に豆粒状の貼り付け文が施されている。体部下位は粗いミガキが施され、底面には網代痕をもつ。3 も体部下半部が残存する。文様はやはり体部の上位に施されており、沈線によって区画されている。区画内には縄文地に沈線によって渦巻状の曲線文が展開されている。地文は RL 縦回転による単節斜縄文である。内面は粗いミガキが施され、底面には笹葉痕をもつ。第98図 1 は口縁部片で、輪状の貼り付け文が施され、これを基点に撚糸圧痕による三角形文が描かれている。2～4 は方形を基調とした磨消文をもつ。5 は頂部に刺突が連続する隆帯が巡り、下位には縄文地に沈線で曲線が描かれている。6・7 も縄文地に沈線によって曲線文が展開されている。14～18 は本類に伴うと考えられる粗製土器で、地文に網目状の撚糸文をもつ。14～17 は口縁部片で、いずれも外反する。17 は口縁部が無文帯となっている。18 は 17 と同一個体の体部片である。

第78図 4、第79図、第80図 1、第98図 8～13 は後半期に位置づけられる土器群である。第78図 4 は体部上半部以上が残存する。体部は外傾し、頸部で「く」字形に屈曲する。口縁部は外傾して開く。口唇部には 6 単位の小突起を有する。文様は口縁部と体部上端に 5～6 本の平行沈線を巡らせ、これを 4 本の平行沈線が斜位に繋ぐものである。口縁部及び体部には LR の単節斜縄文が施文されているが、斜線が施される頸部は無文帯となっている。この縄文は口唇部にも施文されている。第98図 8—12 も同様な文様が描かれている。8 は体部片で、屈曲した線により上下が繋がれている。9～12 は同一個体である。器厚は非常に薄い。いずれも口縁部から頸部にかけての破片で、この部分に多様の平行沈線を引き、数ヶ所縦に区画している。この区画内は磨消され、無文帯となっている。また縦・横の沈線の接点には棒状工具による小さな円形の刺突が施されている。地文は 0 段多状 RL 単節斜縄文である。第79図、第80図 1、第78図 13 は本類に伴うと考えられる粗製土器である。第79図 1 はほぼ全体が残存する。体部は外傾し

て立ち上がり、頸部で「く」字形に屈曲する。強く外傾する口縁部は、4単位の鉤状の小突起を有する。地文はRLの単節斜縄文で、体部上半部と口唇部に施されている。底面には網代痕をもつ。2は体部上端部に最大径を有し、口縁部は外反する。地文はLR単節斜縄文で、体部にのみ施文されている。3は体部が外傾して立ち上がり、上端部でいくぶん内湾して外反する口縁部に続く。口縁部は頂部に凹みを有する6単位の山形口縁を呈する。頸部に捺糸圧痕が巡らされ、これ以下にL1段の無節斜縄文が施文されている。体部下端はミガキが施され、無文帯となっている。第80図1は底部を欠損する。地文はL1段の無節斜縄文である。口縁部はミガキが施され、無文となっている。また、内面にもミガキが施される。第98図13は口縁部片である。口縁部と体部には縄文が施されるが、頸部は無文帯となっている。

Ⅲ群 b₁類 (第80図2・3、第98図19・20)

後期中葉期に位置づけられる加曾利 B₁式に相当する土器群である。第80図2は小形の深鉢で、3単位の波状口縁を呈する。口縁部直下から体部上端に5本の平行沈線を巡らし、これを弧状の沈線によって縦に区切る文様が施されている。地文はLR単節斜縄文である。3は大形の深鉢で、体部は外傾しそのまま口縁部に続く。体部中央に沈線区画された鉤手状の磨消文が連続している。地文は0段多条RL単節斜縄文で、体部下端は無文となっている。第98図19・20は同一個体である。波状口縁を呈し、文様は第80図2と同じモチーフとなる。縄文はRL単節で、文様帯のみに施されている。

Ⅲ群 b₂類 (第98図21~26、第99図1~3)

b₁類と同様に後期中葉に位置づけられる十腰内Ⅲ式に比定される土器群である。第98図21は大きな山形口縁を呈する。山形の頂部直下には縦の刺突を有し、口縁部には波線区画された連続刺突が施されている。器面は丁寧なミガキが施されている。22は口縁部に刺突が連続する2本の低い隆帯が巡らされている。24・25は同一個体と考えられる。小突起を有する山形口縁で、磨消手法による文様が施され、沈線による区画内には非結束の羽状縄文が施文されている。26も小突起を有する大きな山形口縁を呈する。文様は磨消手法による入組状の文様で、区画内には0段多条の非結束羽状縄文が充填されている。第99図1は緩い大きな波状口縁を呈する。2は縄文帯の幅がやや広い。3は口唇部が肥厚し、小突起をもつ。4も波状口縁を呈し、頂部には牛角状の突起を有する。いずれも区画内には0段多条非結束の羽状縄文が施文されている。

Ⅲ群 c類 (第81図・第82図、第99図5~26、第100図1~9)

後期後葉期に位置づけられる十腰内Ⅳ・Ⅴ式に比定される土器群である。第80図1はほぼ全体が残存する。上げ底ぎみの小さな底部をもち、体部は内湾して立ち上がる。口縁部は長く、直立する。口縁部には頂部に凹みを有する台状の突起をもつ。この突起は2個1対のものが4単位の配置され、これらの中間位置に1個が配される。また、2個1対の突起の下位には、口

縁部と体部中央に小さな粘土コブがつけられている。口縁部は縄文地に8本の平行線が巡らされている。体部には磨消手法による入組文が展開されている。地文は不整なものとなっているが羽状縄文である。2は鉢形土器で、口縁部にはミガキが施され無文帯となっている。頸部の縄文帯には縦長の突起をもつ。3は注口土器の体部中央部で、中央やや上位に注口をもつ。4は外傾する口縁部で、頂部には大小の台状突起が配され、大きな突起の下位には粘土コブをもつ。口縁部下位から頸部にかけては縄文地に平行沈線が施され、体部には磨消手法による文様が施文されている。5は口縁部に2個1対の低い突起をもつ。6は長い突起の両側に低い小突起が配されている。7～9は壺形土器である。9は口縁部が内湾ぎみに立ち、大小の突起が配されている。第99図5～20は同様な文様形態をもつ。このうち8の文様は磨消手法ではなく、縄文地に沈線によって描かれている。18～20は山形口縁の頂部で、いずれも両側に小突起が配されている。

第82図1は文様が沈線だけで描かれている。膨らみをもつ頸部から、口縁部は外傾して開く。口縁部には大小の突起が配され、大形の突起の下位には粘土コブが付けられている。口縁部上端と頸部に沈線が巡り、粘土コブと共に文様を構成している。器面は全体に丁寧なミガキが施され、光沢をもつ。第99図21～23も沈線によって文様が構成されている。21は大きな突起の両側に小突起が配されている。22・23は小さな山形突起をもつ。

第82図2～5は器面に粘土コブを有しない土器である。2は壺形土器の体部で中央やや下位に膨らみをもつ。体部下端を除き、沈線区画された曲線的文様が展開されている。3は小型の深鉢で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、僅かにくびれて外傾する口縁部に続く。口縁部は5単位の大きな山形口縁を呈する。文様は磨消手法によって描かれ、体部に入組文風の文様が2段にわたって構成されている。4は鉢形土器で、上げ底の底部から体部は内湾ぎみに立ち上がる。頸部に沈線区画された狭い無文帯が巡っている。5は口縁部だけが残存する。両側に小突起を有する4単位の台状突起をもち、この中間に2個1対の小突起が配されている。文様は沈線区画された入組文が展開されている。

第82図5～7、第99図24～26、第100図1～6は粘土コブを多くもつ土器群である。第82図5は壺形土器で、体部は丸く頸部は内傾してすぼむ。頸部には尖頭のコブが連続する低い隆帯が3段巡る。体部には細い縄文帯と粘土コブによる文様が施されている。6も壺形土器で、屈曲部に小さな粘土コブを伴う細い縄文帯が曲線的な文様を構成している。7・8は注口土器である。7は注口部に縦方向に粘土コブが付けられている。8は注口部だけが残存する。体部との接合部分にコブを伴う縄文帯が2重に巡らされている。9・10は突起である。9は鹿角状を呈し、両側に小突起を有する。10は中央が透しになっている。第99図24は口唇部内側が肥厚する。沈線区画された細い縄文帯に三角形の突起が連続して貼り付けられている。25・26は同一個体で

ある。第100図1・2も同一個体で、1は口唇部が肥厚しこの部分にもコブをもつ。3・4は沈線区画された極めて細い縄文帯が体部文様を構成している。5は2本1組の縄文帯が施されている。

第100図7～9は同一個体で、無文地に沈線によって文様が描かれている。文様の詳細は不明であるが、下位は方形を基調とした入組文、上位は曲線の入組文が展開されているようである。

III群d類（第83図1～11、第84図1）

無文土器を一括した。第83図1は鉢形土器で、上げ底の底部で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は緩く外反する。器面は全体に粗いミガキが施されている。2は口縁部が内湾する。3は底部だけが残存する。4は口縁部が緩く開き、器面にはミガキが施されている。5～9は小型の鉢である。6は4単位の山形口縁をもつ。7は丸底を呈し、口唇部には2個1対の小突起を有していたものと考えられる。8は浅いボール状を呈する。9は平面形が楕円形の浅鉢である。10は高台付の鉢で、台部は僅かに内傾し、体部は内湾ぎみに立ち上がる。器面は内外面とも丁寧なミガキが施されている。11はミニチュアの注口土器で、口縁部を欠損する。体部は上半部に最大径を有し、この部分に短い注口をもつ。

第83図12～17は注口土器の注口部である。12は基部がやや厚く、13は基部に沈線による文様が施されている。15は基部に3本の沈線が巡る。

第IV群土器（第85図、第100図、第101図）

縄文時代晩期の土器群である。初頭から末葉のものが出土しているが、いずれも量は少ない。型式名にあわせてa～dに細分される。

IV群a類（第85図1～5、第100図17）

初頭に位置づけられる大洞B式に相当する土器群である。第85図1は体部下半を欠損する。口縁部は緩く外傾し、小さな山形が連続する。口縁部に山形を基点とする弧状の沈線文が施されている。2も口唇部に不整な小突起が連続する。口縁部には入組状の三叉文が施され、体部はLR単節縄文が縦走する。3は台付鉢で、台部を欠損する。鉢部は体部中央に膨らみをもち、口縁部は緩く外反する。口唇部には刻み状の突起が連続し、口縁部は山形を呈する。体部上端と口縁部に粗雑な沈線によって三叉文が描かれている。体部にはLR単節斜縄文が施文され、内面には多量の炭化物が付着している。4も台付鉢である。台部は内傾して立ち上がった後、膨らみを有し鉢部と接続する。体部は平たく内湾し、口縁部は外傾して開く。口唇部にはB状突起が巡り、口縁部と体部には入組状の三叉文が連続して描かれている。また、台部の膨らみを有する部分には2個の小孔が穿たれ、これを抱くように細長い三叉文が施されている。5は小型の壺で、口縁部を欠損する。体部下端に2本の沈線を巡し、これより上位に三叉文を基調と

した文様が施文されている。第100図17は口縁部片である。口唇部にはB状突起をもち、3本の沈線によって区画された口縁部には肉彫的な入組状三叉文が描かれている。

IV群b類（第85図6～11、第100図18～21）

大洞c₁式に比定される土器群である。第85図6は台付鉢である。台部は「ハ」字に開き、鉢部は内湾する。口唇部は短く外傾し、小さな刻みが連続する。口縁部に2本の沈線が巡り、頂部に刻みをもつ突起を1個もつ。体部にはLR単節斜縄文が施文され、台部下端にも同原体による狭い縄文帯が巡る。口縁部内面には2本の沈線が回り、体部にはミガキが施されている。7も台付鉢である。口縁部、台部下端及び台部下端に沈線が巡る。地文はRL単節斜縄文である。8～10は台部のみが残存する。8は無文で、9は下端に沈線が巡る。10は下端に沈線区画された縄文帯をもつ。11は深鉢で、器厚は非常に薄い。口唇部には小さな山形が連続し、口縁部に3本の細い沈線が巡る。地文はRL単節が縦走し、体部全体に炭化物が付着している。第100図18は壺形土器の破片と考えられ、沈線と刺突による文様が施されている。19も沈線に挟まれた刺突文をもつ。20・21は同一個体で、「く」字状の連続した刺突文をもつ。

IV群c類（第100図22、第101図1）

大洞A式に相当するものであるが、破片が2点だけである。第100図1は鉢形土器の口縁部である。体部は外傾し、口縁部は僅かに内湾する。口縁部上端には刻みが連続して施され、体部上位にかけて、一部に低い突起を有する平行沈線が引かれる。地文はLR単節斜縄文である。第101図1は壺形土器の破片で、全体に変形工字文風の深い沈線文が施文されている。器面はミガキが施され、光沢をもつ。

IV群d類（第85図12～14、第101図2～5）

晩期末葉期の大洞A'に相当する土器である。第85図12は完形の浅鉢形土器である。体部は外傾して立ち上がり、上半部で内湾する。口縁部は平縁で、短く直立する。体部上半部に深い沈線によって変形工字文が描かれている。2本の沈線に区画される体部下半部にはLR単節斜縄文が施されている。にお、口縁部内側にも沈線が1本巡らされている。器面には内外面とも炭化物が付着している。3は体部上半部を欠損する。体部は外傾して立ち上がり下端に1本の沈線が巡る。また、不整形な小孔をもち、周囲には内外面ともアスファルト状の物質が付着している。地文はLR単節斜縄文である。第101図2・3は同一個体である。いずれも口縁部で、頂部に2個の小突起をもつ山形口縁を呈する。体部は内湾し、口縁部は緩く外反する。文様は変形工字文で、山形の下位には2個1対の小突起が付けられる。4も山形口縁を呈するが、外傾する体部からそのまま口縁部に続いている。5は平縁の鉢形土器で、緩く内湾する。共に、2個1対の小突起を有する変形工字文が施文されている。第85図14は深鉢で、直立する口縁部に、3本の平行沈線が引かれている。地文はLR単節縄文である。

第V群土器（第84図、第86図～第89図、第100図、第101図）

縄文時代後期～晩期の粗製土器を一括した。第84図、第100図10～16は後期の粗製土器と考えられる。第84図1は無文の壺形土器で、器面は粗いミガキが施されている。2・3は地文に非結束の羽状縄文をもつ鉢形土器である。2は完形品で、底部は小さく上げ底となり、体部は内湾して立ち上がる。3は丸底を呈する。4も鉢形土器で、体部は外傾し、口縁部上端で僅かに内湾する。外面には6本1組の櫛歯状の沈線文が斜位に施文されている。第100図10も櫛歯状の沈線文をもつ。1条の単位は13本で、これによって流水文あるいは入組文風の文様を構成している。11は細く粗雑な沈線が器面全体に巡らされている。12～16は同一個体で、器面には植物性の繊維束によると考えられる条痕文をもつ。

第86図～第88図は、後・晩期いずれに属するか不明な土器を一括した。第86図1・2は体部が外傾して立ち上がる。1はそのまま口縁部に続く。地文はL1段の無節斜縄文で、これに緩い綾絡文が縦走する。これらは体部上半部に施され、下端部は無文となっている。2は体部上半を欠損する。地文はR1段の無節斜縄文で、底面には網代痕をもつ。第86図3、第87図1・2は口縁部が内湾する深鉢で、地文は単節斜縄文である。第87図2の内面には多量の炭化物が付着している。3・4は、体部が外傾して開く。4は体部下半部が急激にすぼむ。いずれも地文はRL単節斜縄文である。第89図1・2は口縁部が内湾し、地文には非結束の羽状縄文が施文され、内面はミガキが施されている。3は地文に無節斜縄文をもつ。4～8は底部片である。4は上げ底となる。6は底面に木葉痕をもつ。

第86図3、第87図1・2は口縁部が内湾する深鉢で、地文は単節斜縄文である。第87図2の内面には多量の炭化物が付着している。3・4は、体部が外傾して開く。4は体部下半部が急激にすぼむ。いずれも地文はRL単節斜縄文である。第89図1・2は口縁部が内湾し、地文には非結束の羽状縄文が施文され、内面はミガキが施されている。3は地文に無節斜縄文をもつ。4～8は底部片である。4は上げ底となる。6は底面に木葉痕をもつ。

第89図1～7、第101図6は晩期の粗製土器と考えられる。第89図1は口唇部に小さな山形が連続する。地文はLR単節斜縄文で、体部上半部にのみ施文されている。2は口唇部に豆粒状の小突起をもつ。口縁部は僅かに外反し、無文帯となっている。体部にはLR単節縄文が不整方向に施されている。3は口唇部に頂部が凹む突起が施されている。4は平縁を呈する小形の土器である。口縁部は短く外反し、無文となっている。体部にはLR単節斜縄文をもつ。5～7は体部上半部を欠損する。7は体部が内湾し、壺形土器と考えられる。

第VI群土器（第89図～92図、第101図～103図）

弥生土器を一括した。第89図8は高坏形土器で、高台部を欠損する。坏部は6単位の波状を呈し、波頭部に刻みを有する。口縁部内外面には2本の沈線が巡る。体部には磨消手法による文様が施され、全体に朱が塗られている。9は鉢形土器で体部上半部を欠損する。体部中央部に沈線区画された無文帯をもつ。器面には朱が塗られている。また、底面には網代痕をもつ。10は小型の壺で、口縁部を欠損する。体部上端に2本の沈線が巡り、中央部を強く刺突する粘土コブが施されている。11は完形の小型広口壺である。体部は外傾して立ち上がり、上端部に最大径を有する。口縁部は外傾して開き、頂部に刻みを有する5単位の山形を呈する。文様は沈線だけで構成されている。口縁部には山形を繋ぐように巡らされ、体部上半部には、5本の平行沈線と、この中間に変形工字文が構成されている。地文はLR単節斜縄文である。12は高坏で、坏部と台部の接合部分だけが残存する。坏部の下端に2本の沈線が巡り、器面には朱が塗られている。13は蓋の破片と考えられる。全体に緩く内傾し、口唇部に原体による刺突をもつ。地文はL1段の撚糸文で、これに山形沈線が引かれている。

第101図8～9は無文地に沈線によって変形工字文が描かれるもので、高坏あるいは浅鉢形土器の破片と考えられる。7は頂部に凹みを有する山形口縁を呈する。他は平縁を呈し、いずれも口縁部内側にも沈線が巡る。9は器面に朱が塗られている。14～20、第102図1も高坏か浅鉢と考えられる破片で、文様が磨消手法によるものである。14・15・20は同一個体と考えられ、磨消手法によって工字文風の文様が構成されている。また、器面には朱が塗られている。18・19は高台部の破片である。

第102図2～4は磨消手法によって文様が構成される壺形土器の破片である。3・4は同一個体と考えられ、幾何学的文様が施され、朱が塗られている。5～21は平行沈線文をもつ壺形土器である。5は口縁部片で内外面に2本の沈線が巡る。6は肩部の破片で、強く張るものと考えられる。平行沈線と工字文が描かれ、内外面に朱が塗られている。7は広口壺で、頂部に刻みをもつ山形口縁を呈する。口縁部と体部上端に3本の細い沈線が巡る。8は細い沈線に小さな粘土コブを伴う。9も口縁部に細い沈線と粘土コブをもつ。また、口唇部にも沈線が巡らされている。13・14は体部上端に平行沈線が施されている。17～19は長頸の壺形土器と考えられる。17は無文地に細い沈線が密に引かれ、一部が変形工字文を構成している。18・19は同一個体である。縄文地に細く密な沈線によって変形工字文が描かれている。この文様は体部上端部より上位に施されている。20・21は広口壺の口縁部で、いずれも頂部に刻みを有する山形を呈し、これに沿って2本の沈線が巡らされている。

第90図～第92図1～7、第102図22～29、第103図は粗製土器である。大部分が大型の甕形土器である。第90図1は底部及び口縁部を欠損する。体部中央で緩く膨らみ、口縁部は外反する

ものと考えられる。地文は LR 単節縄文で、体部上半部に横走する。2 は口縁部が短く立つ。体部上半～口縁部は粗雑なミガキが施され無文となっている。体部下半には LR 単節縄文が横走する。3 は底部を欠損する大型の甕で、体部上端に最大径を有し、口縁部は短く、僅かに外傾する。口縁部には小さな山形が連続する。体部には LR 単節縄文が横走し、内面はミガキが施されている。第91図 1 も連続する山形口縁を呈する。頸部に沈線が巡り、体部と口縁部を区画している。口縁部は無文で、体部には RL 単節縄文が横走する。2 は平縁を呈する。3 は口縁部が内湾する。4 は口縁部が外傾して開く。地文は LR 単節縄文で、口縁部には横回転、体部には斜回転で施文されている。6 は体部上端部に膨らみを有し、口縁部は長く外反して開く。口縁部は無文で、体部には RL 単節斜縄文をもつ。また、内面は横方向のミガキが施されている。

第102図22～29は口縁部が短かく外傾する小型の甕と考えられる。22・23は頂部に刻みを有する山形口縁を呈する。26・28は平縁である。他は小山形が連続する。また、22・27～29は頸部に沈線が巡る。第103図 1～6 は口縁部が長く外反する甕である。1 は口縁部がやや肥厚する。地文は RL 単節縄文で、口縁部及び体部上端は横回転、体部は斜回転で施文され、口唇部にも施されている。なお、頸部は磨消され、無文帯となっている。2 は全面に 0 段多条の縄文をもつ。口縁部には焼成前にあけられた小孔を有する。4 は口縁部が無文帯となっている。5 は地文に L1 段の無節斜縄文をもつ。

第92図 1～7、第103図 7～17は地文に撚糸文をもつものである。第92図 1 は口縁部だけが残存する。口縁部と体部に斜方向の撚糸文を施し、頸部で縦方向にこれを繋いでいる。2 は体部下半部が残存する。地文は L1 段の撚糸文で、体部には縦方向、底部には斜方向に施文されている。また、体部下端には緩い綾絡文が 1 本巡らされている。3～7 は底部のみが残存する。第103図 7 は口縁部片で、口唇部と内面にも地文が施されている。8・9 は折り返し口縁となる。10・11 は同一個体である。口縁部には絡条体圧痕による文様が施されている。12 は無文帯を挟んで、上位は斜方向、下位は縦方向に撚糸文が施文されている。13 は縦方向の撚糸文に一部横方向に施文している。14 は横方向と斜方向、15 は縦方向と斜方向に施文されている。16・17 は無文部分が多い。

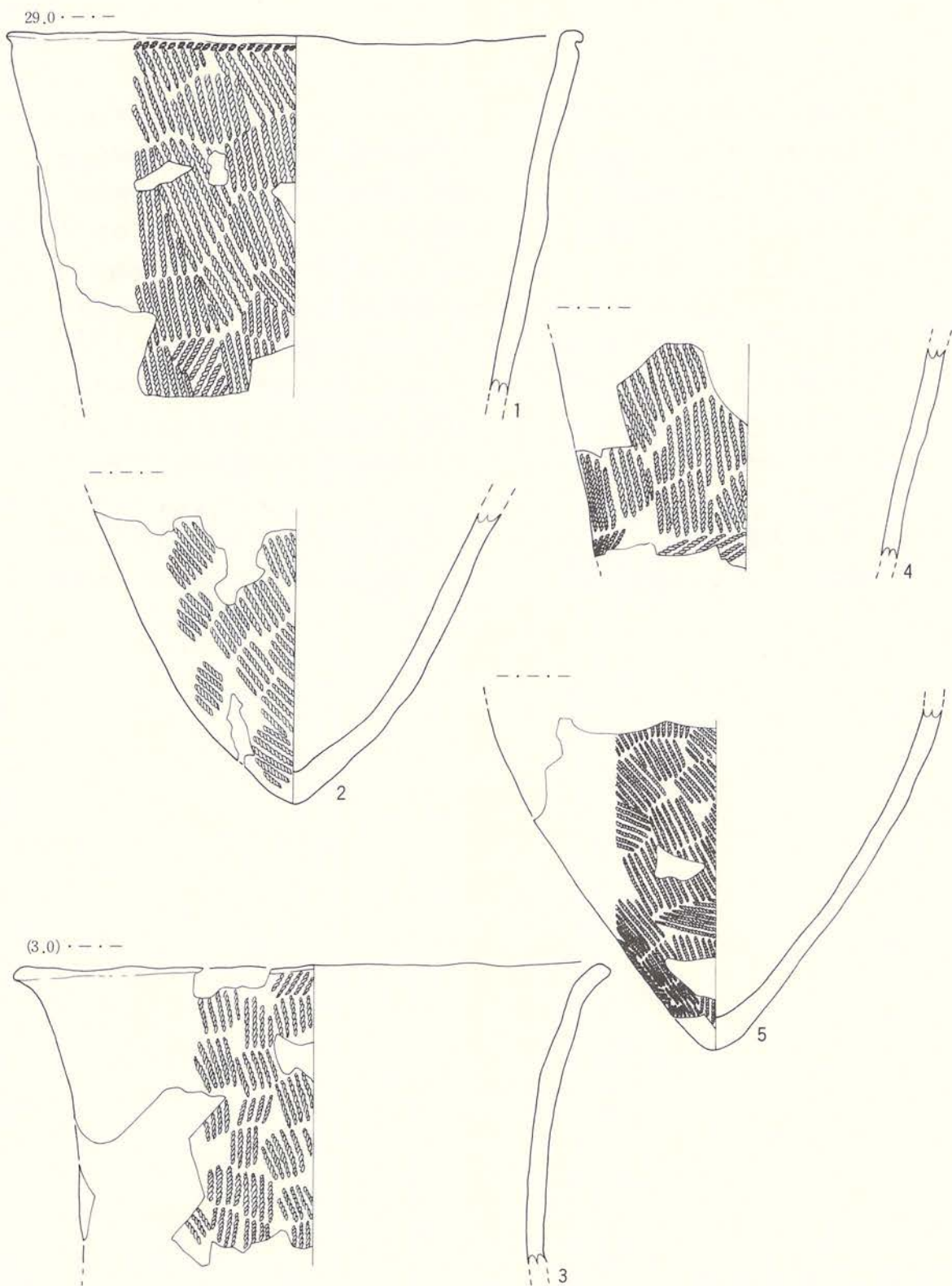
第Ⅶ群土器（第92図、第93図）

土師器を一括した。いずれもロクロ不使用の甕である。第92図 8～11 は口縁部が長く外反するタイプのものである。8 は体部上半部を残存する。体部にはいくぶん膨らみを有するが、ほぼ直立するものと考えられる。口縁部は強く外反する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は上端部が横方向、以下は縦方向のナデが施されている。9 はやや口縁部が短い。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともナデ調整されている。10・11 は口縁部

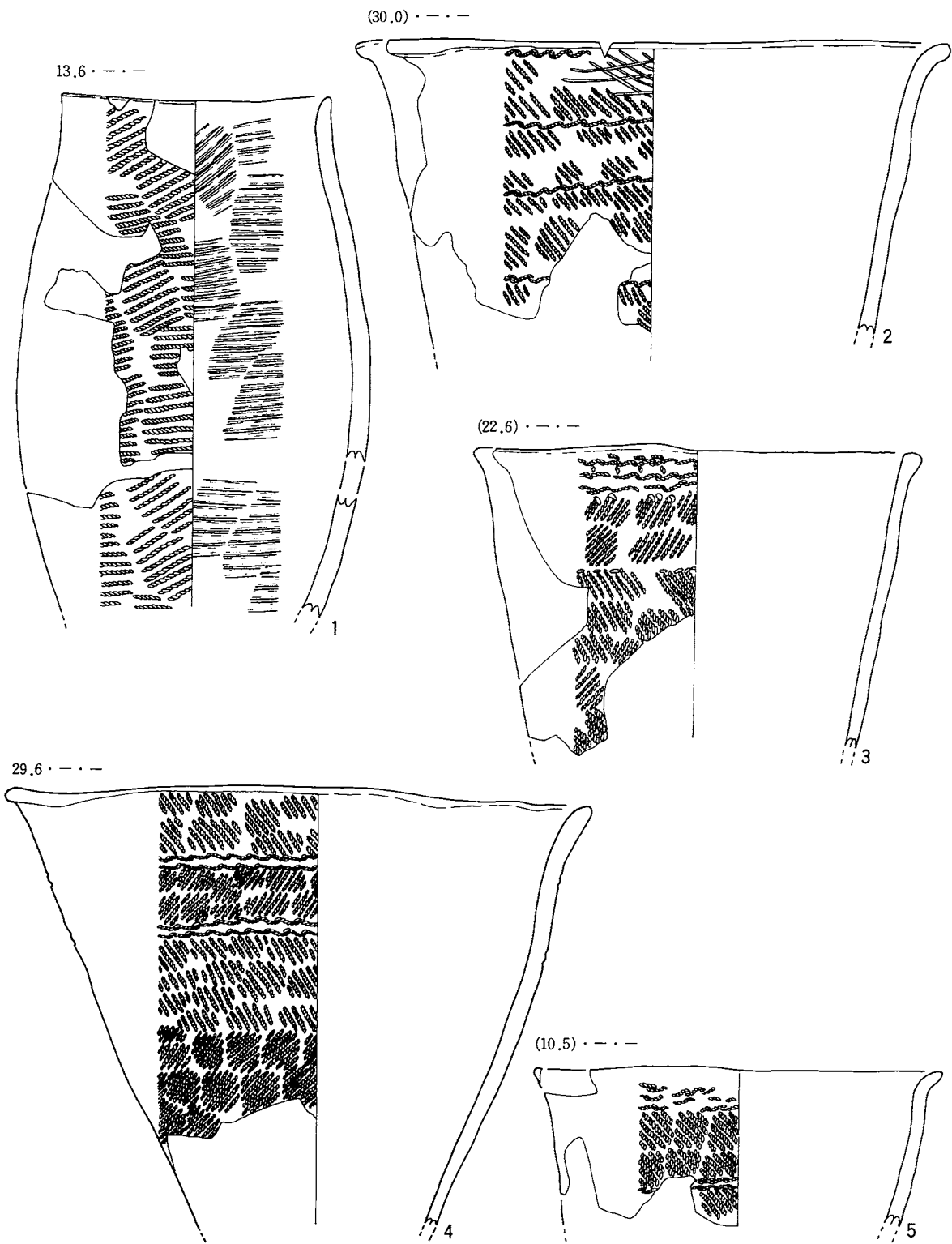
片である。11は口縁部が強く外反する。

第92図12・13、第93図1～11は口縁部が短いタイプの甕である。第92図12は口縁部が内湾し、口唇部が僅かに外方にひねり出されている。13は口縁部が短く外反する。どちらも口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。13は器面に輪積痕を残す。第93図1はほぼ全体が残存する。底部は平底で外方への張り出しはもたない。体部は外傾して立ち上がり、上半部にいくぶん膨らみを有する。口縁部は短く外反する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面は横方向のナデが施されている。2は口縁部が短く外方にひねり出されている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。3～11は同じタイプの口縁部片である。8を除き調整は口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。体部外面に施されるヘラケズリは、前述のタイプに施されるものより粗雑である。8は体部外面がナデ調整されている。

13・14は底部片である。いずれも張り出しをもつ。12は体部が内湾ぎみに立ち上がり、13は外傾して立ち上がる。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整されている。13は底面に木葉痕をもつ。

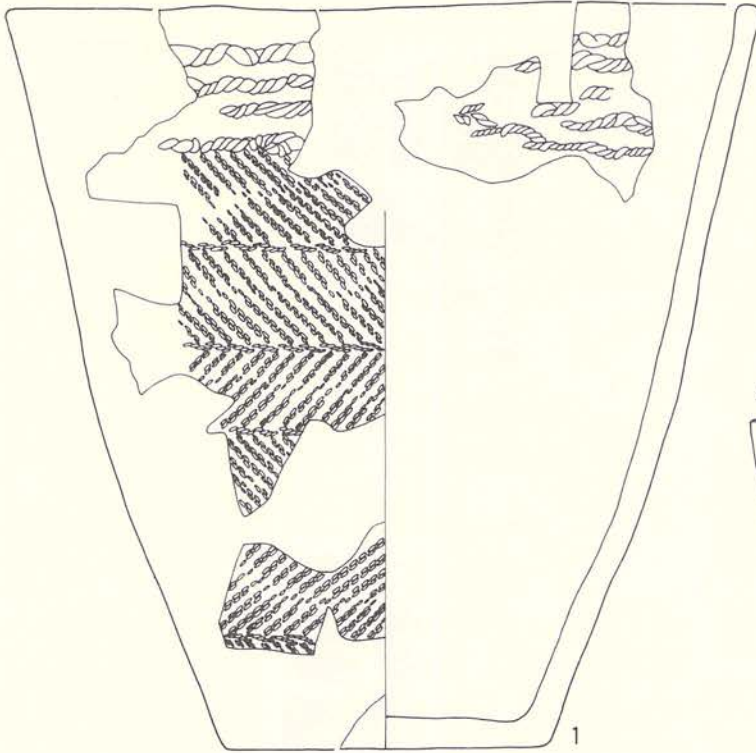


第66図 遺構外出土遺物

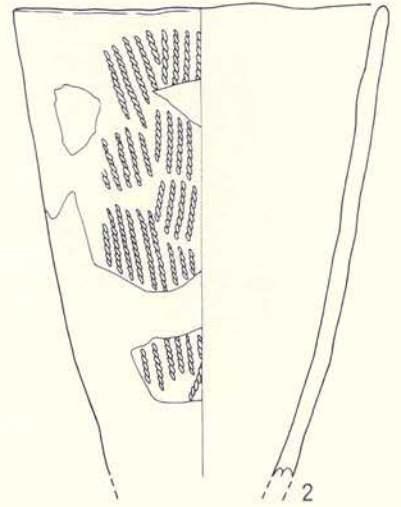


第67図 遺構外出土遺物

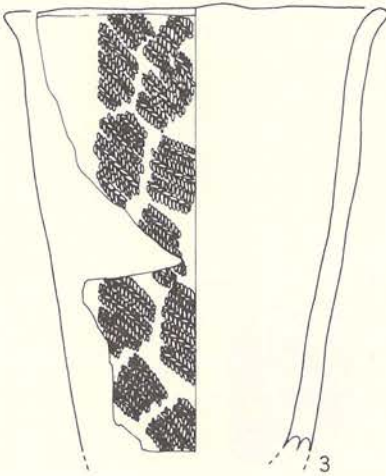
(30.8) · (28.0) · 12.0



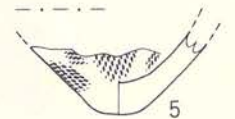
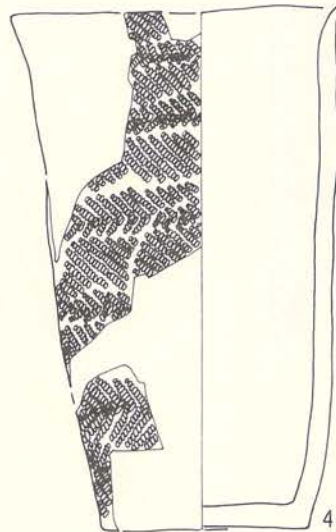
15.2 · - - -



(15.6) · - - -

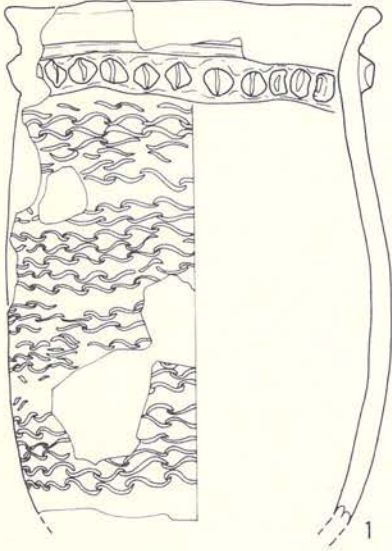


(18.4) · 21.3 · 8.5

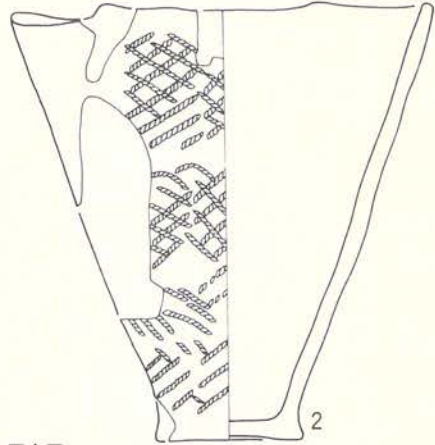


第68図 遺構外出土遺物

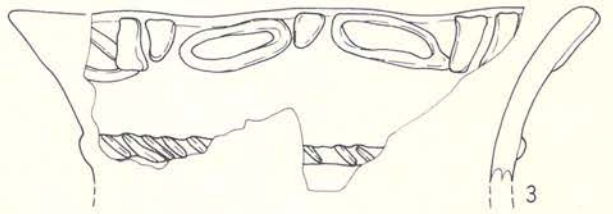
(15.3) · (20.8) · —



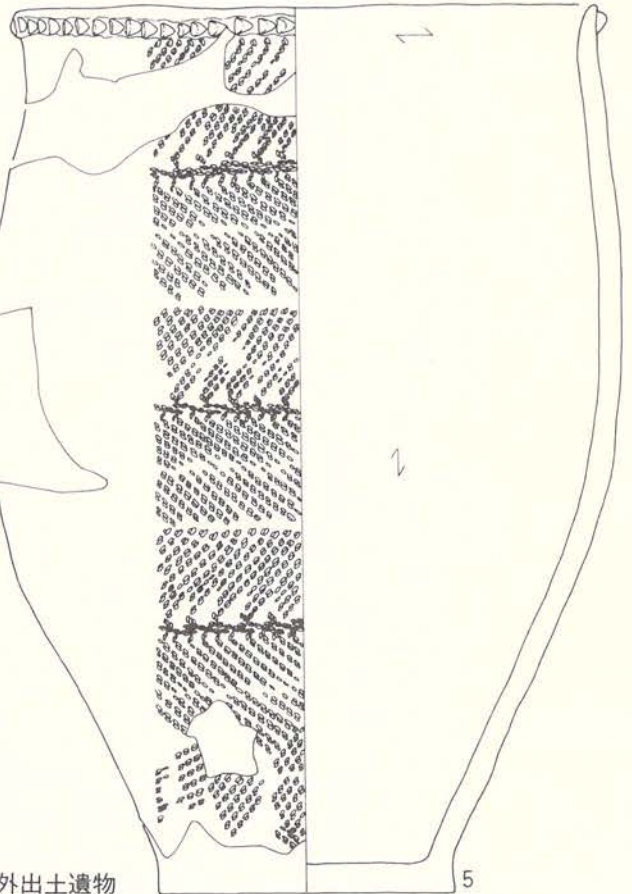
(17.2) · 17.5 · (6.0)



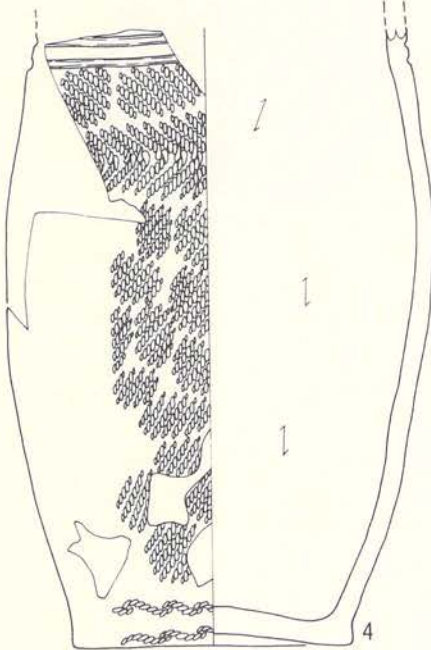
(24.0) · - - -



23.4 · 36.2 · 12.0

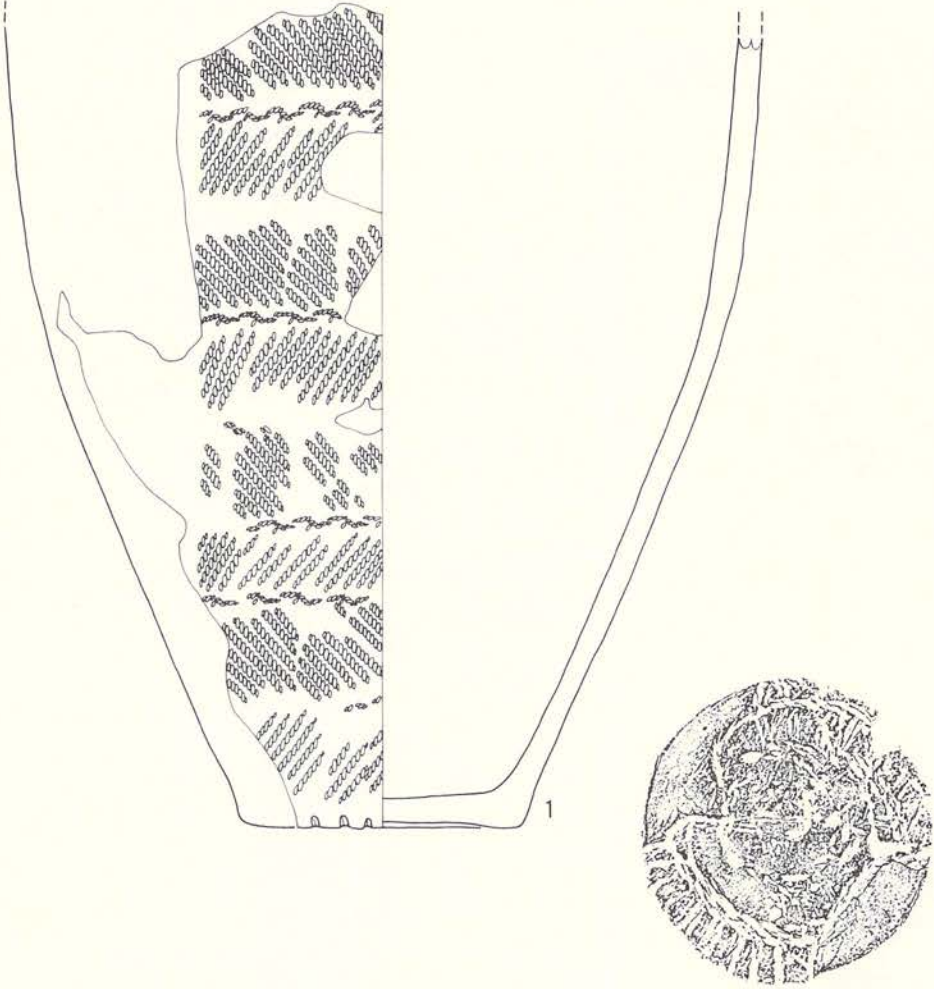


- - - 11.3

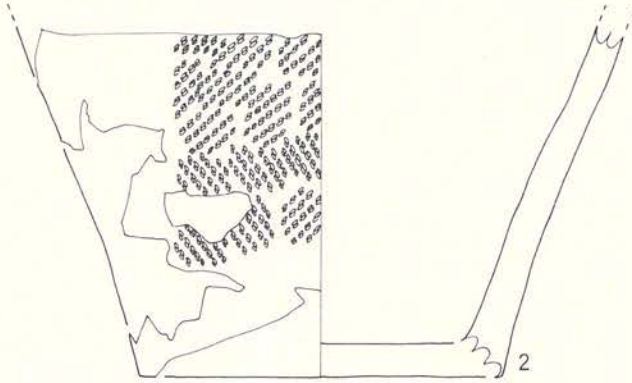


第69図 遺構外出土遺物

--- (11.6)

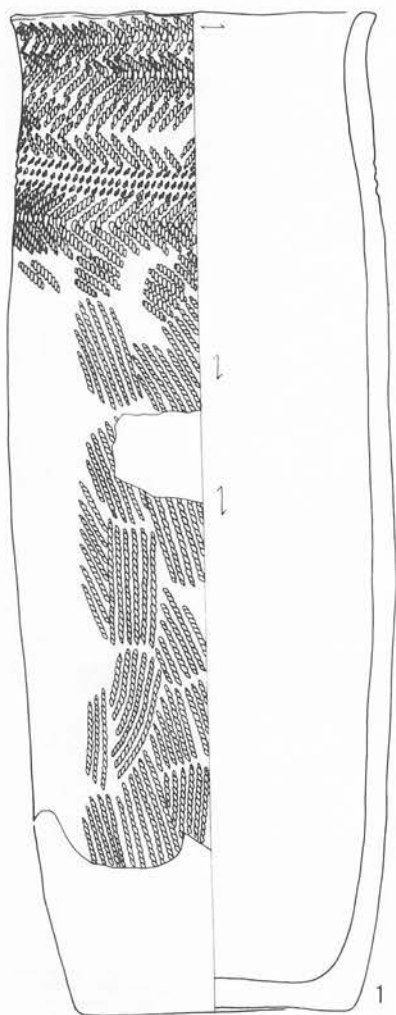


--- (10.8)

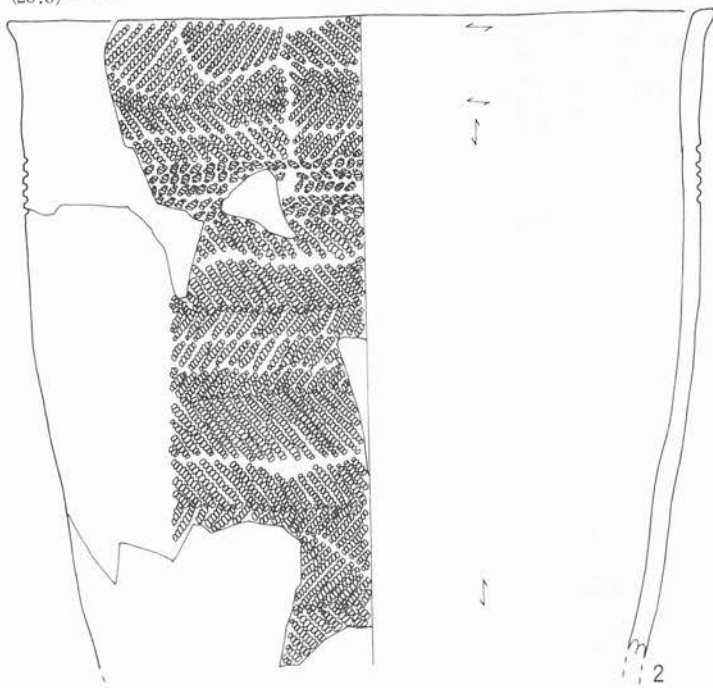


第70図 遺構外出土遺物

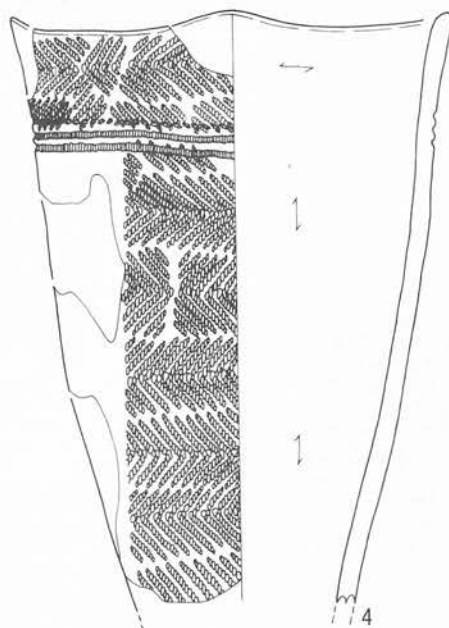
14.8 · (40.4) · (11.6)



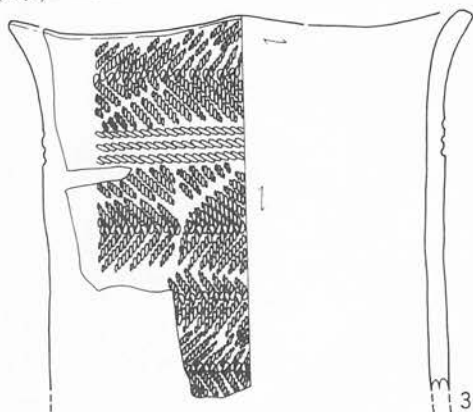
(28.8) - - -



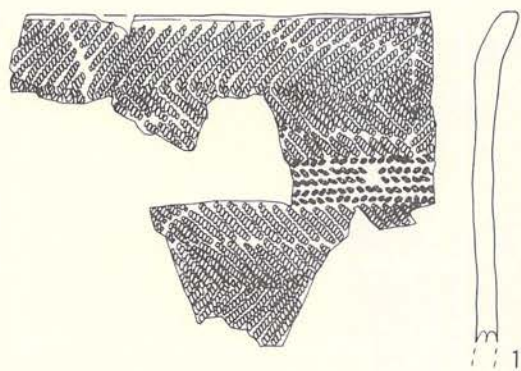
(18.0) - - - - -



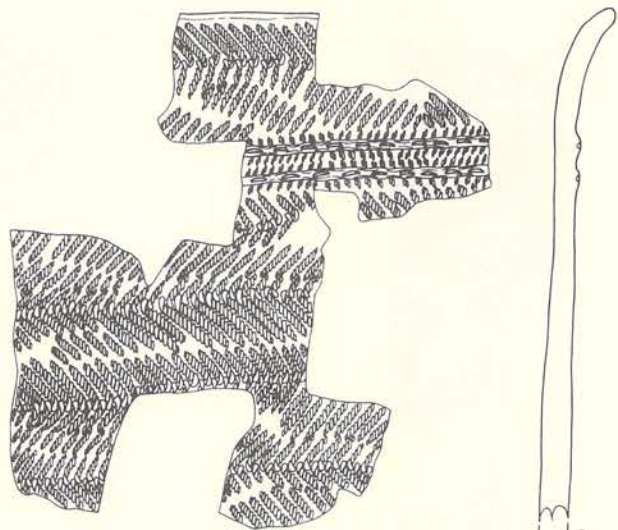
(18.8) - - - - -



第71図 遺構外出土遺物

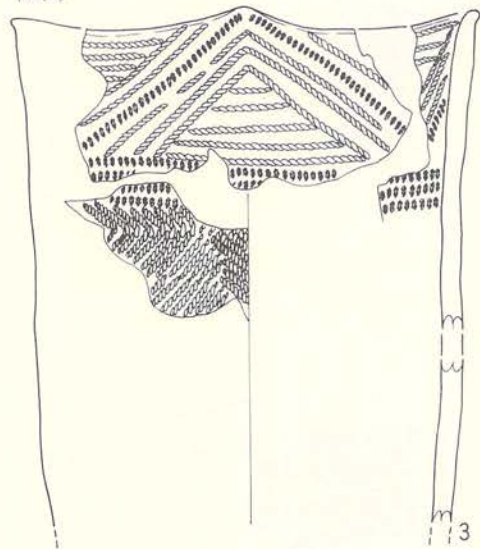


1



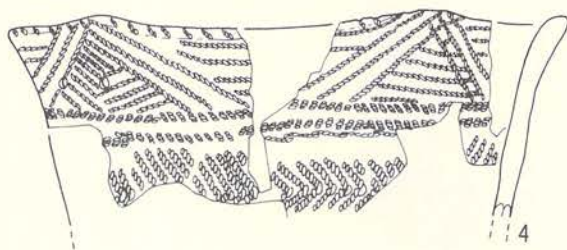
2

(19.2) · · · · ·



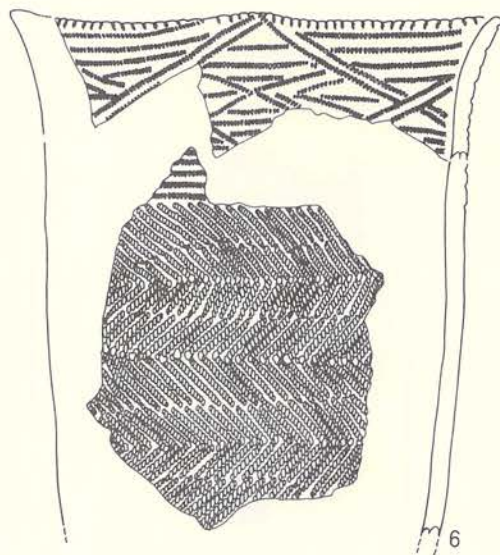
3

22.8 · · · · ·



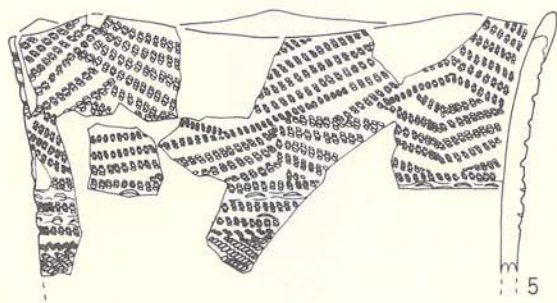
4

20.0 · · · · ·



6

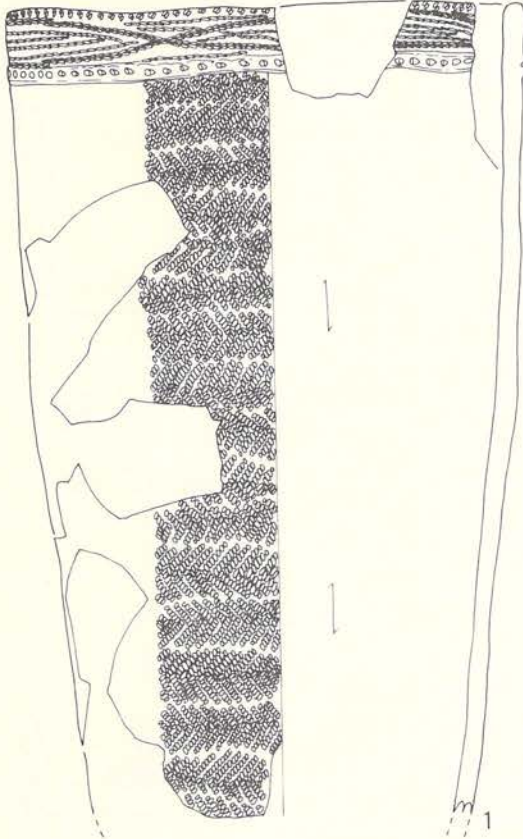
22.2 · (10.6) · · ·



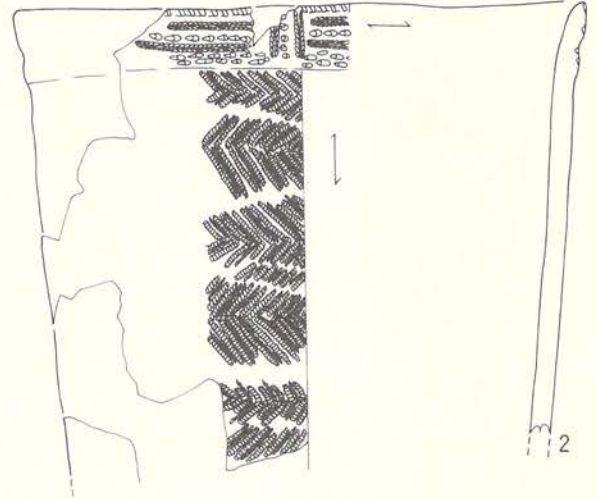
5

第72図 遺構外出土遺物

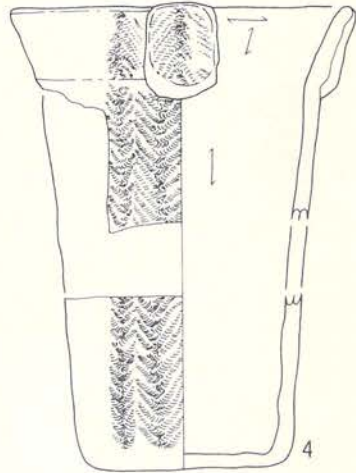
21.2 · - - -



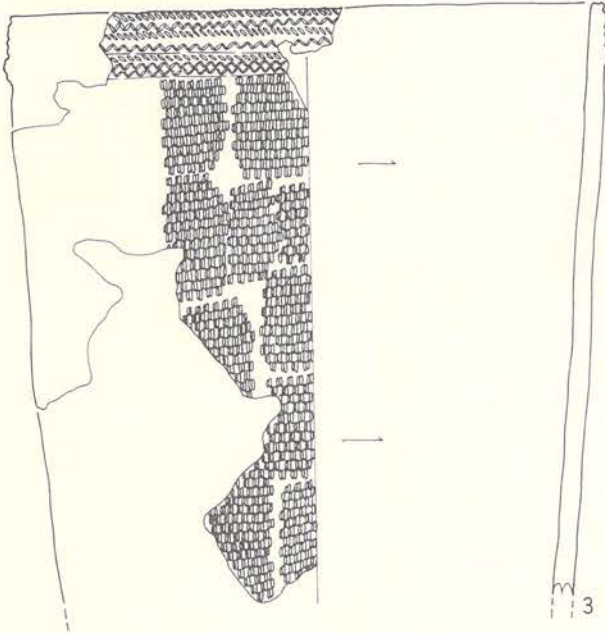
(22.2) · - - -



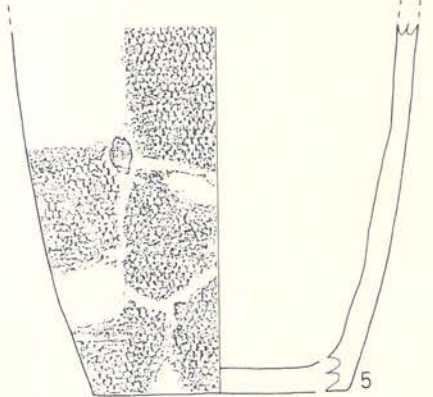
13.7 · 7.0 · - -



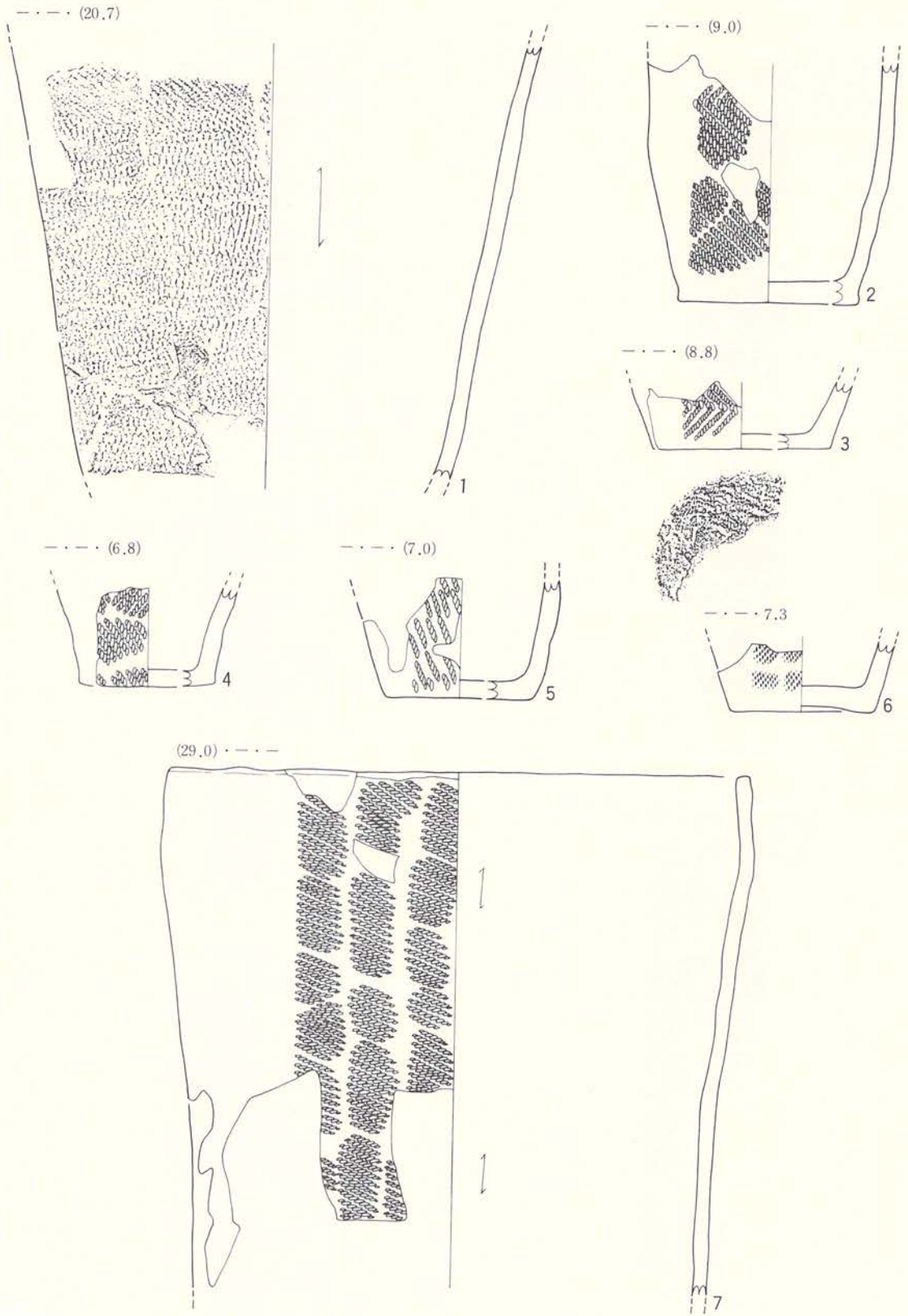
(24.2) · - - -



- - - (10.4)

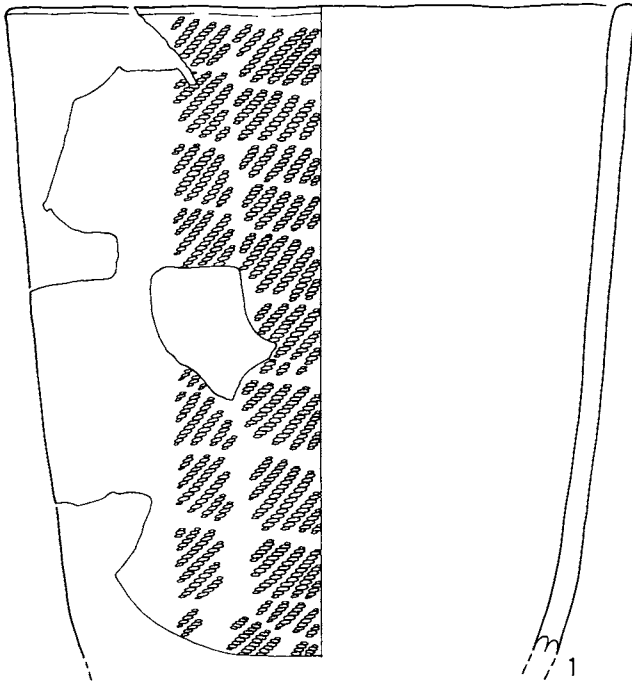


第73図 遺構外出土遺物

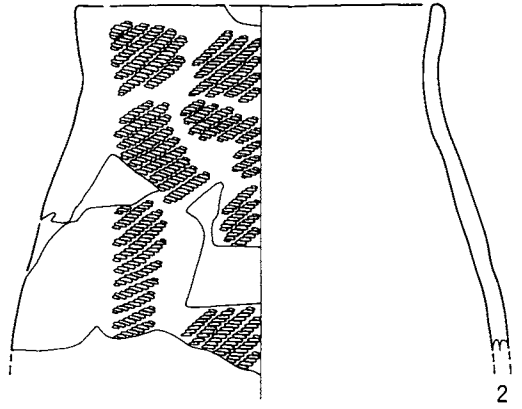


第74図 遺構外出土遺物

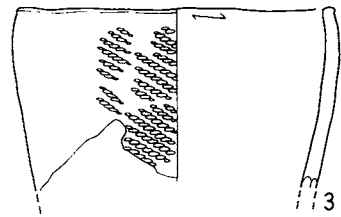
(25.8) · · · ·



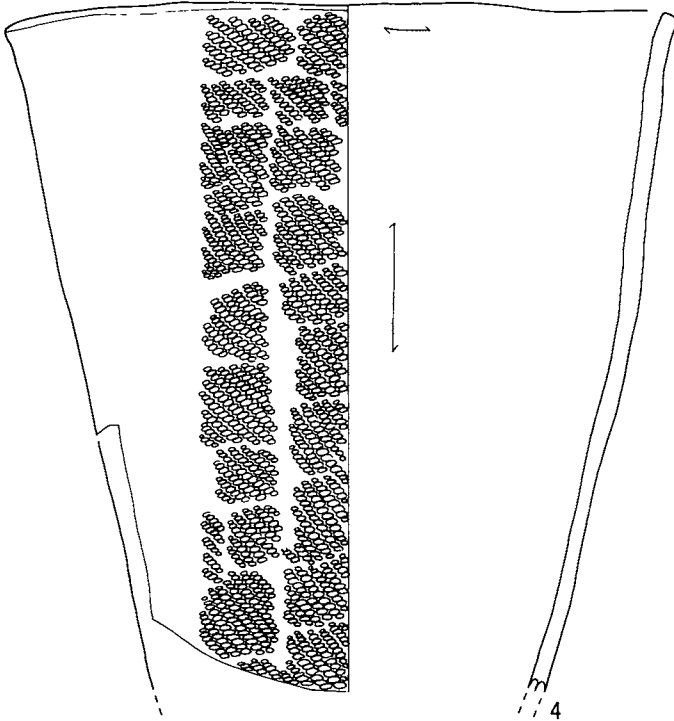
15.0 · · · ·



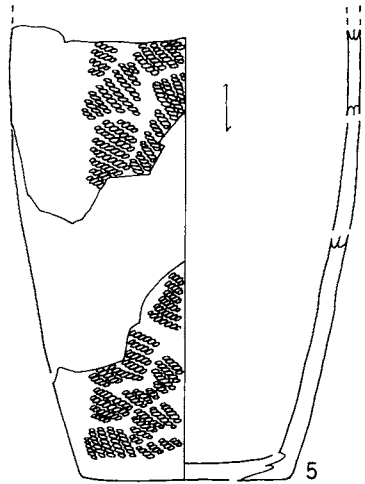
(13.0) · · · ·



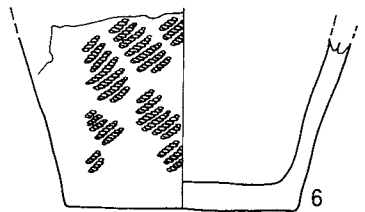
27.3 · (24.0) · -



· · · · (8.4)

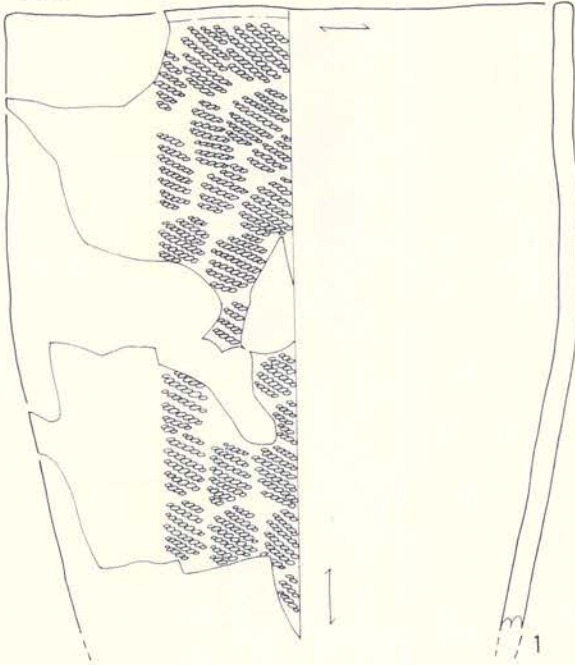


· · · · 9.4

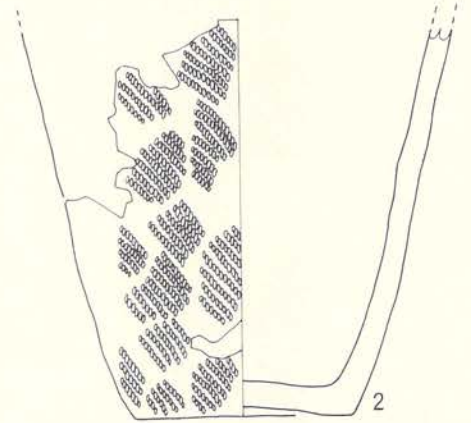


第75図 遺構外出土遺物

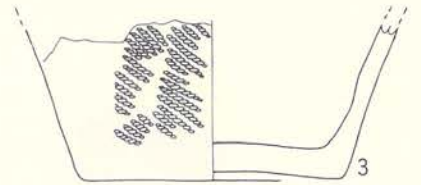
(23.0) · · · · ·



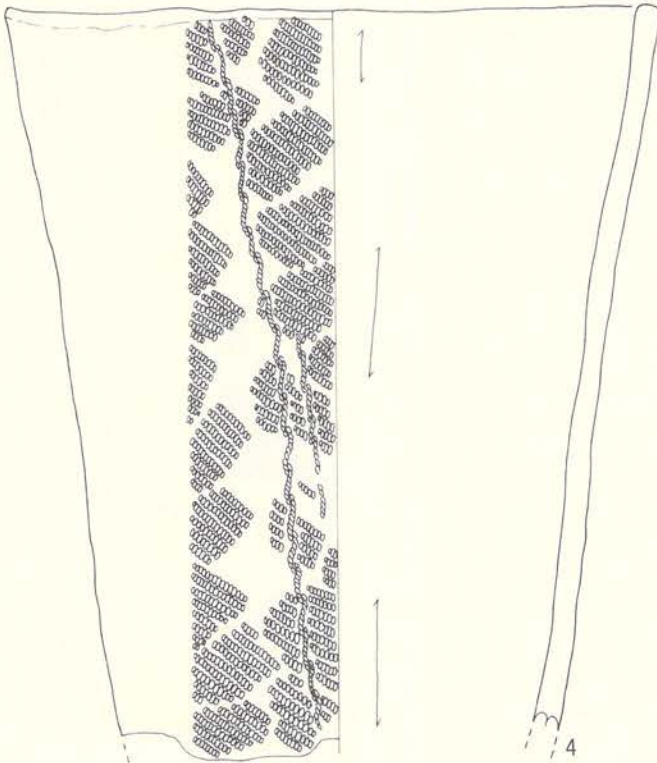
· · · · · 4.0



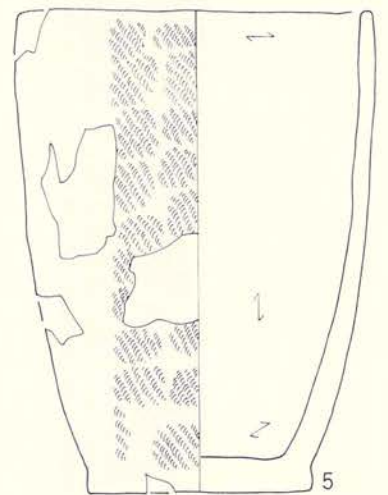
· · · · · 10.8



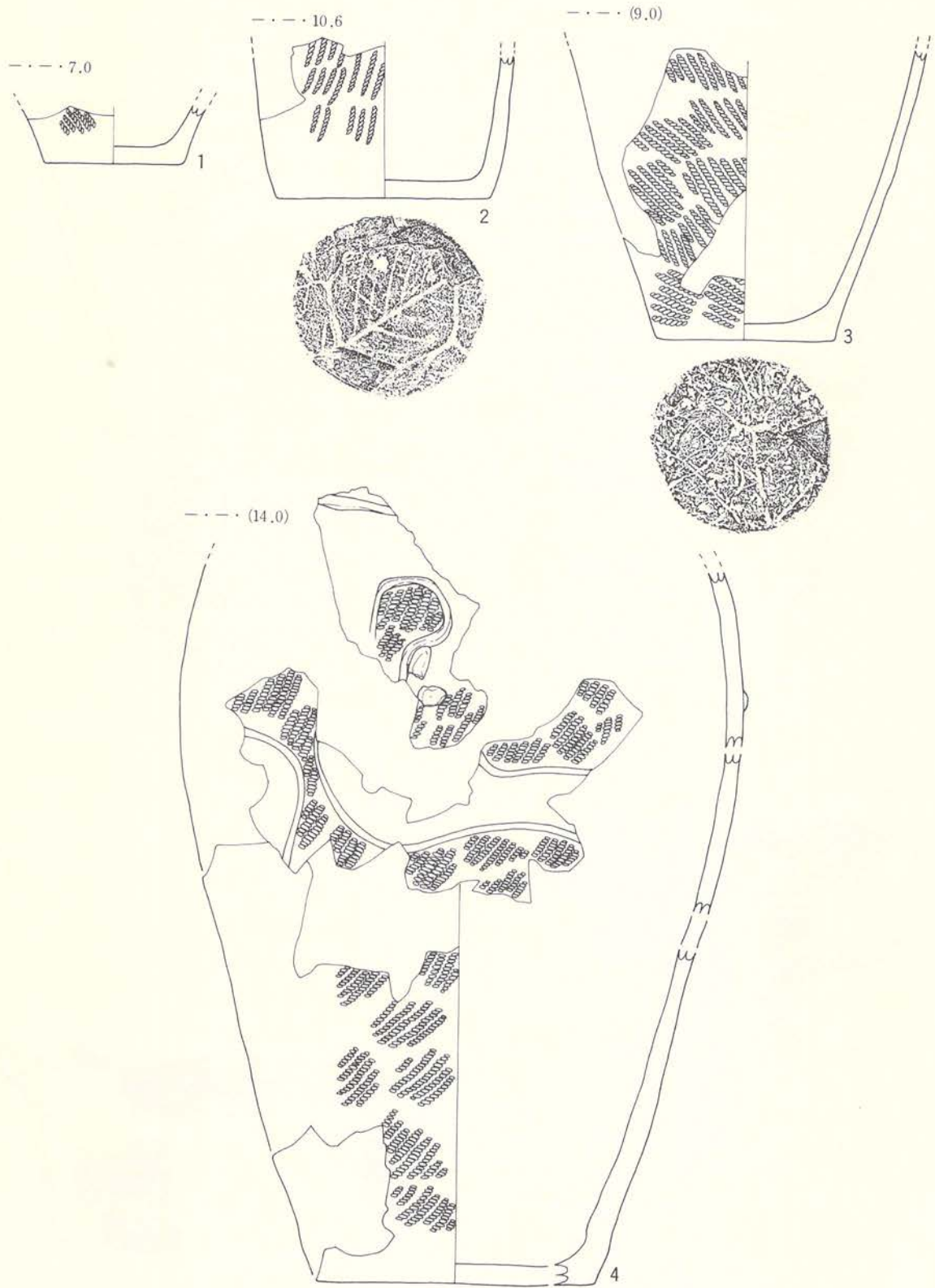
26.4 · · · · ·



(14.5) · 14.7 · (9.0)



第76図 遺構外出土遺物

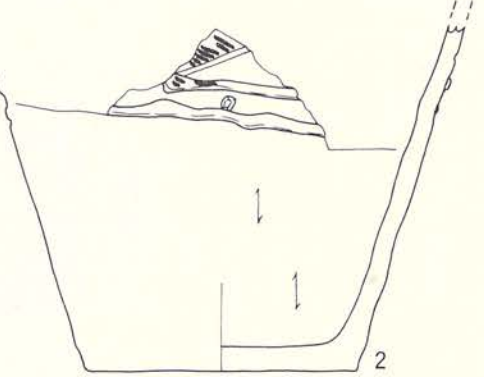


第77図 遺構外出土遺物

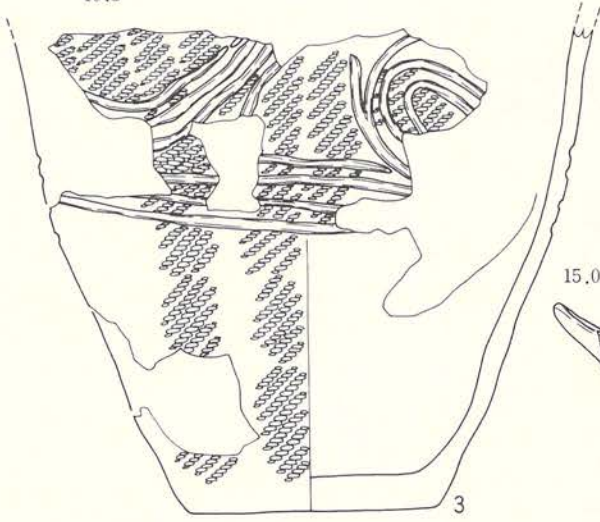
(21.0) · 28.8 · 8.3



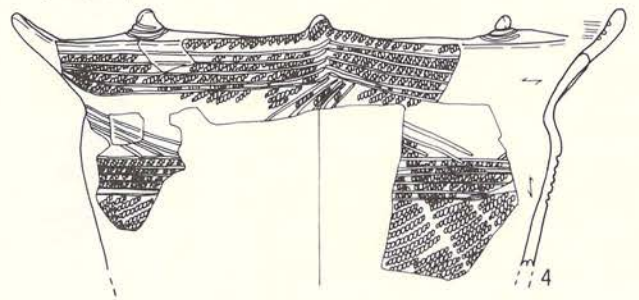
--- · 11.0



--- · 10.2



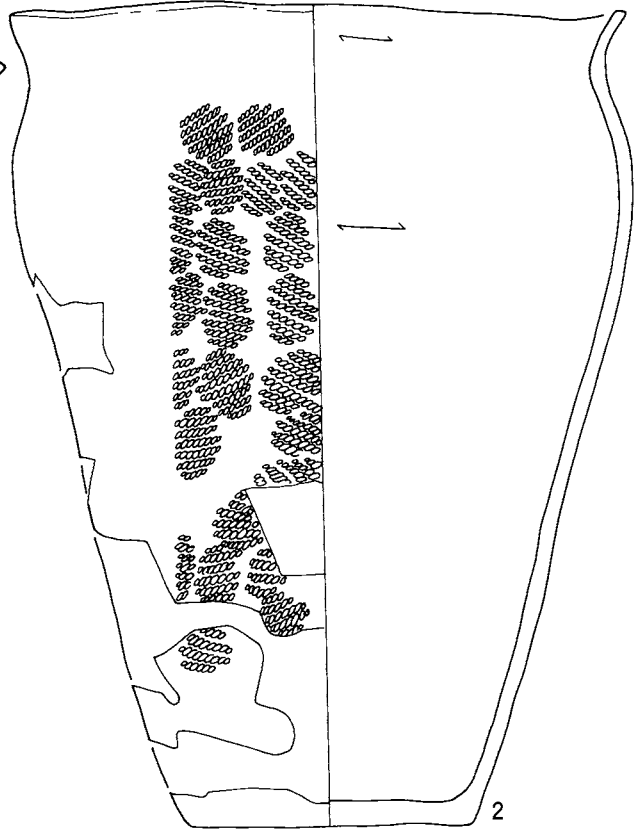
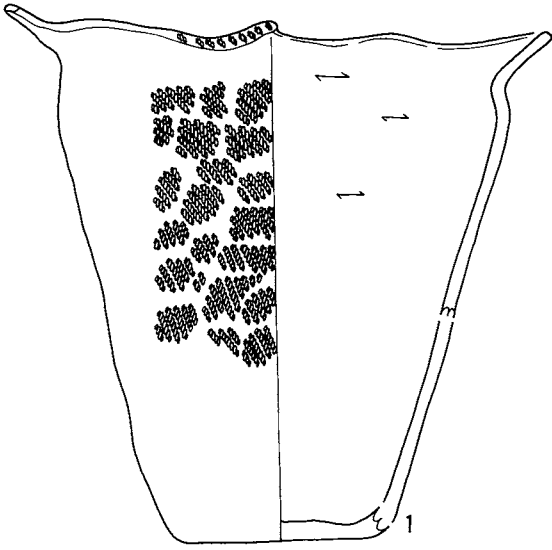
15.0 · (11.0) · --



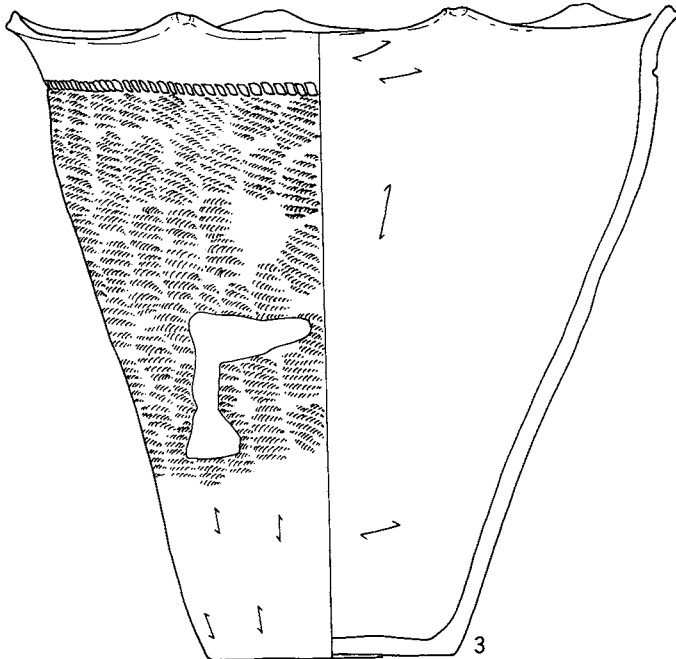
第78図 遺構外出土遺物

25.1 · 33.4 · 11.5

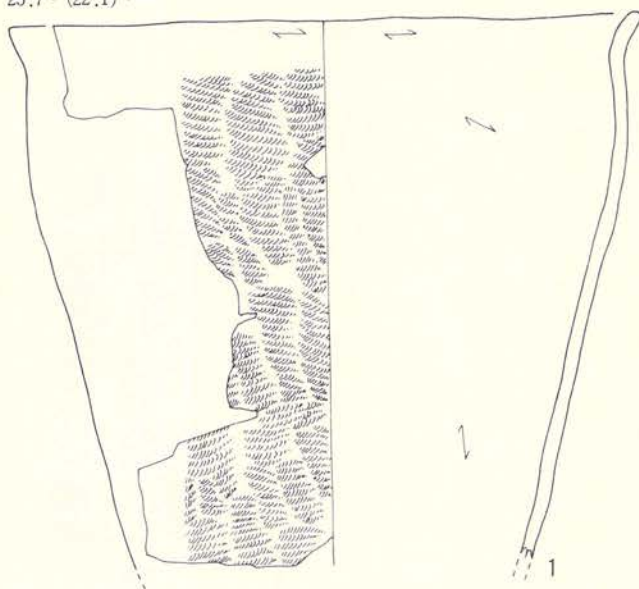
21.1 · 21.8 · 7.6



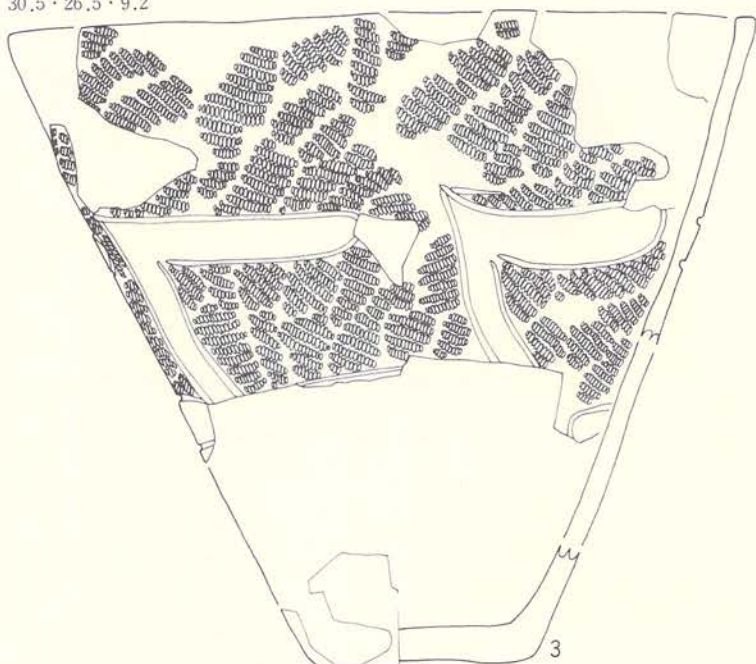
21.4 · 26.3 · 10.0



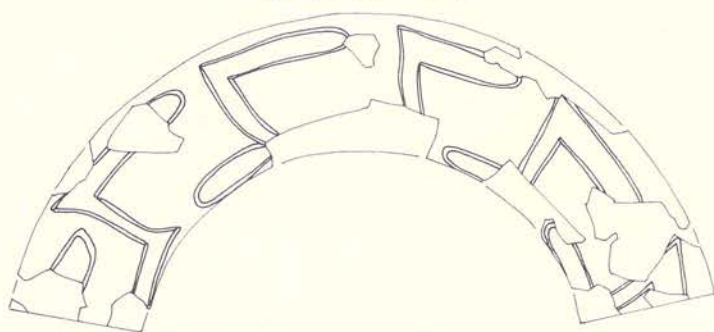
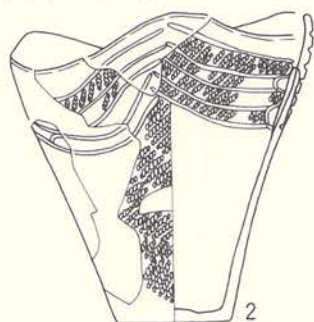
第79図 遺構外出土遺物



30.5 · 26.5 · 9.2

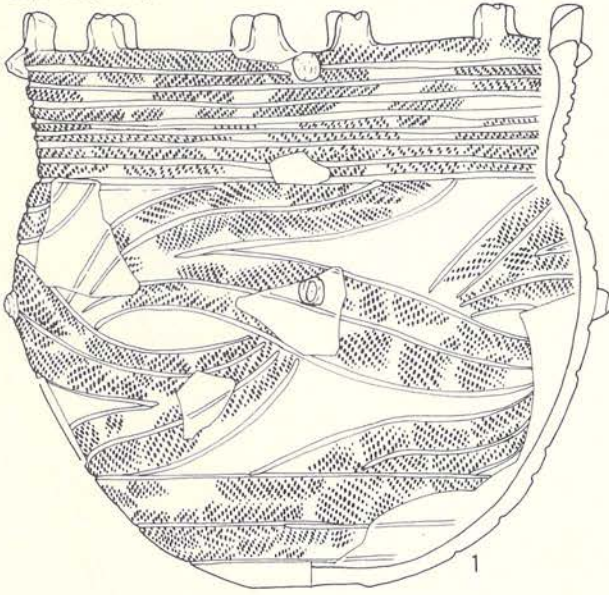


(12.3) · 12.5 · 4.5

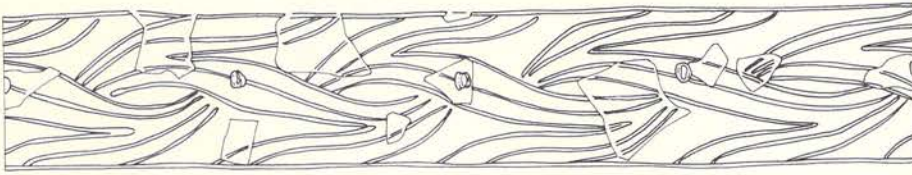
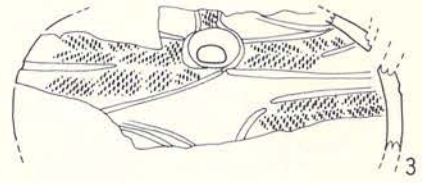
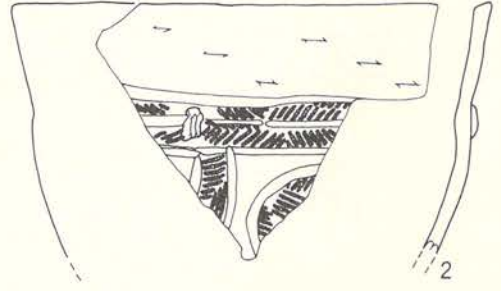


第80図 遺構外出土遺物

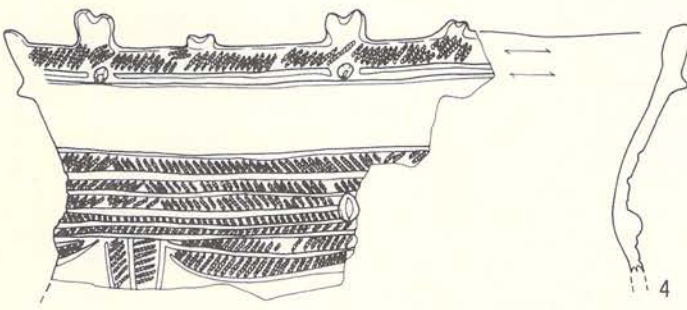
22.8 · 23.2 · 25.0



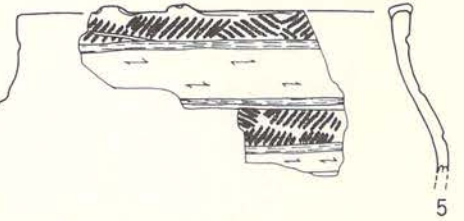
(19.6) · - - -



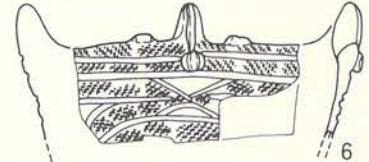
28.0 · - - -



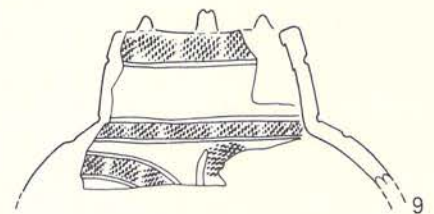
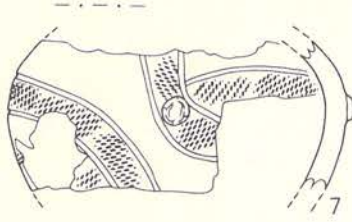
(16.7) · - - -



(14.0) · - - -

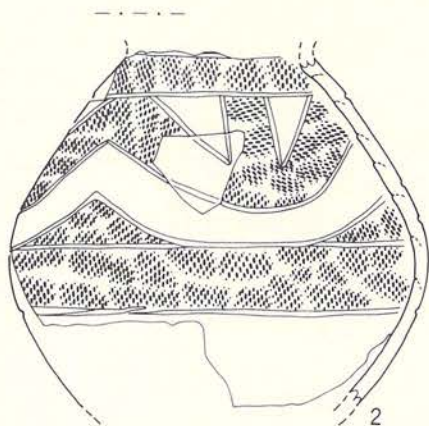
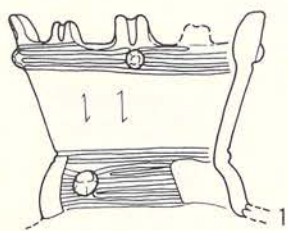


(7.4) · - - -

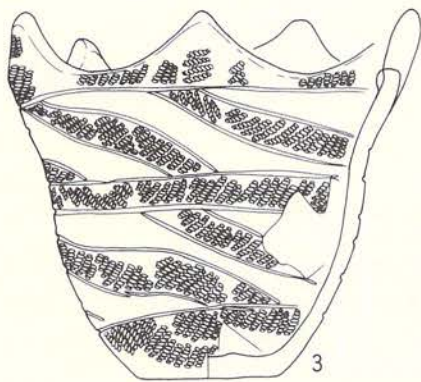


第81図 遺構外出土遺物

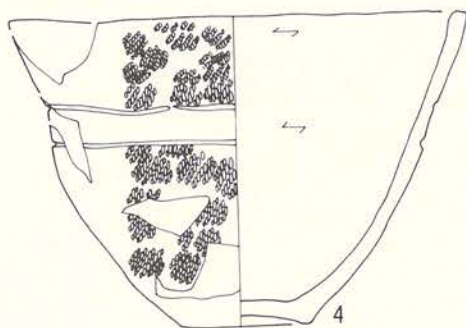
10.4 · · · · ·



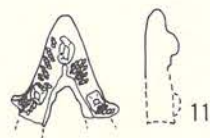
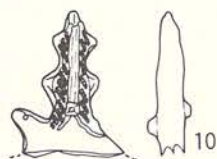
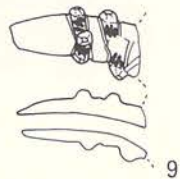
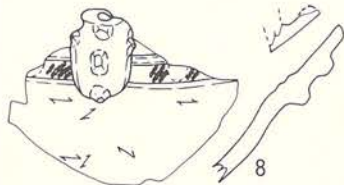
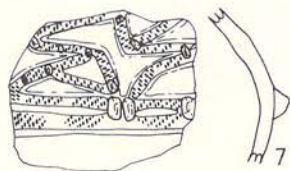
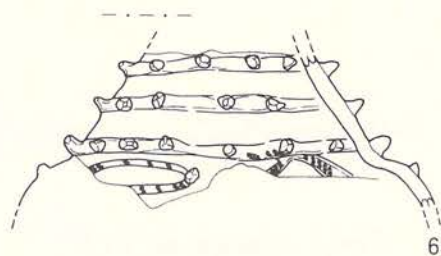
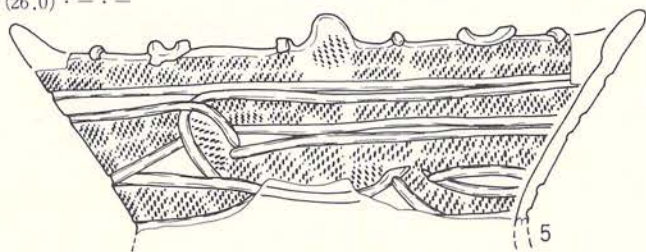
16.0 · 14.9 · 5.5



18.7 · 12.6 · 5.1

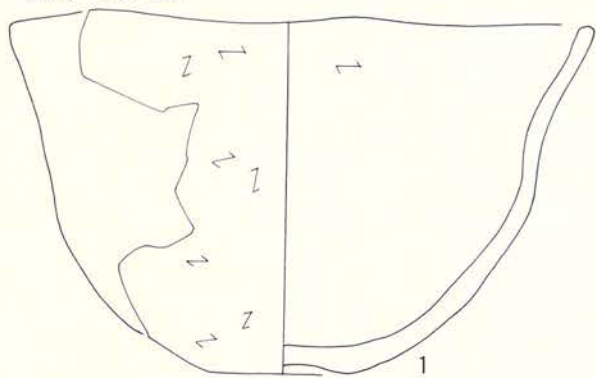


(26.0) · · · · ·

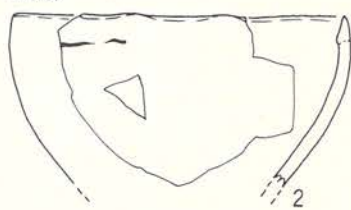


第82図 遺構外出土遺物

(23.7) · 14.2 · 5.6



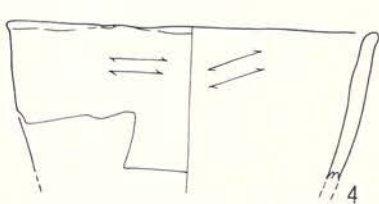
(13.5) · - - -



- - - · 5.4



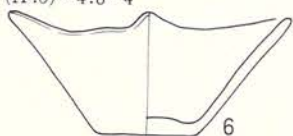
15.0 · - - -



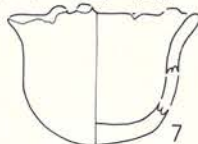
4.0 · 2.2 · 2.6



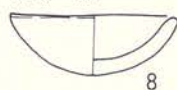
(11.6) · 4.8 · 4



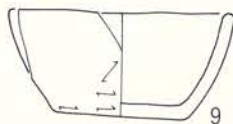
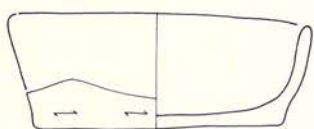
(7.8) · (5.3) · (1.0)



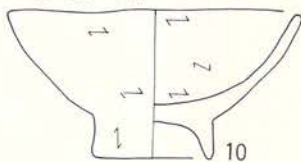
(6.8) · 2.4 · -



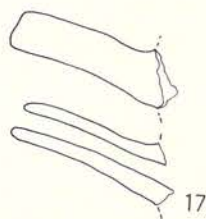
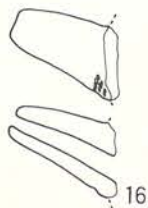
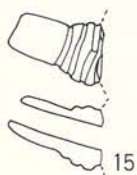
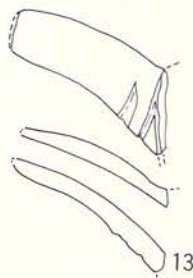
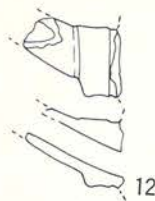
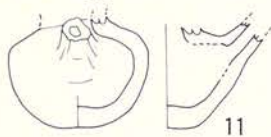
12.4 · 4.7 · 10.0



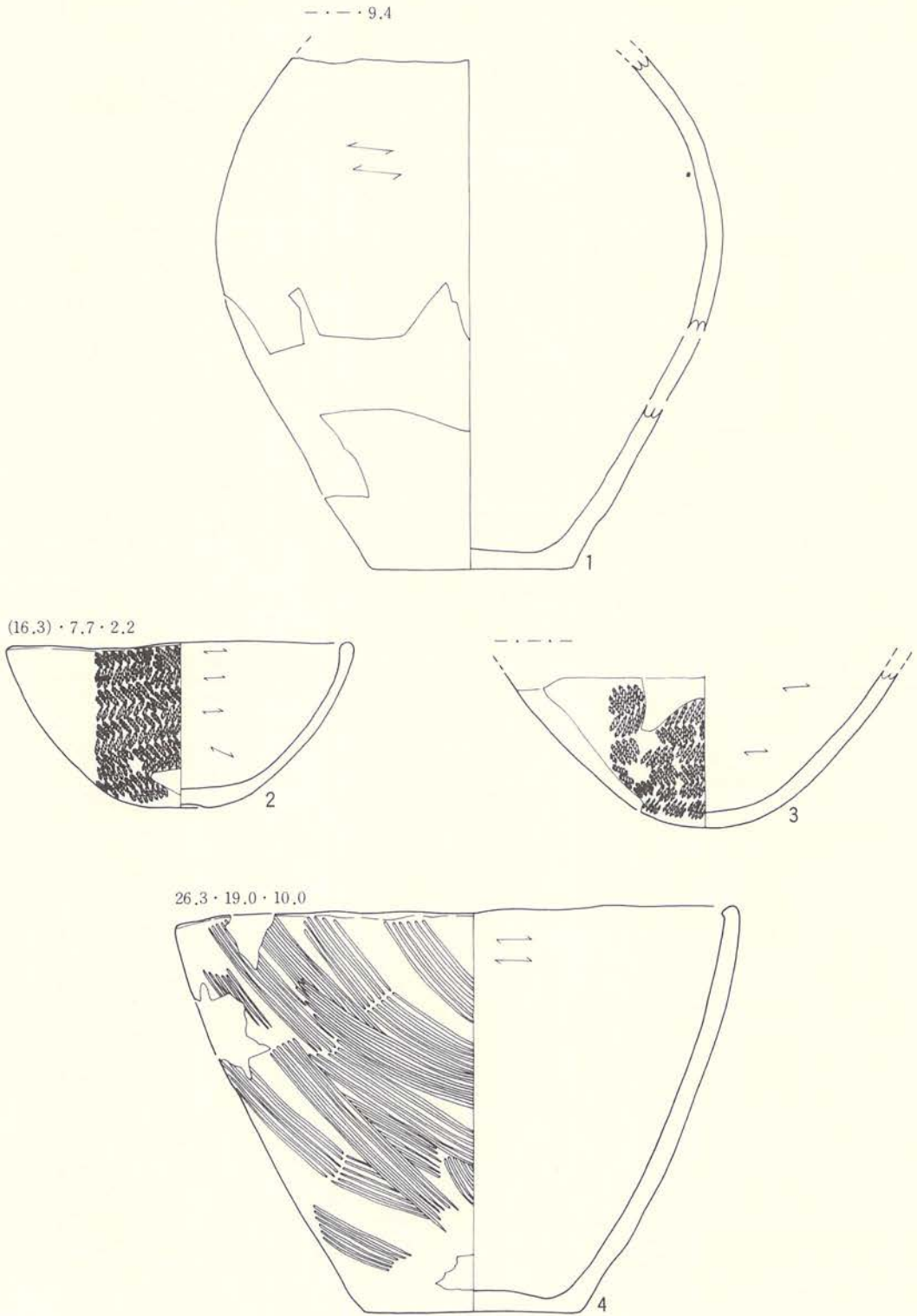
12.0 · 6.0 · 1.9



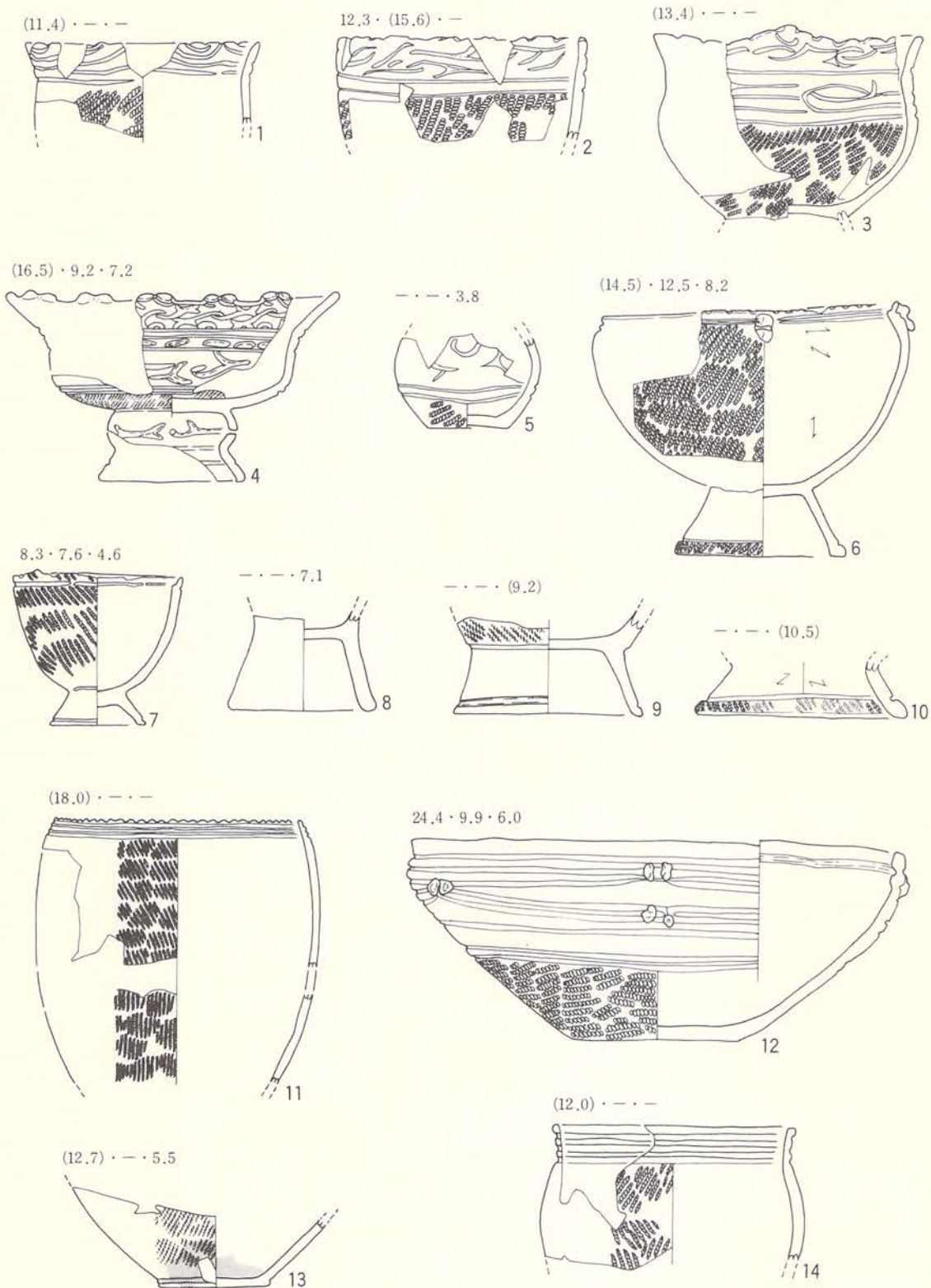
- - - · 1.3



第83図 遺構外出土遺物

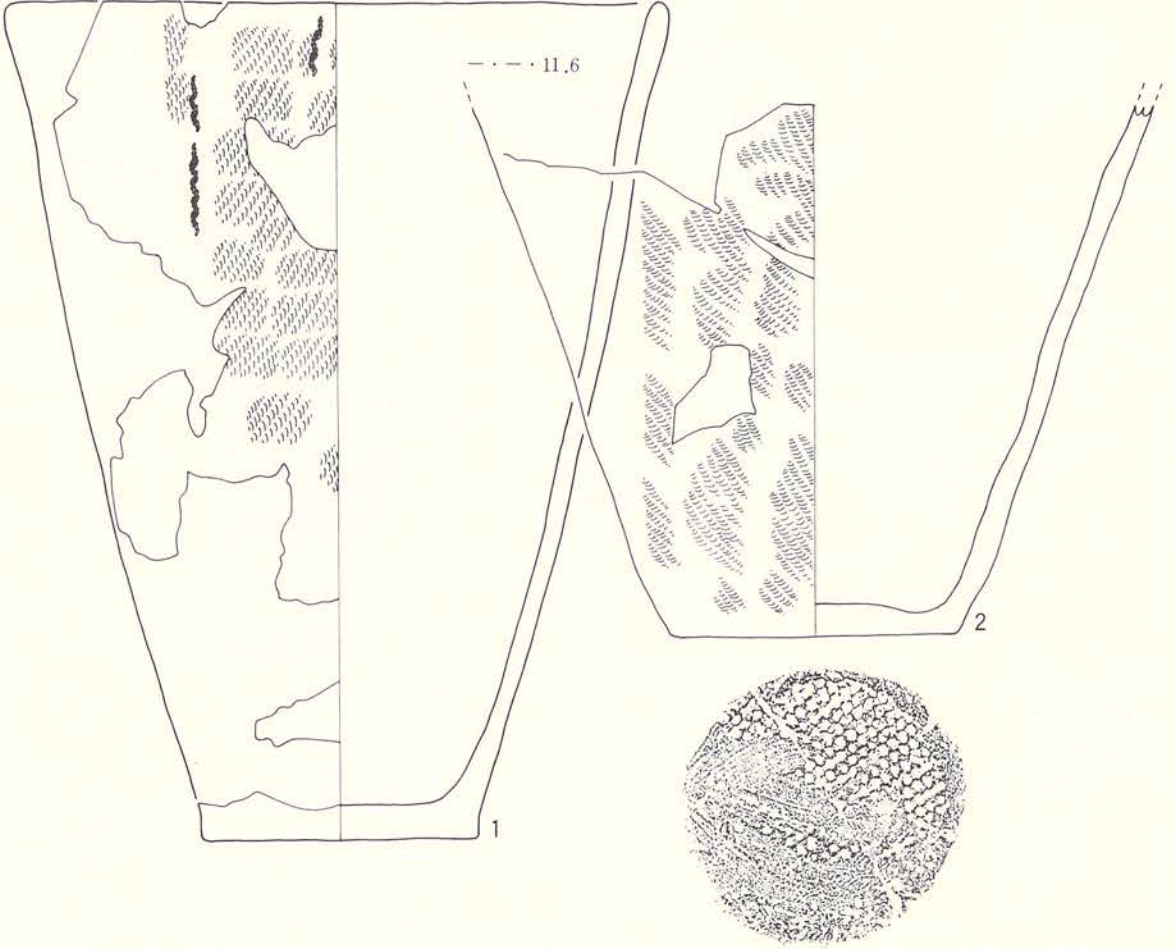


第84図 遺構外出土遺物

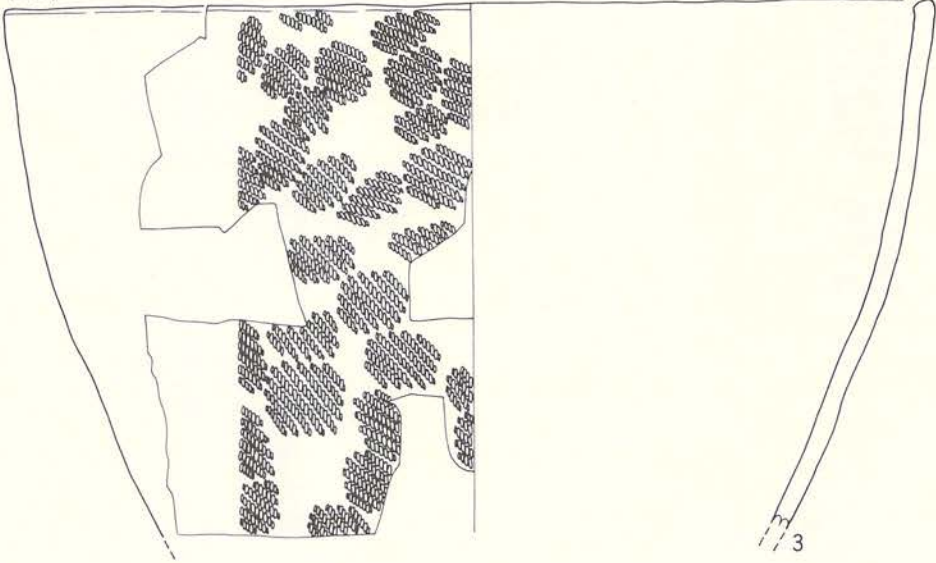


第85図 遺構外出土遺物

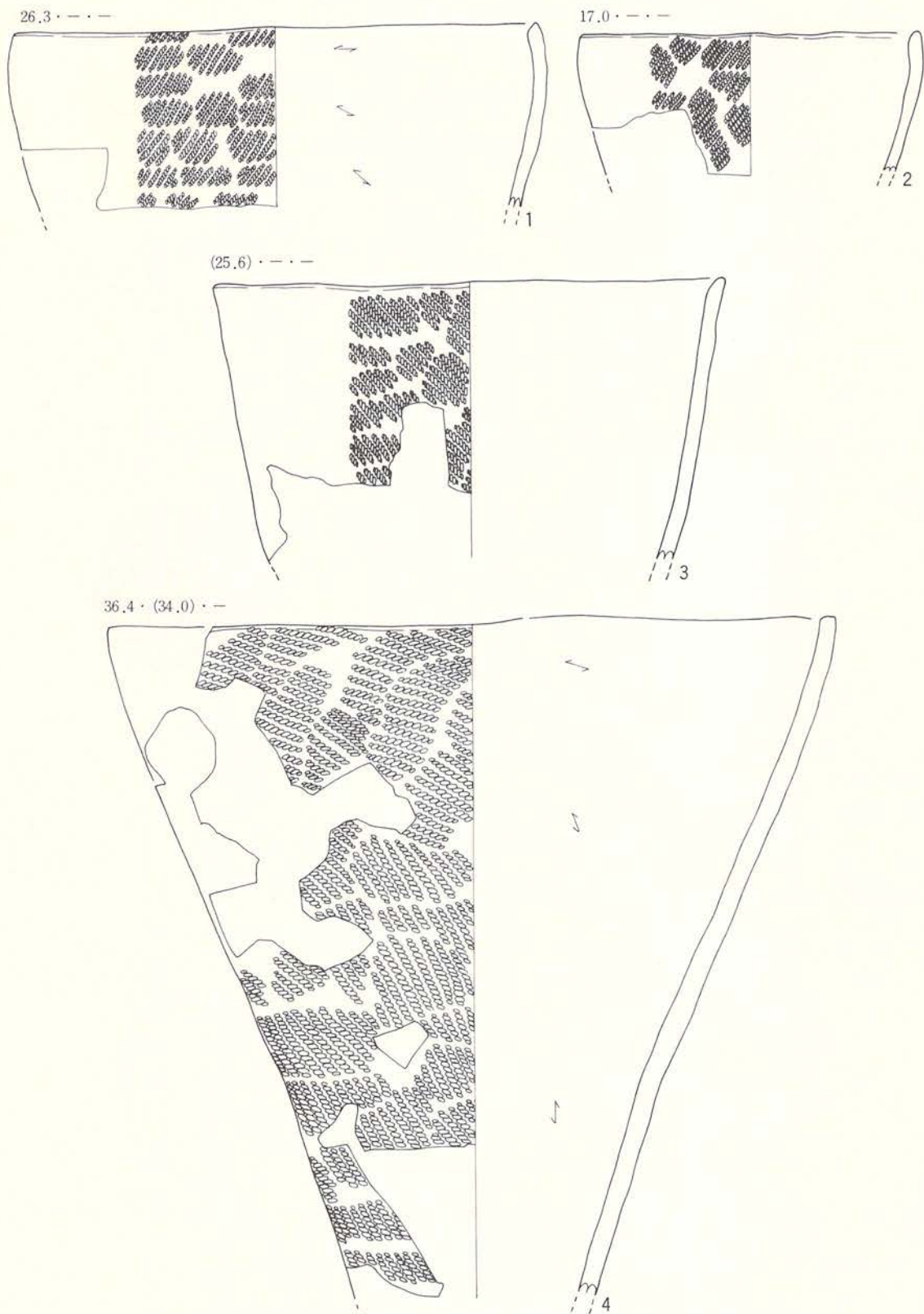
(26.9) · - · 11.2



(38.0) · - - -



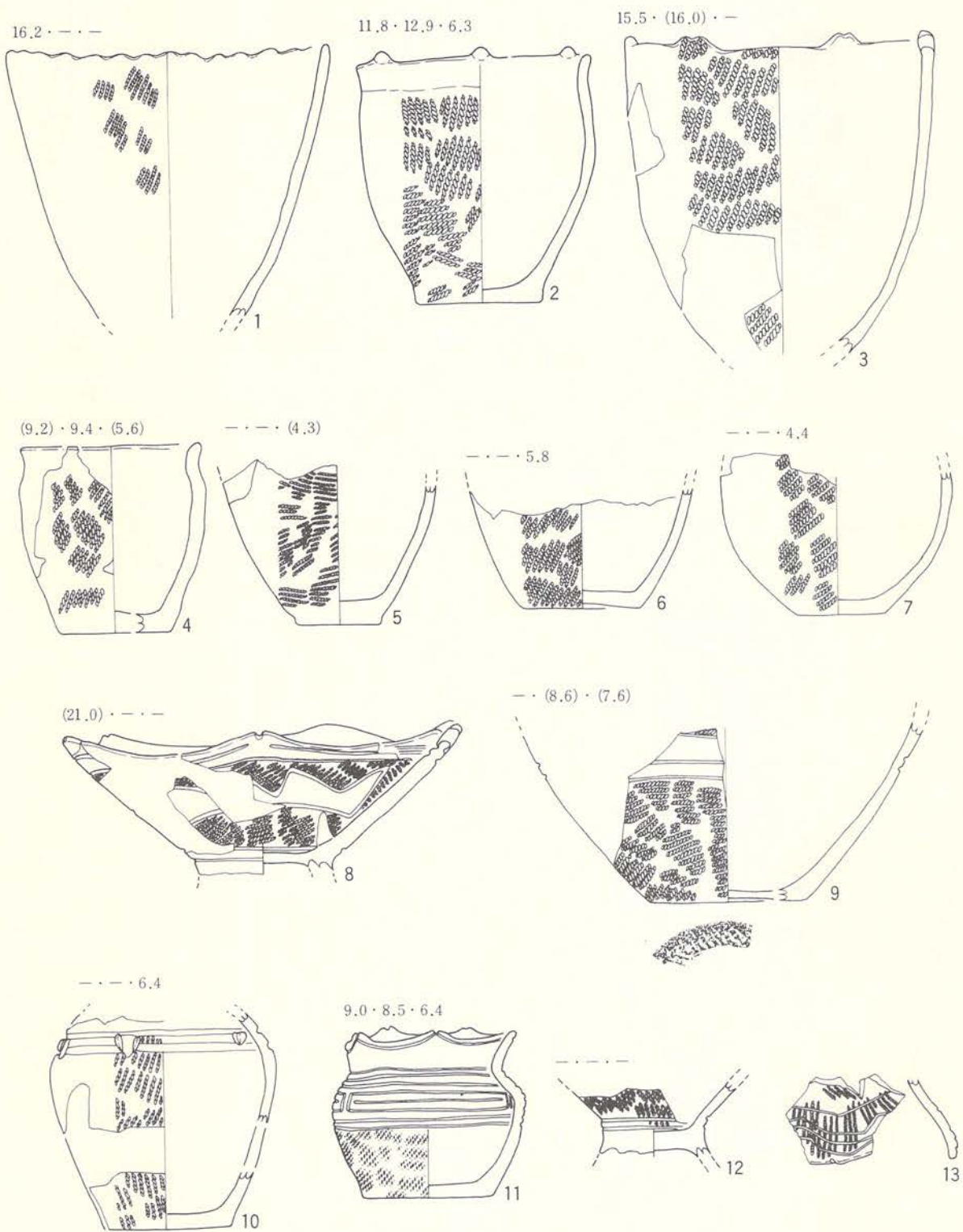
第86図 遺構外出土遺物



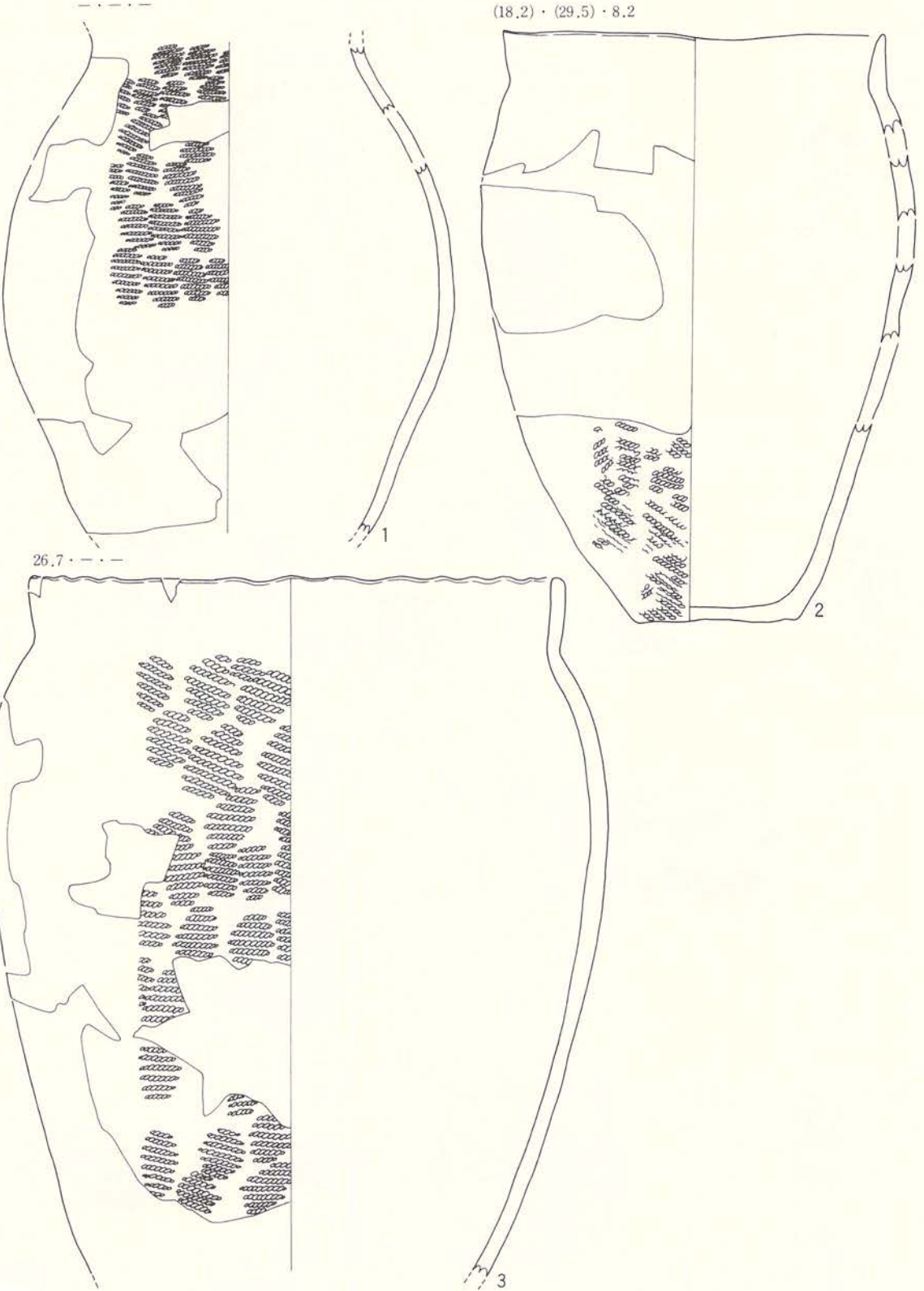
第87図 遺構外出土遺物



第88図 遺構外出土遺物

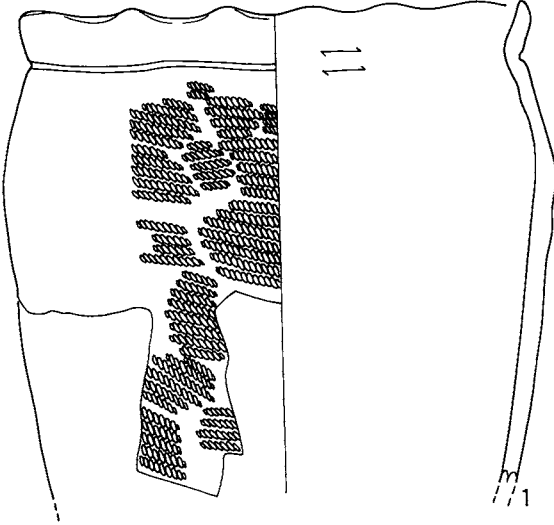


第89図 遺構外出土遺物

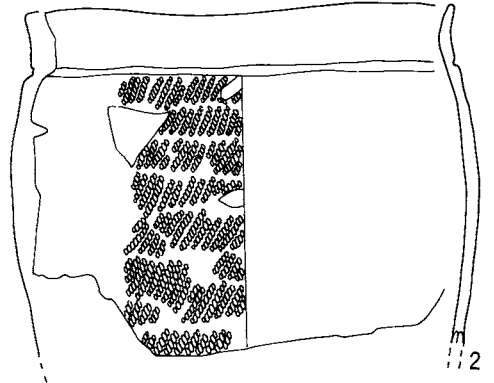


第90図 遺構外出土遺物

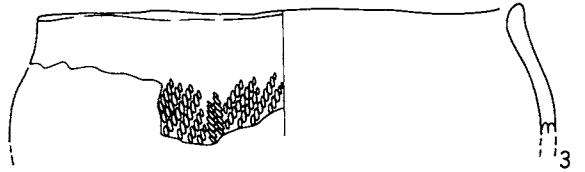
20.4 · - - -



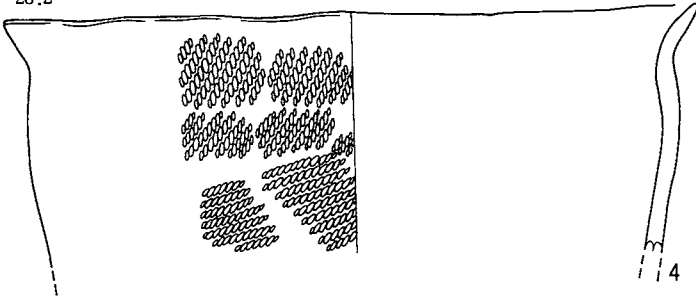
17.5 · (14.1) · -



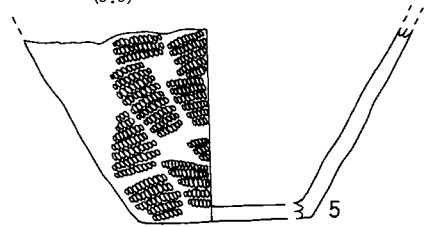
(19.8) · - - -



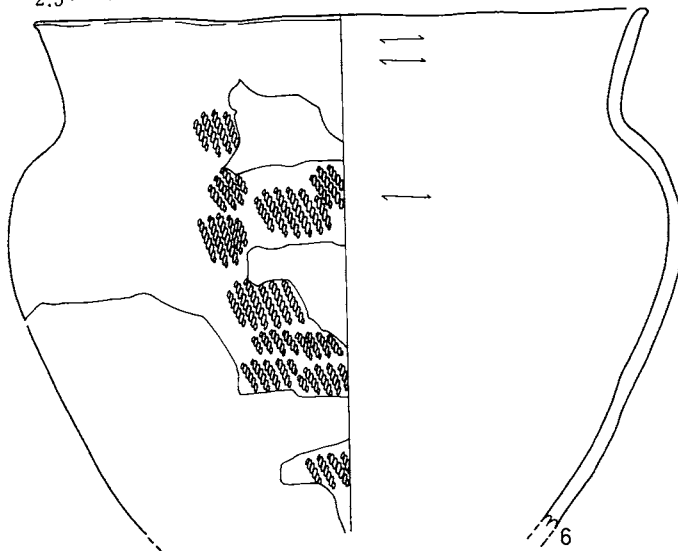
28.2 · - - -



- - - (6.0)

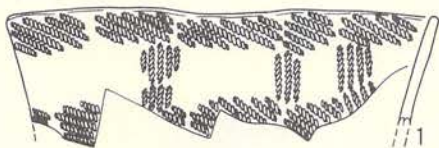


2.5 · - - -

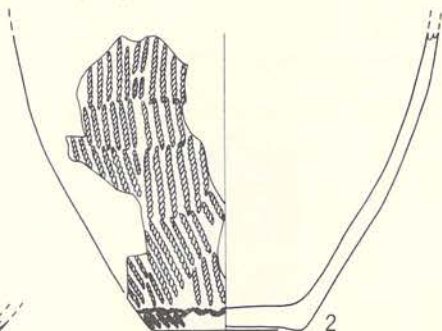


第91図 遺構外出土遺物

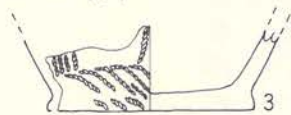
(17.6) · · · · ·



(11.9) · · · · ·



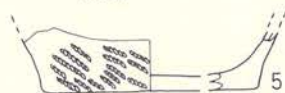
(8.2) · · · · ·



(6.8) · · · · ·



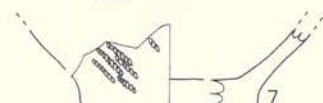
(8.8) · · · · ·



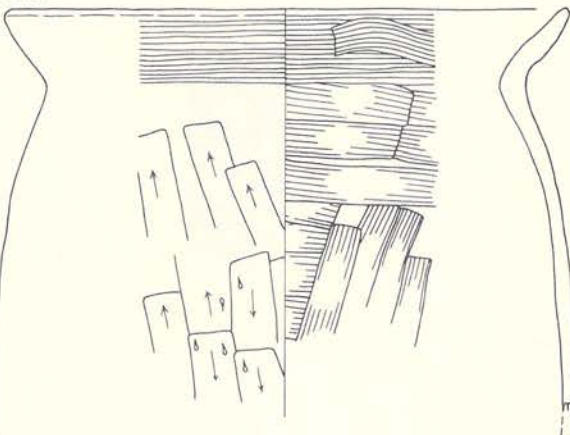
(7.2) · · · · ·



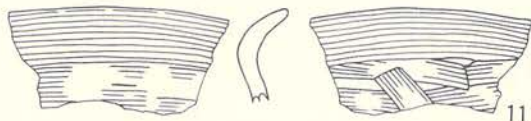
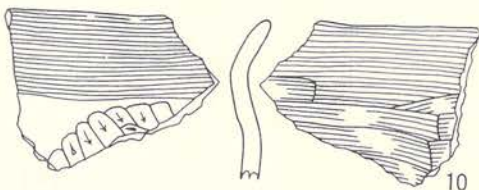
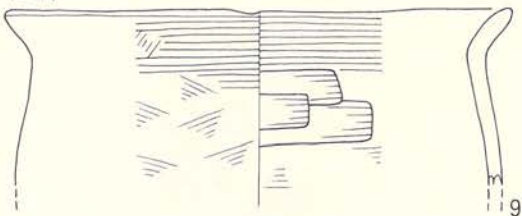
(7.2) · · · · ·



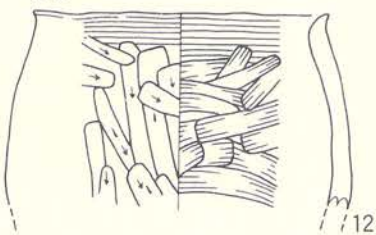
23.0 · · · · ·



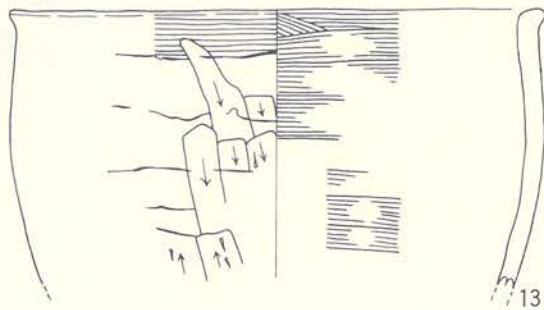
(20.6) · · · · ·



12.0 · · · · ·



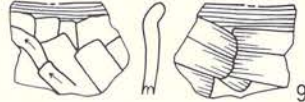
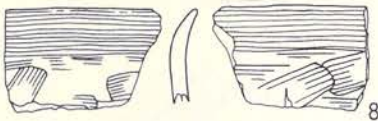
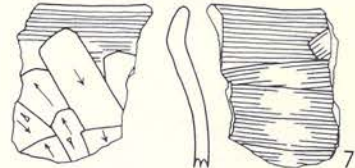
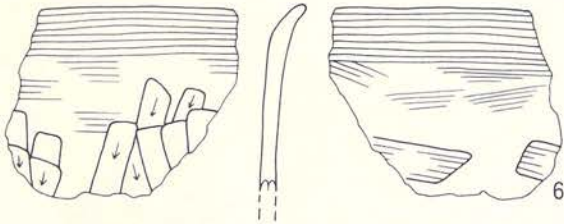
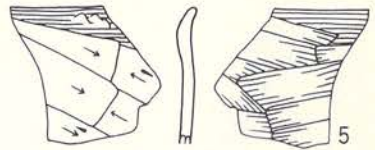
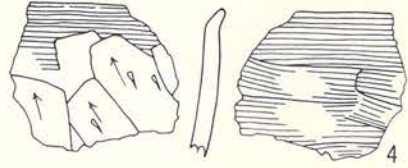
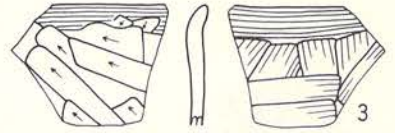
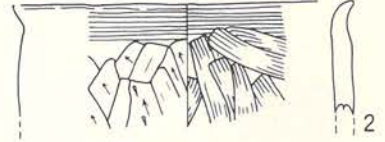
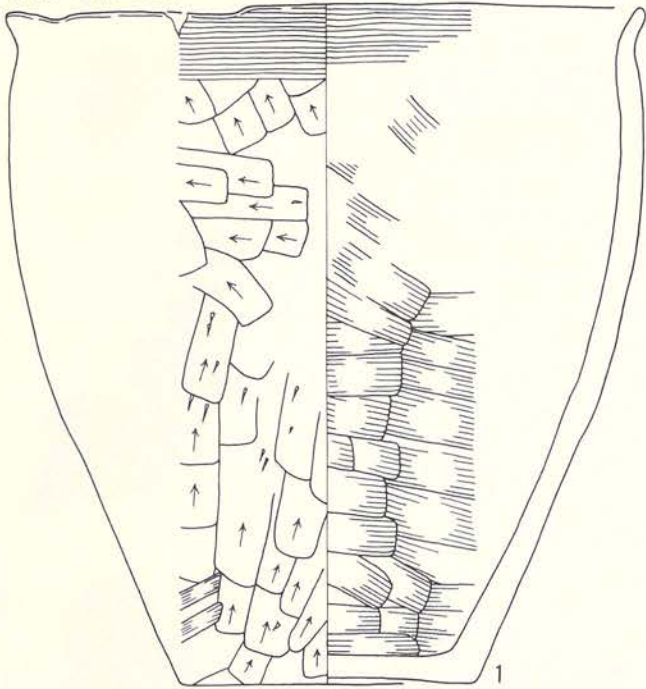
(21.8) · · · · ·



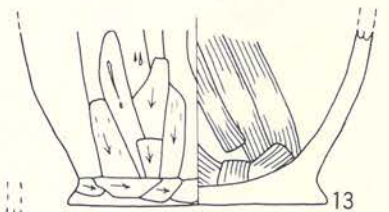
第92図 遺構外出土遺物

(26.0) · 22.3 · 12.0

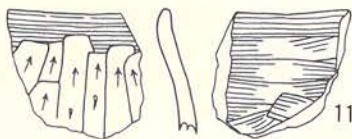
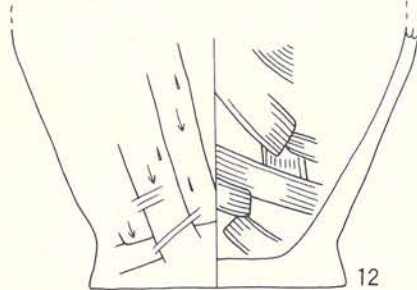
(14.0) · - - -



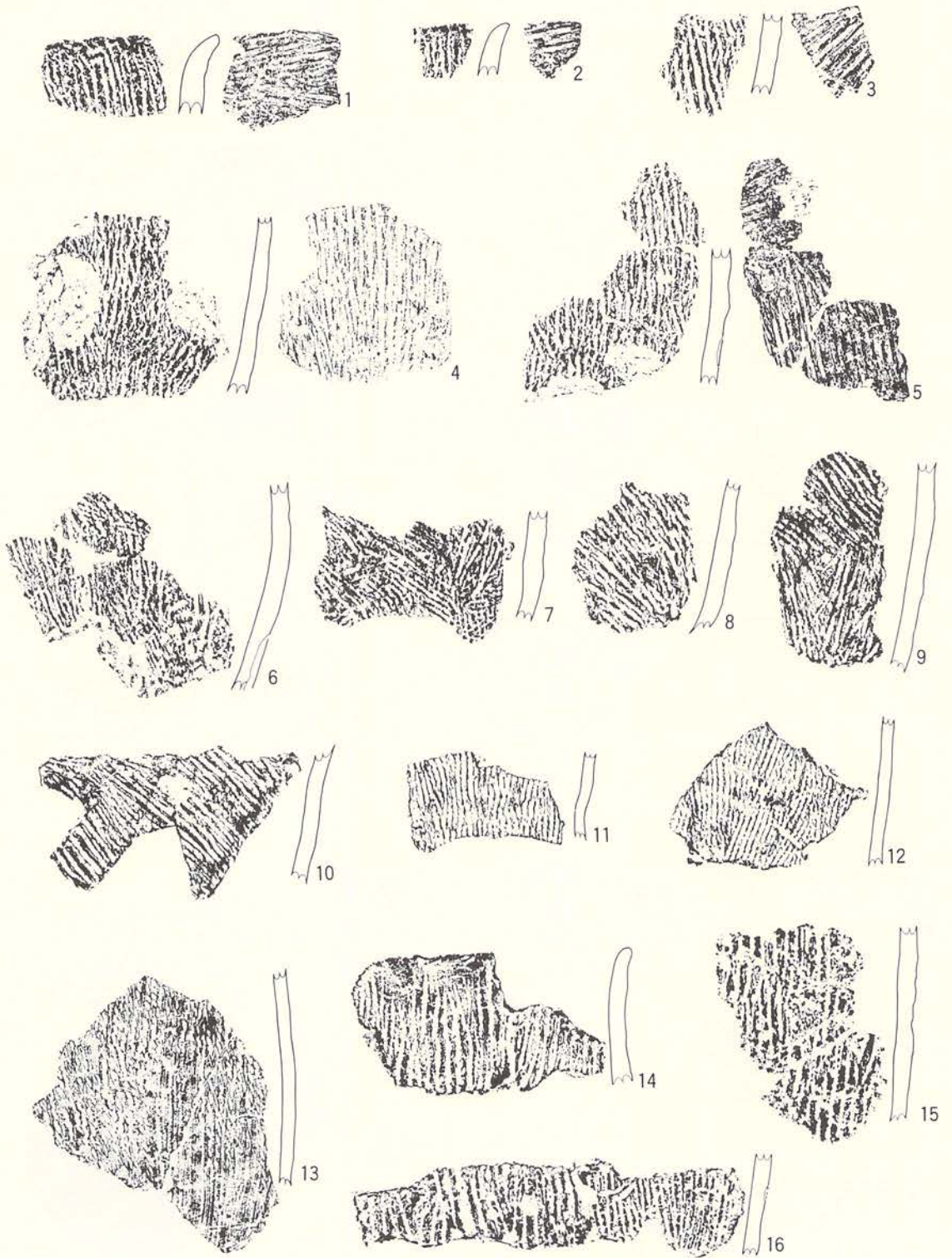
- - - · 10.6



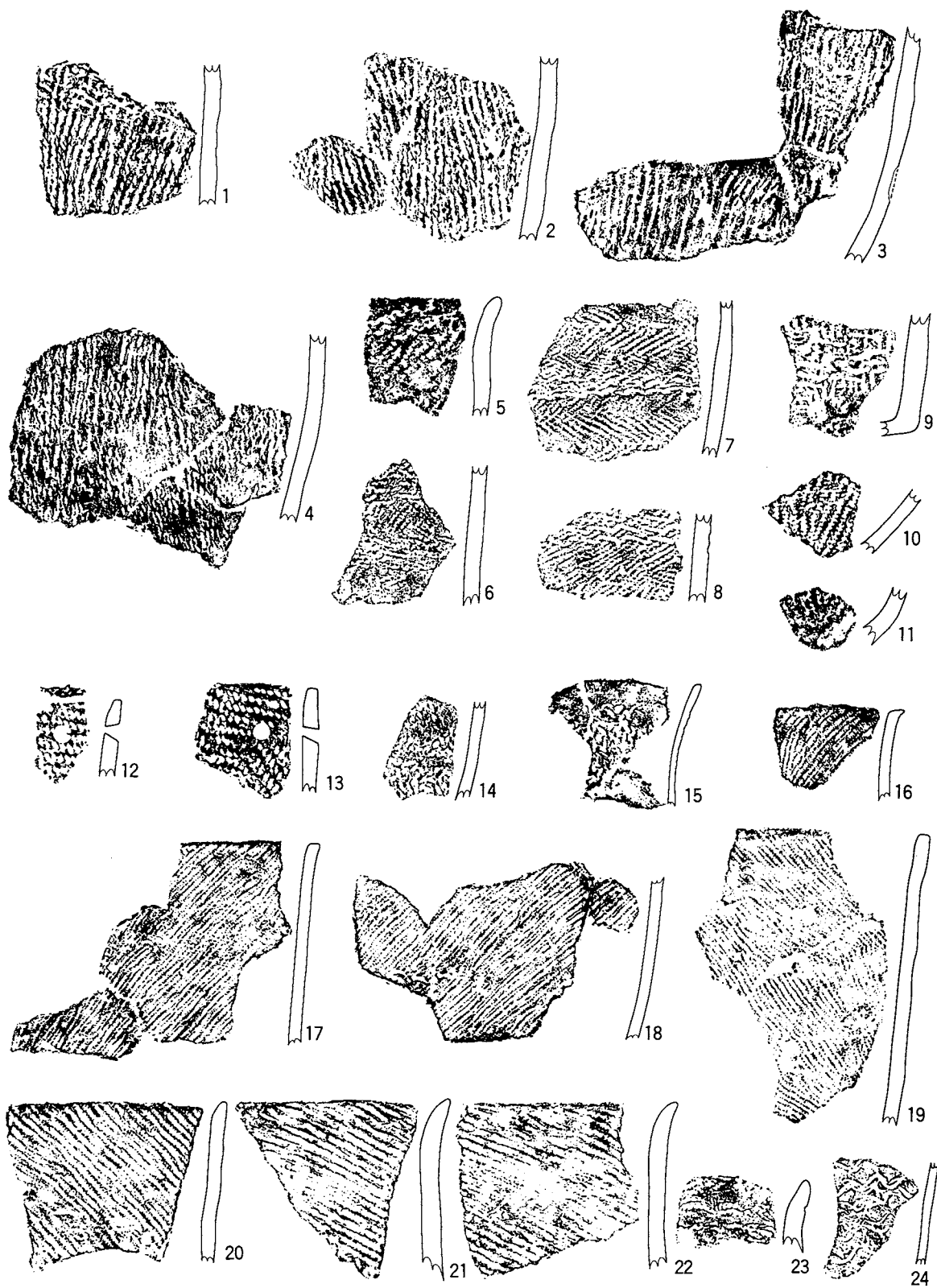
- - - (10.4)



第93図 遺構外出土遺物



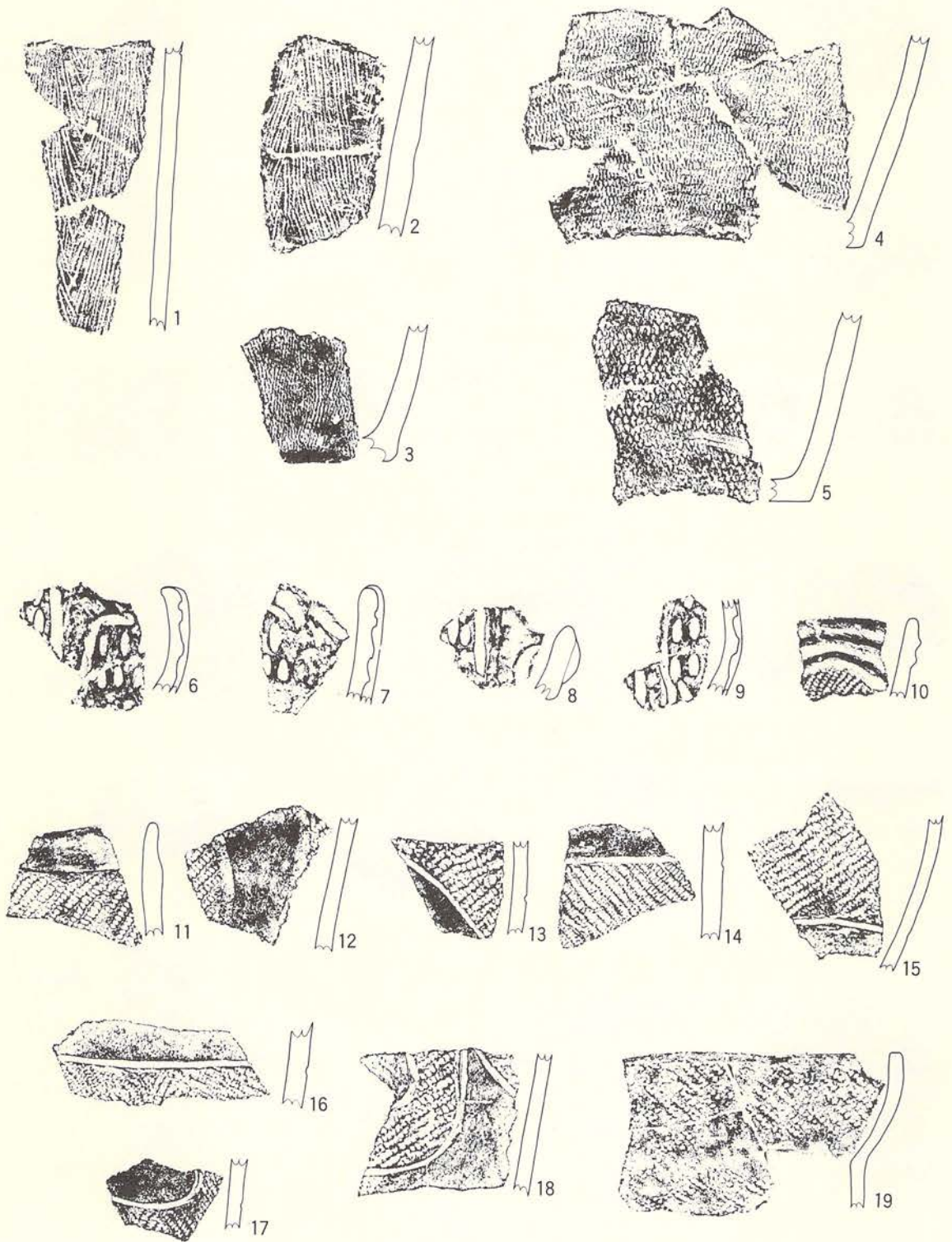
第94図 遺構外出土遺物



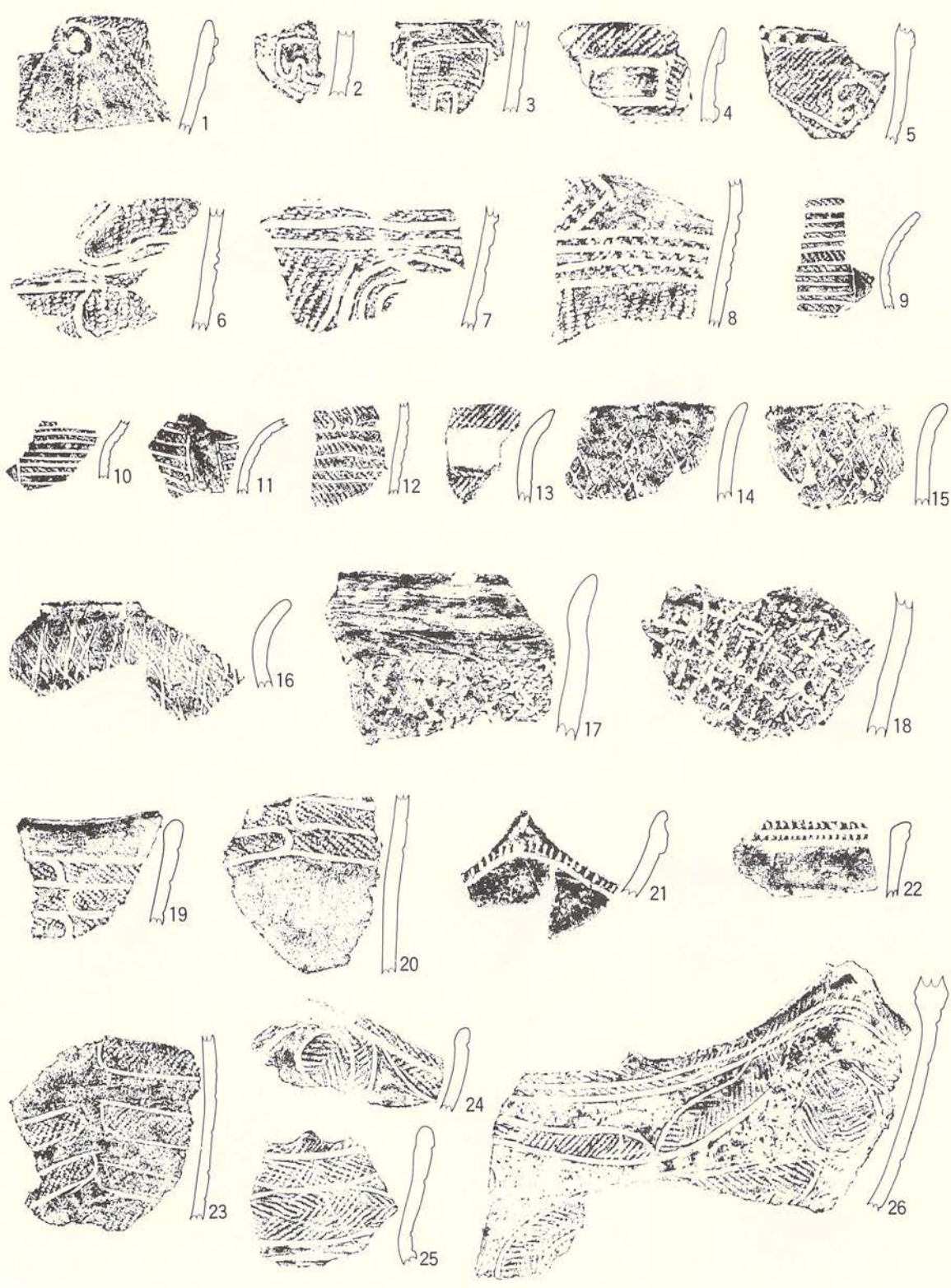
第95图 遺構外出土遺物



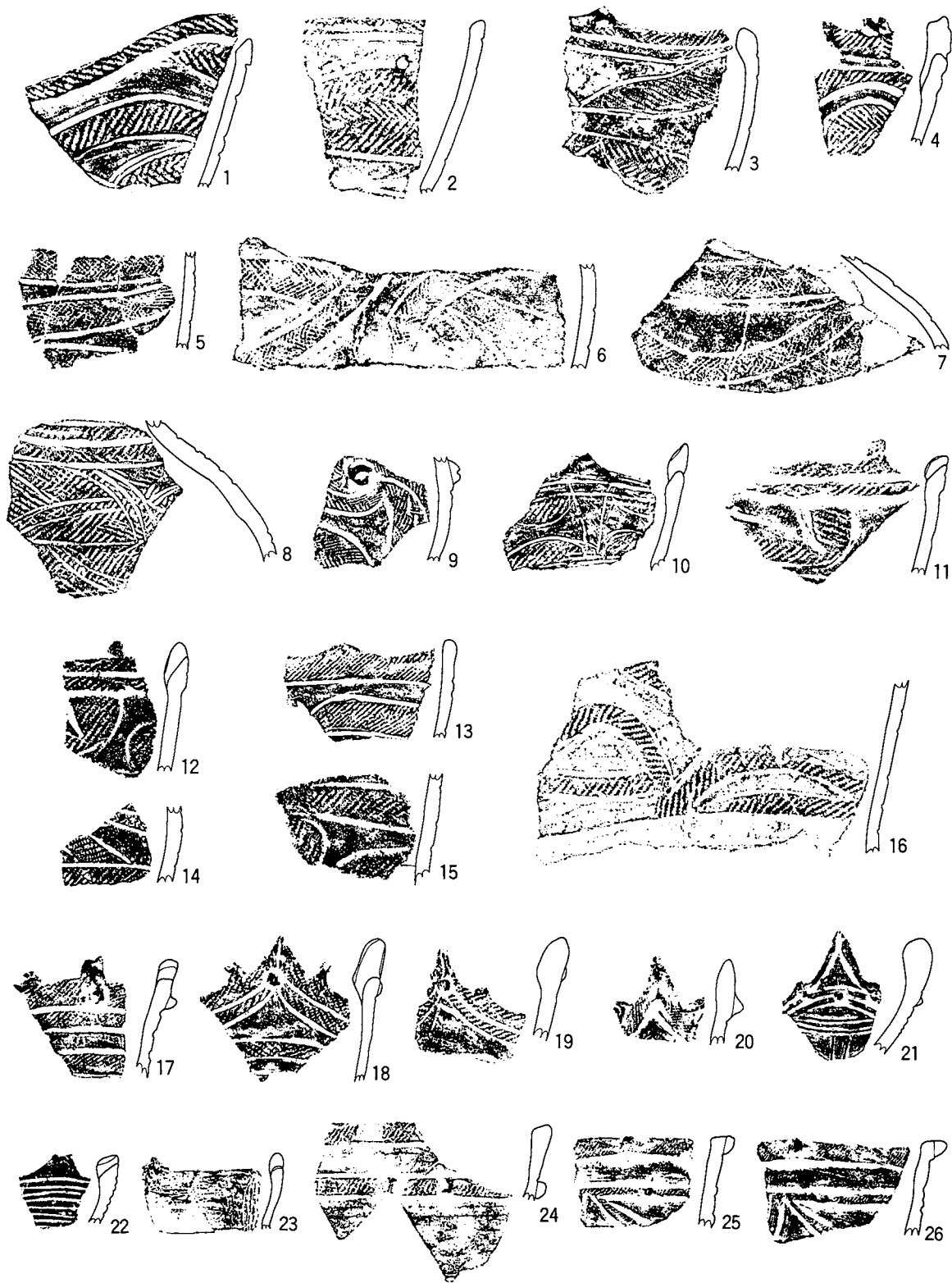
第96図 遺構外出土遺物



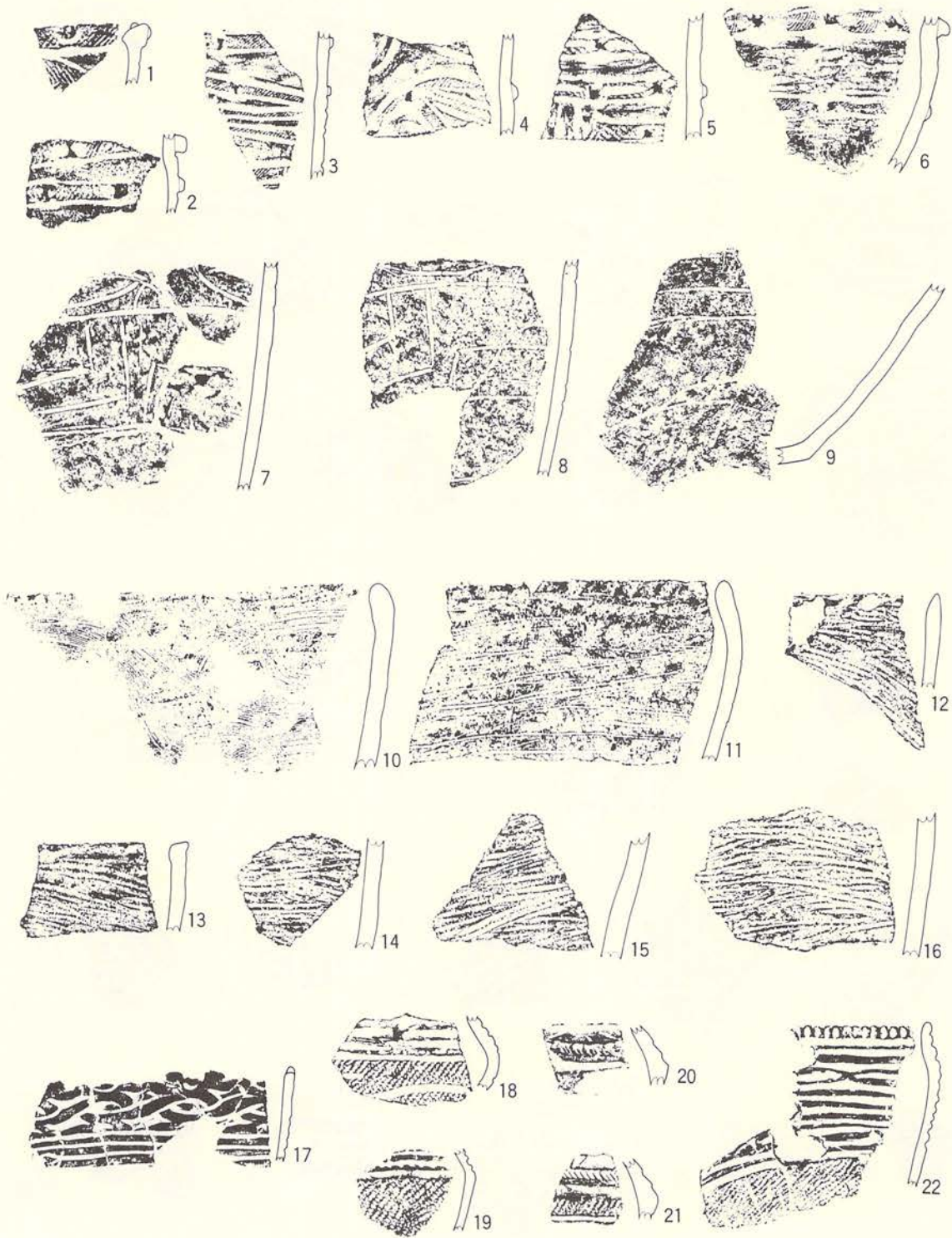
第97図 遺構外出土遺物



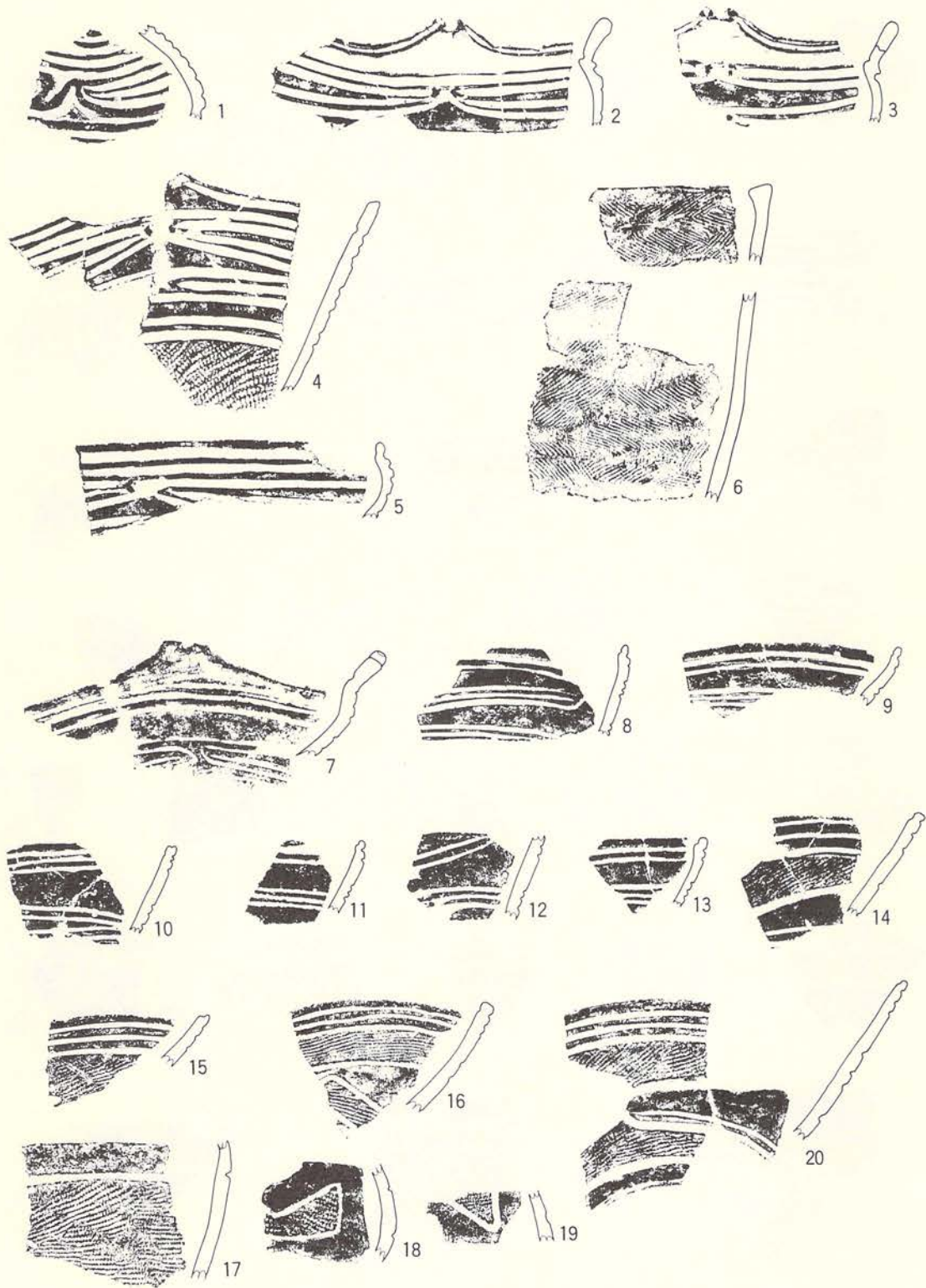
第98図 遺構外出土遺物



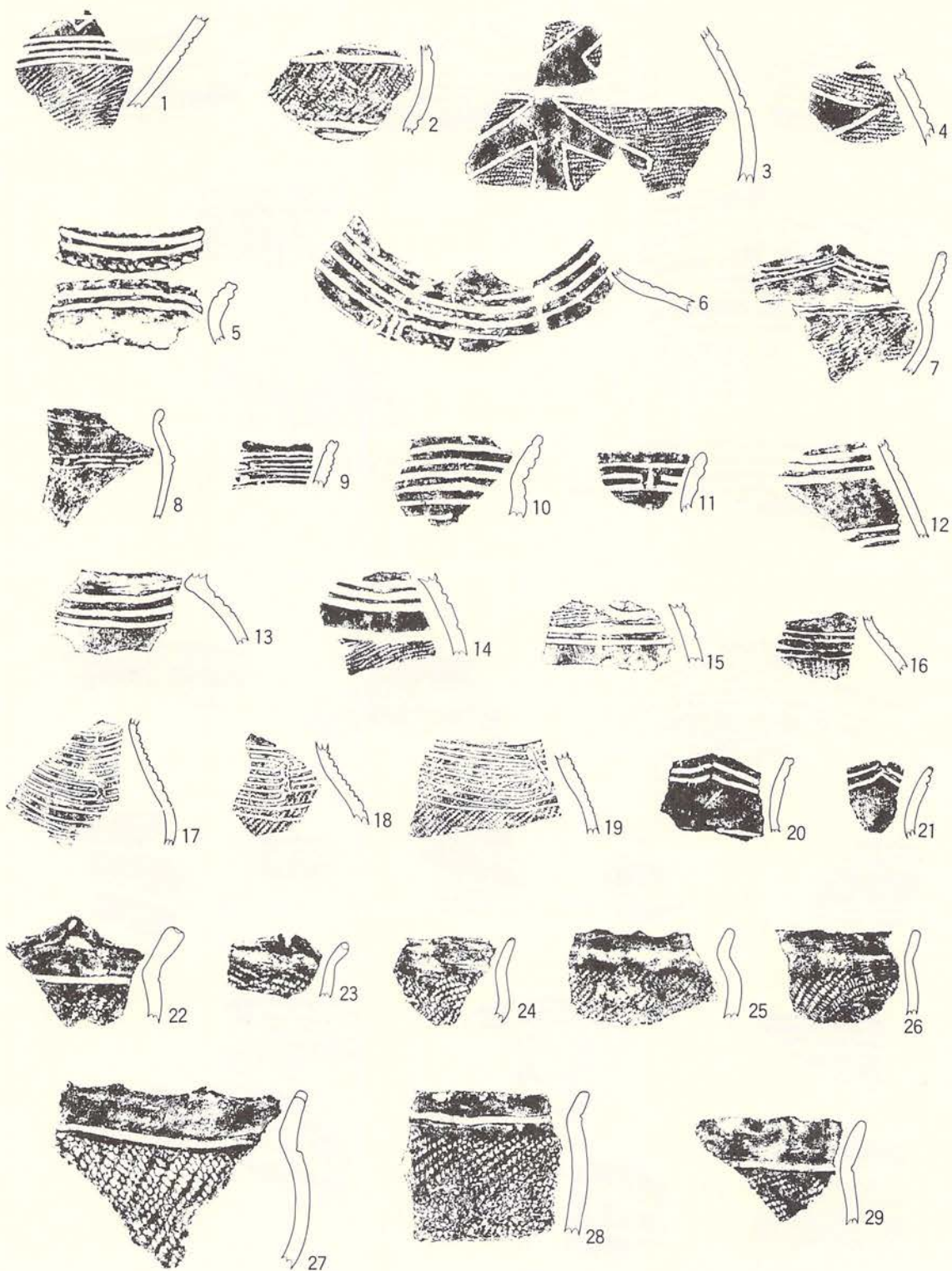
第99圖 遺構外出土遺物



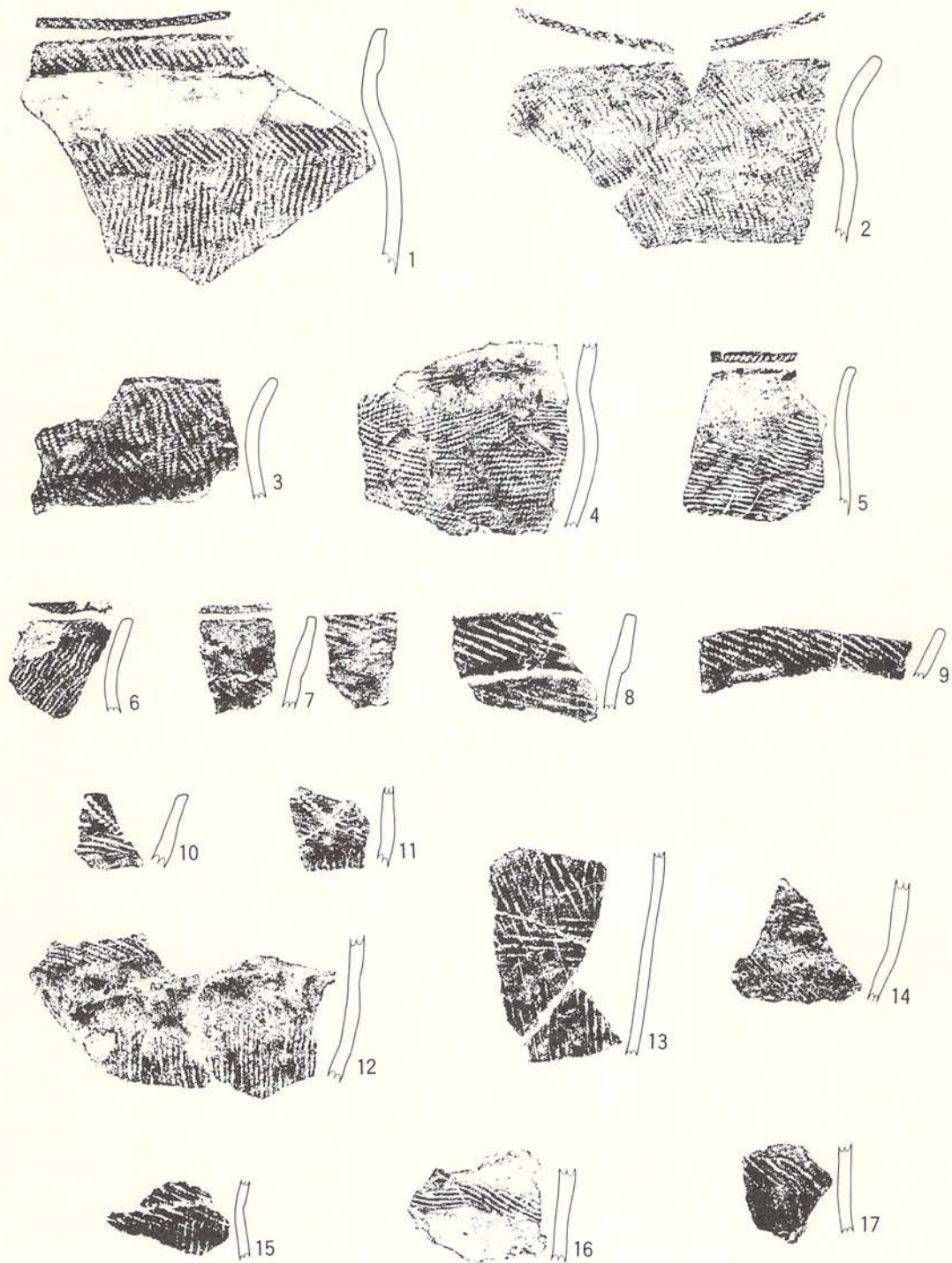
第100図 遺構外出土遺物



第101图 遺構外出土遺物



第102図 遺構外出土遺物



第103圖 遺構外出土遺物

(2) 土製品

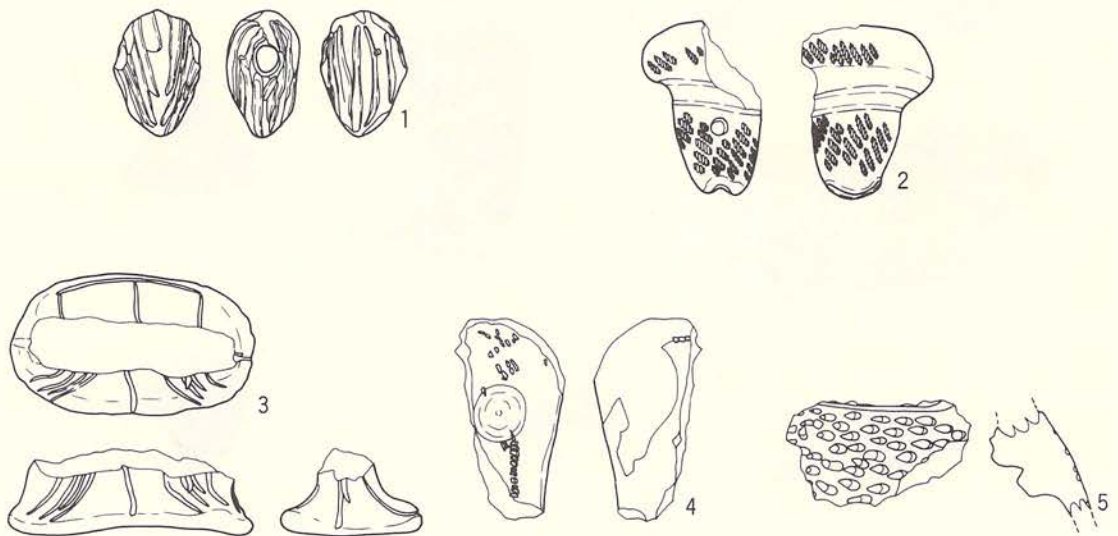
出土量は少なく、垂飾り2点、土偶の破片3点が出土した。

垂飾り (第104図1・2)

1は胎土に多量の植物繊維を含む。焼成は良好で硬く、色調は黒色を呈する。形状は水滴状で、中央やや上位に径8mmの横孔を有する。器面には雑ではあるが深い沈線が縦方向に施されている。2はきのこ形の垂れ飾りで、かさの部分に欠損する。柄の末端部には溝状の凹みを持ち、中央部に径4mmの貫通孔を有する。かさの頂面及び、頸部は研かれ無文となっており、かさの側縁と柄には0段多条RLの単節斜縄文が施されている。

土偶 (第104図3～5)

3は板状土偶の脚部と考えられる。平面形は楕円形を呈し、底面はやや上げ底となる。表面には、中央に1本、両側に4本の縦方向の細い沈線文が描かれている。裏面には中央、両側に1本ずつの縦沈線が引かれ、下端部で横方向の沈線がこれらを結んでいる。また側面にも同様な沈線が1本引かれている。焼成は良く硬質で、色調は赤褐色を呈する。4は胴上半の右半部を残存する板状土偶である。焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。表裏面とも粗く磨かれている。乳房は小さく突出させて表現され、連続する小さな刺突が文様を構成している。この刺突文は裏面にも施されているようである。腕部・頭部とも欠損するが、腋の下から頸部にかけて、径2mmの貫通孔をもつ。5は肩部または臀部と考えられる破片である。全体に丸味をもち、器面には尖頭の棒状工具による刺突文が多数施されている。内面には成作時の輪積痕が残され、内部は中空であったと考えられる。



第104図 遺構外出土遺物

(3) 石器・石製品

出土した石器類は総数で1,500点を越える。これらのうち、使用の痕跡が認められない剥片類及びチップ、破損の著しい礫石器を除く、294点を掲載した。

石鏃 (第105図)

26点が出土した。第105図1～4は、基部に挾入を有する無茎鏃である。1は縦長で、やや厚味をもつ。2・3は薄手で、2は片面に3は両面に第一次剝離面を残す。4はやや厚手である。5～10は凸基の有茎鏃である。5は大形のもので、先端部は細く尖がる。6・7は他に比べて薄手の作りである。9は先端部を欠損し、10は茎部を欠損する。いずれも基部は厚く、全体に棒状を呈する。11～14は平基の有茎族である。11・12は両面からの調整加工によって整形され、鋭い尖頭部をもつ。13・14は片面に第一次剝離面を残す。いずれも先端部を欠損する。15は小さな菱形の素材の周縁に、両面からの浅い加工を施している。このため、茎部と先端部は同様の形態をもつ。16・17は円基の有茎鏃である。いずれも茎部を欠損するものか、あまり明瞭ではない。18は茎部を欠損する。基部は厚く棒状を呈することから、前述の9・10に類すると考えられる。19・20は両端部が尖がる。いずれも薄手で、両面からの細かい調整加工によって整形されている。21～24・26は基部を欠損する。25は先端部を欠く、円基の無茎鏃である。

石錐 (第106図1～10)

10点が出土した。1～3は両面からの調整加工によって、細長い刃部を作り出している。4は剥片の尖がった部分に僅かに加工を施している。5は全体に両面からの調整加工を施し整形されており、尖頭器に類するものかもしれない。7～9は棒状を呈する錐である。いずれも両面からの丁寧な加工によって作られている。10は剥片の尖頭部に小さな剝離調整を加えている。

石匙 (第106図・第107図)

21点が出土した。第106図11～16、第107図1～11は縦形石匙である。第106図11～13は縦の剥片の両縁に直状の刃部が形成されている。14は凸状と直状の刃部を合わせもつ。15も凸状と直状の刃部をもち、先端には両面からの調整による尖頭部が作り出されている。16は縦長剥片の周囲全てに浅い加工が施されている。刃部は直状に類する。また、ツマミの挾入部にアスファルト状の物質が付着している。第107図1は片側に浅い剝離調整による直刃の刃部をもつ。2・3は縦長の形態を呈するものであるが、いずれも下部を欠損する。2は片側に両面から、3は両側に片面からの調整による直状の刃部が形成されている。4は片面調整による凸状の刃部をもつ。5・6は直状・凸状の刃部を合わせもつ。7は両側に凸状の刃部が形成されている。8は凸状・凹状の刃部を合わせもつ。9は全体に両面からの加工調整が施され、断面形が柳葉状を呈する。身部は逆三角形で下端は尖がる。10は粗い剝離調整によって整形されている。形状は不整な三角形を呈す。明瞭な刃部は認められないものの、底辺部に粗い調整によって挾入部

が作り出され、これが刃部となるものと考えられる。11は小型のもので、下部を欠損する。

12～15は横形石匙である。12は身部の大半を欠損するが、片面調整による直状の刃部をもつものと考えられる。13は湾曲する縁辺部に大きな鋸歯状の刃部をもつ。14は直状の刃部が形成されている。15は粗い剥離によってノッチ状の刃部を作り出している。

削器（第108図・109図）

削器として分類した石器は19点である。第108図1～4は直状の刃部を有するものである。1・4は細い縦長剥片の両側に刃部が形成されている。2・3は剥片の1辺に刃部が形成されている。5は凸状と直状の刃部を合せもつ。また、両面からの調整加工によって小さな突出部が形成されている。6は剥片の両側に直状と凹状の刃部が形成されている。7は一側辺に「く」字状の刃部をもつ。8・9は調整加工が剥片の周囲全体に及ぶ。刃部形態は8が直状と凸状・9は直状と凹状である。

10・11は縦長剥片の一側辺に、片面調整によって緩く凹状の刃部が形成されている。10の刃部加工は丁寧であるが、11は粗く浅いものである。

第109図1～8は、凸状の刃部をもつ削器である。1～4は剥片の湾曲する一側辺に片面調整による刃部が形成されている。1は丁寧な加工が連続して施されるが、他はやや雑である。5・6は剥片の周囲全体に調整加工が施されている。いずれも一部に尖頭部を有する。6は凹状の刃部を合せもつ。7・8は小さな剥片の一部に刃部加工が施されている。

搔器（第110図1～9）

剥片の先端部に鈍角で厚い刃部加工をもつ9点を一括した。第110図1～3は基部を欠損している。1の刃部は、一部に両面からの調整が施されている。4は剥片の側片部に刃部をもつが、刃部の形態から同類とした。5・6は刃部の調整が側辺部にも施され、直刃の削器との複合石器となっている。7は剥片の周囲全体に調整が施されている。裏面は湾曲が著しい。8の刃部はややオーバーハングする。調整は側辺部に及び、ツマミ状の基部を作り出している。9は基部を欠損する細長の搔器である。

抉入石器（第110図10～17、第111図1・2）

剥片の形状には共通性はない。調整加工によって、えぐり状の刃部を有するものを一括した。10点があげられる。第110図10は直状の刃部を合せもつ。11は両面からの調整によって2カ所の刃部が作り出されている。12は剥片の周囲全体に調整を施し、3カ所に刃部が形成されている。13は両面調整による刃部をもち、同様の調整による尖頭部を合せもつ。14は下端を欠損する。15・16は細い剥離調整によって刃部を形成している。17は数回の大きな加撃によって抉入部を作り出している。第111図1は突出部分の付け根に、僅かに細かい調整を施し刃部としている。2も僅かな調整によって刃部を作り出している。

石槍（第111図3・4）

大型の尖頭器を同類とした。2点出土しているが、いずれも欠損品である。第111図3は尖頭部を欠損する。形状は柳葉状を呈していたものと考えられる。両面からの丁寧な剥離調整が、器面全体に施されている。4も尖頭部を欠損する。3に比べて、やや雑な調整が施されている。

筥状石器（第111図5～10）

形状から分類した。第111図5は上端部を除く周辺に調整をもつ。下端部の加工は角度が緩く、搔器の刃部とは異なる。6は両面からの調整が全体に施されている。表面の調整は長く、器面全体に及ぶが、裏面のものは浅く小さな剥離の連続である。7は下端部に両面から粗い調整が施されている。8は側辺部に割合大きな剥離調整が施され整形されている。下端部は片面から数回の整調が行なわれ、他の片面は第一次剥離面を残す。所謂トランシェ様石器に類似する。9は器面全体に両面からの調整加工が施されている調整は丁寧なものではなく、明瞭に刃部と考えられる部分はない。10も両面からの調整によって整形されているが、下端部を欠く。

不定形石器（第111図11、第112図）

細部加工によって形成されるが、明確に器種分類されないものを一括した。第112図11は、片面に連続する細長い剥離調整が施され、裏面は粗く大きな剥離がみられる。尖頭器の欠損品であろうか。第112図1は両面から雑な剥離調整が施されている。尖頭器かもしれない。2～6は薄手の剥片を素材とし、周囲に両面からの調整が施されている。なお、4・5は石鏃の破損品の可能性もある。8は一側辺に両面調整された刃部をもつ。9は小さな剥離が尖頭部に連続している。10は一側辺に、11は3辺に調整加工を有する。

12～15は、刃部と考えられる部分の両側に折断面をもつ。しかし、これが調整の一部として施されたものか、破損によるものかは不明である。刃部の調整は片面からのもので、削器のそれと類似する。12・13・15は折断面が互いに交差し、形状は扇形を呈する。

16は大きな縦形剥片に両面からの調整が施され、手柄状の部分を作り出している石器である。表裏両面とも第一次剥離面を大きく残す。形状は飯筥に似る。

細部加工剥片（第113図1～12）

不定形な剥片の一部に細部調整が施されたものと一括した。第113図1～4は尖頭部をもつ剥片で、この尖頭部に続く側縁に片面からの加工が施されている。5も尖頭部をもち、この両側の縁辺に調整が加えられている。6～11は複数の箇所調整が施されている。12は割合大きな調整をもち、加工部分は搔器の刃部に類似する。

使用痕を有する剥片（第113図13～15、第114図1～9）

使用に伴って生じたと考えられる微細な剥離痕が観察される剥片を一括した。第113図13～15は、剥片の尖頭部及びこれに続く側縁部に使用痕を有する。第114図1～9は、剥片の鋭利な側

縁部に使用痕がみられる。

残核（第114図10）

1点が出土した。上面は周囲からの剝離によって、扁平なものとなっている。周囲には縦方向への剝離痕を多く残すが、横方向への剝離痕もいくつかみられる。また、2か所に自然面を残す。下端は、磨製石斧の刃部の如く尖がる。

磨製石斧（第115図、第116図1～4）

10点が出土したが、完形品は3点だけである。第115図1・2は刃部を欠損する。1は基端から刃部に向けて大きく開く。2は、この開きが小さい。いずれも断面形は隅丸の方形で、1は明瞭な稜線を残す。3・4は断面形が紡錘状で、稜はもたない。4はの研磨は全体に粗雑で、一部に自然面も残す。3は基端を、4は基端と刃部の一部を欠損する。刃部の形態はいずれも緩い円刃である。5は基端を欠損する。刃部形態は円刃で、側縁には稜がみられる。6は基端のみが残存する。側縁には明瞭な稜を残す。第116図1は、円刃を呈する刃部である。2・3は縦長の石斧で、基部から刃部にかけての開きは小さい。2は直刃に近い形態を呈し、裏面には剝離痕を残す。3は全体に薄手である。側縁には稜がみられ、緩い円刃を呈する刃部には、刃こぼれ状の剝落が観察される。4は表面に敲打痕、裏面に擦痕を伴う緩い窪みがあり、磨石からの転用品と考えられる。刃部を除き全体に研磨は雑で、基端付近の側縁部には粗い剝離痕を残す。刃部形態は緩い円刃である。

半円状扁平打製石器（第116図5・6、第117図～第124図1～4）

本類としたものは58点で、石器類の中で最も多く出土した。大部分のものは板状に節理する素材を用い、周縁部に両面からの大きな剝離調整を加えて、半月状に整形している。第116図～第118図、第120・121図は、上記のような加工がなされ、直線的な側縁部に磨滅痕を有するものである。第119図2～7は、元来半月形を呈する素材を利用し、一部には調整を加えるもので、調整が施される箇所は直線的な側縁部が多い。これらの中には、表裏面に擦痕が観察されるものもあり、磨石などからの転用品も含まれる。第121図5～第124図4は、半月状に整形されているが、側縁部に磨滅痕をもたないものである。大半は直線的な側縁部に鋭利な稜をもつ。第124図2～4などは、剝離も粗雑で、他に比べて稜は明瞭なものではない。未使用品・未成品の類であろうか。

磨石・敲高・凹み石（第124図5、第125図～第128図10）

使用痕によって区別されるが、素材となる石の形状も類似し、使用痕の重複も多いことから一括して記載する。「磨る、敲き潰す」といった機能を有する石器群である。

第124図5、第125図は、平面形が円形を呈する磨石である。ほとんどのものが表裏2面に使用痕をもつが、第124図5や、第125図3・4などは、側縁部を含めた3～6面に使用痕を有す

る。第126図1・2は平面形が楕円形を呈する。いずれも表裏両面が使用面となっている。3～7は棒状を呈する磨石である。5・6は断面形が四角形で、この全面に使用痕をもつ。8・9、第126図1～5は、縦長の素材の側縁部に磨滅痕をもつ。前述の半円状扁平打製石器の類とした素材の一部だけに調整を加えたものとの関連が考えられる。第125図10は、断面形が三角形の素材の頂部に使用痕をもつ。

第127図6～11は、敲打によって生じたと考えられる「つぶれ」が観察される。8を除き、器面には擦痕を合せもつ。9はこれらの使用痕の他に、凹みもみられる。

第128図1～10は、器面に円錐形に近い凹みが形成されている所謂凹石である。2・5・6・7・9は、表裏両面に凹みをもち、1・3・8は、器面に磨滅痕を合せもつ。

粗製石皿（第128図11～13、第129図～第131図1～7）

扁平な自然礫をそのまま利用したものである。小型のものや、第129図1、第131図1などは砥石としての機能をもつものかもしれない。

石鍬（第131図7）

板状に節理する素材を用いている。2次加工は把手部に僅かに施されるだけである。刃部には使用によるものと考えられる磨滅痕を有する。形状及び使用痕により同類とした。

石製品（第132図）

第132図1は有孔の小玉である。器面は雑く磨かれ、数面の研磨面を残す。中央部に両面からによる小孔が穿たれている。

2は浮石製の浮子である。平面形は不整な三角形で、頂部に1個の貫通孔を有する。器面には整形の際に生じたと考えられる擦痕が観察される。

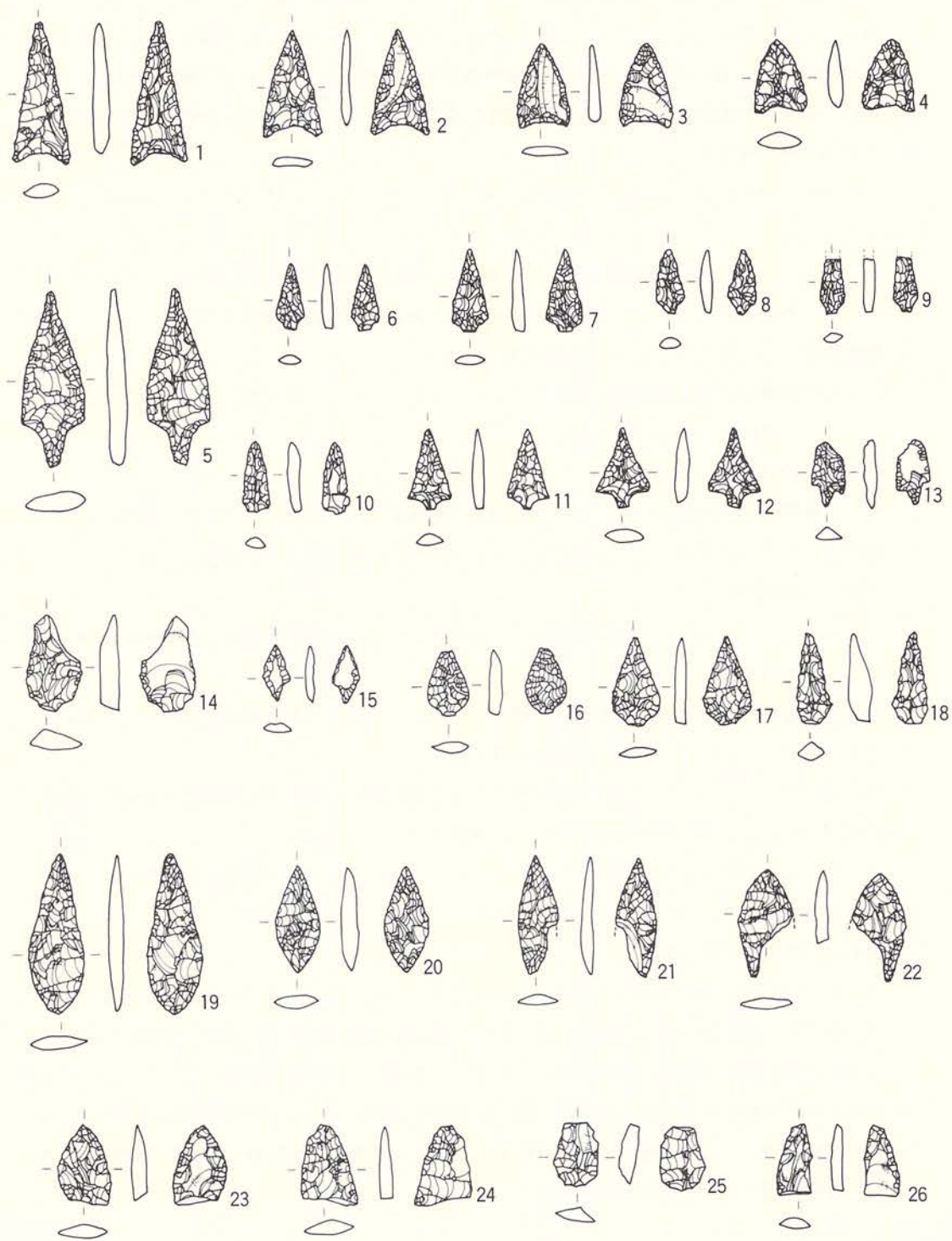
3は石刃である。「にぎり」の部分に欠損するものと考えられる。形状は青龍刀に似る。製形は粗雑で、研磨されている部分は少なく、剝離痕を大きく残す。

4～7は柱状節理をそのまま利用した石棒と考えられる。7は角が磨耗した箇所がみられ、この部分が「にぎり」となるものと考えられる。

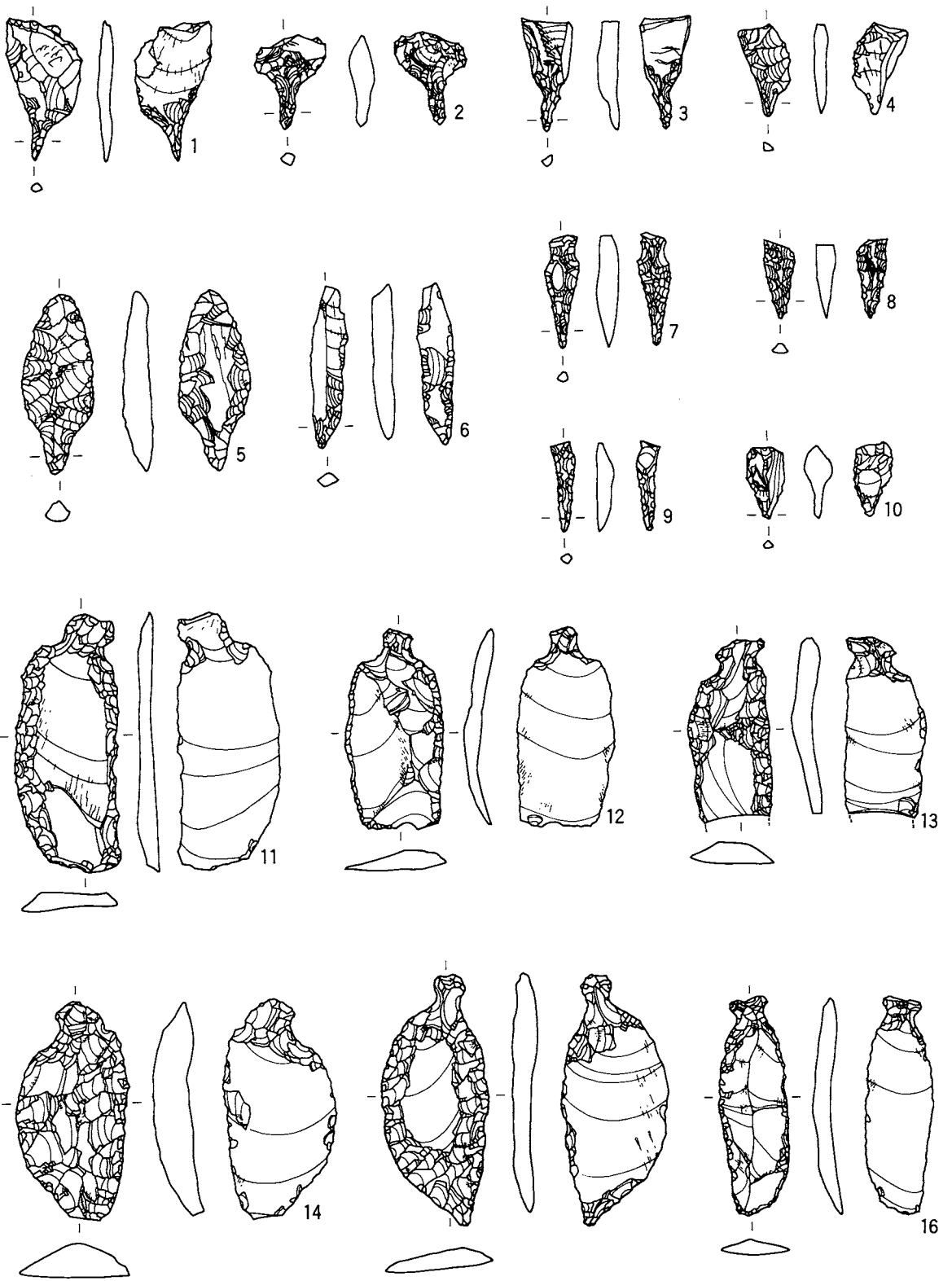
弥生時代の石器（第133図）

弥生時代の石器としての特徴を有するものは3点である。1はアメリカ式石鍬である。基部下端の両側に小さな抉りが施されている。張り出し部は欠損したものか、あまり明瞭ではない。

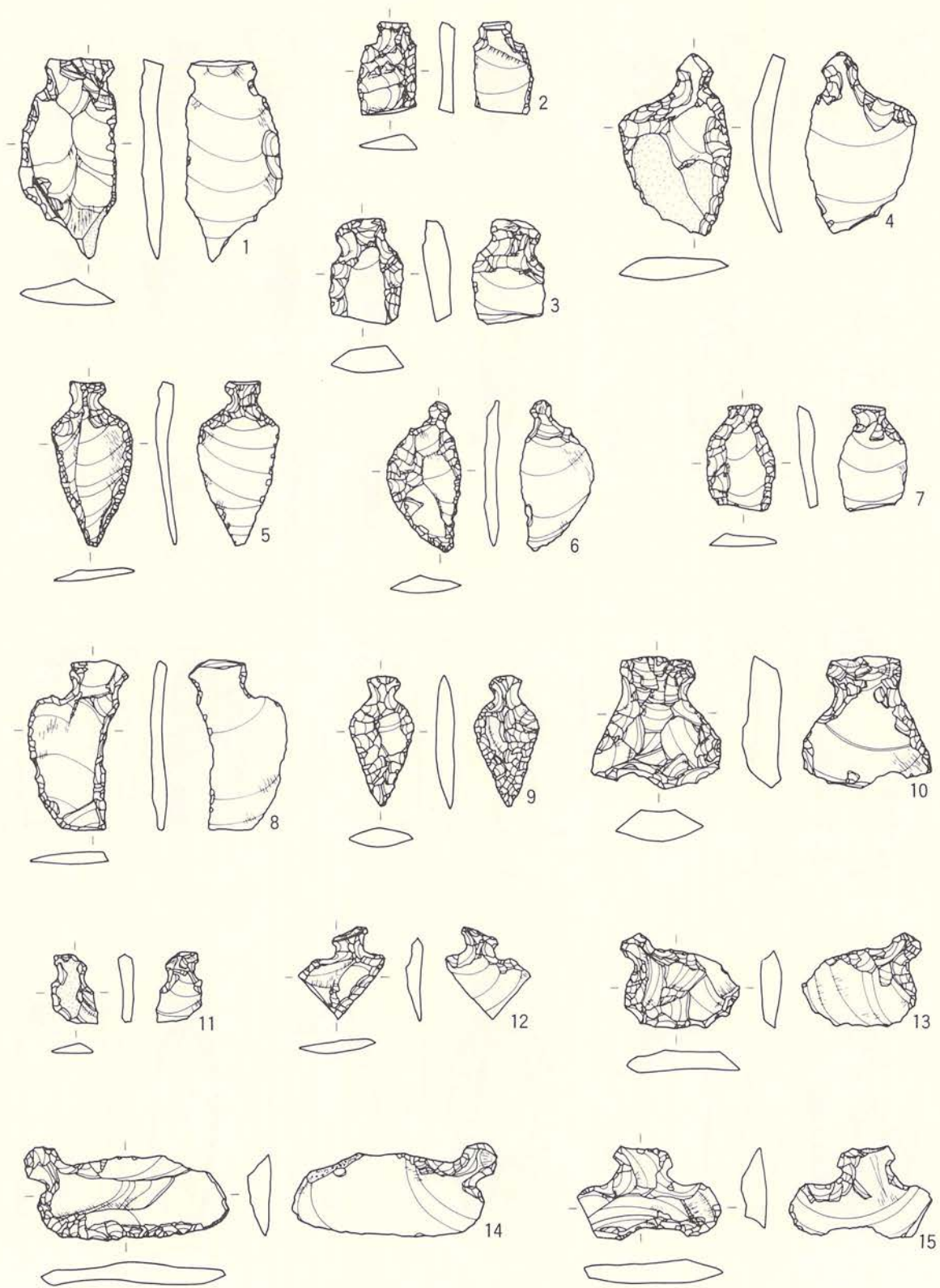
2・3は大型蛤刃の石斧である。3は完形品で、基端は打ち欠かれたようにすぼむ。基部は断面形が円形の棒状で、器面には細かい敲打痕が全面に観察される。刃部は研磨されているが、破損品の再利用か、片側に傾く。3は研磨痕が基部にまで及ぶ。断面形は不整な楕円形で、側縁部には敲打痕をもつ。基端は欠損する。



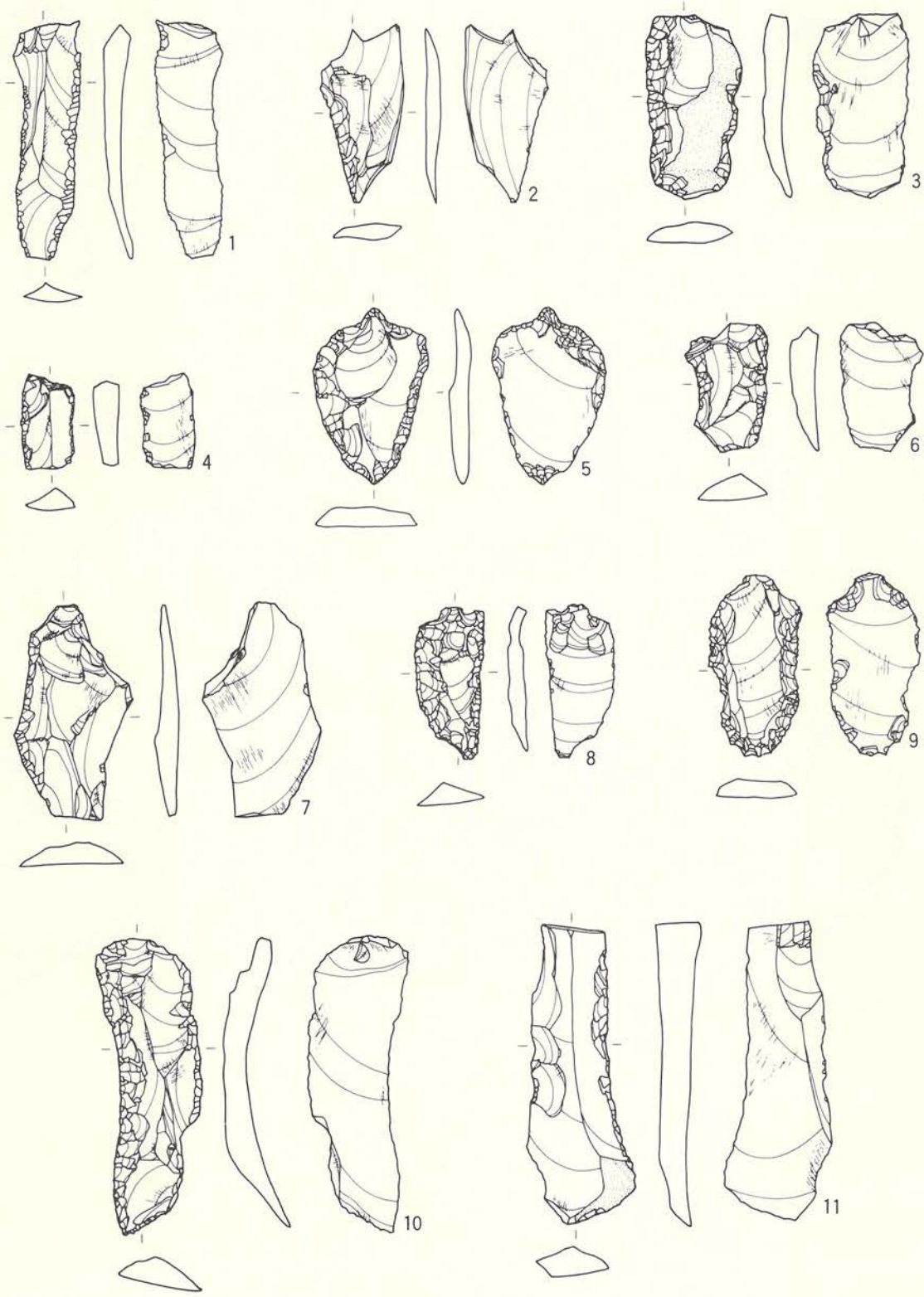
第105圖 遺構外出土遺物



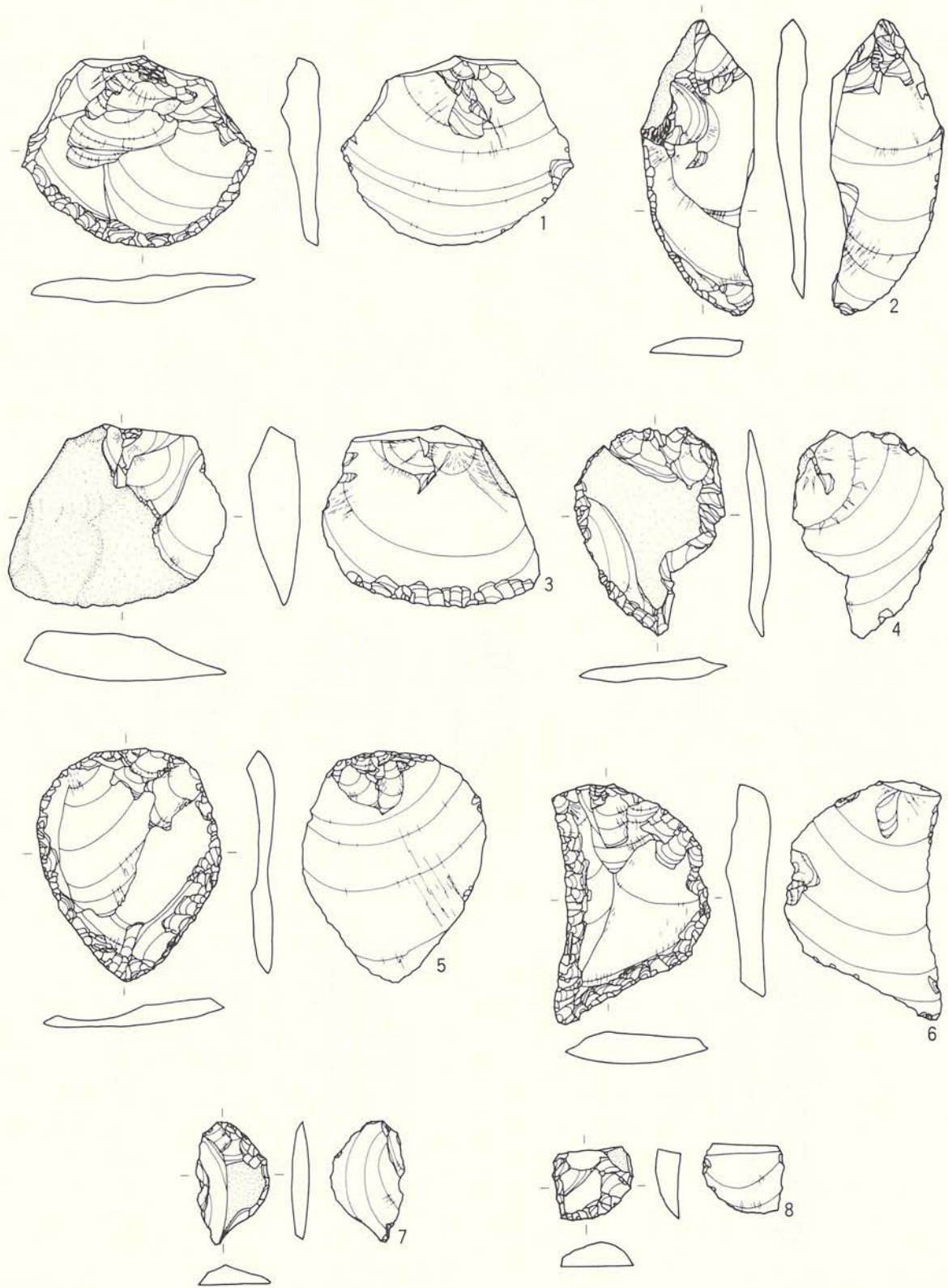
第106图 遺構外出土遺物



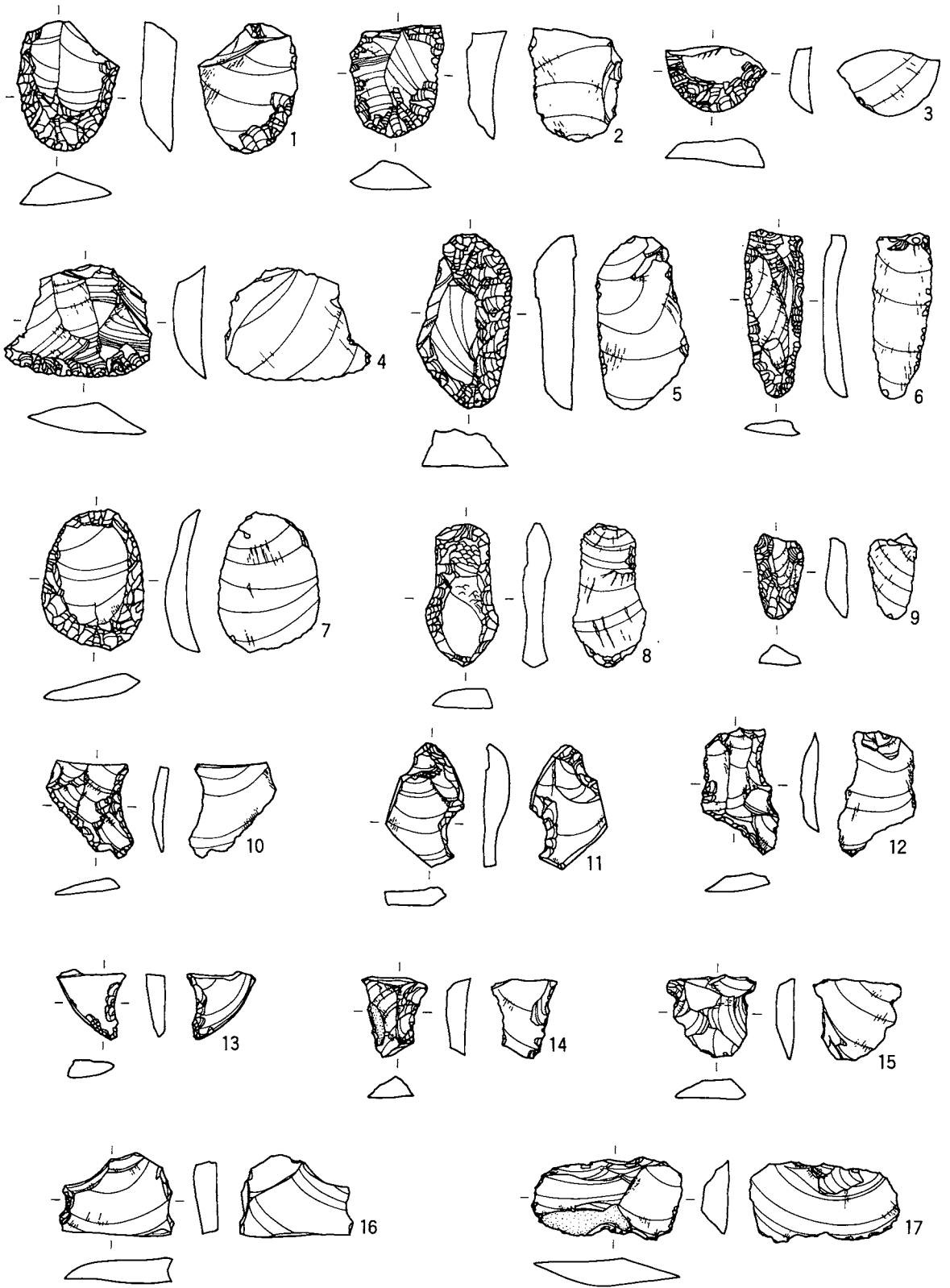
第107図 遺構外出土遺物



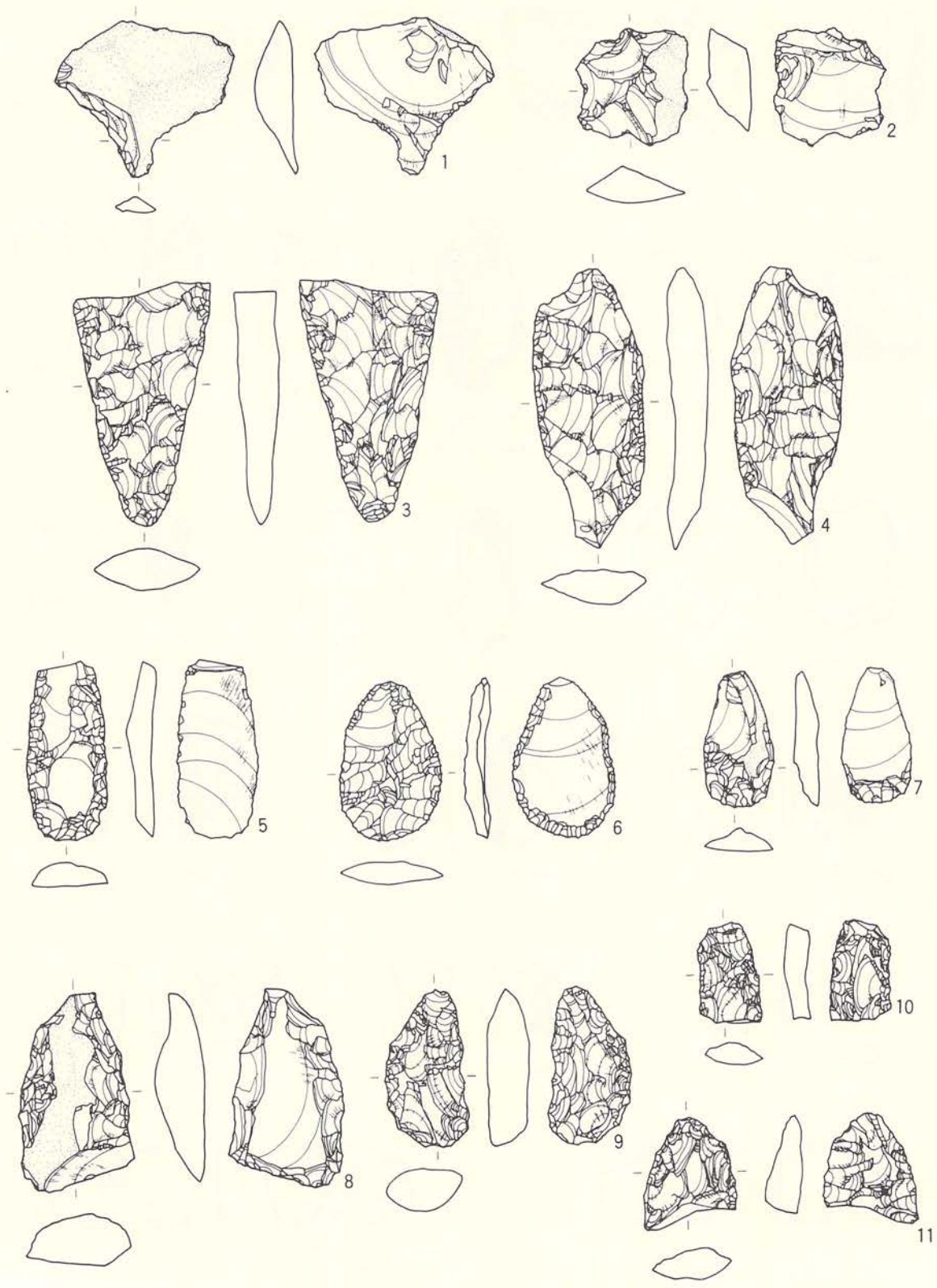
第108図 遺構外出土遺物



第109図 遺構外出土遺物



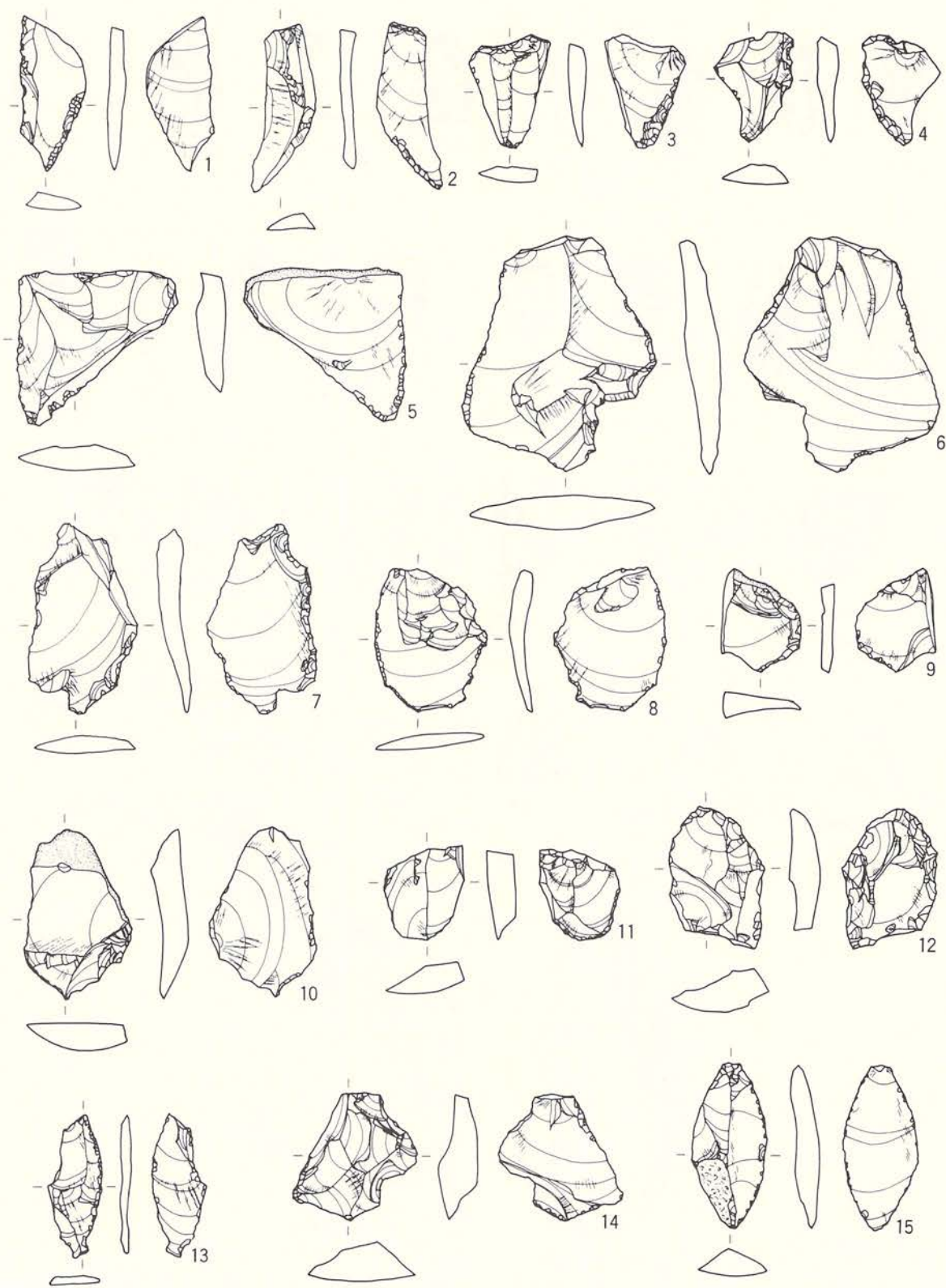
第110圖 遺構外出土遺物



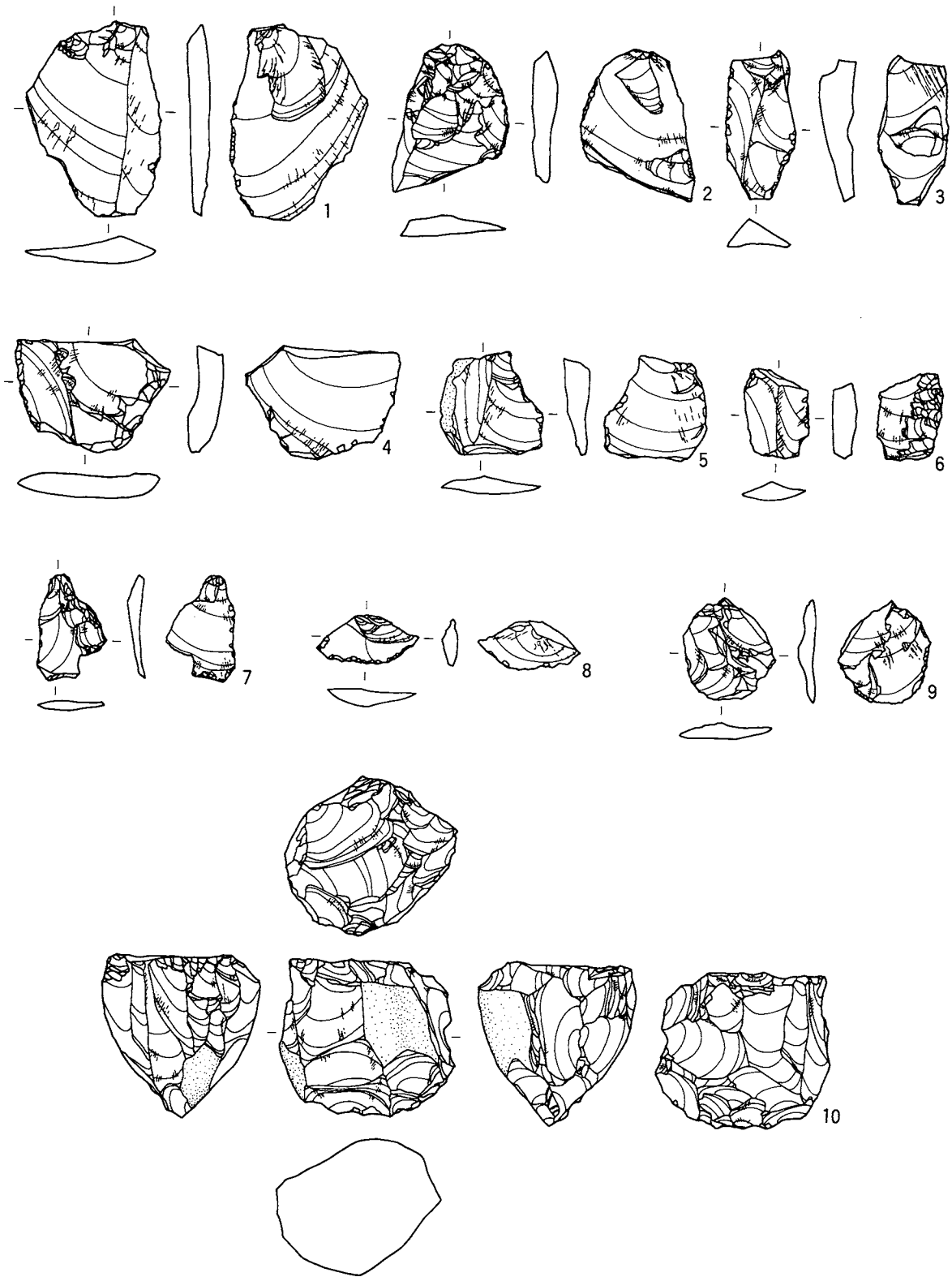
第111図 遺構外出土遺物



第112図 遺構外出土遺物



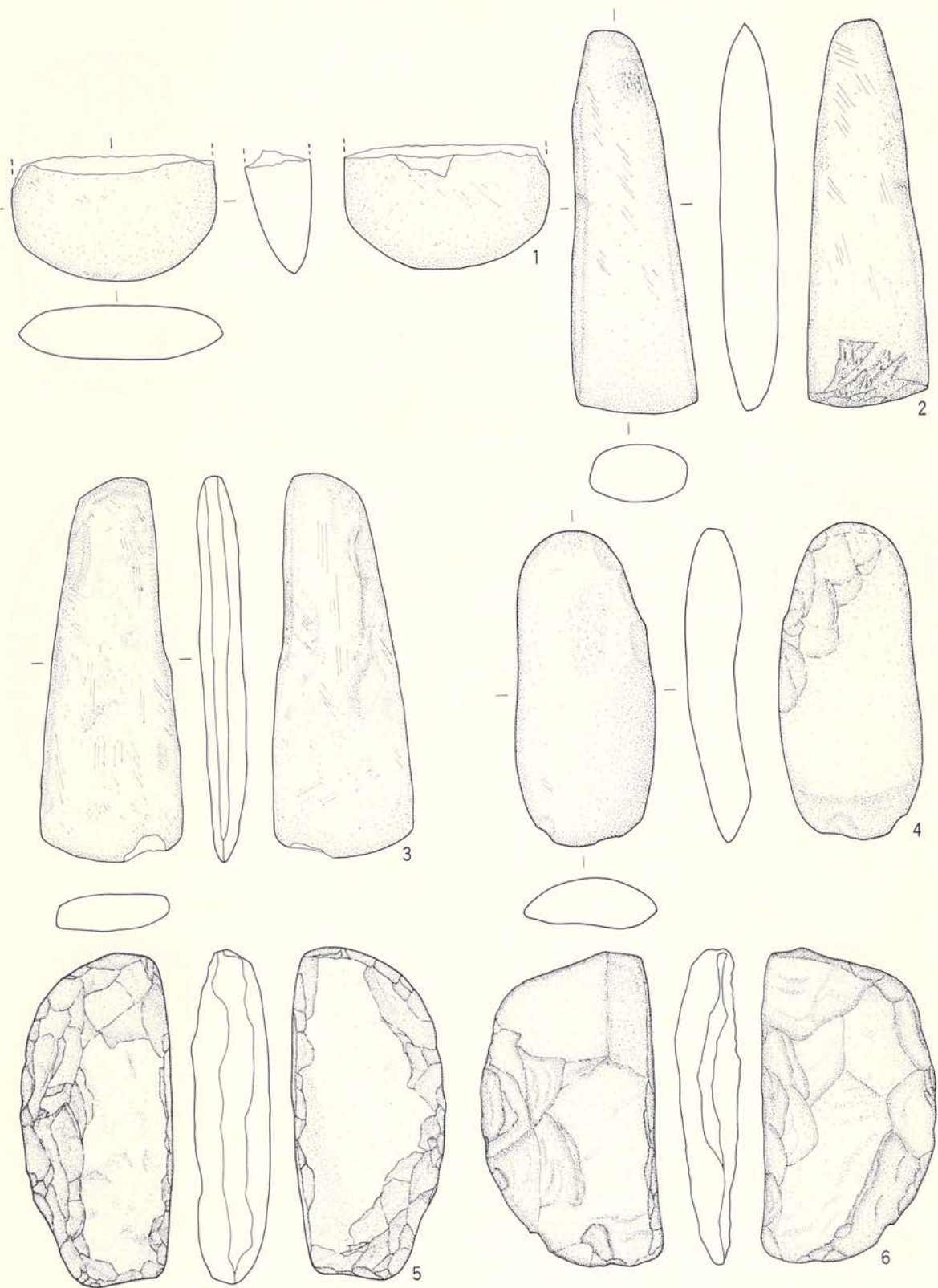
第113図 遺構外出土遺物



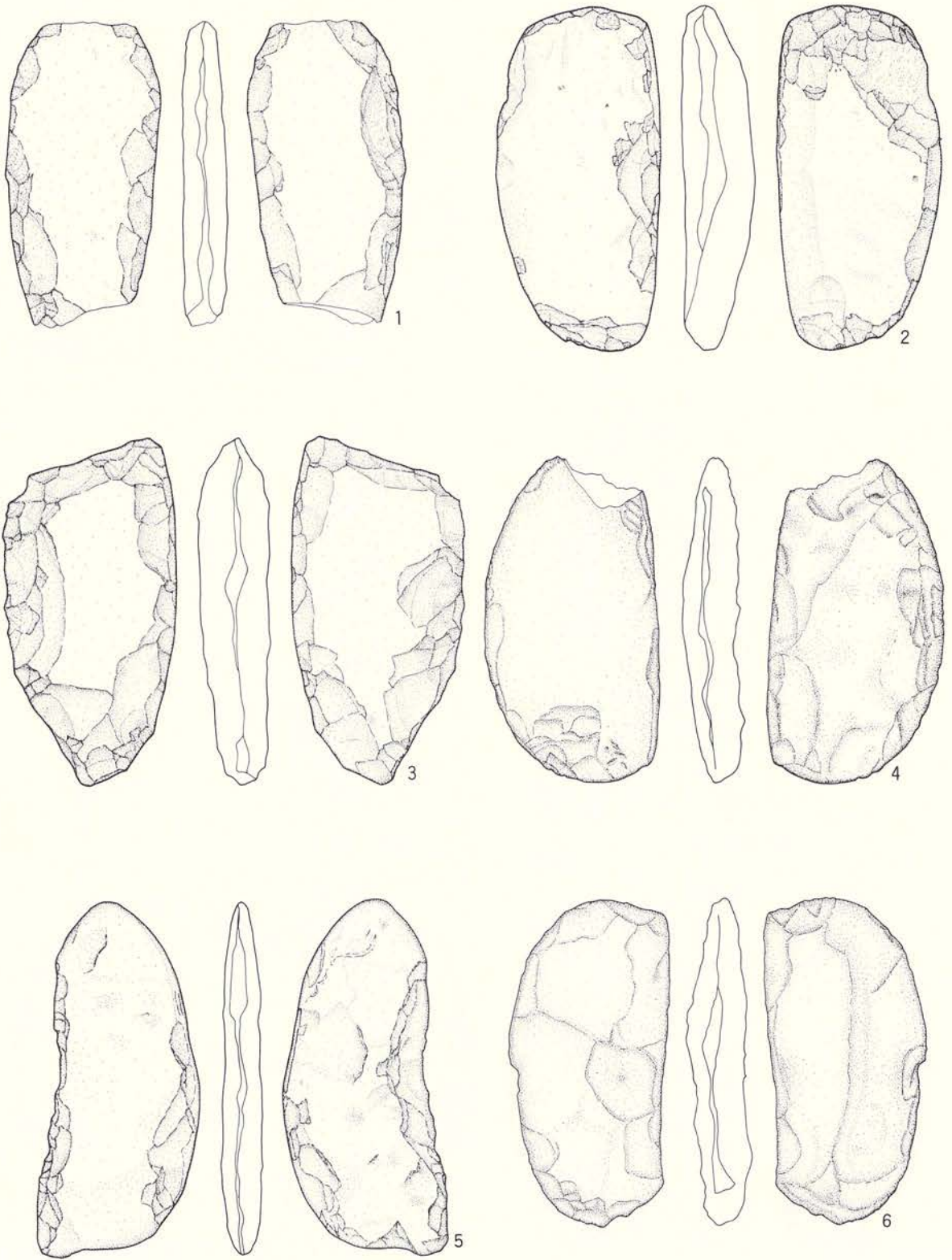
第114図 遺構外出土遺物



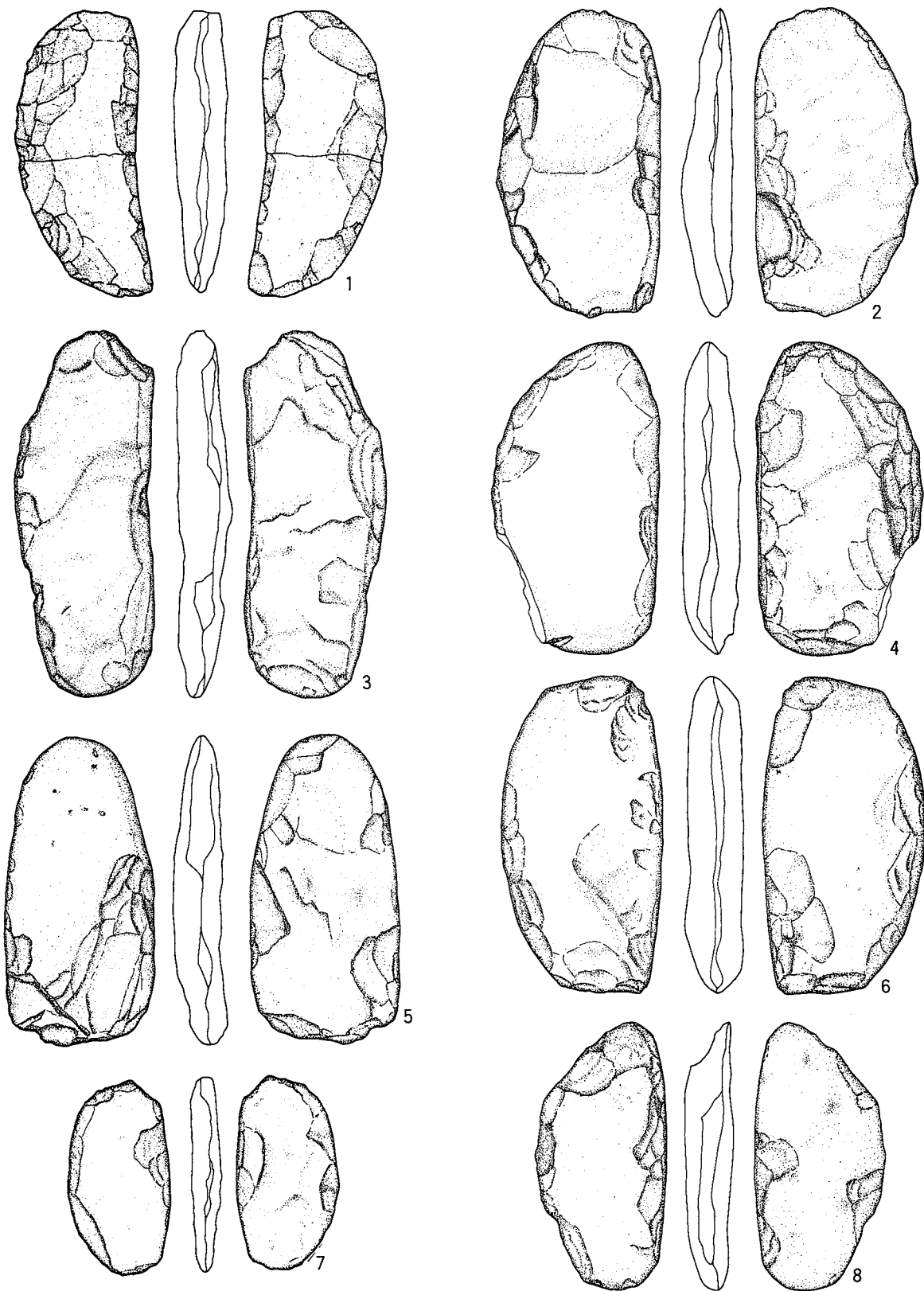
第115図 遺構外出土遺物



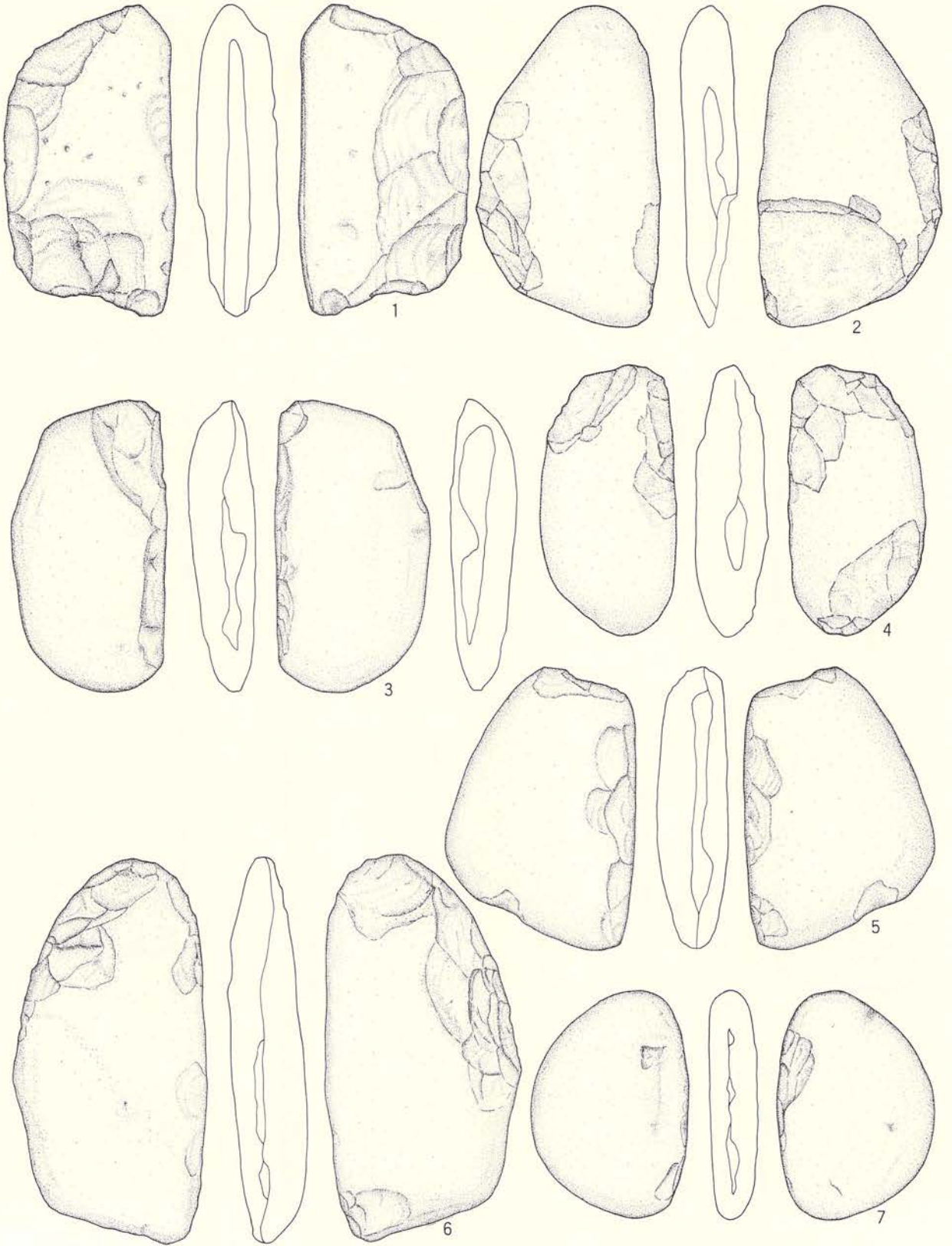
第116図 遺構外出土遺物



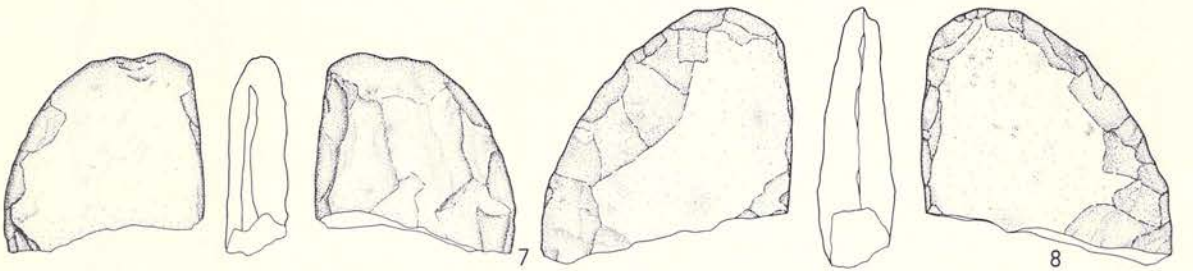
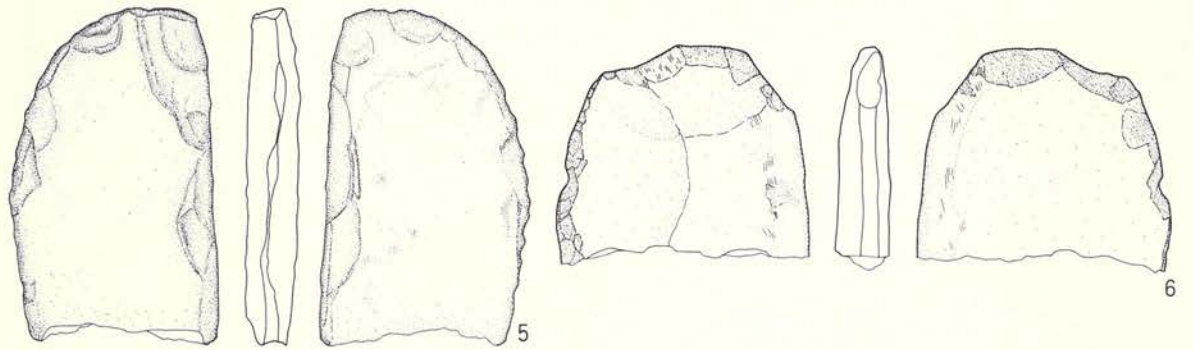
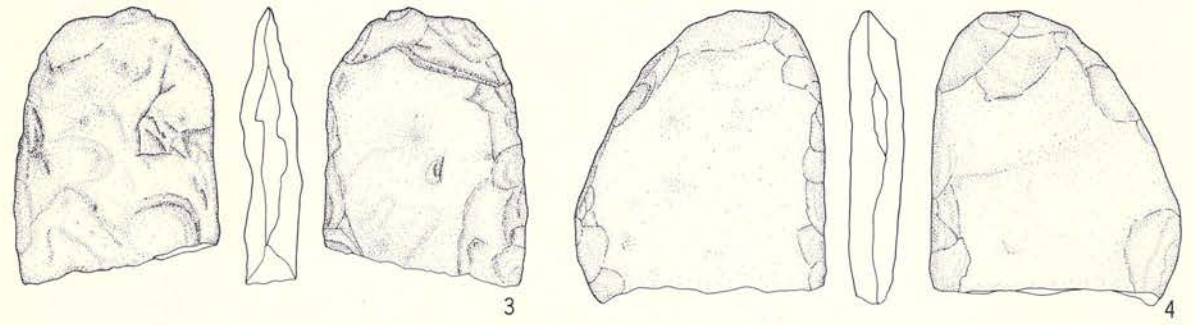
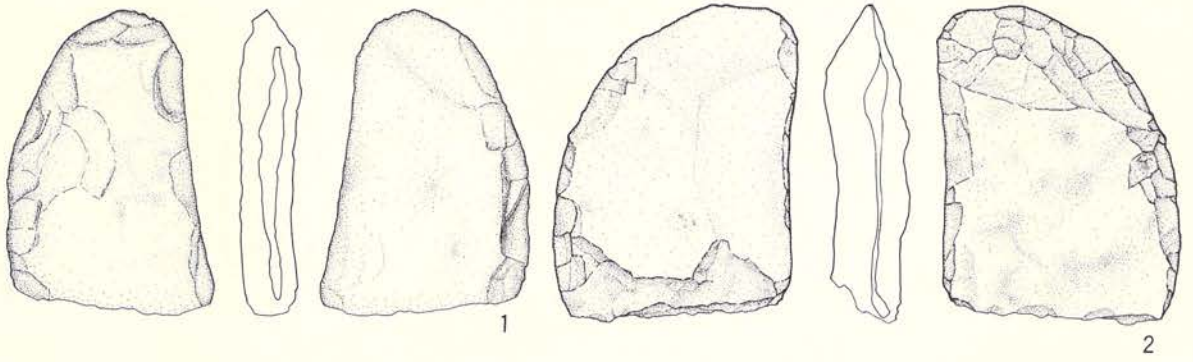
第117図 遺構外出土遺物



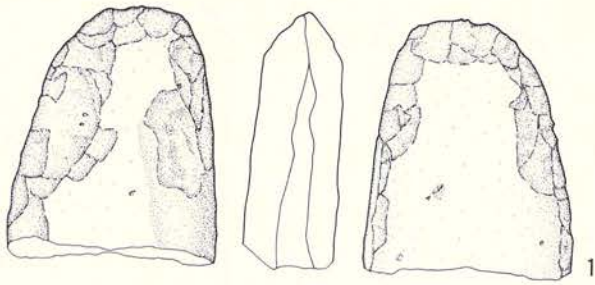
第118図 遺構外出土遺物



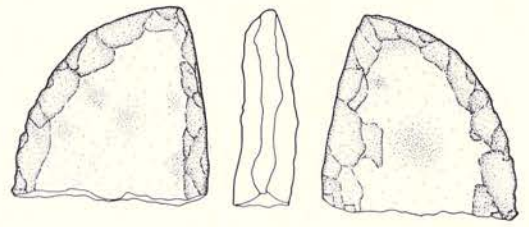
第119図 遺構外出土遺物



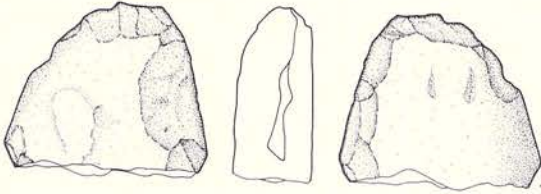
第120図 遺構外出土遺物



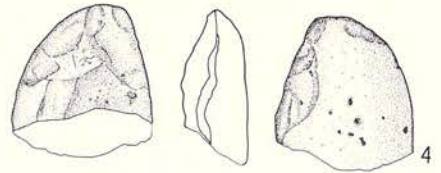
1



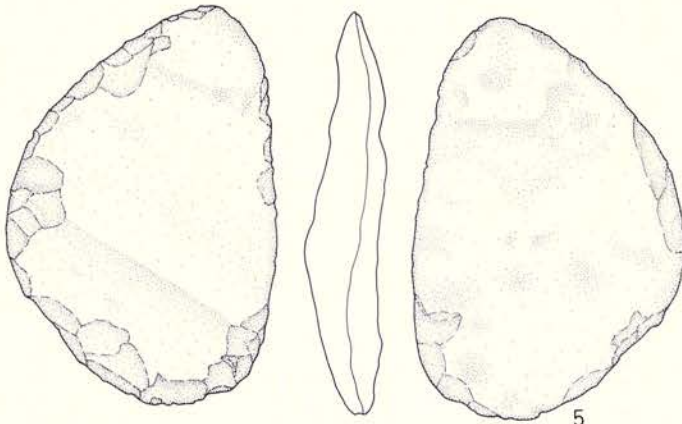
2



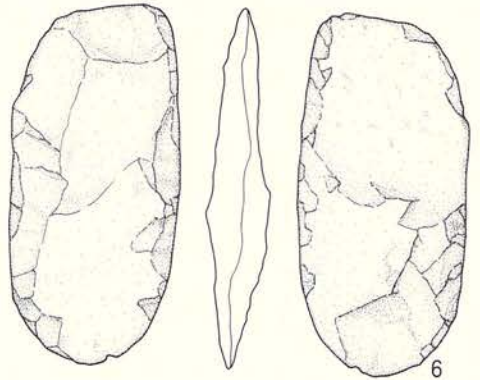
3



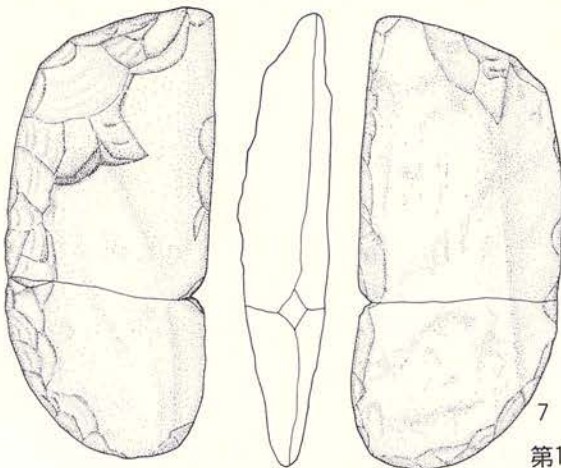
4



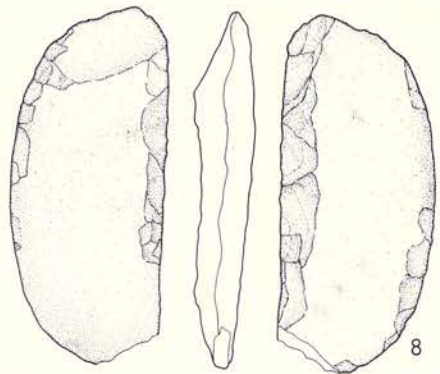
5



6

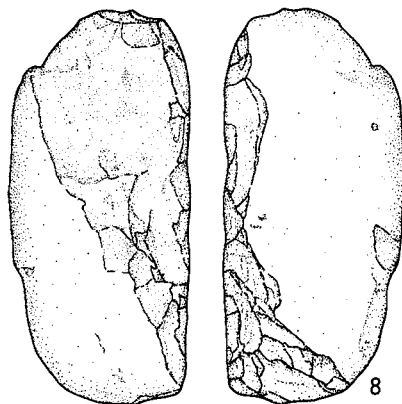
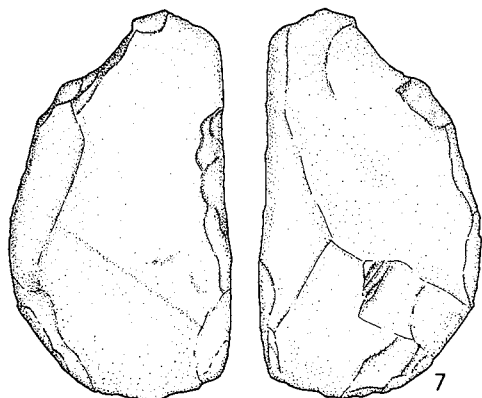
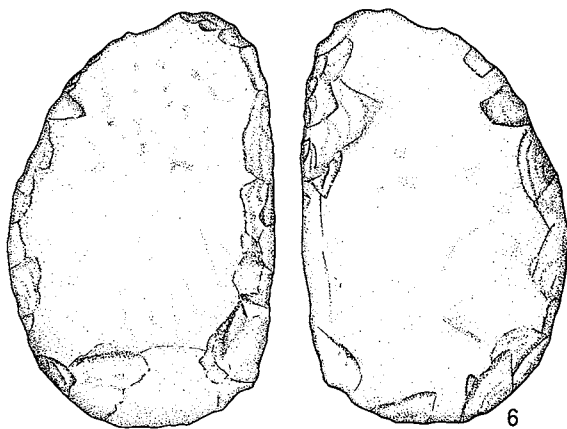
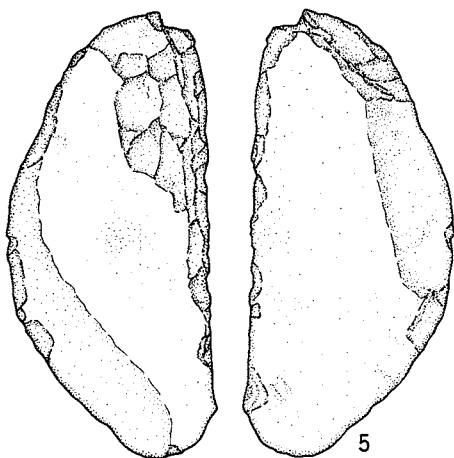
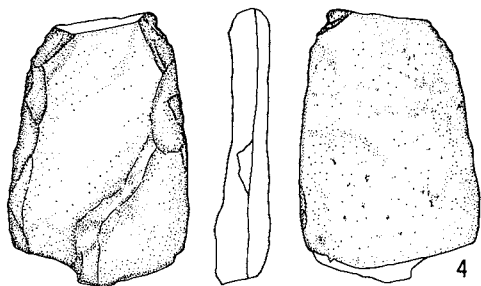
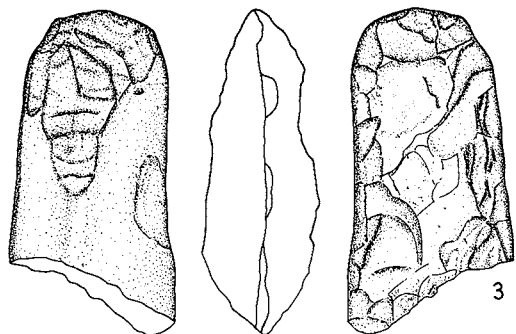
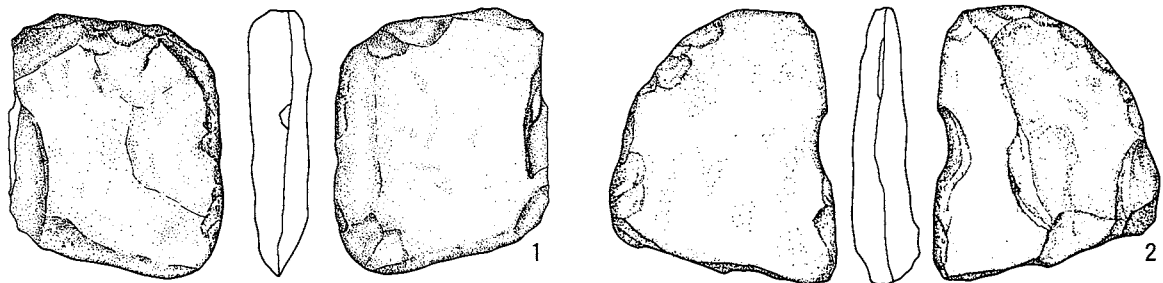


7

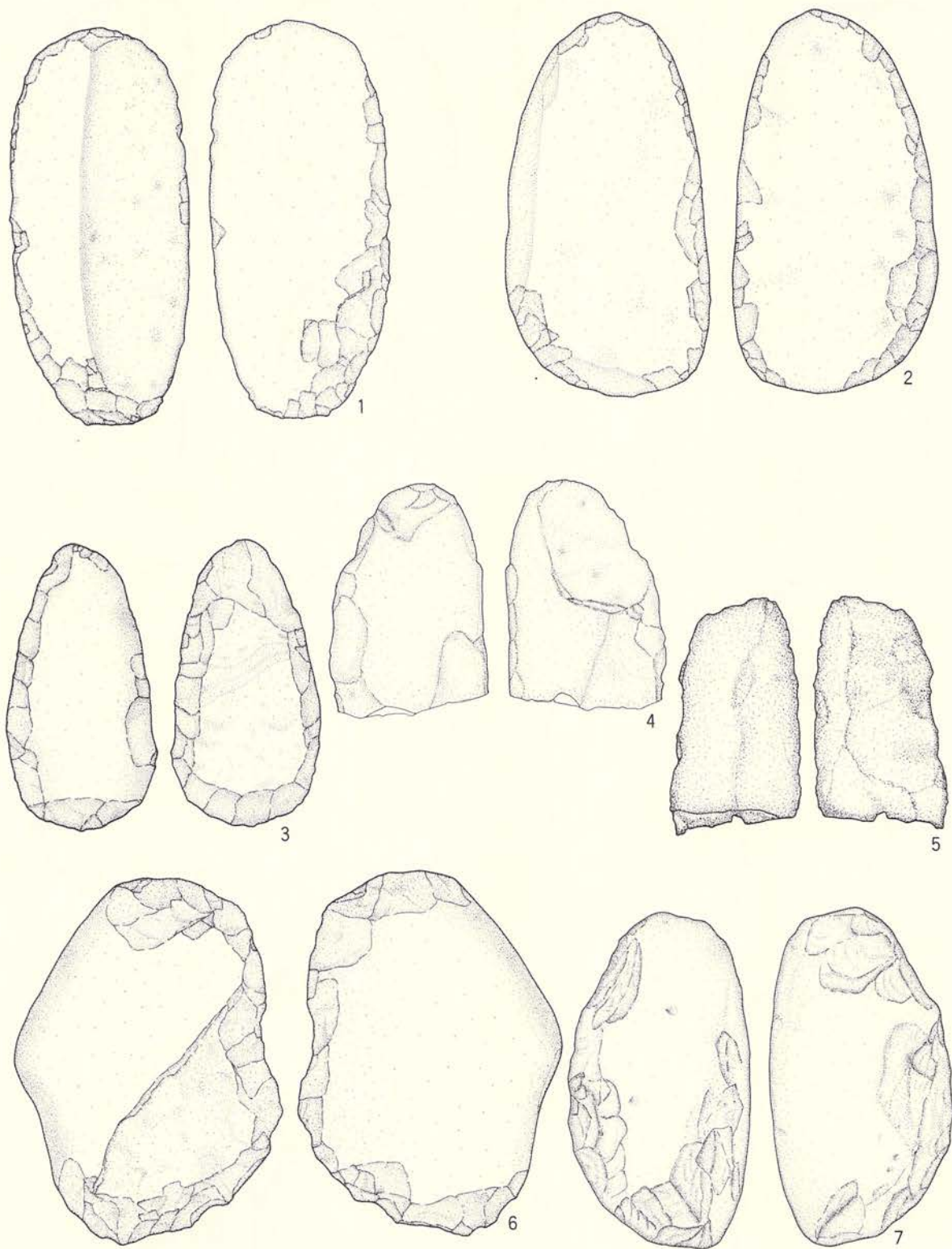


8

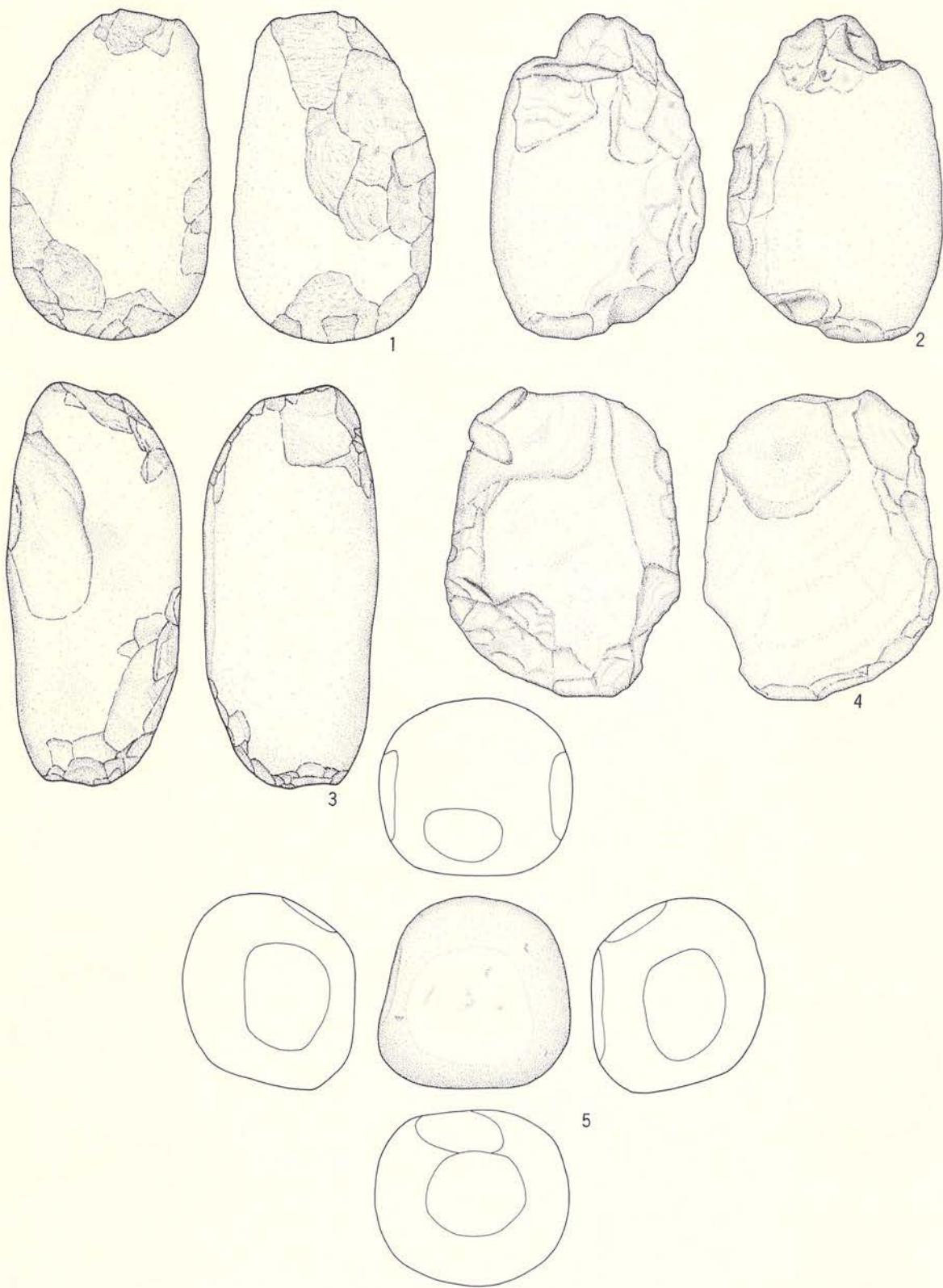
第121図 遺構外出土遺物



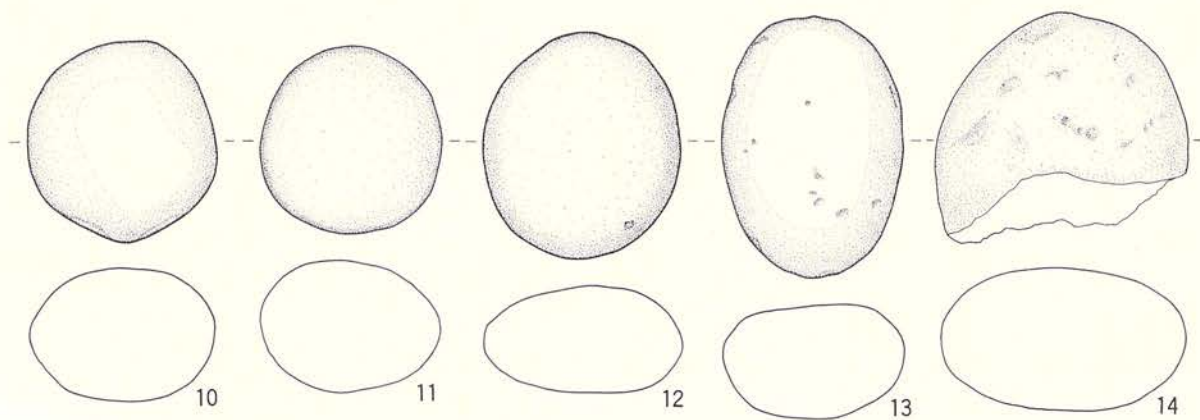
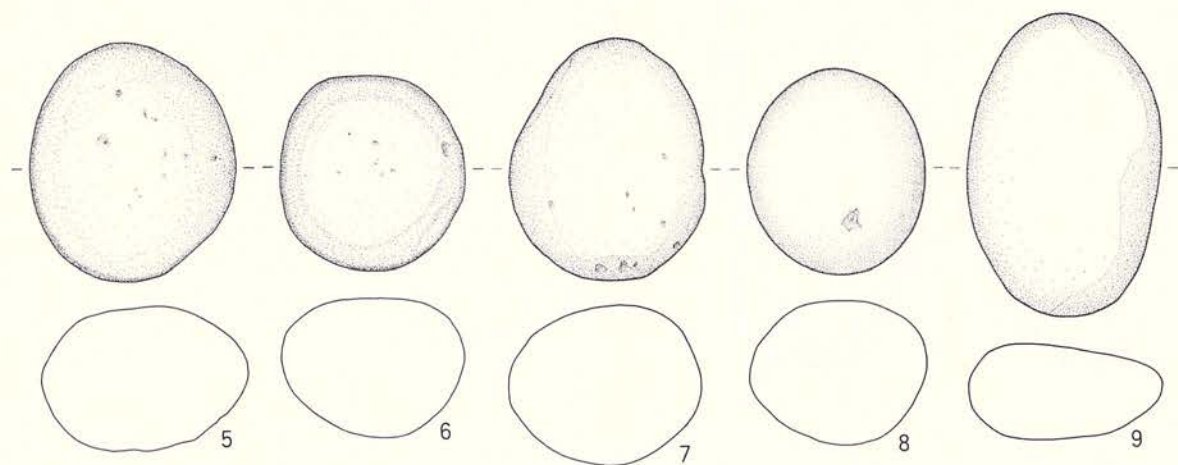
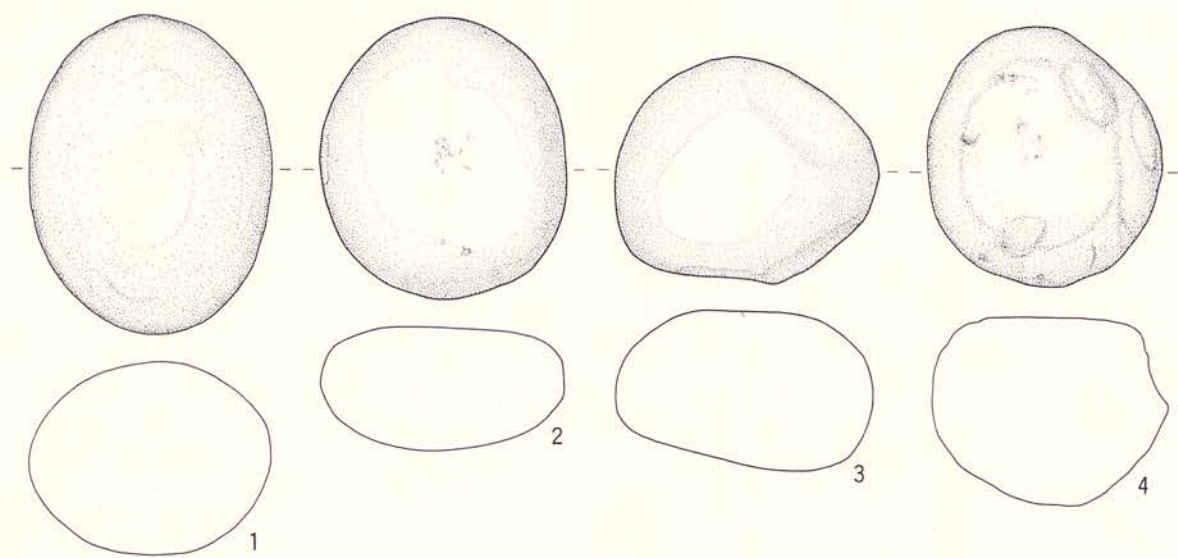
第122図 遺構外出土遺物



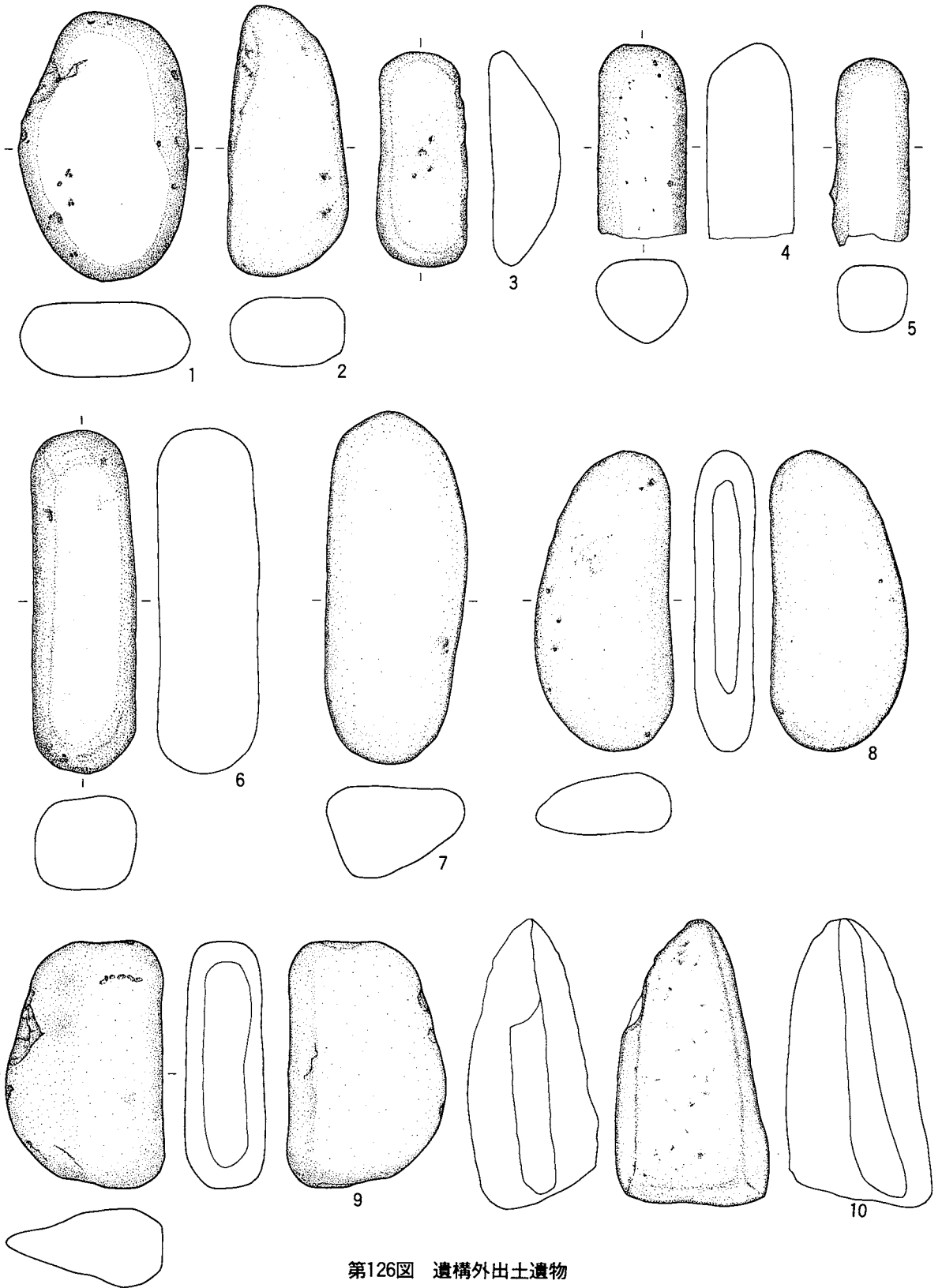
第123図 遺構外出土遺物



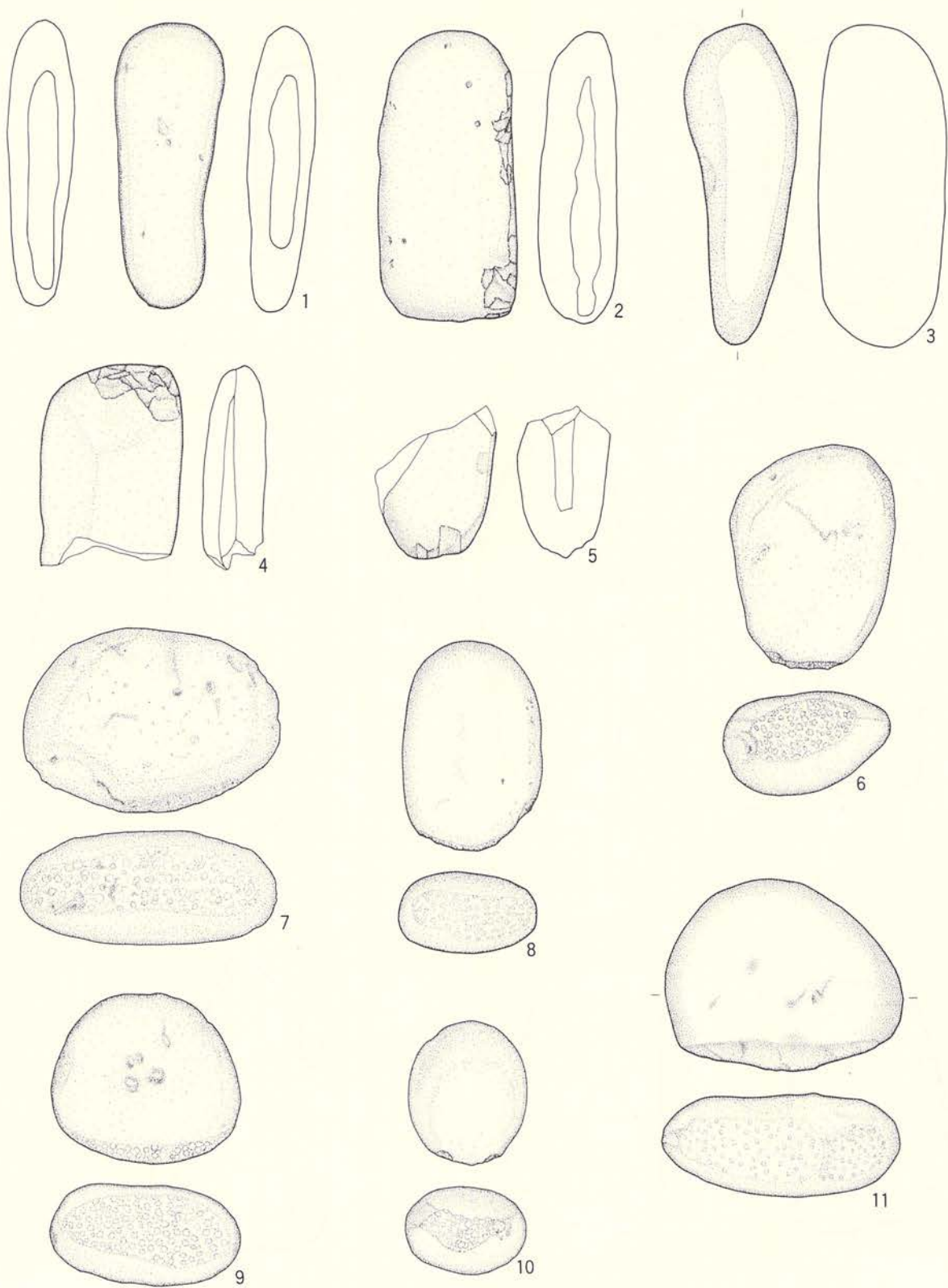
第124図 遺構外出土遺物



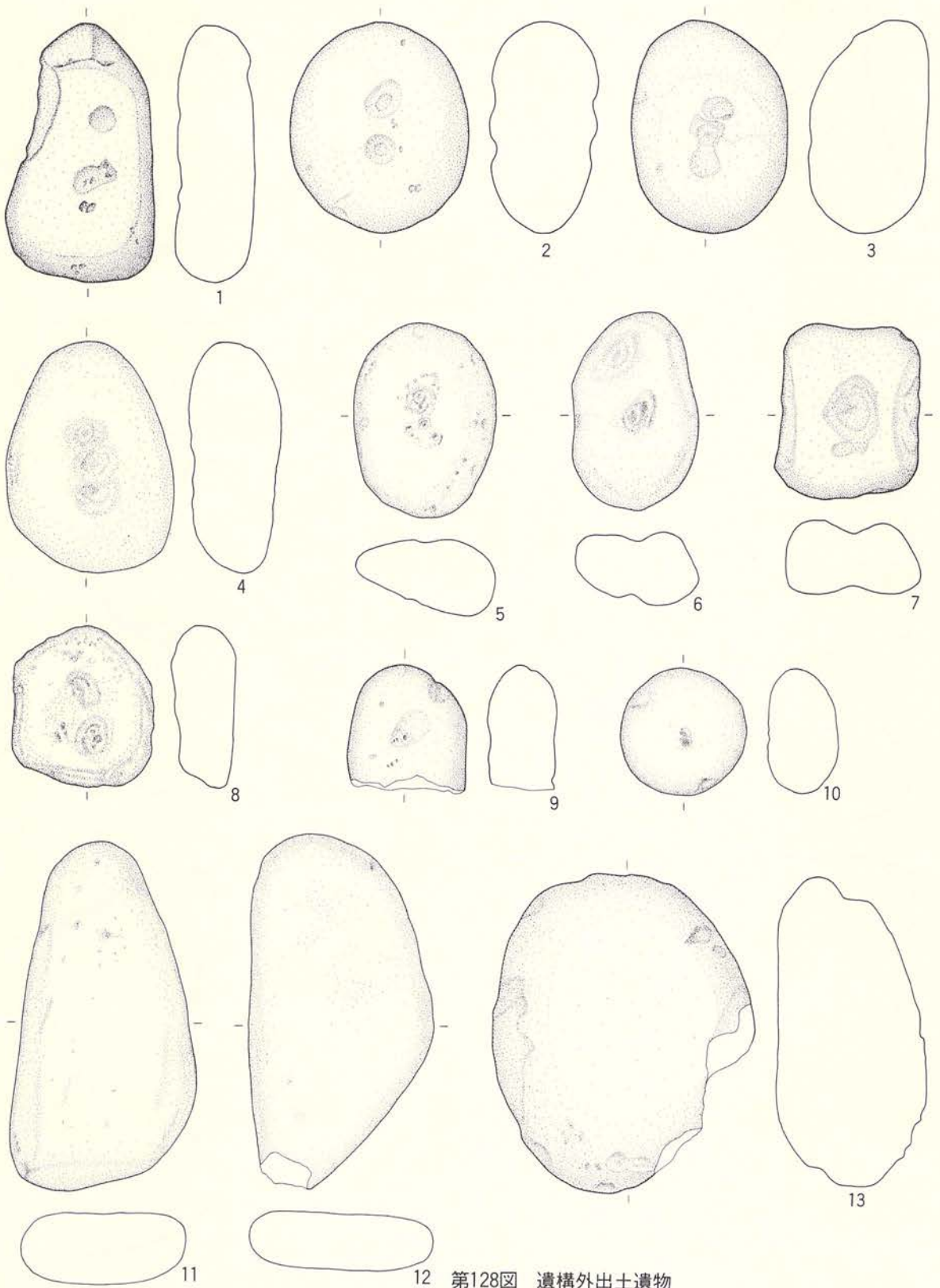
第125図 遺構外出土遺物



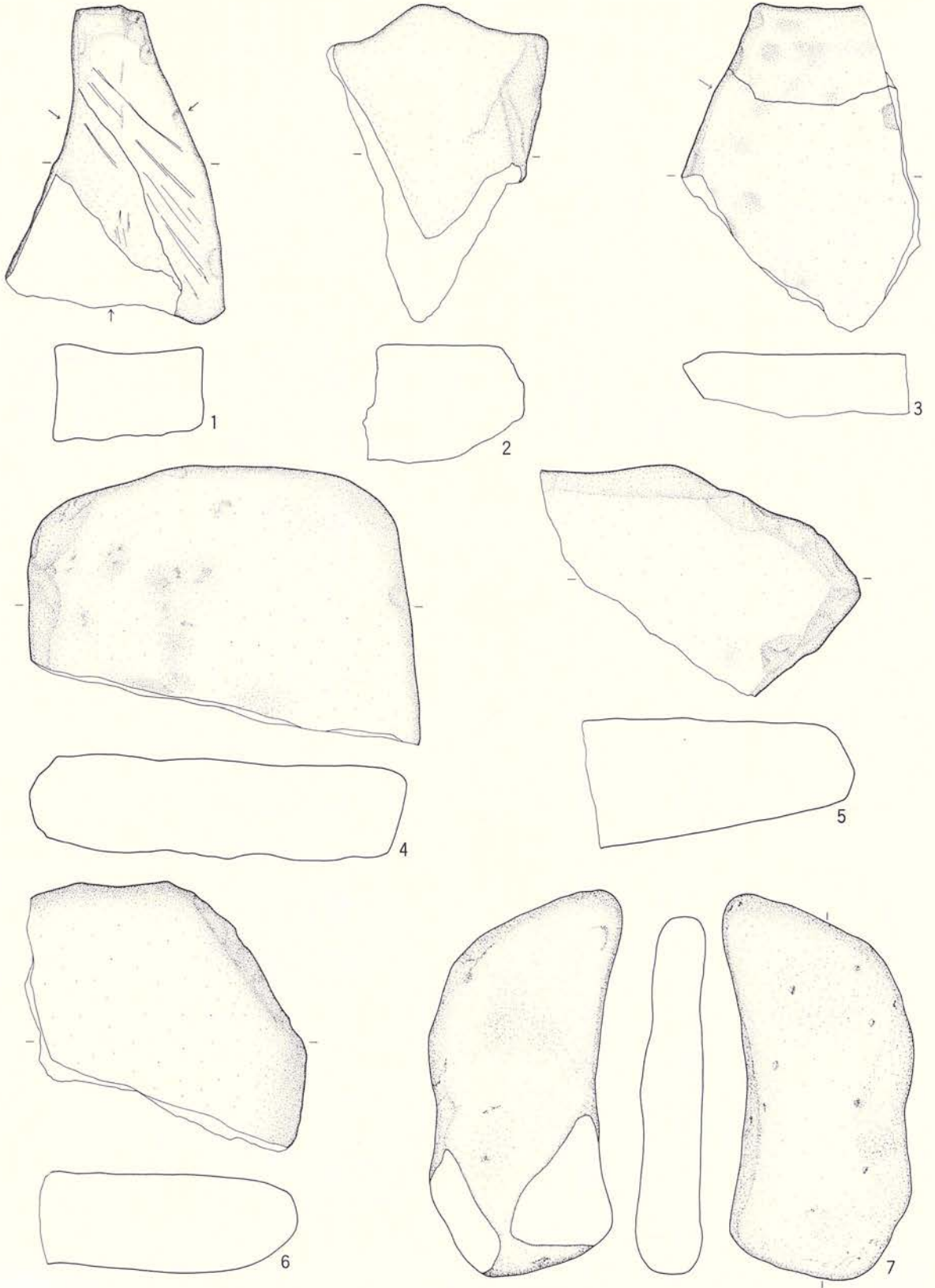
第126図 遺構外出土遺物



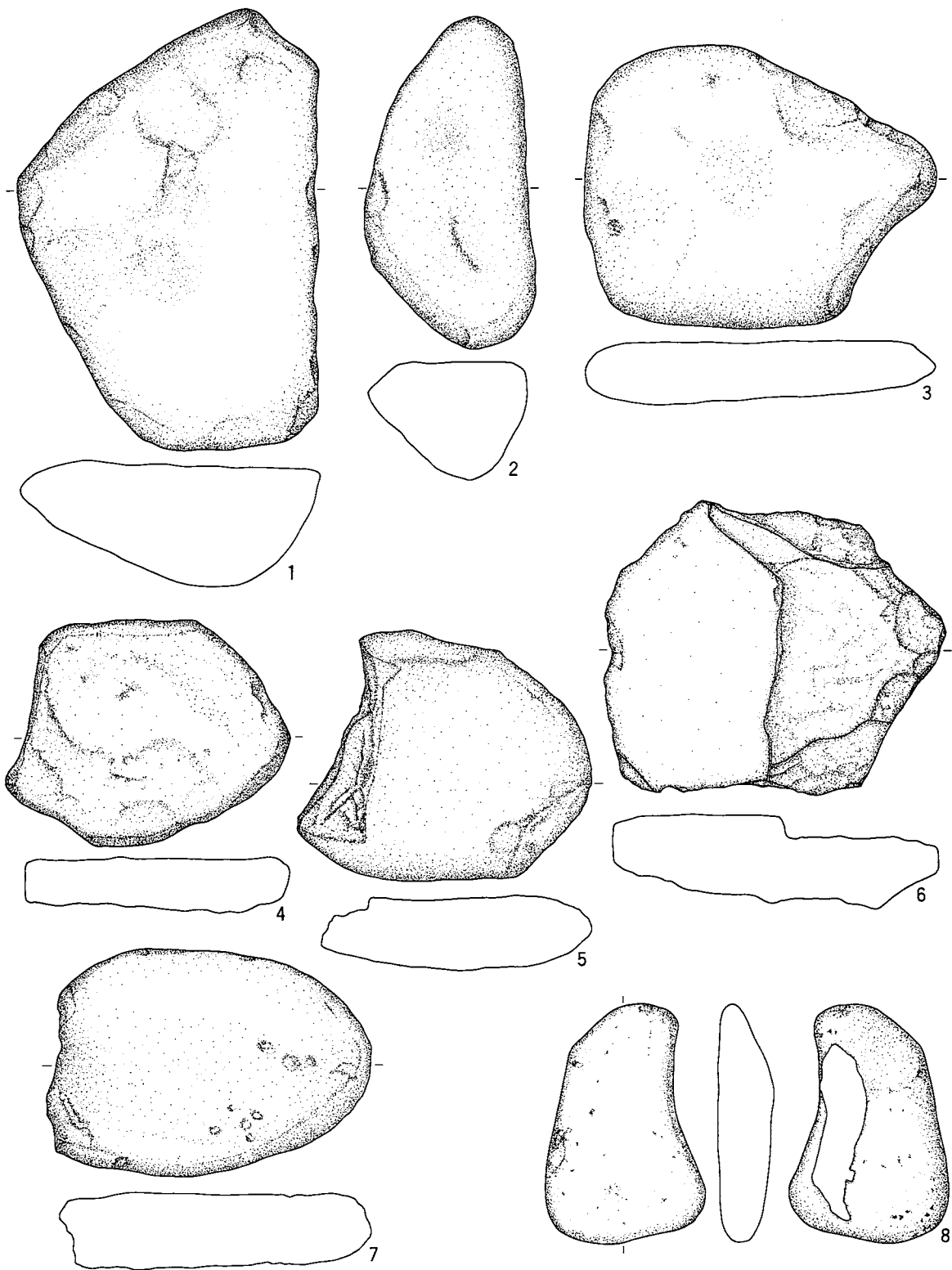
第127図 遺構外出土遺物



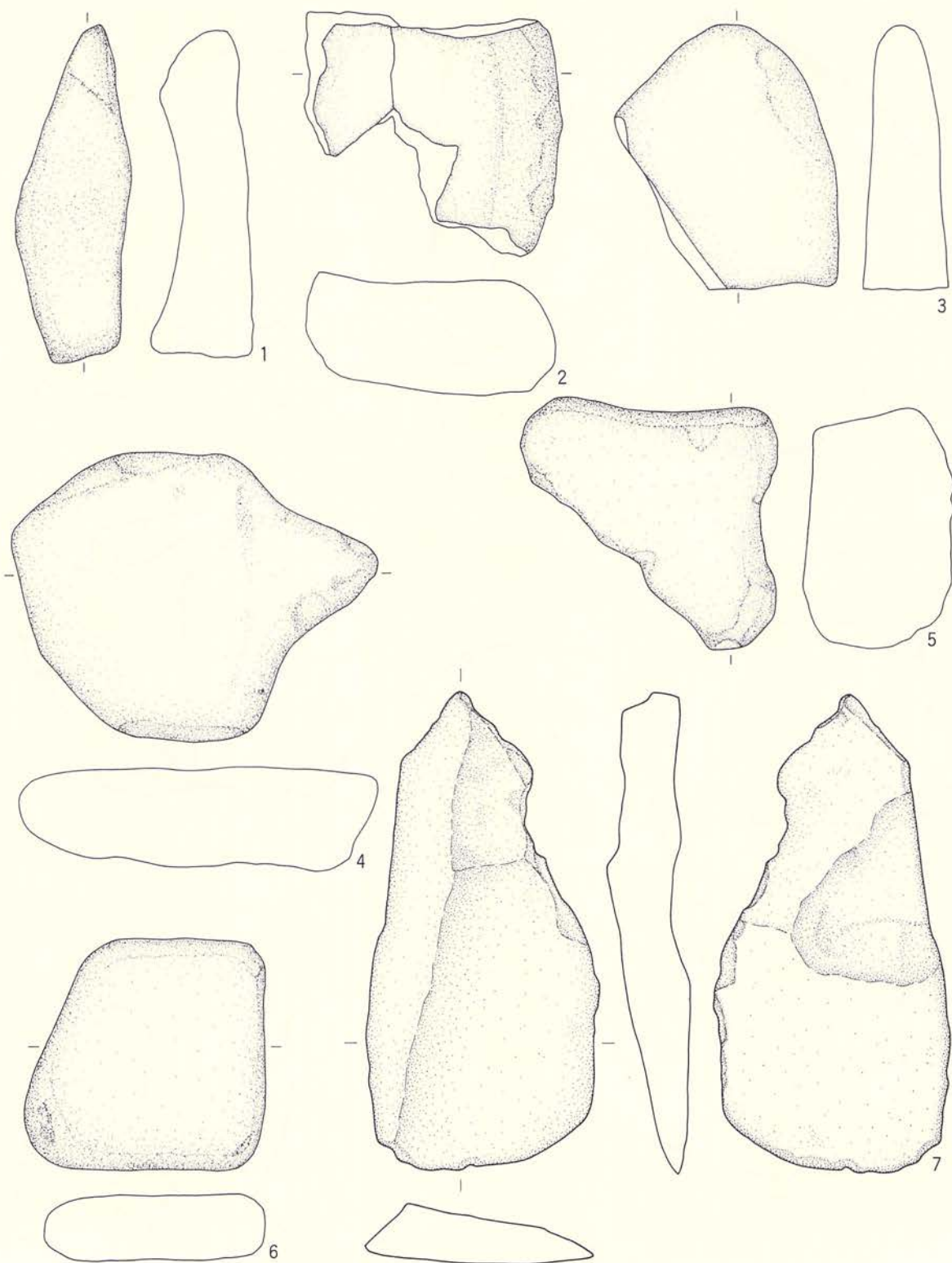
第128図 遺構外出土遺物



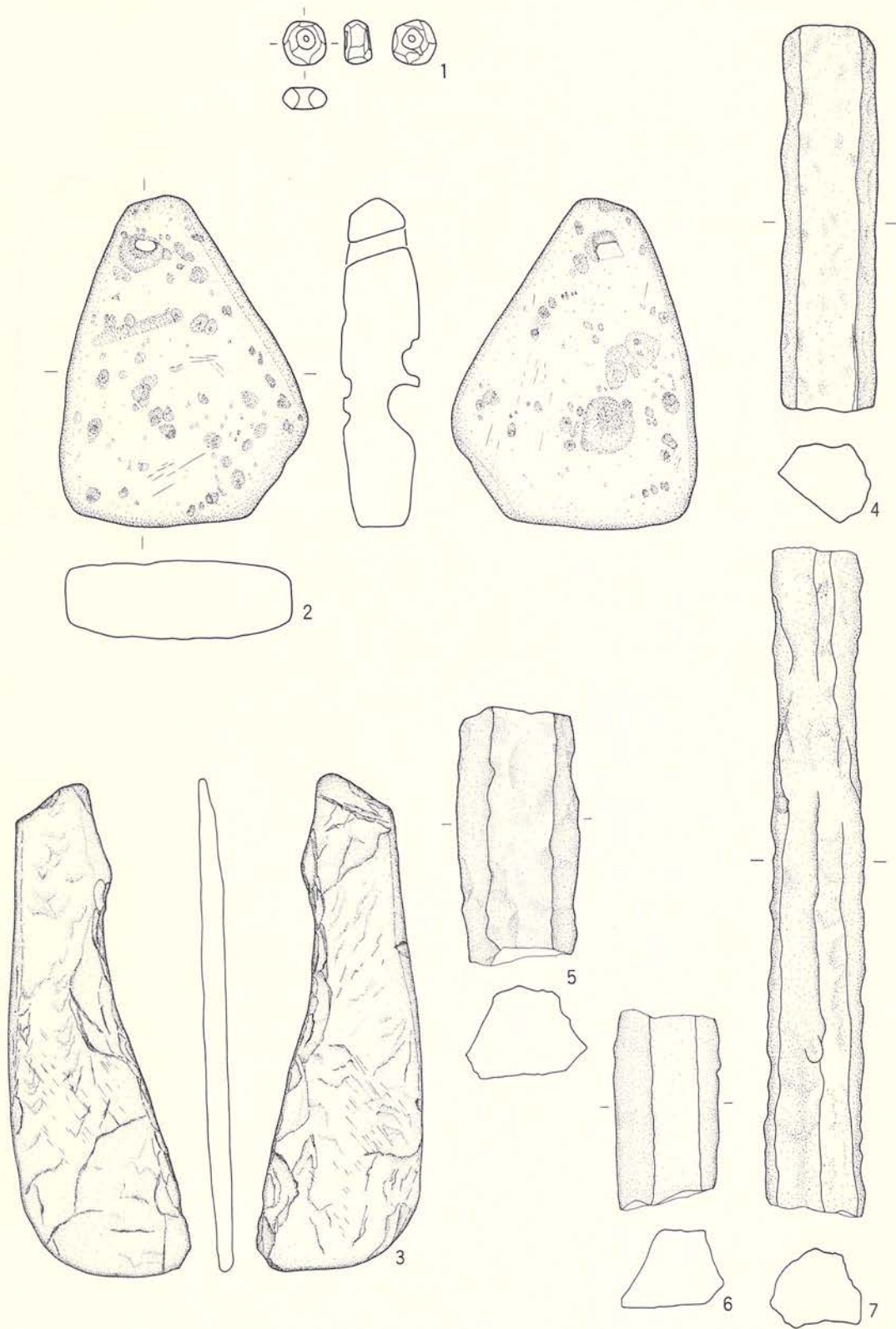
第129図 遺構外出土遺物



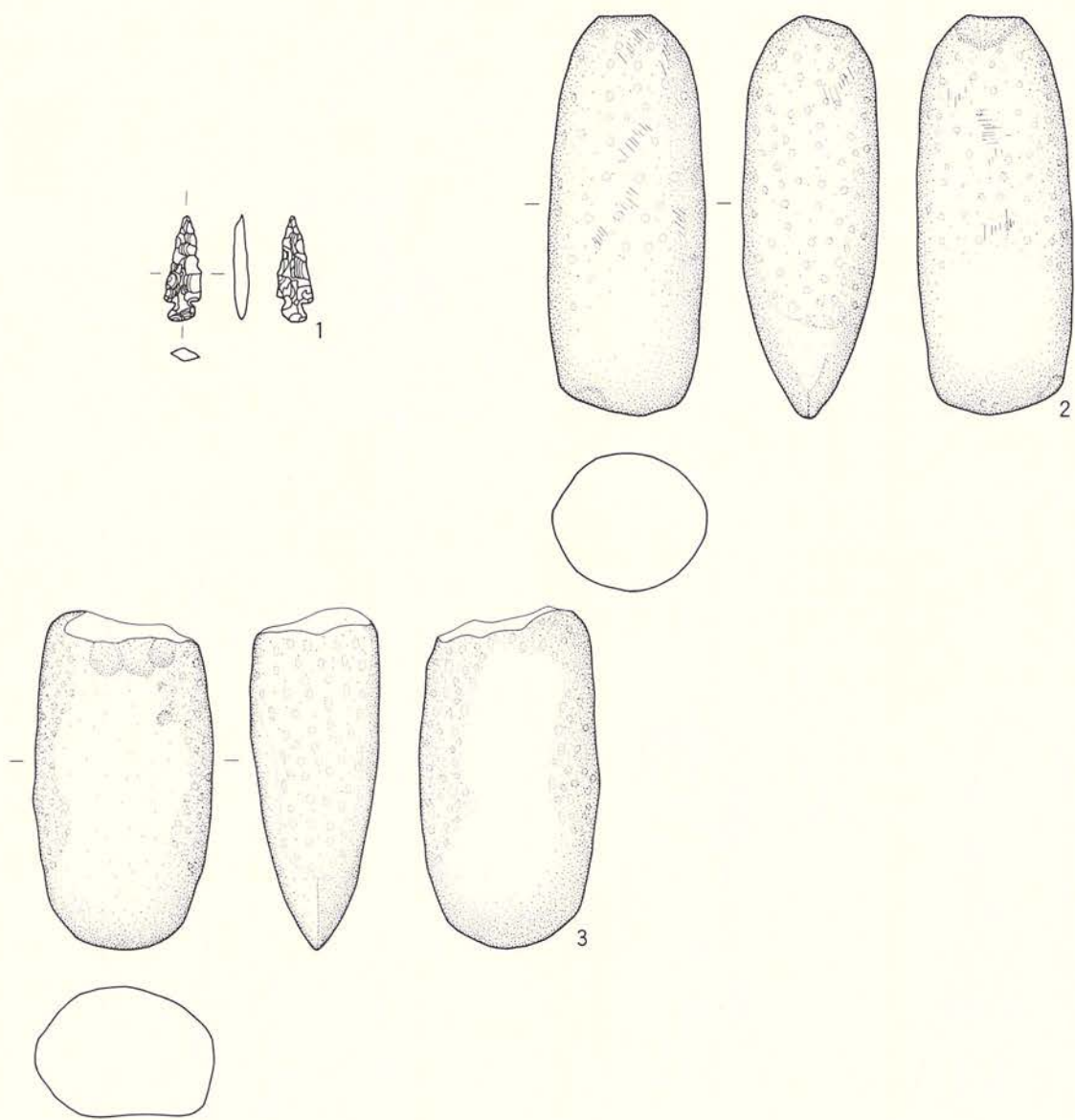
第130図 遺構外出土遺物



第131図 遺構外出土遺物



第132図 遺構外出土遺物



第133図 遺構外出土遺物

石器計測表

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地
1	石錐	I E-1 住埋土	45-11	2.5	1.1	0.4	0.7	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
2	Uフレ	I E-2 住床面	-17	2.6	1.8	0.2	1.6	〃	〃
3	フレイク	〃	-18	2.1	2.7	0.7	4.8	〃	〃
4	石匙(横)	I E-3 住埋土	46-10	4.9	4.3	0.7	10.15	〃	〃
5	Rフレ	〃	-11	3.1	2.2	0.6	2.75	玻璃質流紋岩	〃
6	Uフレ	〃	-12	4.0	2.5	0.4	3.45	チャート質粘板岩	北上山地
7	フレイク	II F-1 住埋土	47-3	3.9	2.7	0.6	4.1	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
8	〃	〃	-4	3.1	2.2	0.3	2.45	〃	〃
9	石匙(縦)	II F-2 住埋土	48-16	4.5	3.6	1.0	16.85	〃	〃
10	削器	〃	-17	4.6	3.3	0.8	12.1	珪質泥岩	〃
11	Uフレ	〃	-18	4.4	3.4	1.0	16.7	〃	〃
12	削器	〃	-19	5.6	3.0	0.9	14.5	〃	〃
13	Rフレ	〃	-20	3.1	2.4	0.8	5.5	チャート	北上山地
14	粗製石皿	〃	-21	32.6	23.6	8.7	3,900.0	両輝石安山岩	奥羽山地
15	磨石	II F-2 住床面	49-1	9.8	8.8	6.7	900.0	〃	〃
16	粗製石皿	〃	-2	39.0	24.0	11.0	10,100.0	〃	〃
17	石匙(横)	II F-3 住埋土	50-10	3.4	5.7	1.1	20.9	粘板岩	北上山地
18	〃(縦)	II F-4 住埋土	51-6	4.7	2.2	0.9	7.65	〃	〃
19	削器	〃	-7	6.3	2.5	1.0	23.5	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
20	〃	〃	-8	5.4	3.5	0.9	14.2	〃	〃
21	〃	〃	-9	3.3	3.1	0.55	5.8	〃	〃
22	搔器	〃	-10	2.2	2.2	0.3	2.5	〃	〃
23	ノッチ	〃	-11	3.3	3.1	0.55	5.8	〃	〃
24	搔器	〃	-12	8.6	3.2	1.5	52.85	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
25	Uフレ	〃	-13	4.7	4.8	0.6	12.6	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
26	〃	〃	-14	5.3	1.9	0.7	5.2	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
27	〃	〃	-15	3.4	2.3	0.5	3.5	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
28	軽石製品	〃	52-1	4.7	4.9	4.0	32.5	軽石	安比川流域(段丘)
29	〃	〃	-2	6.2	4.5	4.5	46.5	〃	〃
30	〃	〃	-3	3.4	5.6	4.6	24.1	〃	〃
31	半円状扁平打製石器	〃	-4	10.0	6.5	3.0	270.0	輝石安山岩	奥羽山地
32	〃	〃	-5	14.4	6.0	2.8	350.0	〃	〃
33	〃	〃	-6	12.1	7.1	3.3	400.0	〃	〃
34	〃	〃	-7	5.0	5.7	1.9	58.7	〃	〃
35	〃	〃	-8	5.3	4.2	1.4	38.5	〃	〃
36	〃	〃	-9	6.7	8.0	2.1	140.0	〃	〃
37	磨石	II F-4 住柱穴埋土	53-1	10.4	7.1	4.8	270.0	半花崗岩	北上山地
38	粗製石皿	〃 床面	-2	16.6	14.2	4.6	2,390.00	輝石安山岩	〃
39	削器	II F-5 住埋土	-4	9.0	4.4	1.6	60.0	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
40	鐮状石器	〃 貼床	-5	7.6	4.2	1.8	52.65	珪質泥岩	〃
41	搔器	〃	-6	7.1	2.7	1.7	30.6	凝灰質珪質泥岩	〃
42	Uフレ	II F-5 住埋土	-7	5.7	5.4	1.5	35.45	〃	〃
43	〃	〃	-8	4.7	2.9	0.85	10.8	珪質泥岩	〃
44	半円状扁平打製石器	〃	54-1	15.3	7.4	3.6	410.0	両輝石安山岩	奥羽山地
45	〃	〃	-2	9.4	6.9	2.5	240.0	輝石安山岩	〃
46	磨石	〃 床下配石	-3	9.7	8.4	6.3	770.0	両輝石安山岩	〃
47	〃	〃	-4	12.2	8.8	5.9	840.0	〃	〃
48	粗製石皿	〃 床面	-5	29.5	35.5	8.9	13,500.0	〃	〃
49	〃	〃 床下配石	-6	35.9	30.7	11.5	19,000.0	輝石安山岩	〃
50	〃	II F-2 陥し穴状遺構埋土	55-2	17.2	10.8	9.3	9,500.0	両輝石安山岩	〃
51	磨石	II F-3 陥し穴状遺構埋土	-5	10.5	10.1	9.3	1,640.0	〃	〃
52	〃	III E-3 陥し穴状遺構埋土	-7	7.8	5.4	5.6	390.0	〃	〃
53	フレイク	III F-2 陥し穴状遺構底面	-9	2.5	5.5	1.8	23.45	樹脂岩	〃
54	〃	III E-1 配石遺構	56-4	2.9	2.0	0.6	2.85	珪質泥岩	磐石西部
55	不定形石器	I E-4 住埋土	58-1	2.0	1.6	0.5	1.05	玻璃質流紋岩	〃
56	〃	〃	-2	2.3	1.6	0.5	1.7	チャート質粘板岩	北上山地
57	Rフレ	〃	-3	2.0	2.1	0.7	2.55	玻璃質流紋岩	磐石西部
58	Uフレ	〃	-4	3.7	3.9	1.2	14.55	凝灰質珪質泥岩	〃
59	Rフレ	〃	-5	5.6	3.3	1.1	17.25	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
60	石鏃	I E-5 住埋土	60-20	2.5	1.0	0.35	0.75	チャート	北上山地

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地
61	石鏃	I E-5 住埋土	60-21	3.1	1.4	0.7	1.5	玻璃質流紋岩	磐石西部
62	石匙(横)	〃	-22	6.2	3.8	1.0	19.65	凝灰質珪質泥岩	〃
63	〃	〃	-23	3.4	6.0	0.65	10.3	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
64	石錘	〃	-24	2.2	1.7	0.3	1.15	珪質泥岩	磐石西部
65	ノッチ	〃	-25	3.65	1.9	0.4	2.65	〃	〃
66	石錘	〃	-27	4.5	1.8	1.7	11.8	凝灰質珪質泥岩	〃
67	U フレ	〃	-26	2.9	3.1	0.9	0.7	粘板岩	北上山地
68	石製品(未成品)	〃	-28	2.0	1.4	0.75	3.1	チャート質粘板岩	〃
69	粗製石皿	I E-5 住埋土	61-1	30.5	31.2	7.6	10,100.0	両輝石安山岩	奥羽山地
70	磨石	II F-6 住埋土	-8	10.1	10.1	7.1	960.0	〃	〃
71	〃	〃	-9	10.2	8.1	6.8	690.0	〃	〃
72	削器	〃	63-5	5.4	3.7	1.2	22.0	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
73	フレイク	〃	-6	4.9	3.0	0.9	13.75	珪質泥岩	〃
74	石鏃	I E 区	105-1	4.5	1.8	0.4	2.65	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
75	〃	〃	-2	3.4	1.8	0.3	1.5	硬質泥質凝灰岩	〃
76	〃	II F 区	-3	2.6	1.7	0.3	1.55	粘板岩	北上山地
77	〃	I E 区	-4	2.3	1.7	0.4	1.7	細砂質凝灰岩	磐石西南部
78	〃	II F 区	-5	5.6	2.0	0.5	5.3	チャート	北上山地
79	〃	〃	-6	2.2	0.9	0.25	0.5	〃	〃
80	〃	〃	-7	2.6	1.2	0.3	0.9	〃	〃
81	〃	I E 区	-8	2.0	0.9	0.3	0.3	玻璃質流紋岩	磐石西部
82	〃	〃	-9	1.7	0.8	0.3	0.35	粘板岩	北上山地
83	〃	II F 区	-10	2.2	0.8	0.3	0.3	玻璃質流紋岩	磐石西部
84	〃	〃	-11	2.6	1.4	0.3	0.9	チャート	北上山地
85	〃	I E 区	-12	2.5	1.6	0.3	0.95	〃	〃
86	〃	II F 区	-13	2.1	1.0	0.4	0.65	輝緑凝灰岩	〃
87	〃	不明	-14	3.0	1.7	0.6	2.9	珪質泥岩	磐石西部
88	〃	〃	-15	1.8	0.9	0.25	0.25	流紋岩	奥羽山地
89	〃	〃	-16	2.0	1.3	0.4	0.8	チャート	北上山地
90	〃	III E 区	-17	2.7	1.5	0.3	1.25	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
91	〃	I E 区	-18	2.8	1.1	0.7	1.15	流紋岩	奥羽山地
92	〃	II F 区	-19	5.0	1.7	0.4	3.15	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
93	〃	IV E 区	-20	3.3	1.4	0.5	1.75	チャート	北上山地
94	〃	III F 区	-21	3.7	1.2	0.3	1.4	珪質泥岩	磐石西部
95	〃	〃	-22	3.4	1.8	0.3	1.65	凝灰質珪質泥岩	〃
96	〃	〃	-23	2.6	1.7	0.3	1.65	粘板岩	北上山地
97	〃	〃	-24	2.5	1.8	0.4	1.7	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
98	〃	〃	-25	2.0	1.4	0.5	0.85	玻璃質流紋岩	〃
99	〃	〃	-26	2.3	1.1	0.3	0.9	輝緑凝灰岩	北上山地
100	石錘	II F 区	106-1	4.6	2.5	0.4	3.3	珪質泥岩	磐石西部
101	〃	I E 区	-2	3.1	2.4	0.7	3.1	凝灰質珪質泥岩	〃
102	〃	〃	-3	3.7	1.7	0.8	4.4	チャート	北上山地
103	〃	〃	-4	3.0	1.4	0.6	2.3	珪質泥岩	磐石西部
104	〃	〃	-5	5.8	2.3	0.7	9.25	粘板岩	北上山地
105	〃	VI D 区	-6	5.3	1.1	0.9	4.3	チャート質粘板岩	北上山地
106	〃	I E 区	-7	3.7	1.0	0.7	2.1	珪質泥岩	磐石西部
107	〃	〃	-8	2.6	1.0	0.55	1.15	〃	〃
108	〃	〃	-9	2.95	0.7	0.5	0.8	玻璃質流紋岩	〃
109	〃	〃	-10	2.4	1.2	0.8	1.85	〃	〃
110	石匙	II F 区	-11	8.5	3.3	0.7	23.45	凝灰質珪質泥岩	〃
111	〃	I E 区	-12	6.5	3.2	0.6	11.85	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
112	〃	〃	-13	6.0	2.7	0.7	12.4	珪質泥岩	磐石西部
113	〃	III E 区	-14	7.2	3.6	1.2	2.86	凝灰質珪質泥岩	〃
114	〃	II F 区	-15	8.3	3.5	0.8	18.75	硬質泥岩	〃
115	〃	〃	-16	7.2	2.3	0.6	8.6	凝灰質珪質泥岩	〃
116	〃	〃	107-1	6.5	3.2	0.8	17.7	〃	〃
117	〃	〃	-2	3.0	1.9	0.5	3.4	凝灰質珪質泥岩	〃
118	〃	I E 区	-3	3.5	2.4	0.8	8.3	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
119	〃	III F 区	-4	6.0	3.6	0.8	13.0	〃	〃
120	〃	I E 区	-5	5.5	2.6	0.5	5.35	珪質泥岩	磐下西部
121	〃	II F 区	-6	5.0	2.4	0.6	5.25	チャート	北上山地
122	〃	〃	-7	3.5	2.2	0.5	4.05	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地
123	石匙	I E区	—8	5.5	3.3	0.4	7.55	硬質泥岩	磐石西部
124	〃	I E区	107-9	4.3	2.1	0.6	3.7	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
125	〃	〃	—10	4.8	4.8	1.2	21.3	珪質泥岩	磐石西部
126	〃	不明	—11	2.3	1.5	0.4	1.35	〃	〃
127	〃	I E区	—12	3.1	2.8	0.5	2.6	凝灰質珪質泥岩	〃
128	〃	〃	—13	3.2	3.9	0.7	8.55	〃	〃
129	〃	III E区	—14	3.1	6.7	0.9	19.55	〃	〃
130	〃	I E区	—15	3.1	4.5	0.9	9.5	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
131	削器	V E区	108-1	7.7	2.2	0.8	9.4	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
132	〃	I E区	—2	5.7	2.6	0.7	7.95	〃	〃
133	〃	〃	—3	5.9	3.0	1.0	16.0	粘板岩	北上山地
134	〃	〃	—4	3.0	1.7	0.8	2.8	玻璃質流紋岩	磐石西部
135	〃	〃	—5	5.6	3.5	0.8	13.3	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
136	〃	〃	—6	4.1	2.7	1.0	9.2	玻璃質流紋岩	磐石西部
137	〃	II F区	—7	6.9	3.7	0.8	19.4	硬質泥岩	〃
138	〃	〃	—8	4.9	2.2	0.7	6.05	珪質泥岩	〃
139	〃	V E区	—9	5.9	3.1	0.6			
140	〃	II F区	—10	9.5	3.4	1.2	28.5	凝灰質粘板岩	北上山地
141	〃	III E区	—11	9.8	3.4	1.5	33.7	流紋岩	奥羽山地
142	〃	II F区	109-1	6.3	7.7	1.3	54.0	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
143	〃	I E区	—2	9.6	3.7	1.1	31.0	硬質泥岩	〃
144	〃	II F区	—3	6.0	7.0	1.5	65.0	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
145	〃	I E区	—4	6.9	5.0	0.8	20.4	〃	〃
146	〃	II F区	—5	7.6	5.9	0.9	32.9	硬質凝灰質泥岩	〃
147	〃	I E区	—6	7.9	5.3	1.2	46.35	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
148	〃	〃	—7	4.1	2.4	0.7	5.7	珪質泥岩	〃
149	〃	〃	—8	2.4	2.7	1.1	6.55	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
150	搔器	〃	110-1	4.2	3.0	1.05	13.9	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
151	〃	〃	—2	3.6	2.9	1.1	11.4	珪質泥岩	磐石西部
152	〃	II F区	—3	2.2	3.2	0.65	5.5	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
153	〃	〃	—4	3.7	4.0	1.2	18.5	珪質泥岩	磐石西部
154	〃	I E区	—5	5.7	2.7	1.2	23.65	〃	〃
155	〃	III E区	—6	5.3	1.9	0.65	8.9	珪質泥岩	〃
156	〃	I E区	—7	4.4	3.2	0.65	14.7	凝灰質珪質泥岩	〃
157	〃	II F区	—8	4.7	2.0	0.7	10.85	〃	〃
158	〃	〃	—9	2.65	1.45	0.6	3.0	チャート	北上山地
159	ノッチ	I E区	—10	3.2	2.7	0.3	2.85	珪質泥岩	磐石西部
160	〃	II F区	—11	4.1	2.5	0.7	7.7	凝灰質珪質泥岩	〃
161	〃	I E区	—12	4.2	2.6	0.6	5.2	〃	〃
162	〃	〃	—13	2.8	2.2	0.8	3.1	チャート	北上山地
163	〃	〃	—14	2.7	2.1	0.7	3.2	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
164	〃	II F区	—15	2.7	2.9	0.5	4.7	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
165	〃	I E区	—16	2.8	3.6	0.8	9.6	〃	〃
166	〃	II F区	—17	2.8	4.9	0.8	10.4	〃	〃
167	〃	I E区	111-1	5.1	5.9	1.3	26.15	チャート	北上山地
168	〃	〃	—2	3.8	3.6	1.3	15.2	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
169	石槍	II F区	—3	8.0	4.6	1.4	42.4	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
170	〃	〃	—4	92.0	3.6	1.2	31.2	硬質泥岩	磐石西部
171	籠状石器	〃	—5	5.9	2.7	0.9	13.7	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
172	〃	V E区	—6	5.3	3.4	0.6	13.55	〃	〃
173	〃	I E区	—7	4.5	2.3	0.9	8.0	〃	〃
174	不定形石器	II F区	—8	6.6	3.8	1.6	39.1	粘板岩	北上山地
175	〃	I E区	—9	5.3	2.7	1.3	25.2	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
176	〃	II F区	—10	3.3	2.0	0.7	5.8	〃	〃
177	〃	I E区	—11	3.7	3.1	1.1	10.3	〃	〃
178	〃	II F区	112-1	3.4	1.6	0.5	3.35	粘板岩	北上山地
179	〃	I E区	—2	3.0	1.7	0.5	2.7	〃	〃
180	〃	II F区	—3	2.9	2.1	0.2	1.6	珪質泥岩	磐石西部
181	〃	I E区	—4	2.8	2.4	0.5	3.85	〃	〃
182	〃	〃	—5	4.9	2.0	0.4	3.5	凝灰質珪質泥岩	〃
183	〃	〃	—6	2.8	1.8	0.4	2.1	〃	〃

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地
184	不定形石器	〃	—7	3.2	2.1	0.9	5.9	粘板岩	北上山地
185	〃	〃	—8	4.3	1.7	0.8	5.7	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
186	〃	ⅡF区	112-9	3.2	3.1	1.1	8.5	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
187	〃	〃	—10	3.8	2.5	0.8	7.0	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
188	〃	ⅠE区	—11	2.5	2.3	0.4	3.0	珪質泥岩	〃
189	〃	〃	—12	3.4	3.4	0.8	6.75	凝灰質珪質泥岩	〃
190	〃	〃	—13	3.8	2.5	0.8	6.5	チャート	北上山地
191	〃	〃	—14	1.8	3.1	0.6	2.6	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
192	〃	〃	—15	1.5	2.2	0.7	2.3	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
193	〃	〃	—16	10.2	5.3	1.3	70.0	硬質泥岩	〃
194	Rフレ	ⅡF区	113-1	5.1	2.2	0.6	5.25	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
195	〃	ⅢE区	—2	5.5	2.1	0.5	4.4	チャート	北上山地
196	〃	ⅠE区	—3	3.6	2.6	0.6	4.65	珪質泥岩	磐石西部
197	〃	〃	—4	3.6	2.6	0.6	4.85	玻璃質流紋岩	〃
198	〃	ⅢF区	—5	5.0	5.3	0.9	20.75	凝灰質珪質泥岩	〃
199	〃	ⅠE区	—6	7.7	6.4	1.1	41.15	〃	〃
200	〃	〃	—7	6.2	3.5	0.9	15.7	〃	〃
201	〃	〃	—8	4.7	3.7	0.5	9.7	珪質泥岩	〃
202	〃	ⅡF区	—9	3.5	2.6	1.1	5.8	凝灰質珪質泥岩	〃
203	〃	ⅠE区	—10	5.6	3.6	0.9	19.2	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
204	〃	〃	—11	3.1	2.6	1.0	7.6	珪質泥岩	磐石西部
205	〃	〃	—12	4.7	3.1	1.2	17.4	チャート	北上山地
206	Uフレ	〃	—13	4.8	1.7	0.2	2.1	〃	〃
207	〃	ⅡF区	—14	4.1	4.1	1.3	15.35	珪質泥岩	磐石西部
208	〃	ⅠE区	—15	5.4	2.5	0.8	7.8	凝灰質珪質泥岩	〃
209	〃	〃	114-1	6.4	4.4	0.7	18.4	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
210	〃	ⅡF区	—2	4.9	4.7	0.8	14.9	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
211	〃	ⅠE区	—3	4.8	2.3	1.1	11.5	硬質泥岩	〃
212	〃	ⅢF区	—4	3.8	5.1	0.9	18.3	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地
213	〃	〃	—5	3.4	3.4	0.6	7.0	硬質凝灰質泥岩	〃
214	〃	ⅡF区	—6	3.0	2.2	0.6	2.75	硬質泥質凝灰岩	〃
215	〃	ⅢE区	—7	3.5	2.3	0.4	2.5	凝灰質珪質泥岩	磐石西部
216	〃	ⅠE区	—8	1.5	3.3	0.5	1.8	チャート	北上山地
217	〃	〃	—9	3.3	3.1	0.5	4.8	〃	〃
218	残破	〃	—10	5.1	5.8	4.9	150.0	珪質泥岩	磐石西部
219	磨製石斧	ⅡF区	115-1	10.7	5.3	2.7	200.0	輝石斑岩	北上山地
220	〃	〃	—2	10.3	3.7	2.5	150.0	〃	〃
221	〃	ⅢE区	—3	9.3	5.0	3.3	220.0	凝灰質硬砂岩	〃
222	〃	ⅠE区	—4	6.4	3.2	1.9	600.0	チャート	〃
223	〃	〃	—5	6.5	5.4	2.5	130.0	輝石安山岩	奥羽山地
224	〃	ⅡF区	—6	3.9	3.4	2.2	40.0	輝石斑岩	北上山地
225	〃	〃	116-1	4.1	6.7	2.1	90.0	〃	〃
226	〃	ⅢE区	—2	12.6	4.0	1.8	150.0	チャート質粘板岩	〃
227	〃	ⅠE区	—3	12.7	4.7	1.2	120.0	凝灰質粘板岩	〃
228	〃	ⅡF区	—4	10.3	4.7	1.9	150.0	輝石斑岩	〃
229	半円状扁平打製石器	ⅢE区	—5	16.9	7.7	3.6	630.0	輝石安山岩	奥羽山地
230	〃	ⅠE区	—6	15.8	8.9	2.8	470.0	〃	〃
231	〃	〃	117-1	15.0	7.8	2.2	370.0	〃	〃
232	〃	〃	—2	17.0	8.2	3.3	620.0	〃	〃
233	〃	ⅢE区	—3	17.0	9.6	3.1	610.0	〃	〃
234	〃	ⅠE区	—4	16.1	8.6	3.1	480.0	〃	〃
235	〃	〃	—5	17.6	8.2	1.6	330.0	両輝石安山岩	〃
236	〃	〃	—6	16.2	8.0	3.2	370.0	〃	〃
237	〃	〃	118-1	14.4	7.0	2.3	290.0	輝石安山岩	〃
238	〃	ⅢE区	—2	15.3	8.2	2.1	340.0	両輝石安山岩	〃
239	〃	ⅠE区	—3	18.4	7.0	2.3	410.0	輝石安山岩	〃
240	〃	ⅠE区	—4	15.6	8.4	2.3	480.0	〃	〃
241	〃	〃	—5	15.5	7.5	2.3	350.0	〃	〃
242	〃	〃	—6	15.8	8.1	2.5	520.0	〃	〃
243	〃	〃	—7	9.8	5.1	1.1	90.0	〃	〃
244	〃	〃	—8	13.5	6.5	2.2	270.0	〃	〃
245	〃	〃	119-1	16.1	8.9	4.0	850.0	両輝石安山岩	〃

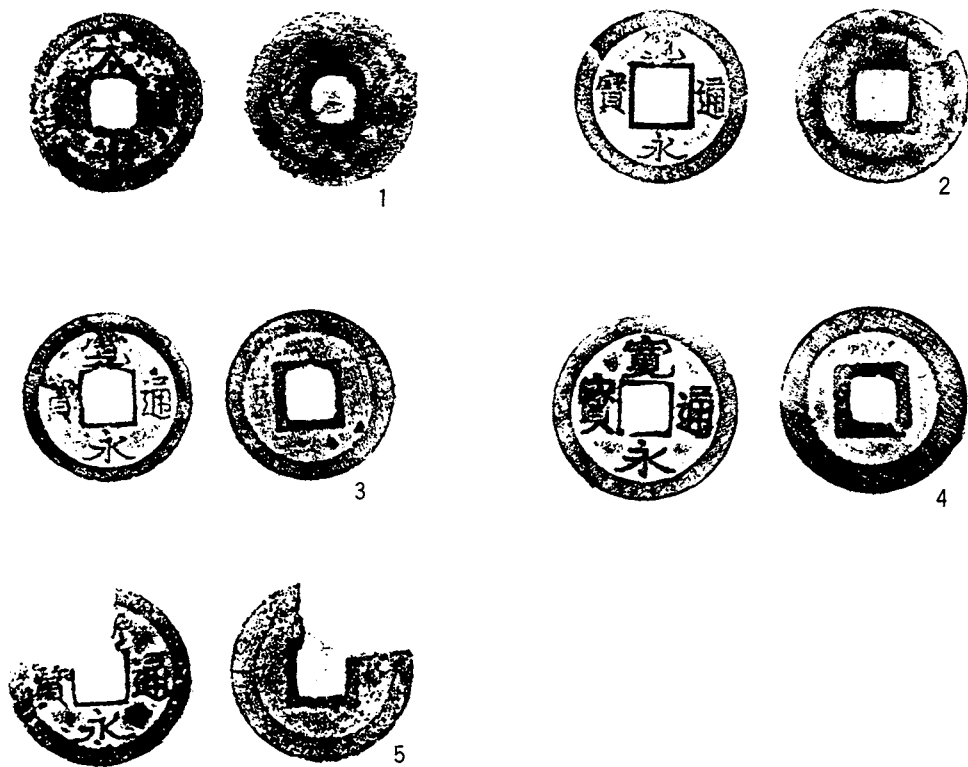
番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地
246	半円状扁平打製石器	〃	—2	16.7	9.6	3.0	600.0	輝石安山岩	〃
247	〃	〃	—3	15.1	8.0	3.0	590.0	両輝石安山岩	〃
248	〃	〃	—4	14.1	7.1	3.7	480.0	輝石安山岩	〃
249	〃	I E区	119—5	14.6	9.9	3.6	760.0	両輝石安山岩	奥羽山地
250	〃	III E区	—6	20.0	10.1	3.8	1,050.0	〃	〃
251	〃	I E区	—7	12.0	8.2	2.3	350.0	輝石安山岩	〃
252	〃	〃	120—1	12.2	8.3	2.4	300.0	〃	〃
253	〃	〃	—2	7.5	9.7	3.3	450.0	〃	〃
254	〃	〃	—3	10.6	8.2	1.8	250.0	〃	〃
255	〃	〃	—4	11.6	10.0	1.8	310.0	両輝石安山岩	〃
256	〃	〃	—5	13.4	8.5	2.1	300.0	輝石安山岩	〃
257	〃	II F区	—6	8.9	10.1	1.9	240.0	不明	不明
258	〃	III E区	—7	7.9	8.0	2.1	180.0	輝石安山岩	奥羽山地
259	〃	I E区	—8	10.3	10.0	2.9	300.0	両輝石安山岩	〃
260	〃	〃	121—1	10.2	8.4	3.8	450.0	輝石安山岩	〃
261	〃	III D区	—2	7.8	7.9	2.5	170.0	〃	〃
262	〃	〃	—3	6.9	8.1	3.1	220.0	〃	〃
263	〃	I E区	—4	6.2	5.6	2.8	100.0	輝石安山岩	〃
264	〃	〃	—5	16.0	10.9	3.4	520.0	両輝石安山岩	〃
265	〃	〃	—6	14.4	6.8	2.5	220.0	輝石安山岩	〃
266	〃	〃	—7	18.1	8.1	3.6	600.0	〃	〃
267	〃	〃	—8	14.2	6.2	2.0	220.0	〃	〃
268	〃	〃	122—1	10.6	8.5	1.9	290.0	〃	〃
269	〃	〃	—2	10.8	9.0	2.2	230.0	両輝石安山岩	〃
270	〃	〃	—3	13.0	6.6	4.3	420.0	輝石安山岩	〃
271	〃	〃	—4	10.9	7.2	1.9	150.0	〃	奥羽山地
272	〃	〃	—5	17.9	8.3	2.6	450.0	両輝石安山岩	〃
273	〃	〃	—6	16.5	10.7	1.9	450.0	〃	〃
274	〃	〃	—7	15.7	8.9	2.6	370.0	〃	〃
275	〃	〃	—8	15.9	7.4	2.8	400.0	不明	不明
276	〃	〃	123—1	9.6	8.9	2.2	460.0	輝石安山岩	奥羽山地
277	〃	〃	—2	18.9	10.1	2.4	510.0	両輝石安山岩	〃
278	〃	〃	—3	14.1	7.2	3.2	540.0	硬砂岩	北上山地
279	〃	〃	—4	11.3	7.8	2.5	250.0	両輝石安山岩	奥羽山地
280	〃	〃	—5	11.6	6.5	1.8	190.0	〃	〃
281	〃	〃	—6	18.1	13.2	4.1	1,220.0	〃	〃
282	〃	〃	—7	16.6	9.0	4.0	800.0	輝石安山岩	〃
283	〃	〃	124—1	16.3	9.9	3.6	810.0	両輝石安山岩	〃
284	〃	〃	—2	16.1	10.6	3.2	810.0	〃	〃
285	〃	〃	—3	20.0	8.6	2.8	800.0	輝石安山岩	〃
286	〃	〃	—4	15.3	11.7	2.7	600.0	両輝石安山岩	〃
287	磨石	〃	—5	8.0	7.5	5.4	500.0	〃	〃
288	〃	II F区	125—1	12.6	9.6	7.6	1,290.0	硬砂岩	北上山地
289	〃	I E区	—2	11.1	9.9	5.1	830.0	輝石安山岩	奥羽山地
290	〃	〃	—3	9.0	10.5	6.5	830.0	両輝石安山岩	〃
291	〃	II F区	—4	10.3	9.4	7.6	1,100.0	輝石安山岩	〃
292	〃	〃	—5	9.5	8.2	5.7	620.0	両輝石安山岩	〃
293	〃	I E区	—6	7.7	7.4	5.7	500.0	輝石安山岩	〃
294	〃	II F区	—7	9.6	7.8	6.3	690.0	両輝石安山岩	〃
295	〃	I E区	—8	8.3	7.1	5.7	490.0	輝石安山岩	〃
296	〃	〃	—9	12.1	7.7	4.1	490.0	〃	〃
297	〃	〃	—10	8.0	7.5	5.4	500.0	両輝石安山岩	〃
298	〃	〃	—11	7.5	7.3	5.3	420.0	輝石安山岩	〃
299	〃	II F区	—12	9.0	7.8	4.4	510.0	〃	〃
300	〃	I E区	—13	10.4	7.2	4.3	500.0	輝石安山岩	〃
301	〃	II F区	—14	9.1	10.1	6.0	650.0	〃	〃
302	〃	〃	126—1	13.5	8.6	3.9	650.0	両輝石安山岩	〃
303	〃	I E区	—2	13.6	6.1	4.0	490.0	〃	〃
304	〃	II F区	—3	10.8	4.7	3.4	280.0	〃	〃
305	〃	I E区	—4	9.8	4.6	4.1	300.0	輝石安山岩	〃
306	〃	〃	—5	9.4	4.1	3.3	200.0	両輝石安山岩	〃
307	〃	〃	—6	17.4	5.2	4.8	780.0	〃	〃

番号	器 種	出 土 地 点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産 地
308	磨石	〃	—7	17.8	7.1	4.6	890.0	〃	〃
309	〃	II F区	—8	15.2	6.7	3.4	540.0	輝石安山岩	〃
310	〃	I E区	—9	12.6	8.0	4.0	630.0	両輝石安山岩	〃
311	〃	〃	—10	14.6	7.7	6.0	890.0	〃	〃
312	〃	I E区	127—1	14.2	5.4	3.3	390.0	両輝石安山岩	奥羽山地
313	〃	〃	—2	14.3	7.0	3.7	600.0	〃	〃
314	〃	〃	—3	15.8	5.6	5.0	710.0	〃	〃
315	〃	〃	—4	10.0	7.0	2.9	320.0	輝石安山岩	〃
316	〃	〃	—5	7.5	6.0	4.4	250.0	両輝石安山岩	〃
317	敲石	〃	—6	11.1	8.2	4.8	610.0	〃	〃
318	〃	〃	—7	9.1	12.6	5.2	800.0	輝石安山岩	〃
319	〃	〃	—8	10.4	6.9	3.7	360.0	〃	〃
320	〃	〃	—9	8.4	9.4	5.0	510.0	両輝石安山岩	〃
321	〃	II F区	—10	7.0	6.1	4.3	250.0	〃	〃
322	〃	I E区	—11	9.4	11.8	4.7	730.0	〃	〃
323	凹石	〃	128—1	13.0	7.5	4.0	550.0	〃	〃
324	〃	〃	—2	10.6	9.0	5.3	700.0	〃	〃
325	〃	II F区	—3	10.6	7.8	5.9	750.0	〃	〃
326	〃	I E区	—4	11.6	8.5	4.2	570.0	〃	〃
327	〃	〃	—5	9.7	7.1	3.7	320.0	輝石安山岩	〃
328	〃	〃	—6	10.0	6.8	3.9	300.0	両輝石安山岩	〃
329	〃	〃	—7	8.8	7.3	3.7	340.0	輝石安山岩	〃
330	〃	〃	—8	8.1	7.1	3.3	300.0	両輝石安山岩	〃
331	〃	I E区	—9	6.4	5.9	3.4	200.0	〃	〃
332	〃	〃	—10	6.4	6.3	3.6	200.0	〃	〃
333	粗製石皿	II F区	—11	17.5	9.3	3.9	970.0	〃	〃
334	〃	I E区	—12	17.9	9.4	3.4	730.0	〃	〃
335	〃	II F区	—13	11.1	13.2	7.5	1,450.0	石英安山岩	〃
336	〃	I E区	129—1	16.0	11.1	4.9	630.0	細粒砂岩	〃
337	〃	II F区	—2	15.9	11.2	6.3	1,900.0	両輝石安山岩	〃
338	〃	〃	—3	16.5	12.0	3.1	850.0	輝石安山岩	〃
339	〃	I E区	—4	19.8	14.0	5.0	2,210.0	両輝石安山岩	〃
340	〃	II F区	—5	11.9	16.2	6.7	1,390.0	輝石安山岩	〃
341	〃	I E区	—6	13.7	14.2	4.8	1,110.0	両輝石安山岩	〃
342	〃	〃	—7	39.2	19.3	6.4	6,500.0	玻璃質流紋岩	〃
343	〃	II F区	130—1	42.8	29.7	11.3	19,000.0	両輝石安山岩	〃
344	〃	〃	—2	32.5	16.5	9.7	6,000.0	〃	〃
345	〃	〃	—3	27.4	34.3	7.3	10,000.0	〃	〃
346	〃	〃	—4	22.2	27.7	5.2	4,100.0	輝石安山岩	〃
347	〃	I E区	—5	24.3	28.5	7.2	7,000.0	〃	〃
348	〃	II F区	—6	28.5	33.1	8.0	9,600.0	両輝石安山岩	〃
349	〃	〃	—7	22.5	31.5	8.4	7,000.0	〃	〃
350	〃	〃	—8	23.6	15.8	6.1	3,100.0	〃	〃
351	〃	〃	131—1	22.0	7.2	6.7	1,500.0	〃	〃
352	〃	I E区	—2	15.9	16.8	8.5	3,000.0	〃	〃
353	〃	〃	—3	17.1	14.6	4.9	2,000.0	輝石安山岩	〃
354	〃	〃	—4	18.7	23.9	7.4	3,900.0	流紋岩質中粒凝灰岩	〃
355	〃	II F区	—5	16.5	16.7	10.0	2,500.0	アルコース砂岩	〃
356	〃	I E区	—6	15.2	15.7	4.4	2,100.0	両輝石安山岩	〃
357	石鏃	〃	—7	15.5	7.6	3.2	280.0	〃	〃
358	有孔石玉	I E区	132—1	1.4	1.4	0.8	1.35	淡綠色珪質凝灰岩	掣石西南部
359	甕石製浮子	III F区	—2	10.5	7.9	2.3	29.6	甕石	安比川流域(段丘堆積物)
360	石刀	I E区	—3	23.8	8.3	1.1	270.0	粘板岩	北上山地
361	粗製石棒	II F区	—4	24.4	6.4	4.8	1,090.0	流紋岩	奥羽山地
362	〃	〃	—5	12.4	5.8	4.3	460.0	〃	〃
363	〃	I E区	—6	9.6	5.2	3.6	250.0	〃	〃
364	〃	II F区	—7	42.6	6.5	4.8	1,800.0	〃	〃
365	アメリカ式石鏃	I E区	133—1	2.8	1.0	0.3	0.7	粘板岩	北上山地
366	大型給刀磨製石斧	〃	—2	11.2	4.2	3.8	310.0	輝石安山岩	〃
367	〃	〃	—3	9.5	5.0	3.6	260.0	輝石安山岩	奥羽山地

(4) 古銭

9点を掲載した。銅銭と鉄銭があるが、鉄銭は錆化が著しい。(第134図・写真図版133)

第133図1は太平通寶である。北宋銭で、初鑄年は太宗元年(976年)である。2～5は寛永通寶である。5は左上半部を欠損し不明であるが、他のものにはいずれも背銘はない。



第134図 遺構外出土遺物

III ま と め

1. 遺構

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居址17棟、住居址状遺構1棟、ピット15基、陥し穴状遺構26基、埋設土器1基、配石遺構1基、焼土遺構3基、貯水槽跡及び暗渠1基及び2条、柱穴群1である。以下、時代毎に簡単に整理をしまとめとしたい。

(1) 縄文時代竪穴住居址

〈占地・時期〉 縄文時代の竪穴住居址は8棟である。これらはIE区とII F区に集中して検出された。IE区は、遺跡の載る丘陵を深く刻む沢の西岸の平坦面で、IE-1、IE-2、IE-3の3棟が検出された。II F区は、南西部にひかえる尾根から沢頭に形成された埋積谷に続く北東斜面で、傾斜が緩くなる現標高244m～242m付近にII F-1、II F-2、II F-3、II F-4、II F-5住居址の5棟が集中して検出された。このうち4棟では2～4回の重複(建て替え)が観察された。検出された8棟の住居址は、現在でも豊富な水量を有する水を囲むような在り方を示すようにも思われる。

住居址毎に出土遺物等から時期の検討を行う。IE-1住居址は床面からの遺物を欠き、詳細は不明であるが、住居址の形態は出入口状の張り出しをもつ所謂柄鏡状を呈することから、後期中葉頃に位置づけられるものと考えられる。IE-2住居址は床面出土の粗製土器からの推定であるが、後期中葉～後葉に位置づけられよう。IE-3住居址もまた、床面出土の粗製土器や埋土下位から出土した土器片(第III群b₂類)から後期中葉に位置づけられる。II F-1住居址は床面から出土した壺形土器(第III群c類)から後期後葉の住居址と考えられる。

II F-2～5住居址には重複(建て替え)がみられ、時期の細分の可能性があるが、先行する住居址の時期を判断できる遺物は検出されていない。したがって時期は、最終のプランに伴う住居址のものである。II F-2住居址は床面出土の壺形土器(第III群c類)から後期後葉に位置づけられる。II F-3住居址は床面から遺物はない。埋土から香炉形土器と鉢形土器(第III群c類)のほぼ完成品が出土しており、これらから推定して後期後葉の住居址と考えられる。しかし、同様に埋土から弥生土器も出土しており、弥生時代に位置づけられる可能性を残す。II F-4住居址は柱穴状ピットの埋土下部から出土した土器(第I群d類)から前期中葉の住居址であろう。II F-5住居址は埋土下位から出土した小型深鉢(第I群f類)から前期末葉に位置づけられると考えられる。

検出された8棟の住居址は2棟が前期、6棟が後期となるが、遺構外からはこれらに比定さ

れる以外の前期、後期の土器群、また、中期や晩期の土器も多量に出土しており、調査区外にはこれらの時期の住居址も存在する可能性が強い。

〈規模・形状〉 検出された8棟の住居址のうち、他の遺構との重複、後世の削平及び流失等により、完掘できたものはIE-1住居址、II F-4住居址の2棟だけである。したがって6棟の規模及び形状は残存部分からの推定によるものである。

IE-1住居址は前述の通り、出入口状の張り出しをもつ。周辺地域で同様な形態をもつ住居址には、安代町赤坂田II遺跡の例がある。規模は3.5×4.5mで、今回検出された8棟の中では小規模な住居址といえよう。II F-4住居址は斜面上方が膨らむ卵形を呈する住居址である。規模は5×4.4mと中規模の住居址となろう。

IE-2住居址は削平が著しく、僅かに残る南東壁からの推定である。径3.6m前後の円形を呈するものと考えられ、単独の住居址としては最小の規模となる。IE-3住居址は平安時代のIE-5住居址に中央部を大きく切られている。残存部からの推定では径6m前後の円形を呈するものと考えられ、今回検出された住居址の中では大規模な分類に属する。II F-4住居址以外でII F区から検出された住居址はいずれも斜面下位にあたる部分を流失している。II F-1住居址は径5m前後の不整な円形を呈するものと考えられ、中規模の住居址に属する。II F-2住居址は7.3×6mの東西にやや長い楕円形を呈するものと考えられる。規模はII F-3住居址に次いで2番目の大きさである。II F-3住居址は径7m前後の円形、または、東西にやや長い楕円形を呈し、今回の調査で検出された住居址中最大の規模をもつ。II F-5住居址も円形または楕円形を呈すると考えられる。規模は6.8m前後で、大規模な住居址に属す。

卵形や楕円形が想定されるものもあるが、ほとんど住居址が円形を基調としているようである。また、規模には時期的な差は認められない。

〈埋土〉 II F-1住居址、II F-3住居址の埋土最上位には十和田a降下火山灰と考えられる灰白色火山灰の埋積が観察された。また、斜面のため検出面での層位関係は明確ではなかったが、II F-4、II F-5住居址の埋土内には中礫浮石のレンズ状堆積は認められなかった。

〈炉〉 いずれも地床炉で、石囲い炉等をもつものはない。II F-4住居址では浅いピットを伴うが、他は床面を直接利用しているようである。位置はII F-1住居址、IE-3住居址、II F-5住居址では中央部から逸れるが、他は床面の中央に位置する。重複により詳細は定かではないが、IE-3住居址の炉は、住居址の規模や炉内の焼土の発達状況から副次的なものかもしれない。

〈柱穴〉 配置が明確に把握されたものは、II F-4住居址とII F-5住居址だけである。共に4本柱で、II F-4住居址は縦長、II F-5住居址は横長の長方形の配置となる。IE-3住居址、II F-3住居址は主柱穴を構成すると考えられるピットが2～3個検出されたが、対応す

る部分が他の遺構と重複するため配置を明確に把握できなかつた。これらも4本柱となる可能性が強い。また、II F-3住居址は壁際に連続する小ピットが配される。同様の壁柱穴は、同住居址内で重複し先行する2棟にも認められる。この他の住居址からも柱穴状の小ピットが検出されているが配置は明確なものではない。

〈重複・建て替え〉 II F区から検出された4棟の住居址から同位置における2～4棟の重複が認められた。II F-2住居址では貼り床の下から先行する住居址の炉が検出された。当住居址は同位置で平安時代の住居址とも重複し、床面に攪乱が多く、先行する住居址のプランや規模は不明である。また、遺物もなく時期差についても確認はできなかつた。II F-3住居址は、貼り床の下から柱穴状の小ピットが検出され、先行する住居址の存在が確認された。小ピットの配置から他に2棟の重複が推定される。規模は内側のものが径3m前後、中間のものが径4.6m前後と考えられる、プランは最終プランと相似形となり、柱穴の配置も同様な形態を示すことから同時期での建て替えと考えられる。II F-4住居址は床面から多数の壁溝及び柱穴が検出された。壁溝と柱穴の配置から先行する住居址数を2棟としたが、より多くなる可能性をもつ。規模は内側のものから、3.1×3.6m、3.6×4.1mとなる。これらのプランも最終プランと相似形になるものと考えられる。炉の位置などから住居址も同一時期での建て替えの可能性が強い。II F-5住居址は、内側に巡る壁溝と貼り床下位から検出された配石から重複が確認された。先行する棟数及び規模は壁溝からの推定である。3棟が想定され、プランはいずれも円形または楕円形が考えられる。規模は内側のものから順に径4.6m、5m、4.4m前後と推定される。形状は最終形に似るものの、これらの壁溝がやや内側に寄ることや、中間の住居址の規模が大きくなることから、同時期内での建て替えの他に時期差をもつ住居址の重複も考えられる。

〈小結〉 前述の如く、これら8棟の住居址は豊富な湧水を囲むように立地している。特にII F区では同一時期における重複もみられ、集落としては比較的長期間に渡る営みがあったものと考えられる。また、今回の調査では検出されなかつたが、縄文時代の他の時期の住居址の存在も予想され、集落としては、南西部の尾根及び埋積谷に続く緩斜面一帯に広がるものと考えられる。

(2) 弥生時代の住居址

弥生時代の住居址はIE-4住居址の1棟のみである。北側の大部分は調査区外にかかっており、詳細は不明である。残存部からの推定で径6m前後の円形を呈するものと考えられる。時期は埋土や周辺部からの出土遺物から弥生時代中期に比定されよう。

IE区の他にII F区からと弥生土器が多く出土しており、今回の調査では検出されなかつたものの、当遺跡内には弥生時代の集落の存在する可能性がある。なお、周辺部の遺跡では、浄

法寺町五庵Ⅲ遺跡、安代町水神遺跡で同時期の竪穴住居址が検出されているほか、東北自動車道に関連して調査された遺跡のほとんどから弥生土器が出土している。

(3) 古代の竪穴住居址

〈占地・時期〉 古代の竪穴住居址・住居址状遺構は8棟である。出土した土師器から推定して、いずれも平安時代の遺構と考えられる。調査区別ではIE区で1棟(IE-5住居址)、II F区で5棟(II F-6-9住居址、II F-10住居址状遺構)、III E区、V F区で1棟(III E-1住居址、V F-1住居址)である。III E区は沢の東岸の平坦面で、V F区は隣接する桂平遺跡に続く尾根の頂部となっている。II F区に検出された6棟のうち、II F-6、II F-8、II F-9住居址の3棟はそれぞれ重複し、さらに縄文時代の住居址と重複している。しかし、古代の住居址相互の新旧関係は不明である。また、II F-6住居址は検出された柱穴の焼土から同位置での2棟の重複の可能性が高い。II F-7住居址とII F-10住居址状遺構は、前述の3棟より斜面のやや上位に立地し、住居址は住居址状遺構に切られている。

これら住居址の占地をみると、V F-1住居址を除く7棟は縄文時代の住居址と同様に沢を囲む配置が考えられる。V F-1住居址については、桂平遺跡で検出された17棟との関連がより強いものと思われる。

〈規模・形状〉 検出された8棟のうち、完掘できたものはIE-5住居址、III E-1住居址の2棟だけである。7棟は他の遺構との重複や流失のため、残存部からの推定によった。

IE-5住居址は3.6×3.7mの方形を呈し、小規模な住居址に属する。II F-6住居址は一辺5m前後の方形と考えられる。II F-7住居址は一辺4m前後の規模が推定される。II F-8住居址は7.5×2.7m前後の長方形を呈すると考えられ、他の住居址とは様相を異にする。II F-9住居址は重複や攪乱のため残存する部分が少なく、方形を基調とするものと考えられる以外詳細は不明である。III E-1住居址は5.3×5mの南北にやや長い方形を呈する。IV F-1住居址は東西5m、南北5～5.3mの台形を呈する。

規模は4m前後のもの2棟、5m前後のもの3棟、7mを越えるもの1棟となる。形状では、台形や長・短軸の差があまりない長方形を呈するものもあるが、II F-8住居址を除いて、ほぼ正方形を基調としている。II F-8住居址は横長の長方形を呈し、他の7棟とは全く形態を異にしている。

〈埋土〉 II F-9住居址を除いて、埋土中には十和田a降下火山灰の堆積がみられた。堆積状況にはいくつかのタイプがある。IE-5、V F-1住居址では埋土の中位にみられる褐色土中にブロックとして含まれる。これら2棟には十和田a降下火山灰を含む層理の上に白頭山火山灰が同様な堆積状況で観察された。II F-8・III E-1住居址では先の2例と同様に埋土中位

の層理にブロックとして堆積するが、前者よりは堆積位置がやや低く、このため壁際の床面にも火山灰の分布がみられる。また、これらには白頭山火山灰は堆積しない。II F-6住居址では埋土最下位及び床面一円にブロックとして分布する。II F-7住居址、II F-10住居址状遺構では埋土の上位にブロックとして含まれている。

〈カマド〉 8棟のうち、明確にカマドが検出されたものはI E-5、I E-1・V F-1住居址の3棟だけである。II F-6住居址では焼けた礫を伴う2基の焼土が検出され、一応カマドの施設が想定されるが、残存状況はきわめて悪い。II F-9住居址でも焼土が検出されているが、他に施設は認められず、カマドであるかどうかは不明である。II F-7・II F-8住居址でも焼土が検出されているが、位置的にはみてカマドの想定は難しく、地床炉である可能性が高い。

I E-5住居址は南東壁の南寄りに設けられている。煙道部はトンネル式で、燃烧部から1.3 mの長さをもつ。焼出し部は円筒状のピットで、煙道部から緩く傾斜して立ち上がる。III E-1住居址は南壁の東寄りにカマドをもつ。煙道部・焼出し部は短く、壁際を斜めに削り立ち上がる。V F-1住居址は西壁の中央部にカマドが設けられている。煙道部・焼出し部はIII E-1住居址よりさらに短い形態をもつ。以上のように、これら3棟のカマドの位置や形態の相互関係には同一性は認められない。

〈地床炉〉 II F-7・II F-8住居址の2棟から検出されている。II F-7住居址は床面のほぼ中央部に1基検出された。II F-8住居址では中軸線に沿って2基が検出された。いずれも他の施設の痕跡は認められない。

〈柱穴〉 II F-6・II F-8・III E-1・V F-1住居址から検出された。このうちIII E-1・V F-1住居址は四角形の配置である。III E-1住居址では南壁際に、V F-1住居址では東壁際に2本が寄る配置となっている。II F-6住居址は攪乱や重複のため、明確な柱穴配置はわからなかった。II F-8住居址では長軸方向の壁に沿うように8本が配されている。

これらの住居址の規模はいずれも5 m以上で、5 m未満のI E-1・II F-7・II F-9住居址からは柱穴は検出されていない。

〈貼り床〉 II F-6・III E-1・V F-1住居址の8棟で貼り床が観察された。II F-6住居址では十和田a降下火山灰を含む黒褐色土で施されていた。しかし、掘り方はII F-3住居址の埋土中にあるため明確に検出できなかった。III E-1・V F-1住居址では褐色土で貼り床が施され、この下位から大小の凹凸からなる掘り方が検出された。

〈主軸方向〉 カマドが付設されている壁とこれに向かい合う壁にはほぼ直交するように引いた線のカマド側の方向を主軸方向とした。数値は東西南北のうち近い方向からの角度である。カマドをもたないものや明瞭ではないII F区の住居址については、残存状況の比較的良好な斜

面上位の壁と直交する線の南からの角度で表わした。以下に各住居址の数値を示す。

I E-5 住居址…S-38°-E II F-6 住居址…S-37°-W II F-7 住居址…S-38°-W
II F-8 住居址…S-37°-E II F-9 住居址…S-14°-W I E-1 住居址…S-9°-W
V F-1 住居址…W-2°-N

以上から、II F 区で検出された4棟のうち、II F-9 住居址を除く3棟はほぼ同一方向を示す。しかし、いずれも北東斜面に立地することから、占地場所との関わりが強いものと考えられる。カマドを有する住居址では、I E-5 住居址がII F 区の3棟と建物方向をほぼ同一とする。また、III E-1 住居址とV F-1 住居址の建物方向が一致しているが、3棟相互の主軸方向には同一性はみられない。

〈遺物〉 出土した遺物には土師器、須恵器・鉄器・鉄滓・鞆の羽口などがあるが、いずれの住居址でも出土量は少ない。他に縄文土器片・弥生土器片・石器類も出土しているが、遺構に直接伴う遺物ではないためここではふれないこととする。以下に住居址別に出土遺物の概要を記す。

I E-5 住居址 土器は全てロクロ不使用の土師器である。手捏ね土器が1点あるが、他は甕形土器である。全て破損品で、全体の形状を知り得るものはないが、体部に膨らみをもつタイプの甕と、膨らみをもたないタイプの甕があり、破片の数量では後者が多い。口縁部は外反するものと短かく外傾するものがある。底部では体部に膨らみを有するタイプのもの1点を除き、外方への張り出しをもたない。器面調整では、ほとんどのものが体部外面が粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。体部に膨らみを有するタイプの甕に外面がヘラミガキ調整されるものが1点みられる、この他に刀剣の足金具と考えられる鉄製品が出土しているが、刀身など他の部分は発見されなかった。

II F-6 住居址 土師器の甕形土器が数点出土しただけである。いずれも体部には膨らみはもたず、外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。

II F-7 住居址 土師器の甕形土器片数点と鞆の羽口片が出土した。甕は全て体部片で、外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。鞆の羽口と少破片のため全体の形状などは不明である。器面は粗くナデ調整が施されている。

II F-8 住居址 土師器の甕形土器片と、鞆の羽口、刀子、鉄滓が出土している。甕の口縁部は1点を除き短かく外傾あるいは屈曲する。底部は外方への張り出しをもたない。器面調整は外面がヘラケズリ、内面はナデである。鞆の羽口はII F-7 住居址と同様小破片のため詳細は不明であるが、一部にガラス質の付着がみられる。刀子は完形品で一部に木質が残存する。鉄滓は鞆の羽口と同一ピットから出土したもので、総量は約250gである。

III E-1 住居址 土師器の甕形土器が出土した。完形の小型甕が1点あるが、他は破損品であ

る。口縁部は短く外傾・外反するものと、体部からそのまま続くものがある。底部には張り出しをもたない。調整は外面が粗いヘラケズリ、内面はナデである。

V F-1 住居址 須恵器と「赤焼き土器」及び土師器が出土している。須恵器は小形の壺形土器で、全体がロクロ成形されている。「赤焼き土器」は坏でロクロ成形され、底部下端から底部にかけて、手持ちヘラケズリによる再調整が施される以外は器面調整をもたない。土師器には坏形土器と甕形土器がある。坏形土器はロクロ成形され、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。甕形土器にはロクロ成形されたものとロクロ成形されないものがある。数量では前者が多い。ロクロ成形されたものでも体部下半には、外面にはヘラケズリ、内面にはナデ調整が施されている。ロクロ不使用のものは口縁部が外反し、底部には張り出しをもつ。外面は粗いヘラケズリ、内面はナデ調整されている。

II F-10 住居址状遺構 土師器の甕形土器片が1点出土した。体部からそのまま続く口縁部片で、外面は粗いヘラケズリ、内面にはナデ調整が施されている。

これらの資料から、II F-1 住居址では土師器の他に須恵器や「赤焼き土器」の出土がみられ、器種や成形方法で坏の存在やロクロを使用するなど、他とは異なる様相を示している。また、地床炉をもつII F-7・II F-8 住居址からは韃の羽口片や鉄滓が出土しており、遺構の性格を表わすものかもしれない。

これらの遺構の時期は、出土した土師器の特徴からいずれも平安時代の住居址と考えられる。

〈小結〉 8 棟の住居址の様相について述べたが、占地の面では縄文時代の住居址と同様、湧水との関わりが窺われるものの、集落としては隣接する桂平遺跡をも含めて検討する必要があるだろう。

地床炉をもつII F-7・II F-8 住居址からは、量は少ないものの韃の羽口片や鉄滓が出土しており、鍛冶工房址の性格が強いと考えられる。特にII F-8 住居址は長方形を呈し、他の住居址とは形態を異にしており、興味深い資料と言えよう。なお県内では、安代町有矢野遺跡、滝沢村湯舟沢遺跡で同様な形態をもつ遺構が検出されている。

これら8 棟の住居址は、埋土中の十和田 a 降下火山灰の堆積状況の相異や白頭山火山灰の有無、主軸方向の違いから時期差が考えられる。しかし、出土遺物は各住居址とも少なく、比較し得る資料に乏しい。また、周辺の遺跡と含めた検討も必要であり、今回の報告ではこれ以上の言及をさげたい。

(4) 中世の住居址

III E-1 住居址の1 棟があげられる。長方形を呈し、北西部分に出入口状の張り出しをもつ。時期決定資料を欠くが、形態の特徴が二戸市長瀬 C 遺跡・一戸町一戸域跡で検出されているも

のに類似し、中世の住居址とした。周辺の遺跡では、安代町関沢口遺跡・浄法寺町五庵Ⅱ遺跡、同町飛鳥台地Ⅰ遺跡などに類例がある。

(5) 柱穴群

柱穴状ピット32個からなる柱穴群である。これらのうち、12個のピットを繋ぐ桁行3間、梁行3間の建物跡が想定される。この遺構も時期を決定する資料を欠くが、桁行方向がⅢE-2住居址とほぼ一致することから、この住居址との関連が予想される。

(6) ピット

検出されたピットは15基である。時期別には縄文時代8基、古代4基、近世3基である。縄文時代のピットは形状から皿形のもの3基、フラスコ形のもの5基に分けられる。ⅢE-2ピットを除き出土遺物はなく時期の詳細は不明であるが、ⅡF-2・3・4ピットは縄文時代後期中葉期の住居址を切っている。なお、ⅢE-2ピットは出土した粗製土器から縄文時代後期の遺構と考えられる。

古代のピットは、埋土の状況や出土遺物からいずれも平安時代の遺構と考えられる。ⅠE-1ピットは埋土に十和田a降下火山灰と白頭山火山灰を含む。また、底面には現地性焼土を伴い、所謂焼土ピットの形態を示す。詳細は不明であるが、隣接して検出されたⅠE-5住居址との関連が強いものと思われる。ⅡF-1ピットは不整な楕円形を示す。ⅡF-7住居址・ⅡF-10住居址状遺構と重複し、前者を切り、後者に切られている。底面からは多量の炭化植物遺体が出土した。当遺構もⅡF区で検出されている他の住居址と関連するものであろう。ⅢE-3ピットは隅丸方形を基調とした皿状のピットで、埋土中に十和田a降下火山灰を含む。当ピットも同地区で検出されたⅢE-1住居址と関連するものと考えられる。以上の3基のピットは近くに平安時代の住居址が検出されており、これらの住居址に伴う貯蔵穴的性をもつ可能性が強い。

近世のピット3基はⅠE区に集中して検出された。ⅠE-2・3ピットは同地区で検出されている貯水槽跡に伴う暗渠を切っている。いずれも円筒状のピットで、内側に木製の容器を埋設する形態をもつ。貯水槽も同様な構造をもつことから、関係があるとも思われるが、性格は不明である。

(7) 陥し穴状遺構

26基が検出された。調査区一帯に分布するが、沢西岸の小さな平場となるⅠE区からは検出されていない。これらは、平面形から溝状のもの24基、小判状のもの2基に分けられる。検出数の多い溝状のものは、長軸方向や遺構間の距離から規則的な配置が窺われる。ⅡF区・ⅢF

区では、II F-2・3、II F-5・6、II F-7・III F-1、III F-2・3、III F-4・5 陥し穴状遺構が2基1対の構成単位をなす。さらにII F-4～7、III F-1～5 陥し穴状遺構9基は北東斜面から埋積谷の底面にかけてほぼ同一線上に配置されている。この他にIV E-1・2、V F-1・2 陥し穴状遺構がそれぞれ対になる。また、遺構間の距離はやや離れるものの、III E-1・III F-6、III D-1・III E-5、III E-3・III E-4 陥し穴状遺構は長軸方向がほぼ一致する。

出土遺物等から時期を知り得る資料は少ないが、重複関係ではII F-2 陥し穴状遺構は、縄文時代前期(第I群f類土器出土)の住居址に切られている。また、埋積谷の埋土が厚く堆積し、基本層序の各層が明確に把握されたII F・III F区に立地するもののうち、II F-1～3、III F-6 陥し穴状遺構を除く8基は、中礫浮石層下位の第VI層面で検出されている。したがって、これらに関連するII F-2～7、III F-1～5 陥し穴状遺構は縄文前期の遺構であろう。なお、III F-6 陥し穴状遺構、V F-1・V F-1・2 陥し穴状遺構は第IV層が検出面となっている。この他のものは、地表面と検出面間の土層が薄く、耕作による攪乱などもあって、層位が把握できなかった。

小判状の陥し穴状遺構2基は双方とも底面形は長方形で、本来長方形を呈していた可能性が強い。II F-8 陥し穴状遺構の底面にはピットが3個検出されたが、いずれも浅く逆茂木痕であるかどうか不明である。

検出面はIV層面で、II F-8 陥し穴状遺構の埋土には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積する。時期が判断できる遺物はないが、隣接する縄文時代後期葉期のII F-1 住居址(第III群c類土器出土)の埋土にも同様な堆積状況を示す十和田a降下火山灰が観察され、時期的にも近い遺構と思われる。

(8) 焼土遺構

7基が検出された。いずれも遺物はなく。時期の講細は不明であるが、焼土の形成面から縄文時代の遺構であろう。

(9) 配石遺構・埋設土器

それぞれ1基ずつ検出された。検出面や出土土器から同一の遺構と考えられる。配石の下位には現地性焼土を伴い、住居址の可能性も残す。時期は縄文時代前期末期(第I群f類土器)の遺構である。

(10) 貯水槽跡及び暗渠

内側に大型の桶状の容器を埋設した円筒状のピットと礫を組み合わせで構築された2条の暗渠からなる遺構である。暗渠のうち1条は湧水方向に延びており、給水溝と考えられ、他の1条は排水溝と考えられる。周辺に建物を想定できる遺構は検出されなかったが、構築方法が丁寧であることから屋内への給水施設であった可能性もある。貯水槽内から方形の孔をもつ鉄銭が出土しており、近世の遺構と考えられる。

(11) 遺物包含層

I E区では北東部分を中心として遺物包含層が形成されている。包含層はI区の大部分を占めていたものと考えられるが、西側の部分は後世の削平を受けており、北側は調査区域外にかかることもあって、調査できた面積は約300m²である。出土遺物は、縄文土器・陶磁器・石製品及び金属器の出土量は少なく、縄文土器と石器が卓越する。土器は41×31×19cmのコンテナで28箱、石器は約220点が出土した。

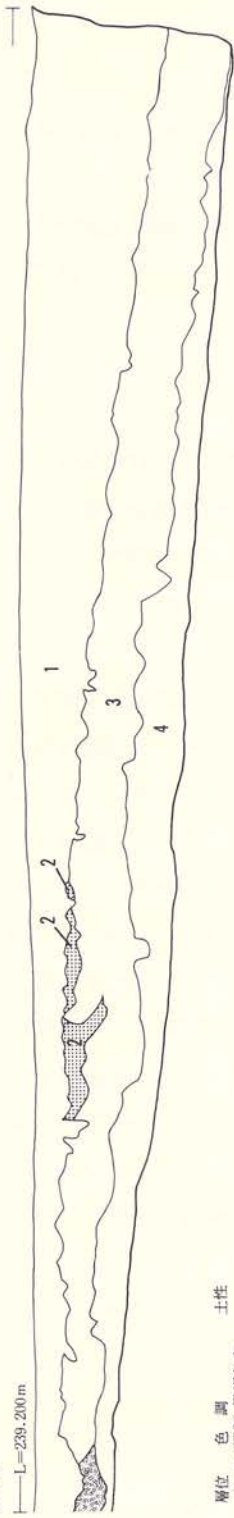
この包含層の特徴は遺物量の多さとともに、他の地点とは層相を異にする土層（第1図第3層）の堆積がみられ、この層が包含層の主体となっていることである。この多量な遺物は投棄等により累積されたものか、または他から流入による二次堆積かを明らかにするとともに、第3層の形成時期を明らかにしたいと考えた。そのためには、全遺物の出土地点の平面位置と高さを記録するとともに、層位的記録もするべきであるが、時間的制約からこの方法はとれなかった。したがって、S-135～S-150の15m間をE-29～E-30の1m幅に限定して同方法で調査した。なお、調査地点における土層中には、攪乱部に堆積した十和田a降下火山灰層（第2層）がみられるが、全体にわたる堆積ではない。また、本包含層を切る形で構築された遺構の埋土内から白頭山火山灰が検出されたが、精査を進めるうえで明瞭に土層を区分する指標とはなりえなかった。当地区は南西方向が高く、北東方向に下がる地形である。したがって1m幅ではあってもE-29とE-30のライン上では若干の土層の高低差があり、E-29ライン側に近い遺物の土層内の相対的レベルはやや高くなる。しかし、ここでは全体的傾向の把握を主眼としたため、その差は無視した。

以上の方法で調査し、全点の1,112点を土層図上に位置を落としたものが第2図である。この図から以下が指摘できる。

- ①遺物が包含される土層は1～3層である。
- ②特に第1層と第3層の境に遺物が集中する傾向がある。
- ③第4層からは遺物は出土していない。

第1図

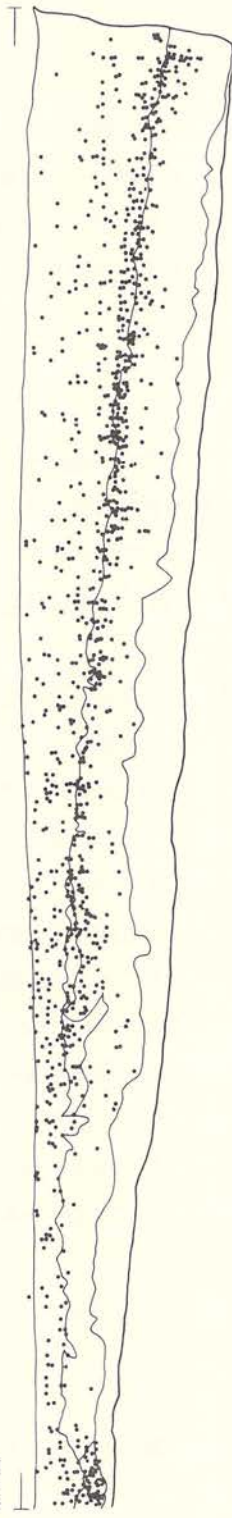
L=239.200m



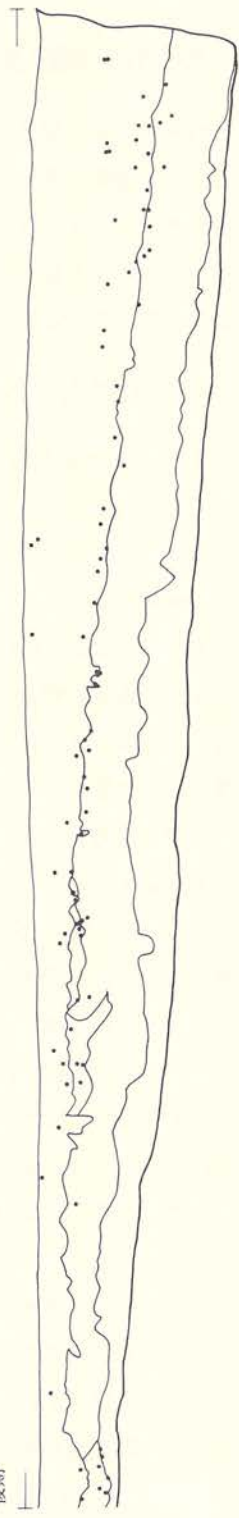
層位 色 調 土性

- 1 7.5R% 黒褐色土
- 2 2.5Y% 灰黄色土(十和田a降下火山灰)
含、小礫。
- 3 10Y% にふい 黄褐色土
- 4 7.5R% 褐色土

第2図

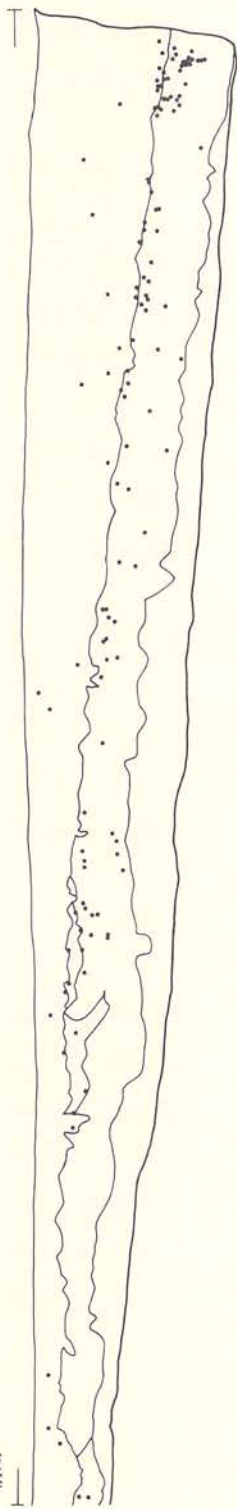


第3図
後期



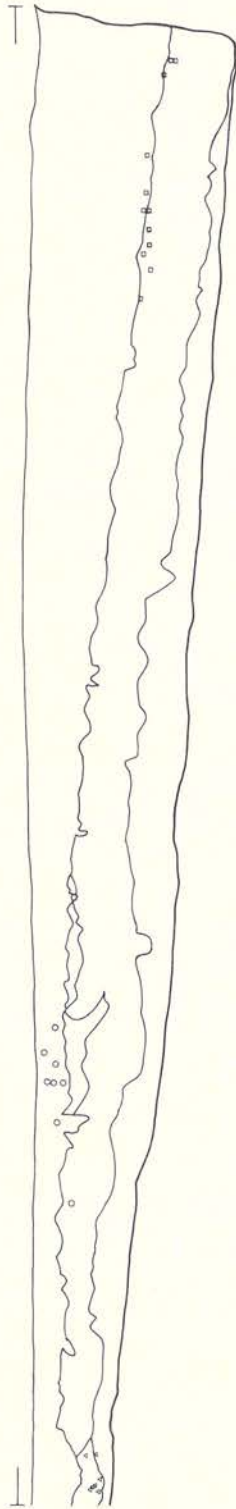
第135図 I E区遺物包含層遺物出土状況(1)

第4図
前期



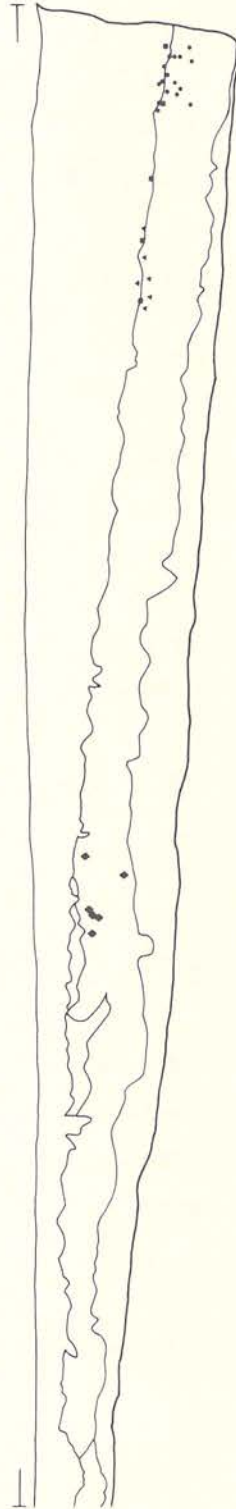
第5図

- △ 後期区画沈線文
- 後期網目状縹糸文
- 後期羽状縹文



第6図

- ▲ 前期円筒下層c式
- 前期円筒下層b~c式
- 前期円筒下層a式
- ◆ 前期尖底土器



第136図 I E区遺物包含層遺物出土状況(2)

次に、全点の時期区分を試みた。しかし、小破片が多く明確に時期判定ができないものが多い。その中で文様や胎土から時期区分が可能な土器を抽出した。結果を次表に示す。なお、一括土器はまとめて1点としているため、点数と個体数は一致しない。

時期及び種別	前期	中期	後期	晩期	弥生	土師	石器	礫	合計
点数	127	3	82	16	11	27	31	18	315
%	40.3	1	26	5.1	3.5	8.6	9.8	5.1	100

この結果、縄文時代前期と後期の土器が大半を占めていることから、この二時期の遺物のみを取り上げ、第2図と同様の方法で図化した。(第3・4図) これにより以下のことが指摘できる。

- ①前期の土器群も後期の土器群も、層位的に明確な一線を画する出土状況とは言い難い。
- ②しかし、概ね前期の土器群は第3層に、後期のそれらは第1～3層上位面に集中する。
- ③後期の土器群中、図の左端部はレベル的には第3層であるが、この部分は攪乱を受けており、レベル上の斉一性からは除外してよい。

以上のことは、本包含層全体でも同様の傾向を示していた。したがって、少なくとも前期の土器群と後期の土器群が混然となって斜面上位から流入し、当地域に堆積したものではないことが分かる。

次に、前期の土器群と後期の土器群に限って同一個体（完全に接合したもの）を取り上げて図化したものが第5・6図である。この図から前・後期の別なく、同一個体は層位的にも極めて近い範囲に分布している。

以上のことから、本包含層は斜面上位側の他の地域において形成されたものが流入した二次堆積ではなく、当地域において形成されたものといえよう。

第3層は、層位的には基本層序第IV層（中振浮石相当層）及び第V層（南部浮石相当層）の位置に堆積する。この層は全体に混濁しており、明確に区分されないものの、部分的には上位の黄褐色の強い層と下位のやや黒味強い層に細分される。これら上下2層は、基本層序における第IV・V層に相当する可能性が極めて強い。しかし、層全体の混濁が著しいことや、層内の遺物包含の状況から、純然たる自然堆積ではなく、第IV・V層を起原とする二次堆積層であろう。第3層を2分し、基本層序第IV・V層と対比した場合、土器出土状況に大きな層位的矛盾はない。形成時期についても、これらの層の堆積年代の直後とと考えてよいであろう。なお、第4層は層位及び層相が類似することから、基本層序第VIII層に当たると考えられる。

2. 遺物

出土遺物には土器・土製品・石器・石製品・鉄器・陶磁器がある。ここでは出土量の多い土器及び石器について若干のまとめを行いたい。

(1) 土器

土器には縄文土器・弥生土器・土師器がある。これらは遺構外出土のものを基準として、時代別にⅠ～Ⅶ群に大別した。さらに従来の編年観を基に各群を細分した。細分の基準は下記のとおりである。

第Ⅰ群土器 縄文時代前期の土器

- a 類…型式名の明らかではない土器群、さらに1～7に細分した。
- b 類…大木2式に比定される土器群
- c 類…大木3式に比定される土器群
- d 類…円筒下層 b 式に比定される土器群
- e 類…円筒下層 c 式に比定される土器群
- f 類…円筒下層 d 式に比定される土器群

第Ⅱ群土器 縄文時代中期の土器

- a 類…大木9式に比定される土器群
- b 類…大木10式に比定される土器群
- c 類…a・b 類以外の粗製土器

第Ⅲ群土器 縄文時代後期の土器

- a 類…十腰内Ⅰ式に比定される土器群
- b 類…加曾利 B₁式・十腰内Ⅲ式に比定される土器群、前者を1類、後者を2類とした。
- c 類…十腰内Ⅳ・Ⅴ式に比定される土器群
- d 類…無文土器

第Ⅳ群土器 縄文時代晩期の土器

- a 類…大洞 B 式に比定される土器群
- b 類…大洞 c₁式に比定される土器群
- c 類…大洞 A 式に比定される土器群
- d 類…大洞 A'式に比定される土器群

第Ⅴ群土器 縄文時代後期・晩期の粗製土器

第Ⅵ群土器 弥生土器

第Ⅶ群土器 土師器

出土量は第Ⅰ群土器と第Ⅲ群土器が多く、調査区別では遺物包含層を有するⅠE区からのものが卓越し、住居址の密集しているⅡF区がこれに次ぐ。

本項では、比較的出土量の多い第Ⅰ群土器について整理し、まとめとしたい。a₁類としたものは、器表に捺糸文をもち、裏面に条痕文が施された土器である。捺糸文は一部斜行する部分も

あるが、ほとんどの部分では縦走する。裏面の条痕は口縁部では横方向、体部では縦方向に施されている。胎土には多量の繊維を含むが焼成は良く、非常に硬い。a₃類としたものは胎土・焼成とも a₁に酷似するが、裏面に条痕をもたない点で異なる。また捺糸文は斜行するものが多い。底部形態は尖底となる。a₃類も縦走する捺糸文が施文されるが、胎土に含まれる繊維の量は少なく、焼成も a_{1,2}類に比べて悪い。県内で同様の特徴をもつ土器が出土している遺跡では、軽米町吠屋敷 Ib 遺跡、二戸市沢内 B 遺跡、上里遺跡、中曽根 II 遺跡がある。このうち吠屋敷 Ib 遺跡では、裏面に条痕文を有するが、他の遺跡では条痕文をもたない。沢内 B 遺跡出土のものでは、捺糸文が斜行し、焼成の良い第 I 群 B 種 2a 類と捺糸文が縦走し、焼成の良くない 2b 類が報告されている。これらの特徴は本遺跡の a₂・a₃類と共通するものと考えられる。また、上里遺跡・中曽根 II 遺跡出土の土器には、口縁部に 2～3 段の絡条体圧痕文を有するものがある。本遺跡の a₂類には口唇部直下に、体部に施されている原体を圧痕しているものが 1 点あり、これらとの関連が考えられる。胎土に繊維を含み、表面に捺糸文・裏面に条痕文を有する土器には、青森県深郷田遺跡を標式地とする深郷田式土器があり、上記の遺跡からの土器群もこれに近いものと報告されている。〔佐々木嘉直 (1983)・高橋与右ヱ門 (1983)〕また、高橋は絡条体圧痕文を有する土器群は圧痕をもたない土器より後出するのではないと指摘している。以上から本遺跡の a₁～a₃類もこれら 4 遺跡の土器に近いものであろう。また、各類でみられる特徴の相異は時期差も考えられるが、ここでは同型式内のパリエーションとして捉えたい。

a₄類としたものは、表面に横方向の捺糸文が施され、裏面に条痕文を有する土器である。底部を欠き形態は不明である。胎土には繊維及び砂を含むが、a_{1,2}類と比べて繊維の量は少ない。捺糸文は条間が広く、割合浅い施文である。熊谷常正氏によれば、前記の中曽根 II 遺跡 155 号址の中掬浮石層下位から出土した尖底土器に類似するものではないかとの御教授を得た。また、同氏は、同遺跡 150 号址の中掬浮石層下位から出土した大木 2b 式の土器に注目し、これらの土器と関連性が強いことを述べている。〔熊谷 (1983)〕

a₅類としたものは、口縁部及び体部に綾絡文が施される土器群である。底部を欠くが、尖底を呈してたと思われるものもある。胎土には繊維を含むが、量は多くはない。熊谷氏によれば、地文に捺糸文と縄文の相異はあるが、形態的には中曽根 II 遺跡遺構外出土の尖底土器に類似するとのことである。興野 (1968) によれば、体部に横位の綾絡文を施す技法は大木 2b 式に見られるとしている。胎土・焼成などは後述する大木 2 式に類似するものもあり、これらに近い土器群である可能性をもつ。また、口縁部に数条の綾絡文をもつ土器としては円筒下層 a 式があり、当類としたものの中にはこれに類する土器も含まれるかもしれない。

a₆類とした土器は、平底・平縁を呈し、口縁部に太い不整綾絡文が施されるもので、体部には結束されない複節の羽状縄文をもつ。胎土には繊維を含むが、その量は極めて少ない。口縁部

形態は円筒下層 a 式に類似するが、胎土に繊維が少ない点や全体から受ける感じは、当遺跡で大木 2 式として分類した土器群に極めて近い。また、羽状縄文の境目には細い綾絡文が巡り、この点でも大木 2 式の影響の強い土器ではないかと思われる。

b 類は大木 2 式の特徴を有する土器群で、胎土に含まれる繊維の量は極僅かである。文様形態には S 字状連鎖沈文・網目状捺糸文・横位の綾絡文・貼付け文などがある。

c 類としたものは、口縁部に刻み目のある隆帯をもち、体部に複節の羽状縄文が施された土器である。文様の特徴は b 類と同じであるが、胎土には繊維を全く含まない。また、口縁部に施される隆帯の特徴などから大木 3 式とした。しかし、地文に羽状縄文が施文されている点で問題は残す。

d~f 類には円筒下層式 b~d を当てた。これらの土器は胎土に繊維を含むが、f 類ではその量は減少する。また、裏面には成形後、化粧粘土が貼られ、丁寧に研磨されるものが多い。d 類は全て、口縁部文様帯に結束された羽状縄文をもつ。ほとんどのものが、体部に同じ文様が施文されるが、体部に縦方向の捺糸文をもつものが 1 点ある。口縁部と体部の区画には、捺糸圧痕・原体圧痕・絡条体圧痕などがあり、これらを組み合せたものや、頂部に爪形が連続する低い隆帯を伴うものもある。口縁部形態には平縁と緩い山形があり、量的には平縁のものがやや多く出土している。

e 類ではほとんどのものが山形口縁を呈する。口縁部文様帯は捺糸・原体・絡条体の圧痕文で施され、山形に沿うように三角形や菱形を基調とした文様を構成している。区画は a 類のそれと同様である。体部文様がわかるものは全て結束羽状縄文である。

f 類では口縁部文様帯が狭くなる。文様は e 類と同様圧痕によって施され、これに刺突が加わるものもある。区画には頂部に刺突を有する低い隆帯によるものがあるほか、区画帯をもたないものもある。また口唇部に縄文を施文するものが多い。体部の文様には結束羽状縄文・多軸絡条体回転文がみられ、この他に木目状捺糸文がある。なお、III E-1 埋設土器は、口縁部文様帯が体部に施文されるものと同じで、形態的には d 類に類するが、隣接する III E-1 配石遺構との検出状況や口縁部文様帯が挟いこと、さらに胎土や形状から当類とした。また、口縁部に張り付け文をもち、地文に縦方向の無節羽状縄文が施される土器は当類より 1 型式新しい円筒上層 a 式に含まれる可能性がある。

以上簡単に I 群土器の様相を述べたが、他の資料と十分な比較を行わず、疎放な分類となってしまうとは否めない。一応ここでは a₁₋₃ 類を深郷田式に近い土器群、a₄₋₆ 類は大木 2 式の影響が強い土器群と考えたい。

今回の調査で得られた土器類は、円筒下層式土器の成立及び以降の大木式土器との対応を考える上で一つの資料となろう。

(2) 石器・石製品

遺構内外から出土した石器・石製品の総数は1,500点を越える。このうち、遺構内出土のものは全て掲載したが、遺構外から出土したものについては使用痕が認められない剥片及び破損の著しい礫石器を除いた。掲載数は剥片石器192点、礫石器164点、石製品11点の計367点である。

器種別の点数と属する形態内における割合は次のとおりである。剥片石器では石鏃28点（15%）、石錐12点（6%）、石匙27点（14%）、削器26点（11%）、搔器12点（6%）、抉入石器12点（6%）、石槍2点（1%）、篋状石器4点（2%）、不定形石器22点（11%）、細部加工剥片16点（8%）、使用痕のある剥片22点（11%）となる。この他に残核1点と遺構内から出土した剥片6点がある。礫石器では半円状扁平打製石器66点（40%）、磨石38点（23%）、敲石6点（4%）、凹石10点（6%）、粗製石皿31点（19%）となる。この他の礫石器では石鏃1点がある。また、弥生時代の石器としては大型蛤刃石斧2点とアメリカ式石鏃1点が出土した。石製品には石刀・石棒・浮石製の浮子・有孔小玉などがある。特殊な石製品としては縄文時代前期の住居址から出土した浮石製の石製品があるが性格は不明である。

遺構内出土の剥片石器では、縄文時代前期の住居址からのものには丁寧な調整加工が施された定形石器が多い。礫石器では半円状扁平打製石器が全体の40%を占める。遺構との関係では、縄文時代前期の住居址から集中して出土し、後期の住居址からの出土は無い。遺構外出土のものについても、同時期の土器の出土量は多く、これに対応する出土状況を示すものであろう。

〈参考・引用文献〉

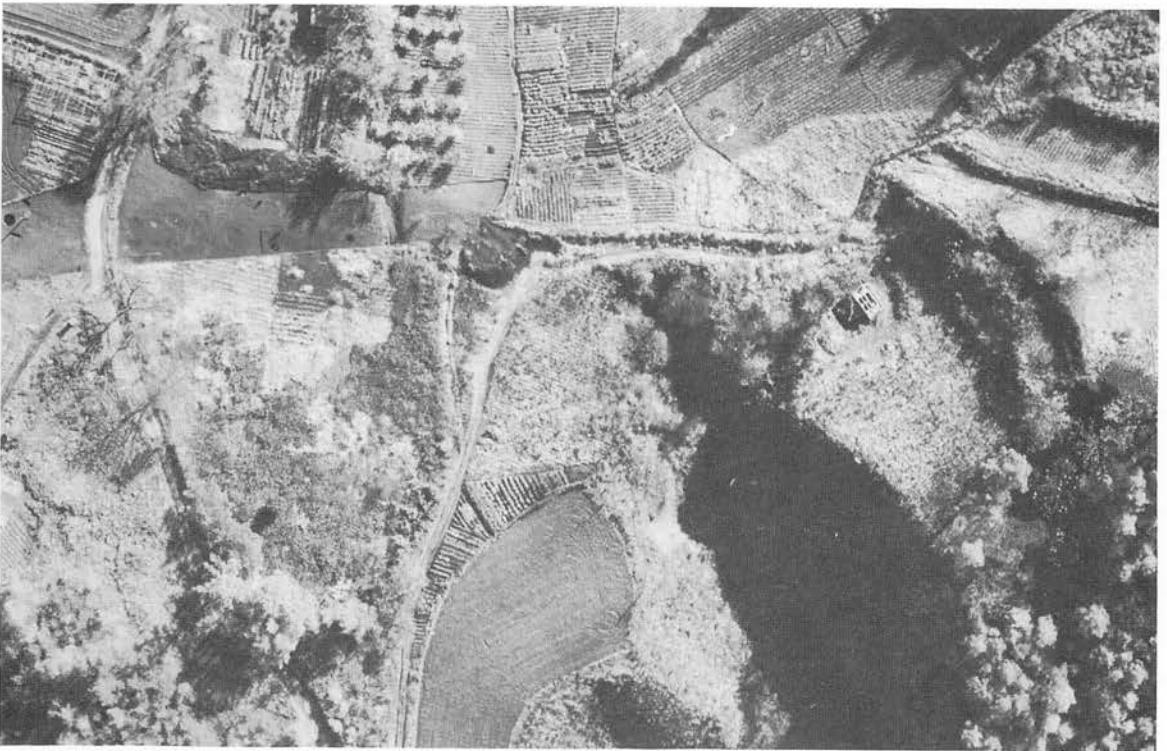
- (1) 近藤宗光・佐々木清文（1982）：扇畑II遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第39集
- (2) 近藤宗光・佐々木清文（1983）：赤坂田I・II遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第58集
- (3) 種市 進他（1982）：有矢野遺跡・上の山X遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第38集
- (4) 光井文行他（1983）：上の山VII遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第60集
- (5) 高橋与右衛門他（1978）：二戸市沢内B遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第7集
- (6) 高橋与右衛門他（1983）：上里遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集
- (7) 佐々木嘉直他（1983）：吹屋敷Ib遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第63集
- (8) 本沢慎輔他（1981）：二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書、二戸市長瀬C遺跡・長瀬D遺跡、岩手県埋文センター文化財調査報告書第22集
- (9) 三浦謙一他（1984）：長者屋敷遺跡発掘調査報告書（III）、岩手県埋文センター文化財調査報告書第77集

- (10) 三浦謙一・玉川英喜(1985)：関沢口遺跡発掘調査報告書、岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第95集
- (11) 石川長喜・渡辺洋一(1986)：五庵I遺跡発掘調査報告書、岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第97集
- (12) 大原一則・中村良一(1986)：五庵II遺跡発掘調査報告書、岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第94集
- (13) 田鎖寿夫・岩瀬久(1986)：大日向II遺跡発掘調査報告書、岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第100集
- (14) 平井進他(1986)：桂平遺跡発掘調査報告書、岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第110集
- (15) 関豊(1981)：中曽根II遺跡発掘調査報告書、二戸市教育委員会
- (16) 関豊(1983)：駒焼場遺跡緊急発掘調査報告書、二戸市教育委員会
- (17) 高田和徳(1981)：一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I、一戸町教育委員会
- (18) 高田和徳(1982)：一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書II、一戸町教育委員会
- (19) 高田和徳(1983)：一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書III、一戸町教育委員会
- (20) 高田和徳(1983)：一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書IV、一戸町教育委員会
- (21) 高田和徳(1984)：一戸城跡、昭和58年度発掘調査概報、一戸町教育委員会
- (22) 高田和徳(1985)：一戸城跡、昭和59年度発掘調査概報、一戸町教育委員会
- (23) 桐生正一他(1986)：湯舟沢遺跡、滝沢村教育委員会・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (24) 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正(1982)：岩手の土器、岩手県立博物館
- (25) 名久井文明(1971)：青森県芦野遺跡の土器群について、考古学雑誌43-1
- (26) 熊谷常正(1983)：岩手県における縄文時代前期土器群の成立、岩手県立博物館研究報告1号
- (27) 佐藤達夫他(1965)：深郷田遺跡発掘概報 中里町誌
- (28) 佐藤達夫他(1957)：青森県上北群早稲田貝塚、考古学雑誌43-1
- (29) 三宅徹也(1982)：円筒土器、縄文文化の研究3、雄山閣
- (30) 興野義一(1967)：大木式土器理解のために(I)、考古学ジャーナル13
- (31) 興野義一(1968)：大木式土器理解のために(II)、考古学ジャーナル16
- (32) 興野義一(1968)：大木式土器理解のために(III)、考古学ジャーナル18
- (33) 村越潔(1974)：円筒土器文化、考古学選書10、雄山閣
- (34) 奥山潤(1968)：福館遺跡、一大館市の縄文前期前半一、北海道考古学5号
- (35) 山内清男(1979)：日本先史土器の縄紋、先史考古学会

写 真 图 版

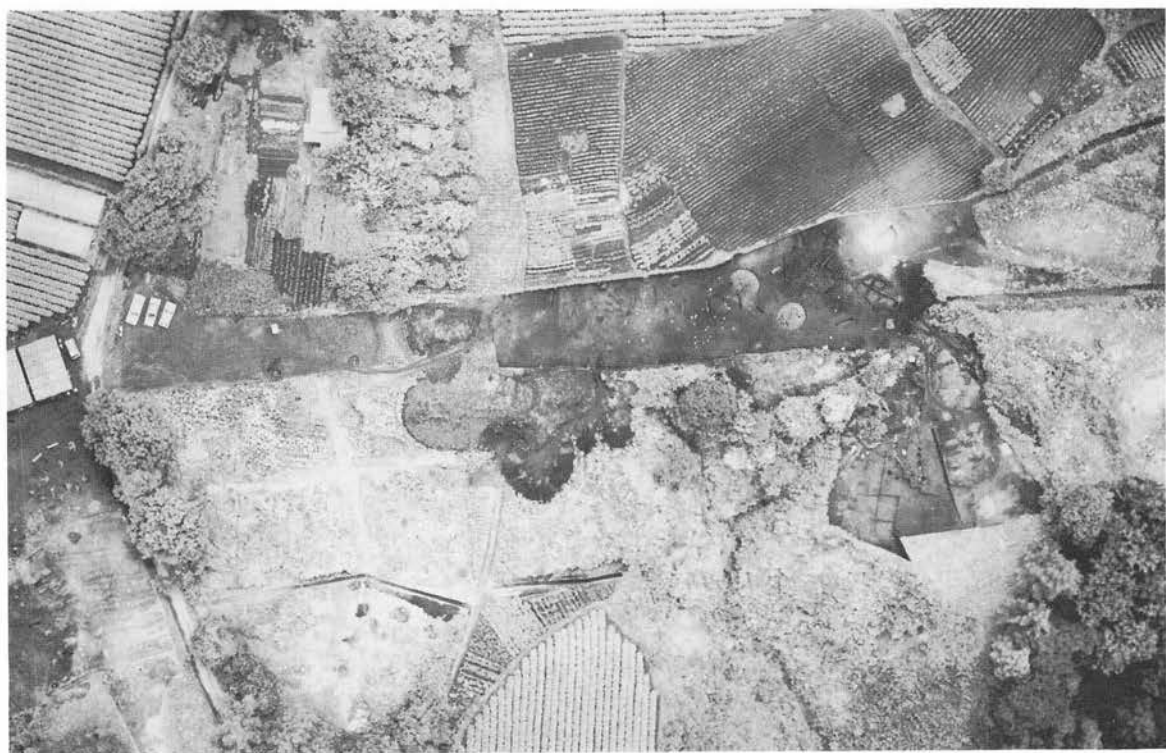


空中写真(1)遺跡遠影



空中写真(2)59年度調査区

写真図版1 空中写真



空中写真(3)60年度調査区



空中写真(4)60年度調査区
写真図版2 空中写真

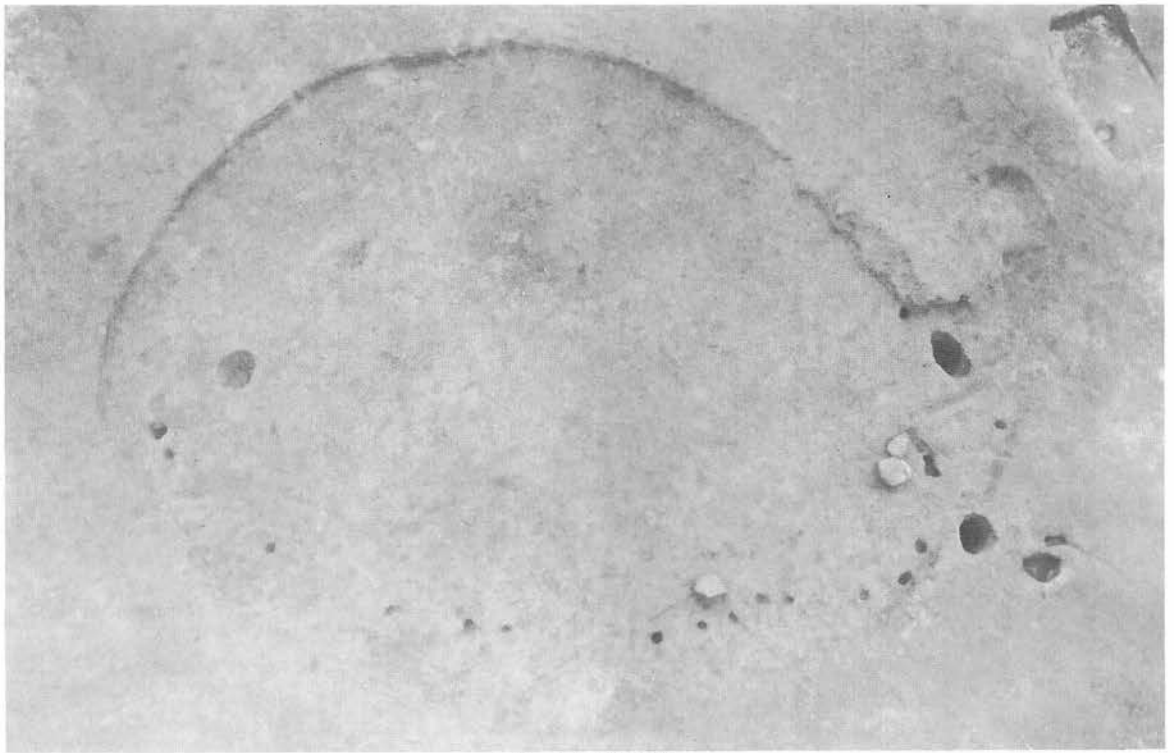


II F区深掘土层断面

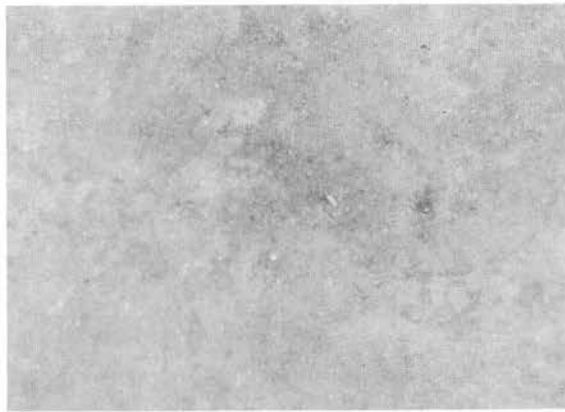
III F区深掘土层断面



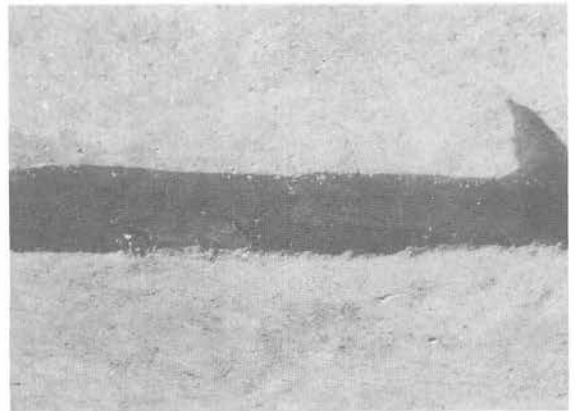
写真图版3 深掘土层断面



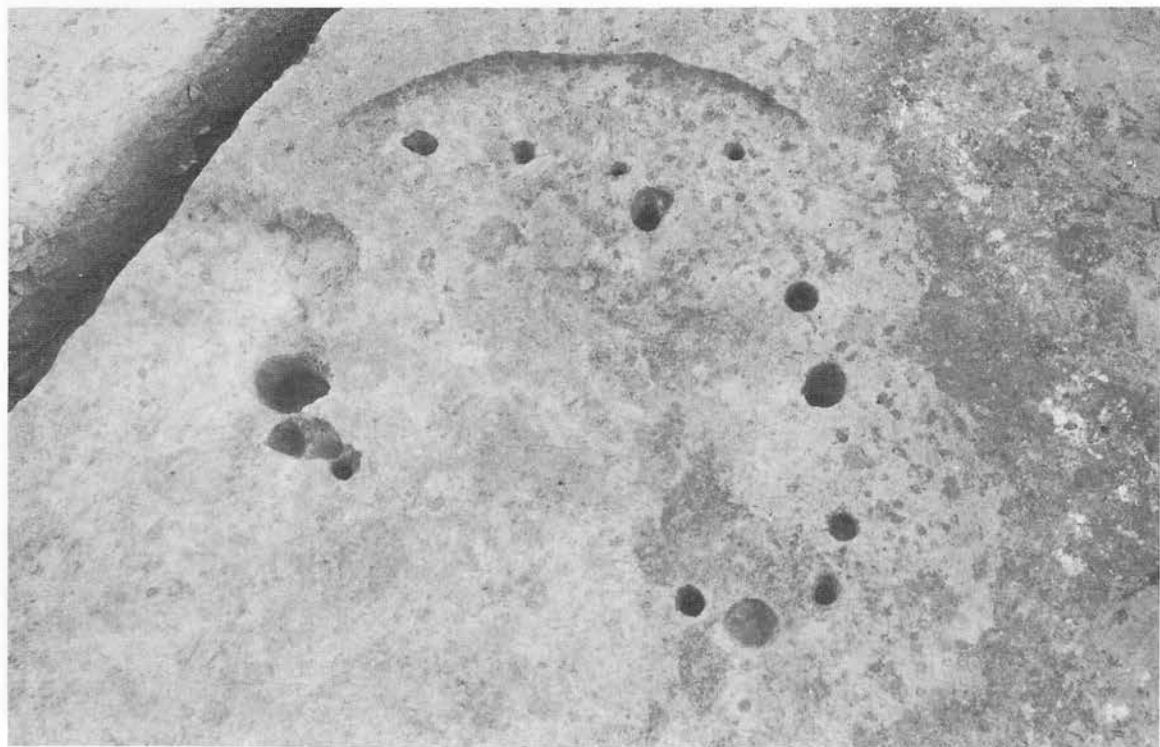
I E - 1 住居址全景



地床炉平面



地床炉断面



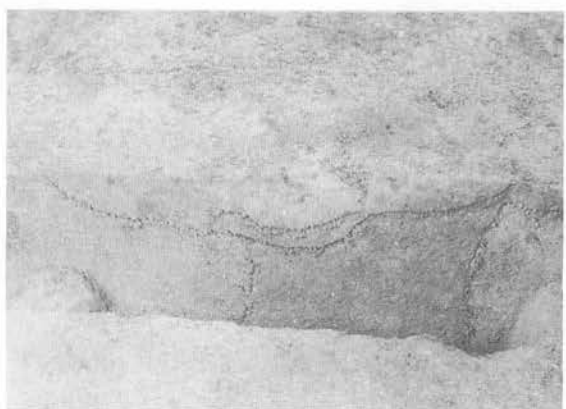
I E - 2 住居址全景



埋土土層断面



地床炉平面



地床炉断面

写真图版 5 I E - 2 住居址



I E-3 住居址全景



II F-1 住居址全景

写真図版6 I E-3・II F-1 住居址



Ⅱ F-1 住居址埋土土層断面(東から)



埋土土層断面(南から)



地床炉平面

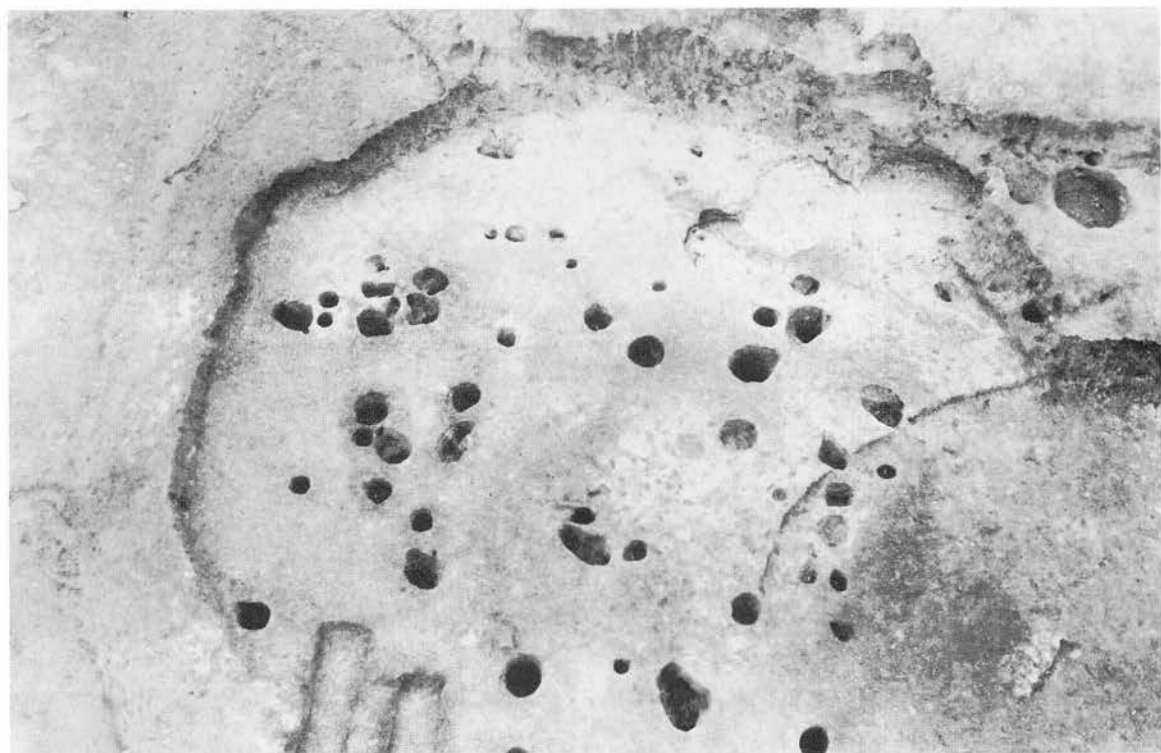


地床炉断面

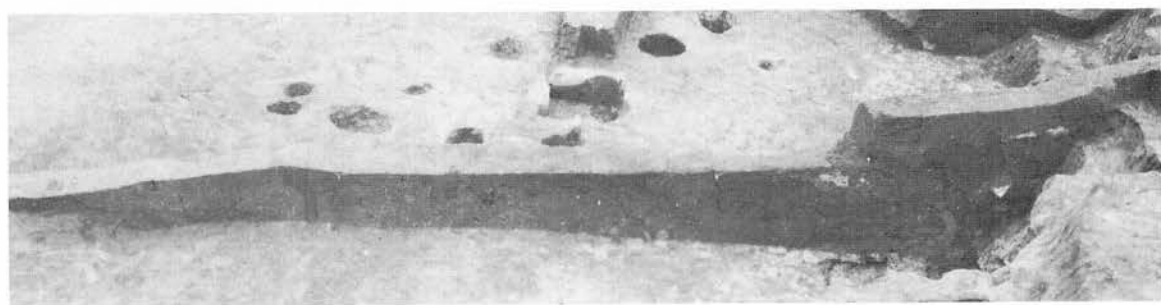


土器出土状況

写真図版7 Ⅱ F-1 住居址



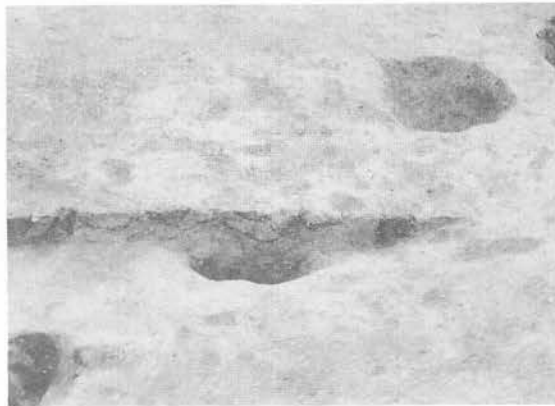
Ⅱ F-2 住居址全景



埋土土層断面



地床炉No.1 平面



地床炉No.1 断面

写真図版 8 Ⅱ F-2 住居址



Ⅱ F - 2 住居址貼り床断面



地床炉No.2 平面

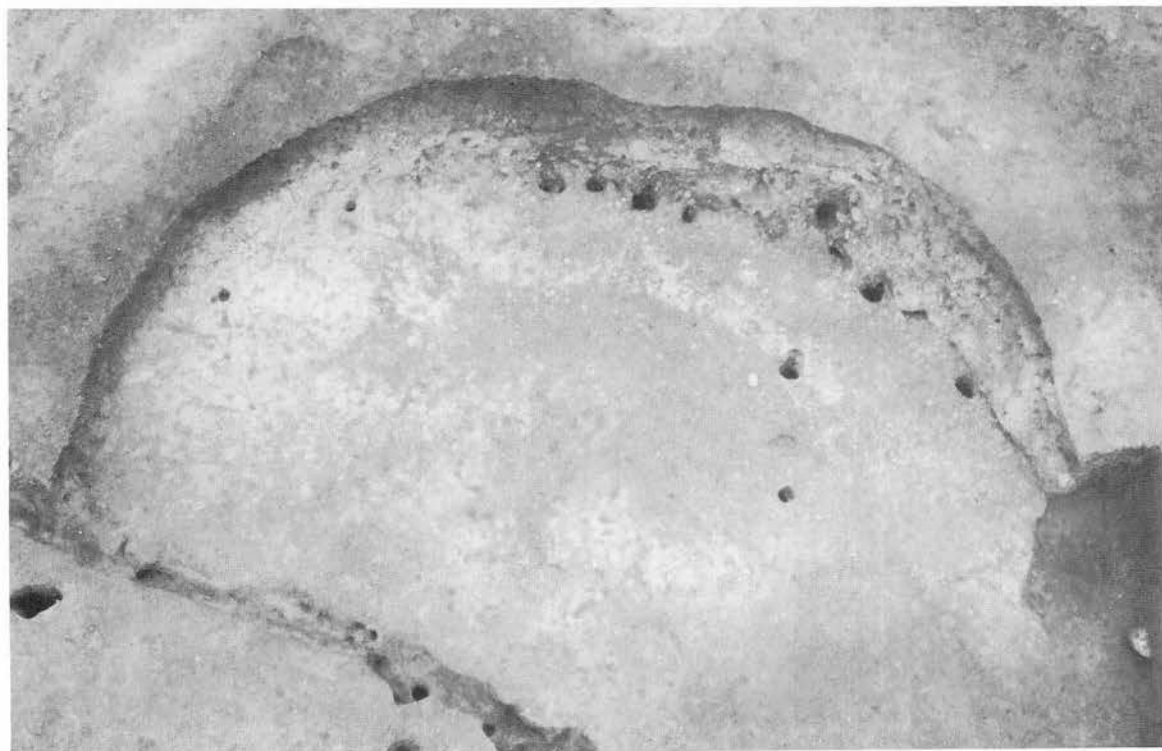


地床炉No.2 断面



重機による表土除去作業(Ⅲ F 区)

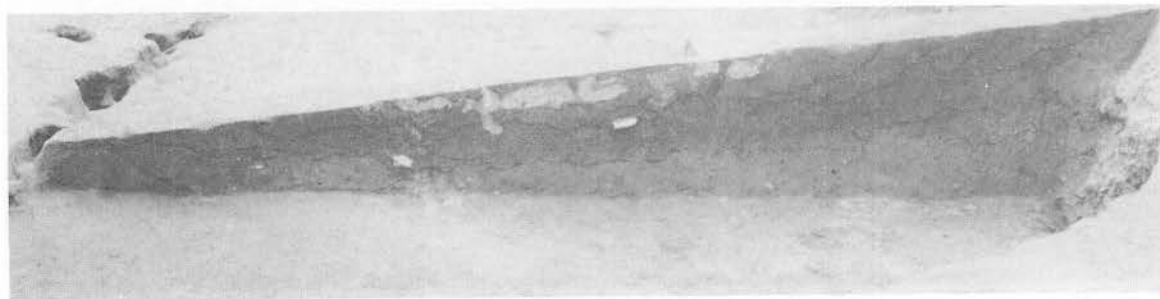
写真図版9 Ⅱ F - 2 住居址



Ⅱ F-3住居址全景

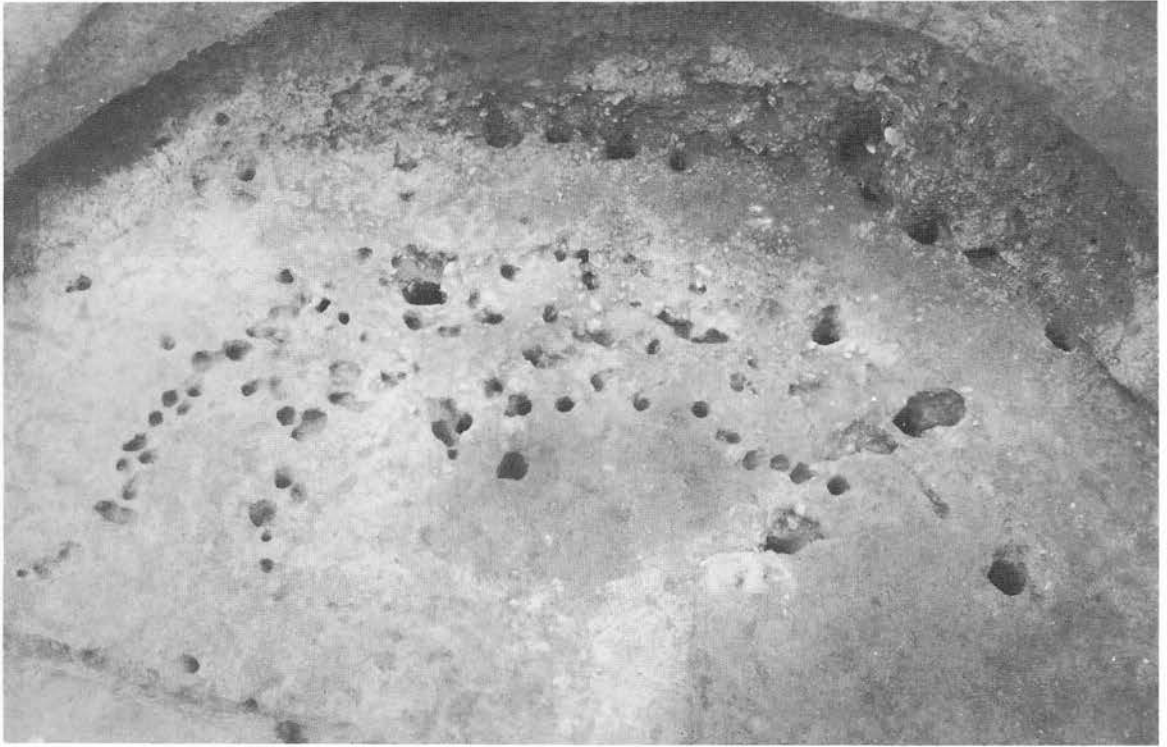


埋土土層断面(北から)



埋土土層断面(西から)

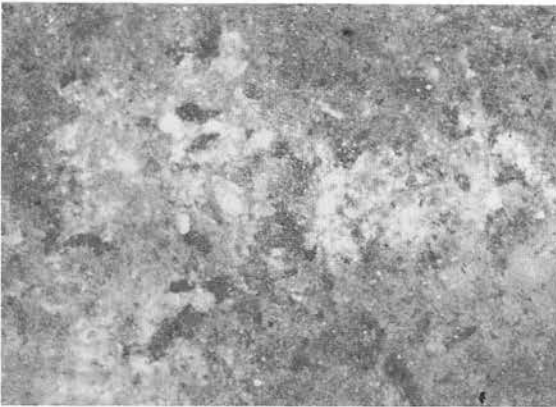
写真図版10 Ⅱ F-3住居址



Ⅱ F-3 住居址貼り床除去後全景



貼り床断面

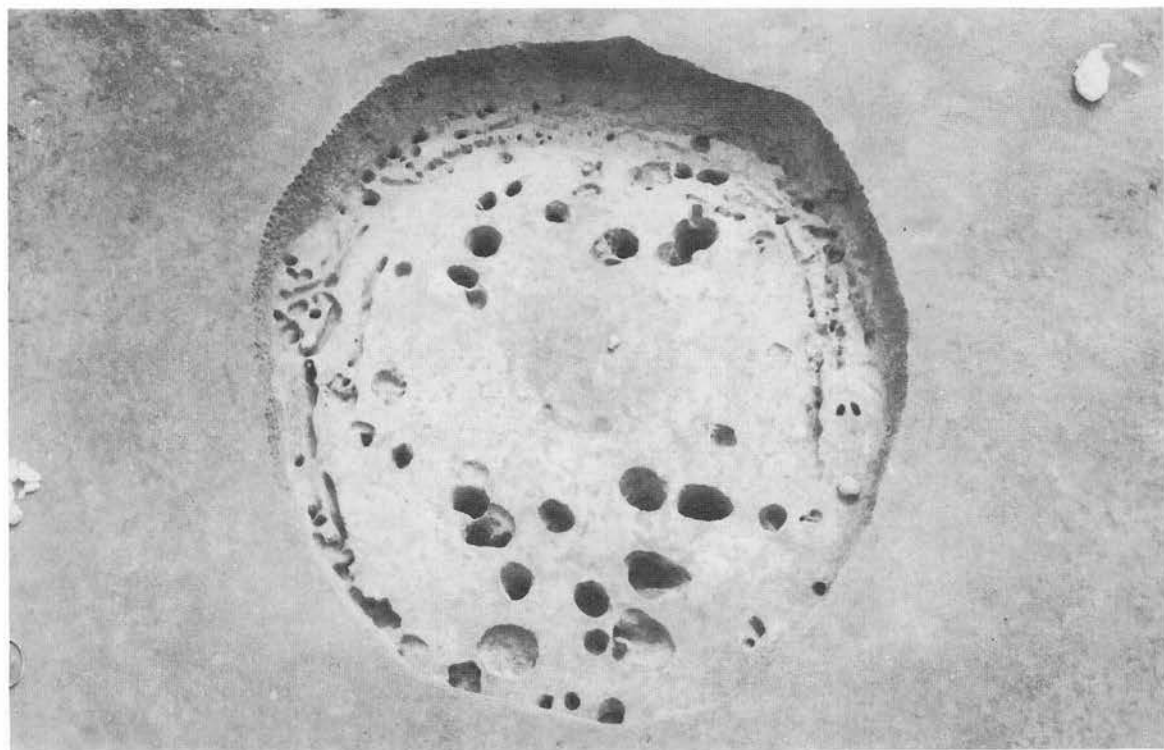


地床炉平面



地床炉断面

写真図版11 Ⅱ F-3 住居址



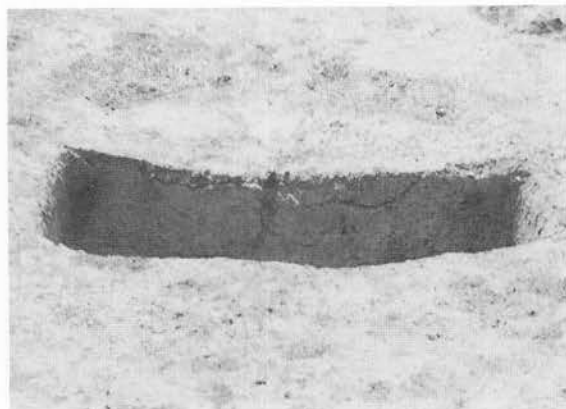
Ⅱ F-4 住居址全景



埋土土層断面(南から)



地床炉平面

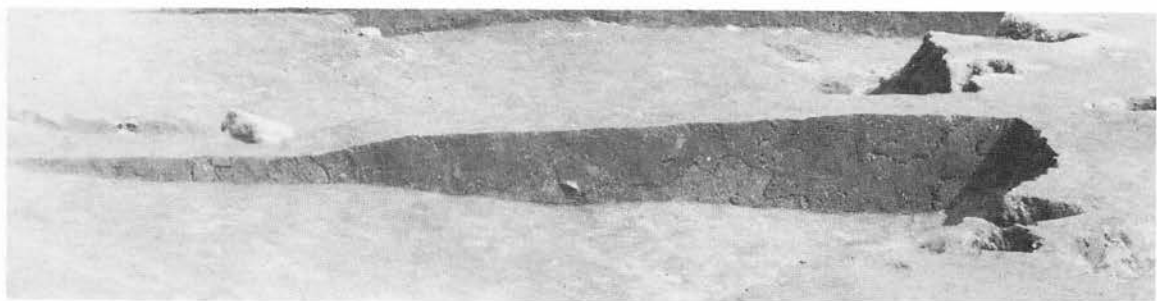


地床炉断面

写真図版12 Ⅱ F-4 住居址



Ⅱ F—5 住居址全景



埋土土層断面



地床炉平面



地床炉断面

写真图版13 Ⅱ F—5 住居址



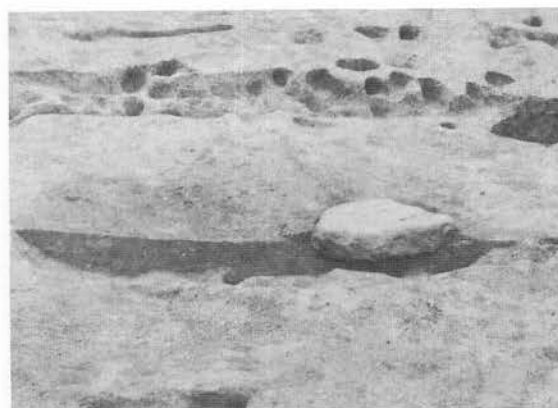
Ⅱ F-5 住居址 貼り床除去後全景



貼り床断面

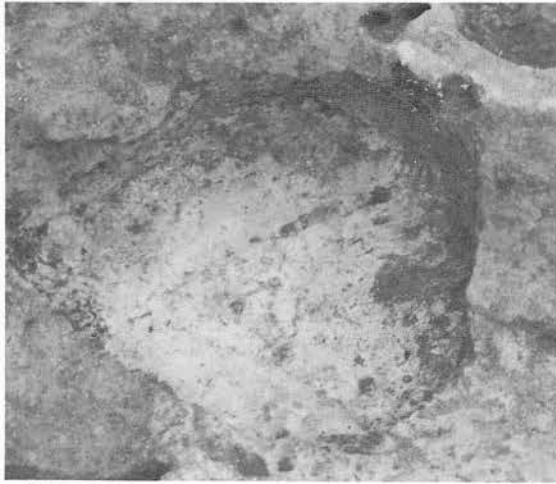


配石



P₁₁・P₁₂・配石断面

写真図版14 Ⅱ F-5 住居址

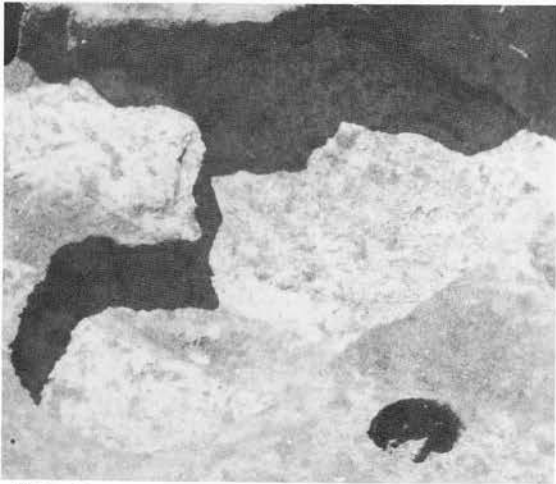


Ⅱ F-2ピット

平面

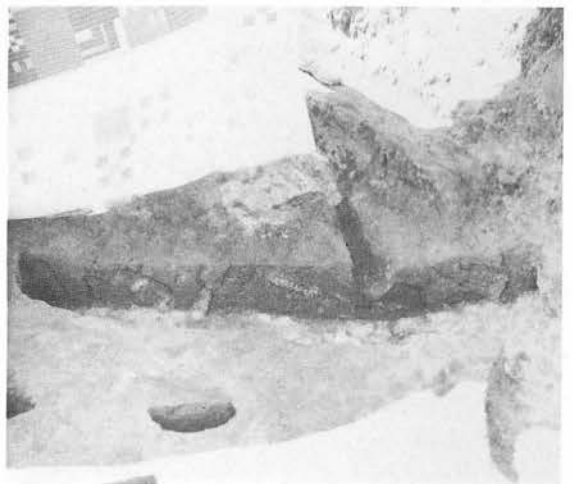


断面

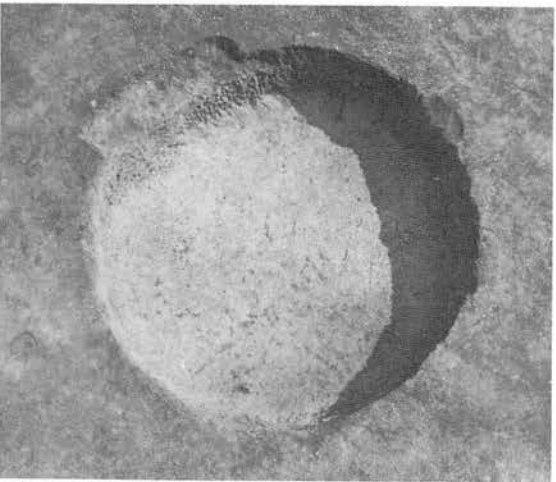


Ⅱ F-3・4ピット

平面

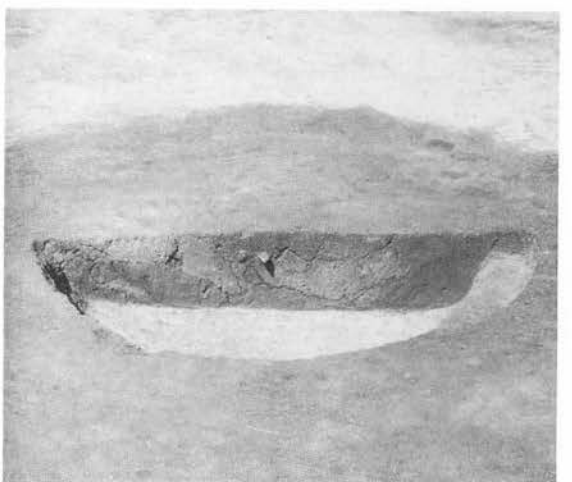


断面



Ⅲ E-1ピット

平面



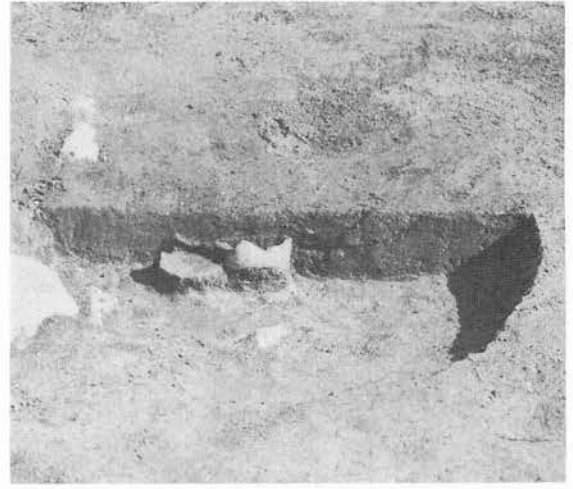
断面

写真図版15 Ⅱ F-2・3・4、Ⅲ E-1ピット



Ⅲ E-2ピット

平面

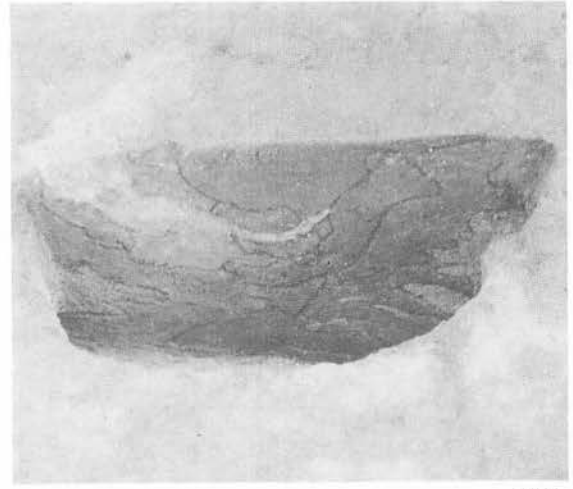


断面



Ⅳ E-1ピット

平面

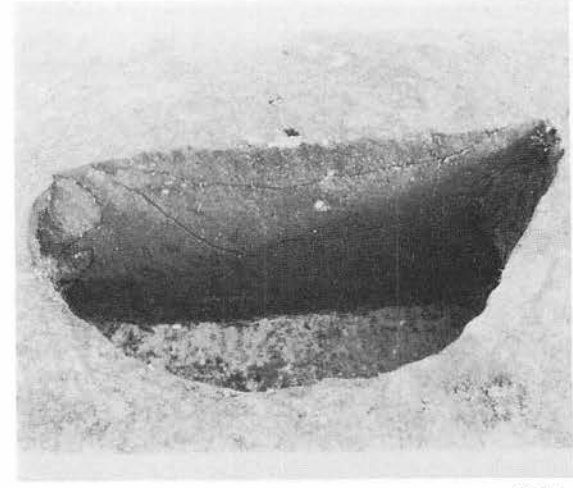


断面



Ⅳ E-2ピット

平面



断面

写真図版16 Ⅲ E-2、Ⅳ E-1・2ピット

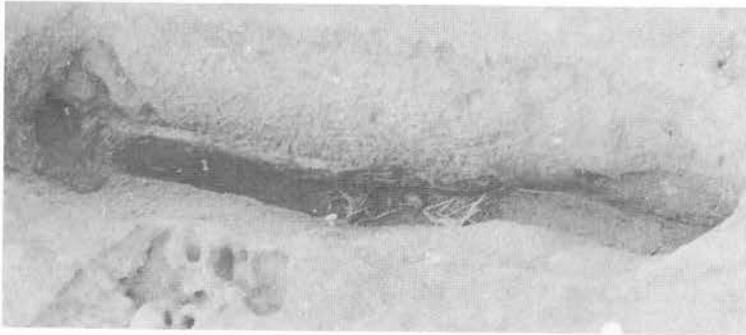


IV F-1ピット

平面



I E区遺物出土状況

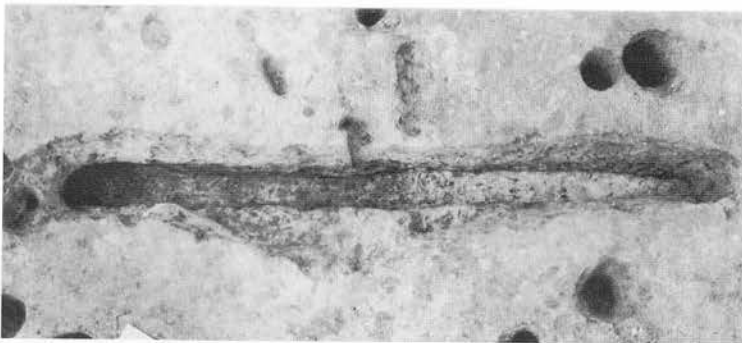


II F-1 陥し穴状遺構

平面



断面



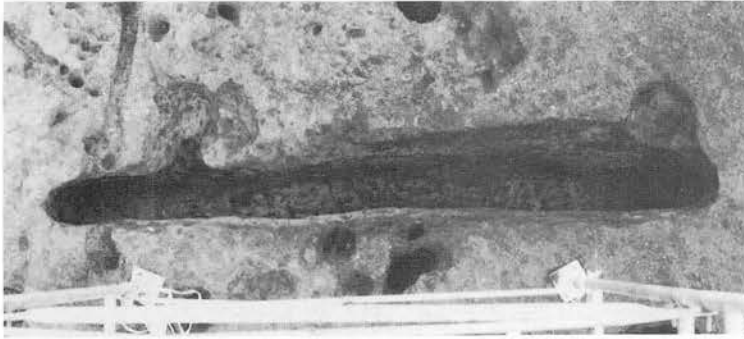
II F-2 陥し穴状遺構

平面



断面

写真図版17 IV F-1ピット、II F-1・2陥し穴状遺構

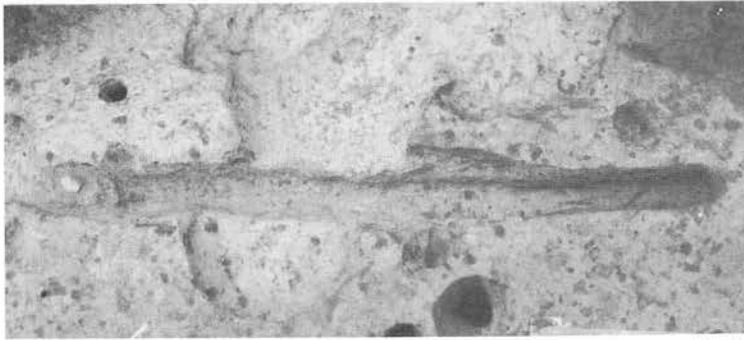


II F-3 陥し穴状遺構

平面



断面

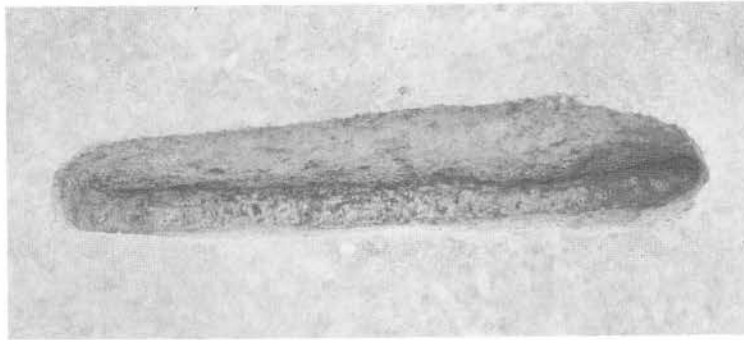


II F-4 陥し穴状遺構

平面



断面

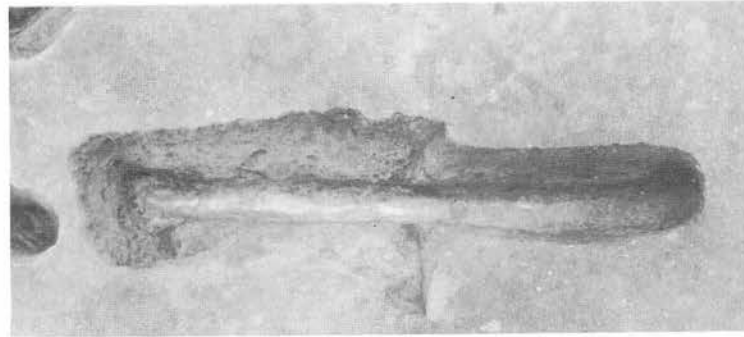


II F-5 陥し穴状遺構

平面

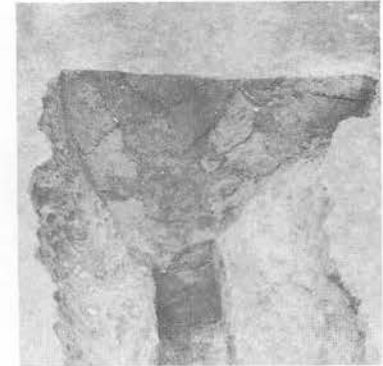


断面



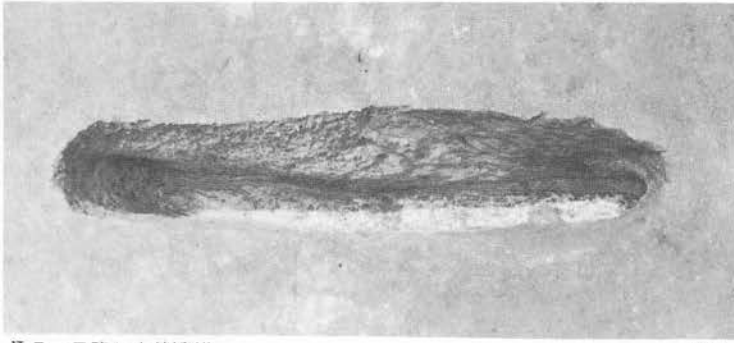
II F-6 陥し穴状遺構

平面



断面

写真図版18 II F-3・4・5・6 陥し穴状遺構



Ⅱ F-7 陥し穴状遺構

平面



断面



Ⅱ F-8 陥し穴状遺構

平面

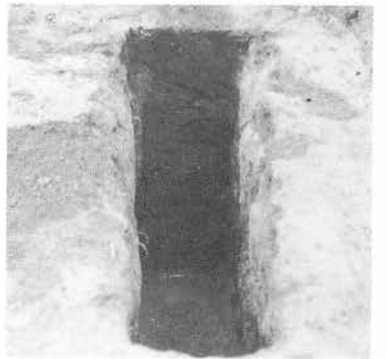


断面

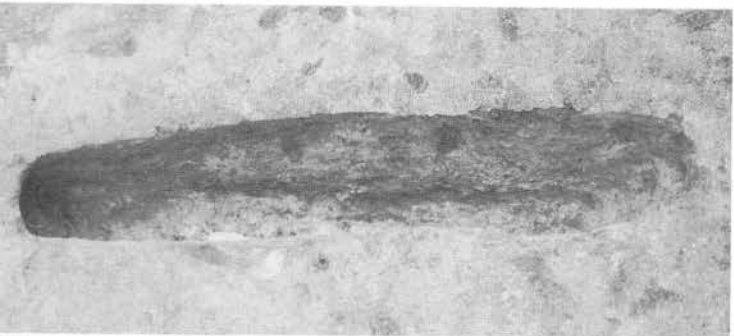


Ⅲ D-1 陥し穴状遺構

平面



断面



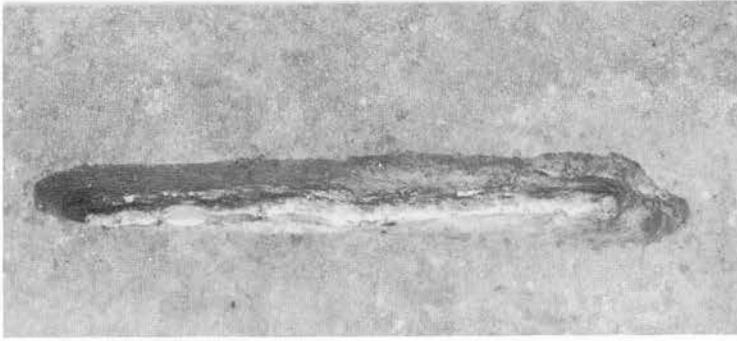
Ⅲ E-1 陥し穴状遺構

平面



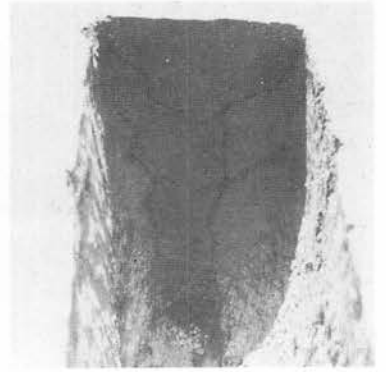
断面

写真図版19 Ⅱ F-7・8、Ⅲ D-1、Ⅲ E-1 陥し穴状遺構



Ⅲ E - 2 陥し穴状遺構

平面



断面

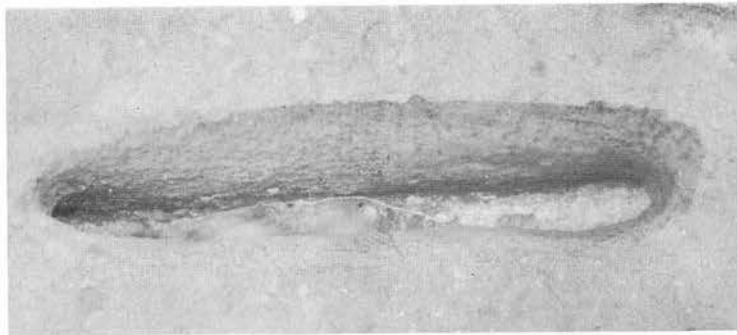


Ⅲ E - 3 陥し穴状遺構

平面

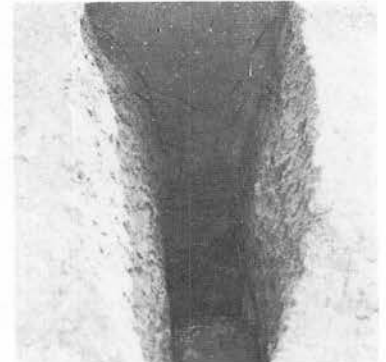


断面

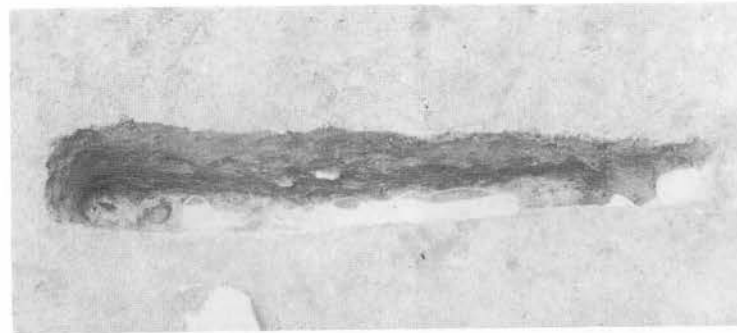


Ⅲ E - 4 陥し穴状遺構

平面



断面



Ⅲ E - 5 陥し穴状遺構

平面



断面

写真図版20 Ⅲ E - 2・3・4・5 陥し穴状遺構

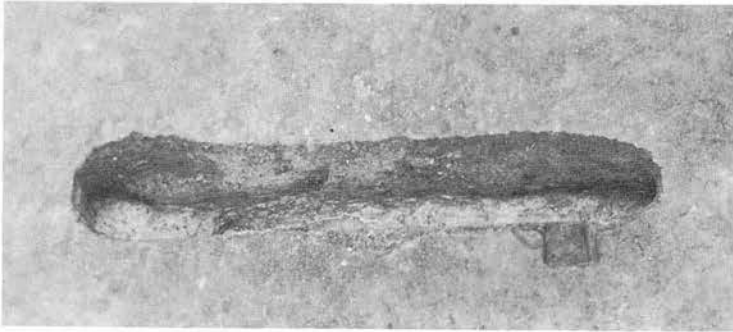


Ⅲ E-6 陥し穴状遺構

平面



断面

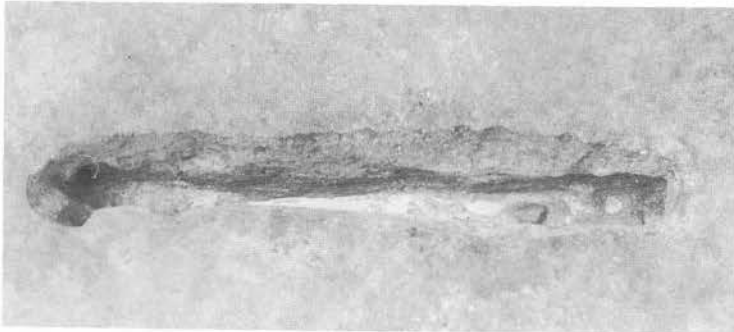


Ⅲ F-1 陥し穴状遺構

平面



断面

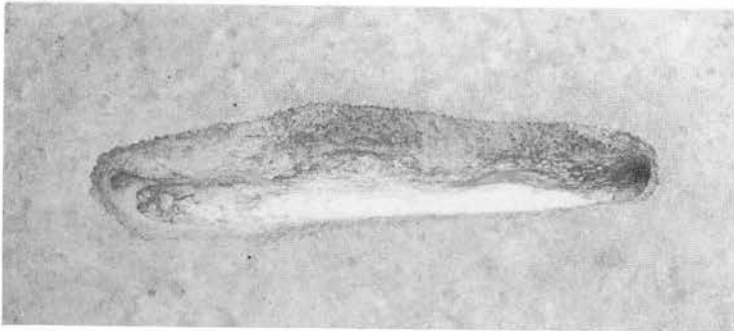


Ⅲ F-2 陥し穴状遺構

平面

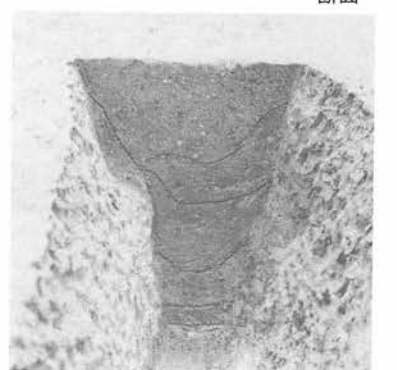


断面



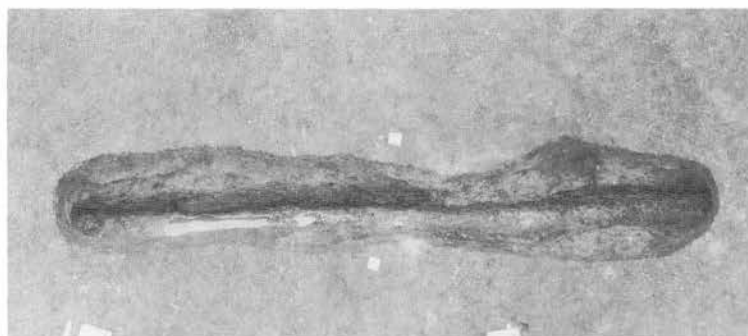
Ⅲ F-3 陥し穴状遺構

平面



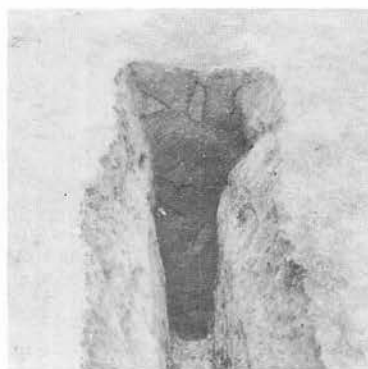
断面

写真図版21 Ⅲ E-6、Ⅲ F-1・2・3 陥し穴状遺構

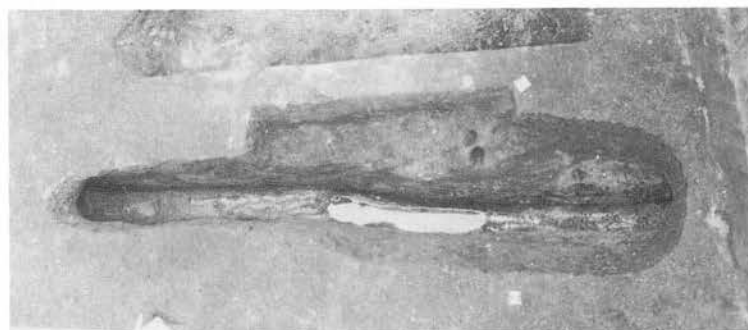


Ⅲ F-4 陥し穴状遺構

平面



断面

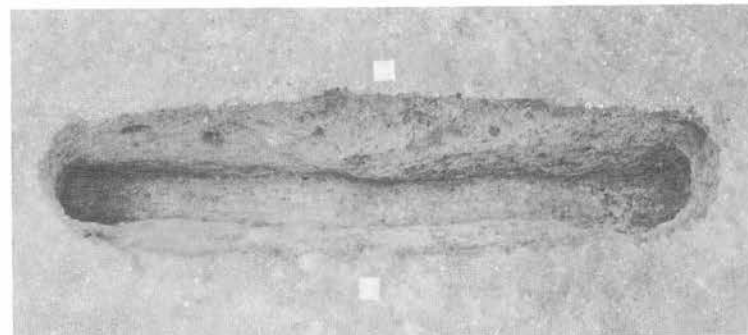


Ⅲ F-5 陥し穴状遺構

平面

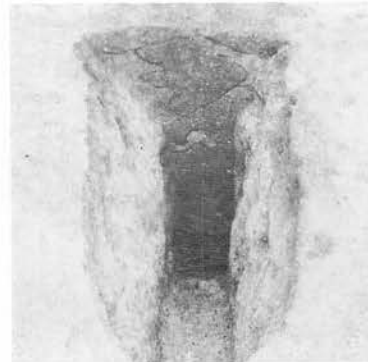


断面

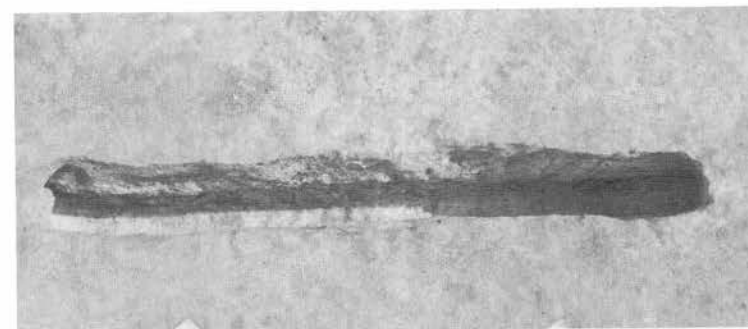


Ⅲ F-6 陥し穴状遺構

平面

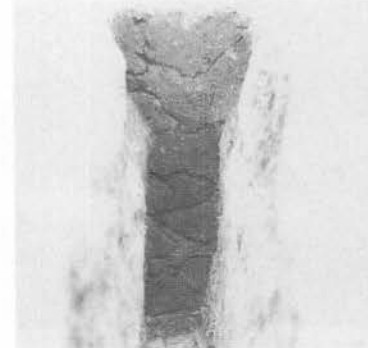


断面



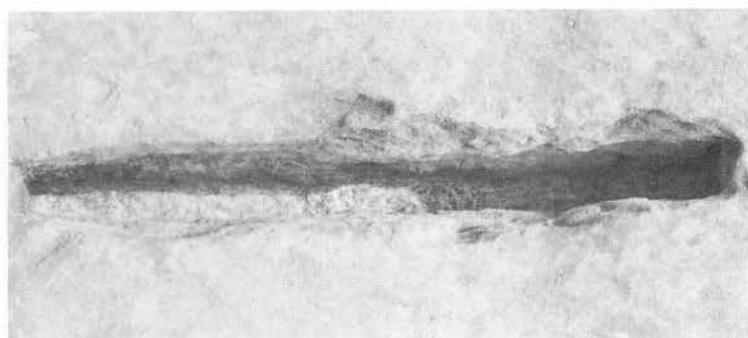
Ⅳ D-1 陥し穴状遺構

平面



断面

写真図版22 Ⅲ F-4・5・6、Ⅳ D-1 陥し穴状遺構

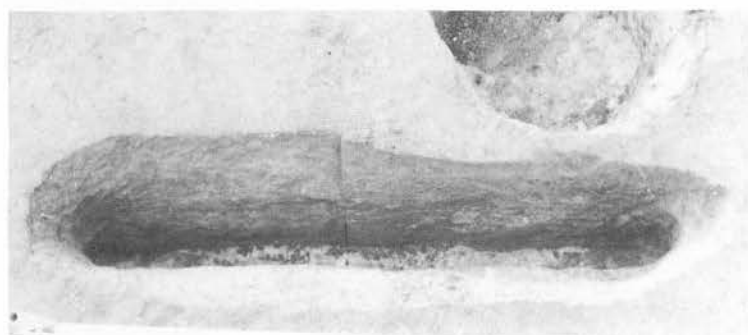


IV D-2 陥し穴状遺構

平面

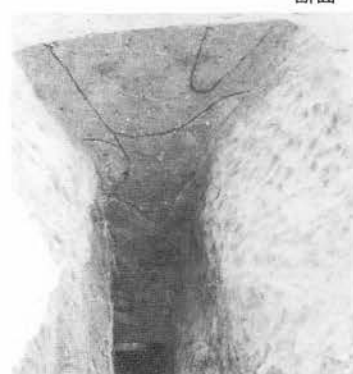


断面

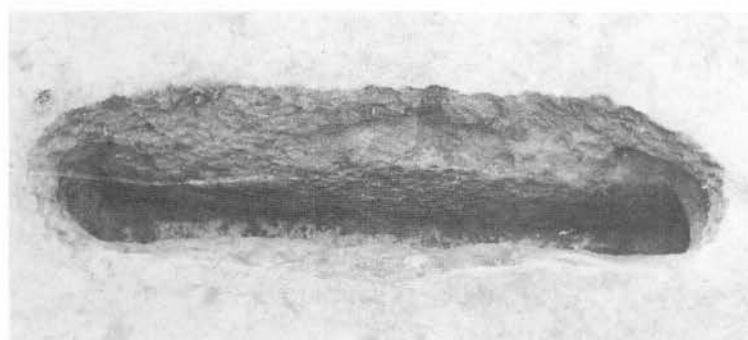


IV E-1 陥し穴状遺構

平面



断面



IV F-1 陥し穴状遺構

平面



断面



IV F-2 陥し穴状遺構

平面



断面

写真図版23 IV D-2、IV E-1、IV F-1・2 陥し穴状遺構



Ⅲ E-1 埋設土器・配石遺構

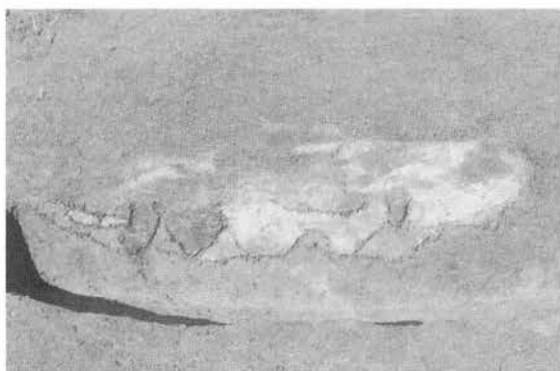
平面



配石下位焼土平面



埋設土器断面



焼土断面



埋設土器下位ビット

写真図版24 Ⅲ E-1 埋設土器・配石遺構



II F-1 烧土遺構

平面

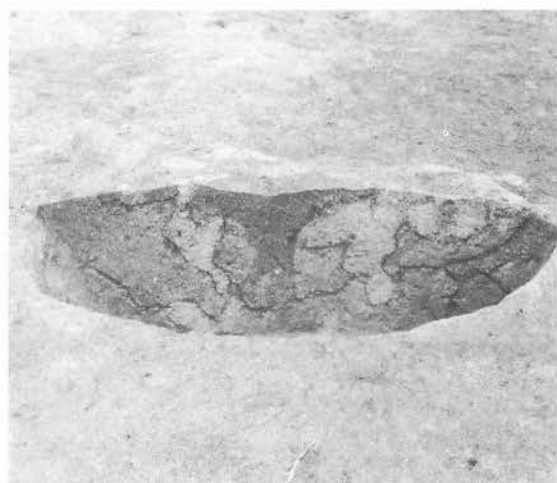


断面



III D-1 烧土遺構

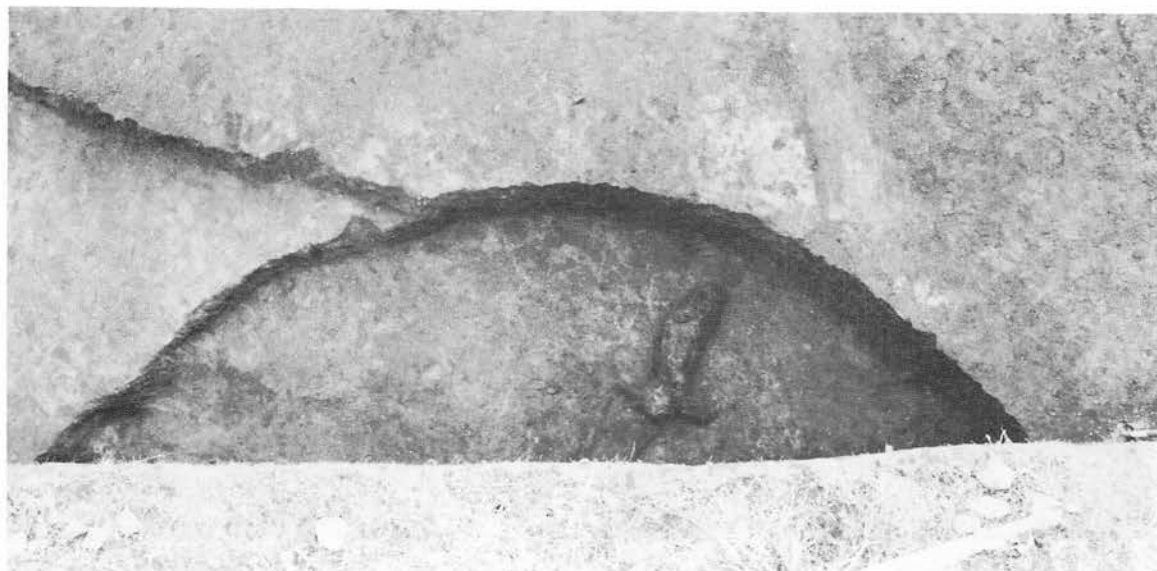
平面



断面



遺物出土状況(II F区)
写真図版25 II F-1、III D-1 烧土遺構



I E-5住居址全景



埋土土層断面



I E区調査風景

写真図版26 I E-5住居址



I E-5住居址全景



カマド全景



燃烧部断面



煙道部埋土土層断面



煙道部断面

写真図版27 I E-5住居址



埋土土層断面(西から)



埋土土層断面(北から)



P 平面



P 断面

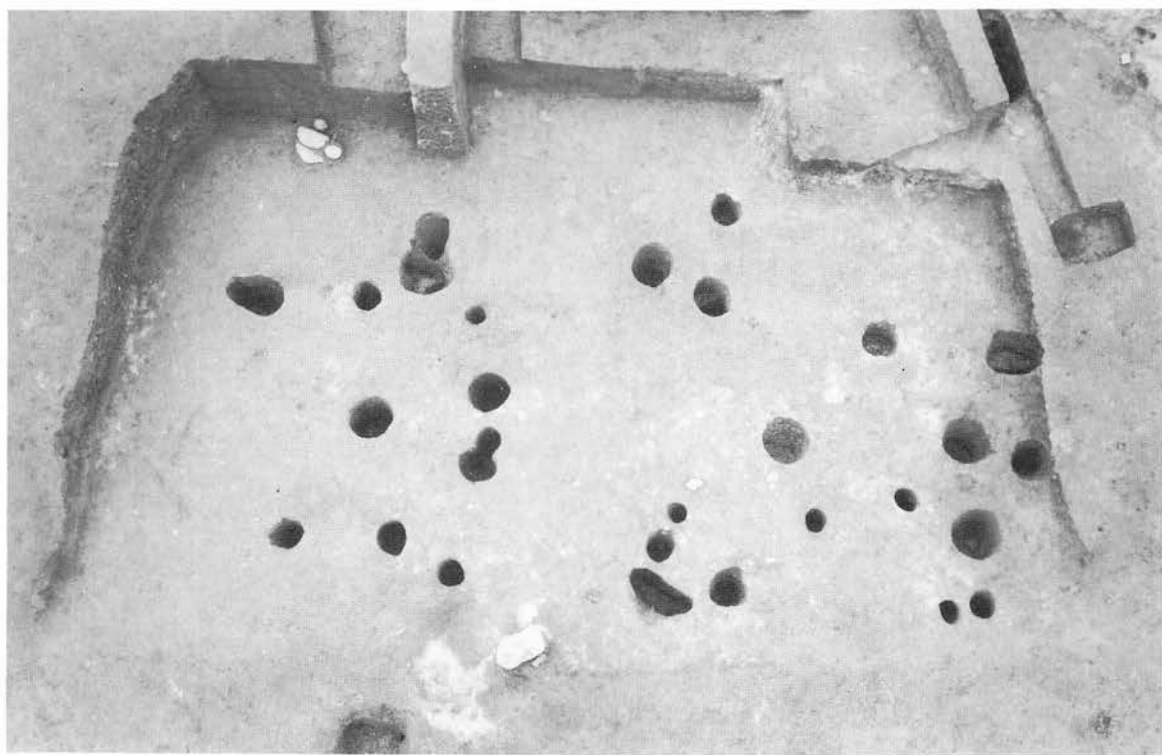


P 平面



P 断面

写真図版28 I E-5住居址



II F-6住居址全景



埋土土層断面

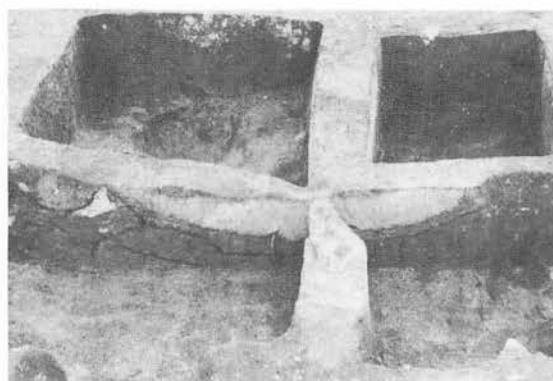


烧土No.1平面



烧土No.2平面

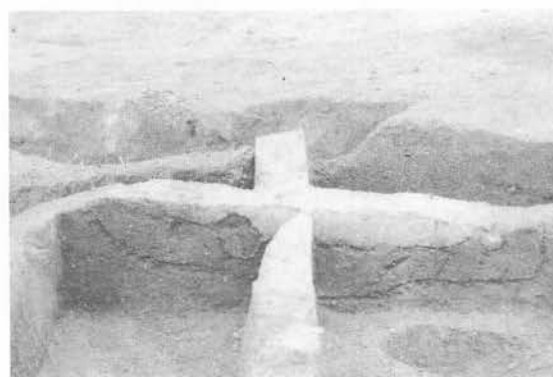
写真図版29 II F-6住居址



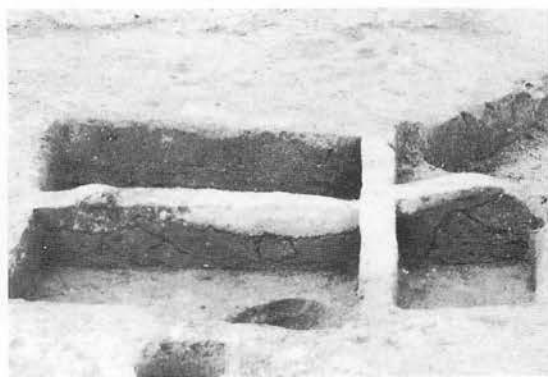
焼土No.2断面(北から)



焼土No.2断面(東から)



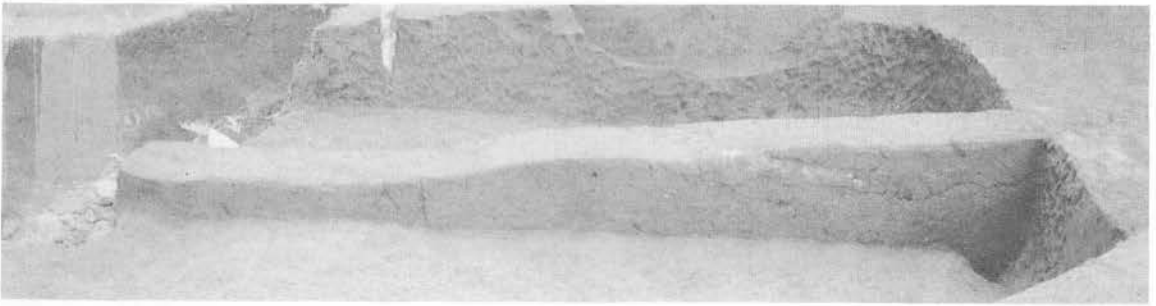
焼土No.1断面(西から)



焼土No.1断面(南から)



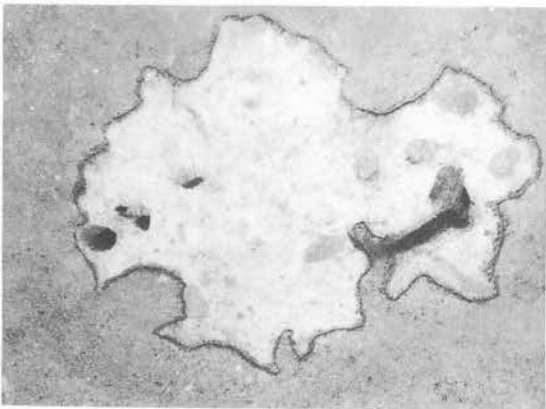
II F-7住居址全景
写真図版30 II F-6・7住居址



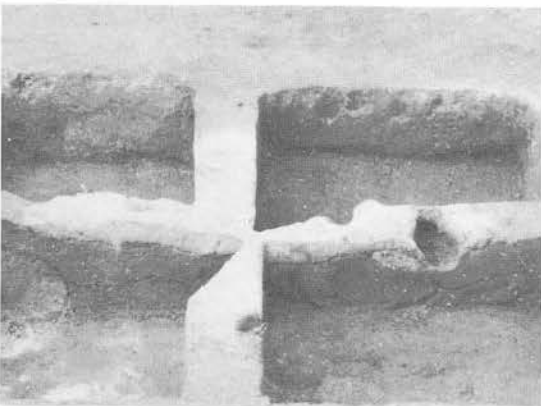
埋土土層断面(西から)



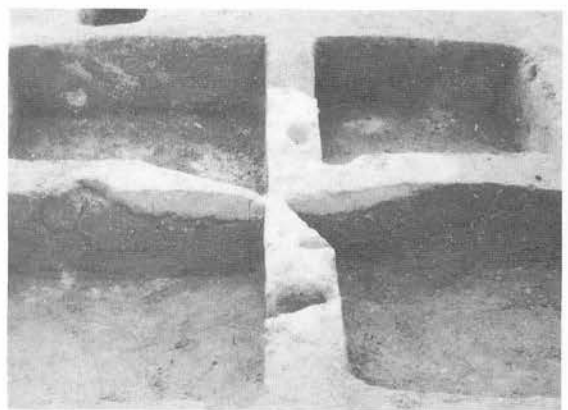
埋土土層断面(東から)



焼土平面



焼土断面(南から)



焼土断面(東から)

写真図版31 II F-7住居址



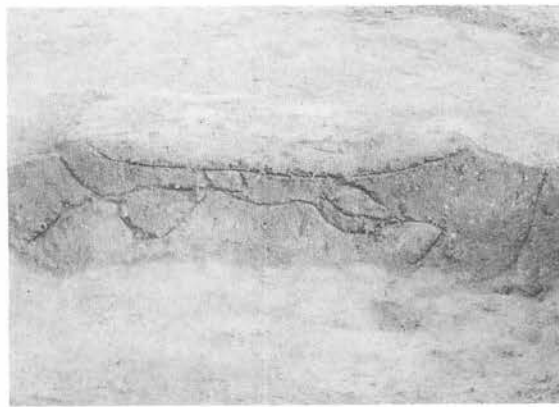
Ⅱ F—8住居址全景



埋土土層断面



地床炉No.1 平面

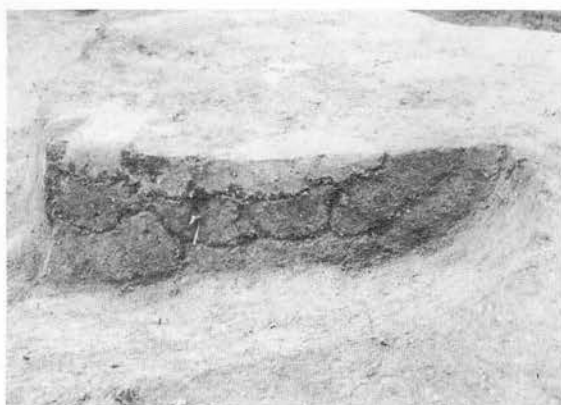


地床炉No.1 断面

写真図版32 Ⅱ F—8住居址



地床炉No.2平面



地床炉No.2断面



P₁断面



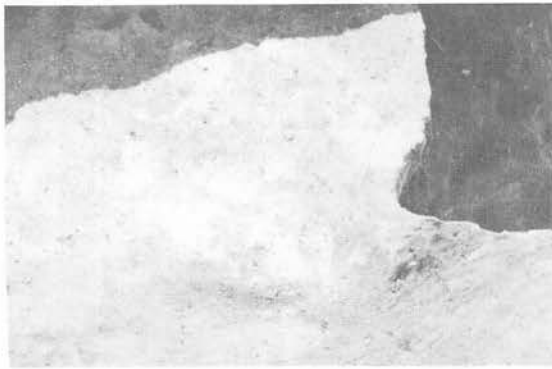
P₁・P₂平面



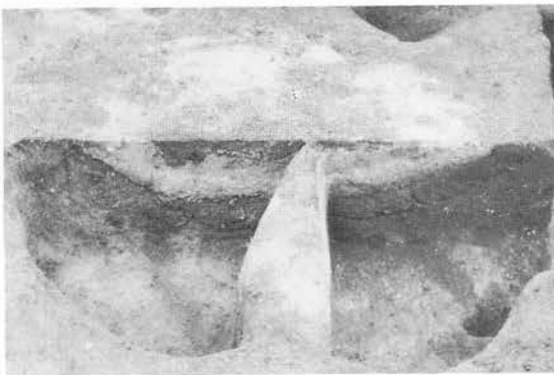
P₂断面



Ⅱ F-9住居址全景



烧土平面

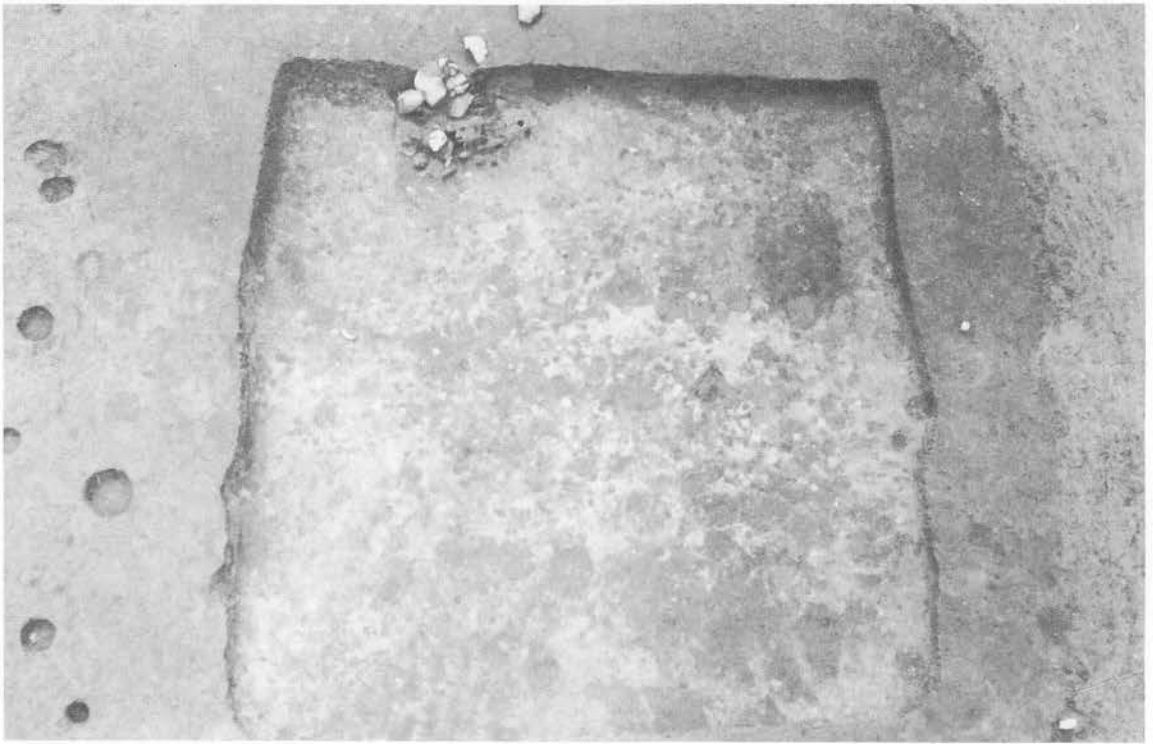


烧土断面(東から)

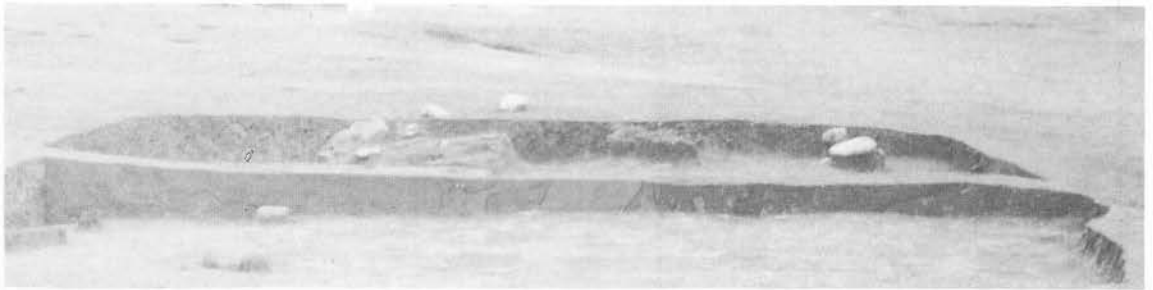


烧土断面(北から)

写真図版34 Ⅱ F-9住居址



Ⅲ E - 1 住居址全景



埋土土層断面



Ⅲ E 区調査風景

写真図版35 Ⅲ E - 1 住居址



カマド全景



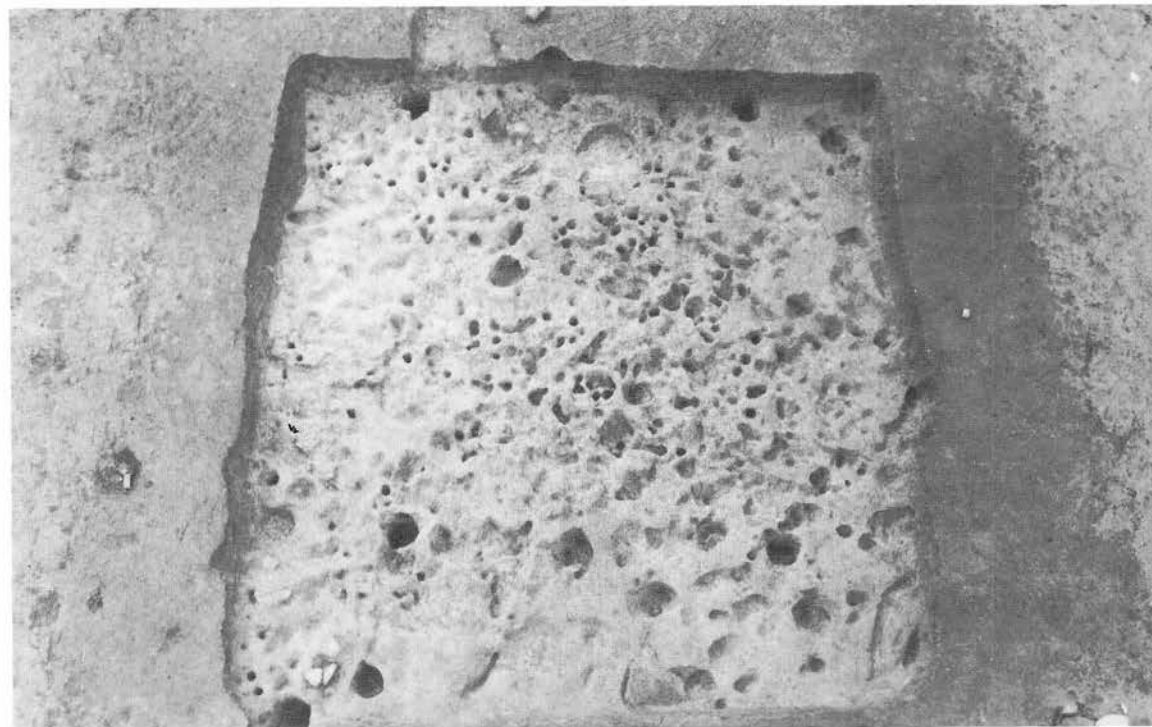
燃焼部・煙道部断面



袖部断面

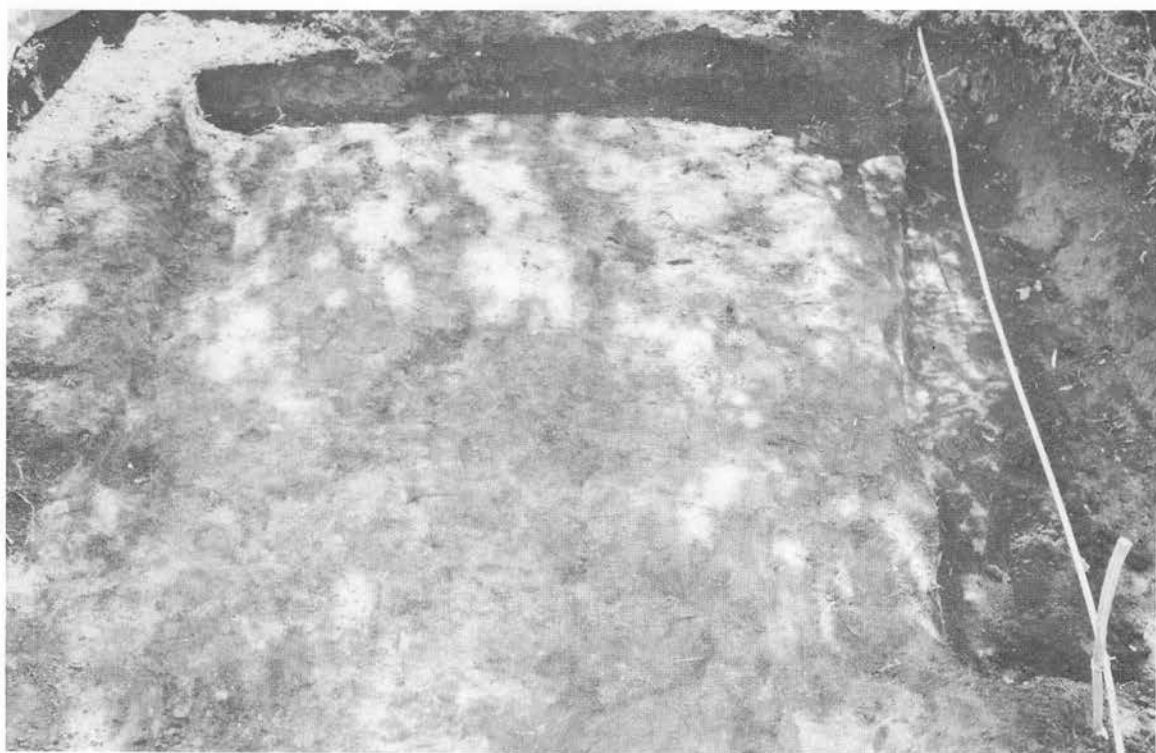


遺物出土状況



貼り床除去後

写真図版36 Ⅲ E-1 住居址



V F - 1 住居址全景



埋土土層断面



カマド全景

写真図版37 V F - 1 住居址



V F - 1 住居址59年度調査部分



II F - 10住居址状遺構



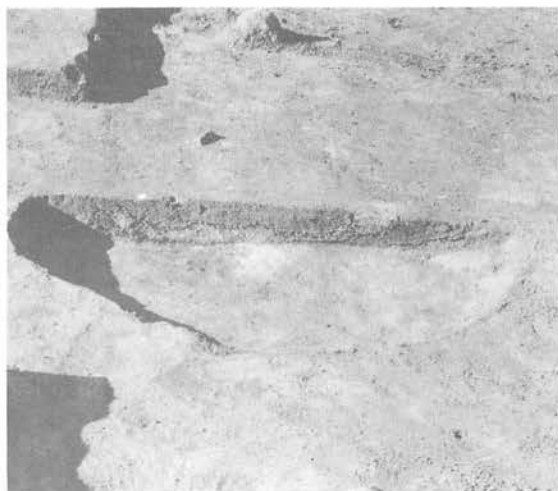
埋土土層断面

写真図版38 V F - 1 住居址、II F - 10住居址状遺構



I E-1ピット

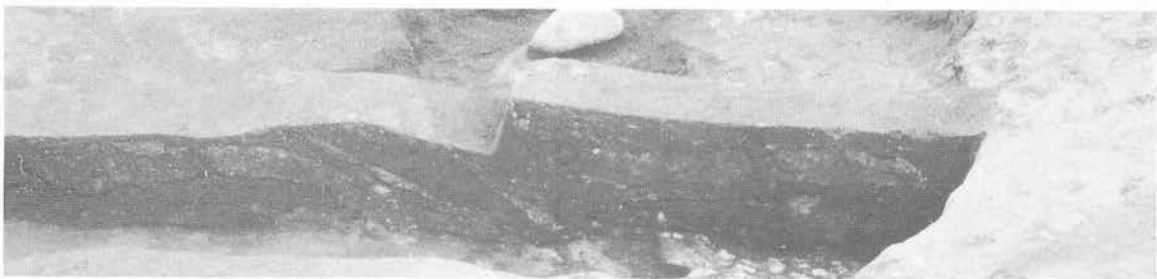
平面



断面



II F-1ピット平面



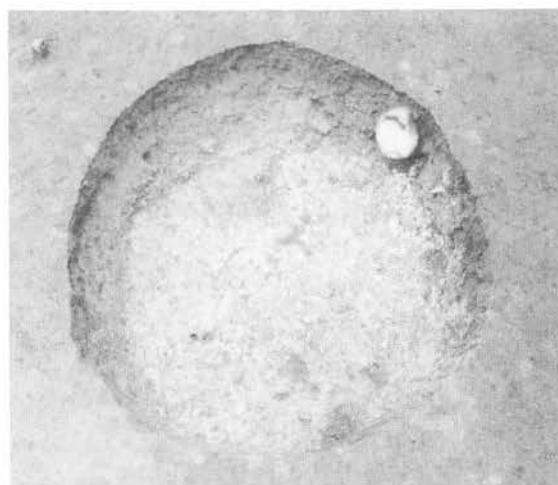
埋土土層断面

写真図版39 I E-1・II F-1ピット



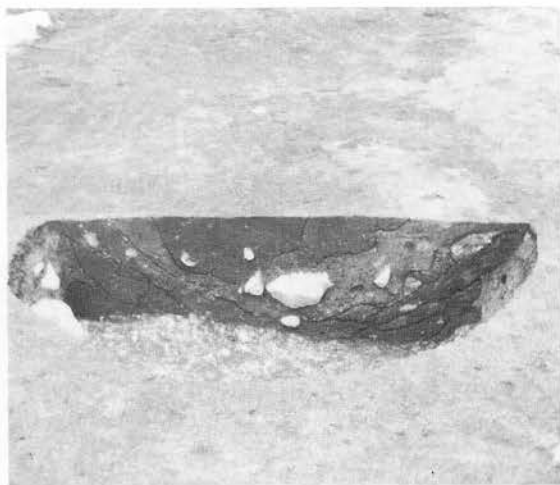
ⅡF-1ピット

炭化物出土状況

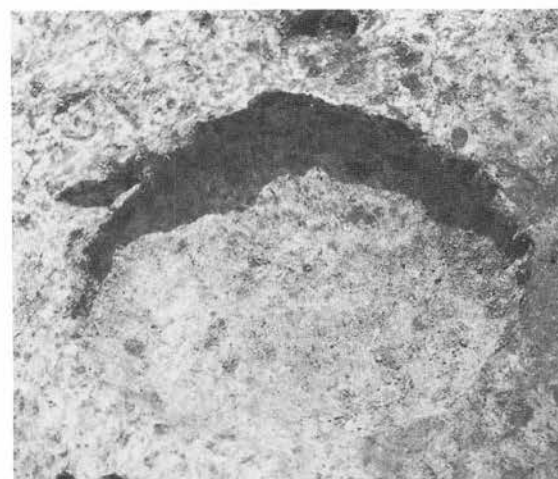


ⅢE-3ピット

平面

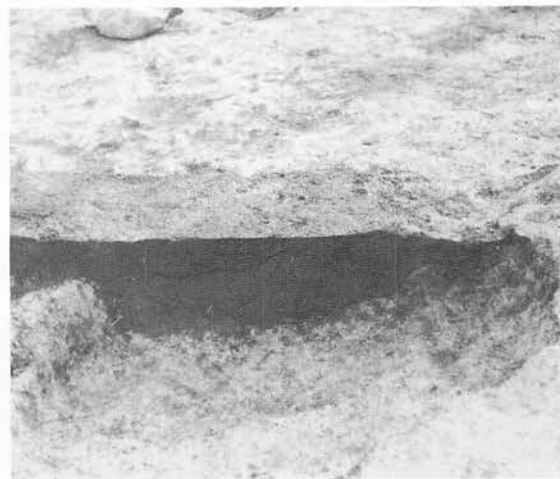


断面



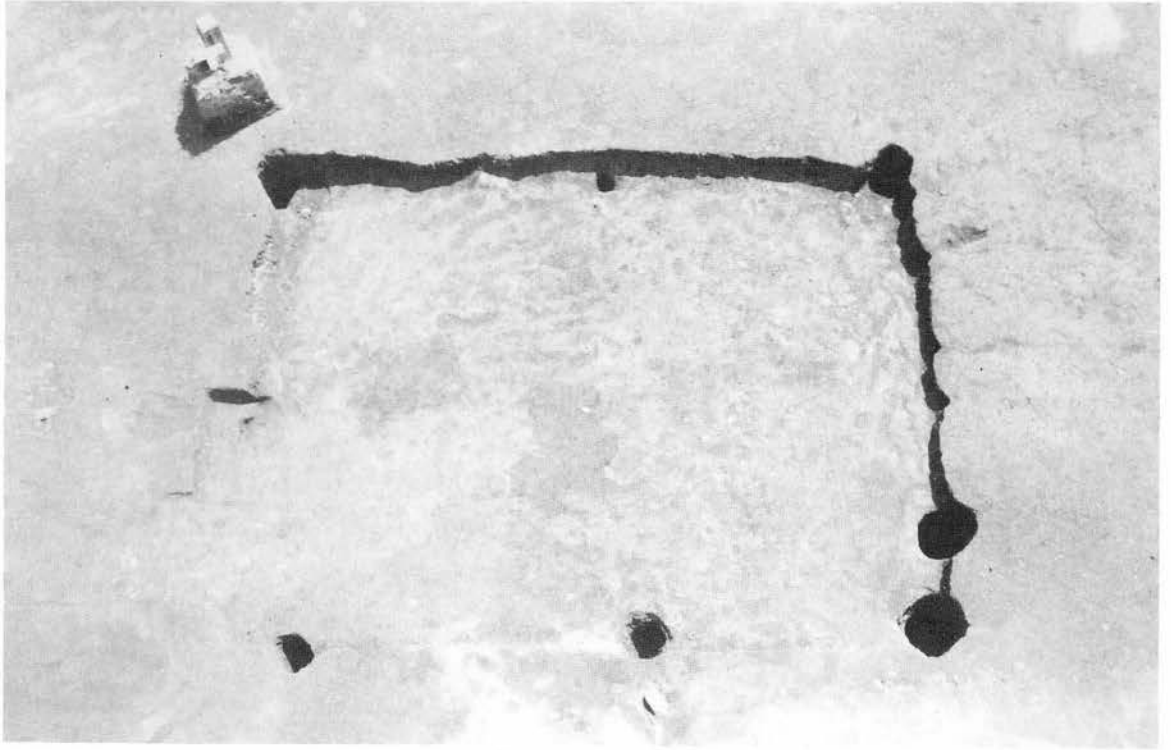
ⅢE-4ピット

平面

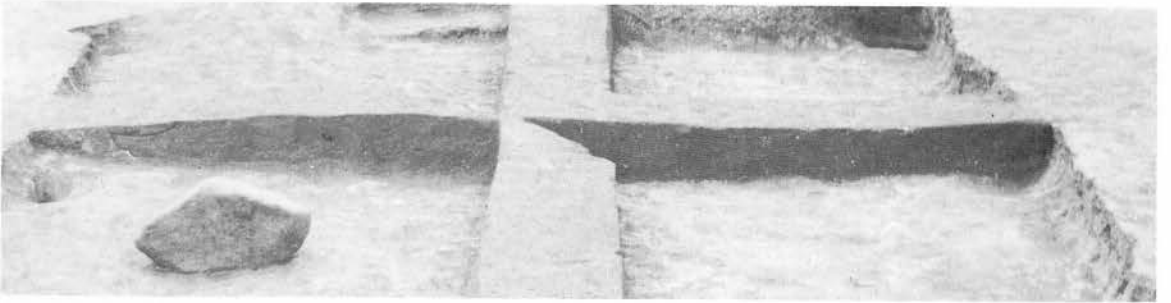


断面

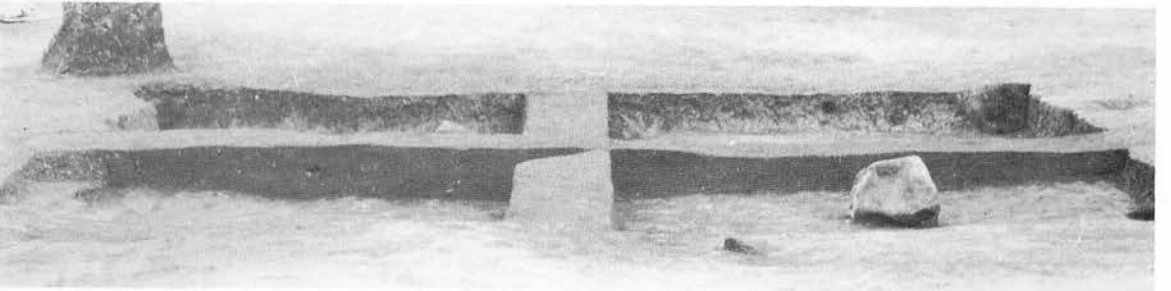
写真図版40 ⅡF-1・ⅢE-3・4ピット



Ⅲ E-2住居址全景

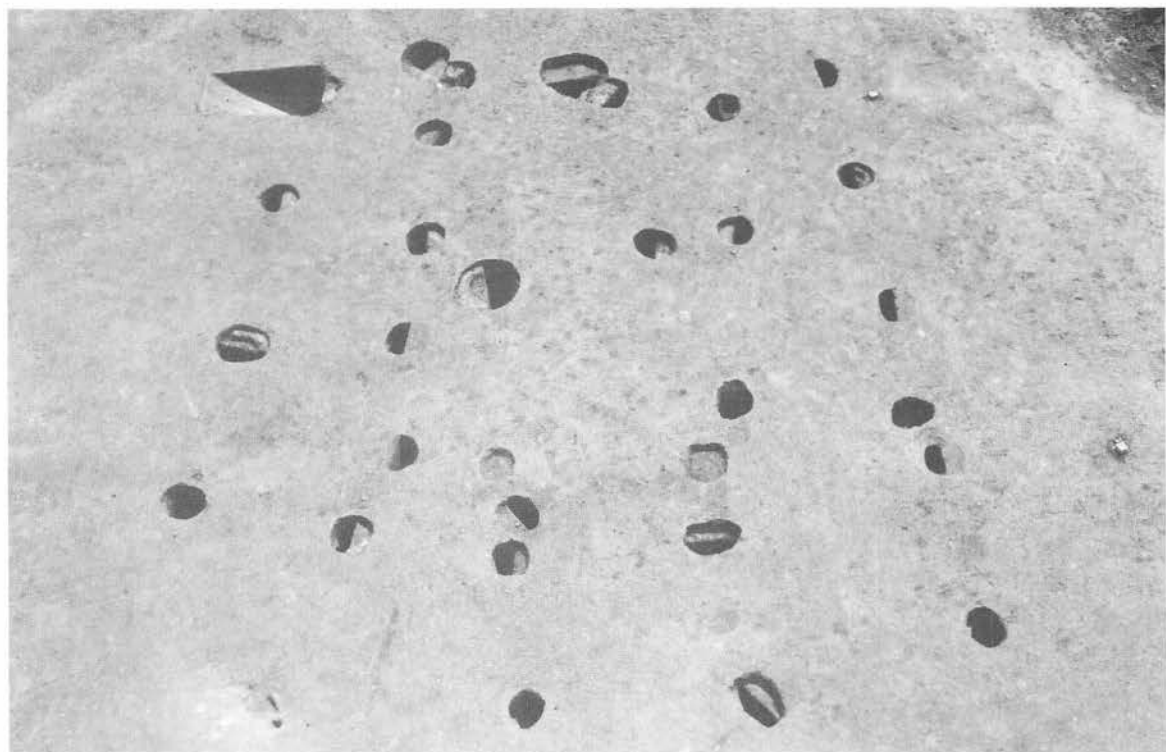


埋土土層断面(南から)

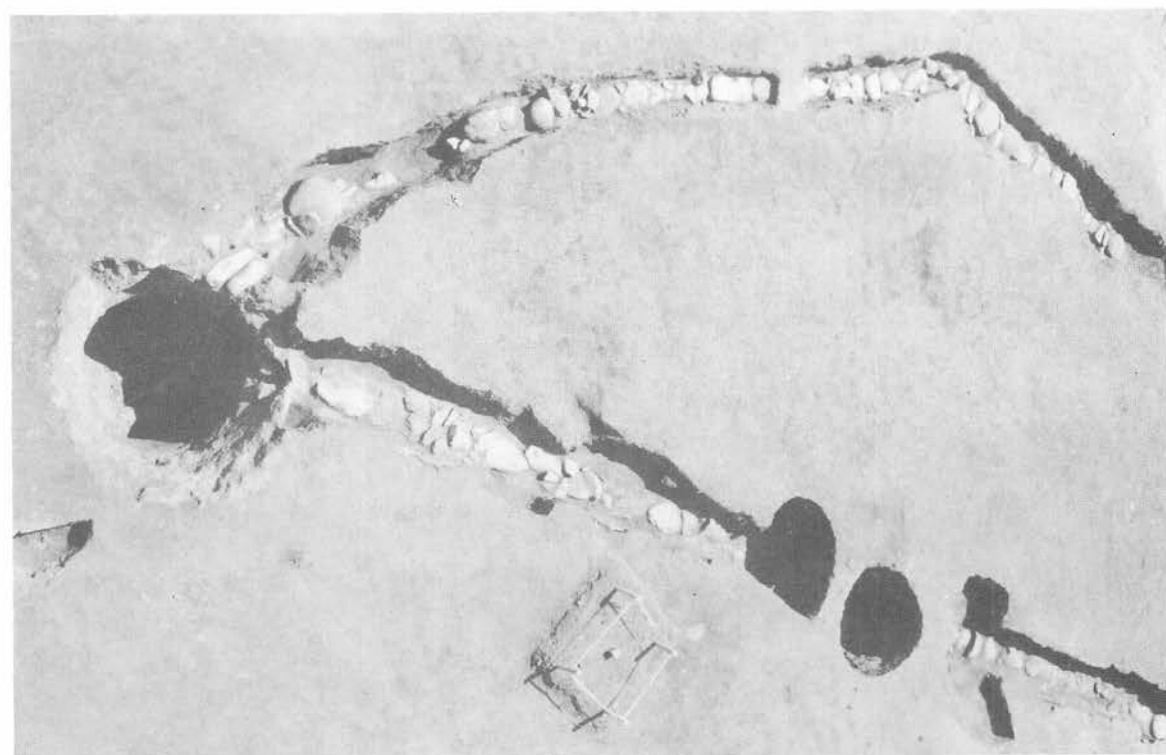


埋土土層断面(西から)

写真図版41 I E-2住居址



Ⅲ E-1 柱穴群全景



貯水槽跡・暗渠全景

写真図版42 Ⅲ E-1 柱穴群、貯水槽跡、暗渠



給水口



出水口



暗渠断面(排水溝)



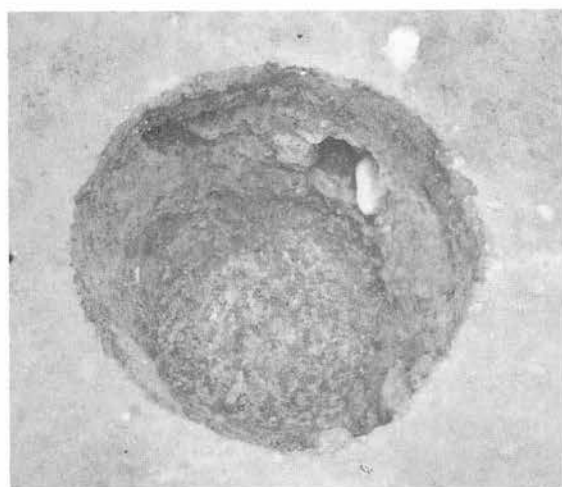
暗渠断面(給水溝)



遺跡より浄法寺町内を望む
写真図版43 貯水槽跡、暗渠



暗渠下部構造(排水溝)



貯水槽完掘状況



埋土土層断面

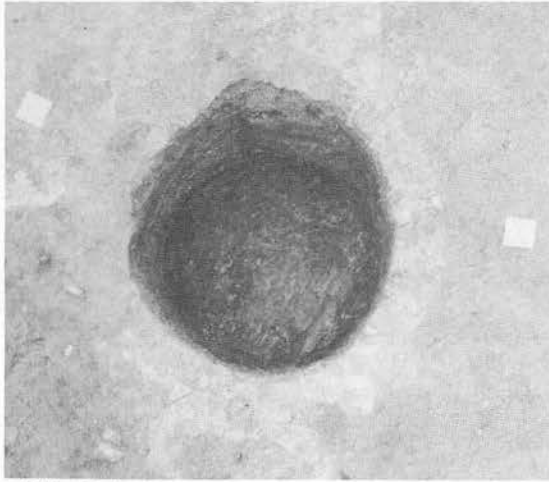


箍の痕



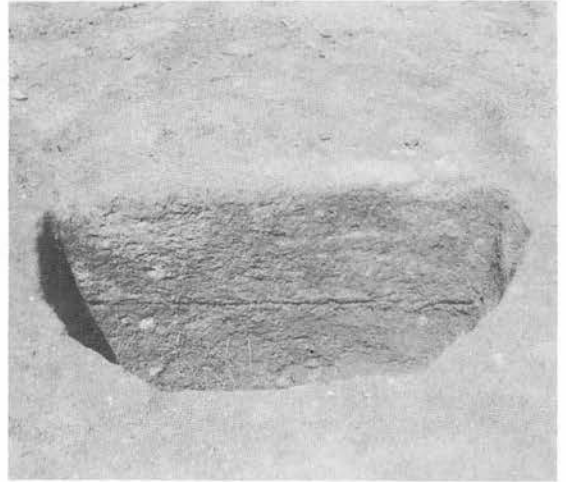
貯水槽全景

写真図版44 貯水槽跡、暗渠

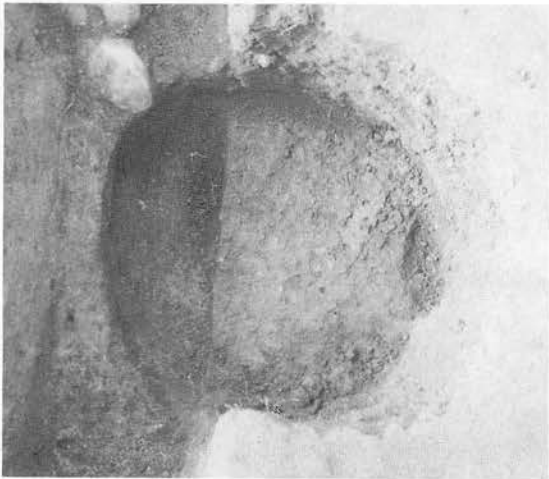


IE-2ピット

平面



断面



IE-3ピット

平面



断面



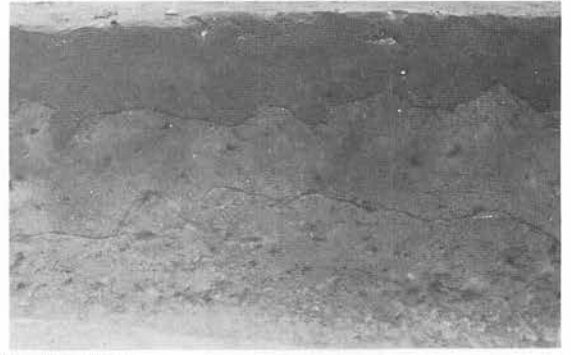
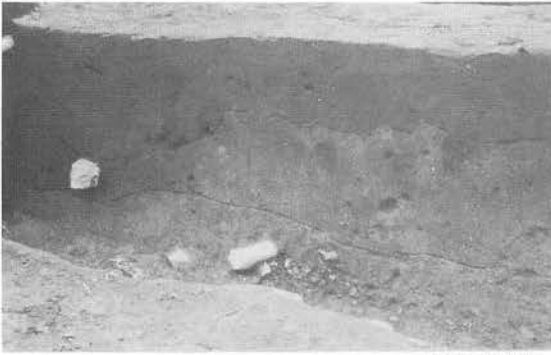
IE-4ピット

平面

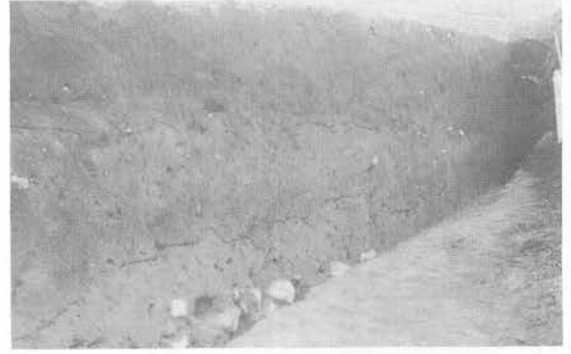


断面

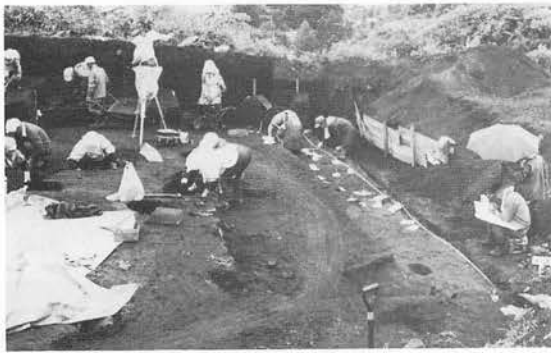
写真図版45 IE-2・3・4ピット



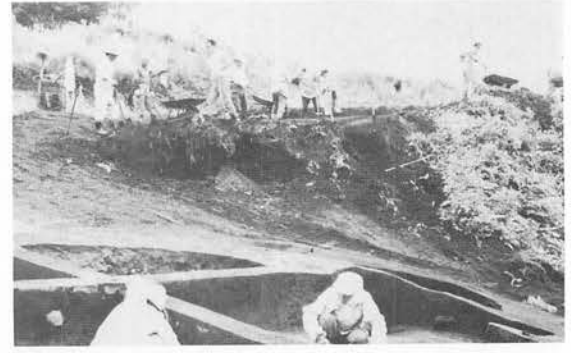
I E区遺物包含層土層断面(1)



I E区遺物包含層土層断面(2)



I E区調査風景



II F区調査風景



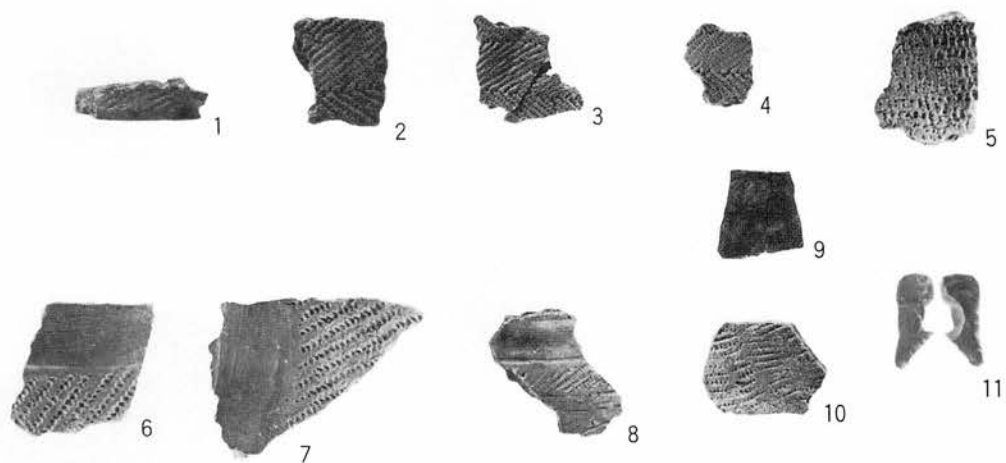
III E区調査風景



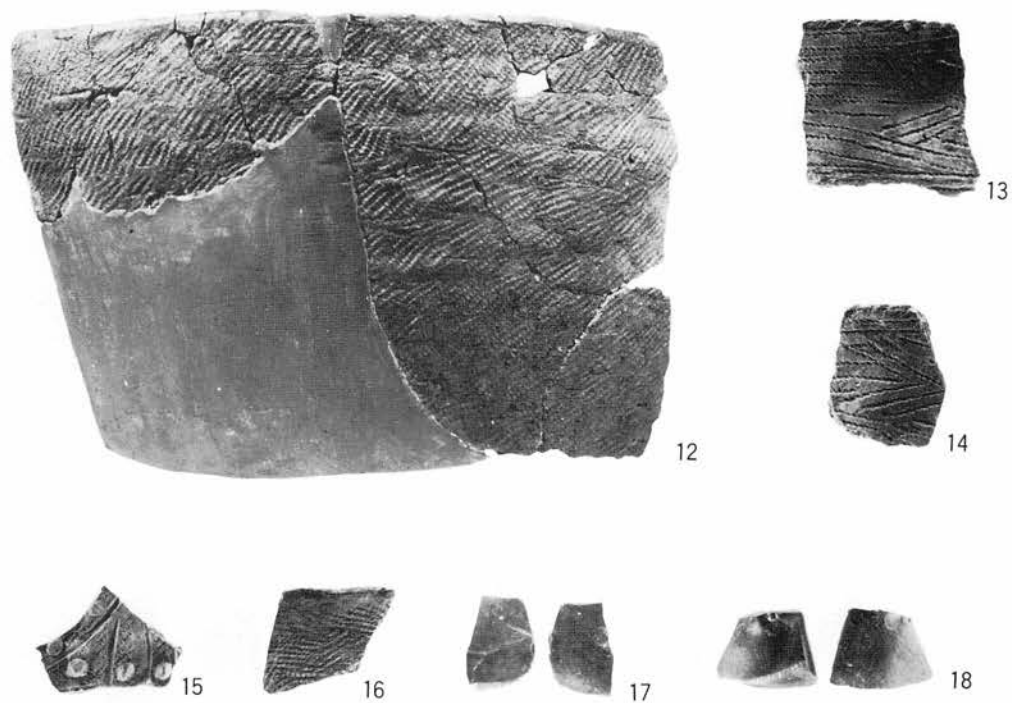
現場作業員のみなさん

写真図版46 I E区遺物包含層土層断面

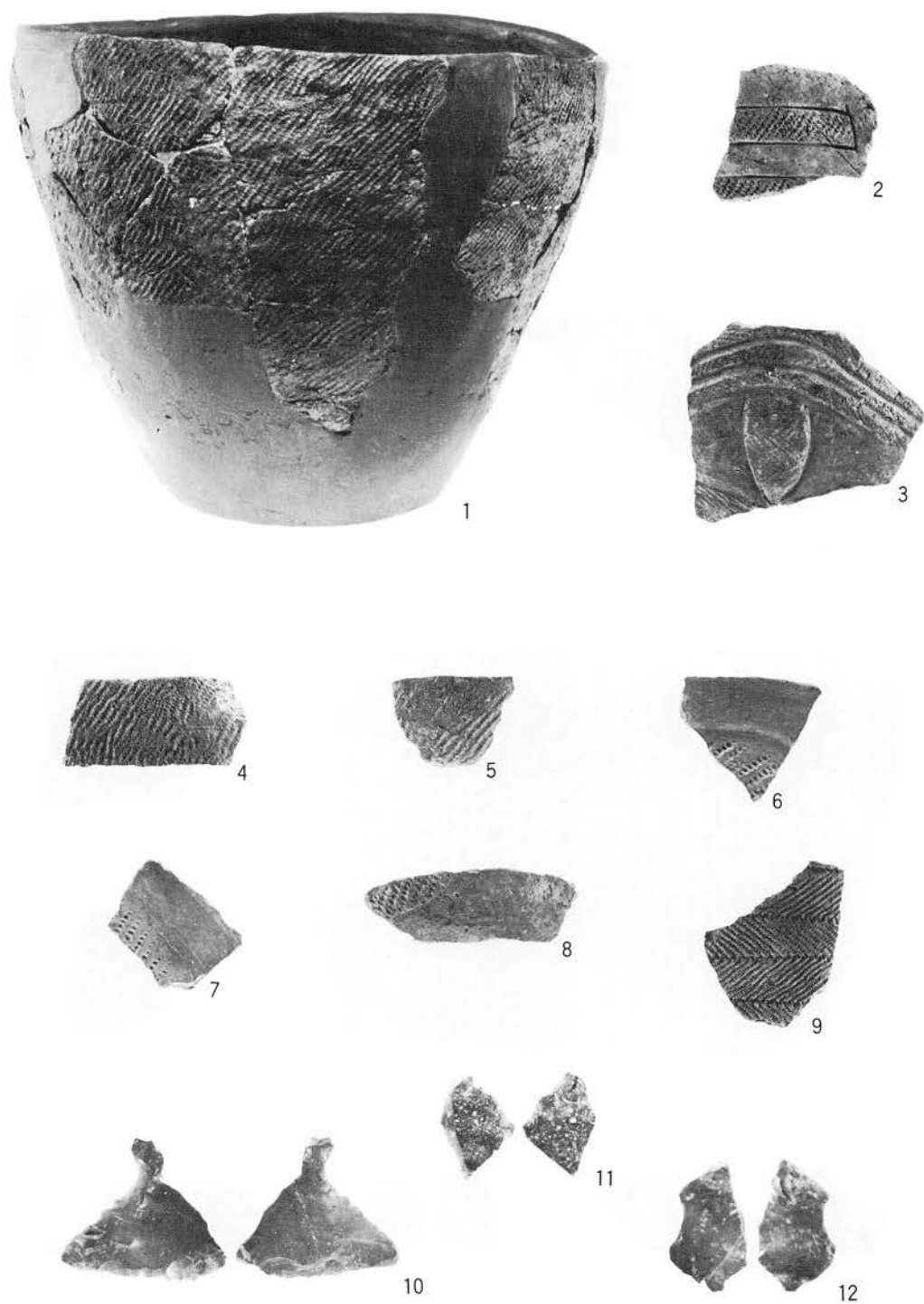
I E-1 住居址



I E-2 住居址

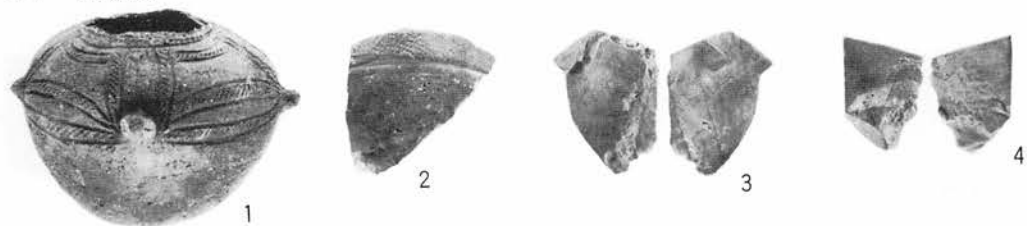


写真図版47 出土遺物(I E-1・2住居址)

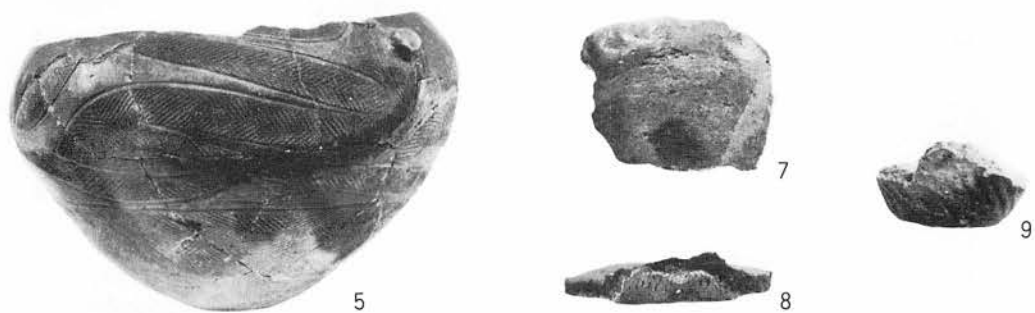


写真図版48 出土遺物(I E-3住居址)

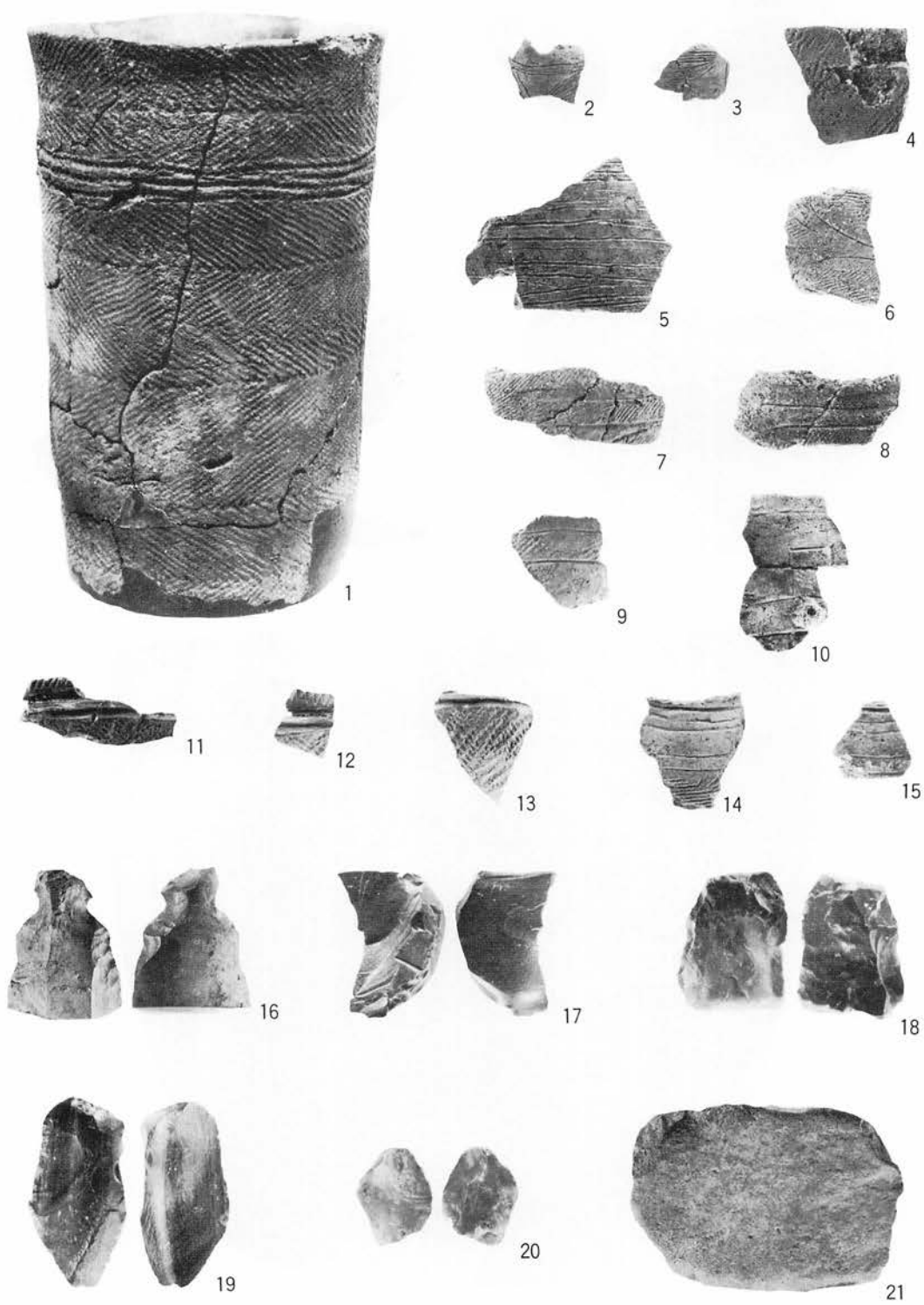
Ⅱ F-1 住居址



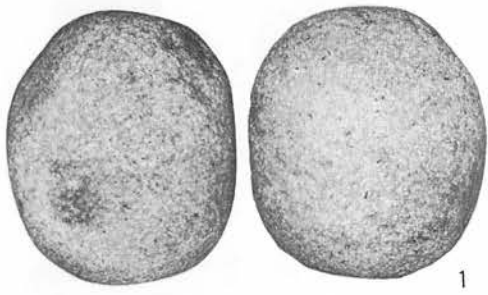
Ⅱ F-2 住居址



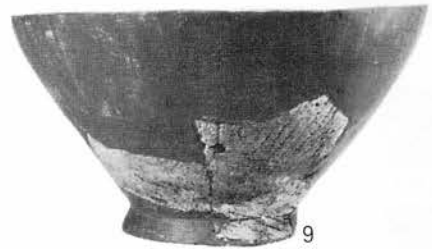
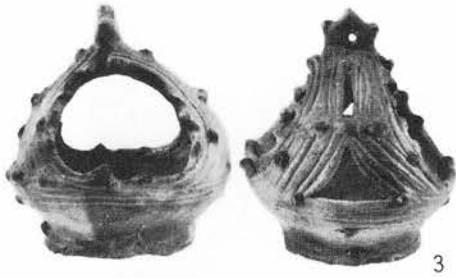
写真図版49 出土遺物(Ⅱ F-1・2住居址)



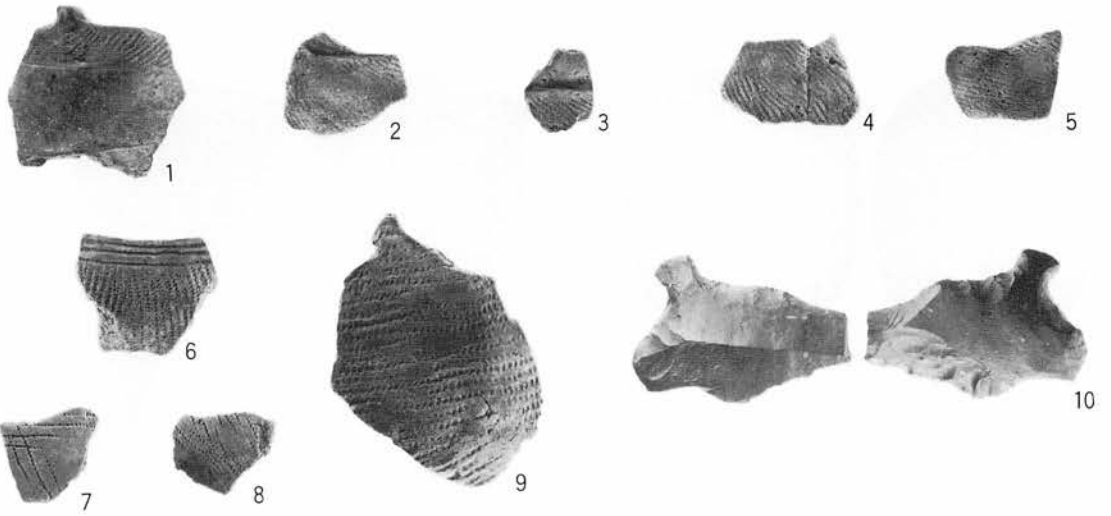
写真図版50 出土遺物(ⅡF-2住居址)



Ⅱ F-3 住居址



写真図版51 出土遺物(Ⅱ F-2・3住居址)

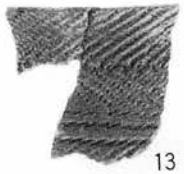


Ⅱ F-4 住居址



12

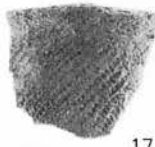
11



13



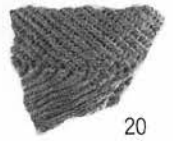
15



17



19



20



14



16

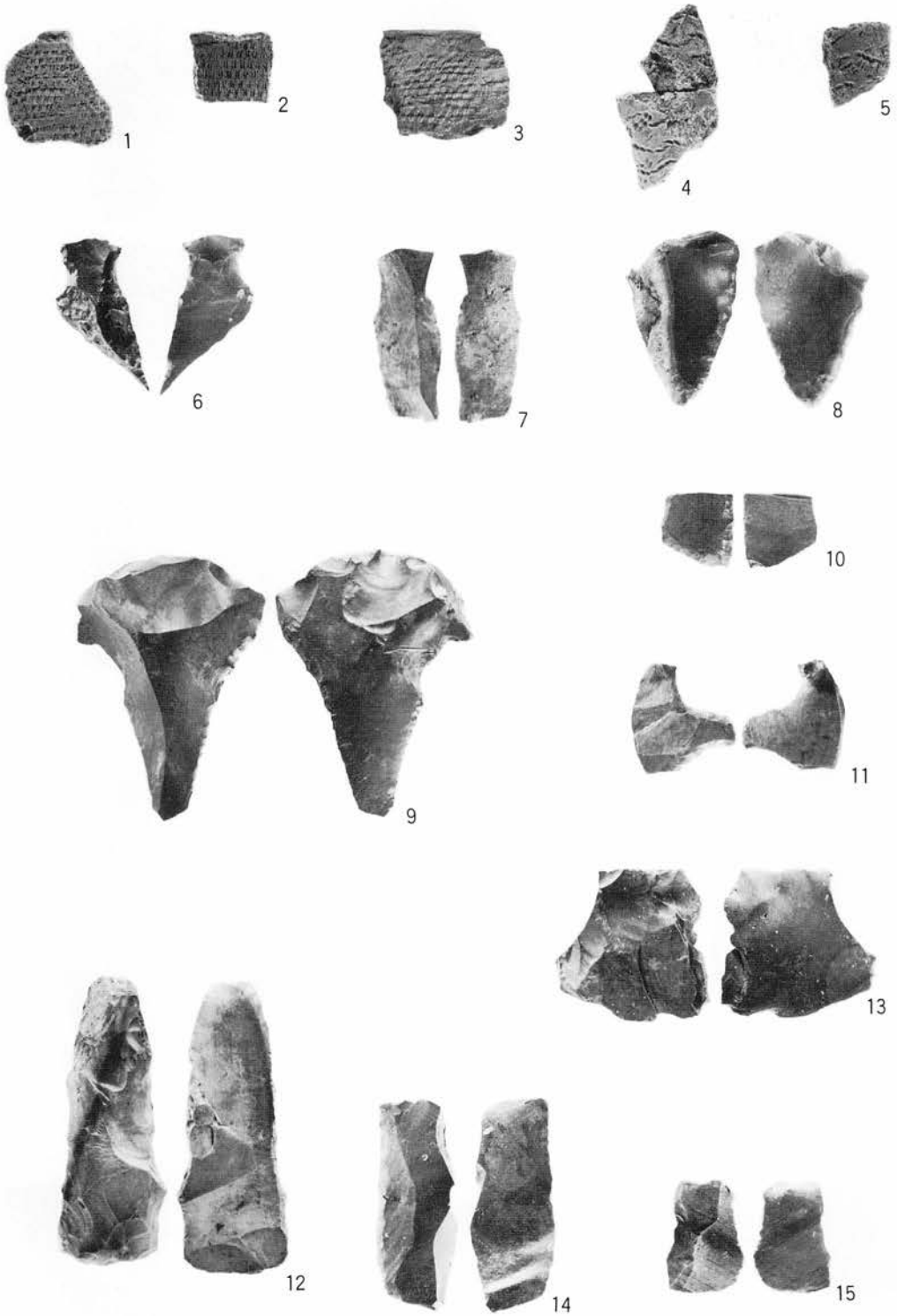


18



21

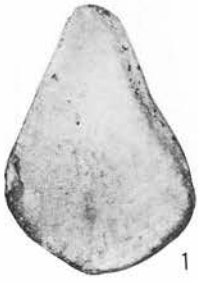
写真図版52 出土遺物(Ⅱ F-3・4住居址)



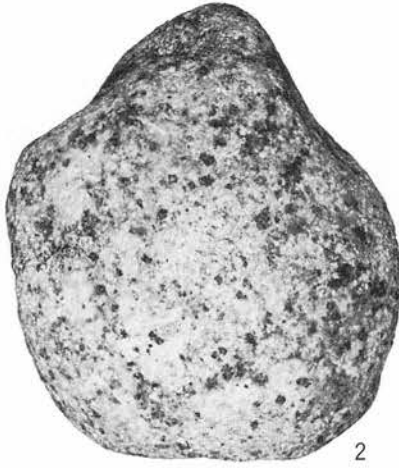
写真図版53 出土遺物(ⅡF-4住居址)



写真図版54 出土遺物(ⅡF-4住居址)



1



2



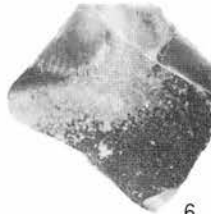
3



4



5



6

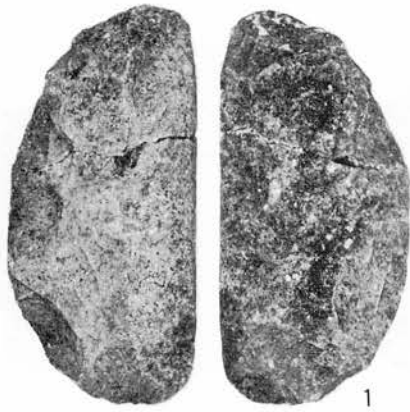


7

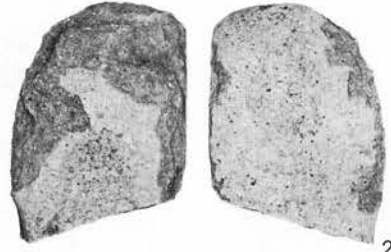


8

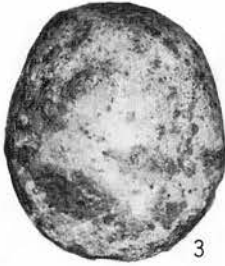
写真図版55 出土遺物(Ⅱ F-4・5住居址)



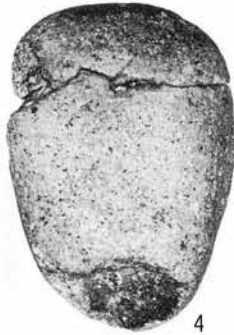
1



2



3



4



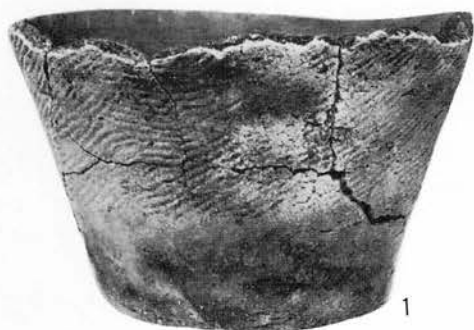
5



6

写真図版56 出土遺物(ⅡF-5住居址)

Ⅲ E-2ピット



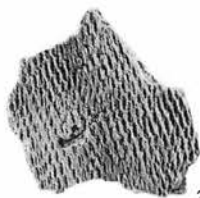
1

Ⅱ F-2陥し穴



2

Ⅱ F-3陥し穴



3



4

Ⅲ E-4陥し穴



5



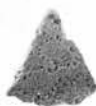
7

Ⅲ F-2陥し穴



9

Ⅱ F-8陥し穴



6

Ⅲ F-1陥し穴



8

Ⅲ F-3陥し穴



10

写真図版57 出土遺物(Ⅲ F-2ピット、Ⅱ F-2・3・8、Ⅲ F-1・2・3陥し穴)

Ⅲ E - 1 埋設土器



1

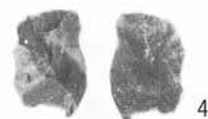


3

Ⅲ E - 1 配石



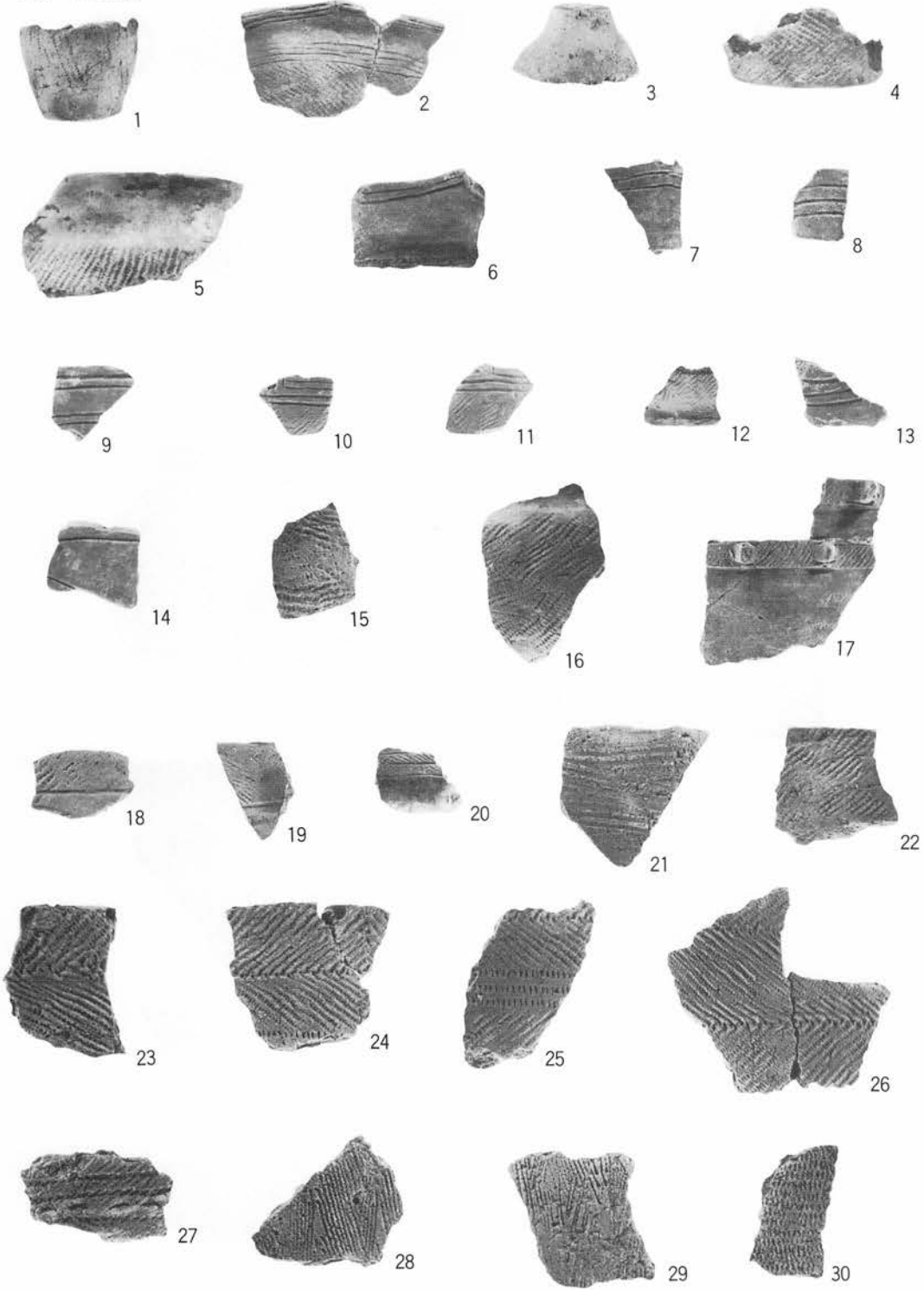
2



4

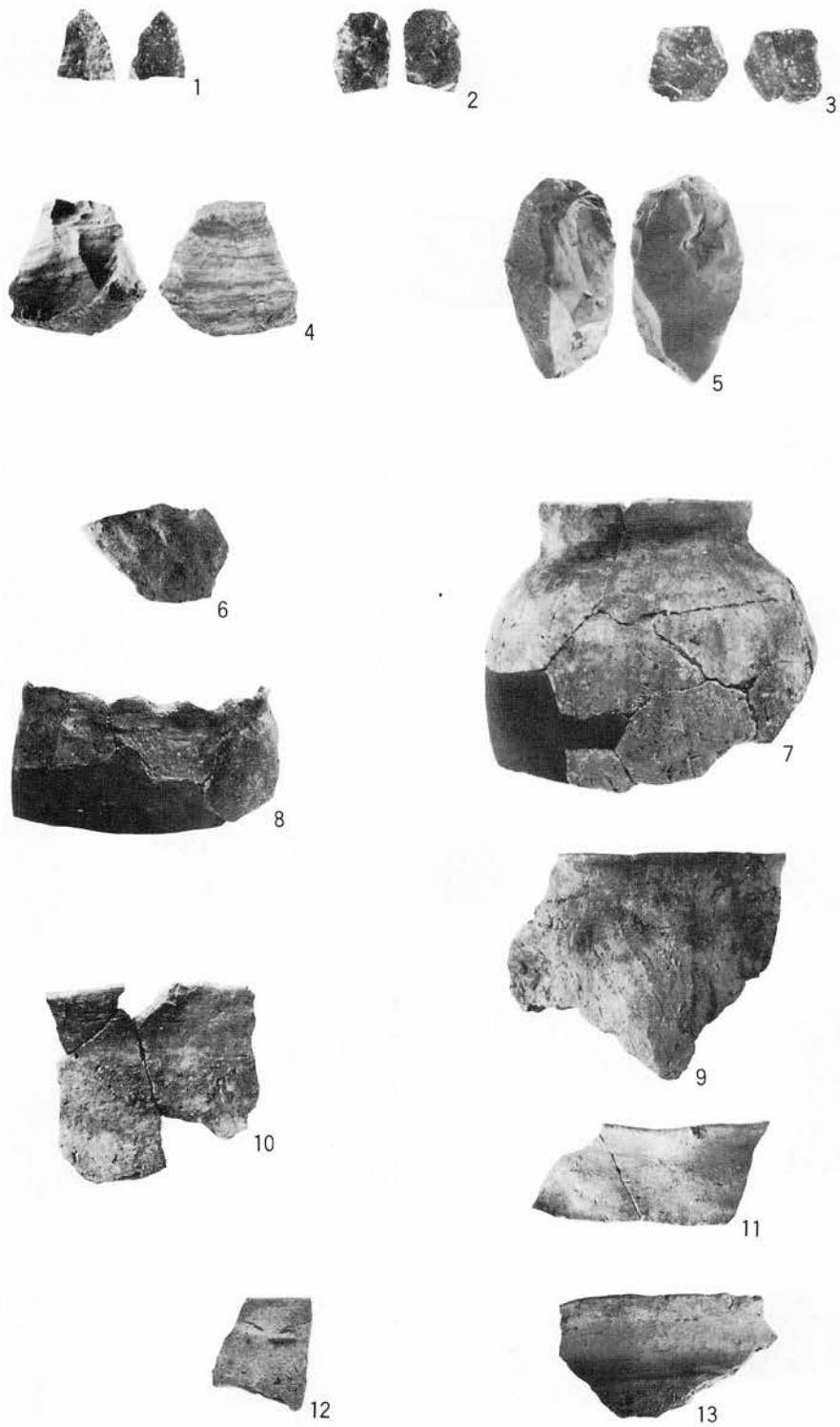
写真図版58 出土遺物(Ⅲ F - 1 埋設土器、Ⅲ E - 1 配石)

I E-4 住居址

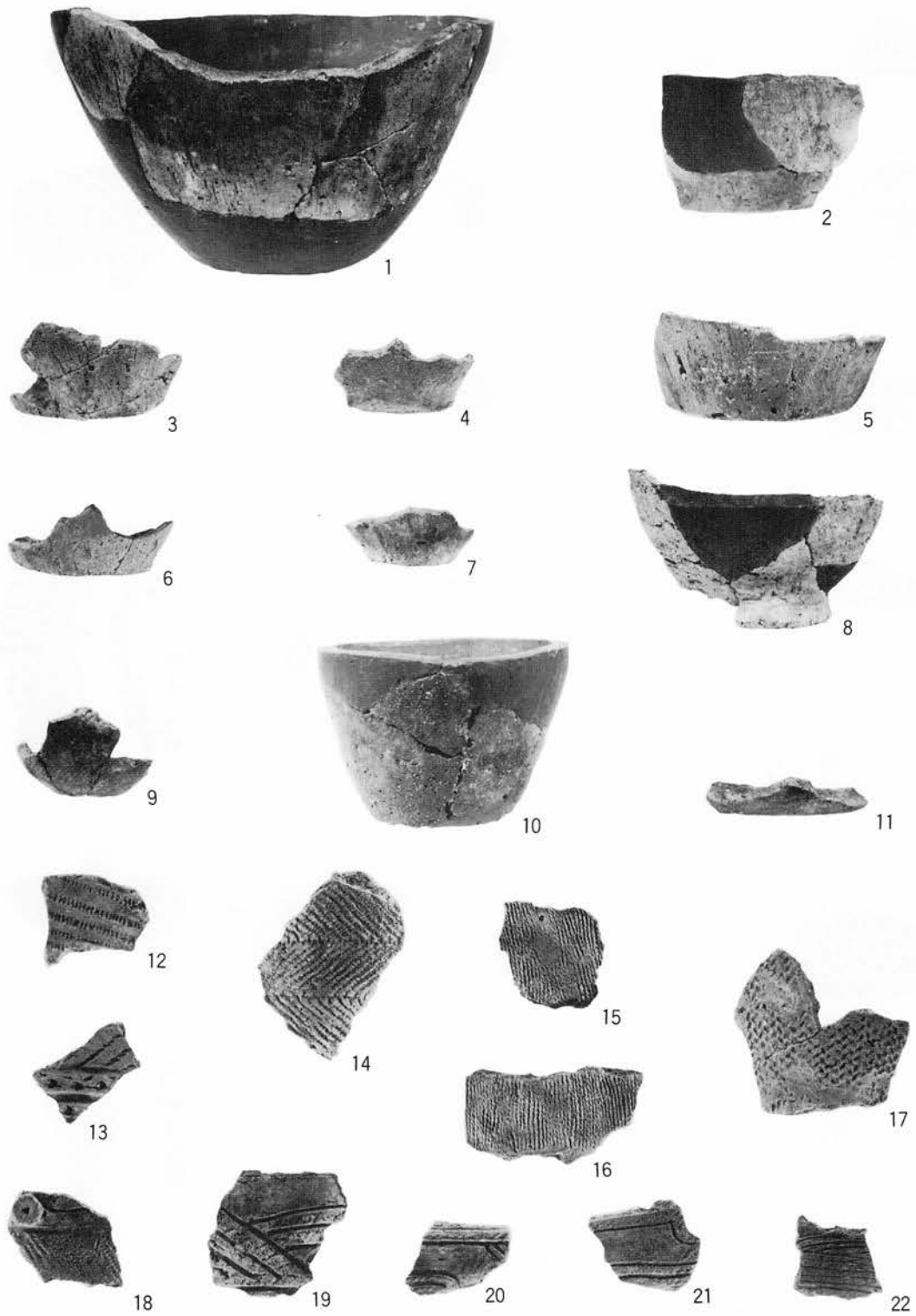


写真図版59 出土遺物 (I E-4 住居址)

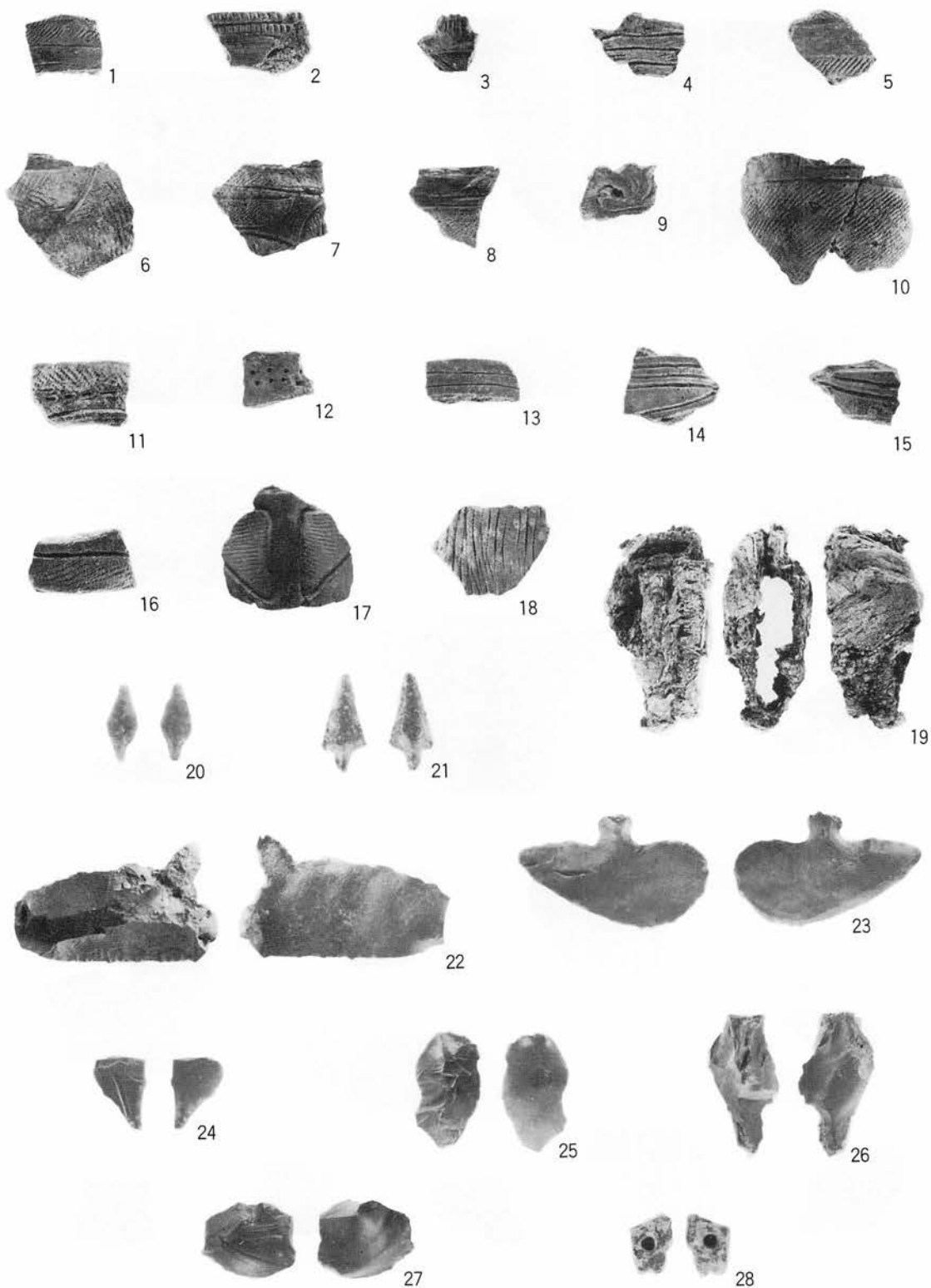
I E-5 住居址



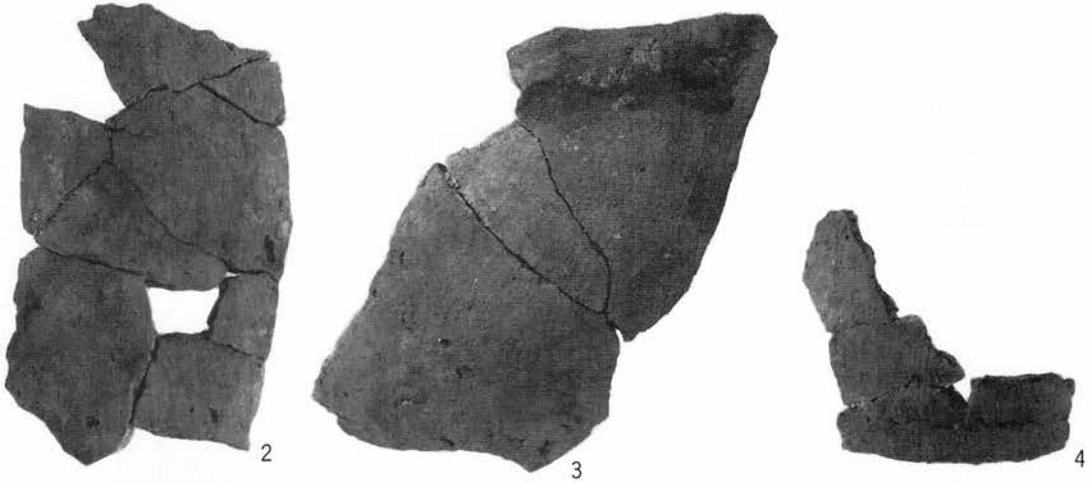
写真図版60 出土遺物 (I E-4・5住居址)



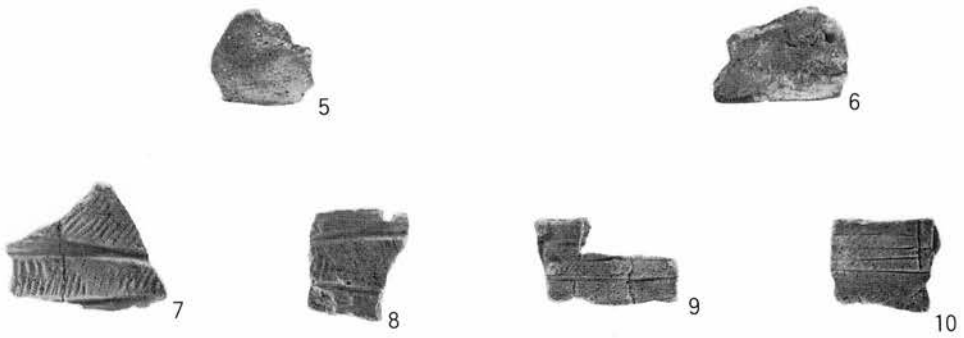
写真図版61 出土遺物 (I E-5住居址)



写真図版62 出土遺物 (I E-5住居址)



Ⅱ F-6住居址

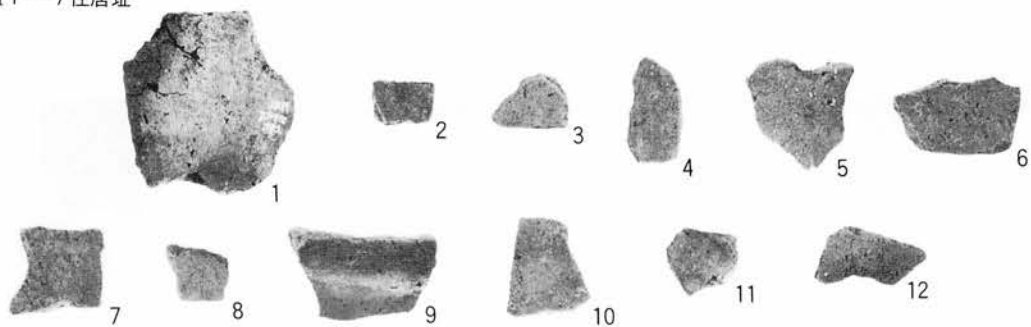


写真図版63 出土遺物(Ⅰ E-5・Ⅱ F-6住居址)



写真図版64 出土遺物(ⅡF-6住居址)

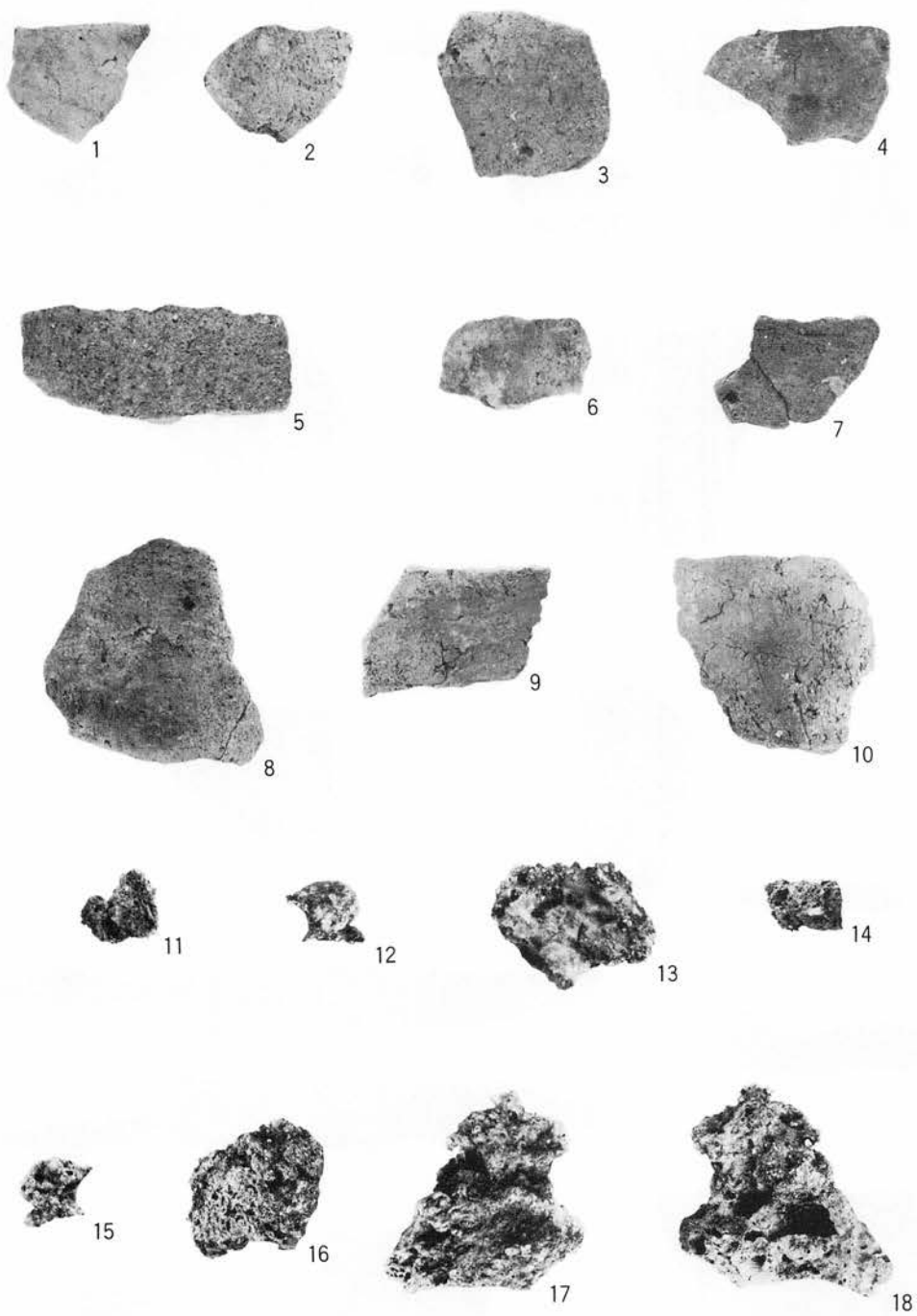
Ⅱ F-7 住居址



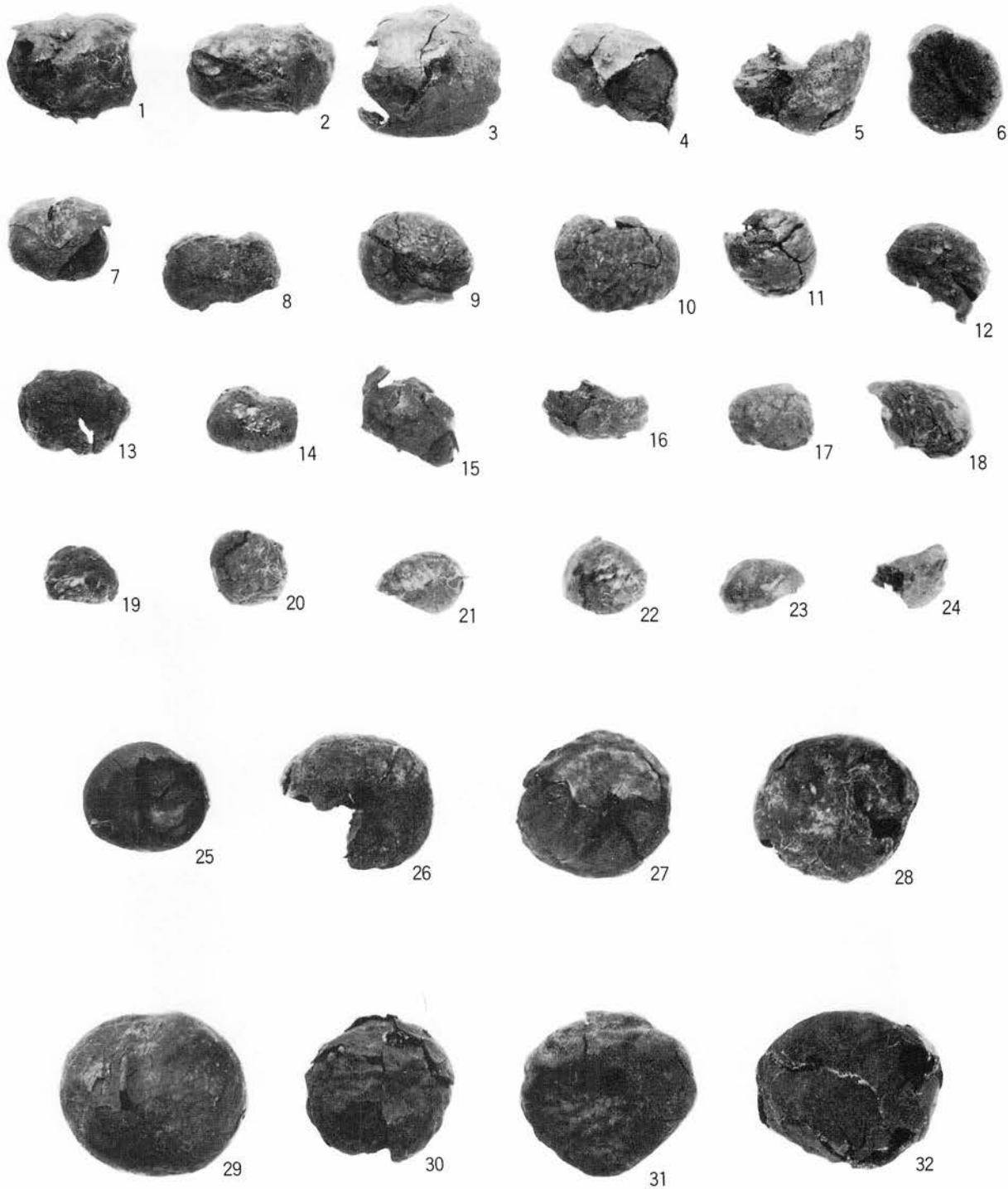
Ⅱ F-8 住居址



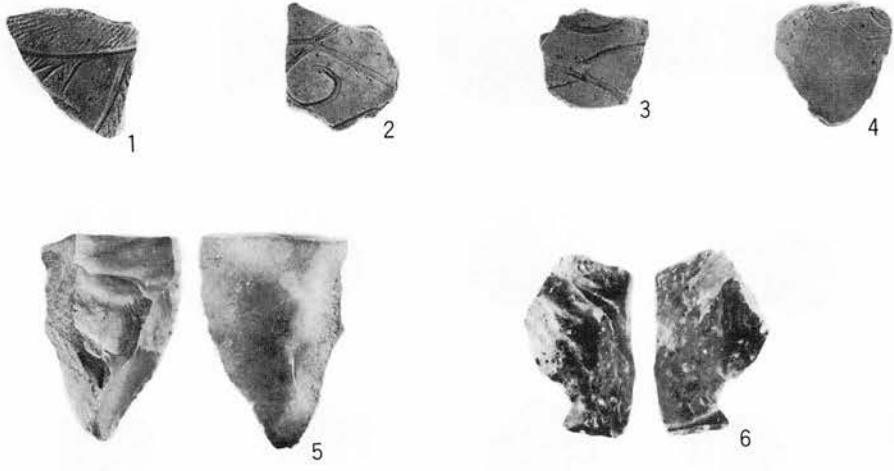
写真図版65 出土遺物(Ⅱ F-7・8住居址)



写真図版66 出土遺物(ⅡF-5住居址)



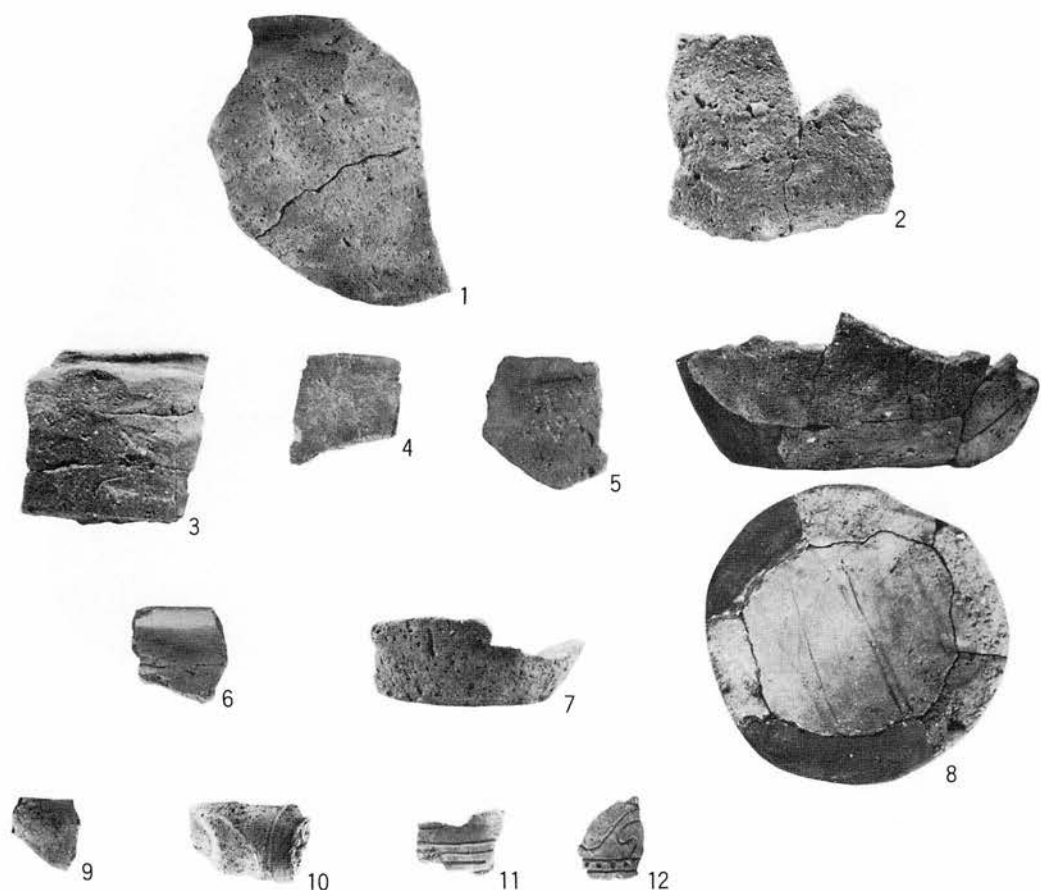
写真図版67 出土遺物(ⅡF-5住居址)



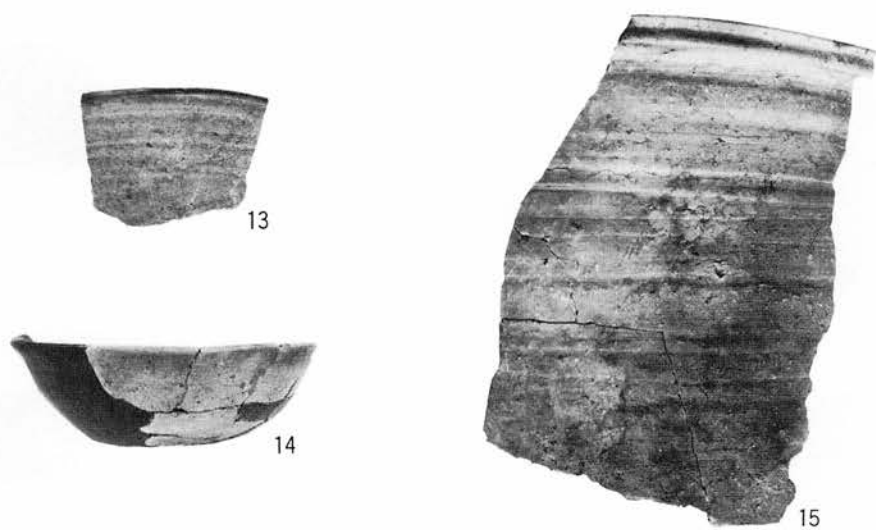
Ⅲ E - 1 住居址



写真図版68 出土遺物(Ⅱ F - 8 · Ⅲ E - 1 住居址)



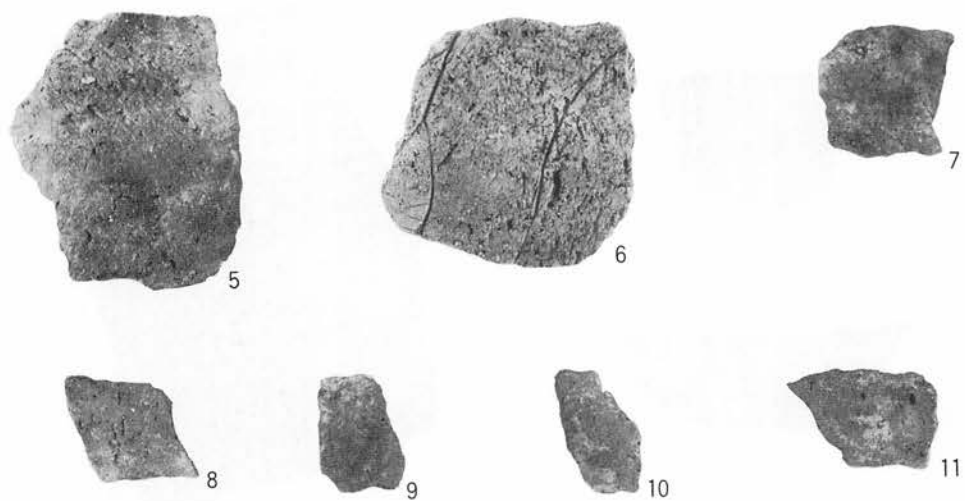
V F - 1 住居址



写真図版69 出土遺物(Ⅲ E - 1 · V F - 1 住居址)

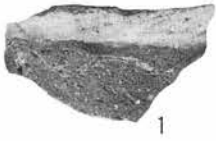


Ⅱ F-10住居址状



写真図版70 出土遺物(Ⅴ F-1住居址、Ⅱ F-10住居址状)

Ⅱ F-1ピット



1

Ⅲ E-3ピット



2



3



4



5

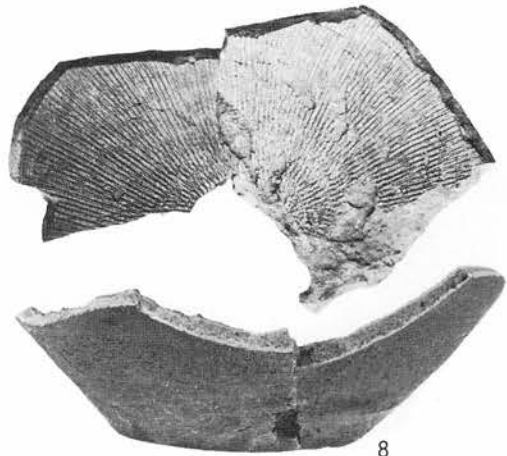


6

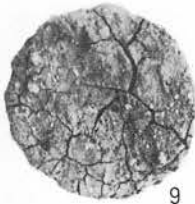
貯水槽跡



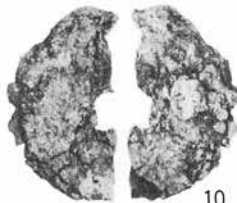
7



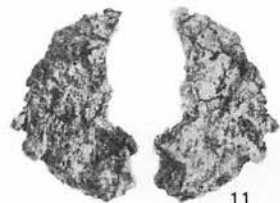
8



9



10



11



12

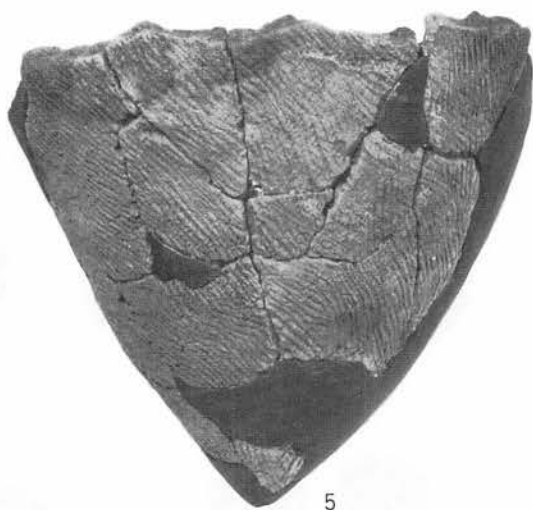
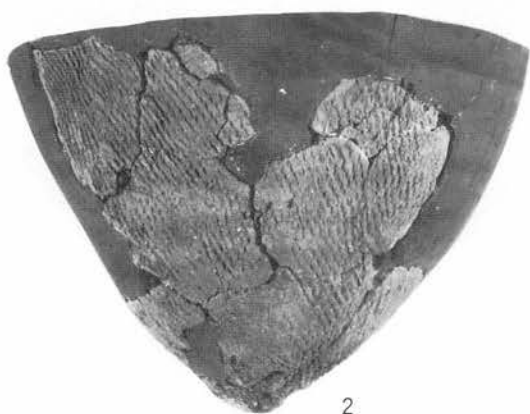
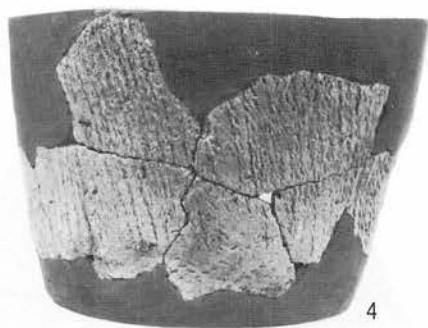


13

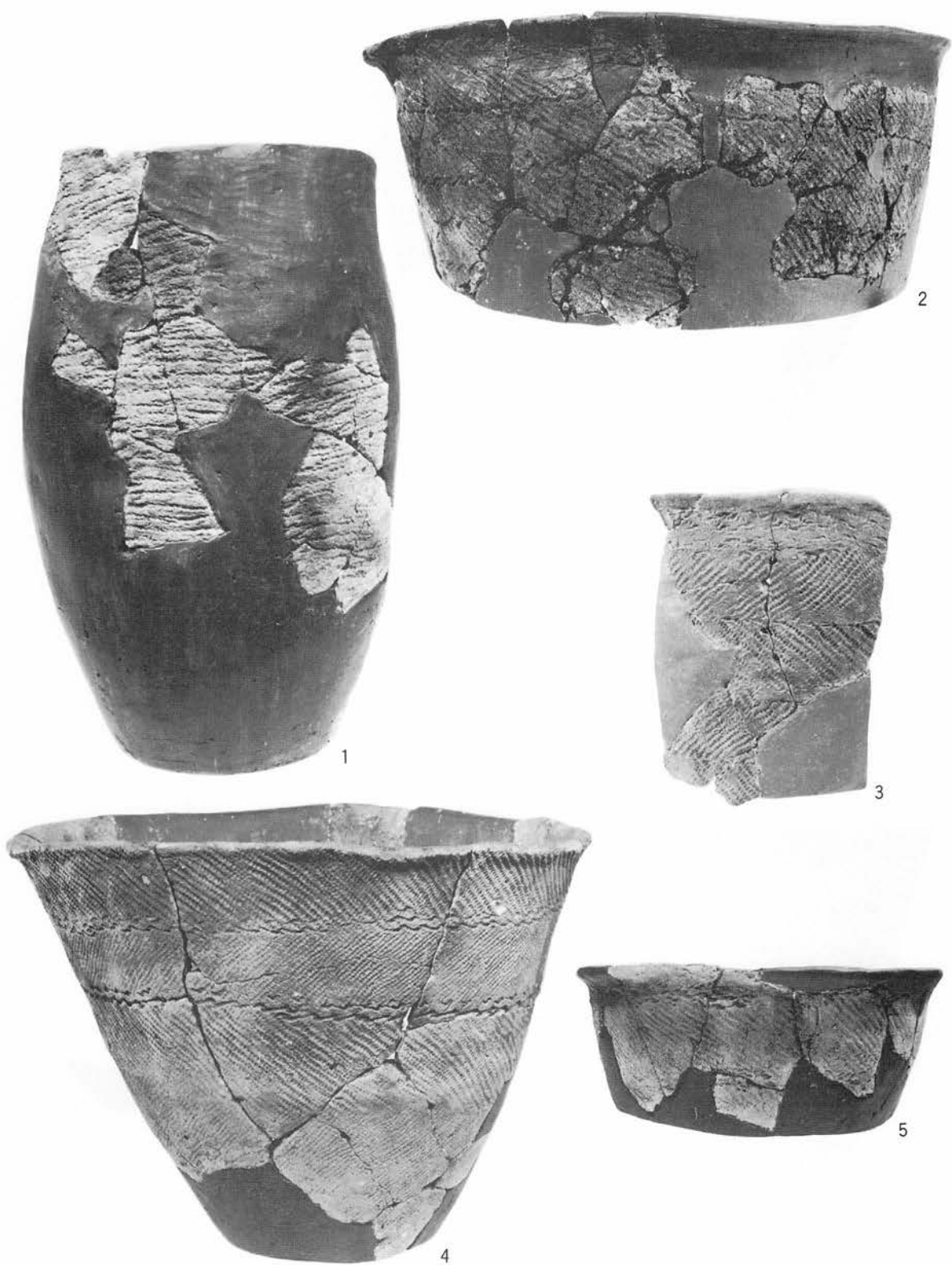


14

写真図版71 出土遺物(Ⅱ F-1・Ⅲ E-3ピット、貯水槽跡)



写真図版72 遺構外出土遺物



写真図版73 遺構外出土遺物



1



2



3

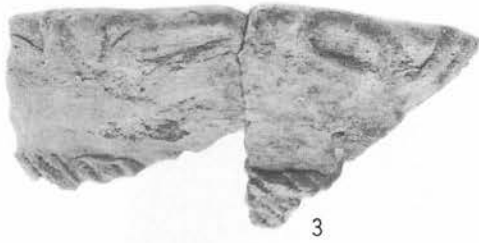
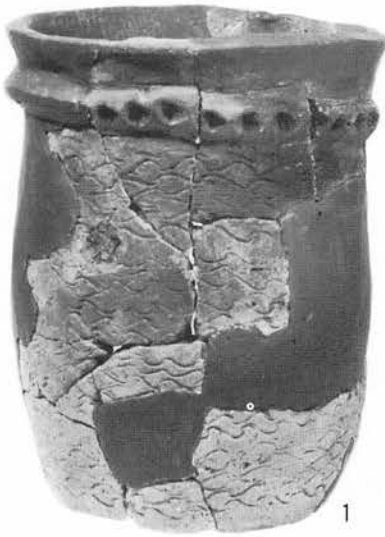


4



5

写真図版74 遺構外出土遺物



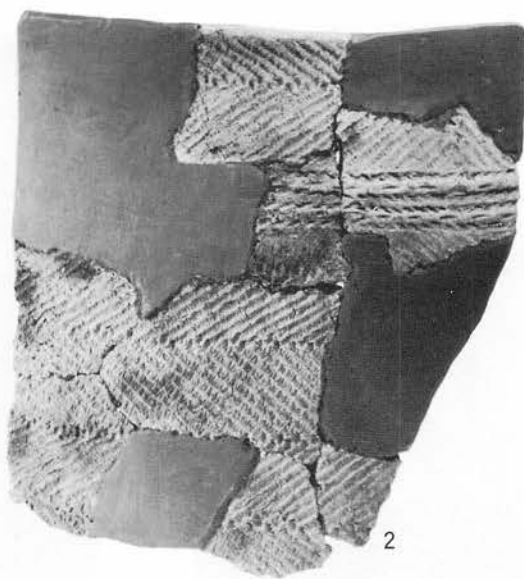
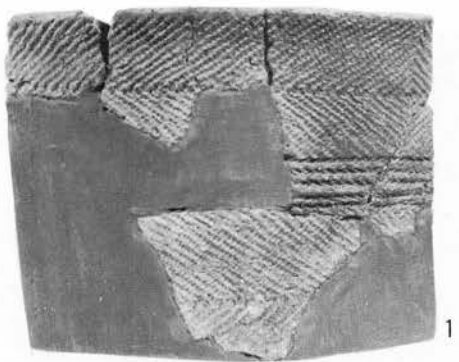
写真図版75 遺構外出土遺物



写真図版76 遺構外出土遺物



写真図版77 遺構外出土遺物



写真図版78 遺構外出土遺物



1



2



4



3

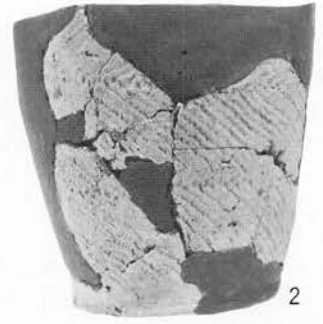


5

写真図版79 遺構外出土遺物



1



2



3



4



5



6



7

写真図版80 遺構外出土遺物



写真図版81 遺構外出土遺物



1



2



3



4



5

写真図版82 遺構外出土遺物



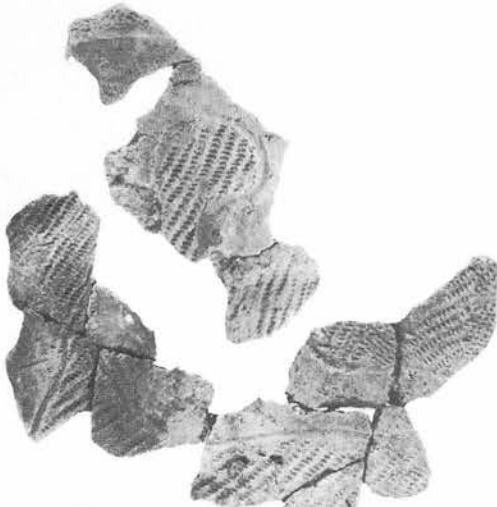
1



2

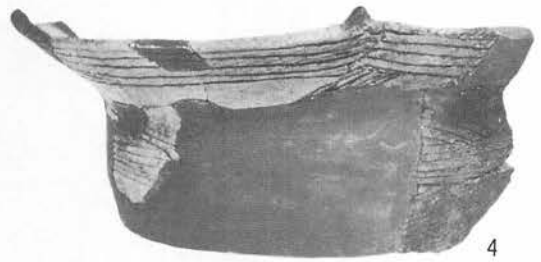


3



4

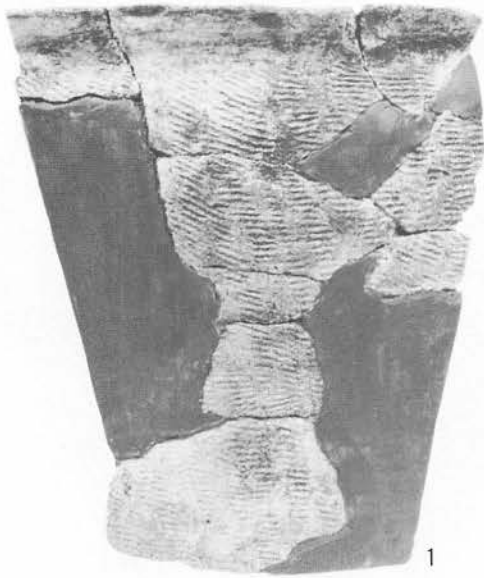
写真図版83 遺構外出土遺物



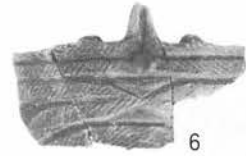
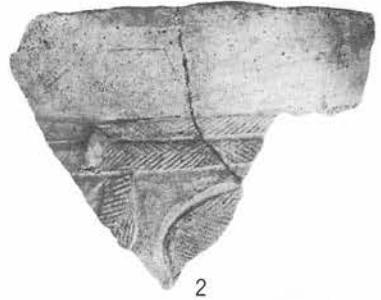
写真図版84 遺構外出土遺物



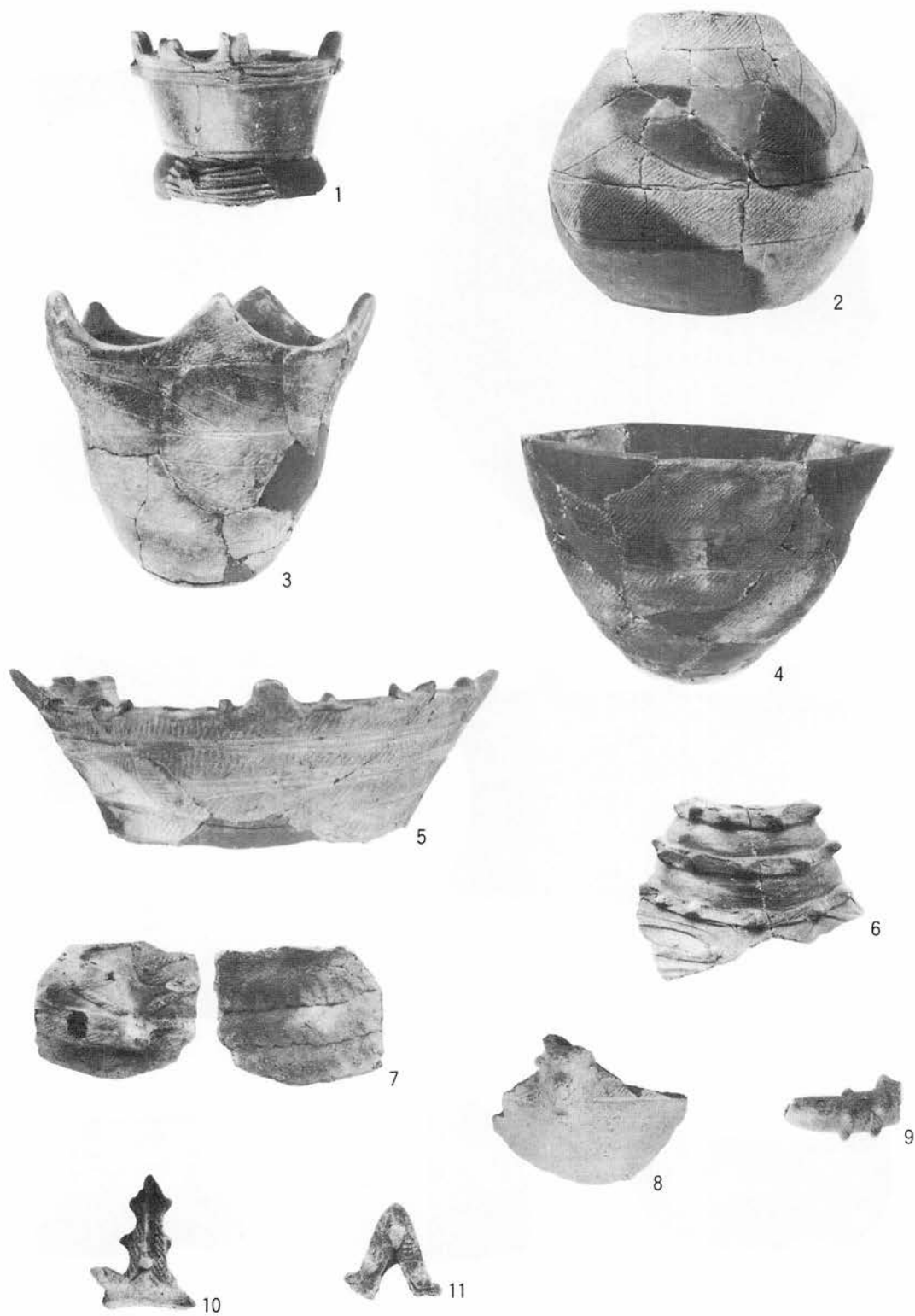
写真図版85 遺構外出土遺物



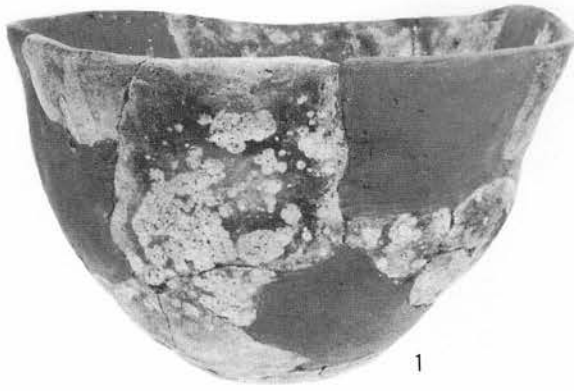
写真図版86 遺構外出土遺物



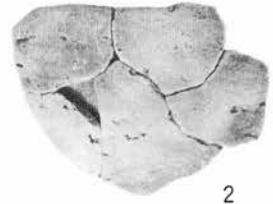
写真図版87 遺構外出土遺物



写真図版88 遺構外出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



12



13



14



11



15

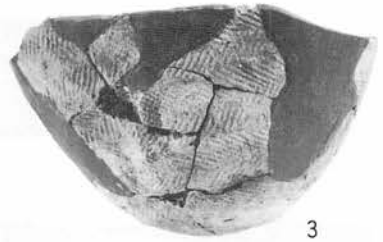


16



17

写真図版89 遺構外出土遺物



写真図版90 遺構外出土遺物



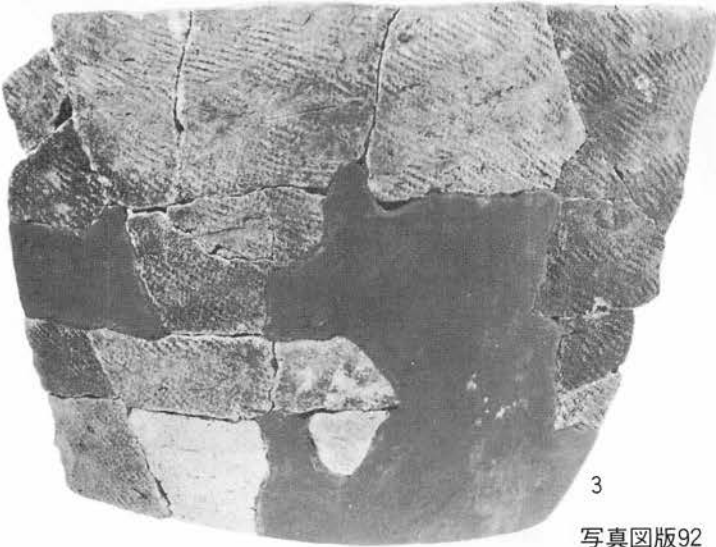
写真図版91 遺構外出土遺物



1

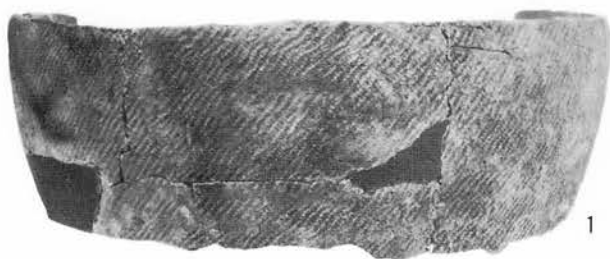


2



3

写真図版92 遺構外出土遺物



1



2

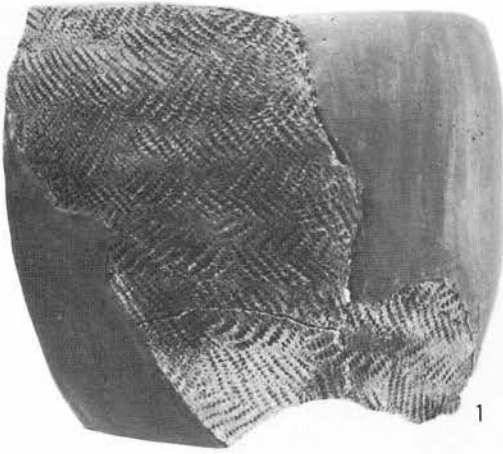


3



4

写真図版93 遺構外出土遺物



1



4



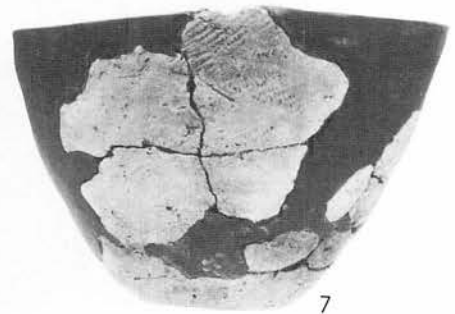
5



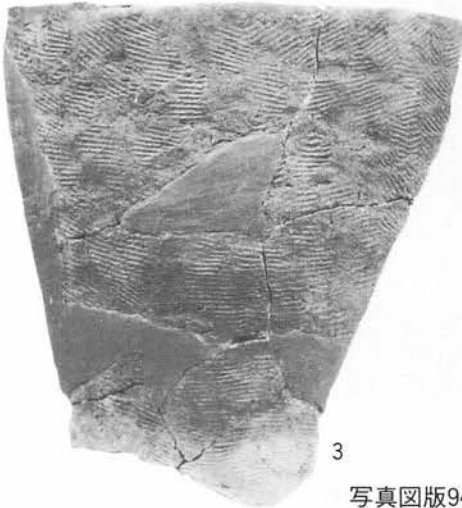
2



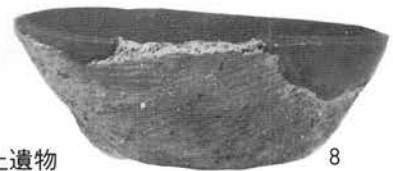
6



7

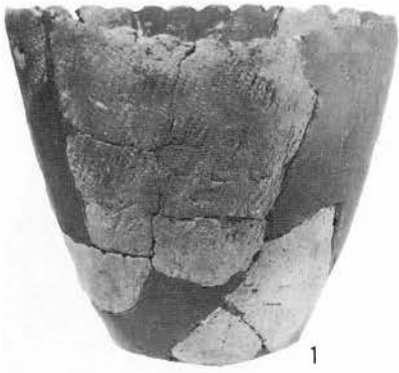


3



8

写真図版94 遺構外出土遺物



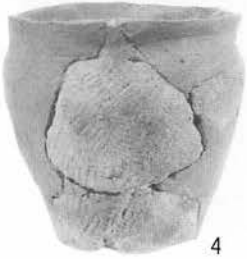
1



2



3



4



5



6



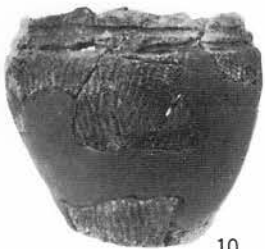
7



8



9



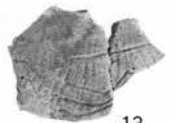
10



11

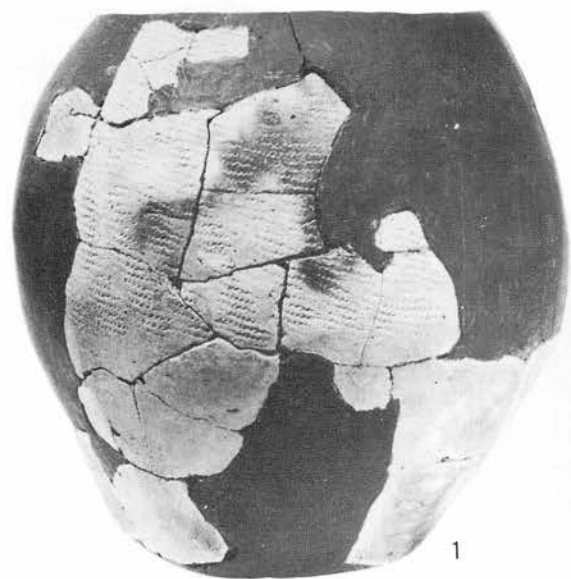


12



13

写真図版95 遺構外出土遺物



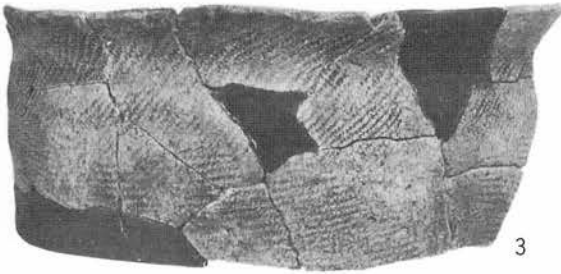
写真図版96 遺構外出土遺物



1



2



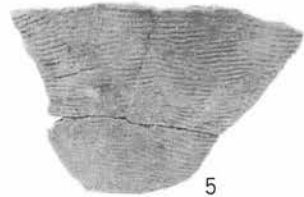
3



4

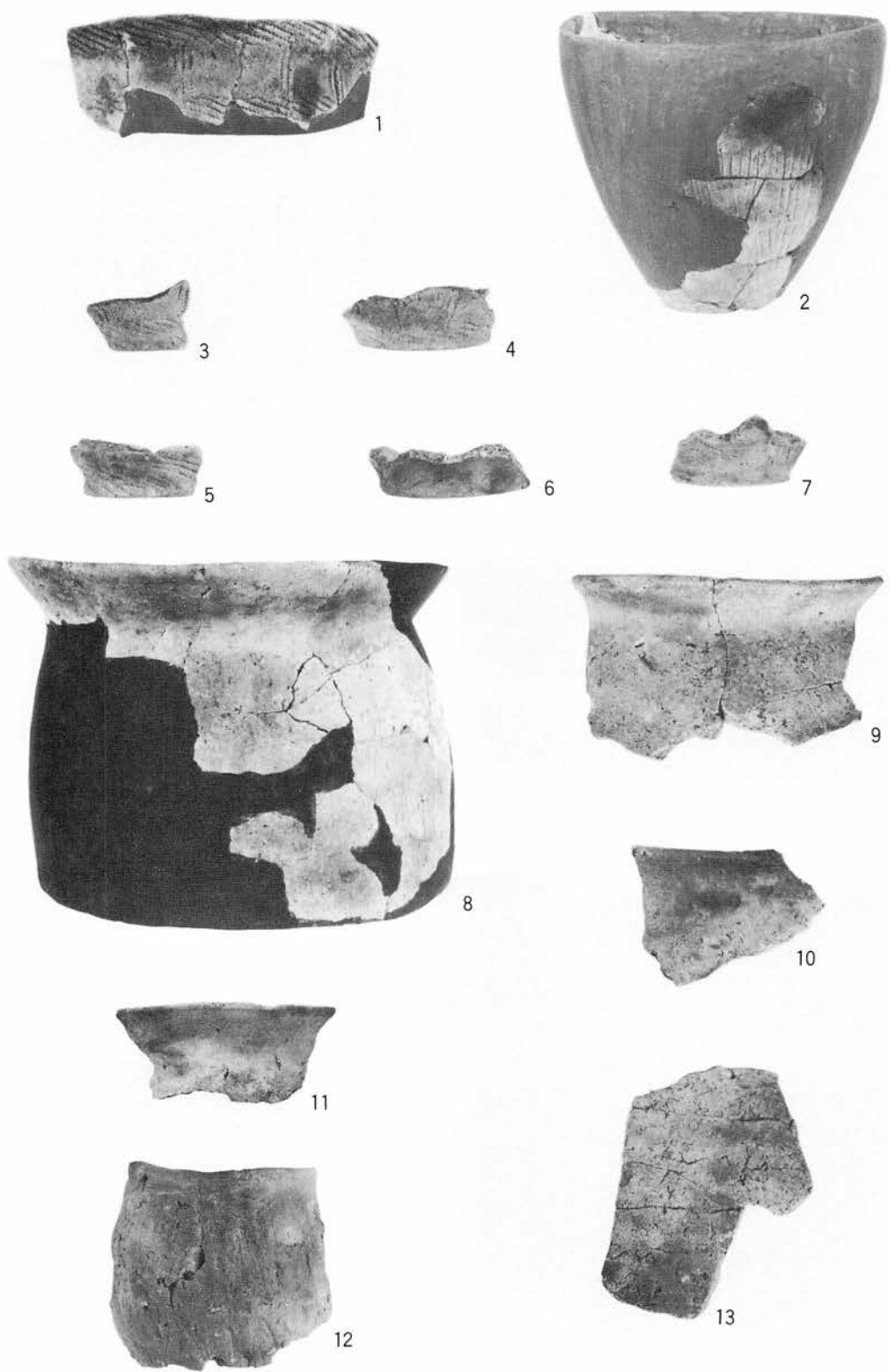


6



5

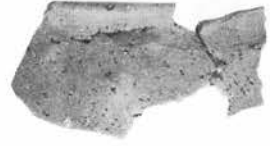
写真図版97 遺構外出土遺物



写真図版98 遺構外出土遺物



1



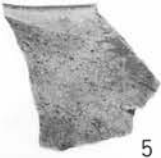
2



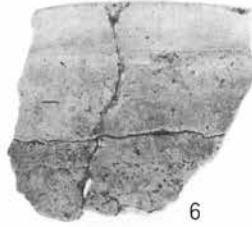
3



4



5



6



7



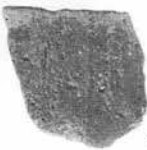
8



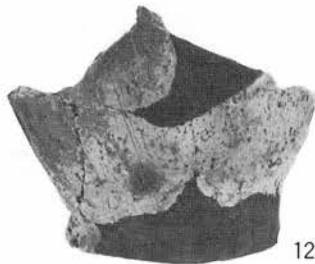
9



10



11

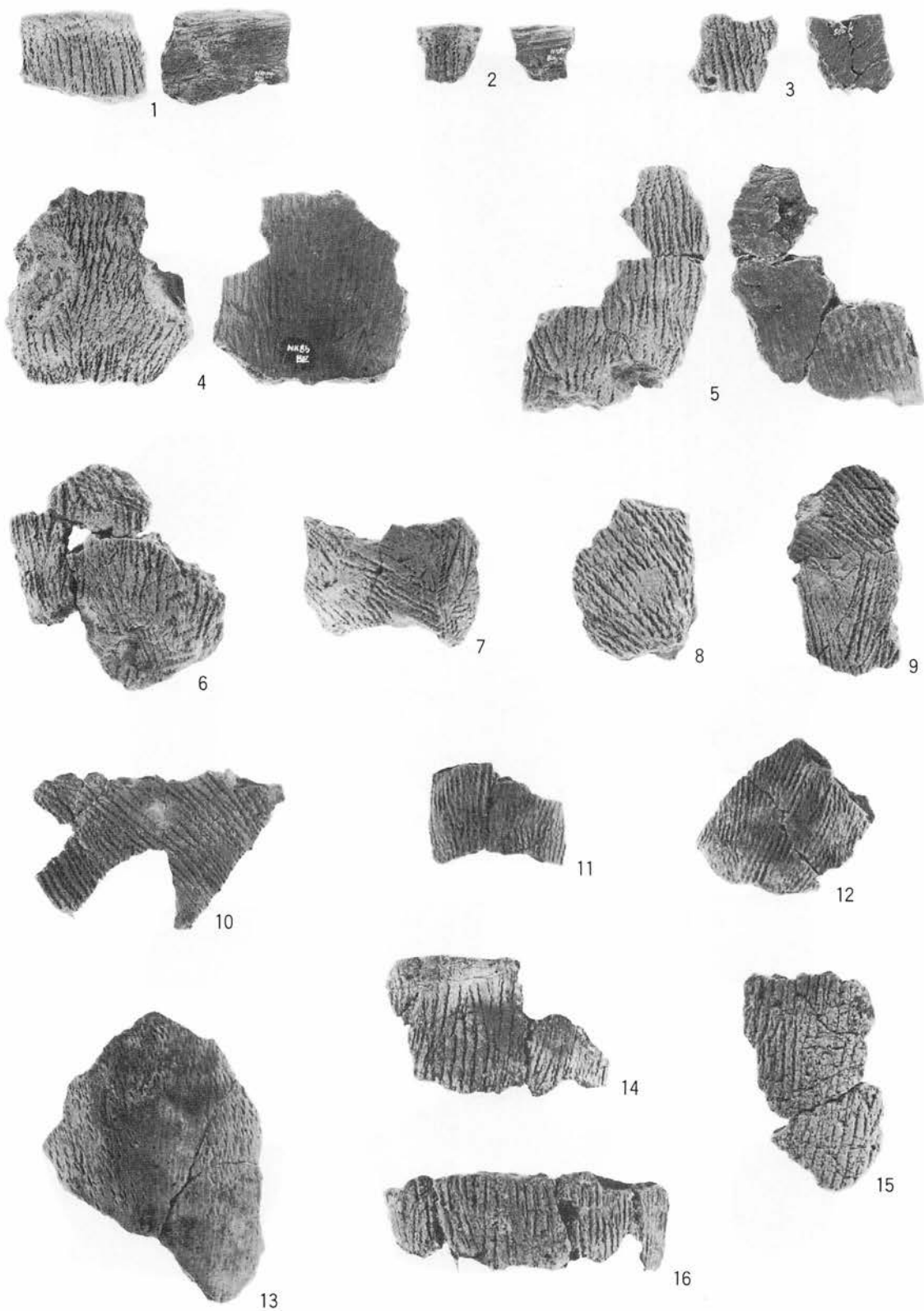


12

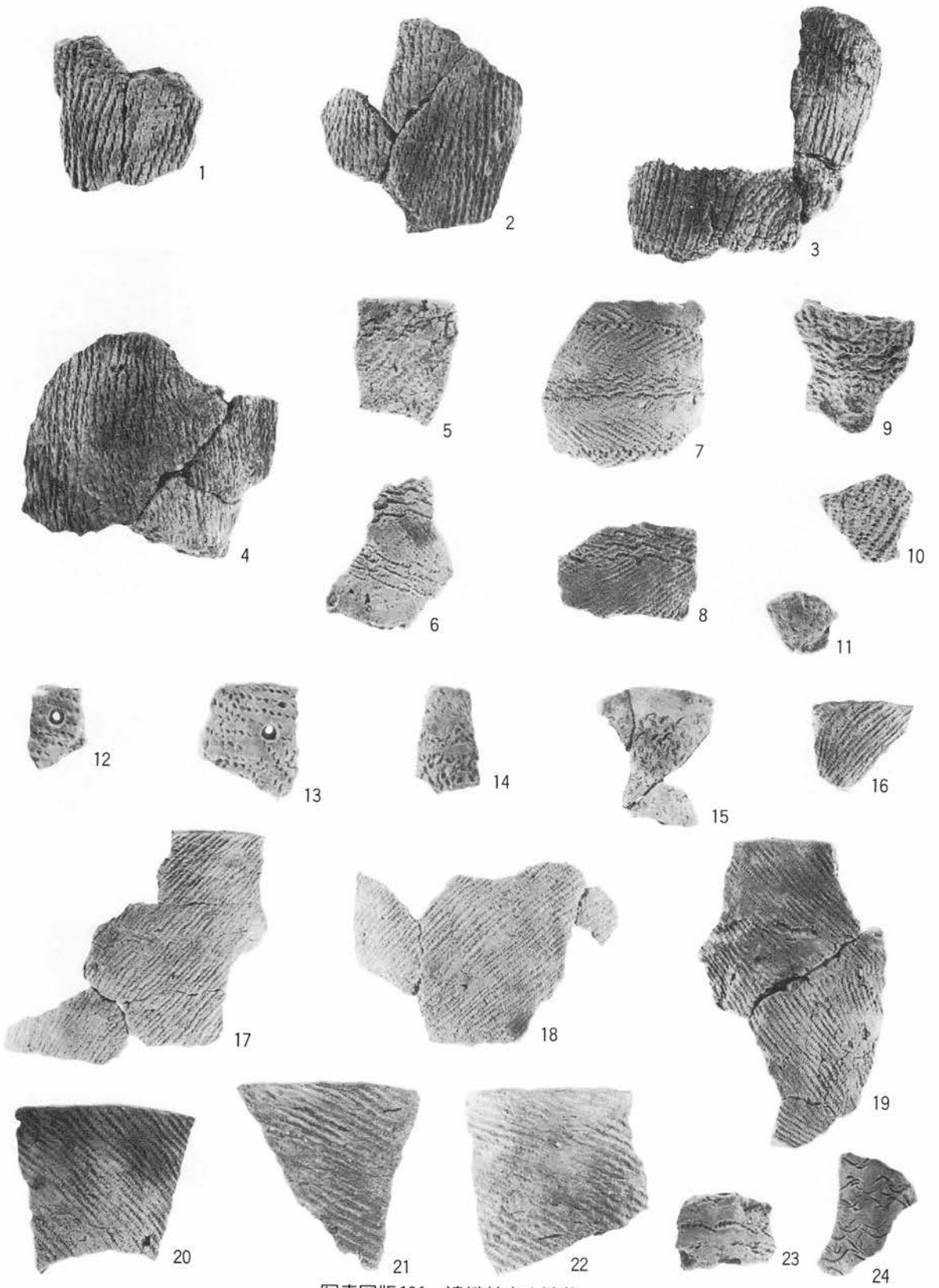


13

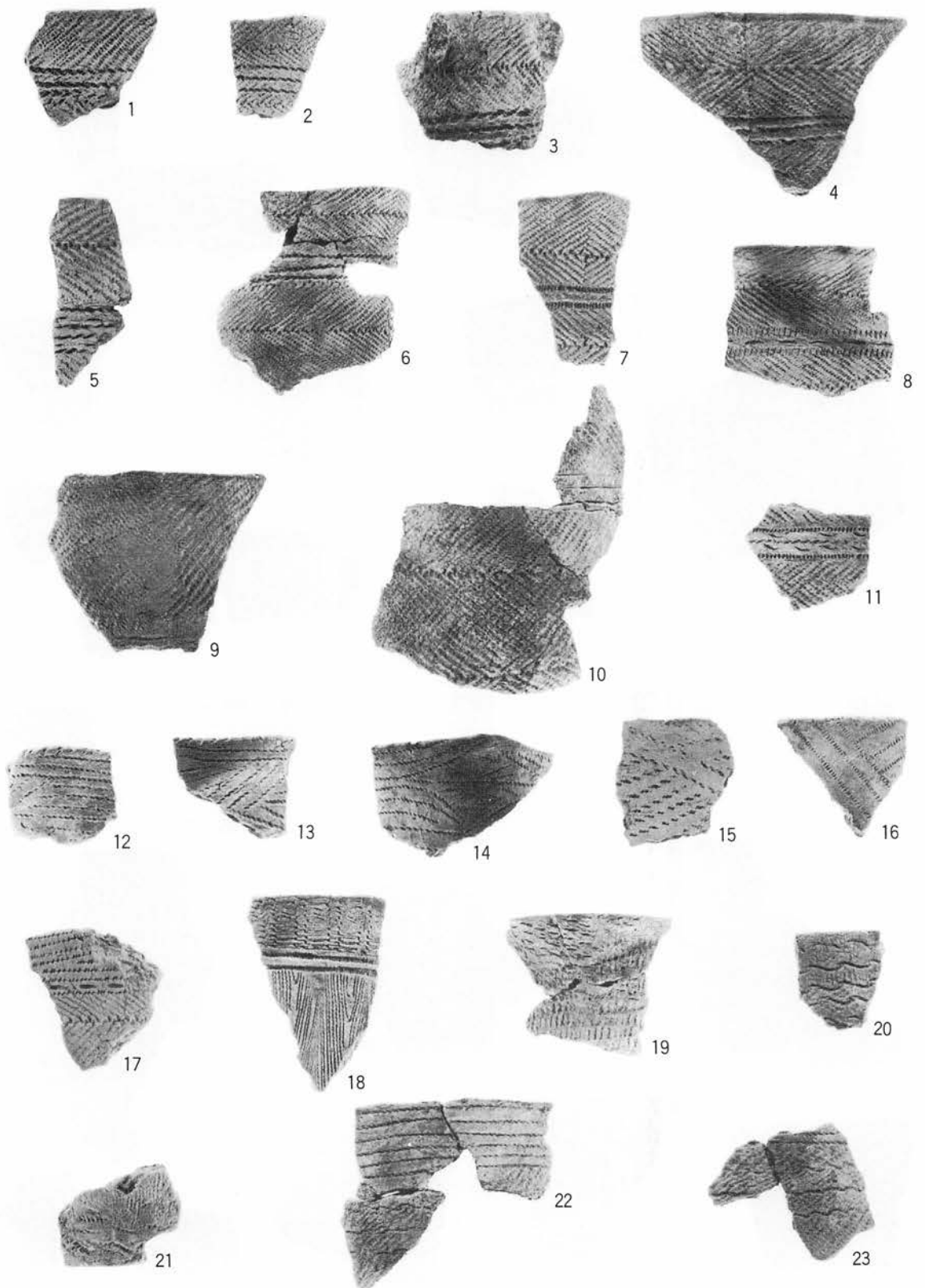
写真図版99 遺構外出土遺物



写真図版100 遺構外出土遺物



写真図版101 遺構外出土遺物



写真図版102 遺構外出土遺物



1



2



4



3



5



6



7



8



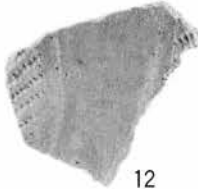
9



10



11



12



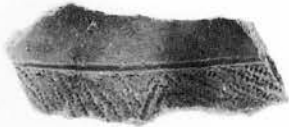
13



14



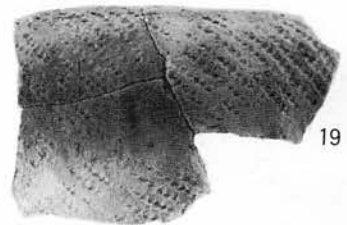
15



16



18

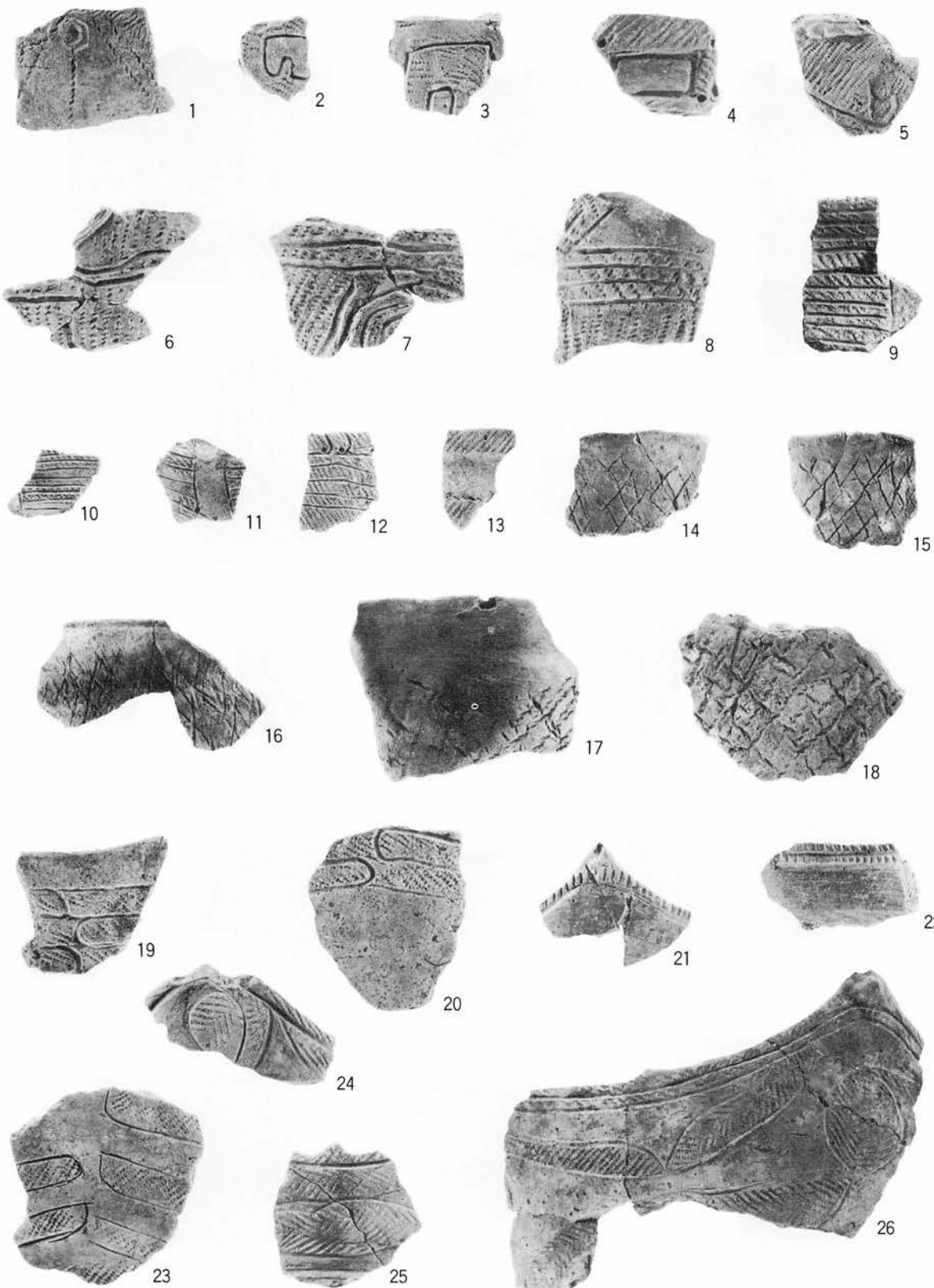


19

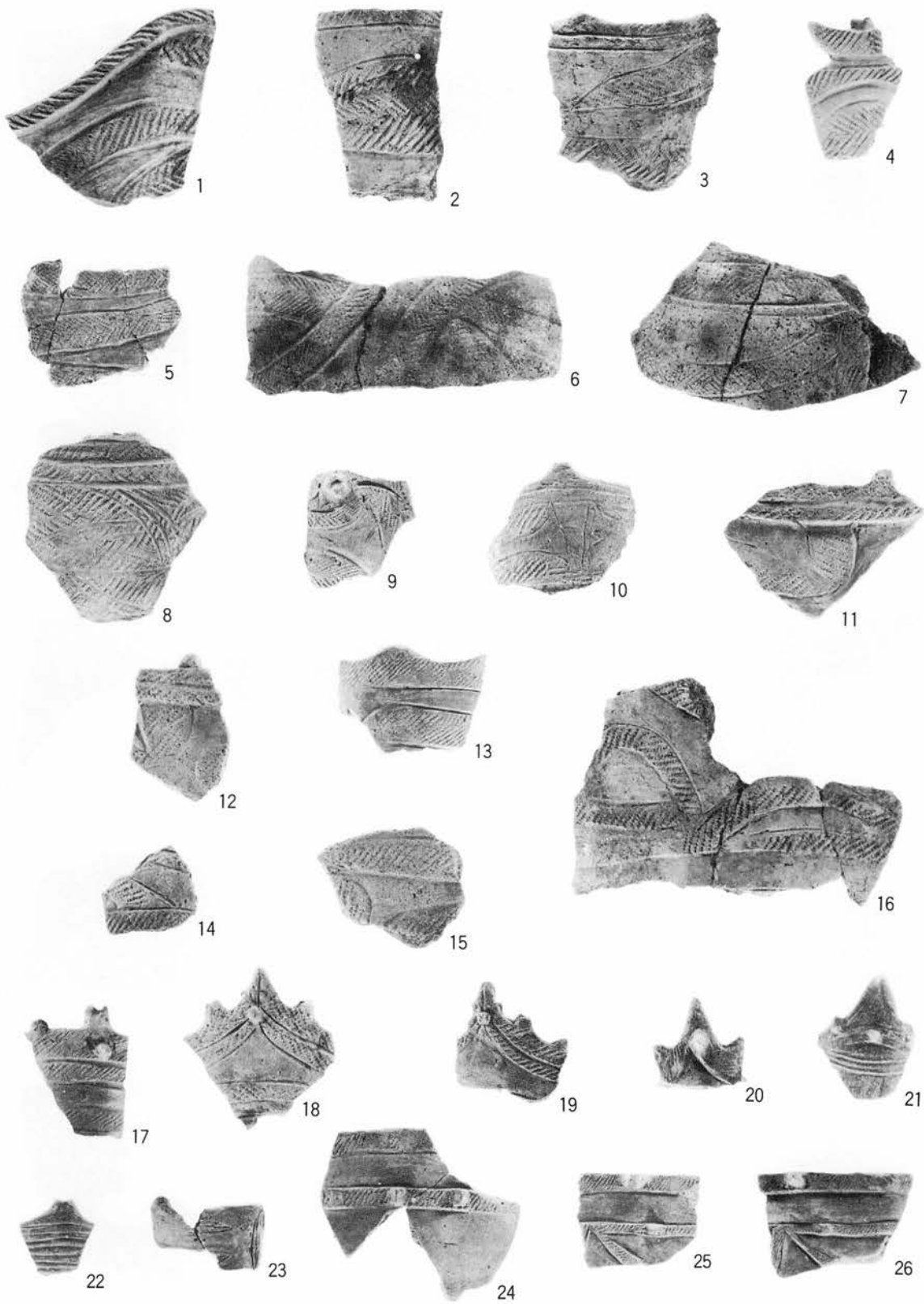


17

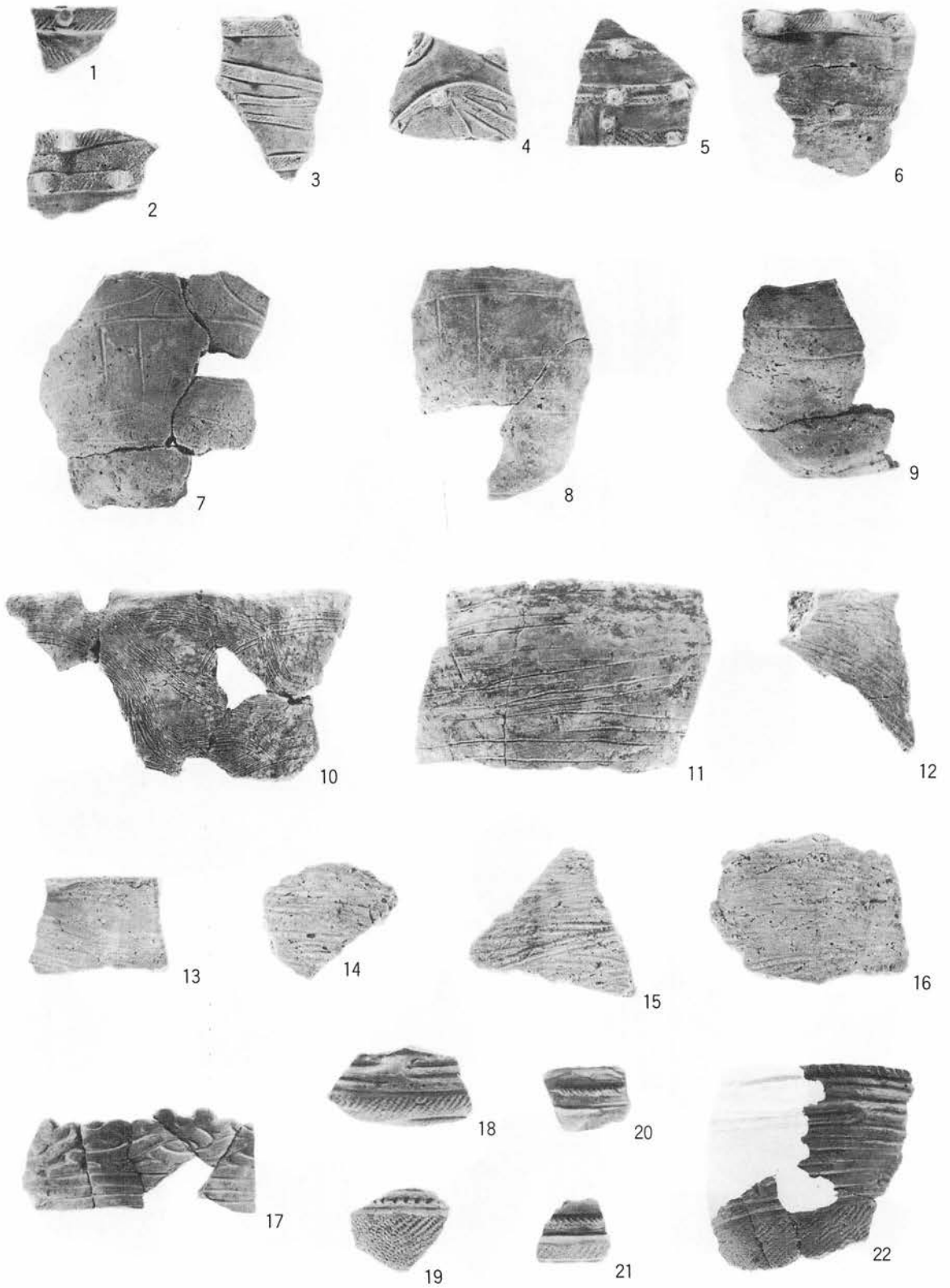
写真図版103 遺構外出土遺物



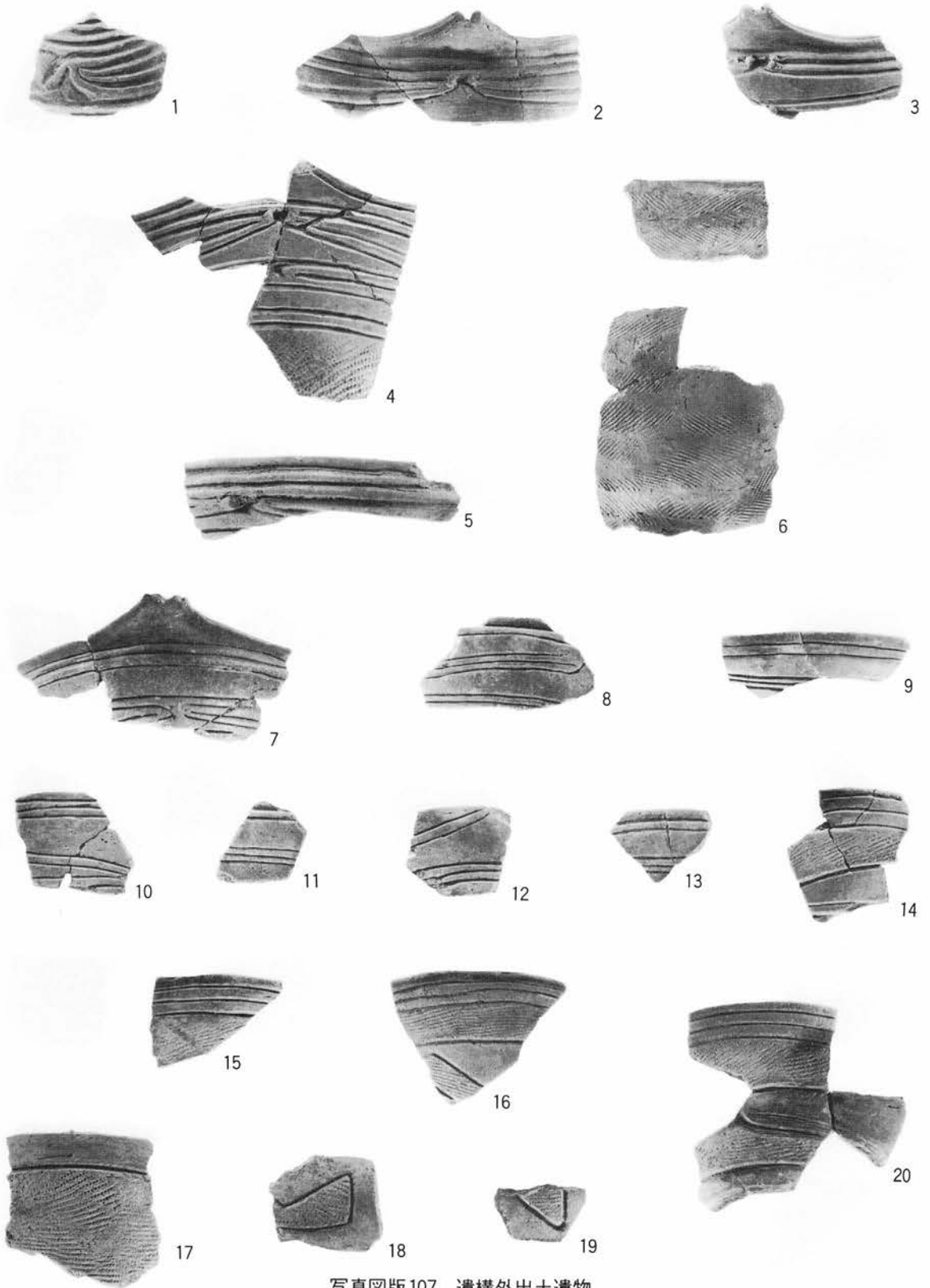
写真図版104 遺構外出土遺物



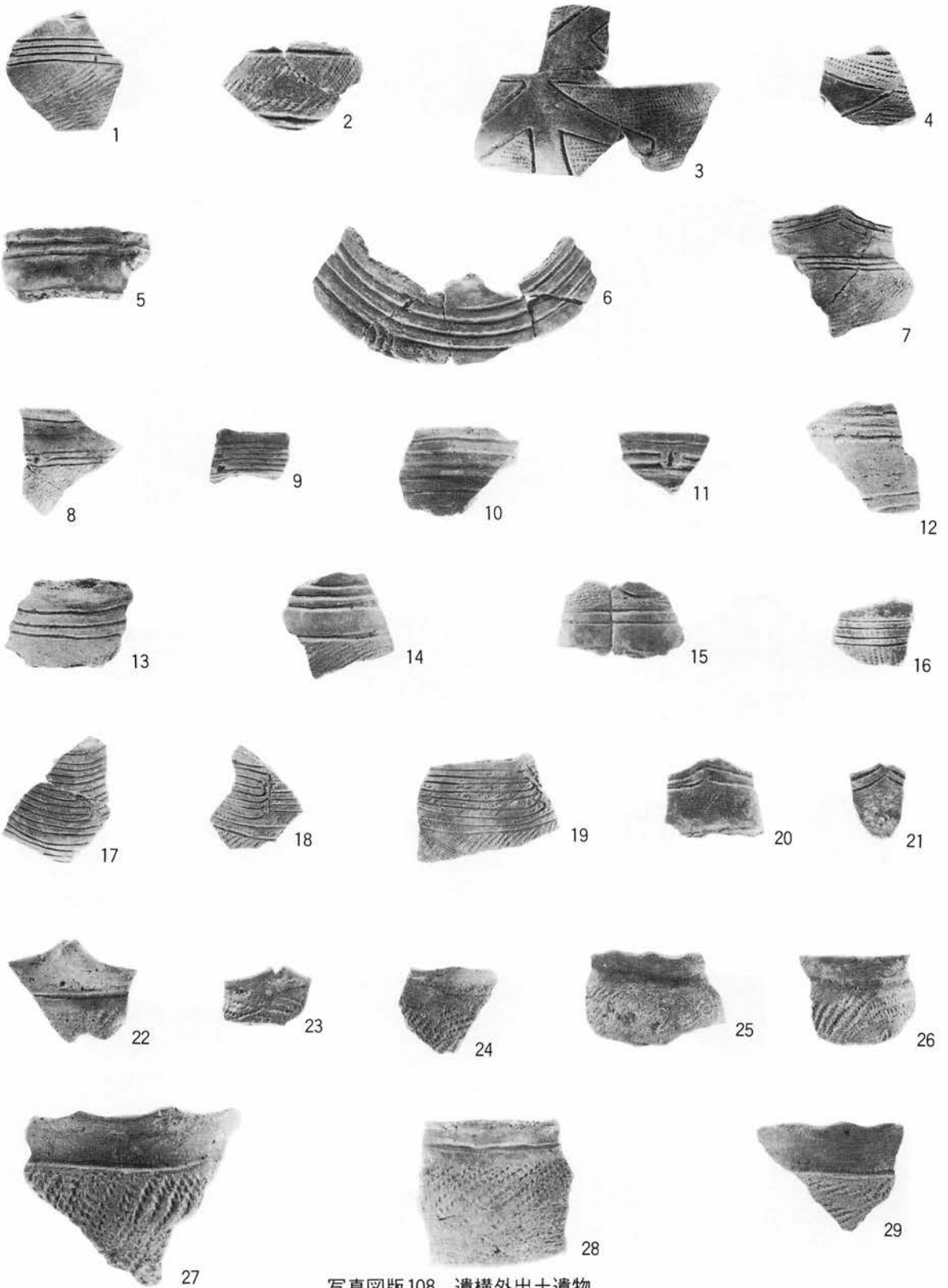
写真図版105 遺構外出土遺物



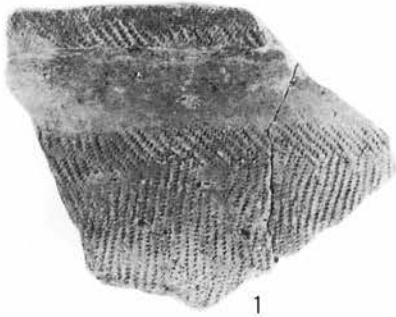
写真図版106 遺構外出土遺物



写真図版107 遺構外出土遺物



写真図版108 遺構外出土遺物



1



2



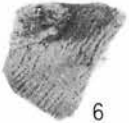
3



4



5



6



7



8



9



10



11



13



14



12



15

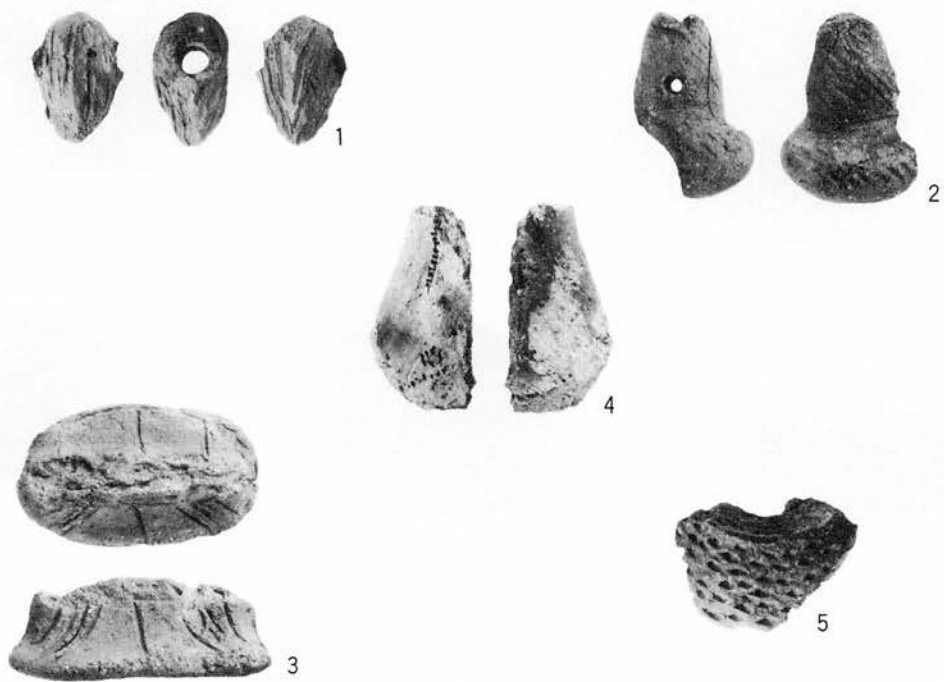


16

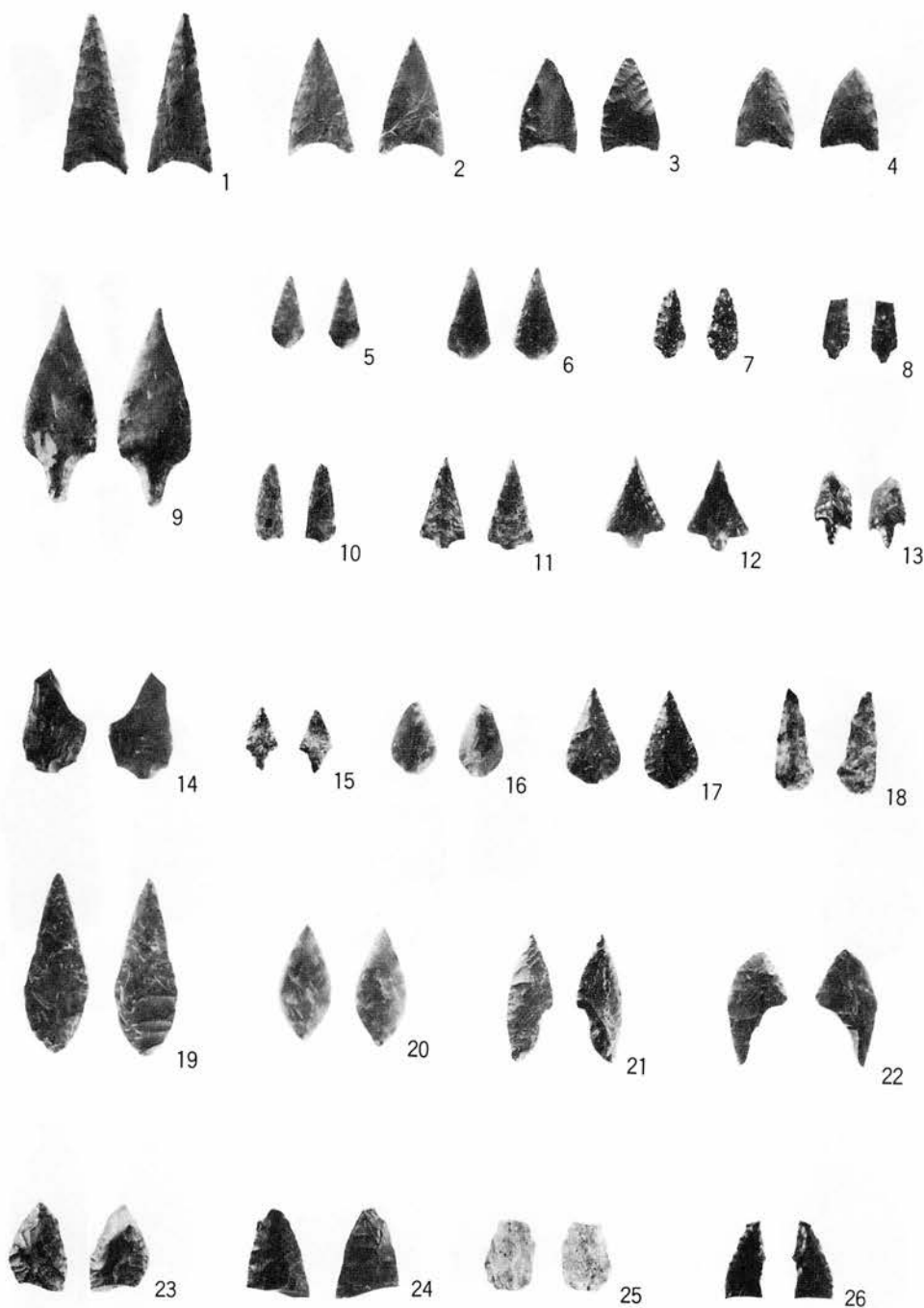


17

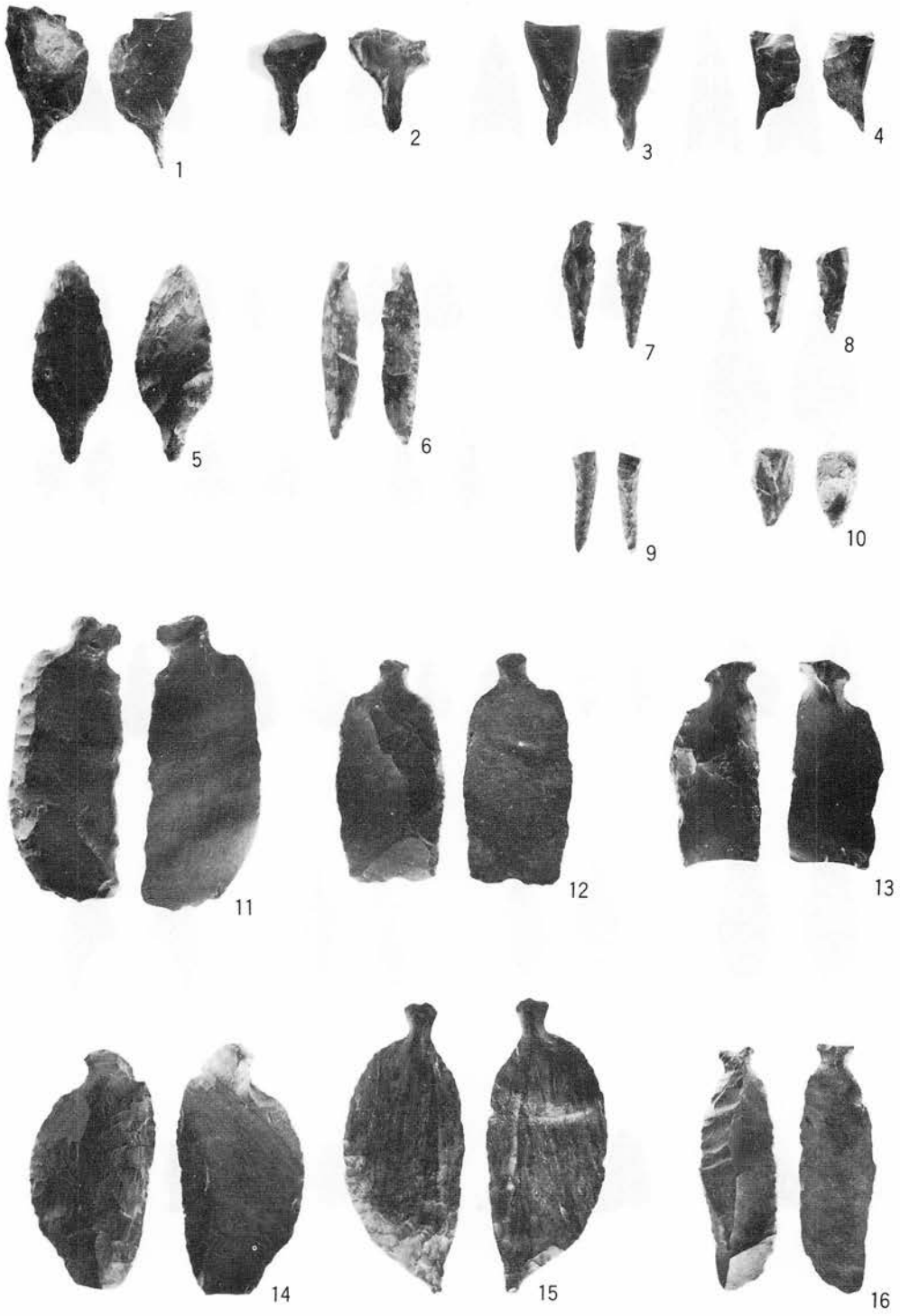
写真図版109 遺構外出土遺物



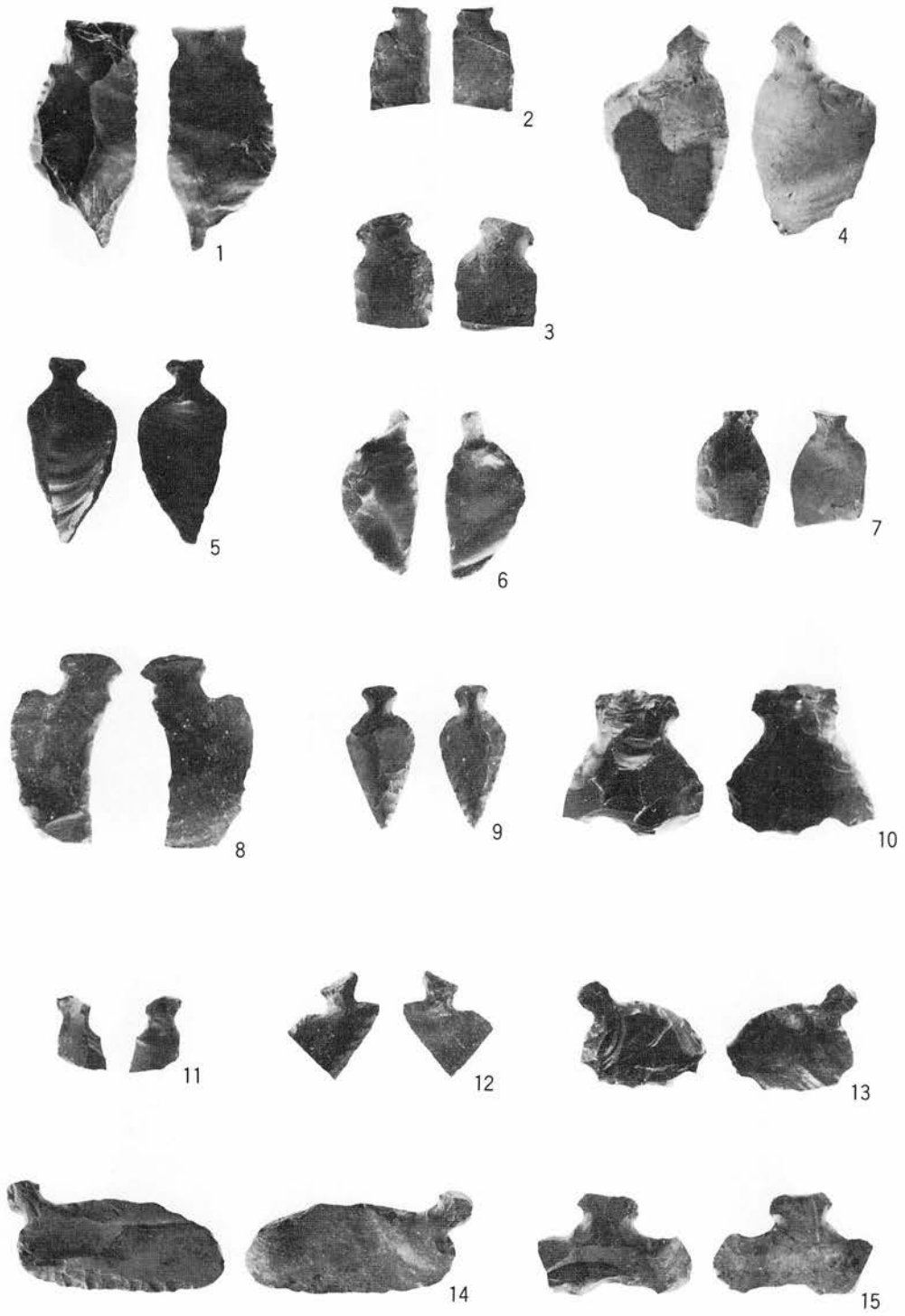
写真図版110 遺構外出土遺物



写真図版111 遺構外出土遺物



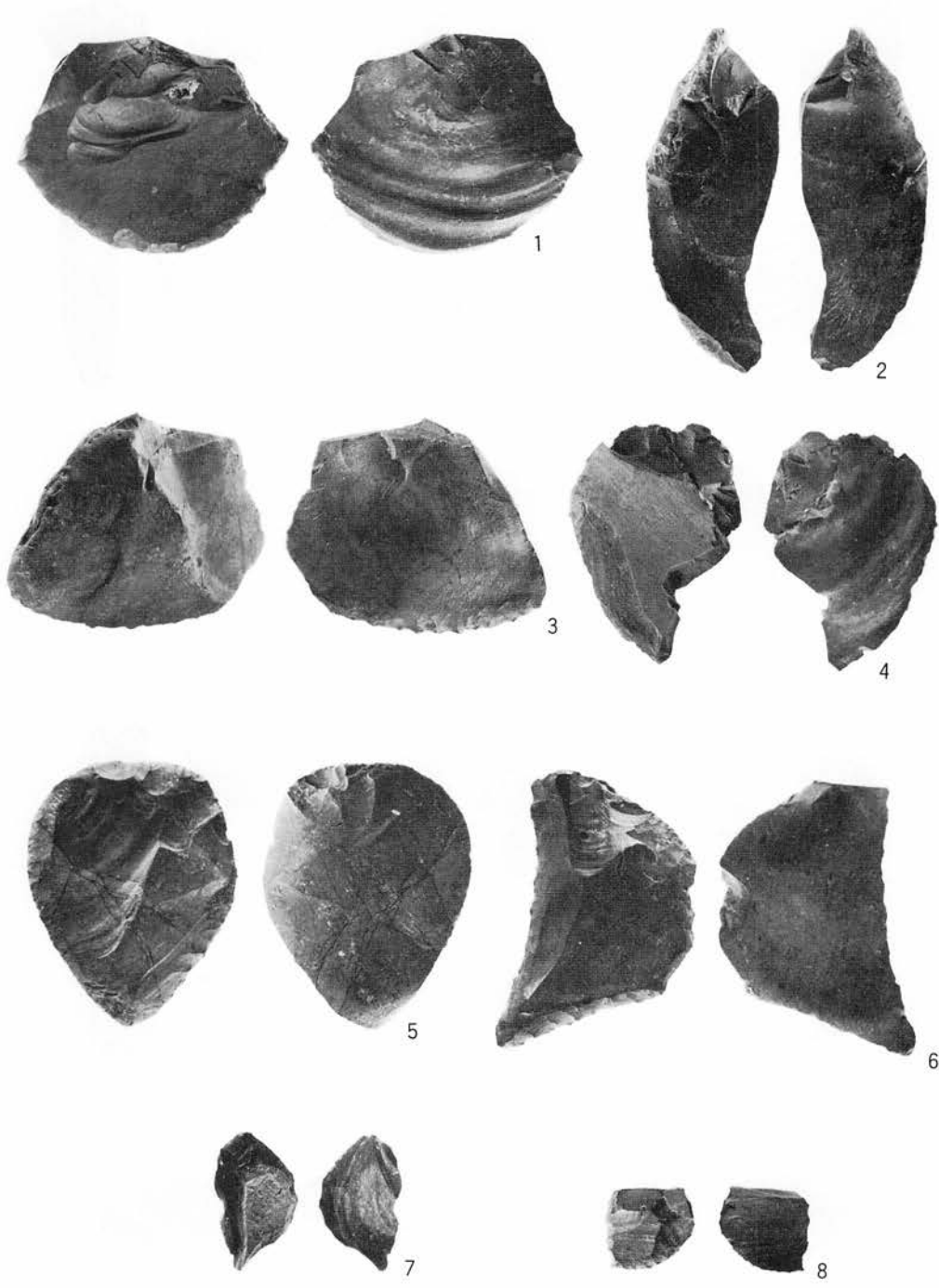
写真図版112 遺構外出土遺物



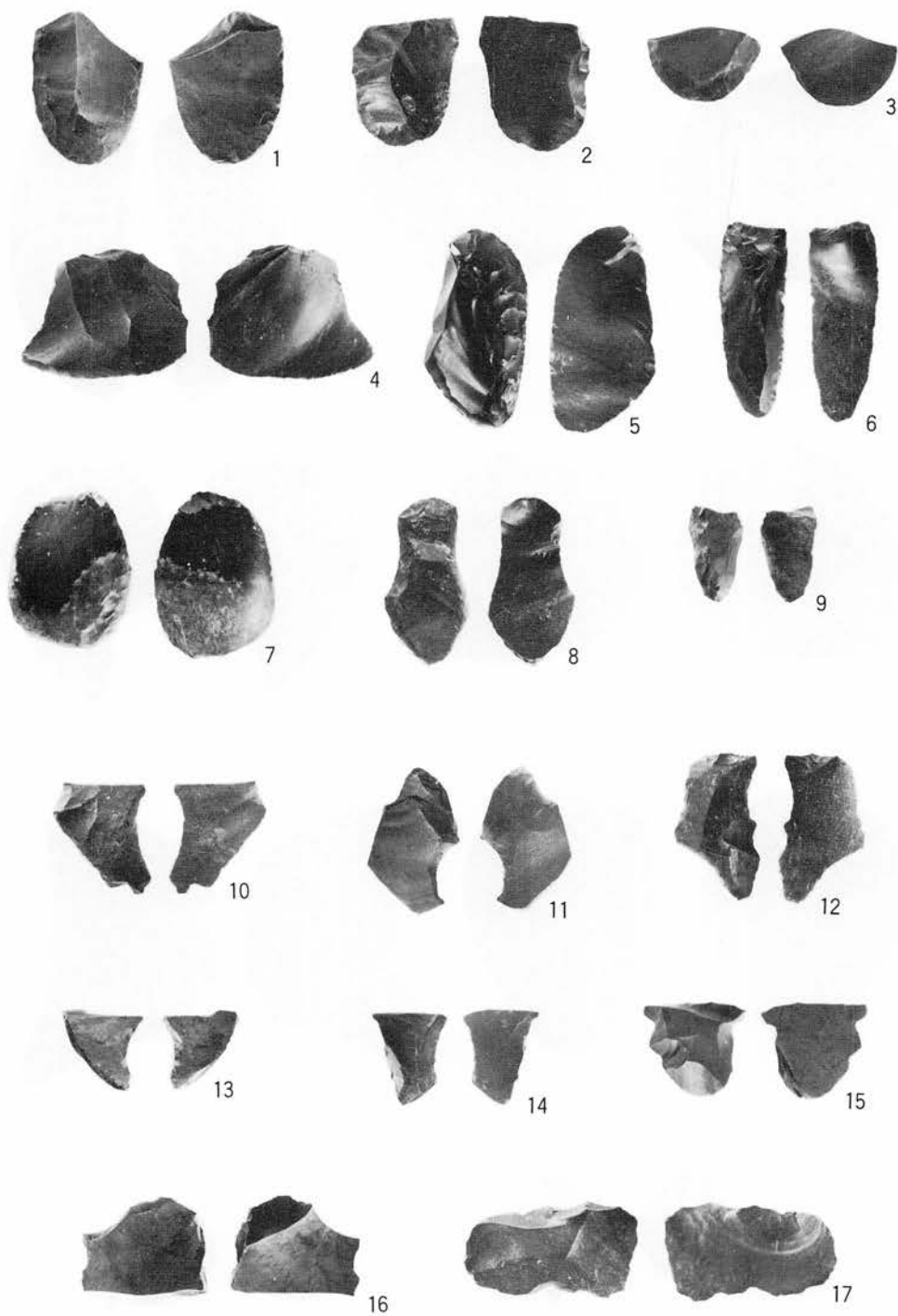
写真図版113 遺構外出土遺物



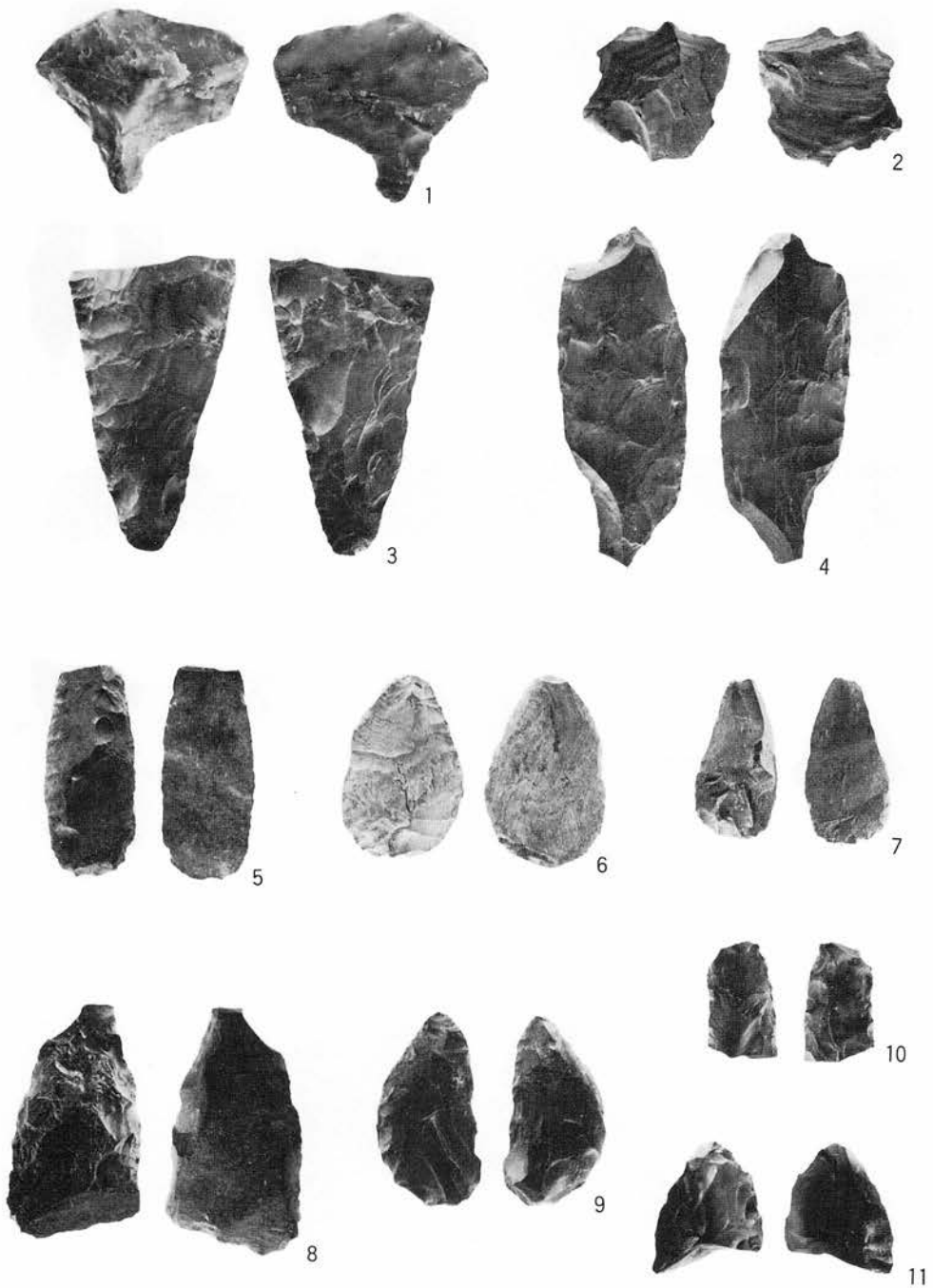
写真図版114 遺構外出土遺物



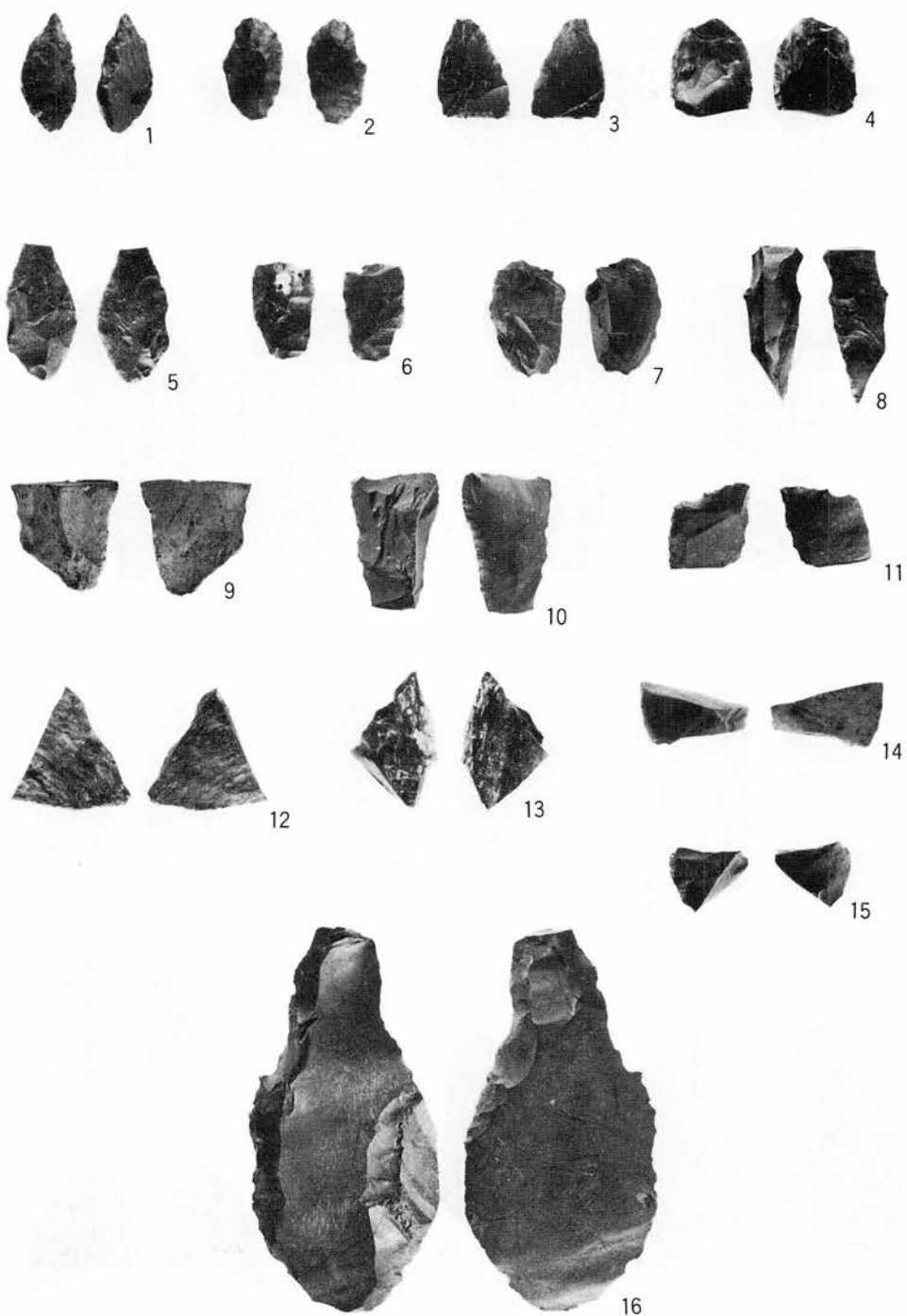
写真図版115 遺構外出土遺物



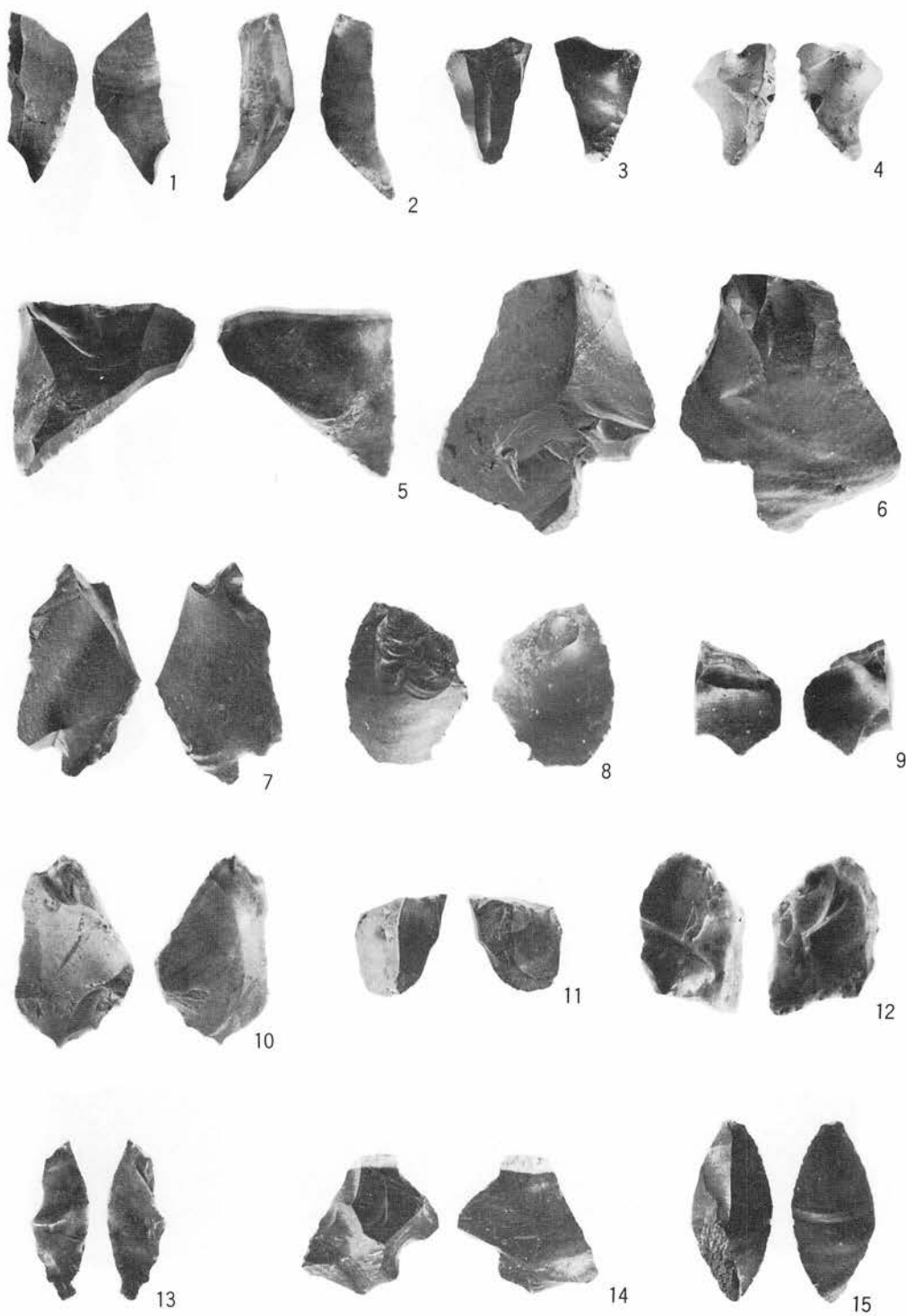
写真図版116 遺構外出土遺物



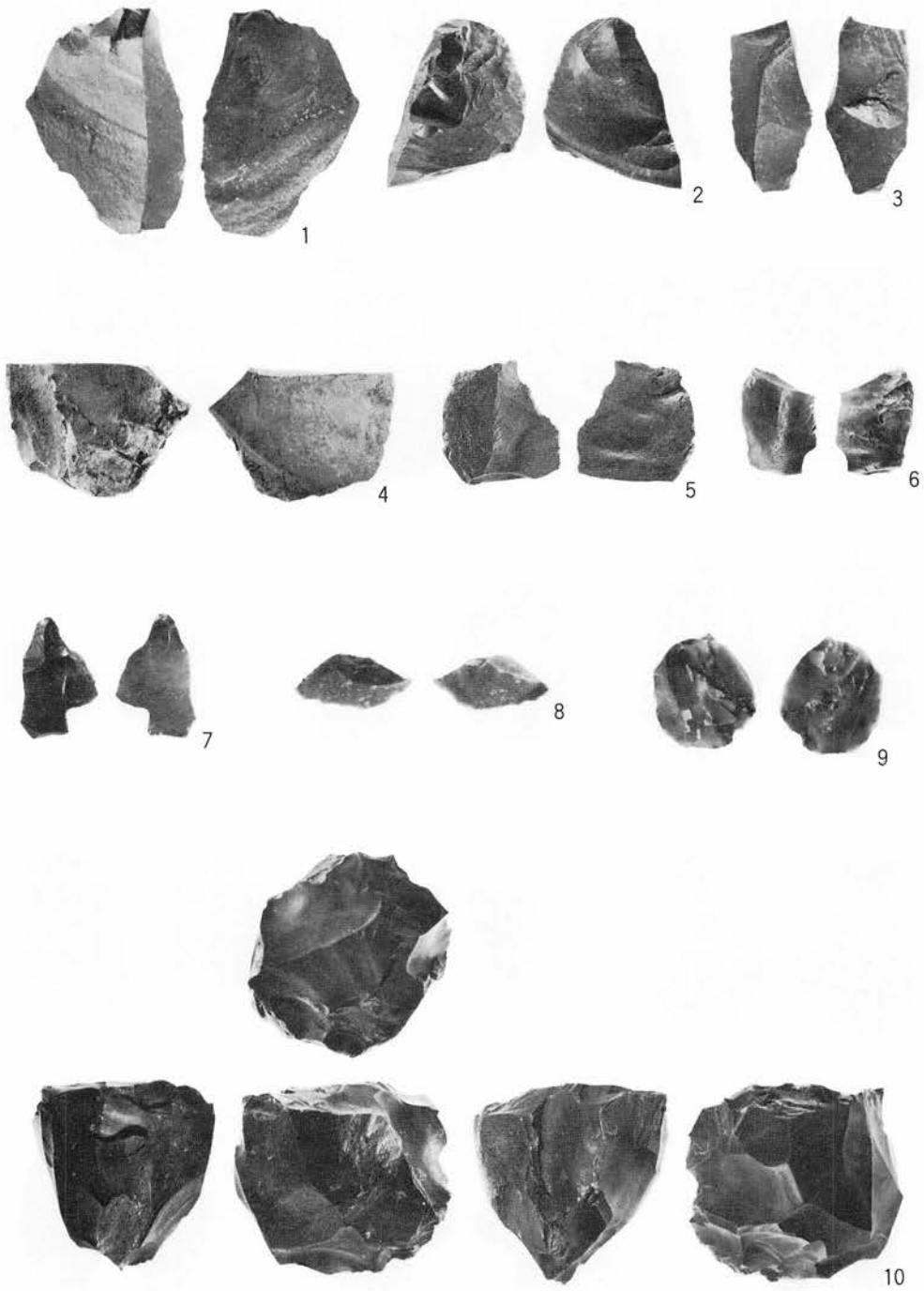
写真図版117 遺構外出土遺物



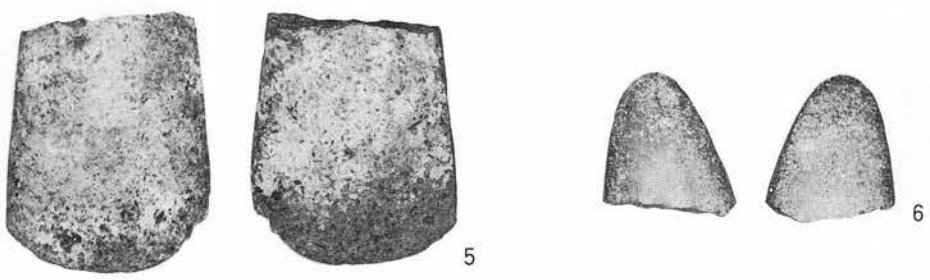
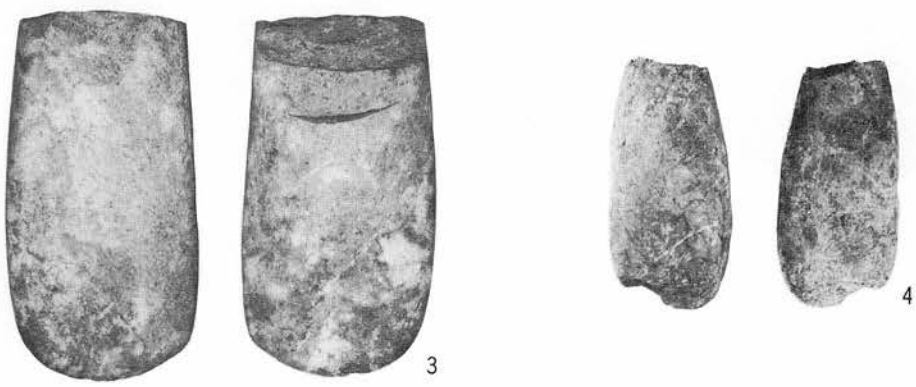
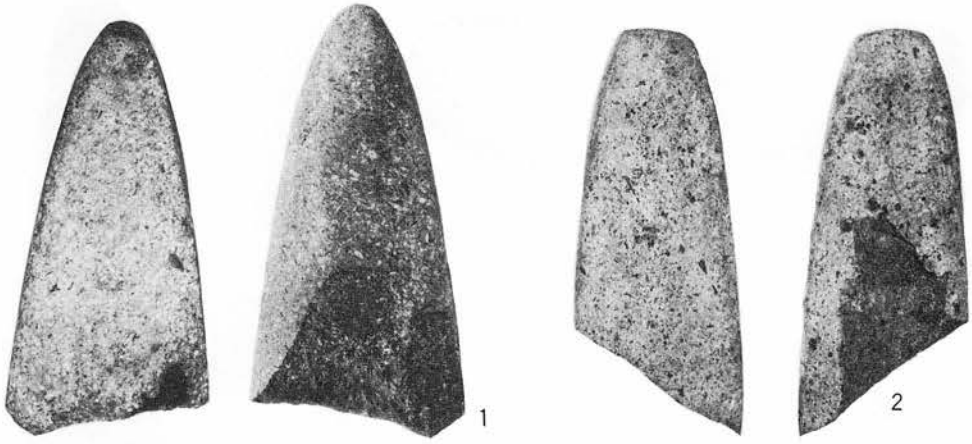
写真図版118 遺構外出土遺物



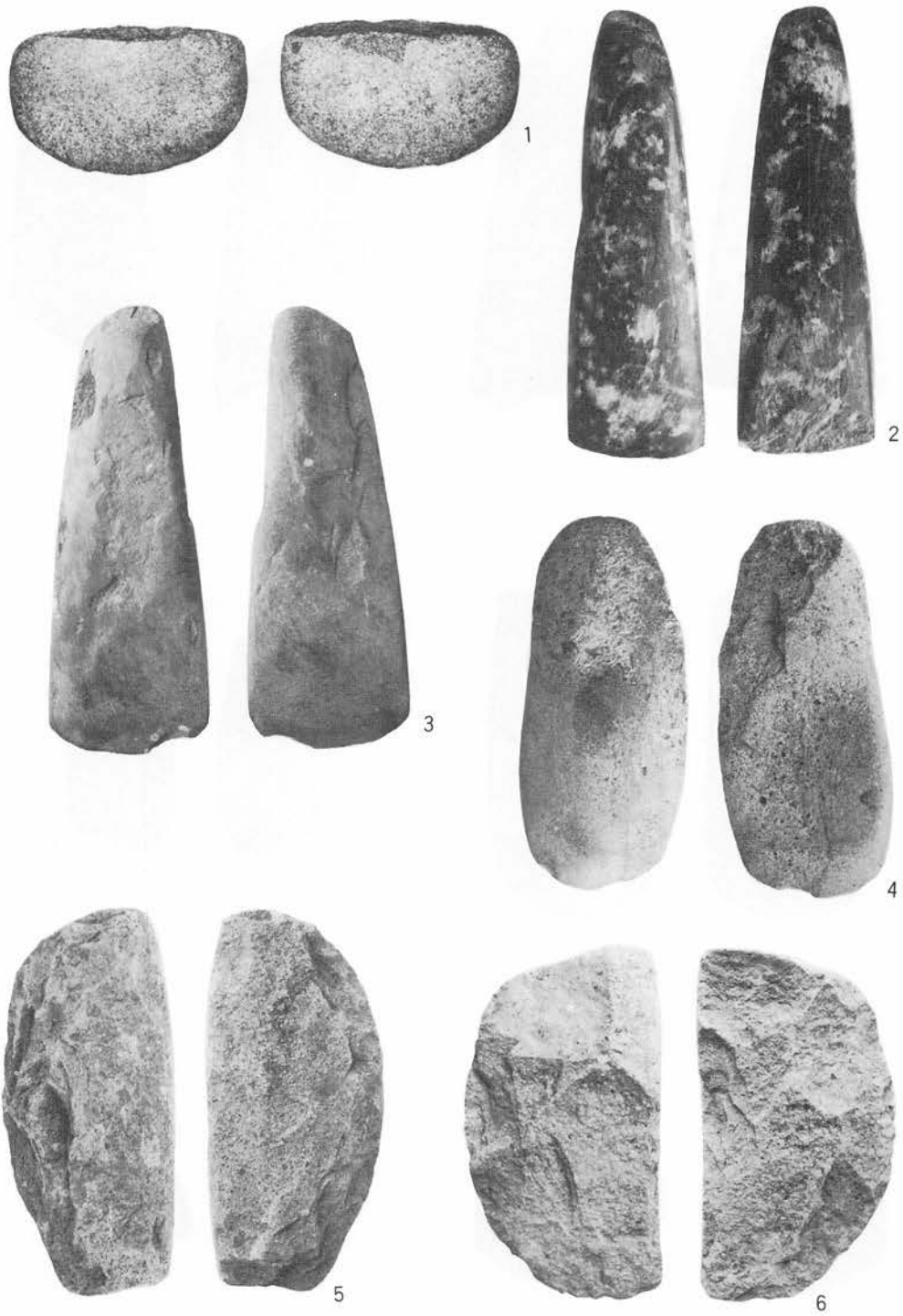
写真図版119 遺構外出土遺物



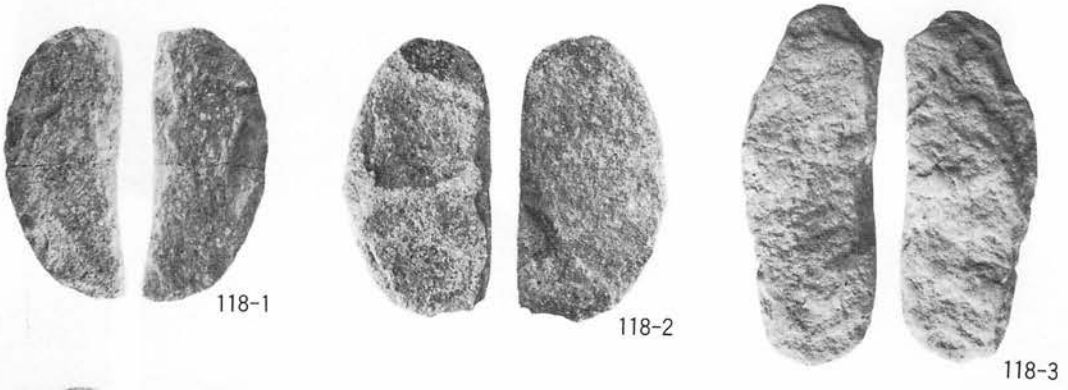
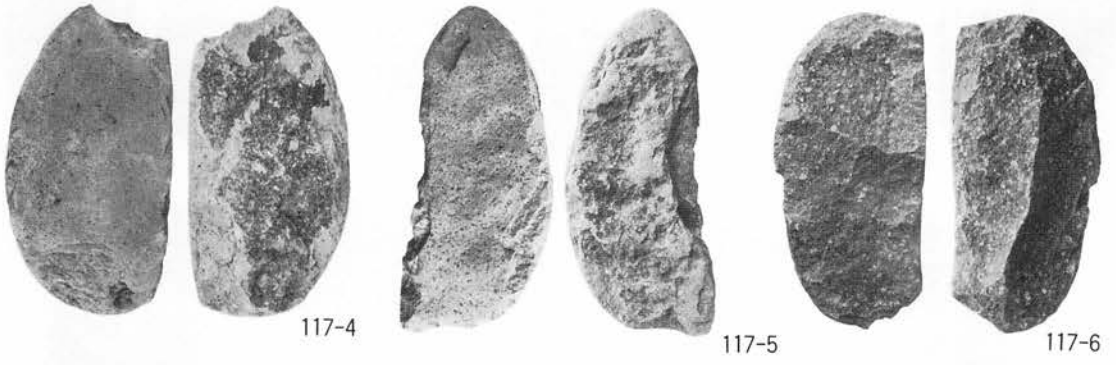
写真図版120 遺構外出土遺物



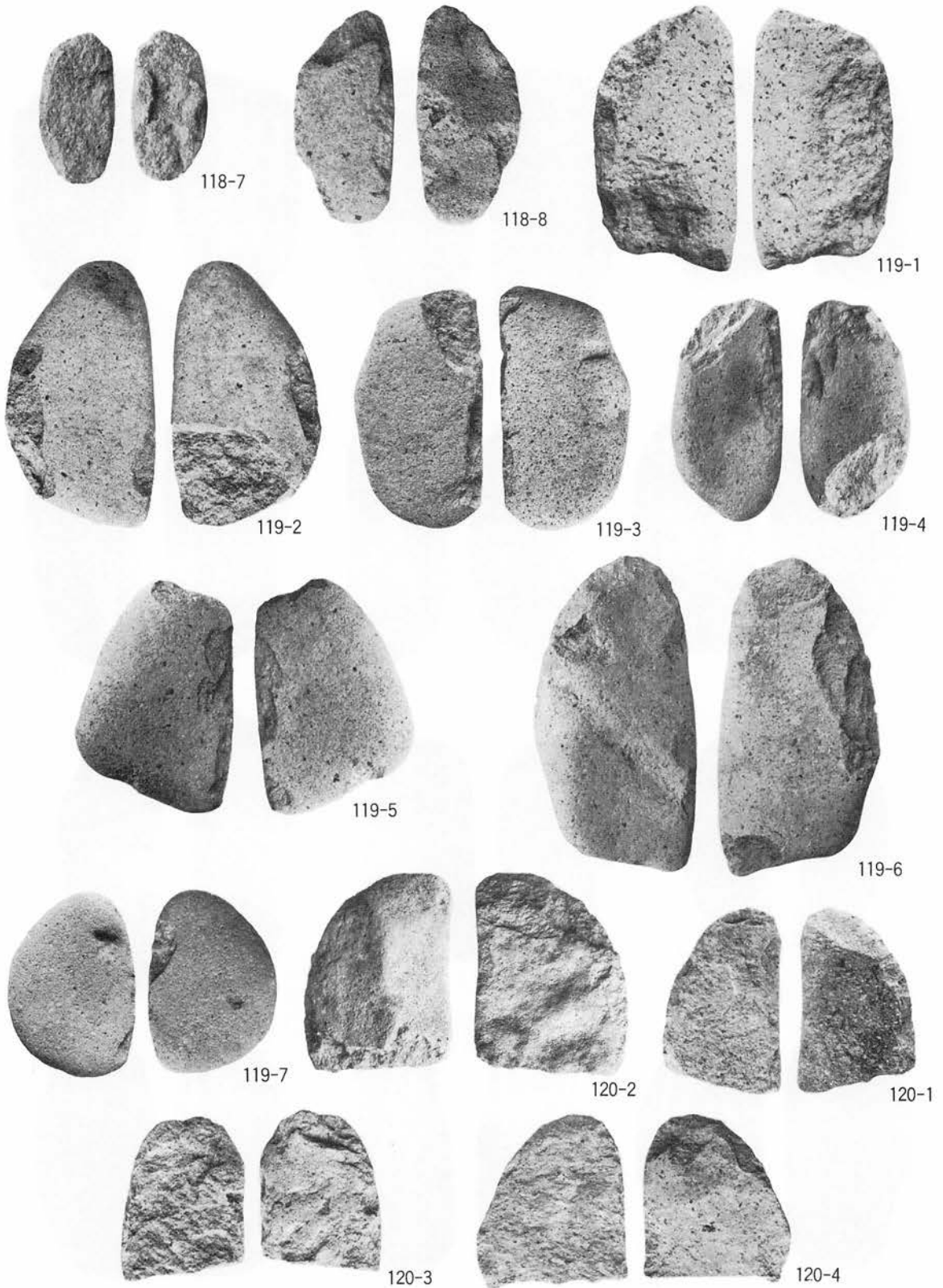
写真図版121 遺構外出土遺物



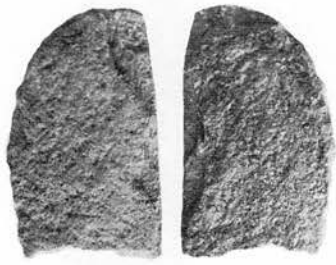
写真図版122 遺構外出土遺物



写真図版123 遺構外出土遺物



写真図版124 遺構外出土遺物



120-5



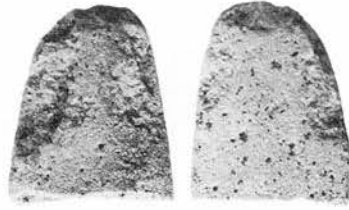
120-6



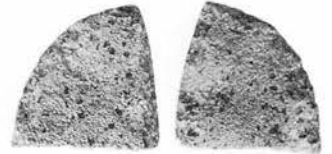
120-7



120-8



121-1



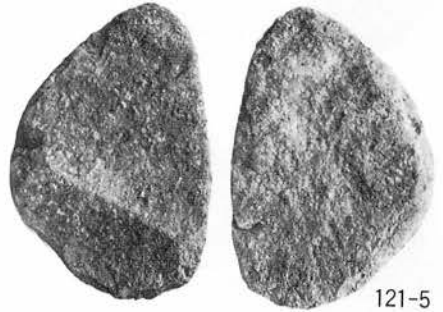
121-2



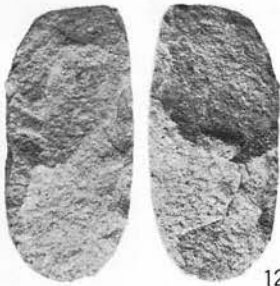
121-3



121-4



121-5



121-6



121-7



121



122-1

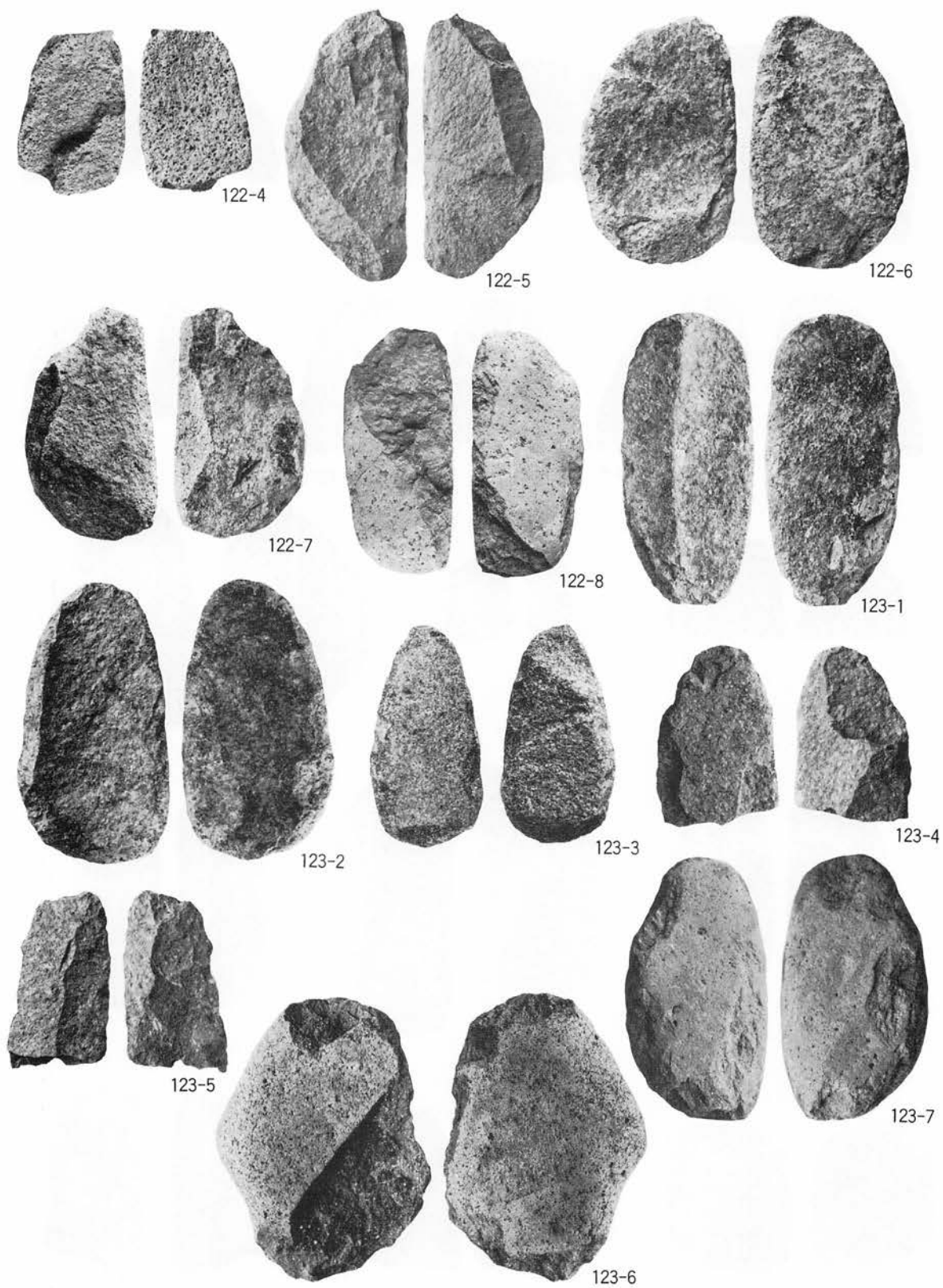


122-2

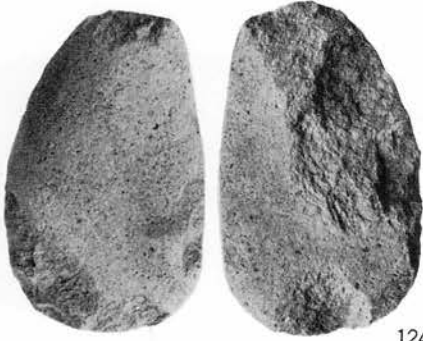


122-3

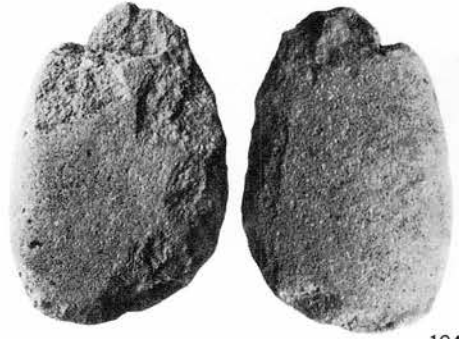
写真図版125 遺構外出土遺物



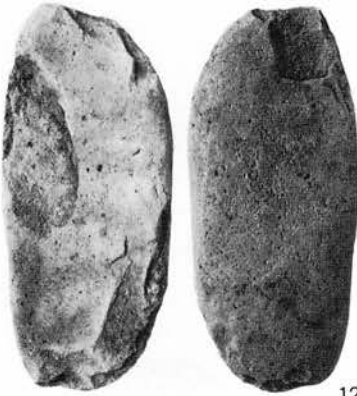
写真図版126 遺構外出土遺物



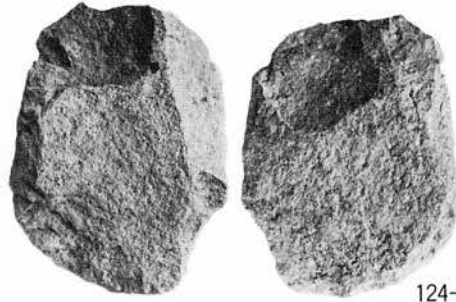
124-1



124-2



124-3



124-4



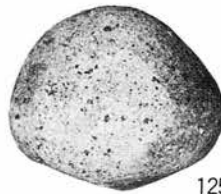
124-5



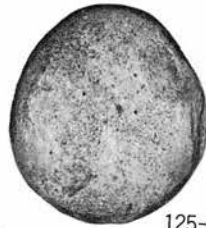
125-1



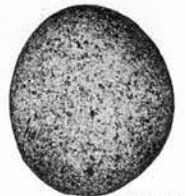
125-2



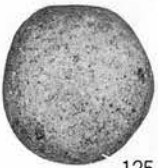
125-3



125-4



125-5



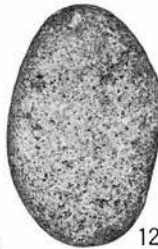
125-6



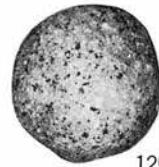
125-7



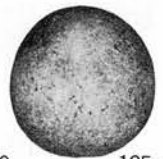
125-8



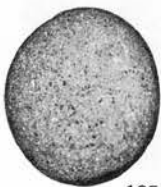
125-9



125-10



125-11



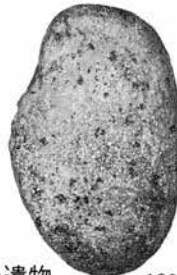
125-12



125-13



125-14



126-1

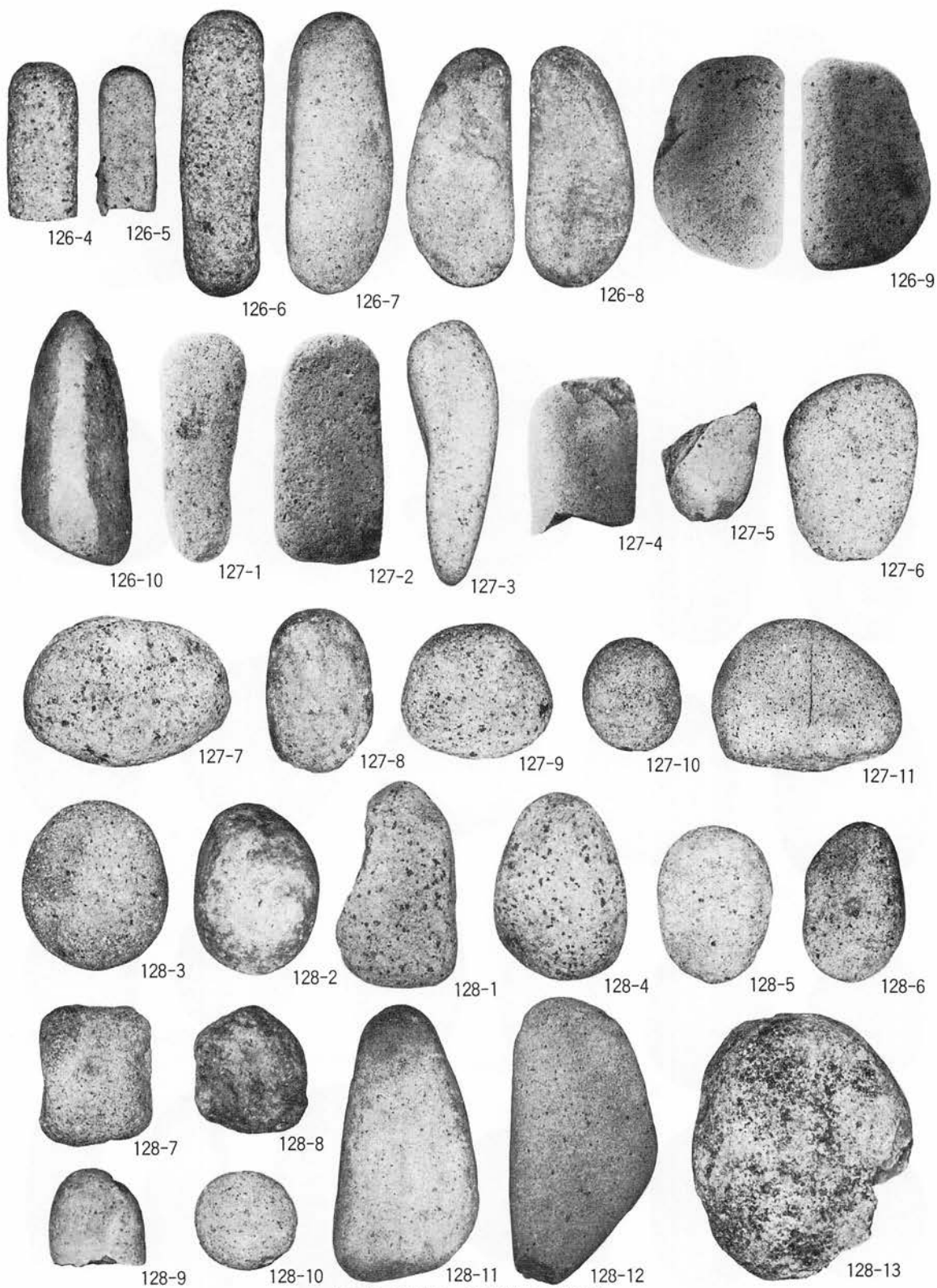


126-2

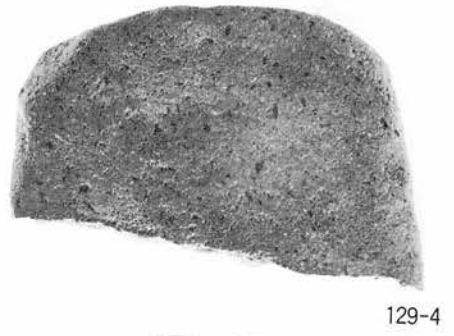
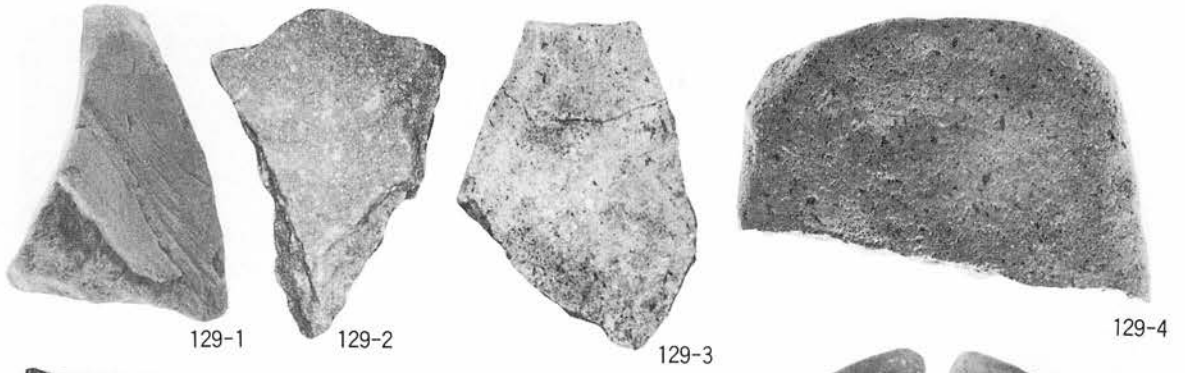


126-3

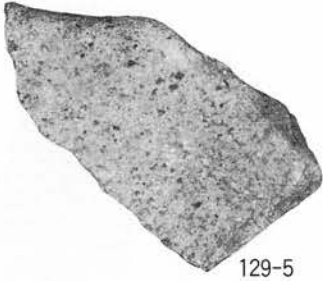
写真図版 127 遺構外出土遺物



写真図版128 遺構外出土遺物



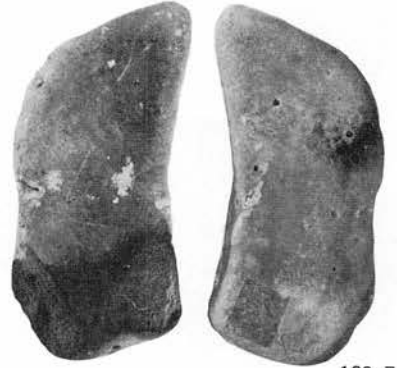
129-4



129-5



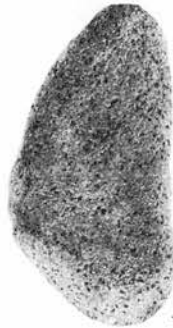
129-6



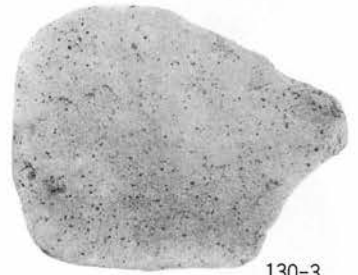
129-7



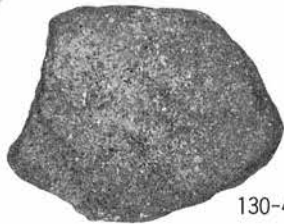
130-1



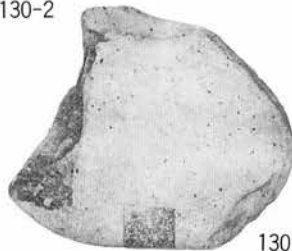
130-2



130-3



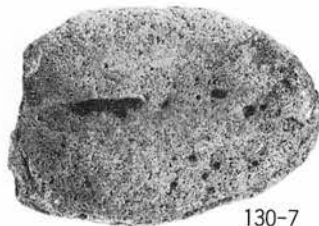
130-4



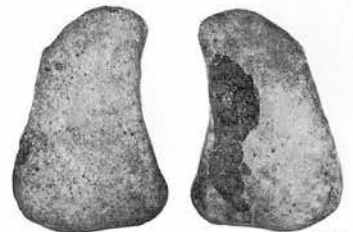
130-5



130-6

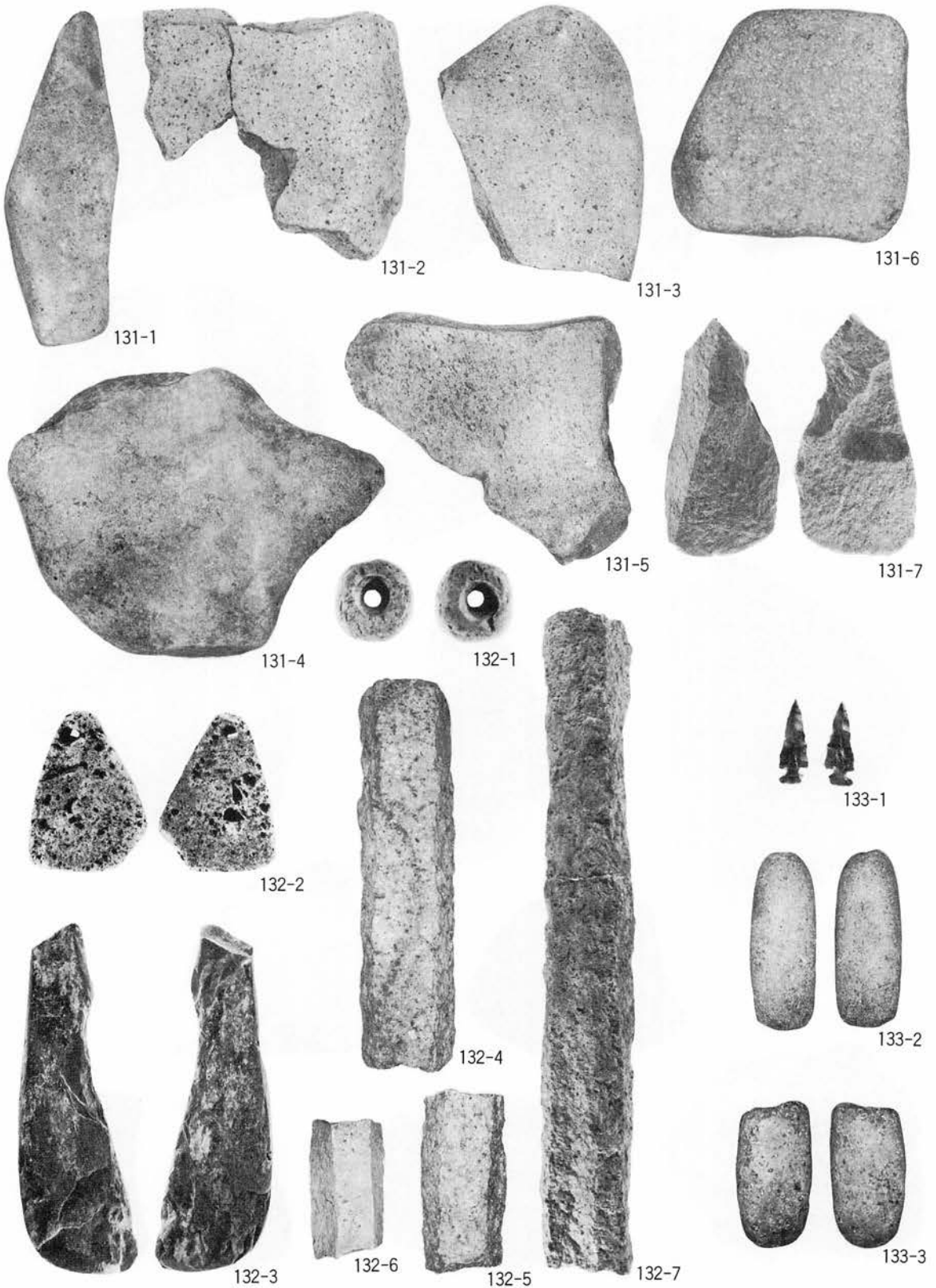


130-7

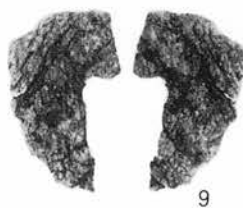
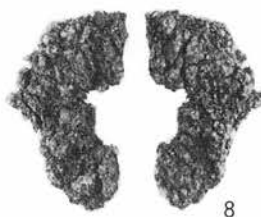
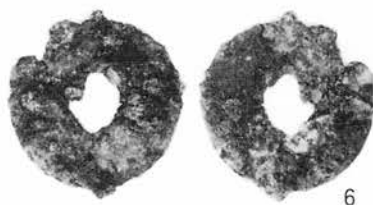


130-8

写真図版129 遺構外出土遺物



写真図版 130 遺構外出土遺物



写真図版131 遺構外出土遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 宮 英 一

[管理課]

課 長 千 葉 久 夫

課長補佐 阿 部 詔 夫

主 事 立 花 多加 志

運 転 技 士 佐 藤 春 男
兼 技 能 員

[調査課]

課 長 昆 野 靖

主任文化財 工 藤 利 幸
専門調査員

〃 高 橋 与右エ門

文 化 財 菊 池 利 和
専門調査員

〃 渡 辺 洋 一

〃 田 鎖 寿 夫

〃 佐々木 嘉 直

[資料課]

課 長 名 須 川 溢 男

主任文化財 三 浦 謙 一
専門調査員

文 化 財 佐々木 清 文
専門調査員

文 化 財
専門調査員

平 井 進

中 村 良 一

田 村 壮 一

光 井 文 行

玉 川 英 喜

石 川 長 喜

中 川 重 紀

高 橋 義 介

酒 井 宗 孝

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第109集

沼久保遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和61年 8 月25日

発行 昭和61年 8 月30日

発行 岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目 10-5

TEL (0196) 41-0585